日本プロレタリア文学大系

8

三一書房

責任編集　平野謙　蔵原惟人
小田切秀雄　野間宏　竹内好

日本プロレタリア文学大系

8

転向と抵抗の時代

中日戦争から敗戦まで

三一書房

第八巻

「転向と抵抗の時代」

凡例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞　雑誌によって校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねもとのままとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアッピールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によったが、ときに執筆年月によって配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一石路の両氏に協力をあおいだ。

第八巻　目　次

I　小　説

II　評　論

III 詩・短歌・俳句

詩

*

附 戦歿詩人集（「はるかなる山河に」「きけわだつみのこえ」その他）

短歌

俳句

I 小説

梟

伊藤永之介

　その朝真っ先に酒役人の姿を見つけたのは、川向うの小高い草刈場にいた茂助であった。村は出羽山脈の西へ傾く余波が平野に尽きようとする尾根の間に抱きこまれていたが、その間を遥か彼方に流れ下っている川の流域は平坦な田圃が続き、殆んど眼をさえぎるものがなかった。したがって仮令酒役人が検挙に来ても、その姿が一里も先からわかってしまい、その間にすっかり犯跡をくらましてしまうので、ここだけは酒役人も手を焼いていた。部落のものは洋服姿とさえ見れば酒役人ときめてしまうほど誰でも神経をたてていたが、そのとき、はるか川沿の街道を自転車の一隊がやって来るのに、茂助はふと気がついてぎょっとして眼をすえると、それはまぎれもない酒役人であった。茂助は一目散に草刈場をかけ降り、鬼こ来たあ、鬼こ来たあと叫びながら、畔路づたいに川向うの部落の方に走っていった。間近に田植を控えて土ならしに田圃へ出ていた男たちは腰をのばして、鬼こ来たって、本当か、と銅鑼声をはりあげて聞き返したが、茂助が走りながら指す方をふり返ると、たちまち土ならしを投げ出したまま走り出した。それを見ると野良に出ていたものはいっせいに蛙のようにぴょんぴょんと道路に跳ね出し、われ先きにとわが家の方に走った。

　近年はとくに濁酒密造の検挙が手きびしくなり、毎年五軒も六軒も検挙される部落などもあってその度に五十円、六十円という箆棒な罰金をかけられては、どんなに上作をとったって追いつかないというので、みんな用心深くなり置し方もうまくなって、濁酒甕は決して家のなかに置かない。置いても土間に穴を掘って埋めた上をわからないように丁寧にならして置くとか、便所のなかにしのばせて置くとかする。更に用心ぶかいものは山のなかに埋めて枯葉や柴をかけたり、木のほら穴にかくしたり、川原の藪のなかにひそめたり、お堂の床下に置いたりするので、たとえ役人が発見しても、犯人をつかまえることは六つかしかった。そうして置いて日暮がたに当座の分だけ山へ掬み出しにゆくので、冬ならば足跡をたどれば検挙出来ないことはなかったが、丈余の雪を冒しての冬季の検挙は酒役人の手に合わない難儀な仕事であった。しかし、ここはそういう地理的関係から、検挙が六つかしいというので、酒役人も匙を投げた形であったところから、自然用心をおこたりがちで、戸外に持ち出して造っているものもすくなくなかっ

ただけに、いざとなるとそのあわて方は格別であった。
　子供たちは鬼こ来たあと叫びながら面白半分にそこいら中を煎り豆のようにかけ廻わるし、女房たちは裏口から飛び出してそっと隣触れに順々に触れ廻わした、鍬をふり上げ畑を掘り返して甕を埋めにかかっているもの、お堂のなかにかくして走り去るものもあれば、大きな甕を抱いて川原の方に駈け出してゆくものもあった。二人がかりで桶をさげて山へかけ出した夫婦が、よちよち歩き出したばかりの子供がしつこくあとをついて来るのに気がついて、家さ行け、家さ、と女房は叫び、犬を追うような手つきで追いたてたが、それでも帰ろうとしないので、しまいにその子供を背負って行った。かけつけるのが遅れて急場の間に合わないと見た亭主は、勿体ないな、罰あたって眼玉つぶれるべと言いながら、甕のどぶろくを流れに棄てた。それさえ間に合わないと見てとったものは、あわてて外へ飛び出したり、また家へかけこんで見たり、そこいらをただうろつき廻わった揚句に、すっかり戸締りをしてどこかへ逃げ出してしまった。
　こんなとき、子供は手足まといにもなったが、便利なこともあった。子供等は見晴しのきくところまで夢中でかけ出していって、やれ橋のところまで来たとか、役場に寄ったとか、どこそこの部落に入ったとか、誰それの家に踏みこんだとか、酒役人の動きをいちいち我が家に報せにかけ戻り、親戚や隣近所にも触れ廻わった。酒甕をかくしただけで済めばなんでもなかったが、酒糟の残りを見つけたり匂いをかぎつけたりすると、それだけで密造しているものとしてしつこく追求する酒役人に対して、平気で突っぱるだけの勇気がなかったので、どの家でも女房や娘や婆さんたちは血眼になって、口鍋とか土瓶とか徳利とか盃とか、一切合材の酒の匂いのするものを洗ったり拭いたりすることでごった返していた。女房たちは、今偵察して戻って来たばかりの息子に、お前もう一走りしてどこまで来たか見て来いと叫びながら、用器はすっかり洗ってしまったのにまだ安心出来ないらしく、今度は濁り酒の雫でもこぼれていないかというので、戸棚や板の間を顔を充血させて嗅ぎ廻わった。
　役人の自転車がすべりこんで来るとさすがに部落は、ひっとりとしずまり返った。子供たちはまだ走り廻わっていたが、大人はそっと戸のかげから役人たちの方をのぞいてすぐに顔をひっこめた。杖のように痩せたのっぽの男が上役らしく、もう一人は役人にしては珍らしくがっちりした体つきの若い男であった。震えたりすれば却ってあやしまれると言われていたが、もし自分の家に踏みこまれたらという心配で膝頭は自然にふるえて来た。二人の役人は路ばたに自転車をとめて何事かしめし合わせていたが、間もなくお作婆さんのところへ飛びこんだ。
　夫婦は遠方の田へ出ていたので婆さん一人だった。息子の専之助は酒好きの方でなかったので、婆さんのところで

は濁り酒をつくっていないことは誰でも知っていた。そこで婆さんは別段あわてるところなくありのままを答えただけで、一向取り合おうとしないので、年寄の図々しさで、白っぱくれていると思いこんだ役人は、一層腹を立てて土足のまま上りこんでさがしはじめた。上役の役人は如何にも事務的に、先ず戸棚をあけてその長い首をすっかり突っこんだり仏壇をゆすって見たり、流しもとの匂いを嗅いで見たり、板の間をすかして見たりしていたが、若い方はたけり立った闘犬のような勢いで、どかどかと納戸におどりこんで万年床を蹴っとばし、やがて床下にもぐりこんで這い出して来たかと思うと、今度は便所へ廻わって見たり馬の寝藁を棒で掻き廻わしたりしていたが、終いに土間に伏せてある臼をひっくり返して見た。それは一度そのなかから思いがけなく酒甕を発見したことがある経験にもとづくものであった。

上役はがっかりして婆さんのところに戻って来たが、見ろ、この通りぷんぷん酒の匂いするじゃないか、今のうちに白状すれば罰金負けてやるが、強情っぱれば高くなるぞ、といつものきまり文句をきまりきった調子で言い出した。酒造らなくても、匂いはするもんだすかなと婆さんは腹立ちまぎれに皮肉った。若い役人はそれを聞くと、ますますいきり立って詰め寄りながら、この野郎役人を何だと思う、ただ置かねえぞと怒鳴りつけ、上役のところにひき返して何やら打ち合わせながら紙片に万年筆を走らせていたが、やがてその紙片に判を押すことを求めた。旦那さんそりゃあんまりだすべ、悪いことしねいもの、何んで判など押すって婆さんは畳に両手をついて尻込みするのに、なんでもいいからお前は黙って判を押せばいいと役人はたたみかけた。すると婆さんは事の重大さに気も転倒せんばかりになって、判押すごったば、忰さ相談しねばならねえから、何んとか、帰ってくるまで待って下されと言った。それじゃなあ、判でなくてもいい、指判でいいからなと上役が言うと、若い役人は腕をのばして婆さんの手を取った。旦那さんなんということするすと婆さんは身をもがいたが、もう婆さんの皺だらけの指先は朱にそまっていた。

ちょうどそのころ役人の他の一隊は、六兵衛ところに飛込んで引き上げるところであった。どぶろくをつくっているものが、千刈百姓にかぎっていないに、土蔵の一つもある家々には滅多に飛び込むことがない酒役人が、まっすぐ六兵衛の家をめざしたのには、憎まれものの六兵衛のこと故密告者があるに違いなかった。酒役人を見て六兵衛は一寸驚ろいたがすぐ相手が学校を出て間もない若い役人と見てとると、おや、町から何用で御座ったす、さあ先ず先ずと高飛車に出ながら、万一の用心にどぶろくの一升瓶が這入っている戸棚を背にして炉傍に胡坐をかき、ゆっくりと煙管を吸いつけ、どぶろくの検査に来たと言う役人に向って、どぶろくの検査って、密造のことだすか、俺もう何十年来どぶろく見たことも無いども、今でも貧乏百姓は、つ

くってるすかなあと言ってから、先刻のみこんだ煙をやっとそのときになってぷうと吐きだした。這入って来るときからその裕福らしい家構えに気がひけていた役人は、もじもじしながら、いやこのごろは大分減ったようですが、一応検査する必要があるもんでと言い、傍らの役人に退散の眼くばせをした。

その様子でもうすっかり安心した六兵衛は、家さがしされたとなれば世間体はよくないども、調べるならなんぼでも調べなされ、少し家の中が広いから手間がかかって大変だべども、と言った。すると役人はそれっきりで、いやもう急ぎますから、失礼しましたと、こそこそと戸外に飛び出していった。

そのとき、すぐ向うを酒甕を抱いて雑木山の方に走って行く女の姿が眼についた。追いかけろ、と一人が叫ぶなり、自転車をすてて走り出したが、必死に逃げのびようとする女の足はなかなか馬鹿に出来なかった。わけなくふんづかまえられると多寡をくくっていたのが、意外に手間がかかるのに役人はすっかり向っ腹を立てて、躍起になって山にかけ上っていった。地理にくわしい女は、杉林のかげに姿を消したかと思うと、忽ちひょっこり反対側にぬけ出して、がさがさと音をさせて野犬のように素早く熊笹をわけて、今度は部落の向う側の椭林に姿を消した。

一人の役人は間もなく椭林から駈け出して転げるように傾斜を走り去った女が、さっき抱きかかえていた酒甕を抱いていないのを認めることが出来た。役人はほくそ笑みながら、ゆっくり今女が出ていったばかりの椭の茂みのなかに這入っていった。若い方の役人が笹の葉のかげから獲物を拾い上げようとして屈んだ瞬間、あッと叫んで顔色を変えた。思わず窪地からぽんと跳上って上役に指したのは、ぼろ布に包まれた梅干のように皺寄った顔の死児であった。役人は暫らく何か話し合っていたが、すぐ眼の下の苗代で一人せっせとはたらいている男には別段気にもとめずに間もなく引き返していった。

そこは部落とは反対側の山かげになっていたので与吉は酒役人の襲来をそのときまで知らずにいたが、お峰のあわてた様子を背のびして見ると、間もなくあらわれたのが、まぎれもない酒役人であったので、役人がそのままにしていったものを見にのこのこと這い上っていった。亭主の新治郎はお峰が三人目の子を生み落すのも待たずにあの世に行ってしまったが、間もなく生れた子も二十日足らずで死んだことは与吉もうすうす知っていた。亭主のときでさえ仏のためにお経一つ読んでもらえなかったお峰は、重なる不幸に医者も呼べないところから、死んだ子の始末に困じ果ててボロに包んで縁の下にかくして置いた。そこへ酒役人が来たのでお峰はあわて出したのであった。与吉は流石にぎょっとして、しばらくぼんやりしていたが、しかし間もなく巡査や酒役人にひっぱられてやって来るに違いないお峰の首垂れた姿が眼に浮んで来るとともに、与吉の鬼を

もひしぐような大きな身体は、弾かれたようにボロ布の包みを小脇にかかえたまま、がさもさと荒っぽく笹の根を踏みくだいて熊のように走り出した。
　ちょっと走ったかと思うと、与吉は太い首根をぐるっと廻わしてうしろを振り向き、白眼の全く無いような眼をきょろきょろしていたが、こんな種類のあわて方は日頃どっしりとかまえている与吉にはまったく見受けないところで、与吉は間もなく、ある屈竟な木立のなかに身をひそめ、篩のような手でわりわりと枯柴や木の葉をかき集めてボロ包をかくしたが、すぐこんなことでは一向安心が出来ないことに気がつき、今度は欅の老木の洞穴を見つけてそこへも入れてみた。しかしそれは一層あてにならないと思われたので、やがてお宮のお堂の縁の下にかくした。しかしこんなところは誰でも眼をつけるにきまっていると気がつくと、与吉はいよいよあわてるばかりであった。まるで手負いながら追いかけられている野獣のように、めりめりと体にふれる樹木の枝を折り、どどどどッと地響きを立てながら木立のまわりをぐるぐるとかけ廻わったり、藪を突きぬけ斜面をかけ上ったり、狂ったようにかけ廻わった。やがてその物音が消えてもとのようにしずまり返った雑木山に、背の低い駐在巡査とさっきの酒役人が別段急ぐでもなくやって来たが、さっきの笹藪から目差すものが姿を消していることがわかると、そのまま今度は少しせかせかと部落の方に降りていった。

　山に手頃なかくし場所がないことに気がついた与吉は、やがて隣り部落の方に降りていったが、ここにも白昼どこにもそんな場所があるわけがなく、お峰よりも自分の方が重大な立場にはまり込み、ずるずると深みにはまりはじめていることに、かかえ込んでいる死児をゆすり上げて見るまでもなく冷水を浴びせかけられた思いがした。泉蔵の家裏の桐の木のもとに群がっていた洟ッ垂れたちが、何やら手をあげて叫んでいるのは、酒甕をいだいて、いつまでもうろついていることの危険を警告するらしかったが、その我鬼どもに寄りたかられては一大事とばかりに与吉は藪かげに飛びこんで暫らく考えこんだ。しかし咄嗟のこと故うまい智慧がうかぶはずもなく、屈んで走る与吉の大きなからだはかくれようとすれば、いよいよあらわれるていに、足は次第にお峰の小屋を目ざしているのを、与吉自身は殆んど意識していなかった。すべての判断はこの際与吉のような考え下手な男には要するに無駄であったので、水の低きに著くの理を自然に辿っていたに過ぎなかった証拠には、お峰の小屋に飛びこむなり煤けた屏風のかげに這いずりこんで、ボロ布の包みを抱いたままただぼんやり坐っていた。死児をそこに置いて逃げ出すべきであるという判断さえもなかなか与吉の頭には浮んで来なかった。
　そこへお峰の上の子の竹治が、お母と呼んでかけこんで来たが、低い屏風のかげからぬっと与吉の重箱頭がつき出ているのを見ると、泥棒だあ泥棒だあと叫びながらかけ出

した。それに応じて、馬鹿け、何しに泥棒来るって、というう声は、あきらかにお峰で、そうわざと大きい声を出したのは、さっきの酒役人がさき廻わりに来ていることを予想して来たのが、すっかりその通りになったと観念して、子供の暴言を役人の手前打消す調子がこもっていた。それがお峰は咄嗟に顔を赤くしたが、あんたことさ我鬼投げて、意外にも込み入った言葉も交したこともない与吉と知って見つかったら牢さ入らねばならねよお前と、依然として死児を胡坐に抱き上げたまま、ぶっきら棒な与吉の調子に、お峰は返す言葉もなく俯向いたきりであった。

与吉が立ち去ったあとに、駐在巡査と酒役人は来て、お峰は駐在所にひっぱられ更に町の警察署にひかれていったが、与吉が死体をもち帰ったことが、そのままお峰の行為とされたばかりでなく、医者も坊主も呼べなかった前後の事情があきらかになったために、お峰は幸に牢入りをしないですんだ上に、この事が世間に知れわたるに従って五合、一升の同情があつまって、お峰はこの浮ばれない不幸な死児を弔うことが出来た。しかし、お峰が濁酒を売りにあるくときの一升瓶が縁の下に転がっているのを発見されたので、それだけは罰金をまぬがれることが出来なかった。

今度こそはやられると思っていた六兵衛があっさり検挙をまぬがれて、その六兵衛にいじめぬかれて来た上に、不幸続きのお峰が挙げられるとは、世は逆さまだと人々はなげいた。五年前、新治郎一家が上京したのも、六兵衛に村をたたき出されたようなものであった。遠い親戚関係があったので、新治郎は親の代から一町歩近い六兵衛の田を小作していたが、その年は何十年来の凶作でどこでも田徳を半分も納めなかったので、新治郎も御多聞にもれず未納した。それでも夏まで食う米を残したわけではなかったが、春とはいえまだ雪も消えない時分、自分の田に隣り部落の作太郎が堆肥を運んでいるのを見つけた。驚いて六兵衛にかけ合いに行って見ると、もうとっくに作太郎に小作させることに契約したとの、にべもない返事だった。永小作のつもりでいたが父親の手落から契約書もとりかわしていない以上、どうにもならなかった。

茶屋酒など喰って借金に苦しんでいる新治郎はたとえ上作でも満足に田徳を入れれないものと六兵衛は都合よく見かぎりをつけ、耕作地がないために出稼ぎにばかりあるいている作太郎を見込んで、前の年北海道へ渡って小金を胴巻に入れて来たほとぼりのさめないうちに、水呑百姓にして見れば眼玉の飛び出るほどの契約金をとって耕作させることにした。このことあって新治郎は八方奔走して見たが、男手のふんだんに余っているこのあたりは、どこにも猫の額ほどの田畑もなく、小作だけでは明日の飯米にも差支えるのでわれもわれもと人夫仕事に出るこのごろでは、町の日雇仕事も五日に一度もないので、十年前新治郎と同

じような理由で上京している血縁の忠蔵から何年ぶりかで蚯蚓が這ったような文字の便りが来たのに追いすがるように、家をたたんで上京した。さて行って見ると、このごろはどうにか三度の飯を満足に食っているという忠蔵の家も棟割長屋の三畳と六畳に、忠蔵夫婦を加えて中風で動けない婆さんに子供が六人もいるという蛆が湧いたような有様に、家賃はどの位のものと訊ねると、十六円と聞かされ、うえッ、まるで金の上さ坐っているようなものだなと新治郎は仰天して、これはいつまでも食客もしていられないと匆々に尻をあげることとなって、その日から屋根にこまる始末であった。手に職のないものに都合のいい仕事の落こぼれもなく、とどのつまりは登録労働者になったが、これも一日働けば、三日あぶれ、一日三合の給食米にしがみついているうちに、なんでもない熱と考えていたのが、気管支から肺炎に進み、お峰も乳呑児をかかえては手のつけようがなく、二度目の秋には、こっそり人眼をはばかるていに村に舞い戻って来た。

住家だけは六兵衛の畑にある納屋に手入してどうにか雨露をしのぐことが出来たが、女手に病夫を抱えてどうにもならず、とどのつまりは、お峰はどぶろくをつくって売りにあるいた。専ら自家用であったどぶろくを、このごろ売りにあるくものがめっきりふえ、日昼は危険なので夜のあけないうちに村から村へ飛びあるくのであれは梟といわれ、兎角朝寝坊な町者である酒役人は手を焼いていたが、

密造検挙がはげしくなると多少でも余裕のあるものは、五十円も百円も罰金をかけられる危険を敢てするよりも、梟から買って飲むことを得策としたし、それやこれやで梟の数はめきめきとふえていった。

以前は税務署だけでしたものがこのごろではところによっては税務署と役場と警察とが協力して検挙と矯正にあたり、手きびしい検挙に加えるに矯正組合をつくったり、講演をしたり、ビラを刷って配ったり、あらゆる手をつくしていたが、それでも百姓たちは自分の米で自分の手で造って自分で飲むことが何故わるいのか、一向腑に落ちないこととしているのは、旧藩当時には水呑百姓の慰めはそれより外にないものとしてどぶろくを奨励した時代があったほどだし、酒造税法の布かれない明治のはじめには、茶道具がない家はあってもどぶろくの口鍋と徳利と盃のない家は一軒もなかったほどで、それは百姓が米をつくるとともに、その米のしかも屑米や青米でどぶろくをつくることは当り前のこととされていた。米の値が天井知らずにはね上った欧州戦争時分には百姓でも羽織を着て茶屋酒を飲み白首を買ったものだが、そんな景気のどこをさがしてもないこのごろ、密造が逆にふえ出したからって敢て不思議とするには足りなかった。一升につき四十銭も税金を呑んで腹の痛まないものは洋服階級や旦那衆に限ったことで、百姓がどぶろくがのめないとなれば、飲めるものは水ばかりであった。あるとき福清水という一升五十銭の清酒が評判に

なり、村では大分無理をしたものがあったが、誰もこれを呑んで酔ったものがないということが判るとともに、またどぶろくを呑みはじめた。莫大な罰金を馬を売って払い、やっと労役場行きだけはのがれたものや、出稼ぎから戻ったばかりでほとぼりのあるもの、苦しいといっても百姓ほどでない町のものは、一升二十銭位で飲めるなら、検挙のきびしくなったこのごろ密造の危険を冒すよりましであるとするようになり、梟はふえる一方であった。お峰は梟に出かけての戻り路、肴町に立ち廻わって縞木綿の長い財布の底にちゃらちゃらと白銅の音をたのしく聞き、何年ぶりで鰈の二、三枚も買い、病夫へと下げて帰るのであったが、こんなうまい商売になるものなら何故もっと早くはじめなかったかと、今更にくやむ次第であった。

新治郎が息をひきとったときにも、六兵衛はお峰がお葬式も出せない始末なのに、医者を呼ぶ僅か三円の車賃も貸してはくれず、香奠がわりに蠟燭をもって来たきりで何の手助けもしなかったので、人々はいよいよ六兵衛を悪く云った。村では誰でも六兵衛と呼ぶものがなく、もんだの爺とばかりいうのは、六兵衛は寄るとさわると、あれも俺のもんだ、これも俺のもんだ、とうるさく言うところに由来していたが、実際野良や山林で六兵衛の姿を見受けたとなると、俺のもんだといういつものきまり文句を二言三言聞き出すことに不自由はしなかった。もんだの爺が来たというので行って見ると、六兵衛はきっと、この楢の木は俺のもんだとか、こっちからここまでは俺のもんだと、誰もききもしないのに野良にひびきわたる声で何べんもくり返すかと思うと、路ばたの縄や草むらのなかに転がっている稲がけの丸太を見つけて、ああ、これは俺のもんだと素早く拾ってゆくので、あッもんだの爺来たと子供等はかけあつまり、俺のもんだ俺のもんだと口真似しながら、耳の遠い六兵衛のあとにぞろぞろついてあるいた。

人の思惑などは六兵衛にとってどうでもいいことだったので、客が来ても滅多にお茶も出さず、学校の寄附や催事の祝儀なども、世話役が二度や三度かけ合いにいっただけでは決して出さず、あちこち有力者の間を全部聞き廻った揚句に最低の金額しか出さなかったので、後ろ指さされていることは自分でも知りながら、絶えず有力者や知合を廻わりあるいて、俺のところではどんな人間が来ても酒を出さないということはないが、お前のところでは客が来てもどぶろくも出さないで平気だべものなと、おめおくせず大声で叫ぶのであった。婆さんの房との間に子供のない六兵衛は、たびたび養子を入れたが、一人も三年と腰をすえていたものは無かった。町の挽材会社や畳表工場に稼ぎに出して、賃金はそっくりそのまま取り上げ、朝は塩鮭に湯をかけて、その塩味の出た湯をのませるだけで、かんじんの塩鮭は、夜食に食わせるといわれた。それで大抵のものはいい加減汗と脂をしぼられた揚句、われから飛び出してしまうのであったが、それさえ辛抱しているものは、やがて

嫁を貰って一年か二年すると追い出される結果になった。いかもんだの爺の養子に嫁が来たというと、人々はまたじきに生木を裂かれると予言したが、それはきっと的中した。

世間は六兵衛が嫁に手を出すのを房が年甲斐もなく悋気する結果だと言いふらしたりしたが、その際いつも養子の方が先に追い出される事実は、そういう憶測を信じさせなかった。あれも俺のもんだこれも俺のもんだと言い張ってしばしば悶着を起す六兵衛はそういうときに養子を手先につかうことを忘れなかった。あるとき、部落はずれの道路に転がっていた丸太を六兵衛は養子に取り込ませたが、翌る日木材運搬の荷馬車曳きが押しかけて来て泥棒呼ばわりした。六兵衛の家から三丁も離れている路傍に転がっていたその丸太が六兵衛のものであるということは信じられなかったが、六兵衛はそれは自分の山の杉を伐り出した際運搬にあたってそこに取り落したものであるということを確信をもって言い張った。六兵衛が杉を伐り出したのはもう六年も前のことであったので、その自信たっぷりな態度は、いよいよ不思議きわまるものに見えて来たが、しかも六兵衛は自分は丸太が一本足りないのを六年前のそのときから気がついていたのだと主張した。それは事実であったろう。しかし、その六年前の丸太と昨日道路に転がっていた丸太とどうしてどんな関係があるかということについては六兵衛は一言も説明を加えなかったし、却って相手の運搬夫に対して、役場の敷地に積んだ丸太のうち一本だけがそんなところに転がって来るわけがないではないかと逆襲してはばからなかった。事実は珍らしく町からやって来たトラックが路傍に尻をおとして動かなくなったために、人夫たちが丸太を持ち出して来てそのまま棄てていったのであったが、六兵衛はそんな造り話は信じられないと突っぱった。とどのつまり運搬夫は役場員をつれ出して来たりして、この悶着は六兵衛の負けになったが、取り込み犯人は六兵衛ではなく、その養子ということになり、六兵衛は世間に面目がないといって間もなく養子を追い出してしまった。

こんなわけで、養子を追い出すときはきまって他人のものをかたり取ったとか泥棒したとかいう口実が用いられた。人の好いあわれな養子たちは、六兵衛の山林がどこからどこまでなのか正確に知らなかったので、六兵衛や房婆さんから指定された場所から、夢々他家のものとは知らずに杉皮を剝いで来たり、立木を伐り出して来たりするという罠にまんまと嵌りこむのであった。幸いそれが問題にならないときには、六兵衛はひそかにその不当な利得にほくそ笑みながら、離縁は次の機会まで延ばされるのであったが、それだけに養子はますます深みにはまり込むことになった。この揚句素直に出て行けばよし、出てゆかなければ締め出しを食わせるのであった。町の工場から戻って来るとまだ宵のうちというのにかたく戸をおろして、いくら呼んでもあけなかった。嫁も亭主に情婦が出来たものと吹き

こまれているところから、どうにも手がつけられないという始末であった。養子が代る度に六兵衛の身代はふえるのだといわれ、これまで、五人も六人も入った養子の血の出る様な働きで、六兵衛は懐手で資産をふとらしたことは言うまでもなく、そのために養子を入れてしぼり糟にして追い出すのだといわれるのには、また外に見逃せない理由があった。

岩手の鉱山に十年以上も坑夫をしていた甥の清太が落磐の怪我がもとで死んだとき、山から再三返信料つきの電報が来たのに、六兵衛は行きもしなければ弔電一本打ちもしなかった。清太の従弟の富治は汽車賃かけてわざわざ清太の妻子の引きとり方を交渉にやって来たが、六兵衛はそれをもすげなく断った。やむなく富治は一人で葬式万端を片づけ清太の女房の梅野と二人の子供を自分の坑夫長屋に引きとったが、まもなく清太の不慮の死に対して会社から六百円の金が降りたときいた六兵衛は、あわてて、富治のもとにゆき、富治に向って、芋掘坑夫のお前などに扶養の資格はないと毒づいて梅野たちを引きつれて来た。その際富治から追悼金を取り上げたことは勿論であったが、扶養すると称して連れて来た子供たちは、春の陽がかがやきはじめそろそろぼろが眼立って来ても向うから着て来た垢光りのする着物のままであった。梅野だけは頭に椿油の臭いをさせ頬にも薄赤みがさして、そのためもんだいの爺も若返ったと取沙汰されたが、林檎売りに町に通っている間に情夫が出来て、子供を置いたまま行方がわからなくなったあと、上の子の清一はその年の春、小学校の卒業も俟たずに町の唐傘屋に奉公に出され、間もなく下の子も町へやられた。

こんな六兵衛が急にお峰に目をかけるようになったということは、誰しも不思議とするところであった。それは房婆さんに先立たれたさびしさからに違いなかったが、実際房がぽっくりあの世にいってからの六兵衛の変り方は眼をみはらせるものがあった。葬式に手伝いにいった後家のお峰は、遠方から弔いに来た泊り客が去ったあとも引き続いて女手のない六兵衛のもとに手伝いにいっていたが、そのうちに六兵衛には町の手伝い女にあるいている四十後家を貰うという話が持ちあがった。ところが見合のときにその女が跛であることに気がついたので、六兵衛は仲人の源兵衛の耳にそっと口を寄せて女がどんな恰好で歩くか庭を歩かせて見ることを提議したことが、その女をすっかり怒らせてしまい、その後六兵衛はちょいちょい町へ出かけていって話をむし返そうとしたがうまくゆかなかった。そうこうするうちにぷっつりその縁談が沙汰やみになったのもお峰という新しい相手が出来たためであった。しかしお峰を家にひき入れはしなかったし、事はきわめて用心深く内証に行われたので、作男の源治でさえ、ある日野良からひょっこり鎌をとりに戻って来たとき上りがまちで行われているただならぬ様子を見、はじめて事の意外におどろいたほ

どで、そのとき源治は腰の曲った六兵衛のどこにそんな元気がひそんでいるのか、張りとばされた様な幻惑を感じた。上気した横顔をちらと見せて、お峰が泥棒猫のように自家にかけ去ったあと、六兵衛は臆面もなくずかずかと源治の方へ立ちあらわれて、このことを絶対に言いふらさないこと、若し口外すれば源治の兄の田畑をとりあげるとおどしながら、腰の手拭をはずして矢鱈に乾物じみた顔を小摺った。

それ以来、日が暮れれば寝てしまう習慣の源治は、寝床に入ると間もなく、六兵衛が出てゆくけはいがするとあとを追いかけて見届けたが、ある夜など、お峰の小屋に先客があるらしく、六兵衛は帰りおくれた猫のように小屋のまわりをうろつき廻わり、羽目板に耳を寄せたり、のび上ったりしているのを見て、年寄りのしつこい妄念にぞっと背筋が寒気立った。米箱は房婆さんの在世中もそうであったように南京錠がかけてあり、それ以来お峰に食う米の心配だけはさせなかったといっても、自分の飯を炊かせるときもお峰に米をやるときも、自身錠をはずして桝代りの朱塗りの椀で一つ二つとかぞえ、お峰自身には手も触れさせなかった。当分の間お峰が六兵衛の扶養をうけていたことは争われぬところであったが、それかといって六兵衛は金となるとたとえ白銅一枚でも容易に財布の紐をゆるめることをしなかった。ところでお峰はランプの石油を買う金にもこまって、六兵衛が山の見廻わりに出かけたあと、仏壇の房婆さんの位牌のかげにかくしてある銭箱のなかから、銀貨を一枚掠めとったことを知った六兵衛は、蔵に火がついたようにあわててお峰の小屋にかけつけ、毛を挘った鶏の首そっくりの首をのばしながら泥棒々々と呼び立て、金盗んだものは警察へ行かねばならねえと、お峰の腕をひっぱるという騒ぎ方をした。その夜、源治は若勢仲間から借りて来た娯楽雑誌を読んでいるうちいつの間にか豆ランプをつけたまま眠り、六兵衛の怒鳴り声に呼びさまされたが、この油の高い時節に油をただ燃やす気かこの穀つぶしと、六兵衛はぷりぷりして喚き散らしながら豆ランプの灯を吹きけすのであった。その様子ではどうやら昼間の六兵衛の仕打ちをうらんでお峰が締出しを食わせたらしかった。

こんな次第であるからお峰が六兵衛を避けるようになり与吉とねんごろになったとしても別段とがめるわけにはゆかない。お峰がお産をする前からねんごろになっていた六兵衛が、産月に近づいて一時お峰を避けるようになったのは、要するに産婆の費用を出したくないためであるらしかった。取り上げ婆さんを傭う余裕もないお峰は天井につるした細にとりすがって子を生み落すという始末であったがやがてお峰が死児の葬いをすませ南瓜の尻のような黄青い頬が生気をとりもどすころになると、六兵衛は早速呼びつけて煮炊きをさせるという現金さであった。その上その場であらぬ振舞に及んだので、お峰はかっとなって米俵でもかつぎ上げるような勢いで枯れ切った六兵衛のからだを軽

軽とかかえ込んで置いて、思いきり突きとばしたので、六兵衛は一とたまりもなく土間に転げ落ちて尻餅をついた。

その前から腰が痛むといっていた六兵衛が一層苦痛をうったえ出したのは、実はそのときからのことであった。しかし痴情にのぼせ上った六兵衛にはお峰のそういう肱鉄砲も単なるいやがらせ以上には考えられず、その夜も次の夜も六兵衛は通いつづけたが、お峰の小屋の戸はいつもかたくとざされていた。六兵衛は夜半まで聞くにたえないような譫言をつぶやきながら痛い腰をのばしのばし小屋の周わりを這いずり廻わっていたが、そのうち、やかましいこの野郎、いつまでもそのあたりに居たらただ置かねえぞと中から怒鳴る声に、六兵衛ははじめてお峰に男が出来たことに気がつき、高みから突きおとされたようにはっとして尻込みしたが、それまで骨ばったからだの生根をかたむけていた女の脂肪の乗った生あたたかい肉体を他人に奪われたと思うと、腹の底をかきむしるようないらだたしさに突きのめされ、闇の中で身もがきながら、にわかに泥棒々々と呼び立てた。だがそれはとんでもない失敗を仕出かしたものので、なかからも同じように泥棒々々と繰り返され、その心臓の強い哮えるような声が野面の闇に大きい波紋を描いてひろがってゆくのに気がついた六兵衛は、玉蜀黍を押し倒し、茄子を踏んづけながら、がさがさと音をさせてその場を逃げ出さざるを得なかった。

六兵衛のところから二、三枚の畑をへだてたお峰の小屋は部落から少し離れた山際にあったので、それ以後三日にあげず繰返された痴情沙汰も殆んど世間に知れなかったが、それ以来お峰は無論六兵衛のもとに手伝いに来なくなったのに対して、六兵衛の方は殆んど毎夜のようにどぶろくで勢をつけて押しかけていって、与吉といがみ合いをくり返していた。別段筋の立った文句のつけようがないので、六兵衛の論点とするところは、お峰は亡夫の新治郎から自分があずかったからだ故、他人が立ち入るべきではない、そんなことになっては地下の新治郎に対して顔向けがならないというのであった。これだけのことを毎夜のようにくどくどくり返し、振られた猫のようにいどみかかり、ときに与吉に突きとばされ闘いに負けた軍鶏のようにもんどり打ってひっくり返ったが、すぐに骨ばった頸をのばして起上りざま、狂気のように眼玉をぎろつかせ担棒をとって打ってかかるのを、日頃になくいきり立った与吉は狂ったように飛びかかり相手の首っ玉をつかんで土間の水たまりにこづき廻わした。担棒をふんだくるはずみを喰ってランプが宙をもんどり打ってぼっと油煙をあげ舌のように伸びちぢみするのを眺めていた子供はわッと泣き出した。半面泥だらけにした六兵衛が、お前俺とこ殺す気だな、人の嬶を横どりしてそれで足りなくて殺す気だな、殺すなら殺せばええ、と哮え立てながら戸外に尻込みしてゆくのに、お煮湯をのまされたような顔でうろうろしていたお峰は、お前怪我しなかったか、怪我なかったかと摺り寄ってゆくの

を与吉は一刻もぞんなお峰を見ていられないといういらだたしさで、お前どこさ行く気だと怒鳴りつけて呼び戻した。こんなことは、この夜にかぎったことではなかったが、お峰に突き離された六兵衛は昼間からどぶろくをのんでうろつき廻わり、もんだの爺もあんまり慾張りすぎて気がちがったといわれ、夜更けにお峰の小屋の造作に蛭のようにへばりついていたり、そこらの畑に倒れてぶつぶつわけのわからないことを喚き散らしていることもめずらしくなかった。

与吉との間のことが人々の口の端にのぼり、お峰の腹が目立つころになると、女房の菊代はおさまらず、与吉の家では三日にあげず夫婦喧嘩が繰り返され、風波は絶えなかった。乳呑児を背負って畑のものをつけた車をひき、町へ商いに行って戻って来ると、その足で鍬をもって畑に行く、その間田の草もとれば、二人の子供の面倒も見るという男まさりの菊代は、口数こそ少ないが、一たん怒り出すと手がつけられない暴れ方で、薪でも鍋の蓋でも手あたり次第投げつけるのには、からだこそ鬼をもひしぐようでも、気の弱い与吉はすっかりけおされ、ただあきれてぽかんとして見ているという風で、時には広い背中に首を埋めるように縮めて跣足で戸外に逃げ出してしまうことさえあった。そんなときには、いやそんなときにかぎって与吉の足は自然に溺れるように優しい気性のお峰の方に向いてしまうので、翌る日は夫婦の間の空気がいよいよたえがたいものになり、けわしい睨み合いに与吉の気持はますます菊代をはなれがちであった。ついに菊代はすっかり亭主に愛想をつかしたごとく、上の二人の子供を置いたまま実家に去って行ったが、間もなく与吉には去年から執行を延期されていた労役場送りの通知が来た。

五十日ばかり出稼ぎに行ったつもりで労役場で働いて来ればいいのだという気持ちであったが、二人のもの心つかない子供を置き去りにして行くわけにはゆかないので、与吉はすごすごと菊代の実家に出向いて行った。我鬼の四人もある分別盛りが女狂いしてよくも敷居がまたげたと頭ごなしに義父の作左衛門にいわれ、与吉は悪さをした子供のように首をちぢめ、やがて小さな声で子供のためと思って帰って来て呉れと菊代に哀願したが、菊代は強情に挺子でも帰らないと突っぱなした。それでは労役場に行って来る間だけ子供をあずかって貰いたいと、与吉は今度は義母の方に顔を向けたが、継母である義母は菊代の方をじろりと見てから、この上猫一匹でもあずかる隙間がどこにあると木で鼻をこくるような挨拶であった。

与吉が密造を検挙されたのは去年の刈入時で、そのときは前後二回の検挙で村から四軒ばかりあげられ、大抵はその年の暮に労役場送りとなったが、与吉は罰金の一部分を納めたのでせち辛い年の暮の労役場送りだけは免れた。で春に検挙されたものと一緒に処分されることになったが、相手が百姓なので当局は春の分は田植がすんでから労役場

送りの逮捕状を執行するのであった。年寄のある家は爺さん婆さんが密造したことにして労役場にいって貰えば、それだけ食う口が減るから寧ろ助ると苦笑いして自らなぐさめることも出来たが、一家の柱とたのむ働手をとられたのではそれこそ笑い事ではなかった。そこで与吉も八方かけ廻わって見たが、やっと親方（地主）から今年の収穫から二俵入れることにして十五円だけ借りられただけで、米を売るにも、春までの飯米もあやしい状態ではあとの五十円はどうにもならず、矢鱈に煙管で炉縁をたたきつけて思案投首しているところへ、女工募集人が村に来ているという話を聞きこんで渡りに舟とばかりに、小学校を卒えたばかりのキミエを愛知県の機業地にやることになった。盆暮には綺麗な着物を着せられうまいものを食って針仕事や行儀作法生花まで教えて貰って僅か三年間で、手取り百円という結構づくめの話に、与吉は罰金を納めた上に借金も埋め無尽の掛金の心配もまずこれでないと皮算用して、俺もやっと浮びあがるときが来たと、こそばゆい思いがうずうずと突きあげて来るのをおさえる事が出来なかった。

菊代が夜も眠らず縫った着物に、どこやら娘らしくなったキミエを町の停車場まで送る途中、キミエと一緒に行く娘たちを見送る親たちに、金縁眼鏡の男は警察がうるさいから若し停車場で何かいわれたらこれは親戚の娘で東京見物にやるのだとそこはうまく言えと噛んでふくめるように言い、どうもお上はものがわからなくて百姓衆は折角いいところに娘さんを奉公に出そうとしても迷惑すると笑ったが、与吉はそのときになって急に自分の行為が空恐ろしくなり、怯気づいたような様子のキミエがしみじみと可哀そうになって来た。停車場には幸い巡査の姿は見えなかったが、発車間際においと声をかけるものがあるので振返るとそれは巡査で、有無をいわさず停車場から突き出されてしまった。近年娘を売ることについて急に世間がやかましくなり、身売防止会などという村長を会長にした会まで出来て、青年団の有志が停車場にがんばっていたもので、榊村のある孝行娘などは親父が肺炎で倒れ医者も呼べないところから洲崎に身売りすることになったが、その青年団に出発間際に押えられ、それ以来というもの学校や役場や警察などの監視がきびしく、身売どころか一歩も外へ出られないので、とうとう毒を嚥んだという騒ぎも耳にしていたが、そういう世間の騒ぎ方も僅か一年ばかり続いただけでもう熱がさめているところであった。

翌朝まだ薄暗いうちに金縁眼鏡の男がやって来て、与吉も用心のため奉公先まで行くことになりキミエとの三人はぬき足さし足の思いで部落をぬけ、雪のなかを山越えして七里も先きの次の駅に外の娘たちと落合って出発した。それほど辛い思いをして愛知県から帰って来たときには、罰金どころか与吉の懐中にはただ一枚の猪と二、三枚の銀貨しか残っていなかった。着物代、旅費、口銭、仕度金と百円のうちから一々いくらいくらと差引くのに、一言の抗弁

も出来なかったというのは、気が弱く口重いだけではなく、一枚の猪さえ拝みたいほど有難く、毎月十円位の仕送りは欠かさずあるからと聞かされてはよけるどころではない与吉であった。それと親方から借りたものを合わせて税務所の窓口に行き、そればかりでは猶予出来んという役人に年内にまたいくらでも入れるからと頰かむりの頭を、何度もぺこぺことさげて、暮の労役場入りだけはまぬがれたが、さてたのしみにしていたキミエからは、仕送りどころか、切手代もないのだという手紙が一度来たきりで音信も途絶え、いよいよ農閑期の労役場送りの季節が近づいたころになって、僅か五円送って来ただけであった。

世間の手前まさかお峰の許へ子供をあずけても行けないし、こうなればもう心を鬼にして子供を置き去りにし労役場入りするより外なかった。いよいよ駐在所員が連れに来る日の朝、与吉は隣り近所にあとを頼み廻わり、お峰のところにそれとなく子供を見てくれるよう話しにいって見ると、お峰は留守だったのでそのまま戻って来ると、そこに赤児をおぶった菊代が血の気のない顔で突っ立っていた。また我鬼ども投げ飛ばしてあの夜鷹のとこさ嵌まり込んでいたべ、この人でなしと、与吉を見るなり変に白み返った顔を硬ばらせて叫んだ。菊代が戻って来たと見ると、それまで張りつめていた五体の疲れが一ぺんにすっと抜け落ちてゆくような思いに、あわてて優しい言葉をさがしていた与吉であったが、昔のやさしみと柔かさのどこにも残っていない逆目立ったその顔を見ると、手のつけようもなく気持は重苦しくなり、むかむかと突き上げて来るものをどうすることも出来なかった。

その日与吉がすごすご引上げたのち、菊代の継母のタカとの間の空気は一層冷いものになり、かねていやがらせをしかねまじかったタカは、露骨に米の高いことまで口に出しはじめた。そろそろ腰の曲りかけたからだで日雇仕事をしてやっとその日の口を濡らしている父の所に、娘時代なら兎もかく、四人の子供のあるからだで何時までべんべんとしていられないことはわかっていても、この飯炊女をしていたという底意地わるい継母が歯ぎしりするほど小面憎く、なにか思いきり仕返しをしないことには、このままおめおめと冷くなった与吉のもとに帰る気にはなれなかった。タカはそれと見てとってますます業を煮やし、与吉も与吉だが、お前も女の身で子供投げ飛ばして置いてよくも平気でいられるもんだとあてこすったが、菊代は進退谷った焼糞からいよいよ挺子でも動くものかと腹を据えた。しかしいよいよ与吉が労役場に行く日になると、ふと誰もいない家のなかにとり残される子供らの上に気持ちはもろくも崩れかかって、そのまま底知れぬ深みに溺れる気持ちで実家を立ち去ったのであった。

十日も母の顔を見なかった真太と真次は飢えた顔つきですぐに足にからんで来て、菊代は瞼が熱くなるのを覚えたが、与吉はまだ性懲りもなくお峰のところに嵌りこんでい

ると考えると忽ち眼の先は真ッ暗になってしまった。お前は喧嘩を吹っかけるに帰って来たのかと与吉は叫んだが、菊代はもう前後不覚な白み返った顔つきで、俺のいない間何をしていやがったと、足にからむ真次がひきずり倒されて泣き出したことにも気づかない様子で、藁打槌を投げつけ、さらに手あたり次第にそこいらのものをつかんでは投げとばした。この気狂いめ、何しに帰って来たと一言いったきり、与吉はあっけにとられて仁王立ちになっていたが、ちょうどそこへのっそり這入って来たのは駐在巡査であった。

　何だ、やめれやめれ、今更喧嘩したってどうなるもんじゃなしと菊代をおさえ、な、お前行く仕度出来たかと与吉の方へからだを向け直した。与吉はやおら身仕度して、梅雨あがりのまばゆく明るい外へ出ていったが、すぐ戻って来て、菊代のそばに立っている真太の上にかがみ込み、その顔をのぞき、な、お父が土産買って来てやるからな、おとなしく待ってれと言い、お前にも買ってやるぞと真次の頭を撫で、大きなからだをゆすって立ち去った。

　十日ばかりすると与吉はしかし家にもどって来た。菊代が絶望のあまり首を縊ったからであった。税務署や検事局では百姓の窮乏を考慮に入れて農閑期を択んで密造犯の逮捕状を執行したのであったが、その時分になれば飯米が一粒もない百姓たちは、田植がすんだからといって骨休めはしていられなかった。日雇稼ぎにでも出なければ麦飯も口へ這入らなかった。与吉のところには与吉が去るときに幾らか残っていた飯米と、菊代が実家から貰って来た分とを合わせて四五日分しかなかった。亭主が日雇にでも出ればどうにか切りぬけられたのであるが、足にからむ二人の子供にお負けに乳呑児をかかえた身にはどうにもならなかった。あと二、三日すれば役場から政府米を貸して貰えると与吉が言いのこして行ったし、菊代もそればかりをあてにしていたが、当日出かけて行って見ると、役場の前は一杯の人だかりで、いつまでたっても埒があかなかった。県からの輸送が遅れ、あと半月もかかるらしいとの話であったが、それは言いのがれだ、豊川などでは田植前に配給したし、役場ではサヤを儲けるために駅渡しの米をそのまま売ってしまったのだと言うものがあった。

　あと二ヵ月近くも与吉は帰らない、帰って来てもお峰というものがいる。菊代はふらふらと倒れそうになる空腹をおさえて田の草とりをしていると、爪が摺り減って空手になった指先はむしるように疼き、稲の葉が引掻く顔にとめどなくだらだらとあふれる油汗が拭っても拭っても流れ込む眼にふと映る空は気のせいか燃えるように赤く、かーッと狂おしい思いが全身をかけめぐった。与吉はいいことをしている。あそこは食う心配がないのだと思うと、一途にそこに行きたくなり、子供をつれて這入るものもあるときいているし、絶対絶命の窮状をうったえたらどうにかして呉れるだろうという空頼みに、翌る日子供をつれてふらふ

らと町の警察署に出かけて行った。署員はてんで相手にしなかったが、居座ったらどうにかなるだろうと何時間も入口の長椅子にがんばっていたが、しまいには膠もなく追い出されてしまった。

もう歩けなくなって泣き出してしまった下の子の真次をだましだましして、からだが石のようになった菊代がようやく部落に辿りついたのは、日が暮れて蛙の声がすっかりあたりを包んでしまう頃であった。乳が出なくなっていたので赤子は火がついたように菊代の背中でふんぞり返って泣きつづけ、真太たちも、お母、飯食わせれ、飯食わせれと叫んでそこいらを転げ廻わり、しまいに歩きづかれでそのまま板の間に突っ伏して蚊に食われ放題で眠ってしまっていた。その間菊代は米を借りに廻わったが、おや、お前とこもか、俺あ今お前とこさ借りに行くところであったとあべこべに言われ、この季節になるともう飯米はどこでも切れていたし、いくらでも残しているものは刈入れまで一粒でも惜しんでいたので、それも徒労であった。

実家の敷居を跨ぎタカの顔を見ることは死んでも出来ないことだった。親方にも相手にされないことはわかっている。死んだようにころりと泣きづかれに寝入った乳呑児を降ろそうとしゃがんだ眼に、上りがまちに泣き寝入りに倒れている真太と真次の寝顔が眼に滲み込んだ。菊代は食い入るようにそのまま眼を据えていたが、まだ夜更けでもないのに、十重二十重に闇を押し包む蛙の声の外にはことりとの物音もしない夜であった。

やがて菊代はなにか期するところあるらしく立ち上るとあわただしく外にとび出していった。親方の邸の板倉の一つはいつもどうしたわけか戸締りが厳重でないのを菊代は知っていたが、自分が今どこをどうしているかということにはまるで気がつかなかった。戸は造作なく開いたが、懐にしのばせて行った庖丁でさんだらを切り、いざ米を掬い出そうとするときになって、それまで無我夢中だった菊代は急にあわて出した。自分のしようとしていることの恐ろしい意味がはっきりと頭に描かれて来たからであった。あわてて外へ飛び出したが、すぐに泣き寝入りに倒れている子供らの顔が焼きつくように眼にうかんで来て、菊代の頭は再びしびれるように前後不覚に陥った。星明りもない真っ暗な夜で、人のけはいもないのを見定めると、再び倉のなかに戻って米俵の上に仰向けに倒れかかってぐいと担ぎ上げた。ふだんなら人夫仕事にも馴れている菊代にとって四斗俵を担ぐ位何でもなかったが、そのときは流石にくたくたと膝をつきそうになるのを、歯を食いしばってふらふらと板倉を出たが、ものの一丁とゆかないうちに、何かに蹴つまずいて弾かれたように俵を二、三間向うまで転がしてしまった。それと一緒に誰かこっちにやって来るけはいがしたので、菊代はそのまま逃げ出そうとしたが、すでに遅く、誰だお前はという声が耳もとでがんと恐ろしい響きで鳴り響いた。顔を寄せて、なんだお前は 寺田 の お母だ

な、困ったことをしでかしたもんだと言ったのは親方の下男の千代治だった。なんとも申訳ないことしてしまって……どうか親方さだけは黙っていて呉れせれ、二度とこんなことしねえから助けると思って、と菊代は平謝りに謝ってから逃げるように立ち去った。

与吉が労役場送りになったことを知っている千代治は、菊代の立場に同情して親方には知らせず、その足で一里近くもある菊代の父の作左衛門の家にかけつけて戸をたたいた。もう寝ていた作左衛門はしぶしぶ起きて来て、菊代がそんな大それたことしたとは中々信じようとしなかったが、しまいに、どら、俺行って意見して来る、俺もはあ世間さ顔向けならなくなるから、何とかお前と俺の間だけのことにして内証にして置いて呉れや、よくよく意見して来るからと出ていった。与吉の家はかたく戸がしまっていた。菊、菊と何度も声をかけたが返事がなかった。戸の隙からのぞいて見たがなかは真っ暗であった。不吉な予感がぞっと作左衛門の背筋を走った。もしや毒でも呑んで死んだのではないか、流石に作左衛門は薄気味わるくなり、そのままとってかえし悴を揺り起し提灯をつけてまた出かけた。矢張り菊代の返事はないので、今度はどんどん戸をたたきながら真太を呼びはじめたが、間もなくごとりと音がして心張棒がはずされ真太がむっつりとした顔つきで出て来た。真坊、お母帰って来たかと言いながら、作左衛門が提灯を差上げるようにして土間に這入った瞬間、真太は、あっ、お母、と叫んでうしろにとびのいた。提灯の灯かげの動きにつれて、だらりと洗濯物のように首吊った菊代の陰影が煤けた障子の上を揺れうごいた。

労役場を出て来た与吉は野辺送りをして初七日がすむと再び労役場に送られて行った。菊代の死因が親方（地主）のところから米を泥棒しようとした結果だというので、人人は親方の思惑を気にして誰も進んで子供等の面倒も見ることを申出るものもなく、乳呑児だけは実家で一時ひきとったが、二人の子供は家にのこしたままであった。労役場に帰って三日目に、与吉は五、六人の服役者と一緒に砂利運びに出ていたが、飢えた顔つきでうろうろしている子供らのことを思うと、矢も楯もたまらず、看守が便所に行っている間に一目散に逃げ出した。十里以上の山路を与吉は暴れ馬のように無我夢中で走りつづけやっと我が家にたどりついたときはもう日暮に近かった。お父来た、お父帰って来たと小さい方の真次は顔を赤くして畑の方からひょいひょいと浮き上る調子でかけ寄って来たが、真太の方はまるで大人のように上り框のところに横になって父親の姿にちらりと冷い眼を投げただけでじっと何か考えこんでいるところであった。与吉はその大人びたひねくれた心にふれてひやりとし、子の行末を思う心にうなだれた頭を、しばらくもち上げることができなかった。お前飯食ったかというと真太はうん、山下のお母来て飯炊いて始末して呉れたと言った。それはお峰のことで初七日の間は世間ていもあ

ってお峰には会わずじまいであったが、お峰の方ではそこにぬかりはなかった。早速戸棚からお峰の炊いた飯をとり出してつめこみ、すっかり暗くなるまで、田圃に出ていた。田の草はそのままにして置いたら稲を滅茶苦茶にしてしまうほど伸び放題に伸びていた。

お峰に会わないうちに追手がかかるかも知れないと思うと気が気でなかったが、いい加減草をとってしまうと、また自分の家に帰っていった。もう夜になっていた。さあ、真次寝れ、夜鷹に掠われれば大変だからなと与吉は菊代がそうしていたように小さい真次に添寝していたが、一寸身動きすると真次は眼をあけて父親の顔をちらと見守った。また父親に逃げられはしないかという意識がそこに動いているように思われてぎくりとしたが、焼きつく思いはお峰の方に走っていた。やがてこくりと真次が眠りこけたのを見ると、大きな体を起して、先刻から突きはなされような飢えた顔つきでじっと宙を睨んでいる真太に、真、お前隣りのお父さ訊いてな、田圃見て呉れや、草のびたら草除ってな、学校から帰ったら真次とよく見てやれ、土産買って来てやるからな、すぐ帰って来るからと言いのこしてあわただしく出ていった。

しかるにそのときお峰のところには六兵衛が来ていた。与吉が労役場送りになった事は六兵衛にとってはもっけの幸で、再びしつこくお峰に言い寄る機会をあたえたことはいうまでもなかった。それに菊代が首をくくったことは六兵衛にとっては、願ってもない口実となって、菊代の怨霊をひたすら恐れて商いに出るときの外は戸の口三寸出るのも、世間の人々に顔むけがならないこととしていたお峰に向って、世間はお前がとり殺したといって専ら評判していること、若しこの上お前が与吉との関係をつづけるなら、亡霊のたたりはきっとお前を狂い死させるに違いないとしつこく繰返して、因果応報を恐れ宿命のおそろしさに脅やかされがちなお峰をなやましつづけた。その手でじりじりと相手の手元にとびこんで行き、なんでも素直にうけ入れてしまうことで、いつも自分を不幸にしている可哀そうなお峰を再びとりこにしていた。

それにはまだ密造を検挙されて以来、いくらなんでも挙げられた尻から梟に出てどぶろくを売りあるくわけにはゆかなかったし、こう腹が大きくなって来ては日雇仕事にも出られず、畑のものを町に売りにゆく位では、親子三人の口はすすげぬのに対して、六兵衛は金以外なら米味噌とか野菜とか何でも持運んだことも手伝っていた。それでもお峰は毎朝夜のあけないうちに、世間の眼をぬすんで、与吉の子供たちを見にゆくことだけは忘れなかったが、菊代の怨霊の恐ろしさにふるえる心に、ふと自分のからだのなかで日にまし大きくなってゆく与吉の子に気がつき、弾き飛ばされたように、殆んど与吉をあきらめかけている自分を空恐ろしく思い返すほど、ずるずると六兵蔵の親切ごかしにほだされる人のよさを露き出していた。

そういうわけであったから、突然お峰お峰と戸口にすり寄って呼ぶ声がしたとき、お峰はぎくりとしてからだがとめどなくふるえ出したほどであった。はじめそれは、まだ当分労役場から出て来るはずがない与吉の声とは信じられなかった。お峰は硬ばった顔でしばらくじっと闇を見つめていたが、やがてはっきり与吉であることがわかっても、重くのしかかる恐れを払いのけることが出来ず、何か警戒する気持ちがかたくなにお峰を沈黙させた。与吉の頭にはすぐに六兵衛が浮んで来ていたが、お峰、俺だ、俺だと呼びつづけているうち、かつてそれほどまでに感じたことのない烈しいお峰に対する執着が全身を熱くかけ廻わり、六兵衛に対する怒りが腹の底から滅茶苦茶にあばれ出して来るのを感じた。そういう自分に我れから驚きながら、お峰俺を忘れたか、忘れられる義理だかと言い、荒っぽく戸をたたき小屋の廻りをぐるぐる狂い廻わっていたが、それでも、お峰はかたくなに黙っていた。

なんということなくただ恐ろしく、のしかかって来る運命に身体を縮めてしたがっているより外ないというかたくなさをどうすることも出来ず、ときどき突き上げて来る与吉への執着はすぐ姿を消して、恐れとあきらめがかたくその肉体をとりおさえた。だが事態はそれだけではすまなかった。なかからは六兵衛が何かお峰の耳に呟く声がきこえて来た。もうこうなってはお峰に声をかけても無駄だと知り、本能的に六兵衛を怒らせておびき出すことに思いついた。こら、もんだの爺、お前の家火事だや、いい年して女子狂いしている間にお前の家全焼けだぞと怒鳴った。なんだ、お前は監獄ぬけて人の家さ火つけに来たかと六兵衛はやり返したが、そうなると与吉にとってはもう半ば戦術が成功したというべきであった。

人の留守に夜這いに這入りやがって何を大きな口きくか、このくたばりぞくないめ、言うことあったら出て来いと与吉はわめき立てた。お峰は早くも与吉の罠に気がついて、はらはらして六兵衛の口返答を制するらしかった。六兵衛は出ようが出まいが牢破りの指図など受けねえとやり返した。と与吉は得たりとばかり俺牢破りしてもお前のような人非人でねえ、新治郎の生きてる間お前はどんなことした、田畑はとり上げるし、病気になっても振り向きもしなかったべ、この人でなしの癩病の性、よしッ、出て来なかったら俺あひきずり出してやる、いいかこの野郎とわめきながら、戸板にからだをぶっつけはじめた。六兵衛も痩顎をもたげてこの牢破り警察さ知らせてやるぞと起き上るのを、お峰はすがりついて押えたが、与吉がどしどしとからだを打っつける度に戸板は今にも折れてしまいそうに内側にめりめりと撓った。それと同時に、それまで圧えつけられた与吉への執着が突然熱湯のように吹き上げて来た。お峰ははっと我れに帰って、急に泣き出しそうな顔になり跣足のまま土間に飛び下り、今開けるんで、お前もなんとか騒がねえで、と必死に叫びながら戸締りをはずした。

腰の曲りかけた六兵衛は今にも喰いつきそうな顔つきで身構えていたが、入口狭しとのっそり与吉が這入って来ると、犬にねらわれた鶏のように素早くその傍をすりぬけて、この牢破り覚えて居れ、駐在所さ知らせて来らあと叫んで走り去った。折角脱走して来た与吉をその場で巡査の手で首っ玉を押えてしまうことは、いつぱったりと往生するかも知れぬ自分の年を忘れて前後不覚にお峰におぼれている六兵衛に野良犬をたたき殺すような種類の快感を与えるのであった。しかし当の与吉はこのまま追手をのがれられるとも思っていなかったし、少しもそれを恐れてはいなかった。うなだれて黙っているお峰の顔には明らかに何十日ぶりで与吉に会った昂奮がうごいていた。事実、もう先刻までの不安とわけのわからない恐怖はどこかにかえ吹っ飛んでお峰の眼の前には肩幅の広いねっちりとした与吉があるだけであった。俺あ行ってしまったらまたもんだの爺とこひっぱりこむべな、お前は……としばらくしていうのに、お峰は無言のまま首をふると同時に闇の中で与吉の強い腕がのびて来たのを感じた。

与吉はその夜のうちにお峰のところで逮捕されたが、事情が事情だけにそれにあたった署員や看守から同情され丁寧な取り扱いをされたばかりでなく、格別懲罰も受けずにすんだ。ただ砂利運びの労役に出ているとき脱走したというので構内の草取り仕事や営繕の石運びや道路修繕などがあっても与吉は除外されて、明けるから暮れるまで工場に坐りっきりで実子綱綯いの居職仕事は、力仕事の得手な与吉にとってはかなり辛いものであった。賭博や一寸した事件で来ているものもあったが、大部分は濁密犯人であったから、同房の連中はみんなお互によく気が合ってなぐさめ合うという風で、受持看守も彼等がこんなところに来るのは食われないからであり、農村の窮迫にしたがってますます濁密はふえるばかりで、殊に凶作地のものにそれが多いということを知り過ぎるほど知っていたから、大抵のことは大眼に見るという風で、禁じられている話声などにもそっぽを向いていることがあった。

そんなわけで彼等はいろんなことをそれとなく知ることが出来たし、今日女囚の方にどこそこの阿母が来たとか、どこの婆さんが来たとか、誰いうとなく知らされたが、労役囚は殆んど毎日のように三人、四人とふえて行った。山内の方は田植するだけの雨あったべかと、その山内村から来ている太一郎という四十男は、同じ郡内から来た丑之助に仕事の手をやめて真剣な顔をふりむけていた。ああ、済んだもなも、この月に這入ってから三日も続けて大雨あってな、俺あ植えてしまってから、ゆっくりここでいつまでもお上の飯食わせて貰わあと、眉毛が下駄の鼻緒のように太い丑之助は、肩をゆすりながら言った。六月も末になって、毎日のように五人も十人もかたまって新手がやって来て、労役囚が馬鈴薯の子のようにふえてゆくことは、ずっ

と前から這入っていて、もう放免の日が近づいているような連中に、娑婆は田植がすんだことを知らせるのであった。

それがなんとなく明るい気分をあたえて、彼等は時たま色話などやらかして割れるような笑声をあげて当番看守にたしなめられた。新しくやって来る連中は、はじめ重苦しい顔で青法被に腕を通しおずおずした様子で工場に這入って来るが、その日のうちに馴れてしまって、田植時の不眠不休のうずくような疲れが溶けるように快く体のすみずみからぬけてゆくのを感じ、腹の底から植付をすませた安堵がこみあげて来るとともに、思いがけないいいところへ来たような気がして、あらためてあたりを見廻わすのであった。新手はあとからあとからやって来るので、看守たちは当分ごった返していたが、ある日、多吉という日雇が三年振りで父親に会ったという事件では、みんな妙に沈んだ気分になってしまった。

明日の朝、五十日目で出るというその前日の夕方、多吉がみんなと一緒に工場から還戻(かえ)って来ると、ちょうど父親の多助が四、五人の新しい労役囚と一緒に看守につれられて這入って来たところであった。もう六十に近い胡麻塩頭の多助は、多分、処もあろうにこんなところで息子に会うことが余程辛かったのであろう。腰の曲りかけた痩せた体を一層前屈みにして妙に悪びれた眼をきょろきょろさせて人蔭にかくれるように這入って来たのであったが、多吉はそれが三年前に別れたままの父親であることを知ると、おお、お父と、短かく声を呑み、おやお前どうして此処さ来たけなと、せぐり上げるような声で父親の前ににじり寄っていった。うん、四、五日前に帰って来た、お前さ苦労かけて本当に顔向けならねえ、今度あ俺の番だから先ず何とか勘弁して呉れと親父は忰の前にぺこりと頭を下げた。てっぺんはつるつるに禿げて、古い瓢箪のように日に焼け、両側にだけ白髪のある頭には三年間の漂泊の生活がまざまざときざみこまれている気がして、多吉は思わず眼をそむけたほどであった。密造の常習犯である多助は累犯というので二百円の罰金をかけられ、百方金策に奔走したがまとまった金が出来るはずがなく、逮捕状が執行される数日前に逃亡してしまった。このことが酒役人の感情を害して、多吉の家は始終ねらわれつづけて来たが、とうとうこの春甘酒をつくっているのを発見された。多吉はそれはどぶろくではなく甘酒にすぎないことを百方弁明につとめたが、多助の心証がわるいばかりに八十円という眼の玉の飛び出るような罰金を免れることが出来なかった。まだ酒造税法という窮屈なものがなく、自分のつくった米で自分が仕込んだどぶろくを、自分の腹に入れることに何の不思議もないとされていた時分からの習慣で、田圃から上って来て戸口に近づくとともに、自在鈎に鍋をかけて湧かしていると ぶろくの匂いが、ぷーんと鼻をついて来なかったら最後、

急に世の中が真暗になってしまったように思われ、ぷりぷり怒ってしまう多助にとっては、たとえどんな制裁があったにしろ、どぶろくをやめることなどは思いもよらなかった。ある日野良から帰って来た多助は、まだ一升近く残っていたどぶろくを、留守中に客に出してしまったと聞いて、大あばれに暴れ出し、膳をひっくりかえし母親を殴りつけた揚句、しまいに母親が近所から徳利に少しばかり分けて貰って来たので、やっと鬼がついた事件は、多吉の子供のころの記憶のなかに強く焼きつけられていた。検挙がきびしいからといって、一升の清酒のために白米四升も出すわけにはゆかなかったし、屑米でつくるどぶろくは、その粕を味噌へ入れて味をつけたり、粕漬をつくったりする余徳さえあった。清酒とちがって粕がながく腹へたまっているところから、一杯ひっかけさえすれば雪の中でも平気で何時間でも仕事が出来た。多吉は父親が昼間どぶろくがのめないので、苗取り仕事も水が冷く足腰が冷えてたまらないとこぼすのを以前よく耳にしたものであった。何度検挙されても多助は、景気よく柴の燃える炉傍に大胡坐をかいて鍋にぶつぶつと泡立つどぶろくを、味噌漬を噛り噛りぐいぐいやる味が忘れられず、しまいには悔悛の情のない累犯として二百円という罰金をあてがわれたのであった。

僅か四反の田は減るともふえはしないのに、孫と借金はふえる一方の暮しむきの重みに、せめてどぶろくを呑んでまだしもゆとりのあった昔をなつかしんでいた多助は、はじめは罰金を拵らえることに奔走していたが、どうしても見込がないとわかると、よくよく世間に愛想をつかしたらしく、突然行方をくらましてしまい、盆が来ても正月になっても葉書一本来なかった。松前さでも行って野垂死したべやと、焼糞に吐き出すことは度々であったが、病身の女房を相手に婆さんと子供四人をかかえて働手は自分一人になった多吉は、まだ若い者に負けない気の働手である父親を全然あきらめ切ってはいなかった。自分が労役場にいってしまうと、一家干乾しになってしまう多吉は、八十円の罰金に対し、五円十円と血の出るような金を分納し、一寸のばしに田植までのばして来たが、とうとうあとの二十円がどうにもならず労役場に送られる身になった。

夜半、多吉は父親の三年間の積る話を聞きたかったが、多助はぷいと眼をそらし、聞いたって何にもならぬ、どこ歩いていたってこの世の中は変りねえよ、と言ったきりであった。翌朝仕事の時間になると看守は罰金の全部を稼ぎ上げた多吉を連れ出しに来たが、んだら、お前、達者でいて呉れや、なんぼでも都合つき次第罰金納めて早く出られるようにするでなと、多吉は父親の方にかがみかかってその痩せさらぼけた姿に咽喉をつまらしたが、多助は手を振ってそれをも遮った。うんにゃ、余計なことやめれ、俺などこの年してどこで死んだって同じこった、余計なことをするなと、息子の思いやりを払いのけるように腕を泳がせ、それよりお前こそ達者ですごせやと、顔色一つ動かさ

ず言った。これにはみんな息を呑み胸の底に暗いものをこびりつかせて、不安な予感にかりたてられたが、案の定それから二、三日のうちに思いがけない出来事が起った。

その朝多助はもっそう飯を振り向きもしないので人々の注意を集めたが、八時四十分から十五分間の休憩時間が切れて皆仕事に就いても多助だけは床板にのびたまま動こうとしなかったので、工場受持の看守が近づいて来て、どうしたんだ、早く仕事をしろよと低い声で注意をうながした。多助はしかし一寸看守の方をふり返っただけで、すぐまた俯伏してしまい、俺あ持病でしてな、この通りからだが言うことをきかねえですよ、いいからこのまま抛って置いてけれやと言ってのけた。気の小さい百姓たちはお上を恐れぬその不貞くされた胆っ玉にあきれると同時に、その言葉つきが何処やら渡りものの匂いがするのを感じて、一せいに多助の方を見ていた。何を寝言を言ってるんだ、ここを一体どこだと思っているんだ、早く仕事をしろ、と看守は再び今度は少し声を荒らげたが、多助はがばと跳ね起きると、追いつめられた猫のように眼を据え、お前さんに言われるまでもなく、その位のことは知っているが、年は勝てねえ、お前さんみたいに若ければ別だがな、年寄りには可哀そうだと思って見ない振りしていてけれと言いつづける舌はもつれ、その眼は変にふてぶてしく据っていて赤みがさしていた。のみならず、やがて不承不承に起き上って鼻緒をつくる仕事台の方にふらふら泳いでいった多助は、よろよろと一人の男に倒れかかったが、間もなく突きとばされでもしたようにばったりと倒れた。おっ、この通りなあ、年寄をあんまり追いつかうと碌なことねえ、といって再び立ち上ったときであった。

工場受持は突然貴様酔ってるんだなと叫んだ。はじめは看守が、冗談を言ってると思ったが、看守が再び、おいこらどこで飲んだんだ、酔ってるじゃないか、とたたみかけたときには、本当にみんなびっくりしてしまった。ふらふらと起き上った多助は、てれ臭そうな眼つきで急に調子をかえて旦那冗談でしょう。監獄でどうして酒が飲めますかと及び腰をふらつかせてまぜっかえしたが、そのあとにへへへへと正体のない底のぬけた笑い方が、看守の観察が間違っていないことを証拠立てた。けしからん、こっちいこいと工場受持は多助の腕をつかんでぐいぐいひき立てて行ったが、それから約一時間ばかりして焼酎の瓶が工場の一隅から発見された。多助がどういう手段でそんなものを持ち込んだかということは、無論労役囚たちにはわからず仕舞であった。

しかし、数日後多助が労役場から姿を消してしまったことはさらに人々をびっくりさせた。与吉の例があるので、人々はまた脱走したのかと思ったが、他の連中はいや多助は青法被から赤法被になったのだといった。それ以来多助の姿を一度も労役場に見なかった事から考えて、それは本当らしく人々は多助の変に上方訛りのある台詞や七分三分

に人を見る眼つきや、胸をどきっとさせるふてぶてしいもののいい方などを思い出し、工場への往き還りなど、彼等が俗に監獄と呼んでいる懲役監や禁錮監の建物の方をおずおずと見やり、自分も一歩過まれば多助と同様あそこだと考えると急に空恐ろしくなるのであった。あるものは多助は放浪している間に窃盗や詐欺の味をおぼえていたのだといったが、誰も進んで打消すものもなく、またそれ以上多助のことを知っているものもなかった。

与吉が同じ労役場のなかにお峰の姿を見つけたのは、それから数日後のことであった。普通なら与吉と時期を同じくして収容されるのであったが、子供を見るものがいないことに対する同情から執行を控えられ多分収容は暮のことになるだろうとお峰自身はいっていた。それがその後お峰が罰金を少しばかり分納するために税務署にいったとき、お峰のからだに気がついた間税課では、年内の執行がちょうど出産にあたって不可能になるのを恐れて遽かに執行する運びにしたのであった。ここでは男女間の接触は全然禁じられているので、同じ労役場のなかとは言え、彼等は女たちの姿を見かけることさえ滅多になかったが、ちょうどその朝は、交代看守の到着が何かの都合で遅れたらしく、与吉たちが房を出たときに、女の連中もどやどやと廊下にあふれ出して来た。

大抵、四十日か永くて五十日の収容期間にすぎなかったが、一度び女となると流石に彼等の昂奮はおさえきれず、看守があわてて叱責したほどざわめき立って、あるものはお前ら早く家さ帰ったらえかべ、亭主(おと)気が気でねえどよと叫び、あるものはお前ら一人で寝られるがやと怒鳴ったが、女たちも負けてはいず、お前らの女房(おが)今頃いい男こさえてるかも知れねえよとやり返すという有様で、しばらくごった返す昂奮に眼のさきがぼっとなってものの形もはっきり見えないほどであった。

やがて与吉は女たちの殆んど男の二倍位のおびただしい人数であることや、それも年寄が多く、若い女のなかには乳呑児を抱いたりおぶったりしたものが何人もいることに気がついたが、ふとお峰の顔を見つけ出し、はじめは自分の眼を疑った。しかしお峰の方では先に与吉を見つけ出していたらしく、静かな感情をこめた眼でじっと与吉の方を見ていた。気のせいか顔色がいやに黄色っぽく血の気がなかったが、それもそのはずでお峰のからだはもう六カ月になっているはずであった。

いよいよ執行ときまるとお峰は町の警察にいって、暮まで執行をのばして貰いたいこと、もしそれが出来なければ子供を連れて行かれるように取りはからって貰いたいと歎願した。

しかるに、お峰より一足先に、そこには乳呑児を背負いさらに三、四歳の女の子を連れた女が来ていて、眼を泣き腫らし鼻をぐずぐずいわせながら、どうでもこの子を連れてゆかねばとがんばっていた。家の亭主(おと)ったらなあ、この

子の顔も見に戻って来ないのだすもの、俺らどぶろくでも売らねば何としても生きて行かれるすと、その赭ら顔の女は涙で一層顔を赤くしながら肩をせり上げた。去年の春北海道に出かせぎに行ったまま多分帰って来る旅費にも窮したのであろう、暮になって子供が生れても手紙一本来なかった。僅かばかりの畑作位でどうして食って行かれよう、仕方なくどぶろくを造って売りにあるいたのを検挙されて六十円という滅相もない罰金であった。

警官は始末にこまってにやにや笑い出したが、間もなく分らねえなお前も、乳呑児は別として、そんな大きな子供など入れられないてば、ものがわからねえにもほどがあると吐き出すようにいった。ああその通りだす、俺わけのわからぬ女だす、文字も読めねえ、なんにもものの分からぬ女だす、んだからこの子供の始末どうしていいか分らねえのだす、せば旦那さん何としたらええべと女は突っかかるような調子でいった。なんとしたらいいか、俺にもわからねなと、この面長な人のよさそうな巡査は、細い眼を眼鏡の奥でしばしばたたきながら、自分の身のふりかたの心配よりも、母が巡査に不当にいじめられているように感じて瞬きもせず、この有様をじっと見守っている疳のつよそうな顔つきの女の子の方を見ていたが、やがて傍らの警官をふり向いて、なあ、どうしたらいいもんだろうと片棒をあづけた。さあ、俺にもわからねえなとその円顔の額のせまい眼のくりくりした巡査はいい、一寸考えてから、なあ、お前には一軒も親類ないのかと女の方に顔を向けた。

それはその巡査が聞いていなかっただけのことで、すでに先刻から女が委しく述べたところで、亭主の方のただ一人の伯父は村から村と廻わり歩く蝙蝠直しのこととて居所が知れなかったし、女の実家は去年の夏に一家をあげてブラジルへ行ってしまっていた。移民といえば聞えはいいが実は離村であって、耕作反別がすくない上に凶作にたたられて、全く立ち行かなくなった山間部のその部落では、十八戸のうち十五家族までがいっしょに飢餓の村をすててブラジルへ逃亡してしまった。今も旦那さんに話した通り親類も何もないし、誰もこの子の面倒見るものはいねえから、もし一緒に這入れなかったら、亭主(おど)どこ捜索して給らねすべか、おどさえ帰って来たら、なんぼでも労役場さ行くす、と女はいった。はッはッは、お前とこ労役場さやるためにお前の亭主とこ今から草の根分けて捜すってか、と巡査は円い顔を一層丸くして笑った。その陽気な笑い声でいくらか窮屈なやりきれない思いを救われたらしい眼の細い巡査は、今から捜索などしたって間に合うもんでねえ、よし、それじゃ俺が役場さ行って相談して見てやるといった。

それまでぼんやりそこに突っ立っていたお峰は、そのときになってやっとおずおずと前に進み出てゆき、俺もはあ、この子ら連れて行かせて貰われねえべかと、その眼鏡をかけた巡査にお辞儀してから述べたてた。なんだ、お前

もかと巡査はあきれ顔でしばらく息を呑んでいたが、お峰の事情をききとると、満一歳未満の乳呑児なら別だが、なんともならないな、と今度はそっけない調子でおだやかにいった。親戚の有無をきかれたときお峰は六兵衛のことはおくびにも出さなかった。与吉が脱走して来た夜からこっちお峰は死んでも六兵衛の厄介にならない肚をきめていたが、そういう事情をここでうまく説明することはお峰には一寸出来ないことであった。与吉の例によってもお峰は労役場に子供を連れてゆくことは出来ない相談であることを充分知っていたが、それでも尚警察に行って泣きついたらどうにかなるだろうという藁をつかむ気持ちであった。

規則はそうだべども、何とかして、せめて産してからでも入れて貰われねえすべか。お峰はやっとそれだけいったが、巡査ははじめてお峰の突き出した腹に気がついたように、うんと唸るように息を呑んだ。思いがけなく次から次と鼻面につきつけられる難問題に、巡査はぱちぱちと瞬きしてのち生れた子おぶって行くより今行って来た方えかべせといった。そだすべかとお峰は考え込んだが、円顔の巡査はじろじろとお峰の方を見やり、お前、亭主居ないのに何として腹高くなったのか、うん、といったので、すっかり顔を赤くして俯向いてしまった。すると、そのときまでこの有様を振向きもしなかった年輩の巡査が立ち上って来て、なんぼ貧乏してもな、この道ばかりは別だべ、なあお前亭主居ようが居まいが餓鬼こさえるのに何の苦労いるもんだでか、なあ、そうだろうと、にこりともせずにいった。それで警察署特有のそっけないかたくるしい空気はどこかへ消え去って、急に巡査たちの開けっぱなしな話声と陽気な笑顔が湧き出した。その空気は背の低い横肥りの婆さんが飛びこんで来てがらがら声で歎願しはじめるときまでつづいた。

婆さんはずかずかと先刻の眼の細い巡査のところにやって来て、旦那さん、私は明日にも労役場送りになるてことだども、何とか伜（せがれ）徴兵から帰って来るまで待って貰えないすべかと、そこら一杯響きわたる声で叫んだ。若い巡査は短兵急な婆さんの調子に、わざと威厳をたもつように、円顔の巡査をふり向いて、今日はなんと悪い日だべ、あきれたもんだなと言ったが、やがて婆さんに、そういうことはここへ来てもわからねえ、検事局か税務署へ行って見なと答えた。その言葉が終るか終らないうちに、婆さんは、はあ、税務署さも裁判所さも百遍も足運んでお願いしたす、何度行ったたって埒明かねえから旦那さんさ頼みに来たのだす、と勝ち誇ったように叫んで、そこいらをじろじろと見廻わした。検事局で駄目なら警察は無論なんともならないよ、と巡査が言いも終らないうちに、んでも裁判所じゃ警察さ行って見ろってことだったすてと、あくまで逃がしてなるものかという調子でいった。

実際この署では毎日のように押しかけて来るこの種の歎願者に手を焼いていた。ことに盆休みや年の暮の罰金整理

の時期になると多勢の不幸な家族を抱えて労役場入りも出来ないものが毎日のようにやって来た。なかでも子供を置き去りにして行かなければならない不幸な女たちが、日に二人も三人も押しかけて警官たちをなやました。検挙が手きびしくなればなるほど、密造が一層逆にふえて来るのは、百姓がますます暮らし向きにこまって来て、清酒などには手も足も出ないことを物語っていたが、危険を冒して梟に歩くものなどは、亭主に先立たれ多勢の家族をかかえて途方に暮れている女房とか、一家をささえる働手がないとか、働らきたくとも田地も仕事もないとかいう連中にきまっていたので、そういう連中は自分が労役場入をしたのち老人や子供をどうしたらいいかという、こんがらかった糸のように解決のしようのない難問題を持ちこんで来るのであった。去年の暮のある日などは、そういう老若の男女が七、八人も一度に押しかけて来て尻に根が生えたように動かないので、しまいに署長さえ気を腐らして、そんな事情を無視した杓子定規の逮捕状の執行の不穏当であることを抗議しようと勢いこんで検事局へ出かけていったほどであった。

悴さえ帰って来いば、労役さも行くす、罰金もおさめるども、と婆さんはまたやりはじめた。なにしろ、あとの悴や娘はみんな世話のやける餓鬼どもばかりで、ただなんぼでも食いつぶすばかりのところさ、爺様は寝たきり動けねえ始末だものなんす、なんとか春まで待って貰うように旦那さん、この通りお願申すであんすよと、鉤殻へ火がついたようにべらべらまくし立てて、ぺこんと一つ頭を下げた。

なんとお前はよく喋るなあと若い巡査はにやにやしたが、余計喋りは生れつきだすものな、この上口さ戸でも立てられたら息詰って死ぬばかりだす、先ず旦那さん、これ見て下されといいながら、あわただしく懐から一枚の紙片をとり出して巡査の方へ差出し、濁酒の罰金さお負けにこれだものな、罰金かけられるようじゃ末の見込みがねえというんだすべ、爺様の代からつくって来た田取り上げるって事だすものな、旦那さん申訳ねえども親方さ掛合ってもとの通りにして貰われねえすべか、慈悲だと思って一つお願申すであんすと、喋っているうちに婆さんの肥った顔は昂奮で赤くなって来ていた。見るとそれは小作契約の書面で、婆さんの説明によると、亭主が亡くなったのにつづいて、昨年の春たのみにする息子が入営したあと、そののちも彼女はまだ五十の坂にさしかかったばかりで、徴兵にいっている長男は県庁所在地の小都会に奉公にいっている次男とあわせてその八人の子供は、みな彼女の産み落した子供に違いなかったが、どうにも遣り繰りつかない結果は田徳を二俵未納したのと、間もなく梟になって検挙されたのを口実にして、同じ村の眼と鼻の先にいながら、地主は内容証明で解約の書面を送りつけたのであった。

旦那さん、なんと在ることだすか、二俵だすよ、たった二俵で田地取り上げるって話、どこにあるすか、なんとか旦那さん、慈悲だと思ってもと通りになるようにかけ合って下さらねすべかと婆さんは必死に詰め寄ったが、巡査は再びぐっと息をのみ、細い眼をしばたたきながら、えッ、お前は、執行延期頼みに来たのか、それとも田地のかけ合いたのみに来たのか、うん、と笑いもせずに言った。恐らくこの好人物の巡査は、婆さんの矛盾した態度よりも、二重にも三重にも重なり合った事件の思いがけない展開と、解決しがたい複雑さに面喰ったらしかった。

　なんと旦那さん、と婆さんは一寸ぽかんとしていたが、どっちでもいいです、悴さえ帰って来いば俺いつでも労役場さ行くし、なんとか田地もと通りになるようにはあ、お願申すであんすよとくり返した。わかったわかったと巡査はあきれ返りとうとう少し腹を立てて、それでお前はどっちのこと頼みに来たのだと冷い調子で訊いた。しかし、お婆さんはそれでもまだ、警察というところはそんな問題は取扱いかねるという相手の言葉の意味は理解するに至らなかった。どっちもこっちも無いす、悴帰って来ねえば、なんともかんともならねえす、留守に田地とりあげられたとなっては、悴さ会わせる顔がないすもの、なんとか旦那さん一世一代のお願いだから、頼むすてばあ。婆さんは一息にそう言って、腰の手拭をはずして、あまり夢中になってしゃべったために、べっとりとふかし芋みたいに汗ばんだ顔を拭いた。

　理窟を言っても無駄だとさとった巡査は、いつも毎日のように押しかけて来るこうした連中を冷く突っぱなすことの出来ない自分にまたしても腹を立てて眉をしかめながら、ゆっくり小作契約の書面を眺めていたが、それじゃなあ、農会さでも頼んで見ればいいと言いながら、書面を婆さんに返した。しかし婆さんは、それだば早速農会さ駈け込んで頼んであるども、一向に埒明かねえす、それもその筈で親方（地主）は農会の議員だすものなと言った。ここで巡査は急に調子をかえる必要を感じたらしく、固苦しい顔になって、そんな罰金かけられたり、田とりあげられたりする位なら、梟などしねえばいいだろう、と叱るように言った。

　そだって旦那さん、頼みにする悴徴兵にとられたら、七人もいる餓鬼さ誰食わせて呉れるす、梟にでもなるより外無いすべや、なんす旦那さんと、婆さんは今度は丸顔の巡査に言いかけた。んじゃ、お前らみんな梟か、あきれた世の中になったもんだなと巡査は言ったが、そのとき向う側にいる髭のある警部補が一寸卓子から顔をあげて、昨日俺のとこさも梟飛んで来たよと言った。

　警部補の妻君が台所で洗濯しているところへ、物売りが来てフクロ入用らねえすかと言うので、梟という意味をそのときまで知らなかった細君はフクロって何のことだすと訊き返した。すると肴竄りらしい風態の女は、おやお前さ

んフクロ知らねえてがあ、濁り酒のことだす、一升二十銭にして置くから塩梅見て下されであと言いながら台所口から顔を突き入れた。おや濁り酒のことフクロって言って、私の家巡査だすてと細君は言ったので、百姓女はびっくり仰天して、まんつ、旦那さんの家だってと叫びながら、鶏が火にくたばったようにあわてて逃げ出して行ったというのであった。その話が終るやいなや、丸顔の巡査は、その梟お前でなかったか、うん、どうもお前らしいぞと真面目な顔を婆さんの方に向けた。旦那さんがた、笑い事でねすてと婆さんはまたもや口説きはじめたが、結局税務署や検事局でどうにもならぬものは、警察でも手の下しようがないことはわかりきったことであったので、お峰たちは何時間もがんばっていたが徒労であった。ただ眼の細い好人物の巡査がいずれ逮捕状が廻わって来たら、それぞれ村役場にかけ合って救助米を貰えるようにしようし、それ以上の世話も出来るだけつとめようということで、お峰たちは引き上げるより外なかった。

帰り道、お峰は万が一をねがって町の駐在巡査に泣きついて見たところが、留守中は与吉の子供等を見てくれるという案外の親切に、お峰は暗くなった道をいそぎながら、背中の子供に気どられまいとする心の張りも失くして手ばなしで泣いていた。その日になってその駐在巡査になぐさめられながら町の刑務支所にいって見ると、もうそこには五、六人来ていたが、そのなかには例の婆さんだけは金でも都合して労役場送りをまぬがれたものか見えなかったが、亭主が出稼ぎに行ったまま便りがないというその日警察で顔を合せた女の顔も見えた。赤子に乳房をふくませながら、泣き腫らした眼でぼんやり宙を睨んでいる女房、見送り人に贈られたらしい真新らしい手拭を丁寧に折りたたんで風呂敷包みにしまい込み、わざわざ煮〆たのを取出して汗を拭いている婆さんもあった。間もなく背の低い恐い顔つきの巡査が婆さんを二人連れてやって来たが、この斎藤イクだがなあ、途中でひっくり返ってしまってな、戸板で運ぶ騒ぎをしたが、或は死んだかも知れんな、と看守に報告している声が窓越しに聞えた。

労役場入りをするものはその日の米にもこまるものにきまっているので、老人のある家では大抵爺さんか婆さんが働手の身代りになって違反を引き受け労役場入りをするのであったが、その部落などはそのとき逮捕状を執行された三人が三人とも老人であった。若いもののかわりに年寄が行くということはよくよくのことだったから、息子や孫たちは村はずれの庚申塚まで送って来た。んだら婆様からだに気をつけてなあ、早く戻って来て呉れせやとイク婆さんの忰は言い、孫たちは、婆様早く戻って昔話聞かせれなと繰返した。うん、おとなしく待ってれや、腰曲っても大丈夫だ、一日一両の賃銀稼いで来るからなと、イク婆さんは曲った腰をのばして見せ、まだ頭髪の黒い二人の年寄の間にはさまって、その姿は次第に小さく遠のいていったが一

時間もすると戸板にのせられて帰って来たのであった。隣り村まで行きつかないうちに、突然卒中を起してひっくり返ったのであったが、六十八という寄る年波では若いものと一緒に一日一円の罰金をかせぐことは無理であったらしく、間もなく息をひきとってしまった。次の日また五、六人の新手がやって来て、手狭な刑務支所は満員になったので、お峰たち女八人は小一時間汽車にゆられて県庁所在地の刑務所に送られることになった。半分は老人で、若い女のうち三人まで乳呑児を抱いていた。二十五日を経過しない者は産後の肥立を待って収容されるのであったが、それ以上たっているものは青い顔をして梅干のような顔の乳呑児を抱いて送られて来た。市の停車場に着くと警官につき添われた頬冠りの女達の一隊は街の明るい空気の中に暗い汚点となって、こそこそと乗合自動車や荷馬車のわきを通りすぎるのであった。

乳呑児を抱いているのはしかし、この一隊にかぎらなかった。労役場のなかは、赤児の泣声がこんぐらがって宵の銭湯のようにごった返していた。同じ境遇のものを見出すことは何時でも人間をなぐさめるのであったが、ここでは古参は新入者をあふれる喜びの眼で迎え、新入者は思いがけぬほどの多勢の百姓仲間がひしめいている有様を見た瞬間に、労役場という冷いかたくるしさがからだの隅々からするするとぬけおちてしまい、ほっと肩の荷を降ろした気持になるのであった。工場では女たちは赤子をおぶって実子細を綯っていたが、母親が日がな一日仕事場から動かないので、顔を真っ赤にしてふんぞり返って泣きわめいた。その度に女たちは胸をはだけて乳房をあてがい、出来るだけ永い時間そうしていたが、労役場入りの悲しみで、母乳があがってしまうなどという女は殆んどなく、来る前から乳が出ないためにそればかりを気に病んで来た女なども貰い乳に差支えるようなことはなかった。赤子は自家に子供等を残して来た女たちにとってただ一つの慰めで、工場から帰って来てから就寝時間まで、乳呑児は女房から女房の手に渡されて引っ張凧になった。

なかでも人気者は、敬治という日雇女の子供で、これはもうとうに誕生すぎていたので、仕事台についている女たちの背中に抱きついたり肩につかまったりして、よちよちあるき廻わった。母親のサキは春に五十円の罰金代りに入って来たが、十日もたたないうちに敬治は高熱を出したので、サキは保釈になって出て行った。田植がすぎてサキが再び入ってきたときには、敬治はものにつかまって立ち上るほどに成長していて、間もなく労役場で誕生を迎えたが、もうサキの留置期間もいくらも残っていないというので、母と子は生木を割かずにすんだ。敬治は一日工場の中を歩き廻わり、みんな同じに見える青法被姿なのでときどき母親を見失ってべそをかいたが、しまいにはサキの仕事台を覚えてしまい、ほら、お母がいなくなったぞとおどかしても平気な顔で間もなくサキの方へ間違いなく帰って行

った。それを見ていると、下腹の次第にせり上って来るお峰は、矢張りそんな風に突きこくられたような飢えた顔つきで、跣足でぴしゃぴしゃ歩き廻わっている下の子の松男が思われ、ぽたぽたと重い涙の玉がこぼれ落ちるのであった。しかし子供は駐在巡査が見て呉れているはずだし、その上隣りの工場には与吉がいると思うと、おさえきれない喜びさえ湧き上って来て、ほら敬坊、と叫びながら藁屑を輪に結えたのを敬治の方に投げてやったりした。

賭博であげられた白粉臭い女も二、三人いたが、それは工場の仕事には向かないので草とりや掃除に廻わされて、工場に働いている四十人近い女はことごとく全県から集って来た濁酒違反であったが、不思議にどの女もお互に旧知の間柄のように思われ、どの顔もどこかで見たことがあるような気がした。

お峰はとりわけ柔和な眼つきの色白な肉づきのいい五十女の顔がどこかで見たような気がして、絶えず眼をひかれていたが、四、五日目になってやっと思い出した。お峰が税務署にわずかの分納金を収めに行ったとき、その女は先に来ていて、来年の春まで執行を延期して貰いたいとくどくど嘆願していたのであったが、矢張り駄目だったのかとお峰は自分のこともわすれて気の毒がった。女はいつまでも間税課の窓口にへばりついて離れないのでその間お峰はぽかんとして待っていたが、その時の話はこうであった。

罰金額百三十円のうち八十円だけはここに、耳をそろえて持って来たから、あとは来年の春まで待って貰いたい。実は田でも馬でも売るものがあれば何でも売るが、そんなものはないので、小学校を出て間もない長女を東京に売った。三百円という約束が周旋屋にごまかされて手に這入ったのは百五十円、あちこち借金の穴を五円、十円と埋めているうちに、これだけしか無くなった。来年の春になれば次女が一人前になるからまた売って残りを納めるからというのであった。亭主に先だたれて女手に四人子供をかかえ一斗のどぶろくを仕込んでいたのを検挙され、よくよくの累犯でない限り滅多にない高額の罰金を課された。旦那さん、それでも足りねばはあ娘はあと三人いるから、なんぼでも売って納めるから何とか春まで待って下されですと、しまいに引きつったような疳高い声で叫んだので、半分居眠りしていた役人たちは、びっくりして卓子から顔をあげたほどであった。鰹節のようにくろぐろと陽に焼けた痩顔の役人は、うん、わかったわかった、んだども、役所というものは俺が仮令どう思っても、四つも五つも判こ入るもんだからなと、あっさり受け流して顔をひっこめた。この窓口にはいつでも、打ちのめされた百姓たちがよろめく態に何人も詰めかけて、首が廻わらない事情をいつはてるとも知れずロ説き立てていたが、お峰が要談しているところへ、今度は頬冠りをした五十男がやって来て、僅か十円の金を差出して執行の猶予を願っていた。その十円というのは、その男の説明するところによると半分は出稼ぎにいっ

ている悴から、他の半分は静岡の工場にいる娘からそれぞれやっと送金して貰った血の出るような金であった。

ところが、ある日還房のどさくさにまぎれて、その女の方からお峰に近づいて来てお前さん、いつか税務署で見た人でねえすか、と声をかけた。おや、やっぱりお前さんであったすかと女は色白な顔に、お峰には思いがけないほどの喜びをあふれさせたが、お前さん、どんなに困っても娘など奉公させるものでねえすと、お峰がききもしないうちから言い出した。東京さやった娘は逃げて来てなんす、芸妓屋だという話であったども、とんでもないとこさ連れて行かれて、そんなとこあ嫌だって逃げて来たす、なんとあきれた娘だすべ、警察の厄介になったりなどしてやっとものとの鞘さ納まったから、俺も娘を奉公に出すことは懲りたす。なんでも、その周旋屋はここさ赤法被着て来ているって話だすと、お峰の耳に口を寄せながらつぶやいた。

その後お峰は度々同じ郡内から来ているこの女と口をきいたが、女はなまじ無理をしてそれ以上延期など願わずに働きに来たことに満足しているらしかった。そればかりか娘が無事に逃げ帰って来たことの感動は、その小太りのからだ一杯にしみこんで、いまだに抜け去らないらしく、十六にもなってまるっきり子供だもんだすな、あぶなく傷物になるところを逃げて来たすものなと、眼尻を下げてお峰と顔を合せる度にくり返した。その後も新しく入って来るもの、一日一円の割で罰金額を稼ぎあげて出てゆくものは毎日二人三人とあったが、ある日猿倉のお母と呼ばれている男のように体のがっちりした恐い顔つきのクラが、眼を泣き腫らして出ていったのがみんなの注意をあつめた。

はじめは女の亭主が気が狂って子供二人を鉈で打ち殺し自分も自殺したということだけしかわからなかったが、そのうちにその猿倉の近くの村から来ている米婆さんの口からその家族の事情がつたえられた。猿倉というところは県境に近い山の中の部落で、耕作地はすくなかったが、その孫司は十五、六年前に自分の生れた赤沢からそこに移住して田畑を開墾し、田地一町二反と畑二反の自作農になったはよかったが、開墾費用その他のその間の借金はその開墾地を売り払っても足りないほどであった。若い時分から酒癖がわるいといわれた孫司は、そうなると一層酒浸りが嵩じて、昭和九年の凶作には折角骨身をくだいた開墾地はあらかた人手に渡ってしまっていた。もう清酒など拝んでも咽喉を通せなくなった孫司は、山の中に埋めた一斗甕からどぶろくを掬み出して、とうからアル中でよいよいになっているからだを泳がせていたが、アル中のたたりだといわれている三男と四男の二人の白痴の子は、学校からも通学を断わられ、いよいよ苦労の種になるばかりであった。

隣村の永善寺に日雇にやとわれている次男の京次は、その夜不吉な夢にうなされ、翌朝親父の身代りに母が労役場に行っているのを思い出すと、以前はよくぶらがら声を張

りあげて冗談をいって人を笑わせていた人柄であったのが、このごろでは酒気のないときは一言ものをいわないし、どぶろくをひっかけると、なんか口のなかでわけのわからないことをぶつぶついいながら無暗に誰彼の見さかいなく突っかかる父親が眼に浮んで来た。それとともに、これはてっきり何かあったに違いないという恐怖が京次の胸にぎりぎりと食いこんで来た。寺の仕事がすむと京次はすぐに家にかけつけたが、まだ宵の口というのに戸を締めた家のなかから微かな呻めき声がきこえて来た。畑向うの隣家の親父に来て貰い提灯をつけて這入って見ると、黒々とした血しぶきのなかに二人の弟は滅茶滅茶に頭を斬られて倒れ、その上に折り重なった親父はこれも咽喉をかき切って虫の息になっていた。

猿倉のお母から見れば俺がたはまだ幸せだなやと女たちは慰め合っていたが、葬式をすまして再びクラがやって来たときには、みんなそのまわりに集ってしみじみと不幸を弔った。一人乳呑児をおぶった若い女房が、おや、またやって来たか、なんと大変であったなす、葬式出して来たかいと、吾が身にふりかかった災難のようにいったが、女らしさのどこにも無いような眉の釣り上った怖い顔つきのクラは、一寸滑稽に見えるほど、他愛なくぼろぼろと涙の玉をこぼしながら、これではあ、田畑も無くしたし、親父も餓鬼もあの世さ行ってしまったから、あと死ぬまで、ここに居ても差支ないのだす、何とかお前がた可哀そうだと思って、俺どこ面倒見てやって呉れせ、頼むしてはあと、髪の毛が薄くって日焼けした地肌の見える頭を下げた。

十月になるとめっきり夜が冷くなり、みんな急に家族のことが心配になり、よく眠られなかった。お峰もあと労役期間はいくらも残っていなかったが、与吉はもうとっくに村に帰っていたので、臨月に間もない体の異常も手伝って、どうかすると急に真っ暗な淵の底に引きずりこまれるように心細くなり、ふと子供等の顔が眼にうかんで来ると、矢も楯もたまらず、ぶるぶるとからだがぶるえ出して来るのであった。そんな夜にはきっと容易ならぬ事件がもち上った。

寒くなるにしたがって、風邪をひいたり、わけのわからぬ熱を出したりする乳呑児があったが、ある夜お峰がふとうなされたように眼をさましたとき、ただならぬ叫び声をきいた。お峰から二、三人向うに寝ていたカネヨという女が、お前がた、助けて呉れ、餓鬼死んとこだ、死んとこだ、と叫びながらむっくり起き上ったのである。こら、ミチヨ、どしたどしたと、引き裂くように叫んで、赤子をゆすっている気が違ったような顔が、にぶい電灯の光りのなかに浮んでいた。その日、工場で働いているときから、医者に子供を診せることを工場受持に訴えていたが、風邪位は何でもないというので取り合われなかった。カネヨは二十八であったが、それでも、ここにいる女たちのなかでは

一番若かった。十七で嫁になってその年まで子供が出来なかったので、孫の顔を見なければ死なれないという婆さんが兎角カネヨを邪慳にしてしばしば離縁話がもち上ったが、一昨年の盆休みに湯治に行って来たのが利いたかどうかしてひょっこり生れたのがその子であった。

この子でも殺して見れ、俺あ追い出されるばかりだとカネヨは幾度もくり返して言い、一夜もまんじりともせず子供の顔をのぞきこんでいたが、そのときになってとうとう痙攣が来たのであった。そばに寝ていた子供のようにからだの小さい婆さんが、カネヨどした、どしたと叫んですぐ起き上ったが、それにつれて二三人の女たちも起き上った。細眼をあけて凝と宙を見ている子供の顔は醤油で煮つめたように赤く小さい手足がかすかにふるえ、ときどき脅えたようにぎくりとからだを縮めた。カネヨは夢中でその子を懐に押し込むように抱き、お前がた、わらし死んとこだ、死んとこだとくり返しながらただ地団太を踏みつづけたが、先刻の婆さんは、家鴨のようにひょこんひょこんと寝ている女たちを跨いで扉に近づき、まだなにも知らずに眠りこけていた女たちがびっくりして眼をさましたほどの大声で、看守さん餓鬼死んとこだから、助けて呉れせであと叫んだ。

やがて看守はやって来たが、肝心の医師はなかなかやって来なかった。ごたごたと道具を積みこんだ土蔵のなかを見るような房のなかに、にぶい暁の光りがしのびこむころになって、やっと医者が来て注射を一本していったが、それはしかし大して効果がないらしかった。すっかり明るくなってから、この母子は保釈になって出ていったが、のちにお峰はその子が間もなく死んでしまったということを聞いた。

こんな事情で保釈になるものは、しかしカネヨにかぎったことではなく、セキという六十婆さんなどは、ここの女たちの言葉にしたがうと腰がぬけて保釈になった。実はもともと中気の気味があったのが、寒くなるにしたがって足腰がたたなくなってしまったのである。窓の外にぽかぽかと小春の日の照っている日中はどうにかからだが動くらしく、一羽鳥のようにみんなのあとから、よちよち工場にもついていったが、しんしんと冷えこんでくる真夜半になると足腰がたたなくなってしまい、その上小便が近くなったらしく、夜半人が寝しずまった時刻に小便が出るといって苦痛をうったえた。看守がぷりぷり怒りながら出て来て、婆さんを抱いていって赤子にしっこをさせるように用便させたが、看守が来ないときはしばしば小便を垂れ流した。これには女たちも参ってしまって、絶えず婆様、お前小便出るでねえかと訊いたが、しかしそれを相手が肯けば、訊いた当人が、婆さんを赤児のように抱きかかえていって小便させなければならなかったので、婆さんが本当にその必要を感じているときには誰もだまっていた。

そこで婆さんは、お前がた、気の毒だども頼むすて、年

寄り可哀そうと思ってなあと、あたり憚らず叫びつづけ、年が若くて人のいいお峰が、大きな腹をもてあつかうような恰好で起き出す結果になるのであった。婆さんは間もなく出されたが、しまいにはお峰だけを頼りにしていたので、なんとお前さばかり心配かけたなあ、お前もわらし生れぬ先に早く出して貰うように頼んで見たらなんとだと、お峰に別れを惜んでいるとき、そばで聴耳を立てていた種田の婆様と呼ばれる盲目のフユ婆さんは、俺は眼見えなくて腰ぬけたよりも悪いけども、俺とこだば出して呉れぬべものなと溜息をもらした。いつも工場から帰って来ると女たちは、婆様お前何もする用ないもの、俺の肩でも揉んで呉れねえかと冗談を言ったが、事実フユ婆さんは、一日一円の割で罰金を稼ぎ出すためにやって来ながら、工場へいってもただ仕事台の前にすわっているだけであった。フユ婆さんは密造を発見されたとき、ただ坐っている分にはどこでも同じことだし、自分の口だけでも減れば家族も助かるだろうというので、違反を一身に引きうけて労役志願をしたのであったが、これから百日近くも可愛い孫たちの声が聴かれないと思うと、首を締められるように辛かった。とうとう、ある朝交代看守の声をききつけて、旦那さ、俺とこも出して下されでや、ただ穀つぶしにお上の飯いただくのも勿体なくてなんす、と言い出したが、たとえ婆さんの罰金額が千円であって、したがって千日労役場にただ寝転んでいるのであっても、尊厳な法律はあくまで婆さんに無駄飯を食わして置いたに違いなかった。

フユ婆さんとかぎらず、男女を通じて半分以上は年寄りで、それも一家の柱とたのむ働手の身代りに来ている年寄りなので、とても一日一円を稼ぎ出すことなどは覚束なかったが、盲目のフユ婆さんでも九十五日目には九十五円の罰金を稼いだものとして、ところてんのように間違いなく娑婆へ押し出されることになるのであった。日にまし寒くなるにしたがって、卒中で倒れる爺さんもあれば、来るときには人一倍丈夫そうに見えながら、突然夜半に喀血して虫の息になってしまった年寄りもあった。

受持看守にとっては、こういうのは病監に押しこむか、間もなく引き取りに来た家族のものに渡してやりさえすればいいのであったが、手数のかかるのは例の中気のセキ婆さんだけではなく、夜明け近くになると七転八倒の苦しみを起す喘息婆さんであった。この婆さんのことはみんな名前をいわず一口に喘息婆さんと呼んでいたが、日中は人一倍元気に働いている婆さんは、夜半になるときっと苦しみ出して、しまいには看守を頓服薬をとりに走らせるのであった。年寄りが多いので、冷い夜気が迫って来るにしたがって、赤子の脅えたような泣声にまじって、ぜいぜいいう咳の響きは次第にやかましくなっていったが、そのなかで一ときわ高い喘息婆さんの咳きこみは、殆んどいつ絶えるともなくつづき、夜明前にはそれが絶頂に達するのであった。腸(はらわた)を引きずり出そうとでもするように際限なくつづ

くその咳に眼をさまされると、きいている方が胸苦しくなって、しまいには起き出してしまったが、もうそのころには力むための充血も去って婆さんの顔は晒木綿のように白っぽくなり、絶間なく込み上げて来る咽喉をえぐるような苦しみで、婆さんのからだはそこいら中を毛虫のようによじれ廻わった。

起き出したものは婆様婆様と呼びつづけながら、骨張った婆さんの背中を男のように厚い掌で叩いたり撫でたりしたが、婆さんは間断のないせきこみの間に、死んとこだ、死んとこだという言葉を無理に押しこみながら、俯伏になったり仰向になったりして転げまわった。ほんとに死ぬでねえべか、と人々は薄闇のなかに不安な額を寄せ集めたが、この苦しみは看守が病監に走って頓服薬をもって来るときまで決してやまないのであった。しかもこれは、夜明前の時刻にきまっていたので、三度も四度も病監に走らされた看守はしまいにすっかり気を腐らして、一ぺんに四五回分の頓服を持って来て婆さんにあてがって置いた程であった。

しかしもっと厄介なことがもちあがった。お峰が夜半にわかに産気づいたからである。それには次のような事件に対する驚愕が手伝っていたかも知れなかった。その日お峰とは梟仲間で顔見知りの隣り村のリエが送りこまれて来たが、リエは与吉が労役場を出て間もなく殺人の嫌疑でひっぱられたことを知らせた。しかも殺されたのは与吉の義父の作左衛門であった。その日与吉をたずねた作左衛門は、与吉が山から掬んで来たどぶろくを飲むと間もなく苦悶しはじめその日のうちに死んでしまったが、当の与吉は一滴もそのどぶろくを口にしなかったとあっては、自分が労役場に送られるとき子供をあずかっても呉れず、菊代が首をくくるほど窮迫しているのにも何の助力もして呉れなかった義父の無情をうらみ、女房に死なれ男手に子供をかかえての自棄も手伝って、どぶろくにかぶと菊を投げ入れて毒殺したものとして与吉が嫌疑をうけたのもやむを得なかった。

あとでわかったのであるが、その日作左衛門は、死んだ菊代を弔いかたがた、まだ与吉には話してなかった菊代が親方（地主）のところから米を盗もうとした事件について、それが親方の耳に這入った結果、忘恩の行為として小作をとりあげかねまじく怒っていること、それについて何とか親方に謝罪することをすすめにやって来たのであったが、そのとき与吉は義父をもてなすために、山へいってどぶろくを掬み出して来た。一寸手足洗って来るから、先に一杯やっていて呉れせと、与吉は戸棚から味噌漬の皿と茶呑茶碗をとり出して来て徳利に添えて置いて、裏の小川の方へ出ていった。

戻って来るまでにかなりの時間があったというのは、一たん手を洗って戻って来る途中、まだそこまで手が廻わらず草がのびている西瓜畑の方に廻わったからであった。し

ばらくして戻って来ると、作左衛門は腹に手をあてて仰向けにひっくり返っていた。爺様どした爺様、と与吉は叫んだが、作左衛門はうん腹痛めるどもすぐなおるべと言い、なんでもないように起きあがったが、またすぐ横倒れになって苦しみはじめた。作左衛門には胃弱の持病があったので、いつもの腹痛み位に考えたのも無理ではなかった。もし与吉がすぐ戻って来ていたら、酒飲みの与吉のことだから同じ運命におちていたに違いなかったが、そのとき与吉の頭に浮かんで来たのは、かぶと菊の根をしぼった毒汁をどぶろくに入れて毒殺したという数年前に起ったある事件の記憶であった。やがて与吉は仏壇から富山の薬袋をとり出して来て熊の胃をのませて見たが、それは何のききめもなかった。しまいには呻き声さえ微かになり、血の気のなくなった額に冷汗が浮かび、眼が恐ろしく据って来ていた。兎も角与吉はしまいに、作左衛門を家まで背負っていったが、その夜のうちに事切れてしまった。そのとき作左衛門が飲んだどぶろくを鑑定した結果は、やっぱり多量のかぶと菊の毒液が混入していることが判明した。

これを聞いたとき、肩で息をしながら連日の労働のつかれで参っていたお峰は、眼の先が真暗になって、ふらふらとそこに這いつくばってしまいそうになったが、夕方になると急に腹が痛み出した。お産には馴れているお峰は歯を食いしばって呻めき声を呑みこんでいたが、若しやとあやぶんでいた出産が、二タ月も早く事実として目の前に迫って来たことを知ると流石にあわて出した。夜が更けるにしたがって、お峰はもう唸り声を漏らさないわけにはゆかなかった。それと知って女たちはみんな眼をさまし、近くのものは心配顔を寄せ集めた。腰が曲った婆さんが長い首を突き出して、お前、早く出して貰って家さ帰った方ええや、取り上げ婆だば俺なんぼしてやるども、出て来る子あ畳の上で生れねば可哀そうだものな、といってまるで自分の孫の一大事のようにあわてて、その辺をまごまご歩き廻わり、犬が人垣の間から首を出すように、今度は向うの側の女たちの間からきょろきょろした眼つきでのぞき込んだ。お峰はしかし、恐ろしい痛みのなかにすぐにぼっと眼の先がかすんでしまうのであった。やがて、三人の看守が眼の前に立っているのをぼんやり認めた。その一人をつかまえて先刻の婆さんが、早く湯沸かしてくれ、俺が取り上げてやるからと、しつこくくり返ししていた。ここでは子供が生れるなどという事件ははじめてであったので、看守たちはすっかりまごついてしまい、看守長が大急ぎでやって来たり、看守が所長のところへかけつけたりごった返した末に、お峰は間もなく市立病院の産院に自動車で運ばれた。

村の街道を走る乗合の外は自動車というものがはじめてであるお峰の眼に、婆婆の灯火は灯籠流しのように美しくちろちろと流れ、やがてお峰はこんな結構なところはないと思われるほど電灯に明るくかがやいた広い部屋の眼が痛

くなるほど白いベッドの上に横たわっている自分に気がついた。陣痛はいよいよはげしくなり、お峰が再びあたりの光景に気がついたときには、握り拳位の赤子が自分の頭のわきに置かれていた。赤子は小田原提灯のように細長い顔に横皺を一杯にため、張りさけるように口をあけて、からだ全体で泣いていた。その泣声はお峰の耳には小さく小さく遠いところから聞えて来るような気がしたが、生れたのだ、こんなにもかも結構ずくめの明るいところで子供は無事に生れたのだと思うと、喜びは堰を切った田の水のように溢れ、温い涙がこそばゆく眼尻をつたい落ちた。

お峰はこの産院に十日近くいたが、刑務所ではそのためにお峰が九十日間労役場で稼いだ分をすっかり吐き出してもまだ足りなかった。罰金を稼がせるために、手足の利かない年寄りや病人などを収容しても算盤に合うはずがなかったが、お峰の場合などはその最もいい例であった。お上に対して申訳ないとお峰は心に呟いたが、三日目になっても四日目になっても、誰もお峰に対して出て行けとはいわないし、看護婦はきまった時間にそっとお峰の手首をとりあげるのであった。室のはずれの方のベッドに逆子で苦しんでいる若い女がいて、伯母さんらしい女が米を研ぐように一生懸命に腹を揉んでいるのが眼についたが、ほかはみんな産んでしまったあとで、この世に生れ出たばかりの赤児たちは一人が泣きはじめると、われもわれもと揃って自分の新なる生存力を力一杯朗らかに叫びあげた。

枕を並べている自分の子をしずかに頭をうごかして横目で見守っている一人一人の女たちの血の気のない顔には、しかし新しい生命を生み出したしずかな深い喜びがたたえられ、それが室の空気を満ちあふれたものにしていた。田舎の小都会の病院で出産をするものは、大地主とか役人とか金貸兼業の商家の女に限っていたが、出産という女としての使命の重大さはここにいるだけの女の水準を同じ高さに押し上げていたので、お峰は別段ひけ目を感じないで済んだが、お峰が看守につき添われて来たということが、女たちのさげすむような視線を集めた上に、自分を貧乏な女たちの上に、少しでも高く置いて安価な満足に酔いたい奥さんたちの間に、あれは万引女に違いないとか、いや百姓女だから米でも盗んだのだろうとか、いろんなひそひそ話を生み出して彼女たちの退屈をまぎらわせた。それればかりではなく、自分の子にくらべて少しでも眼鼻立ちのわるいところを、他人の子に見つけ出して自らなぐさめようとあせっている女たちは、お峰の子が二目と見られない片輪であるか、それとも顔をそむけるほどみっともない子であることを秘かに期待しながら焼きつくような興味で、通りがかりには、忘れずにのぞき込み、わざわざ用もないのに傍を通ってぬすみ見するのであったが、残念ながらお峰の子は一廻わり小さいというだけで、尻尾も生えていなければ三ツ口でもなかったばかりか、与吉に似て眼鼻たちが至ってはっきりしていた。眼も眉もつり上っているところが男

顔で、女の子らしい優しさがないのが気になったが、それもがっしりと線の太い顔つきの与吉に似ているためであった。

お峰はなおも与吉の特徴を見つけ出そうとして一心に吾が子の顔を見守っていたが、ふと眼をあげたとき、あっと心に叫んで嘘ではないかと眼をしばたたいた。入口の衝立のかげから与吉が顔を出して、きょろきょろ室内を見廻わしているのに気がついたからであった。からだを起したお峰に気がついて、与吉は真直ぐにベッドの間を進んで来たが、丈夫な子だが、どれ、と言って、大きな角額を赤子の方につき出した。お前また、どうしてここへ来たかいとお峰は、つき上げて来る感動を無理矢理に胸の底におしこんで静かに言い、その調子に例の事件に対する疑惑をふくませたが、与吉はただ一言、なあにお前、もんだの爺俺さ毒盛ったのだ、俺あ今警察から放免されて来たとこだと言って、だだっ広い掌の上に皺っこでも摘み上げるようにひょいと赤児をとり上げた。言うまでもなく、お峰に対する執着から気が変になった六兵衛は、与吉のどぶろく甕のなかにかぶと菊の毒汁を投入して与吉を無きものにしようとした結果は、縁もゆかりもない作左衛門を殺してしまったのであった。ほんとが、よかったなお前と、お峰は喜びにうつろな眼つきで暫くぼんやりしていたが、やがて肩がせり上って来て、少女のように他愛なく泣きはじめると、いつまでも顔をあげなかった。それにつれて赤児も顔一杯皺だらけにして朗らかな泣声をあげはじめたので、与吉は雷でも落ちて来たようにびっくりした顔つきで、二つの掌のなかで赤子を揺りうごかしながら、もんだの爺、今頃監獄にいるべよ、俺もあぶないところで命拾いした、お前も産後大丈夫だべなと言った。うん、なんともないとお峰は起き上ったが、喜びにかがやいた眼をきょろつかせ、そわそわと落ちつかない様子で、もうそこを出て行く身仕度をはじめていた。

（一九三七年七月）

光の中に

金史良

一

私の語ろうとする山田春雄は実に不思議な子供であった。彼は他の子供たちの仲間にはいろうとはしないで、いつもその傍を臆病そうにうろつき廻っていた。始終いじめられているが、自分でも陰では女の子や小さな子供たちを邪魔してみる。又誰かが転んだりすれば待ち構えたようにやんやと騒ぎ立てた。彼は愛しようともしないし又愛されることもなかった。見るから薄髪の方で耳が大きく、目が心持ち白味がかって少々気味が悪い。そして彼はこの界隈のどの子供よりも、身装がよごれていて、もう秋も深いというのにまだ灰色のぼろぼろになった霜降りをつけていた。そのためかも知れないが、彼のまなざしは一層陰欝で懐疑的に見える。だが妙なことに彼は自分の居所を決して教えようとはしなかった。私は大学からS協会への帰りみちなど、押上駅の前で二三回彼に遇ったことがある。彼の歩いて来る方向からすれば、どうやら彼は駅裏の沼地あたりに住んでいるようだった。それでいつか私はこう質ねたものである。

「駅の裏に住んでいるの？」

すると慌てて頭をふった。

「違うやい。僕の家は協会のすぐ傍だよ」

勿論途方もない嘘である。彼は学校からの帰りに、わざわざここへ遠回りして遊びに来ると、夜の部がひけるまでは決して帰ろうとはしなかった。聞けば婆やの部屋で飯を貰って食べたことも一度ならずあったようである。私ははじめそんなに彼に注意を向けてはいなかった。だが或る晩彼が薄暗い婆やの部屋で飯をかき込んでいる様を見た時は、はっと驚いて立ち止ったのである。「へんだな」と私は自分に云った。だが私はどういう意味でそう云ったのかはっきりはしなかった。そしてもう一度「へんだな」と呟いた。その恰好がどうも私には曰くがありそうでなかなか思い出せなかった。ちぢかんだ丸背にしろ、顔にしろ、口の恰好にしろ、箸の使いわけまでも。しまいには私が息苦しくなって黙ったまま彼の傍を離れて行った。だがその後というもの、私は彼のことをあまり気にしなくなった。その中に彼と私の間にはまことに奇妙な事件が一つ起ったのである。——

その頃、私はこのS大学協会のレジデント（寄宿人）だ

った。ただ私の仕事といえば、そこの市民教育部で夜の二時間程英語を教えていればよかった。それでも場所が江東近くの工場街で、習いに来る人々が勤労者であるだけに、二時間の授業といっても骨が折れた。昼間へとへとに仕事で疲れている彼等であってみれば、余程こちらが緊張してかからない限り、みなはうつらうつらまどろんでしまうからである。

夜の部で元気なのはやはり子供部である。私たちの教室のすぐ下がその教場になっていて、いつもわあっと彼等の騒ぎ立てる音が聞えて来た。私の生徒たちはその音に驚いて腰を掛けなおすといった工合である。古いピアノがきんきん鳴り始めると、子供達は一斉に「われらはすこやかに、いざ育とう」という歌を屋根でも飛んでしまいそうな元気な勢で張り上げた。

（もう時間だな）と思うが早いか、今度は豆でも挽き立てるような騒ぎが湧き上る。子供たちは階段をわれ先にと駆け上って来るのだ。授業を終えて教室を出ようとした私は、すぐに子供たちにつかまって、まるで鳩飼いじいさんのようになるのだった。甲は肩にのり、乙は腕にすがりつき、丙はしきりに私の前を小躍りしながらはね上る。幾人かは私の洋服や手を引張り、或は後から声を立てて押しやって私の部屋まで来る。そこで戸を開けようとすると、もはや先からはいって待ち伏せていた子供たちが、一生懸命になって開けさせまいとしている。こちらでも子供たちが蟻のようにたかってしきりに開けようとする。こういう時にきまって山田春雄ははたから邪魔をするのだった。

「ほっときなよ。ほっときなよ。あーあーあー」

と叫びながら、私の鼻先の前で気味よさそうにひょうきんな踊りをしてみせた。とうとうこちらが凱歌を上げてなだれ込んで行くと、室内では先から待ち構えていた六七人の少女がきゃあきゃあしながら悦び立てた。

「南先生！ 南先生！」

「あたいも抱っこして」

「あたいも」

「あたいも」

そう云えば私はこの教会の中では、いつの間にか南先生で通っていた。私の苗字は御存じのように南と読むべきであるが、いろいろな理由で日本名風に呼ばれていた。私の同僚たちが先ずそういう風に私を呼んでくれた。私ははじめはそんな呼び方が非常に気にかかった。だが後から私はやはりこういう無邪気な子供たちと遊ぶためには、却ってその方がいいかも知れないと考えた。それ故に私は偽善をはる訳でもなく又卑屈である所以でもないと自分に何度も云い聞かせた。そして云うまでもなくこの子供部の中に朝鮮の子供でもいたならば、私は強いてでも自分を南と呼ぶように主張したであろうと自ら弁明もしていた。それは朝鮮の子供にも又日本の子供にも感情的に悪い影響を与えるに違いないからだと。

ところが、或る晩のこと子供たちと騒いでいる所へ、私の生徒の一人が真蒼にひきつったような顔をしてはいって来た。それは自動車の助手をしながら夜になると英語や数学を習いに来る李という元気な若者であった。彼は戸を閉めると挑みかかるような調子で私の前に立ちはだかった。
「先生」それは朝鮮語だった。
私ははっと思った。子供たちもどういう意味かは知らないが、何か嶮しい空気にけおされて、彼と私の顔をかわるがわる見守っていた。
「さあ、又後で遊ぶんだ。これから先生は用事があるんだから」と私は落着きをつくろいながら口元に微笑みさえ浮べた。
子供たちはすごすごと出て行った。だが山田春雄のまなざしばかりは異様な光を点して、さぐるようにじっと私を見つめていた。私は今だにその薄光りしていた目を忘れることは出来ない。彼は蟹のように横歩きで方々へぶち当りながらぬけ出るのだった。
「まあお掛けなさい」私は二人きりになった時静かに朝鮮語で話しかけた。「ついお互い話し合うような機会もありませんでしたね」
「そうです」李は立ったまま叫んだ。「私は実際あなたにどちらの言葉で話しかけていいか分りませんでした」彼の言葉の中には若者らしい憤りがのたうっていた。
「勿論私は朝鮮人です」という自分の答は心なしかいささかふるえを帯びていた。恐らく彼に対しては少くとも苗字のことが気にかかっていたのであろう。或は平気な気持でいられなかったのも、その点自分の身の中に卑屈なものをつけていた証拠に違いなかった。そこで私は寧ろ少しばかりうろたえながら、こう質ねてしまった。「何かお気にさわるようなことでもあったでしょうか」
「あります」彼は昂然と言った。「どうして先生のような人でさえ苗字を隠そうとするのです」
私は咄嗟で言葉につまった。
「まあ落着いて坐ろうじゃありませんか」
「どうしてか、私はそれが訊きたいのです。私は先生の眼や顴骨や眼鼻立から、きっと朝鮮人であるのに違いないと思いました。だがあなたはそんな素振り一つしなかったようです。私は自動車の助手をしています。寧ろ私のような職場の人々に苗字のことでいろいろ気拙いことが多い筈です。だが」彼は波打つ激情の余り吃り出した。どうして彼はこんなにまで興奮しているのであろうか。「だが私はそんな必要を認めないのです。私はひがみたくもなければ、又卑屈な真似もしたくないのです」
「全くです」私はかすかに呻くように云った。「私も君の云うことと同感です。だが私としては子供達と愉快にやってゆきたかっただけのことです」廊下では相も変らず先の子供たちが騒ぎ合いながら、時々戸を開けては洟たれ顔で覗いたり、目をつぶって舌を出してみせたりした。「例え

ば私が朝鮮の人だとすれば、あゝいう子供たちの私に対する気持の中には、愛情というものの外に悪い意味での好奇心といっていいか、とにかく一種別なものが先に立って来ると思うのです。それは先生として先ず淋しいことです。いや寧ろ怖ろしいことに違いない。だからと云って私は自分が朝鮮人だということを隠そうとするのではない。ただ皆さんがそういう風に私を呼んでくれた。又私もそうことさらに自分は朝鮮人だとしゃべり廻る必要も認めなかっただけなんです。だが君にそういう印象を少しでも与えたならば、私は何とも弁解のしようもないのです……」

と云った時、戸を開けて覗き込んでいた子供の中、突然大きな声で喚いたものがある。

「そうれ、先生は朝鮮人だぞう！」

山田春雄だった。瞬間廊下はしんとなった。私も一寸ばかり面喰わずにはいられなかった。そこで努めて気を落着けるようにこう云った。

「いずれ又会ってゆっくり話しましょう」

李はわなわな手をふるわせながら出て行った。山田をはじめ二三の子供たちが逃げ出すようだった。私は呆然と立ち尽していた。一瞬間電光のように俺こそ偽善者ではないかという考えが閃いたのである。階下の方ではがんがんと鐘の音が聞えていた。子供たちは騒ぎたてながら雲のように下りて行く、その音が恰かも遠い所からのように響いて来た。すると戸がそっと開いて 忍び足でやって 来た 山田が、背をちぢかめて隙間から部屋の中を覗き込むのだった。それから、

「やい朝鮮人！」と云って舌をぺろりと出して見せると、追われるように再び逃げて行った。

これ以来、益々山田春雄は意地悪くなって私につきまとって来た。私が彼に一層の注意をむけるようになったのはそれ以後のことである。

成程そう考えてみれば、ずっと以前から彼は私を疑りの目で監視しながらつきまとっていたようであった。時々私が言葉尻などにひっかかって舌が廻らないような場合にもよくそれを真似て 殊更にわらい立て たりするのは 彼だった。彼は最初から私を朝鮮出身だとにらんでいたのに違いない。でありながらも彼はいつも私につきまとい、私の部屋に来てはよくいたずらをした。それというのも彼は一種の愛情に似たものを私に対して感じていたためであろうか。ところがそのこと以来は、私を極度に敬遠しているとみえ、なかなか近寄っては来ないで、私のぐるりを一層うろうろとつきまとうだけだった。今に私がへまでもしたら一隅で意地悪く悦び立てようと身構えでもしているように。だが私は恐らく誰よりも愛情深い態度でいつも彼に臨んだ。私はむしろ彼を宥したかったのである。そして出来るだけ彼を研究し徐々に指導して行こうと決心した。私は先ずこういう風に考えたのだった。貧しい彼の一家は今まで朝鮮に移住生活を続けていた。その時に彼も外地へ渡っ

た一般の子供のようにつむじ曲りの優越感を持たされて帰ったのであろう。だが私は或る日とうとう見兼ねて真赤に怒ってしまった。その時も私は教場に下りて子供達と遊んでいたが、二三度私の方をわざとらしく気遣ってから、急に何でもないことに怒って、傍の小さな娘の子を実に残忍な程までに腕をふり廻して打ったのである。女の子は泣きながら逃げていった。彼は逃げて行くのを追いかけながら、

「朝鮮人ザバレ、ザバレ――」と喚き立てた。

ザバレと云うのは捕えろという意味の朝鮮語で、朝鮮移住の日本人がよく使う言葉だった。勿論娘の子は朝鮮人ではない。私に対して見よがしに言ってみるのであろう。私は飛んで行って山田の襟首をつかまえると、前後見さかいなしに頬打ちを喰わした。

「何んということをする奴だ！」

山田は声をひそめて何も云わなかった。ただそれは木偶のように私のするがままになっていた。泣きもしなかった。そして荒々しい息づかいをしながら、下の方からじっと私の顔を見上げた。殊更に目が白かった。子供達は私の廻りを囲んでつばを呑んでいる。彼の目にはふと一粒の涙がにじみ出したように見えた。だが彼はしずかに涙をおしこらえたような声で叫んだのである。

「朝鮮人の莫迦！」

二

元来S協会は帝大学生が中心となっている一つの隣保事業の団体でそこには托児部や子供部をはじめとして市民教育部、購買組合、無料医療部等もあって、この貧民地帯では親しみ深い存在となっていた。赤ちゃんや、子供のためには勿論、日常の細々した生活にまで、それはもう切りはなされないような緊密な連りをもっていた。そしてここへ通う子供達の母の間には「母の会」もあって、お互いに精神的な交渉や親睦を計るために、彼女たちは月二三度ずつ集まるのだった。だが今までついぞ一度も山田春雄の母は顔を出したことがなかった。自分の子供が夜遅くまでここへ来て遊んでいることを知っていようものなら、たとい他の母親たちのように関係大学生への温い感謝の念からではないにしろ、時には親として自分の子供に対する心配からでもやって来ようというものではないか。――私はこの異常な子供に関心を持つとともに、こういう彼の家庭からして知らねばならないと考えたのである。

間もなく週末の三日続きの休みを利用して、子供達がどこかの高原へキャンプ生活に出掛けるようになった時、私は山田を自分の部屋に呼んで来た。山田は今までこんな機会にはいつも参加出来なかったことを私は知っている。

「どうだね、君も行くかい」

少年は頑なに黙っていた。彼はこういう場合はこちらがどんなにやさしく持ちかけてもいつも疑り深くなるのだっ

た。
「今度は君も行こうね」
「……」
「どうしたんだね、君もお母さんを連れて来たらいいよ、父ちゃんでも構わない、どなたか父兄の方が来て承諾すればいいことになっているからね」
「……」
「連れて来る気かい」
山田は首を振った。
「じゃ行かないの？」
「……」
「費用は先生が出してやる」
彼は空々しい目で私を見上げた。
「そうしようね」
「……」
「そんなら君のうちに先生が一緒に行って話してやろうか」
「でも三日もとまって来るんだから、父ちゃんや母ちゃんの許しを受けないわけにはゆかないだろう？」
彼は慌てたように又首を振った。
「先生も山に行くの？」その時になってやっと少年はずるそうに訊ねた。「行かない？」
「うん、先生は駄目だ、今度は留守番をすることになったんだ」

「じゃ僕も行かないや」
彼はひそやかな微笑を脣の上に浮べた。
「どうしてだね？」
すると彼はいーと歯をむいて白痴のように顎を突き出してみせた。
こういう風にして私はかねがね彼の家を一度訪問してみようと思いながら、とうとう果すことが出来なかった。彼はどうしたのかその隙を与えてくれないのである。
いよいよ土曜日が来てS協会子供部の百余名は悦びざわめきながら上野駅へ列をなして出掛けたが、やはりその時間になるまで山田は見えなかった。だが後から屋上に用を思い出して上って行った私は驚いてしまった。物干台の柱にもたれて山田春雄が遠く並んで行く子供たちの行列をじっと眺めている。私は何とはなしに目頭が熱くなるのを感じた。物音に気附いて振り向いた彼はひどくまごついたようである。私は強いて笑いを作りながら彼の肩を後からそっと抱いてやった。
「そうら、あすこにアドバルンが上っているだろう」
「うん」彼は消え入りそうな声で云った。煤けた煙突や黒黒した建物を越えて遠くの上野公園あたりに、二つ三つそれが尾をひいて浮んでいる。私はふと彼を温くいたわってやりたいような気持になった。
「なあ春雄、これから先生は暇だから一緒に上野へでも行こうかい」

少年は見上げながらにっと笑った。
「じゃ行こう。先生は学校にも用事があるから丁度いい」
学校に用事があると云ったのは勿論嘘だった。そんなにも心にもないことを云う程、私は内心山田をはばかって遠慮しているのだろうか。
「へえ」彼は目をみはた。「先生も帝大なの？」彼はほんとに驚いたのに違いなかった。
「朝鮮人も入れてくれるかい？」
「そりゃ誰だって入れてくれるさ、試験さえうかれば……」
「嘘云ってらい。僕の学校の先生はちゃんと云ったんだぞ、この朝鮮人しょうがねえ、小学校へ入れてくれたのも有難いと思えって」
「ほう、そんなことを云う先生もいるのかい、それで生徒は泣いたのかい」
「うん泣くもんか、泣きゃしねえよ」
「そうか、何という子供だい。一度先生の所へ連れて来てごらん」
「いやだい」彼はせき込んだ。「いないんだよ、いないんだよ」
「おかしなことを云うね」
「誰にも云わないんだよ、云わないんだよ」
彼はむきになって取り消した。全くへんな子供だなぁと思った。丁度それと殆んど同じ瞬間だった。もしや彼がその朝鮮の子供ではないかという考えが不意に浮んで来たのは。私は驚いたように彼の顔をじっと見つめた。彼は顔をこわばらせ警戒するように後ずさりした。そして急に一目散に階段をかけ下りながら叫ぶのだった。
「うん、僕、帽子をかぶって来るよ」
私は静かに首をふりながら階段を下りて行った。
だが私は玄関口から近い階段まで下りかけた時に、下の方で並々ならぬことがもち上っているのを知った。息をひそめてもみ合いながら、医療部の医師や看護婦や購買組合の男たちが、玄関口に横着けにされた自動車から一人のみすぼらしい恰好をした婦を運び込んでいる。その後から助手の李がひどく興奮しているとみえ、肩で呼吸をきらしながらはいって来るのが見えた。婦の頭は血まみれになって後へぐんなりと垂れている。春雄がその傍をぶるぶるふるえながら二三歩ついて来たが、私を見附けるとぎょっとして立ち竦んだ。私はすぐに李の方へ近附いて行って、心配そうにどうしたことだと質ねた。すると彼は歯ぎしりしながら叫んだ。
「亭主に刃物で頭をやられたんです」医療部の戸口でがやがやしていた人々は皆驚いて彼の方へ振り向いた。
「あの婦は朝鮮の人です。亭主は日本人の、これはひどい悪党なんだ」それからハンカチで首筋をふこうとしたとたんに、傍の方でうろたえている山田春雄を見附けると、彼は恐ろしい勢で少年の方へ飛びかかった。

「丁度こいつだ。こいつのおやじなんだ」彼は山田の手首をねじ曲げながら恰も犯人でも挙げたように「こいつの、こいつの」と口に泡をふくんで叫ぶのだった。その声はもはや興奮のあまり泣声にかわっていた。

山田はひどく苦しそうに悲鳴を上げながら、

「違うんだよ、違うよ」と喚いた。「朝鮮人なんか僕の母じゃないよ、違うんだよ、違うんだよ」

男達が中にはいってようやく二人をひき放した。私は殆んど茫然としていたのである。李君はいきり立って再び襲いかかり山田の背中を勢にまかせて蹴りつけたので、春雄はよろめきながら私の方へ抱きついて来た。そしてわーっと泣き出した。

「僕は朝鮮人でないよ、僕は、朝鮮人でないんだよう!、なあ先生」

私は彼の体をしっかりと抱いてやった。私の目頭には熱いものがじーんとこみ上げて来るのを感じた。あの李のやけのような取り乱し方にしろ、又この少年のいたましい叫び声にしろ、私はどちらも責められないような気持だった。その場へぐったりとして倒れそうであった。婆やが一まず山田を連れ出したので、やっとその場の収拾がついたようなものである。李君は激しく罵るように皆の前で云った。

「あいつのおやじは博徒の人でなしなんだ。つい先日監獄から帰って来たんだ。その間あの気の毒な婦は飲まず食わずにどんなに苦しんだが知れないや。その間中僕のうちへ近処でなつかしいもんだから、やって来ては御飯を貰って行ったんだ。だのにあの悪党野郎は監獄から出ると僕の所へ自分の嬶がゆききをしていたというので、ひどいやきを入れちゃったんだ。助かりゃしねえ、もう助かりゃしねえんだ」

彼はひーんと洟をかんだ。医療室から出て来て静かにしてくれるように云った。私は李を少しばかり離れた所へ連れて行きながら質ねた。

「君は山田春雄の家を知っているんですね」

「知っているもいないもないです」彼は忌々しそうに云った。「奴も駅裏の沼地に住んでいるんです」

「そうですか、随分ひどいもんだね。どうして君の家へゆききしたというのでいじめたのでしょう?」

彼は歯を食いしばった。

「そ、それは僕のお袋が朝鮮服を着ているからなんです。それで朝鮮人のところへ行くなってんです。へん、ふざけてらあ、莫迦野郎奴が、あの前科者奴は何だと思うんです。たかがあいのこじゃねえか」そして目の前に相手をおいたとでも云うように叫び声を上げた。

「野郎、覚えておくがええぞ、一度でも出会したなら、貴様の首ねっこはもうねえと思うんだぞ、やい、この半兵衛野郎!」

「え、半兵衛?」私は驚いて問い返した。

「そうです」彼は息を切らしながら云った。「ひどい悪党です、残忍な奴なんです、へん、だがな、今度こそ僕が承知しねえからな、野郎！ 媽の殺人罪をきせてやるからな」

「半兵衛」私は再び呟いてみた。どう考えてもそれは確かに私には耳なれの名前である。

「半兵衛、半兵衛」私は何度も口ずさんでみたが記憶の中を空廻りするだけでどうしても思い起せなかった。

その時に医師の矢部君が出て来たので、私たちは彼の方へ駆け寄って経過をきいた。彼の話では生命には別条もないだろうが、何しろひどい刺傷でどうしても一ヵ月の入院治療は要するから、今に意識を返すのを待って、どこかほかの病院へ移さねばならないとのことだった。李はその話を聞くと真蒼になって声をふるわせ、亭主が何しろ半兵衛で鐚銭一文持たないごろつきであるから、入院などとても覚束ない。助けると思ってここに治るまで寝かせてくれとすがり附いて頼んだ。

「先生、お願いです、僕の方でお粥だのそんなのは持ちますから、先生……」

だが実際のところここは医療部といっても、有志医学士が二、三人昼間やって来て簡易治療にたずさわるという程度で、重傷患者を入院させるという程の所ではなかった。それで矢部君も暗然として首をひねりながら、私にどうしたものだろうと訊ねるのだった。私はすぐ近所の相生病院の尹医師を思い出したので、その方へ電話でお願いすることにした。それは貧民救済医院といったもので、資金が朝鮮の労働者たちのか細い懐から出ているだけに、朝鮮人にはいろいろの特典があった。丁度空いているベッドがあったために工合よく話がまとまった。それで再び彼女は担ぎ出された。もはや頭や顔には白い繃帯が何重にも厚ぼたく巻かれていた。それは丁度羽根のとれたとんぼのようにみじめだった。彼女は私たちに護られながら小路をぬけた所にある古ぼけた相生病院に運ばれた。手術台にのせられた時にもほんの少ししか意識がないようだった。彼女は二言三言呻いたようだったが、はっきりと聞きとることが出来なかった。体の小さい、弱々しそうな女だった。指先は蠟のように真蒼で血の気も通っていないようだった。その傍で尹医師は矢部君の話に耳を傾けながら、いろいろな医具の準備をととのえていた。私は彼等が再び彼女の繃帯をほどこうとするのを見て静かにその部屋から出て来た。

外はだんだん険しい空模様になっていた。風が出て来た。藤棚の葉っぱが激しく揺れていた。

病院には半兵衛も春雄も現れなかった。

三

日の暮れる頃はもうどしゃ降りになっていた。ますます風もひどくなり、雨は桶を流したような勢で降り出した。

窓ががたがたふるえ電灯が明滅していた。子供は一人も来ていなかった。ただ二階で数学の授業がひっそりと行われているだけだった。

私は食堂の方で二、三の同僚たちや婆やと山へ行った子供部のことを心配し合っていた。だが私の脳裡には先程起った事件のショックがやきついてどうしても離れなかった。と云っても私はその事をどうしたのかまともに考えてみようとはしないのだった。私自身その怖ろしさにけおされていたのかも知れない。私はただ目を蔽いたかった。

その時に凄じい風が吹き附けて唸りを上げ、どーんと勝手口の扉が吹き飛ぶような音が無気味に響いた。一同はびくっとして息を殺した。近寄って行った婆やはあっと悲鳴を上げてたじろいだ。駆けて行って見れば、扉は倒れ雨と颪の中に山田春雄が竦然として立っていた。折も折、稲光りがぴかぴか光ってそれは幽霊のようにおののいて見えた。

「どうしたんだ、春雄」私は彼を抱え込んではいって来た。そしてそのまま二階の自分の部屋へ上って行った。何とも云えない気持だった。ずぶ濡れになった着物を脱がし、タオルで体をふいて寝床へ横にさせた。彼の体はわなわなふるえていた。熱いお茶をやると何杯もがぶがぶ飲んだ。そこで漸く元気を取り戻して、悲しそうに私を見上げるのだった。私は何となく胸の中も打ち解けるような、ほかほか温いしんみりとしたものを感じた。この少年は又どんなことがあって、こういう嵐の夜中をやって来たのであろう。

「病院へ行って来たのかい？」

彼は口をひくひくさせたかと思うと急にいーと引張るように泣き出した。

「莫迦だな、泣いたりして」

「違うんだよ。病院へ行きやしないよ。行きゃしないよう」

「まあ、いいよ」私の声はかすれていた。「まあいいんだよ」

「うん」

彼はすぐに安心したように肯いた。そこでぽかぽか暖かそうに蒲団の中に足をのばして首をすぼめて見せた。私にはそれがこよなくいじらしいものに見えた。彼の目はきらめき、口元はにっこりと微笑を浮べたのである。すっかり私に心を許したというものであろう。私は彼の心の世界にもこういう美しいものがひそんでいるに違いないと考えた。本能的な母親に対する愛情にしろ、どうしてこの少年にだけ欠けていると考えていいのだろうか。それはただ歪められたのに過ぎないのだ。私は近所の人々からいためつけられ擯斥されている一人の同族の婦を想像した。そして日本人の血と朝鮮人の血を享けた一人の少年の中における、調和されない二元的なものの分裂の悲劇を考えた。「父のもの」に対する無条件的な献身と「母のもの」に対する盲目的な背拒、その二つがいつも相剋しているのであ

ろう。殊に身を貧苦の巷に埋めている彼であって見れば、素直に母の愛情の世界へひたり込むことをさし止められたのに違いない。彼はおおっぴらに母に抱き附くことが出来ない。だが「母のもの」に対する盲目的な背拒においても、やはり母に対する温い息吹はひしめいていたのであろう。彼が朝鮮人を見れば殆んど衝動的に大きな声で朝鮮人朝鮮人と云わずにはおれなかった気持を、私はおぼろながらに理解出来ないでもない。だが彼は私を見た最初の瞬間から朝鮮人ではあるまいかと疑いの念を抱きながらも、終始私につきまとっていたではないか。それは確かに私への愛情であろう。「母のもの」に対する無意識ながらの懐かしさであろう。そしてそれは私を通しての母への愛の一つの歪められた表現に違いない。その実彼は母の病院へ訪ねて行くかわりに私の所へやって来たのかも知れないのだ。母を訪ねる気持と何が違うのであろう。こう考えて来ると私はたとえようもない悲しい気持になって、彼のいが栗頭を撫でてやりながら、強いて笑顔をつくり、

「母ちゃんの病院へ行こうかい？」と質ねてみた。

彼は悲しそうに首を振った。

「どうして？」

彼は答えなかった。

だんだん嵐もしずまりかけたのであろう。小雨が時々思い出したように軒をふりたたいている。私は窓を開けてそろそろ晴れ渡りそうな空を眺めた。遠い北の方の空にはちぎれ雲の合間から、二つ三つ星さえ光り出していた。

「もう晴れそうだよ、ねえ、君、これから一緒に見舞に行ってみる？」

答えがない。見れば彼は蒲団をすっぽりと被っていた。

「父ちゃんは行ったのかい」

「行くもんか」彼は蒲団の中でやや反抗的に云った。

「おかしな父ちゃんだね。母ちゃんが気の毒じゃないか」

「……」

「それなら父ちゃんの所へは帰るつもりだね。父ちゃんだってきっとうちで心配しているよ」

「……」彼は顔を出してすねたような目附をした。「僕はここでいいよ」

「うん、そりゃ……」私はしどろもどろ仕方なさそうに云った。「ここでもいいけれど……」

丁度数学の授業がひけたとみえて、廊下がどやどやざわめき出した。暫くするとドアにノックがして李が悄然と現われたが、山田の寝ているのを見るとはっと顔をこわばらせた。私はいささかあわて気味に、外へ出て話しましょうと彼を廊下へ連れ出した。

「先生は朝鮮人呼ばわりされるのに困って」と彼は罵るように叫んだ。「あいつをいよいよ抱き込もうと云う訳ですね」

「失礼なことを云うな」私はどうしたことか、かっとなって呶鳴った。確かに私は彼の出現に戸惑いしたのであろ

う。
「山田はこのひどい雨の中にやって来たんです。そして帰るに帰る所がないんだ」
「誰が帰る所もないと云うのです？　あの気の毒な婦人こそそうです。今の餓鬼は自分のおやじの所へ行けばいいんだ。ああ呪われろ、悪党奴！」それから急に彼はへなへなになって哀願するように啜り泣いた。「どうして先生は、あの気の毒な婦に対して同情しないんです。あの可哀そうな婦のことを考えないのです……」
「どうか止めてくれ」私は頼むように云った。私の言葉はふるえていた。どうしていいのか頭がくらくらして分らなかった。
「先生……」
「止めてくれんのか！」私は突然断末魔のような叫び声を上げた。気まで狂いそうだった。
彼はよろよろと立ち去った。私は激しい格闘でもした人のようにぐったりとなって壁によりかかった。
勿論私は純情な李を理解することが出来るのだと自分に云った。過去において私自身もそういう時期をとおって来たからである。だが私はその次の瞬間、自分が現在は南と呼ばれていることがじーんと電鈴のように五管の中へ鳴り響いて来るのを感じた。それで私は驚いたようにいつもの様々な云いわけの理由を考え出そうとした。だがもはや駄目だった。

「偽善者奴、お前は又偽善をはろうと云うのだな」私の傍で一つの声が聞えた。「お前も今は根気が続かなくて卑屈になって来ているじゃないか」
私はびっくりしてそれからさげすむように云い返した。
「卑屈になるまいなるまいとどうして僕はいつもいきまいていなければならないんだ。それが却って卑屈の泥沼に足をつっ込み始めた証拠ではないか……」
だが私はしまいまでを云い切る勇気がなかった。今まで私は自分がすっかり大人になっていると思い込んでいた。子供のようにひがんでもいなければ、若者のように狂的に〇〇してもいないのだと。だがやはり私はお安く卑劣を背負い込んだまま寝そべっていたのだろうか。それで今度は自分に詰め寄った。お前はあの無垢な子供たちと少しも距たりをもちたくないためだと云った。だが結局、自分をしきりに隠そうとするおでん屋に来た朝鮮人とお前は何が違うと云うのだ！　そこで私は抗弁のためとでもいうように李のことをやりこめようとした。それなら一時の感傷にせよ「俺は朝鮮人だ、朝鮮人だ」と喚いているおでん屋の男と、貴様は一体何が違うと云うのだ。それは又自分は朝鮮人ではないと喚き立てる山田春雄の場合と本質的な所何の相違もないではないか。私は毛色の違うトルコ人の子供でさえこちらの子供と角力をとりながら無邪気に戯れているのを見る。だがどうして朝鮮人の血を享けた春雄だけはそれが出来ないのだ？　私はその訳を余りにもよく知ってい

る。だから私はこの地で朝鮮人であることを意識する時はいつも武装していなければならなかった。そうだ、確かに私は今自分一人の泥芝居に疲れている。

私は暫くの間そのまま茫然としていた。もう李はそこにはいなかった。私はよろめくようにして自分の部屋へ帰って来た。

部屋は薄暗かった。私は春雄の寝床の傍へ近寄って行った。その時私ははっと驚いて目を瞠った。えびのように体をちぢこめて自分の右腕を枕にし目を半ば開いたまま寝ついている山田春雄の寝姿。私は思わず口に手をあてて声をかみ殺した。

「あっ、半兵衛の子だ!」とうとう私は思い出したのだった。今まで目の前にちらつきながらどうしても思い起せなかった、半兵衛。「半兵衛の子だ!」

私は顚倒せんばかりに驚いた。あ――これは又何ということであろう。私はこういう恰好して寝ている半兵衛をどれ程長い間見て来たのか知れない。だらしなげにぽかんとしている口や、大きな目に老人のような隈がふちをえがいている様までも父に丸うつしではないか。その子が又そっくり同じ様子をして私の傍に寝ているのだ。実に私はその半兵衛とは二カ月余りも同じ留置場に寝起きしていた。彼のことを思うだけでも背筋には冷っこいものが走るのを感じた。それは私が一層春雄を愛しているからである。私の脳裡には一瞬間、この変質的な春雄がしまいには父のような人間になりはせぬかという怖ろしい予感が走ってぞっと身慄いした。

思えば去年の十一月のことである、私がM署の留置場で半兵衛に会ったのは。その時彼はにやにやしながら私の方へ寄りかかって来た。皺びた馬面に大きな目がでれりとして薄気味悪い男だった。だがおや朝鮮人だなと私は思った。

「おう! お前のシャツ貸せ」私の洋服のボタンをはずしかけた。私は幾らか興奮していたので、無造作に振りきって隅の方へ腰を下ろした。他の連中は皆何かを気味悪く期待するような目附で私たちをかわるがわる見守った。

「野郎やりやがったな」彼は如何にも切り口上で出た。「この朝鮮人野郎、おれを見損いやがったな」

彼は腕をまくし上げた。その時廊下を歩いていた看守が格子窓から覗き込んで、

「山田、坐っておれ!」と呶鳴ったので、それを聞いて私は彼が日本人であることをはじめて知った。

彼はにたっと歯をむき出して笑うと、大人しく自分の席へもどった。そこで用もなしに上服をとって外から見えないように壁にかけるとけろりとしていた。弁当の箸を折ってそれを釘のようにさし込んでいた訳である。その時に彼のすぐ傍で居眠りをしている鬚もじゃな小男が頭を彼の方へもたせかけたと見るや、いきなり彼は荒くれた拳骨を男の頭上へ

ごつんと打ち下ろした。そしていかにも凄い剣幕でにらみつける。その夕彼は私には弁当を渡さなかった。自分でがつがつかき込んで貪り食べていた。私にはその瞬間の彼の様子が今にも見えるような気がする。それでいつだったか春雄が食事をしている所を見てふと半兵衛のことを思い出しそうにさえなった程である。

彼は一人の卑怯な暴君だった。みなに恐れられながらも陰では非常に憎まれていた。彼は必要以上に看守の目を恐れているが、そのかわり新入者や弱い者に対してはひどい乱暴をしていた。中でも物凄い剣幕で啖呵を切ることは、彼の最も得意とする所に属するらしかった。「こちとらはなこれでも江戸八百八町を股にかけて歩いて来た男なんだ。余りふざけるねえ、手前のようなこそ泥とはちと訳が違おうぜ……」

留置場の様子から見れば、彼の他に相棒と思われるのも都合六、七人はいた。彼の啖呵に従うとすれば、彼等は浅草を縄張りとしている髙田組で、有名な俳優連を恐喝して大金をせしめたのだった。その中で自分はいかにも最猛者のように言いふらした。だがどうやらその連中の中でも「足らず者」という意味で、半兵衛と呼び捨てにされているらしいのはすぐに分った。私は今だに彼の本名を知らない。その中には私は彼にも馴れて来たし彼の素性もほぼ理解することが出来た。それと共に私の席もだんだん彼に近づいて行った。というのは監房内では古い者程格子扉の傍へ近附くようになるからである。ついに私は半兵衛と向い合って坐るようになり、寝る時は丁度隣り合うようになった。彼は私に対してはもはや温順しくなったが、しかし一緒に寝るのは私にはひどい苦痛だった。彼の口臭も我慢ならない程臭いけれども、何より一晩中股ぐらをごしごしかいて明かすのである。自分でも梅毒だと云った。私はもうそれが頭にまで来ているのだろうと考えた。いつかの夜半彼は妙にしんみりとなって私に質ねたものである。

「君は朝鮮のどこだい？」

「北朝鮮だ」

「おらぁ南朝鮮で生れたぜ」彼はずるそうに私の気色を覗うのだった。そしてひーんと打ち消すように鼻で笑ってみせた。だが私は強いて驚くような気色を見せまいとした。

「そうか」

すると彼は歯をむき出した。

「ほんとうだよ」

勿論こういう話は二人でこそこそと云いかわすのだ。

「おらあの女房も朝鮮の女だぜ」

「ほう……」私は思わず目を丸くした。

彼はいかにも小気味よさそうににやにやした。私は彼に何か訳合いがあるに違いないと考えた。

「朝鮮に行って貰ったのかい」

「おかしくって、面倒臭せえや。じかに洲崎の朝鮮料理屋に親方とかけ合いに行ってさ、この女をおらぁの手に渡

せ、でねえとこっちが承知しねえぞ、障子に火を附けてやらぁとおどかしたんだ。すると野郎たち蒼くなってくれやがった訳さ」

彼はじろりと横目で私を見た。折しもさし込んで来た夜明けの月の光にその目は一層凄惨な影を宿していた。

だが翌朝はけろりとして、いつ自分がそんなことを云ったんだろうという調子である。やはりいつものように弱い者をいじめ、新入者の弁当は取り上げた。だが私はその晩以来ますます彼のことを不審におもうようになった。それでも彼が警察の中で山田と呼ばれているからには、日本人であるに違いなかった。それでは彼の母が朝鮮人であるかも知れないと考えたが、ついぞ確めることが出来ずに私は起訴猶予となって出て来たのである。

そして私は今ようやく彼のことを思い出したのだった。私は何という迂濶さであろう。苗字の符合からしてもそれ位はとうに感附いていそうなものではないか。最初に山田春雄を見た瞬間から私の眼の前には半兵衛の映像がかすかながらの光芒をもってちらついていた筈だった。だが私はそれが半兵衛であることに気附くことが出来なかった。或は春雄に対する愛情からして、ひそかにそれが半兵衛であることを私は怖れていたのかも知れない。

「半兵衛」私はもう一度静かに呟いた。

だが春雄はすやすやと心よい眠りにおちている。私の網膜には、

「おらぁの女房も朝鮮の女だぜ」と云っていた半兵衛の卑屈な笑い顔が幾重にも浮び上って来た。するとそれがいつの間にか今度は春雄の寝姿の上にのりうつってしまった。その時かすかに春雄は呻き声を出したようである。彼は顔をひくひく痙攣させたと思うと、うーうーうなされながら寝返りをうって驚いたように目を瞠った。

「どうしたんだ、夢でもみたのかい」

私は汗だくになっている彼の首筋をふきながら訊いた。

彼は再び目をとじると譫言のように呟いた。

「父ちゃんが今度は僕を片附けるんだって」

四

私も一晩中うつらうつらとしてとりとめもない夢ばかりみていた。朝、目をさましてみたらもはやそこには春雄はいなかった。私は驚いたように相生病院へ行ってみればいいのだと自分に云った。その日は日曜日で春雄にも学校がない筈である。いつの間にか私はそこの玄関に立って呼鈴をならしていた。丁度よく尹医師が出て来て、私を春雄の母親の病室へ連れて行きながら云った。

「何でも山田貞順という名前になっているよ。朝鮮の人じゃないんだね。言葉の調子や貞順という字ずらがおかしいと思って、負傷した瞬間の模様を朝鮮語で訊いてみたが口を噤んで答えないんだよ。ただ倒れたのだと日本語で云う

んだ」
「ううんそうか」私はしどろもどろで云った。「傷は大丈夫かい」
「まあ、大丈夫だよ。だがどうしても顔面に刀傷の傷はつくんだろうね。全く気の毒な程ひどい傷がこめかみの所に出来るんだよ。そうれ、あそこなんだ、……山田さん、お子さんの協会の先生がいらっしゃいましたよ」
春雄はいなかった。十二畳位の部屋に寝台が五つ程交互に並んでいて、いずれにも病者が沈み込んでいた。その隅の方に彼女が横わっていた。白い繃帯でぐるぐる巻かれた顔の中に口と鼻の所だけが少しばかり明いてみえる。彼女はじっとしたまま何も答えない。尹医師は回診のために席をはずしてくれた。私は彼女にどういうふうに話しかけたものだろうかと一寸ばかり当惑した。
「どんなにかお痛みのことでしょう。春雄君も随分心配していたようです」とつい言葉のはずみで山田のことをひっぱり出した。「実は私、春雄君の通っている協会の先生だもんだから……私、南と申します」
彼女は心なしか少しばかり体を動かしたように思われた。きっと彼女は私が朝鮮の苗字をしているので驚いたのに違いないと考えた。
「あ、あ」彼女は指先を小刻みにふるわせながら呻いた。
「春雄……春雄がほんとうに妾のことを……」
「……」私は答えるに言葉がなかった。

「あは」彼女は感動の余り嗚咽した。「妾の春雄が、ほんとうに……妾を心配すると……云ったでしょうか……」
私もほろ苦い気持になった。だがいきおい春雄のことで彼女を慰めねばならなくなった。
「私は毎日春雄君と遊んでいるのです。時にはいろいろ気を落しなさるようなこともあるでしょう。だがまだほんの子供だし、その中にはきっとお母さんとしても自慢の出来るような春雄になると思うのです」私は実際にもそう考えていた。彼に今日の性格を与えたいろいろなものに思いを馳せて、温い手をさしのべ指導して行くならば、必ずや彼はだんだん深い自分の人間性に目覚めるであろうと信じた。
だが彼女は答えなかった。息を殺して私の云うことに注意を向けているばかり。私は続けた。
「始めはやはりあなたが春雄を連れて朝鮮へ帰るよりほかはないと考えました」
彼女はびくっとした。
「あなたのためにも又春雄の将来のためにもそれが一番いいと思ったのです。だが、あなたにはやはり今も半兵衛さんを大事にするような気持があるのでしょうね」
「アイゴ……何も訊かないで下さい」彼女は小さな声で哀れ深く云った。「私の主人ですもの……」
「何も隠しへだてなさることはないと思います。私はかねがね半兵衛のこともよく知っているのです」

「あ」と彼女はさすがに驚いて声を呑んだ。彼女は全く沈没したように呻いた。「……でもあの人、妾を自由な身にしてくれました。……そして妾、朝鮮の女です……」しまいはもう咽び声になっていた。

彼女は今もやはりこういう奴隷のような感謝の念をたよりにして生きているのだろうか、私は無道な半兵衛のことを思い出してたとえようもない愁然とした気持になった。いつか洲崎の朝鮮料理屋をおどかして連れて帰ったというのは丁度この女である筈だった。卑怯で残忍な半兵衛にしてみれば、この寄るべない朝鮮の女にいかにも目を附けて貰い受けそうな話ではないか。彼女は始めから彼のいけにえとして択ばれたのに過ぎない。あの怖ろしい薄莫迦の半兵衛に比べればこれは又何というい、たしい婦であろう。私には彼女夫婦の日常の生活さえ想像することが出来そうに思えた。彼女は毎日いじめられるのであろう。すってんてんに転びながら合掌して拝むのに違いない。そういう所から春雄のような異質的な子供も出来た筈であった。妾は朝鮮人でありますと彼女はいかにも悲しく云っていた。彼女の方では又もしかすれば自分が日本人と結婚していることを一種の誇りと思って、この逆境に生きてゆくせめてもの慰めとしているのかも知れない。私は寧ろあの半兵衛に向って彼女が激しい憎悪をもっていることを期待し、そして同じ郷国から出て来た者として義憤の悦びに酔いたかった。だが私は見事に肩すかしを喰わされたではないか。

「先生」

「え」

「妾、お願いすることがあります」

「お話して下さい」

「お願い……します。どうか妾の春雄の……相手をしないで……下さいませ」

「……」私は黙ったままじっと彼女を見守った。彼女は今にも泣き出さんばかりの声であった。

「……春雄は……一人でもよく遊びます……」だが傷がひどくうずいて痛み出したのであろう、彼女は再び死者のようになった。だが又かすかに呻き声を出しながら「一人で遊ぶのです……踊りがうまいのです。妾悲しうございました。どこかで見て来ては……一人で一生懸命踊ります……幾人の子供の……声も……真似て……にぎやかに……そして自分でも泣いています」

「やはり朝鮮人だと云って外でいじめられるからでしょうか?」

「だが今は泣きません」彼女は力をこめて強く打消した。「春雄は日本人です……春雄はそう思っています……あの子は妾の子ではありません……それを……先生が邪魔するのは……妾悪いと思います……」

「私は半兵衛さんも南朝鮮で生れたというふうに聞いているのですが……」

「え……そうです……母が私のように朝鮮人でした。……だが今は……朝鮮といえば言葉だけでも……あの人はオコリマス……」

「だけど春雄君は朝鮮人の私に非常になついて来ました。実は昨日あの子は私の部屋で泊って行ったのです」

「……」

「その中にあの子供のあなたに対する態度もだんだん変って行くだろうと思うのです」それから励ますように云い張った。「きっと近い中に春雄はあなたに対する愛情をよび返すでしょう。春雄が私になついて来たことはあながち私に対する愛情からだけではなく、実はあなたに対する愛の一つの違った表わし方だと思うのです。きっと春雄は愛情というものに餓えているのに違いありません。あなたに素直な愛情をよせることも出来なく、又あなたの愛情を純真に受けいれることの出来ない春雄でした。だがそれはだんだんとなおって行くことと思いますが……」

「そうでしょうか」彼女は寧ろ絶望的に深く溜息をついた。

「……あの子が……」

その時に戸口から一人の朝鮮服を着た老婆が転ぶようにはいって来た。私はそれとなしに、彼女が李の母であることが一目見て分った。それで私は少しばかりベッドの傍を離れて立った。老婆は貞順の無慙な姿を見附けるなり、ふーと息を吐き出して朝鮮語で慨いた。

「何ちうむごい事だよ。きっとあの悪党に天罰がおちるだよ。なあ春雄の母ちゃん。わしを分るのけえ、李チャンの母だよ。李チャンの。しっかり気をもって早く治すのでっせ、分ったけえ」

貞順は指先をふるわせて辺りをまさぐった。老婆はその手をとった。

「傷でも治ったら今度こそ見附からねえように郷里へ逃げて帰るのでっせ、いつかみてえに又戻って来るでねえだよ。何もええこととあるもんでねえだろ」

貞順は呻いた。老婆は急に何か思い出したとみえ急いで風呂敷包をほどくと、夏蜜柑を二つばかり取り出した。

「夏蜜柑だよ。食べると喉の乾きが少しはなおるかも知れねえよ」そこで彼女は一生懸命になって皮をむきはじめた。

「李チャンがおばさんにやってくれと買って来たんだよ。あれも今日から免許状が下りて一人前になったちうて喜んでな」

「どうぞお大事にして下さい」やはり私はその場を外した方がいいと考えたので、そう云うと戸口の方へ進んで行った。その時何か春雄の母の息苦しそうな、ほそぼそした朝鮮語が聞えたので私ははっと立ち止った。彼女は老婆に向って朝鮮語で哀願するように云うのだった。

「おばさん。……妾、やはり帰りませんわ……それに妾の顔にひどい傷が出来るそうですの……そうなれば……あの

人……妾を売り飛ばそうとも云えませんし、誰もこんな妾なんか買いはしませんもの……」それから痙攣でも起したように急に起き上ろうとした。
「あ！」
「お前さん、どうしたんだよ」老婆は慌てて彼女を抱えて寝床の中へ落着かせた。
「……何か……音がしたの」彼女は気でもふれたように息を切らした。「おばさん……春雄が来るのです。そうれ妾を訪ねて来るのです……」それから急に金切り声で叫び出した。
「おばさん出て行って下さい。……隠れて下さい！」
「誰も来やしねえだよ、誰も見えやしねえじゃねえか」老婆は悲しそうに泣き声をしぼった。
私は忍び足で戸口を出て来たがどうしたのか汗がびっしょりだった。その時私は誰かの小さな影が廊下のかどを慌てて横ぎったように思った。誰かははっきりと見分けがつかなかったが、おや、ほんとうに春雄ではなかったのかという考えがさっとひらめいた。私は急いでその曲り角まで行くと不審そうに辺りをながめた。果して私の推測は間違いではなかった。二階へ上る階段の裏側の薄暗い隅の方に山田春雄が射すくめられたように身を隠したまま目を光らしていたのである。
「どうしたんだね」私は近寄って行った。
慌てて彼は首を振った。そしておびえたようにますます隅の方へ尻ごみした。何か隠し物でもあるのか右の手を後の方へぎゅっと廻して放さなかった。今に悲鳴でも出しそうだった。
「母ちゃんの見舞に来たんだね」私は喉元が熱くなるのを感じながら云った。非常に感動したのだった。「母ちゃんは今も君が見たいと云っていたよ」
彼は一層強く首を振った。私は不満な気持になって彼の体を引き寄せた。彼は後手を放さなかった。それは何か白い小さな紙包を握りつぶして一生懸命に隠そうとしている。瞬間春雄は母のために何か持って来たのだなと私は思った。自分の母を見舞いに来ていながら人の前を憚ったり知られまいとしたりせねばならないのは、何と悲しいことであろう。私は寧ろ少年のそういう姿が何とも云えない程いじらしいものに思えた。私は云った。
「きっと母ちゃんが喜ぶよ」
その時突然彼は私の体に頭を埋めながら啜り泣きをはじめた。
「莫迦だな」
彼はますます激しく泣いた。その時どうしたはずみか白いもみくしゃになった小さな紙包がずり落ちた。私はそれを見て少からず異様な気持になった。きざみ煙草の包紙である。それは私が今朝起きた時に机の上や抽斗の中を随分さがしたがとうとう見附からなかった「はぎ」の古い包である。

「なあんだ、それで先生をこわがっているのか。ただ先生にそうことわって持って来ればよかったんだよ。さあ、これからそんなことは気を附ければいいんだ。それ、それ、母ちゃんが待っているよ、持って行っておやり、左側の三番目の部屋だよ」それから彼を元気附けるように肩をたたいてやった。「何だ、山田らしくもない。これからな先生は協会へ帰って待っているよ。君が来たら昨日約束したように二人で上野へ遊びに行こうね」

彼はわーと泣き出した。私の心もゆらいでいた。だが病院の中にいるのは彼をますます窮屈にさせるだろうと思ったので、彼に病室を教えてから私は急いでそこから出て来た。そして何故彼が私の所から煙草を持って来たのだろうかといろいろと考えをめぐらしてみた。彼の母が吸うのだろうとしか想像がつかなかった。何という思わぬだしぬけたことをする少年であろう。私にはその時にも半兵衛が監房の中で上服を壁にかけてにたにたしていたことが思い出された。

五

一時間ばかりして山田春雄は再び私の前に姿を現わした。だか彼は指を口に啣えたまま足元ばかり眺めていた。何だかすっきりした安堵もあるのだろうか。口元が今にも綻びそうにさえ思われた。何か素敵な事をした子供が大人の前でてれているようでもある。今まで彼の面上にこれ程素直な子供らしい影が現われたことがあろうか。彼はもうすっかり私を信じているのに違いなかった。だが私もひそやかに微笑を浮べるだけで何も訊かなかった。「さあ、出掛けようか」と帽子をとり乍ら一言云っただけである。

前夜の嵐の後をうけてうすら寒い位の午後だった。広小路で市電を下りた時は丁度日曜で押し合いへし合いの雑沓ぶりである。いつの間にか呑まれるように松坂屋の入口まで来たので、私は別に用事はないものの彼の手を引いてはいって行った。中も非常に込んでいた。春雄がエスカレーターに乗ろうというので二人で並んだ乗った時は、さすがに彼は幸福そうで晴々としていた。私もみちあふれるような歓びを全身に感じた。少年春雄は今凡ての人々の中にいるんだという考えが私にはどうしても不思議な程に嬉しくてならなかった。彼は春雄であると同時に今は私の傍に立ち、又人々の中にもいるのだ。二人は相並んで三階まで運んでもらった。そこでも人込みの間を縫いながら私達は五階か六階かの所まで上って行くと、食堂の一隅に向い合って腰を掛けたのである。だがその実二人は必要以上の言葉はいくらも交わさなかった。彼はアイスクリームとカレライスをとり私はソーダ水を飲んだ。

「うまいかい」

「うん」彼は皿の上に顔をつけたまま私を上目で見た。

「デパートのカレライスはうまいんだなぁ」

そこからエレベーターで下りて来ると、一階の特売場で彼のアンダーシャツを一円で買った。彼はにこにこしながら包の紐を長くぶら下げて出て来た。
公園も珍らしい人出であった。私達は石段を上って大通りに出た。こんもりとした木立は午後の淡い光をうけてものうさそうに静かにゆらいでいた。空はどんよりと濁り風は折々高い木の梢に雨のような響きをたてている。だだっ広い大通にはお上りさん風情の婦や男たちがぞろぞろと歩いていた。少年はいつの間にか新しいアンダーシャツに着替えて、ぼろぼろの上服を脇にかかえたまま時々口笛などを吹き鳴らした。私は何とも云えない程彼がしおらしくなって来た。だが私はあまり彼に言葉をかけることが出来なかった。突然彼が私の袖を引きながら云った。
「先生云うのかい」
「何をだい」
見ると彼の目はいつものように猜疑と反逆の光をともしていた。私ははっと気がついた。煙草の一件を云うのだった。
「云うもんか、誰にも云いやしないよ、可哀そうな母ちゃんのために持って行ったんだもの、今日は実に君が善い行いをしたと先生は思っている位だ。母ちゃんは煙草が好きなんだろう？」
「好いていやしないよ」と彼は妙にしょげて渋々呟いた。
「母ちゃんは血が出たら……いつもきざみ煙草を傷にはっていたんだもの、僕ちゃんと知っていたんだもの」
成程と私は思わず息をのんだが、どうしたことか驚きの色さえ顔にあらわすことは出来なかった。私の目先が急にぼうと霞んで来たような気持だった。（九字欠）血を流しては、彼女はいたましくもきざみ煙草をつばで練っては幾つも幾つも傷口にはりつけていたのに違いなかった。丁度彼女の郷里の百姓達がそんな風にして傷を治そうとするように。
「そうか」
私たちはいつの間にか交番に近い所まで来ていた。その傍に頑丈そうな体重計がおいてあった。私はそれを見るととりつくろうように振り向いて淋しく笑いかけながら計ってみないかと質ねた。すると彼は悦んで飛びのった。余りに激しい力を一時に受けたので針がてんてこ舞いをし始めた。案外重いようだった。その時春雄は何かに驚いたとみえ、私の方へ飛びかかりながら小さく指で大通りをさしてみせた。何だろうと思って彼のさしている方を振り向いてみると、丁度一台の自動車が私たちの傍へすうっと横着けになるのだった。
「おや」と思ってみると運転手台で李が新しい帽子の庇に一寸ばかり指を上げてにこっと挨拶をしてみせた。私も嬉しくなって彼の方へ近寄って行った。
「お目出度う、先程病院で君のお母さんが云ってましたよ。うまくいったそうですね」

春雄は別に悪びれずに私の傍へよりそうて来た。それを見て李は工合悪そうに目を反らした。

「え、今先私も病院へ行って来たんですよ」それなら彼はそこで春雄にも会うた筈だった。黒い美しい目をしばたたきながらさすがに彼は悦びをつつみ隠せずに珍らしくはしゃいだ。

「僕もやっと一人前ですよ、随分これはいい車でしょう。三七年型だけどわりに新しいし、エンジンもしっかりしていますよ」

そこで臘揚にセルモーターを踏んだ。私の目にはありきたりのフォード型でそれ程いいようにも思われなかったが、「成程いい車ですね」と答えた。「今日はこの春雄君と一緒に遊びに来たんですよ」そして少年を引き立てるように続けた。「今も僕は気が附かなかったが春雄君が教えてくれたんでね」

「どうです、ひとつ乗ってみませんか。動物園にでも行くんでしょう」彼は戸を開けてしきりにすすめ出した。

二人は仕方なしに手をとって乗り込んだ。動物園の入口まではいくらもなかった。

「どうですか乗り心地がいいでしょう」彼は私たちを下ろしながら云った。この純真な若者には今日という日がたのしくてならないのであろう。「ほかのお客さんもみんなそう云ってくれましたよ」

「そう、新しくて気持がいいですね」私は正直に云った。

そこで彼は満足して見事にハンドルを操り、切り返しをやると、先刻のように指を一寸立てて別れを告げ、ぶーぶー警笛を鳴らして人を散らしながら河豚のように走って行った。春雄はじっと立ったまま羨望に満ちたまなざしで車を見送っていた。私は何という恵まれたうれしい日だろうと考えた。

「李君は立派な運転手になったね。君は大きくなったら何になる積りだい」私は春雄を顧みながら楽しそうに質ねた。

「僕、舞踊家になるんだよ」彼はいきなり明るい声で叫んだ。

「ほう」私は驚いて彼を見つめた。一時に彼の体が光彩を放ち出した様に思われた。「舞踊家になるのか」ふとこれは実に素晴らしい舞踊家になれるかも知れないぞと考えた。

「そうか」

「うん、僕、踊るのが好きだよ。だけど明るいところでは駄目だよ。舞踊は電気を消して暗い所でやるもんさ。先生は嫌いかい？」

「ううん、それはきっと素晴らしいことだろうな。そう見れば君は体も実にいいぜ」私は夢想するように云った。

「先生も踊りがとても好きなんだ……」

私の目の前には、この異常な生れをもつ、傷めつけられ歪められて来た一人の少年が、舞台の上で脚を張り腕をの

ばして渡り合う赤や青の様々な光を追いながら光の中に踊りまくる像がちらついて見えた。私の全身は瑞々しい歓びと感激にあふれて来るのを感じた。彼も満足そうに微笑を浮べながら私を見守った。

「先生だって踊りを作ったことがある位だよ。先生も暗い所で踊るのが好きなんだ。そうだ。これからは先生と一緒に踊りを稽古しよう。うまくなったらもっと偉い先生の所へ連れて行こうかな」私は何も作りごとを並べているのではなかった。私は一時は舞踊家になろうと思って創作舞踊を試みた覚えさえあった。

「うん」彼の目は青い星のように輝いていた。

（そうだ近い中に協会の傍のアパートにでも移って行こう。そこで）まず二人きりになるんだ）と私は自分に云い聞かせるのだった。彼がどうこれから豹変するかは知らない。寧ろ又私を立ち所に裏切るには違いない。だが頑なにこちこちといじけ固まっていた気持を、ほんの少しでもほぐしかけて来たこの機会を私は逃してはならないと思ったのだ。

どうしたものかその時二人は浮かれ浮かれて老木の間をぬけて弁天様の傍を通っていた。そこにもここにも昨夜の嵐の跡が残って、折れた枝が落ちかかったり雨に洗われたり地面に所々わくら葉が落ちたりしていた。鳩の群が弁天様の屋根や五重の塔のまわりをにぎやかに飛び交っていた。灯籠の傍に出ると下の方に茂みの合間を通して不忍池が見渡される。それは鏡をのべたように夕陽に照り返り時時ぎらぎらと金色に光ってみえた。五つ六つボートが浮んでいた。池に渡した石橋のてすりには多勢の人々がもたれて水面をながめている。何んだか軽い霧が立ちこめはじめているように思われた。もうだんだんと夕暮になって来るのであろう。ゆるやかにそれが池をつたわってこちらの方へ次第にひろがって来るように感ぜられる。それにつれて二人の心はますます清澄なものにしずまって行くのであった。

「動物園というのがここまで来てしまったね」

「だけど僕、ボートに乗りたいな」彼ははにかみながら云った。

「そうか、じゃ下りて行こう」

そこからは長い段々が続いていた。私と春雄はそれを一つ一つ下りて行った。彼は一段下の方を歩いて、恰かも老人でも連れているように用心深そうに私の手を引きずって行くのだった。だが彼は中段まで下りて来ると急に立ち止って、私の体にぴったりよりついて私を見上げながら甘えるようにこう云った。

「先生、僕は先生の名前を知っているよう」

「そうか」私はてれかくしに笑って見せた。「云ってごらん――」

「南先生でしょう？」そう云ったかと思うと彼は私の手に自分の脇にかかえていた上服を投げ附けて嬉々としながら

石段をひとり駆け下りて行くのだった。

私もほっと救われたような軽い足取りで倒れそうになりながら、たたたっと彼の後を追うて下りて行った。

樹々新緑

佐多稲子

一

朝の内から、横に崩れた大きな雲が、と切れながら粗く動いていた。ときどきぱっと陽が射すかとおもうとすぐ翳って、この頃の陽気でゆるんだ人の心を妙に苛ら立たせるきつい風が吹いた。それが昼過ぎになると、雲はすっかり街の上に低く垂れこめてしまい、風は厚ぼったい調子になり、どあん、どあん、と吹いた。街の表は、春仕度の白いのれんなど片づけて、やがて来る雨の用意をしている。電車だけがせわしくきしりながら往来をつづけている。

街角にある小さなカフエーが、未だ喫茶店でもあり、酒場でもあり、その上西洋料理店でもあった頃だが、そういう店の一軒であるカフエーカナリヤでは、さすがに今日は

まだ客がなかった。天井に枝を張った造花の桜もまだ生彩を出さず、女たちは朝の割烹着のまま湯上りのえり首だけ白くしたのをうつむけて雑誌など読みふけっている。電灯もつけぬ薄暗さで、結局自分たちの気易い時間に浸っているらしかった。水を打って掃いた板床の上に、草履をつっかけて投げ出している女たちの素足が、何といっても春の季候を見せている。

宗代だけが二本の竹棒を動かして編物をしていた。クリーム色の軽げな、小さいスエーターである。さっき二階から、うたた寝でもしていたらしく痩せた肩をすぼめて下りてきた、いちょうがえしの女が、宗代の前に立って壁の掛け鏡に自分の姿を映しながら、

「よく編むわね。暗くない？　だけど可愛いでしょうね。そんなの自分で編んできせたら。私も兄さんの子にでも編んでやろうかしら。宗代さんにおそわって。」

と、気の好い単純さでぺらぺらと言った。

宗代は、結んだままの口元にふうっと微笑を浮べて顔を上げると、それまで考えていたことから瞬間に脱けた、穏やかな優しさで、黙って、その半分まで出来た編物をテーブルの上にひろげて見せたのであった。透かした模様のある小さなスエーターの裾が、テーブルの上で軽くめくれるのを指先きで抑えて。

店の中は急にまた一層暗くなった。そのうちに、強い風といっしょに、色ガラスの配合してある窓にざあっと吹きつける勢いで、とうとう降り出してきた。

「ああ、ひどい雨だ。」

いちょう返しの女は、日和下駄の歯を床に鳴らして入口へ出てゆき、扉をあけて往来を眺めはじめた。とん狂に叫んで馳けてゆく男の声など聞えてくる。雑誌から顔を上げたのが、

「窓、大丈夫？　みんな閉めてあるわね。」

雨の音にとざされて、一層籠もってしまった家の中で、電話のベルがみんなの耳に響いて鳴った。これも森としていた帳場の奥で、やはりそこにいたらしい老けた女主人の声がすぐ出た。

「はいよ、宗代さん、電話だよ。」

「はい。」

宗代は返事といっしょに立ったが、傍らの女に、「わたしね。」と、不審そうに確めた。

「そうよ、早く行きなさいよ。」

帳場口から差し出して貰った卓上器へ、背をかがめた宗代は、自分の声だけが際立つようなあたりに対してもちょっとまごついた表情をし、はあ、はあ、と答えだけをして、承知しました、と改まった風に言った。

やや戸迷った伏目で、あわてて編物を風呂敷に包んだ。電話をかけて寄越したのが櫛本であったということも、宗代を上気させていたが、築地の彼の勤先きまでこれから傘を持って来て欲しい、というその用事も唐突でなくはな

い。だが、兎に角時計を見上げると、三時であった。
「少し早いけど、私、着物き更えてきていいかしら。」
「いいわよ、どうせ暇でしょう。」
そう言ういちょうがえしの女は住み込みなので、傘と下駄を借りて外へ出た。電車道を越したすぐ向う裏にある自分の家から通っている宗代は、夕方に一度はいつも夜の着更えに帰ることになっていた。
割烹着をはずしてきた宗代は、自分の家へ曲る横町をそっと通り越して、小さな川などの橋を渡り、やや坂になった小道を登って行った。高台へ出るこのひとつの坂の中途に、櫛本の間借りしているしもたやがある。櫛本は、老人夫婦の住んでいるその家の六畳の部屋に、笠木泰治と同居をして、自分だけは昼間は兎に角工省へ通っている下級官吏であった。
大きな八ッ手の葉に雨の降りかかっている軒先きへくると、もう部屋の中から若い男の声が聞えた。その高い声はそれも櫛本たちの仲間の藤沢である。宗代は、遠慮勝ちに玄関の戸を開けると、笠木の名を呼んだ。
おう、と、すぐ出て来た笠木は、黒無地の羽織を小柄な身体にきせて、大きな眼の故か不敵な、厚い顔をしている男であったが、思いやりのある、わかりの早さで、宗代の言うことを聞くと、櫛本の傘をとりに部屋へ引き返した。が、笠木はそこで、その大きな眼をくるっとまわし、やはり藤沢に言うのであった。

「櫛本が、傘を持って来い、と電話を掛けた、と。」
「ええっ。」
仲間のうちでも一番背の高い藤沢は、広い胡坐を組んでいたが、きれいな歯を出し、わざとふざけるように、その膝を横にはたいて、
「櫛本の野郎、ちく生。」
この仲間の中では、こういう普通のふざけた表現をするのは藤沢だけであったが、太いロイド縁の眼鏡の奥で、彼の視線は、いつでもそうであるように、対手から少しはずれたところに彼ひとりの思いをのせて向けられていた。大人っぽく笑う笠木の声も宗代は聞き、玄関の土間で顔を伏せていたが、櫛本の洋傘を受けとる時、笠木には、羞にかんだ微笑を親しく見せた。

二

雨はますますひどくなっていた。電話でおしえられたように、宗代が銀座八丁目で電車を下りて、汐留駅の先きに当る櫛本の役所まで歩くとき、高い建物の間を築地の向うから吹いてくる風は彼女の傘を巻き上げる勢いであった。その度に宗代の裾は流すような雨に洗われて、足先きにからんだ。風と雨はうなりを上げ、閉め切った商店のガラス戸をざあっと流し看板をきしらせた。息を吸うて傘にしがみつき、風雨の中に立ちすくんでしまった宗代を見兼ねて

彼女が丁度その前に立っていた床屋の中から、ガラス戸を半分開けて呼び入れて呉れた。煙草を吸うていた主人が、

「とっても歩けやしませんや。まあ少しやすんでいらっしゃい。」

迎えの傘を持っていた若い女に、親しい好意を見せている。宗代はそれを感じ、雨風に叩かれた辛い気持ちが和ごむのであった。すると彼女は、自分が床屋の主人の眼に映じているとおりの平和な若妻であるような思いにさえなった。なじみの全くない銀座うらの、しゃぼんと香油の匂いに満ちている床屋の店の端にひとり顔を反向けながら、そこでだけ可能なその思いに瞬間浸った。

過ぎてゆく時間が気になり、宗代は再び歩き出した。先きは海になっているらしい広い通りは、始めて来る場所であった。震災後の建てなおりがまだ完成されていず、大きなビルディングがぽつんぽつんと建っている。雨と風は幾らか柔らいでいたが、それらの大きなビルディングの中で、櫛本ひとりをどうして探し出せるだろう。そういう不安で宗代はおろおろして歩いた。

櫛本はもう役所から外へ出て来ていた。帽子を小脇に抱え、建築場のバラックの軒先きからおうい、と杖を上げた。黒の背広を細く着ている。宗代は目だけで下から応えて傘を渡した。

「どうもありがとう。困った？」

「ええ。」

宗代はそう言っただけで、あとはふくんだ微笑に自分の難儀を織り交ぜたが、櫛本はもう、二人連れの帰り路のことだけが考えられているように、答えは聞かず、

「こっちから行こう。」

と、歩き出した。袴をはいた若い男たちが櫛本の役所からひとりずつ帰り始めていた。

宗代はいつとなしにちょっと身を隠すようにわざと一歩離れて男に並び、歩いて行ったが、羽織の下にかき合せている胸元の具合は、自然にふくらんだゆとりを見せ、ちょっとも他に憚りのない櫛本の若さに比べて、何か沈んだ落ちつきがあった。宗代の、いつとなしに身を隠すような控え目な態度も、彼女のその沈んだ落ちつきから出ているのであったが、宗代自身はそれを知らず、自分は櫛本の肩のうしろに顔を寄せている気持ちなのであった。年齢も、宗代は櫛本よりひとつだけ下の二十三歳であった。櫛本は、彼の強気と、愛憎とで、そういう宗代を自分が引っ張って歩く気構えであった。

「もう雨はやんだんじゃないかな。」

自分は傘をたたんで空を仰いだ櫛本が、

「傘をたたんだらどう。」

と、宗代へ視線を振り向けて言った。

「さっきはあんなにひどくって、途中で歩けなくなってしまって。」

語尾を、対手に対してどう決めていいか迷うように、宗

代は曖昧に結んだもの言いをしている。
「そう、ずい分ひどかった。」
ただそれだけ言って、櫛本は、
「笠木、いた？」
「ええ、藤沢さんも、何だかはずかしくって。」
「何故。」
見返している櫛本の視線に、宗代は始めて感情を溶けこませるように、きらり、とほほ笑んで、藤沢の膝を叩いて、ちく生と叫んだ話を、櫛本にして聞かせた。
櫛本はそれを黙って聞いてから、
「昨日の夜、笠木と喧嘩したんだ。」
「どうして。」
「あいつ、僕が子供のいるということを言わないで隠していた、と言って、妙に、例の調子でねちねち言うんだ。どうせ、久能さんのところで聞いて来たにちがいないんだ。あんまり癪にさわったから怒鳴ってやったんだ。『なにか俺に今度のことでは一から十まで洗いざらい君たちにしゃべらなけりゃならない義務でもあるのかね』って怒鳴ったんだ。そしたら、あいつ黙ったがね。」
だんだん伏目になっていた宗代は、そっと尋ねるように、
「あなた、子供のことは言わないでいらっしったの。」
宗代にしてみれば、胸にしみ入ってくるものは、喧嘩そのもののことではなかった。

「いやァ勿論、僕だって、あいつ等に秘しておく気は別にないさ。ただ話すような気になったときに話し出そうとおもっていただけのことさ。それを、生意気だよ。まるで、かさにかかって言うんだ。藤沢も一緒にいたんだがね、あいつは、黙っていたよ。」
「そう。でも、あの人たちびっくりなすったでしょうね。」
自分の言葉を自分の胸に吸い込むように言う。
「何を。僕の怒ったこと？」
「ええ、それもだけど、私のこと。」
「なァに、ただあいつ等、何でもかんでも口出しをしたいのさ。……そりゃ今度のことではあの連中に厄介もかけたさ。だって、そう何もかもあいつ等のおもうようにばかり出来やしないもの。」
「そりゃそうね。……だけど、ごめんなさい。」
素直な気持が宗代を捉えていた。櫛本の気持ちを、彼の実際の気持ち以上に複雑に察し、そういう経験をしなければならぬ櫛本を気の毒におもうのであった。そして、もうひとつ深いところでは、宗代は、子供のことだけは笠木たちにさえ言わないでいた、という櫛本の気持ちに不安な想いをひそめてもいた。
すると、宗代の胸の両の乳房が、彼女の感情に敏感に応じるように一時にぐっと張ってきた。いつも夕方自分の家に着更えに帰ったとき、先ず何よりも先きに膝に抱いて胸をひろげ、ふくませる乳房なのである。もういつものその

時間にもなっていた。が、乳房は瞬間にして生きもののように鼓動を打ち始め、痛いほど筋を伸ばしてふくれるのであった。
「どうしたの。急に黙ってしまったんだね。」
そういう櫛本に遠慮がちな微笑をおくって、
「なんだか、あなたに悪いようで。」
「いいさ、なァに、笠木があんまり生意気だからさ。ねえ、どうしたの。」
「どうもしないけど。」
「あんまり気にしない方がいいね、なんでもないいんだからみたいで厭だよ。いつか向う側に立っているんだもの。」
「そんなことないわ。」
「じゃ、いいさ。」
二人の沿って歩いている川の面は、まだ、ざわざわと波立ちながら、遠くのどこかの雲の切れ目を反射させて、白く、にぶく光っていた。雨のやんだ街は、いつもの夕方の活気に急速に立ちかえり始めて、人の姿も多くなっていた。
そうして歩いていると、どこまでも切りなくなりそうな気分で、宗代はあわてて消すように、
「もう電車に乗りましょう。あんまり遅れると店に悪いから。」
「そう。でも、あの店どうせ変るだろう。」
「ええ、でも。」
「もう少しいいさ。」
そう言われると宗代は、なおそわそわしてくるのをじっと押え、櫛本の視線を辺りへ憚るようにそっと微笑で反らすのであった。

三

櫛本と宗代がカフエーカナリヤで知り合ってからまだ二ヶ月と経っていなかった。櫛本たちが行きつけていたカナリヤの店で或る夜初めて宗代を見たとき、若い絵描きたちであるその連中は、宗代の黒っぽい袷せの好みや、額をすっきりと全部出している髪の結い方や、決して声を出さずに口元だけで笑う妙に沈潜した印象などに目をとめた。それは場末の、トランプの模様のあるメリンスの着物に赤い帯を胸高に締めたり、いちょうがえしに黒襟で、その上にエプロンをかけた女たちのいる、きゃあきゃあしたカフエーの中では、何か別なものとして目立つのであった。
それが、間もなく或る時、櫛本の掛けている椅子のうしろに立っていたその女が、黒い、厚い櫛本の髪の毛にそっと掌をのせ、軽く弾ませながら撫でた。いい毛ね、と言って。笠木はきょろりっと藤沢の顔を見て無遠慮に笑い出し、櫛本も自分も一緒になって笑った。藤沢は相変らず対手に視線をかえさず、ただ、ふうむと、美しい歯の見える

微笑を浮べ、学校の制服をきちんときていた佐多はそれによく気づかず、含んだ独特の静かな声で、なあに、と言ったが、すぐ、ああとうなずいて、笠木の無遠慮さを微笑した。そのことがあってから、櫛本は宗代に手紙を書いた。
そういう櫛本のために、時にカナリヤの二階へ上って会食をする費用に、藤沢は自分から拾円の札をつくってきた。また宗代の返事は、笠木には勿論、その他の連中にも読まれ、滝井にも知らされた。
滝井は黒っぽい縞の着物を張った肩に着流し、藁縄を一本腰に巻いて帯代りに結んでいた。そういう風体は意識されたひとつの思想の表現でもあって、額にさがる髪の毛の下からきらりと光るまなざしでもそれは知れた。「さけ。」と一言だけ言ってじろっと宗代を見たが、櫛本には、
「額の美しい女だね。」
と、言った。
そういう風に、櫛本の恋愛は四人の仲間に見守られて進んだ。そしてまた、世間の慣習や常識を破って自己の真実に生きようとしている若い絵描きたちにとって、この場末のカフエーで目立った女は、なかなか劇しい過去を持っていい、実人生の荒々しさをもって何かをもたらしていた。そういう意味で格闘の意欲さえ感じさせた。
——あなたは、私がどういう過去を持ち、どういう現在にいるか、御存知ではありません——
最初にきた宗代の返事を櫛本は仲間に示し、
「なかなか生意気な女だね。」
と、輝いた目をして言った。
文章で書くのはいやだから、直かに話そうと、手紙には書いてあった。
その話のために、同居の部屋を空けた笠木が、あとで、どうなのだ、と聞くと、櫛本は、対手の女が自分に直接関りはないかのような客観的な熱情で、勢い込んで話した。
「あの女はね、一度結婚したことがあるんだそうだ。非常な金持ちの家へ貰われたんだがね、男が病的なやきもちやきでね、とうとう別れたんだそうだ。しかも一度は自殺をしたんだよ。男と二人で。」
「へえ。ほんとかね。」
「いや、ほんとらしい。」
「心中だね、男と一緒でなら。どういう風にしたんだろう。」
「睡眠薬を飲んだんだ。然しその話を聞いてわかったよ、あの女の一種の暗さが。」
「ほう、そうかね。」
このとき櫛本が、もうひとつ、女がその自殺の当時すでに身ごもっていて、実家へ帰ってから生まれたその子供が、現在彼女の手許にいるのだ、ということを言わなかった、笠木はそれをあとで櫛本になじったのである。
宗代はそういう過去から、いわば矢竹が皮を剝いでゆく

ようにめくれた黄色い皮の一片をつけていたとしても、それだけに深い真青な色で伸びている状態なのであった。それは彼女の意志に関りなく継続された生命の、若さの力でもあった。薄給な勤め人の娘で、世間並みの希望で大きい家に嫁いでゆき、そこで一度は、自分の生を自ら絶ち切るような経験をしている。彼女の自殺というものが、直接には、目前の苦痛から脱がれるための意味しか持っていなかった、としても、人生と彼女自身との関係では、敗北の形でではあるが、ひとつの抗争とも見られるのであった。だからその中から立ち直る道は彼女なりに激しい力を要求した。立ちかえりの道で身を揉むことはこの若い女にとっては、自ら縛っていたそれまでの自分を振りほどくことにもなっていた。それは環境と生命とのもたらした自然な作用なのであったろう。彼女は、働くにも乳のみ子のために近所の店を選んだ。それがカフエーカナリヤであった。それを決意すると、彼女は、間もない暖かい一日、髪を洗い、豊富な髪の毛のまだ濡れたのを背にひろげたまま、カフエーカナリヤの裏口に立った。

「こんな、髪を乱したまんまで、失礼ですけど。」

言葉だけは常套を踏んでいる。だが、そういう宗代の姿には、何か思い切っている、秘そめた情熱があった。それは、櫛本の髪の毛を撫でた掌の動きにも、意識された唐突さでやはり見られた。こういう彼女の脱皮の状態は、彼女の若さだけでなく、彼女が子供を生み、肉体的にも軽々となったということ、ほとばしる乳の健康な赤児に繰がるのを感じ、赤児の肥えてゆくのとともに彼女自らも四肢のすらりとなる潑剌さをつけていったことなど、いわば母性の美しさが彼女を本質的に揺り動かしているのであった。彼女は袂のめくれた両の腕に高々と赤児を抱き上げ、弾くような子供の笑い声を部屋に撒くのであった。彼女の印象に、陰翳のくまどりがある、ということを、彼女自身は知らないほどなのであった。

そういう彼女が、櫛本たちの平俗を抜こうとする若々しさに惹かれたのは自然なのかも知れなかった。彼女は一度は結婚の形式的なことを踏みにじろうとさえしていた。するが、櫛本にとって同棲は愛情の自然な欲望であった。親と宗代は、やはり自分の恋愛に真実を求める気持ちで、親の了解を得るまでは、一緒に寝まい、などと可愛いことを言い張るのであった。そういう彼女の本能的な母の感情が世のしきたりに縛られて倘固くなってゆく。櫛本は、女に対する愛情で、全身でそれらに打つかっていた。

四

「ねえ、二人っきりの時間を一度つくらないか。××町へんに、そんな宿屋があるそうだ。」

と、櫛本があるとき言ったことがある。言われた町の名は、秘そめたそれらの罪悪で町の伝統がつくり出され、薄

汚ないごったがえしの中に生き生きとしていそうな、そんな下町へんの場所なのだが、それを言う櫛本の表情は卒直な愛情をたたえていて、宗代は、いやいやをする自分の恐怖に却って恥を感じ、こわばった微笑をそっと媚びるようにおくるのであった。

ひっそりとしている寺の中の墓地であった。うしろを囲っている土手の林のむこうに、とき折、省線電車の走ってゆく音が聞えている。下に見えている本堂の裏側も寂びた清潔さで、そのあたりに一二本ある桜の、もう蕾のひらき始めているのが、白く静もりかえっている。宗代は、そこに踏み込んでいる自分たちの無しつけさにも落ちつかない気持ちでいた。掛けている石段の冷めたさが、しっとりと彼女の腰に伝わっている。

櫛本は自分の言い出したことには強いてこだわりもしないで、

「親父さんはそれで君には何て言ったの？」

「久能さんが来て下すったことは、少し吃驚していますの、だけどそりゃ無理はないの、まだ私の籍のことなどがすっかり解決していないのですもの。『まあ、もう少し待たんか、あわてることはないよ』って言われて、私、何だかとても羞ずかしかった。」

「そう。だけど、もういいんじゃない？　兎に角こちらではわざわざ久能さんに行って話をして貰ったりしたんだから、もうこの上は家を出て来てしまってもいいんじゃないかね。」

櫛本は、彼らの師事している久能浩造をわざわざずらわし、宗代の家へ申込みをしたことに触れ、そう言うのだったが、自分の希望が対手の気持ちに、みてゆかないらしいばつの悪さを突き破るように倘言葉を続けた。

「僕のような人間は、早く結婚をした方がいいのだ。ということは、僕自身のこの頃考え始めてきたことだし、それは久能さんも賛成なのだ。僕には、粗々しい独身生活の気分などは駄目なのだ。それは、僕が人よりも一層情痴的であるためかも知れないし、少年時代に家庭を失っている上に、身体も弱い、ということなどもあるのだけど、始終何かを求めて落ちつかないというような情熱の発散に、僕は自分の成長を感じることが出来ないのだ。ある型の人間は、そういう独身時代の放逸さに成長を感じるのもいる、けれど僕はそういうのは嫌いなんだ。僕にとってはそういうのは粗っぽい感傷にしか過ぎないし、無駄な発散にもおもえるんだ。」

「わたしもなんとか考えますから、もう少し待ってて下さい。」

「誰にもいいようになんて、なかなか出来ないよ。自分を生かすことを主にしなくちゃ。」

最後にそういう男の言葉は、宗代には傍若無人にも聞えたし、世俗にない真実にも聞えた。

「今度の土曜日には、僕の部屋で御飯を食べないか。」

櫛本は言いかけ、宗代の胸に固いものの障るのを掌で押えて、
「これは何？」
櫛本の顔の下で宗代は、紙入、と答えたが、ふと思いついたように身体を引いて、懐ろからそれを出した。金糸の刺繍のある紫の布の紙入である。
「みち代の写真が入っているの。見せましょうか。」
急に生き生きとし、そそるような笑いさえ浮べて、ねえ、と言った。
「ああ。」
と、櫛本は答えて、宗代の紙入から出す写真を受けとった。小さな唇を結んで、丸い頬を垂れ、ちょっと小首をかしげている幼児の写真である。いつも母の懐ろに入れられているために合紙のない写真の縁はささくれ、幼児の顔のあたりにさえ折りきずがついている。
「ねえ、可愛いでしょう。」
宗代は櫛本の顔に頬をつけて一緒にのぞいた。櫛本は、レースのついたベビー服の裾からのぞいている小さい足の指が、きゅっと内側へ折りこまれているのを見ながら、
「男の子かね、女の子かい。」
と聞いた。
「あら、女の子だわ。」
言うまでもない、という風に顔を引いたが、今頃そんなことを聞く櫛本の顔をうかがい、そこに何らの表情も動いていないのを認めると、宗代は妙に挑戦的な媚態をさえ示したのをさっと消して、自分もそれに負けない虚勢で、素っ気なく写真を紙入にしまった。櫛本に抱えられている彼女の腕の先きで紙入はそのまま握られていた。彼女の心の半分を秘かに櫛本の背の向うに残しているように。

櫛本たちの部屋は、玄関へ上るとすぐ鍵形に右へ折れたところに一間だけ別になっていて、表の坂に面した方の隅に、畳の上に一尺ばかり開けた古めかしい窓などがあるのだった。その窓のそばを笠木が自分の居場所にしており、床の間のある、庭へ向った縁近く櫛本が占めていた。小さな火鉢がひとつと机がそれぞれあったが、床の間には二人のこれまで描かれた絵や、描きかけのカンヴァスや絵の具箱など乱雑に置いてあり、壁にはセザンヌの複製や、ドガの踊り子の絵の写真など貼ってある。その部屋は久能浩造のアトリエが近いので、いつもグループの集合の場所になっていた。藤沢などは殆ど毎日、遠方の郊外からはるばると省線電車を乗り換えて通っていたし、本所横網町の大きな米屋に、父親と二人、兄妹もなく暮らしている佐多も、学校の帰りにはここに寄っていた。滝井はもう学校は出て、久能のアトリエへも通う外、この頃はまた別の新らしいグループにも関係していたが、そちらの方の異った雰囲気ももたらしながらやはり始終集って来ている。笠木は外国にいる長姉から仕送りを受けて、久能浩造の許へはまだ

十代のうちから出入していたが、グループの内では彼が一番年少であった。櫛本だけは、故郷にもう両親が無かったし、一人の兄が親類の金で医科へ通っているだけなので、自分で勝手に学校を中途で引いてしまうと、あとは、全然、絵には関係のない役所などに勤めていた。

若い男たちは、この家の主人の老人夫婦には会釈もなしに、六畳の部屋いっぱいに煙草の煙りをくゆらし、笠木などは姉から送って来たのだといういきざみ煙草をパイプに詰めて横にくわえて、表の坂の往来にまで聞える大声で彼らの芸術談をたたかわせていた。あるときは笠木の太々しい、才気のある油絵が、まだ油のよく乾かぬ生の感触のまゝみんなの面前に置かれて批判の対象になっていたり、精力的に始終描いている藤沢の、だがどこか暗い気分の見える風景がおかれていたりする。佐多はフランス風の感覚の見られる美しい静物をときに小脇に抱えてくることがある。滝井は諷刺的な筆致で描いた紳士や、煙草屋のかみさんの頬のふくれている図などのスケッチをみんなに廻して見せていた。櫛本には船頭夫婦が一緒に棹を押して舟を進めている風景や役所の給仕の睡そうな顔のスケッチなどがあった。

あるときはその日見て来た展覧会の批評に、当るべからざる気概で一層高くなっていることがある。がまたあるときは、藤沢が、やま気のある父のためにすっかり倒産をした大きな家の中で今頃になって水仕事をしている母の話をすることもある。その母のためにばかり、貸金の取り立てに藤沢は出向いてゆき、人を喰った株屋の家に黙って坐り込んで、半日もいたことなど話す。櫛本が、その株屋の不埒さをなじり自分の事のように気負うと、藤沢は、株屋なんてどうせそんなもんさ、と胡坐の膝を揺すって天井を見ている。笠木は無遠慮に笑い出し、それで櫛本も急におかしくなって突拍子もない笑い声を上げるが、知りもせぬ株屋への罵詈はまだやめない。

次の土曜日の午後、櫛本はこの部屋を自分ひとりのものにした。きつい男の体臭や、絵の具の匂いなどが入れまじって独特な臭気に染みついていて、傲った貧しさと、妙に整理された乱雑さで一種の雰囲気がつくられているその部屋は、初めから宗代には、何かしらの魅力を持っていた。

宗代はその日、いちょう返しに結っていた。男に対して自分を見せる、そういう華やいだ気分もなくはなかった。櫛本は彼の机の前に坐って、閉め切った部屋の薄暗い光線の中で、視線を集めて宗代の新らしい姿を眺めた。

「日本髪だね、それは何という髪？」

「いちょうがえし。きらい？」

「いいよ。その油の匂いは母親を思い出す。」

春の真盛りの午後であった。しもたやばかりの坂の中途には、しーんと淀んだような静かさがあった。江戸前な言葉づかいで簡単な会話をとき折交している老夫婦の声が奥の部屋から聞える。

櫛本が眼鏡をはずしてそっと机の上においた。すると額よりも高くなっている眉毛の下で蒼い瞼がすうっと吊っていて、普段よりも眼がきつく、知らぬ人のようにさえ見えた。肌のきめがひらいてゆくような、誘うようなもの憂い静かさである。二人はいよいよ身を隠すようにものを言わなかった。だがそれは秘かな深味へいよいよ誘い込んだ。二人だけを周囲から切り離して結びつけてしまいたい欲求に馳り立てた。それを最初口にしたのは宗代なのであった。

夕方に近くなり、子供たちの声が外に騒がしくなった。さいじょう山は翳ふかし、ちくまの川は波あらし、はるかに聞ゆるもの音は……

お手玉を取る女の子の歌声が、庭の垣根の外に聞えていた。ちゃき、ちゃき、ちゃき、とお手玉の落ちる軽い音さえ聞えた。

「ねえ、どうしたの。」

櫛本は不安な顔になって、自分にうしろを見せてうつむいてしまった宗代に声をかけた。

「どうしてそっちを向いているの。こっちへ来たらいいじゃないか。」

無理に宗代の顔を上げさせると、彼女はぎこちなくほほ笑んだが、櫛本は宗代のその表情の奥にたたみ込んでいる感情を摑みたくていらいらした。どうしたんだ、と櫛本はその顔を揺さぶった。宗代は泣きそうな顔になり、あなたの目に触れぬところへ行ってしまいたい、とつぶやいた。

櫛本はそういう宗代の表情に、過去に繋がる虚無的なものを見るような気がし、

「何故？」

と、語気を強くした。

「自分が、やっぱり下らない女給と同じなのじゃないかとおもって。」

「少くとも僕とのことで、そんな妙なことは言わないでもらいたいね。自分で自分を汚すことじゃないか。くだらないよ。」

「ほんとうに。」

と、宗代は、芝居がかった自分の言葉も羞ずかしくて、淋しそうにうなずいたが、

「私、かえります。」

「駄目だよ、確かりしなくちゃ。」

櫛本は、ほんとうにこの女はこれきりどこかへ行ってしまうのでなかろうか、という気の、ふと起きてくるのを感じ、宗代の視線を自分の視線の中に捉えようとして再び肩を揺すぶった。

宗代は自分の家へ息を急いで帰ると、玄関の戸だけは静かに開けて上って行った。茶の間の宗代の母親の傍らで、ひろげた玩具の中に脚を投げ出して坐っていた女の子が、母親の姿を見ると、瞬間に、性急に鼻を鳴らして、乳を求め出した。短かい両腕を、いっぱいに母の方へ差し伸ばし

て甘えた泣き笑いをしている。
「ああ、すぐよ、すぐよ。」
宗代は台所に立って行って、乳房を拭いた。感情が細かく慄えていた。
「そんなにおなかが空いてもいないのに、どうだろう。顔さえ見ればおっぱいだね。お母ちゃんが、どんなにいいんだか。」
宗代の母親が小さい子に言っている。
カフエーカナリヤの二階では、大学生と同棲しているという、どぎつい化粧で善良な性質を蔽うてしまっているひとりの女給が、ぬくい夜の風に頬をさらしながら、歌を唄っていた。

山の頂登りきて
悲しくなりぬ、わがおもい、
ああ、われ、鳥の身なりせば……

春に思いを籠めるような哀調で歌い、宗代は宗代でそれを自分の感情で聞いた。
「いい歌ね、なんの歌?」
「ハイネの詩よ。おそわったの。唄ったげましょうか。」
と、また歌い出す。少し酔っているのか、目の縁がゆるんでいる。

山の頂登り来て、
悲しくなりぬ、わがおもい、
ああ、われ、鳥の身なりせば……

宗代は複雑な自分のおもいをその流れるような旋律にのせて聞いた。
夏になって宗代はカフエーカナリヤから、浅草の大きなレストランへ移った。もう宗代の女の子も満一カ年を過ぎたので、乳を離してもよい、と彼女は考えたのであったし、働いている店が自宅から遠くなることは、櫛本との時間をつくるのに都合がよいのであった。
それまでは子供を抱いて寝ていたのを、ひとり離れてきて、レストラン不二の裏二階に大勢の女たちと眠るようになると、夜、飲ませなかった乳房は次の日はかちかちに張り切ってしまい、しんしんと筋が痛んだ。それはまるで宗代の感情と交互にもつれるかのようで、宗代は痛む乳房に空虚を感じ、昨日まで手の内に抱いた子供の重量を我が肌に恋うた。すると乳房は筋の切れるほどに尙張ってゆき、宗代は苦痛のために顔色を蒼くした。やがて乳がしとしとと滴り始め、ぬるく肌を濡らす。それは薄紫色の絽の着物の胸にもにじみ出た。宗代は便所へ入ってゆき、痛む乳房を押えて搾り捨てるのであった。乳はあまり張り過ぎているので、始めのうちはほとばしるようには出ない。甘い乳の香が便所の中でまじる。呼吸の軽くなる思いでやっと搾り終ると、床の上にてん、てんになってほとばしっている乳を宗代は草履の先きで最後に踏み消して、ほっと吐息をした。

だが、子供への思慕の感情は、草履で踏み消すような工合にはゆかない。離れて来た、ということのためにそれは却って荒々しく募った。櫛本に惹かれてゆく自分の故に、自責の苦痛がまじって、子供への愛情は悲哀を帯びた。我が子の顔が見たい、ということは、肌に直接感じる痛みである。

子供、こども、こども、ああ、世の中にはこんなにも子供がいたのであろうか、と、宗代は始めて往来へ出たもののように戸迷いをして、道が歩けなくなるのであった。我が子の顔を、自分の手で拭いてやりたい、という願い、それは子供に離れて始めて気づくおどろくような渇えであった。自分が離れて来ても、子供が不幸になっていはしないのを、宗代は自分の場合に充分承知している上のことなのに、愛情が彼女をのた打ちまわらせるのであった。

五

電話のベルが鳴った。はっとして櫛本は顔を上げた。こんなとき、顔は伏せたままじっと耳だけ澄ましている、というようなことの出来ない性質である。電話は、筋向いの席で女事務員が、椅子から浮かした腰を卓上電話の上へかがめるようにして聞き始めた。

電話は今度も櫛本へかかってきたのではないらしく、女事務員は先方の用件に自分で答えをしている。櫛本は乱された呼吸をじっと押えるように再び机の上の、仕事上の手紙へ目を落した。が、すぐそれもやめてかくしからバットの箱をとり出して一本を抜き取った。南側の窓の外は明るい陽の光りに満ちている。午後になれば暑くなるかも知れない。黒ずむほど茂ってしまった欅が涼しい蔭をつくってその下を吹き入ってくる風が肌にさわやかであった。櫛本は窓の方へ面をむけて煙草の煙をはいていたが、重たく瞼の被さってくる気持ちはどうしようもない。瞳を強いて開くようにしてみると、気持ちを支えようとしていることがそのまま自分に感じられて、却って苛立つ気になる。

昨夜は珍らしく宗代の方から、約束なしに櫛本の部屋へ帰ってきた。

「私、うちへ帰ろうとおもったのだけど。」

部屋の入口へ坐って、同室の笠木への気兼ねのためか宗代はそう言った。そういうことも今の櫛本には彼女の余計な気遣いから、うわべのつくろいともおもわれて苦々しかった。が、昨夜はおもいがけない喜びで、櫛本はむしろ無口になり、金盥に冷めたい水を汲んで手拭を搾ってやったりした。そのあとで言い出された今日のことも尤もなようにおもわれて何も言わなかった。というのは、真夏に宗代が勤め先の店できる薄物を、日本橋の百貨店へ買いに行ったのは櫛本と一緒であったが、宗代は、もう仕立て上っている筈のその着物を、今日の遅番の時間の暇に、ひとりでその店へ取りにゆくと言い出したのであった。

「ご免なさい。」
と、宗代は軽く言った。それは仕立上りを取りにゆく時も一緒に行こうと、宗代の方から言い出した約束が、櫛本にしてあったからであろう。
今朝、櫛本は寝床の上へ半身だけ起してネクタイを結んでいた。宗代は手鏡を差し出して傍らから覗いていたが、その顔に何かうきうきしたものが感じられると、櫛本は妙に心が淋しくなり、倚りかかってゆくように言い出した。
「宗代の身体は疲れているんだから、こんな日には、ゆっくり休んでいる方がいいんじゃないのかね。着物はこの次だっていいじゃないか。それより笠木へそう言ってこの部屋で本でも読んでいたらどう。四時に銀座まで出ていれば僕も落ち合えるから、それから店へ行っても間に合うだろう。」
「だって。」
と、目を反らした宗代の固い微笑を見ると、櫛本は自分の気持ちのぴーんと弾かれるのを感じ、いつもいつもそんなことを言って宗代の気持ちに押し込んでゆく自分が明らかに難じられたようにおもった。昂ぶってゆく神経をじっと押えていたが、宗代の方からは何とも言おうとしない。
「どうしたのかね。いや、僕は今日着物を取りに一緒に行かないことを言ってるんじゃないよ、そんなことはどれだけの問題にもなることじゃないさ。そしてまた宗代が今日誰を連れてゆこうが何ともおもやしないよ。然し、僕と一緒に行こうと言い出したのはお前なんだ。それをあとで『御免なさい』の一言で取り消すのは気紛れにもほどがあるね。それがこれまでにはもう一度や二度じゃないんだ、僕は、この上どんなことをお前が言い出すかと、そんなことまで考えるほど神経過敏になってるんだ。」
「あたし、なにをそんなに約束破って？」
単純に不服そうな口つきで宗代はそう言う。
「宗代がそう思ってるのならそれでいいさ。然し、あんな店で働いているんだから、本を読む時間をつくることも考えなければ駄目になるよ。自分の知らない間にいつか荒っぽくなっているんだから。」
そう言うと宗代は急に恥辱を受けたように、
「私、荒っぽくなっていて？」
と、抗うように言い、目を据えて櫛本の顔を見た。
「ときどきそう気づくことがなかァないよ。この前だってほうずきをならしていたじゃないか。あれなんかひどい例だけど。」
「だって、私、あれは……」
子供の頃をおもい出したのだ、と言おうとするのをやめて黙ってしまった。自分をいとおしむ悲哀の急にこみ上げてきたのを、自分ひとりの感情の中で囲うように。
ひとつの部屋の中でいちばん離れる位置に枕を置いて寝ている笠木が目を覚ましたのか、向うむきのまま搔巻を上へずり上げた。櫛本は声を落して、

「兎に角、僕は出掛けるよ。」
「ええ。」
ずれた感情のままでうなずいている。
「ええって、どうするの。もしも落ち合うなら、場所も決めなきゃいけないじゃないか。」
「四時に落ち合うのなんて無理よ。」
「じゃ、やっぱりうちへ帰って着物をとりにゆくんだね。」
するとと宗代は溜息をほっと吐くように、
「行ったっていいじゃありませんか。」
「そう言うんならいいよ。」
櫛本は外へ出て、坂を降りてゆくまで、あとから追うてくる宗代を想像していたのだ。
歩き始めたみち代を連れて、外へ出掛けたかも知れぬ宗代が、朝の諍いのために悲しい顔をしているだろうとおもわれた。風に向って月を眺めしばたたく宗代の顔が、淋しい姿で浮んでくる。彼女の淋しさは櫛本の胸へもたれかかっては来ずに、頼りなく背を向けてうつむいている。その彼女の手には、無心な先夫の子の小さい手が引かれている。
今すぐに宗代の胸を叩きたい衝動にかられながら、こちらからはどこへ電話さえ通じようもないという手がかりのなさが、生々しい不安で櫛本の心をかき立てた。事務上の手紙へかかりながら、黒雲のように心を敵うてくる想いで櫛本の体はくたくたになっていた。

机の上の手紙は、如何にも中等学校の教員らしい律義な候文で書いてある。役所宛てのものだが、手紙の性質上こまごまと書かれている。二人の息子たちには親の職業柄、相当の学業もふませねばならぬことや、長女もまた、小さな町では体面上職業につかせるわけにもゆかないで、婚期を控えて金のかかることばかりであるし、後添の妻にも幼い子供のいることなどが、慇懃に、愚直なまでに書きつづられている。老教師の旺盛な生活と、劇しい生計の皺とがくりひろげられている。
全国から何通となく櫛本の課へ集ってくるこういう手紙は、一度恩給がついて退職した官吏の再び職に就いて、恩給だけがついそのまま続けて支払われていた、というとき、それが分って恩給の返還をせまられた場合のものであった。櫛本はこうした手紙のそれぞれの事情に応じて、月賦などの方法も講じる、その交渉の手紙を書かねばならない。
風がよく通すので、手紙の上へインク壺を重石に置いた。さらさらと、紙の端が風にふかれる。――宗代はどこからも電話をかけて来ないのだろうか。あのまま別れてきたことは、宗代はなんともおもわぬだろうか。櫛本の気持ちの苦労は彼女には訴えないのであろうか。櫛本の、愛情を欲する甘えが拗ねたものとなって表現されてゆくのを、彼自身苦しくおもっていることは、宗代には酌みとられないのであろうか。四時にどこかで待っていると、宗代は電

話をかけてはよこさぬであろうか。
一瞬、一瞬が、櫛本の肉体を緊張させるほどの苦しい期待で過ぎてゆく。煙草ばかりふかした舌の先の荒れて歯の根へさわるのが気になり　余計に櫛本の神経をかき乱した。五時になったら、もう店へ帰っている筈の宗代へこちらから電話をかけ、どんな罵倒の言葉をあびせようともおもう。筋の立った、思いやりのある大人の感情など自分には無縁だと、宗代へいどむように思ったりした。

六

昼休みの時間に、櫛本は椅子を並べてその上で眠ってしまっていた。痩せた顔が尙尖ってみえ、昼寝の合間にもぎりぎりと歯がみをするのが、深い疲労を見せていた。机の上では隣りの席の男が、鉛筆の先へ一銭銅貨をのっけて、唇を尖らしてふうふう吹いている。女事務員や給仕がそれを取り巻いて笑っていた。
この頃櫛本は役所の休み時間に眠ってしまうことが度々であった。彼はそれを自分ではかないものに感じた。夜の眠りが浅くて夢ばかり見、ときには恐ろしいものにうなされて目の覚めることと思い合せ、この頃の生活の疲れをおもった。二三日前の夜半にも、櫛本は夢の中で笠木の名を呼んでもがいていた。二人とも一緒に目を覚ました。笠木は無精な声で、どうしたんだ、と言い、立って電灯をつける櫛本をまぶしそうに見上げた。
「辛い夢を見てね、夢中で君を起したんだ。あんな辛かったことないよ。」
と、夢の話をすると、笠木は腹這いになって、煙草に火をつけながら、それでも優しく、
「疲れているんだろう。」と言った。
櫛本も枕を抱えて肱をつき、笠木に頭を寄せるようにして、一緒に煙草をのんだ。奥の柱時計が三時を打ち、自分たちの話し声がぼそぼそとこもった。そういうことも櫛本の気持ちに残るのであった。
「櫛本さん電話ですよ。櫛本さんいらっしゃいません？」
向うの席から呼んでいる。鉛筆の先の一銭銅貨を吹いている男がそれを聞きつけて気軽に給仕に言った。
「櫛本君はそこに寝てるよ。起こしてやり給え」何かを察しているというように。
櫛本は、はっと、答えて起き上り、電話を聞いた。電話は滝井から掛かったのであった。今度の日曜日に引越しをするから手伝って呉れないか、と言うのである。何処へ越すのかと聞くと、桜木町の方だ、とのこと。間借りかい、と櫛本と言うと、そうじゃない、と答えた。ではなんだ、と櫛本が聞きかえすと、いや、合宿なんだ、と言っている。
「ああ、もしもし。」
と、櫛本は気を変えて滝井を呼んだ。
「君、ゲルトがあるかね。」

今は無いが、つくれば出来ないこともない。何だ、と滝井が答えた。
「今日、夕方からこっちへ出て来られないかね。浅草へ行きたいんだ。」
……ああ、そうかね。ちょっと待ってくれ。
滝井は意味を察したらしく、そう言ったが、すぐ、じゃ行こう、と答えてきた。櫛本は逢う場所を決めて電話を切った。
自分の席へもどると、隣りの席の男は、まだ鉛筆の先の一銭銅貨を吹いている。櫛本はその傍らに立って眼鏡のくもりをハンカチで拭きながら、初めて笑った。危うい一銭銅貨を吹く男の、油できれいに分けた頭の毛と、濃い髯あとの顋をひょっとこのように尖らしたおかしさが櫛本の気持を泣き笑いに似たものに誘った。
役所が退けると、櫛本は途中で滝井と落ち合った。一言ずつだけしか答えない滝井の言葉を追って、櫛本は、滝井の今度越してゆく合宿というのが、ある学生たちのやっているグループのものだということを知った。櫛本たちとの外に持ち始めた滝井の生活が、だんだん濃くなるのを櫛本は身近い関心で感じたが、そういう滝井から何か肩を張った身振りで秘密を示されると、櫛本は一層声を高くして、他の話をし始めるのだった。
雷門に近い、夜店の出始めでごたごたしている電車道をちょっと這入った横町の角にレストラント不二があった。

宗代はもう店へ出ていた。まだ電灯が全部つかず、テーブルクロースのまっ白いのが店の主色をなしている奥に、空色の縞お召にこれもまっ白なエプロンをかけて、宗代はぼんやり立っていた。入ってきた二人を見とめると、はっとしてすぐ身体を動かした。櫛本は這入って来る時、瞬間に強つく宗代の顔を見とめると、あとは、宗代の案内した椅子についてからまでも、そのまま滝井との話題を大きな声でしつづけていた。宗代も黙って立っていた。
「君、なにを食べる。僕、飯を食べたいんだ。」
そして初めて宗代を見上げて、
「今日は電話をかけてよこさなかったね。」
と、声を落した。
店はまだガランとしていて、女給たちも出揃わず、便所へ立ってゆく滝井の下駄の音が三和土にかたかた鳴った。櫛本は、宗代の今夜も帰ってくることが決まっているかのように突然言い出す。
「今晩は、もう十分位、早く出て来られないかね。十分の違いで一電車先へゆくと、三十分も違うんだ。」
「今晩?」
と、宗代はおどろいて聞き返した。「だって、笠木さんに悪いでしょう。」
「笠木のことならいいよ。僕から笠木によく言っておくから。」
言い切ったが、尚同意し兼ねる色を目に浮べて弱く微笑

する宗代の人目をはばかって殊更に距離をおいて立っている姿を見ると、櫛本は摑えどころの見出せない苦しい焦慮で身を固くした。
「兎に角、店がしまったら、すぐ出て来るように。僕はその時間に来ているから。」
そのあとはもう、この人中で宗代にかける言葉はない、というように宗代にはものを言わなかった。

七

こういうような日が毎日続いていた。恋愛の中に自分の成長と生活の根拠を求めようとする櫛本が純粋にと自分の欲するままに女に打つかってゆくとき、宗代は、新しい自分の人生を、複雑な織り交ざったもので廻転させていた。新らしく生きてゆく、というよりも、再び生きてゆく、という方が当っている宗代の経験は、本能的な生活力に交互に刺戟し合い、彼女の生活に彼女の気づかぬひとつの色調をつくっていた。自分を縛っている常識の掟に抗って感情を櫛本に投げかけていった宗代であったが、そのことと同時に、世俗的な人生に敗れた者の振けた理性が、彼女の支えになっていた。
何げなしに両方の掌を合せた時、その右手の指が必ず上になっているというのを、自分の組み合せて差し出した掌で示し、ね、と宗代は櫛本に言って、
「こういうのは、理性的なんですって。」
と、薄ら笑いをした。
そういう、少女のような動作も、櫛本は笑い過ごすことが出来ず、胸に問えさせた。
藤沢や笠木たちと一緒にいるとき、
「君、女が理性的というのはどういうのかね。」
「誰だいそういうのは。」
と、藤沢が悪意のない突っ放し方で言うと、櫛本がきょろっと目を動かして、
「宗代さんだよ。」と、笑う。
櫛本はまるで自分も第三者のような言い方で、
「人間が常に理性的だなんて、淋しい、悲しむべきことじゃないのかね。僕は理性のとなりにいる本当でない理性なんて、軽蔑するね。」
「まあ、そう激昂するなよ。なアに、あれは理性的なんじゃないよ。」
藤沢は多少おどけてとりなすように、
「あれは、なんだね。まあ、いわば冷めたい情熱とでも言うんだね。」
と、自分の表現を楽しんだ。
櫛本はちょっと考えるように間をおいたが、まるで論争でもするように、
「いや、僕には分らんね。冷めたい情熱なんて、そんなものは分らんね。」

すると藤沢は、ふーむ、と言ってわきの方へ振り仰ぎとんとんと膝を揺すり始める。

櫛本のそういうもの足りぬおもいは、彼一図な求め方をいよいよ煽っていた。日曜の朝、宗代の店の近くまで送ってゆくとき、雷門の停留所で別れたまま、うしろからいつまでも見送っている櫛本に対して、宗代は一度も振りかえらずに横町へ曲ってしまう。すると櫛本は、朋輩の間で時間のやかましい店を気にして心急いでいる宗代を、なるべく引き止めて彼女の心をくさらせていたことは気づかず、横町へ隠れてしまった宗代のあとに自分の胸が落ちてゆくように感じた。すると櫛本は咄嗟の動作で、目の前を走り出した電車を追って真鍮の棒へつかまった。下駄の音を劇しく立てて走る彼の早さより、電車の速度は出ていた。危いっと思って手が離れた。そのとき彼は道路の水溜りの中へ踏み込んでいた。手を離していなかったら、自分は引きずられどうなっていたか分らぬ、とおもう。泥をはねかえした着物の裾はブラシをかけても泥あとはとれない。いつまでこういう生活がつづくのかとおもう。彼は小さな借家でも見つけて、朝の光線の中へ宗代を坐らせて、あの宗代の顔の真中を貫いている一種の沈んだ暗さともいうべきものをカンヴァスへうつしたいとおもう。彼のために彼女の用意した、そして彼女自身もその中へ入り込んでいる静かな仕事の時間、彼にとってはそれより外の願いはないとおもわれた。だが彼の給料日に、役所での昼飯代や、部屋代を払ったあとは、若干の絵具を買っただけで、あとは質屋の利子を払うと、もうその日のうちに蟇口は空になるのであった。自分たちの恋愛に日々辛い思いのまじるのも、お互いの身体の疲れや金銭の不如意に基くものの多いのをおもう。金が欲しいと日々齷齪するだけで、これでは将来の二人の生活の方針さえ立たないようにおもわれ、毎日のめまぐるしさで俗塵にまみれてしまいそうな不安も感じる。滝井が櫛本の眠ってからの歯ぎしりを、まるで人に挑戦しているようだ、と言い、櫛本は自分の気持ちがそうであって呉れればいい、とおもうことさえあった。その頃、役所の小使いが投身自殺をしたり、若い事務員が続けて三人も病死したりするのを見ると、彼は自分の思想が悪い方へ顔を振り向けるのを感じる。藤沢は櫛本の描く絵を批評して、君の絵は、疲れた君の休息所のようで、今のところ疲労と困憊は君の運命のように纏いついている、とこの頃の櫛本の毎日をも指摘するように言い、櫛本はその評言を承認しなければならぬとおもった。

然し櫛本の恋愛に求めるものは生活の中にしかなかった。虚無というも厭世というも、それは思想の上にとどまり、やはり自分は生きたい、とおもう。この気持ちは宗代の過去の事件に関りなしに若い彼の思想として現われた。虚無や厭世が思想を出でず生活と分離しているところに矛盾もあるのだと思う。だが結局自分は生活の愛好者なのだとおもうのだった。それは宗代の、ときに人をも自分をも

突っ放した態度に、恋愛の感情で反撥した。自分の手で、自分の感情をかき抱くようにしてそれを宗代へ傾ける。そのとき、ふと言い出される宗代の不遜な言葉――そういうあなたの熱情がいつまで続くものでしょうか、と。

するど櫛本は、そんな宗代に何かしら荒々しい厭なものを感じ、同時に自分の姿も自嘲的に思い浮べられる。が、自嘲が卑屈に通じるのをおそれ、自嘲などに陥るものかとおもった。

そういう櫛本だったから、同宿の笠木に対しても、彼の生活への思いやりは出来ず、むしろ自分の心のままぶしつけに振るまっている。宗代へかける自動電話のボックスの中で、ふと笠木の今日の昼寝の顔が浮んでくることがあったとしても、それは自分のための寝不足からだ、という風に櫛本のはやる心を押しとどめはしない。

ある夜は、宗代を待ち合わせる場所で逢えなかったと言って、帰って来、宗代の来ていないことを知ると、十二時過ぎた時間をまた外へ出て行ったり、諦めて笠木の傍らに床をとって寝たかとおもうと起き出したりして、笠木が大人っぽく言い出すこともあった。

「もう来ないのは分っているよ。それを何もそんなにひとりでかたかたやっていたって仕方がないじゃないか。明日になれば分ることじゃないか、もう寝ろよ。」

するど櫛本は突っかかるように、

「そりゃ君には来ないのは分ってるかも知れないさ。然し僕にはそんな、かたかたやっても仕様がない、という風な気持ちは分らないよ。僕にはそういう考え方は出来ないんだ。たとえそれが僕の愚直な熱情であっても、僕は自分の感情に従うより仕方がないんだ。」

「何もそんなことを言ってはしないじゃないか。」

櫛本は尚、言いつのったが、やがて疲れて、蟀谷(こめかみ)のずきずきと波うつようなのを指さきで押えてまるで泣き寝入りするように寝入ってしまう。

そしてある夜、櫛本は、笠木がもう蚊帳を吊らねばならぬ、ということから言い出して、からむようなもの言いするのに、自分の方から、部屋を出ようとおもうことを切り出した。

「その方がいいよ。」

と、笠木が顋を横に引いて言う。

「ふむ。」

と、櫛本は自分のことだけに頬に血ののぼってゆくのを、眉根でしっかり押えるようにして続けてしゃべった。

「そりゃ僕も心に変調を来しているのだから、ずいぶん君にも我儘をしたとおもう。だが、今になって、これまでのいろいろなことまで打ちまけて批難される筋はないとおもっている。それは君も承知して呉れなければ困るよ。いわば君の好意に甘えたことが僕に悪かったとしても僕の方は君の好意として受け取っていたんだから。」

「そりゃそうさ。然し君のやり方は少し行き過ぎている

よ。兎に角別になるのはいいよ。出るとすれば、僕が出てゆく手はないからね。」
「そうだよ。その言い分はいつもの君の態度じゃないか。」
櫛本の心には、櫛本たちのことに関してはもう手を引く、と言ったという久能浩造の言葉も思い出されてくる。それらが全て宗代の姿の上に重なって思い浮んでくる。風の強く吹く晩で折から坂の下に消防自動車のサイレンが烈風と競うように聞え出すと、櫛本は、盛り場の宗代の勤め先などに、もし火事があったらどうするのであろう、と今の気持ちでそんなこともおもい、それ以上は笠木に言い立てることも控える気になって、この月末までに金をつくって越すことにしようと、おだやかに話をつけるのであった。すると二人はどちらも気が折れ、めずらしく十時半という時間に電灯を消して寝てしまうのであった。

八

八月末になって、久能浩造が家族ともども信州の山へ避暑に行くと、笠木は久能のアトリエで留守をすることになって、櫛本たちの部屋の問題は一先ず解決を先へ延ばした。櫛本は役所が半日だけの勤めになり、久能の主宰する画家の展覧会が秋にあるので、それへの出品画にも取りかかるようになった。彼は田端と駒込の間に懸っている一つの陸橋の端から、線路の土手の上をだらだらと曲った坂になっている、木の茂った小路の真昼の風景を選んでいた。宗代はもう毎日櫛本の部屋から浅草の店へ通っている。

昼過ぎに、櫛本と宗代は一緒に部屋に帰って来た。炎天の下を歩いてきたばかりでない疲れが、二人の悲哀さえ浮べた顔に現われていた。まるでたどりついたように宗代はくたくたと畳に坐り込んでしまう。櫛本は白い服の上着を脱いで、縁先に火鉢を持ち出して、新聞紙を丸めて入れ火をおこした。
「帯でも解いたらどう？　今、水を汲んできてあげるから。」
櫛本は先ほどの自分の行為を恥じていて愛情をこめて言う。宗代はがてんがてんをして、障子があけてあるので隅の壁側に身を隠して藤色の博多の帯を解いた。この家の老人夫婦にも顔を合わせることを避けて、宗代はなるべく部屋を出ないのであった。櫛本はそれを承知していて台所へはいつも自分が立って行く習慣であった。

二人でお茶でも飲もうと、この暑さにも構わず火をおこしたり、水を汲んだりする櫛本を、宗代は悲しい目で見ていた。どうしてあんなにまるで気が狂うたように猛り立つか、彼女は櫛本の気持ちが分らない。彼女はこの頃暫く実家へ帰らないので、親たちに怪まれるという気もあったし、みち代の顔を見たいという、秘かに積み重なっていた願いで、今日の遅出の時間をうちへ行くつもりをしていた。そのつもりは彼女ひとりの心の中で固いのであった。

それは櫛本も承知していい筈だった。櫛本の役所の帰りを一度店へ出て掃除だけしてきた宗代が途中で待ち合せて、一緒に外で食事もした。それなのに櫛本は今日も、宗代を自分の部屋へ連れて帰りたい欲望を押えることが出来なかった。それを拒むときの宗代の顔は、櫛本の沸騰する情熱を曲げてしまうようだ。「だって」というときの宗代は、まるで、自分の家を背後にかばって櫛本の我儘をなじっているように見えた。そんなにお前とばかり喰っついていられるか、家には父も母もいるし、赤ん坊さえいる。お前の熱い思いとは、お前の勝手な我儘だ、という風にさえ櫛本に見えた。

二人は、不愉快な食事をして、食べ物やの店を出ると、ぐずぐずと別れるともなしに上野の山下を公園の方へ歩いていた。ゆるい傾斜をなしている広い道は閑寂で、右手の樫の木の下で蟬がしきりに鳴いていた。

「どうするのかね、来ないんなら、いつまでも一緒に歩いていても仕様がないだろう。」

憤っているので余計に鼻すじが立ったように見える顔を振り向けて櫛本が言った。宗代はもしこれで櫛本が帰らせてくれるならばという願いで、頼むような色を浮べて、

「ええ。」

と、視線をかえした。すると櫛本は、

「ええ、とは何だね。それじゃ来ないのか。」

「あら、まだそんなこと言っているの。何のかのって言って、いつでも、どうしても自分の言うとおりにしようとするのね、一度位、私の我儘をとおして呉れたっていいじゃァありませんか。いやだわ……」

と、宗代の言葉のまだ終らぬうちに、櫛本は、

「なにっ！」

と、叫んで、いきなり躍り上った。瞬間に宗代の前へ廻った我が足で彼女の足元を払った。宗代は、はっとして櫛本の服の胸にしがみつき、倒れるのを防いだ。彼女のかざしていた琥珀織のまっ白な洋傘が急に横に倒れ、まっ蒼になった櫛本の顔が宗代の目に大きく映った。

「御免なさい。行くわよ。行くわよ。」

自分も喘ぎながら夢中で櫛本をしずめた。

瞬間に行われた狂的な振るまいは、衆人の視線を集める間もなかったが、宗代は、身の隠しようもない白昼の広場で前後を忘れてしまう櫛本に恐れさえ抱いて、病人を連れるように櫛本の腕を取って急いだ。

激昂した感情のあとで、部屋へ帰ってきた櫛本は、濡れるような情緒にあふれていた。壁に喰っついて横坐りにうつむいて、惰るく帯を解いていた宗代は、やがて堪えかねたようにすすり上げた。

「およし、泣くのは。」

櫛本は、身体を荒々しく持ち扱えば自分も一緒に込み上げて来そうになるので、抑制した静かな足どりで畳を歩いてきた。

「今井戸で汲み上げてきた冷めたい水だよ。さあ、顔を拭いてあげよう。疲れたのだ。少し休みなさい。もうすぐお湯が沸くから、そうしたらお茶でも飲んで。」

諦めた甘えで宗代は、櫛本の腕の中で目をつぶった。そのままで、

「始終始終、こんなに子供のことで喧嘩して、あなたにも悪いとおもいますの。……でも、私も可哀想でしょう。」

「ああ、いいよ、いいよ。」

「あなたが、もっと早く、二、三年前に私の前へ現われないから悪いんだ。」

「だからこれから善くやってゆけばいいじゃないか。ねえ。」

「だって、こんな子供なんかいる女、きっといやになるでしょう。」

「もう止そう。お互いに疲れているときは自分でも知らずに昂ぶるのだから。四時位まで昼寝をしなさい。僕が起してあげる。」

坂へ向った壁の下の隅に半間ばかり細くあけてある窓からそよそよと吹き入ってくる風は、不思議に冷めたかった。やがて櫛本は宗代のために枕を出して彼女の身体を寝かせ、一日中三和土の上に立ち疲れて、始終ほてっている彼女の脚を自分の膝にとって揉み始めた。宗代は閉じた瞼の上に感情の蔭を残しながら、それでもいつか風に吹かれて穏やかな寝息を立て始めた。

九

秋の展覧会で、藤沢は画会賞を貰った。夏中をそこに過ごした八丈島の、老いた農夫とその孫の不具な男の子を描いた大作であった。くたくたと全身は赤児のように祖母の手に抱きかかえられ、そこだけ発達したでっかちな頭が、画面の正面でがっくり垂れているのは、不気味な強さで迫っていた。孫を抱いた祖母の手に皮をむいた唐もろこしが握られている。

櫛本たちのグループは、一同が藤沢の賞に入ることを希望していた。だから、藤沢が賞を貰うと、それは一同を活気づけた。

「あの不具の子の頭を、正面に持ってきたところにこの画の成功もあるんだが、然しあそこに藤沢の陥いる弱点もひそんでいるんじゃないのかね。」

グループだけが藤沢を祝う意味で、上野山下のカフエーへ集まった、その席上で櫛本が言った。青いリノリューム張りの広い二階の隅で、藤沢を中にして笠木、櫛本、佐多がおり、滝井も来ていた。

「ふん。」

と、藤沢は、あとの言葉を待つようにうなずいていた。滝井は、テーブルの上でバットの空箱を細かく裂いて、それを組み合せなどしながら櫛本へ視線を向けた。

「つまり、それはどういうのかね。」
「いや。」
と、櫛本は声を高くして、
「あの子供の頭の線は、藤沢の神経の太さでもあるとおもう。だが同時にその神経の太さの中に、弱さ、といってもいいのじゃないかとおもうが、ある暗さがあるようにおもうんだ。僕はそれを藤沢のために警告するね。」
「ふんふん。つまり君の言うのは、あの不具な男の子の頭を描いた線に、藤沢のニヒリズムがあるというんだね。それなら分る。」
「ニヒリズムでもいいとおもうんだ。だが、……」
櫛本は自分の感覚に受けたものがうまく表現されず、別の面から言いつづけた。
「あの婆さんの表情には、つまり、あの悲しそうな表情の中には、主観の上に或る安易な甘えが認められないかね。少し酷評だけど……」
すると佐多がそのあとで、少し吃り癖のある、彼の人柄を現わすような独特のなだらかな声でつづけた。
「そういうことは言えるね。あの婆さんの顔はも少しぽかんとさせてもよかったんじゃないのかね。悲しそう過ぎるよ。」
そして、自分の言い方を自分で笑った。笠木が佐多と全然違う太い声で、
「いや、あれは、少しあの婆さんの顔に蔭をおとし過ぎたんだよ。藤沢がニヒリストならニヒリストで、もっと徹底すればいいよ。」
罐詰めの酒を滝井は手酌でやりながら、
「いや、あの絵には愛情があるよ。ニヒリズムの蔭があったとしても、あれはニヒリズムではない。」
そう言う滝井は、今度の展覧会にも出品しないようなことを言っていたが、間際になって、神経の走った、藍を基調にした机上静物を出した。彼がその頃、あの万年筆工場で応援演説をした、という噂を聞いて久能浩造は、櫛本たちがアトリエに集まっているとき、不安げな顔でほんとかね、とただした。
「ほんとうですよ。」
と、笠木は久能の気遣いを笑うように軽い調子で即座にそのとき答えたのであった。
藤沢は給仕の女にまた酒を言った。藤沢は話の間にもときどき自分の意識が、この女のあとを追っているのに気づいている。緑の地色に黒と白の五葉松のとび模様がある錦紗を、抜き衣紋などしないできっちりと高い襟に詰めてきている若い女であった。背丈の割りに丸い色白の張りのある顔である。グループでも、何となしにこの女のために藤沢の今日の会はこの店に選ばれた、という風であった。
藤沢は広い背をうしろに反らしていたが視線だけはいつものように常に彼ひとりのところにおいていた。
「やっぱりあの対象にどこかで負けているんだね。」

と笑う。美しい白い歯である。
「いや、然し、よくあそこまで追求したよ。なかなか出来やしないよ。」
と、櫛本は今度は藤沢の肩を持つのであった。
その夜みんなと別れると、櫛本は上野の山をとおって鶯谷へ出、根岸の新らしい部屋へ帰って行った。寛永寺坂とその中途から日暮里の方へ通ずる道は、今丁度広いアスファルト道路へ舗装工事中であった。櫛本は泥や砂利の積んであるがらんとした路を少しゆき、音無川と名称だけ昔のままに伝えた大きな溝について左へ曲った。少し行った右手の裏側に、櫛本の今度二階を借りた貧しい日本画家の家がある。
日本画家の妻はいつものように下へさげた電灯に寄って、仕立てものの針を運ばせていた。
「はあ、お帰んなさい。」
剽軽な声で言って振り向いた日本画家はもう四十を越えている年齢に見えた。女房のそばに中腰になって、派手な錦紗の布のまだ裁ってないのを畳において、端からそれを棒に巻きつけている。
「奥さんのお手伝いですよ。」
と、自ら言う。すると、頬骨の高いのが夫に似ている妻も顔を上げて、
「裁つのにね、一度こうやっておいて貰うと、とてもやりいいんですよ。」
「なにね、ひとつでも余計に縫って貰おうとおもってね。貧乏絵描きの女房になって、母ちゃんも苦労するんでさあ。」
櫛本は仕様ことなしに空ろ笑いをして二階へ上った。電灯をつけると、焼けた畳は佗しいが八畳の部屋に床の間も、縁側もあった。
まだ宗代の帰る時間までには一時間はあった。十一時に店が閉まり、坂本の市電停留所へ降りるまでには、十二時近くなる。櫛本は部屋の中がその日は朝から掃いてないらしいのを見て障子を開けて、掃き出した。電気の灯りが向いの板壁に反射して、櫛本の影が大きく動いていた。如何にもこの辺りらしく木犀の匂いがただようてくる。秋の夜らしいひんやりとした空気であった。暫くののち櫛本は再び寛永寺坂をとおり、坂本二丁目まで行ってそこの角でいつものように宗代の帰りを待ち始めた。
帰りは時間を急いで、つい店での着物のまま帰ってくる。するとそれは遅い時間と照らしてすぐに彼女の職業柄をそれと分らせる。そういう女を毎夜迎えに出る自分の姿が、他所目にはどんなに映るかを、櫛本は想像することはあったが、自ら卑下したことは一度もない。今夜も幾らか肌寒くなってきた用意に、小脇には宗代の羽織が包みもせず無造作にかき込まれていたが、考えることは仕事への不確定な希望であり、茫然とした恐れであった。今夜の藤沢の会と自分の間借りの家の主人夫婦の姿とが櫛本の脳裏に

あったそれを刺戟した。
電車から、夜更けの乗客らしい四、五人の男や女と一緒に宗代は降りてきた。顔を見とめ合うと櫛本は先へ立ってやった。歩き出し、あとから来る宗代が近づくと羽織を出してやった。
「今日は、藤沢さんの会、どうだったの。」
お召の着物の上に銘仙の羽織をはおると、肩さきがほっとし落ちついた。
「うん。」
と、櫛本は言って、寒かっただろうと見返った。
「もう、何だか寒くなったことね。あなたの袷早く作らなけりゃ。」
「なに、まだいいよ。」
櫛本はセルの裾をけって歩いている。宗代は今はもう妻らしい心遣いを見せて、櫛本の姿をちょっと横から眺めるようにした。
「だって、もう、セルはおかしいのよ。」
そうかね、と言うが、櫛本はそこに気がないようにどうでもいい調子だ。すると宗代ものん気になり、身体を寄せて歩いた。
「今夜、おもしろかった？」
「うん。」
と、櫛本は言ったが、自分の心の中の莫とした不安には、ちっとも関りを持たぬような単純な宗代の言い方に彼自身気づかぬままで、軽く反撥してゆき彼女の心をそそるように、自分の才能が将来への何らの保証をしてはいないことや、それにも拘らず無為に過ごす自分への不満などを言い始めていた。不満を言い、同時にすぐあとにそれをくつがえす自分への信頼の言葉も出てくる。友達のそれぞれへの期待や、それと一緒に自分ひとりのひそかな認識など、夜路に響く声で言い、足の調子もそれにつれて高くなっている。
「なにしろ、昼間務めているんだから、駄目だよ。」
誰に当るというのでもなく最後にそう言った。
「そうねえ、いっそ、お勤めやめたら？」
すると宗代が軽く言った。櫛本は、はっとしたように、ふうん、と言葉をおさめた。が、もしかすると、自分がそれを言い度かったのかも知れないとおもう。然しまた、宗代が今の働きに慣れて、櫛本に職をやめろ、ということさえ、不安や拘泥のなさで言うと、それにもじっと目をそそぐように、すぐには返事も出来ない気でいる。
「ねえ、そうなさいよ。大丈夫だとおもうの。暮しの方。なんとかなるわ。」
「そりゃ、そうだよ。然し、お前だって、いつまでもああいうところに働いているのはよくないからね。」
「私。私なら大丈夫。」
二人は部屋へ帰ってきていた。この部屋へ越して来たとき、宗代はそれまでの自分の、実家への不安や、笠木たち

への気兼ねや、子供への愛情や、それへの自責に似たものからも遠去かって来た感じで、単に家が新しくなった、ということ以上に、ほっと甦るおもいで、毎夜、帰ってくる毎に、座敷に坐っては見廻した。
「あたしたちの部屋は、いいわねえ。」
と、言うのであった。実家からひそかに持ち出して来た鏡台さえ今は窓の障子を背にして、赤い鏡かけをかけて据えてある。
「さあ、おいで。」
火鉢で沸いていた薬罐の湯を、たたんだ手拭いにかけて濡らしながら、櫛本は宗代を呼んだ。手早く着更えた着物の襟を合せながら、櫛本の膝へきて顔を仰向けた。熱い手拭いが彼女の顔を蔽うてしまい、白粉の甘い匂いが櫛本の顔へもかかる。やがて手拭いがとられると、赤く上気した頬が、ぽっ、ぽっと湯毛を上げて現われ、それを櫛本は、指先に巻いた手拭いで丹念に、鼻筋から頬へ、目の縁へと白粉を落してゆくのであった。櫛本は毎夜のこの仕事を自分で決めてして、女の肌がこもるように匂いながらつやつやと独活のようにも、また果物の皮のようにも拭き上げられてゆくのを楽しんだ。その日一日の彼女の店での塵を、気持ちの中からまで拭き取るようなつもりもこめていた。
宗代は肌の痛いほどこすられるのにそのまま任せながら、下から櫛本を見上げて言う。
「この部屋へ帰って来て、一歩部屋へ這入ると、瞬間に、不思議に決まって頭の中が痒くなるのよ。今日それを店で言ったら、みんなが笑うのよ。何か妙な風に笑うんだけど言いわけをするわけもゆかなくなって、とても恥ずかしかったわ。」
それには返事もせずに櫛本は言った。
「僕が役所をやめても、宗代は不安でないかね。」
「私、その方が却っていいとおもう。」
宗代は極く自然に、櫛本の生活にいつか自分の希望を結び合せているという風で、気負い立つほどの期待ではなくとも、彼の進む道には不安や危惧も抱かないように言うのであった。

十

暮から正月へかけて浅草の宗代の店も忙しかった。松の内などは、宗代は、店中お揃いの派手な裾模様をきて帰って来たが、塩瀬の薄色の丸帯を解くとき、帯と胸との間にかき溜められたその日の収入は、櫛本のかつての一月分の給料にも比べるほどあった、櫛本は両掌にその銀貨を掬うようにのせて、
「なんだかこわいようだね、いいのかね。」
と言った。
「だって、お揃いの着物の代だけだってずい分よ。お揃い

の代が出ない人もあるかも知れない位ですもの。」

浅草の店の内情が、やっとこの頃になって、ひとりひとりの女給たちの生活もいっしょに、宗代に分ってきていた。若い素人娘のような芸者を落籍して妾にしている店の社長は、店の収入を他の関係会社の方へ全部つぎ入れているということで、店の手入れはちっともされず、店の華やかな空気を、女給たちの衣装でばかりつくろうとしているお嬢さんかとも見え、また当人もそのようにつくろっている女が、素早い荒稼ぎもやっている。しかもその小さなた。また女給たちの方では、ちょっと見るとおちぶれた家女ひとりの身体に負わされている生計の必要はいわば無限であって、そのために小さな身体はきりきり舞いをしてい、目は鷹のようにもなっている。みんな親に従順で、弟妹おもいで、そして男にも惚れていて。

これらの事情が宗代にやっと半年も経って解ってきていた。そのように奥深く激しかった。たまには「さっきお母さんがきて、今日中にどうしても三十円つくってくれ、って言うのよ」とくさった顔をしていう娘もいた。血の気ない顔に紅をつけてはいるが、弱々しく目ばかり大きい娘で、厚い帯を巻いている胸は折れるように薄い。昼過ぎにコック場の入口で、小さい子をねんねこで負ぶってきていたのが母親なのであろうと、宗代はおもう。その夜どこかへ客と出掛けるらしい娘の素振りも、昼間の話を聞いていれば、それは痛々しいばかりであった。

朝も電車に乗るところまで一緒に来て、夜は必ず迎えに出ている櫛本に、途々宗代はそういう話をして聞せた。櫛本は、若い男たちが主観的な華やかさと甘さとでばかり求めているのを、女の側から眺めるようなときもあった。

「藤沢さんの女のひと、その後どうして？　あんまり言わないらしいわね、この頃。」

「自然に遠去かったらしいね。一度は藤沢の下宿にも来たんだからね、藤沢がもっと積極的に出りゃよかったのさ。駄目なんだ、あいつ、坊ちゃんで。」

藤沢の祝いの会をやった上野のカフエーの女のことであった。宗代もあるとき、櫛本や藤沢や佐多たちと一緒にその店へ行って、女を見たことがあった。

「いい人だったのにね。」

「いい娘さ。」

櫛本は、藤沢が折角彼の下宿へまで来た娘に対し、同じ部屋にいて却って口もきけず天井ばかり見て貧乏ゆすりをしていたのだ、と歯がゆがる。父親に内緒で藤沢の絵具代を出していた母親のためにも家を出ることがよかったし、彼の生活の転換にもなるので、藤沢は秋の展覧会のすぐあと、上野の山のうしろ手へ下宿をしていたのである。そういうときの彼の恋愛だったので、それに対して藤沢の気の弱い、ということが、ただそれだけとして笑い過ごすことが櫛本は出来なかった。藤沢が初めて今日、外で女に逢うのだという日も、宗代は丁度時間の都合がよくて櫛本とい

っしょに上野の公園まで出ていて、藤沢とそこで別れた。
「駄目だよ。しっかりやらなけりゃ。」
これから女と待合わせる約束の場所へゆく藤沢に、櫛本は肩を叩くように言った。藤沢は、うん、とうなずいて微笑し、ひとり不忍池の方へ石段を降りて行った。宗代は櫛本に並んでベンチに腰をかけて、背の高い藤沢のとっとっと歩いてゆく姿を、広く見渡せる下の方に遠くなるまで見送っていたが、やっぱり思いを内にひそめているような藤沢の顔の向け具合は、淋しい蔭を持っていた。初めての逢引に行く友達へのからかい気は出て来ずに、甘いおもいやりで涙ぐましくなるようなうしろ姿なのであった。
その上に、これと前後して藤沢は、下宿から態よく追い出されたという挿話を持っていた。あんまりお荷物が少いから、と下宿のかみさんは言ったのだという。柄の大きい、容貌は立派なのに、どこか暗くて人を寄せつけない彼の印象が、宿のかみさんに恐怖を感じさせたのにちがいない。藤沢は櫛本に手伝って貰って下宿を変りながら、人生的な感傷をそれから受けていた。
ある日、宗代は遅番で、二階の廊下で二人の食事の支度をしていた。ふと立つと、表通りから入り込んでいる石畳の上を滝井の歩いてくるのが見えた。両方の腕に風呂敷包みを下げているが、重いものらしく、腕がまっ直ぐ長く垂れている。洋服に足駄ばきで、足駄の歯が石畳の上に性急な音を立てる。二階を振り仰ぐこともしないでやってくる。
「滝井さんよ。」
「ああ、そう。」
櫛本はカンヴァスの前を離れた。初めて宗代の顔が描き始められている。宗代はさっきまでモデルの椅子にかけていた。
「田舎から餅が来たのでね。」
風呂敷を解くと、重い音を立てて、厚味のあるひびの入った餅が、黒豆や、青海苔などを入れたかき餅といっしょにひろがった。
「こんなにたくさん?」
いいのかしらというように、滝井から櫛本へと宗代は視線を移した。
「僕は焼いて食うようなときもないから。」
「じゃ、今焼こうか。」
男たちは、餅を焼きながら、話し出した。
「君が、この間の手紙で、芸術を捨てようか、とおもう、と言ったことね。」
「ああ、あれ。」
と、滝井は長い指で焼けた餅を二つに引きながら、
「いや、あれはちがうよ。あれは思い直した。芸術を捨てるというようなことはなかなか出来ることではないし、第一間違っているね。」
「そうか。そんならいいけれど。君はやっぱり絵を描いて

ゆく人間だとおもうし、新しい社会に芸術がない、ということも考えられないし、むしろ芸術にとっても自由である、ということがなければ、新しいものも意味がないとおもうからね。」
「いや、君の言う意味とも少し違うとおもうがね。」
「そうかね。」
「兎に角、僕は芸術は捨てないよ。」
「鷹司さんが、佐多から君の話を聞いて、大層心配しているそうだよ。君に逢い度いと言ってたそうだ。」
「そうかね。鷹司さんの家へ行ってもいいな。」
「一緒にゆこうか。」
二人の話を聞いていて、宗代はいつかの夜櫛本と一緒に田端の駅へ行ったとき、鷹司良介と一緒になったときのことを想い出した。それは宗代が実家へ帰るという日のことで、櫛本は彼女を実家の前まで送ってゆこう、と夜更けの田端の駅へ一緒に下りたのであった。
「ああ、鷹司さんだ。」
坂の上へ出る駅の南口は夜更けのことでもあって、他には一緒に降りた人もなかった。櫛本は、羽織の裾の広がって見える痩せた鷹司のうしろ姿を認めて宗代におしえ、あとを追った。
宗代は、六、七年前に鷹司良介を度々見ていた。宗代がある書店に勤めている頃、鷹司はそこでよく外国の画家たちの画集を買ったりしていて、当時すでに画壇に颯爽たる鷹司良介は、少女の宗代にもおよび難いあこがれで強く印象に残っていた。櫛本たちの師事する久能浩造が鷹司良介と親しいので、櫛本たちのグループも鷹司のアトリエへ出入りしている。
鷹司と並んで行く櫛本の少しあとについて歩きながら宗代は、かつての憧憬の人に今度は近しいつながりで逢えたことを運命のめぐり合せのようにもおもった。それは櫛本との結びつきを彼女が非常に人生的に感じ始めているからなのでもあっただろう。
そういう感慨で、宗代はひそかな視線を鷹司のうしろ姿に投げていたが、やがて彼女はいぶかしい驚愕のおもいで目を見張り出した。鷹司の歩き方はどうしたのであろう。素どおしの電球が小さな電柱の先にともっている、狭い泥土ばかりの急な坂道を降りていたが、鷹司の背の高い身体が少し前こごみに、ひょろひょろと浮くように歩いているのだ。浮くような感じは上下だけにあるのではなくて、それは左右にも揺れて見える。両方の脚がまっ直ぐに前へ出ずに、入り乱れて交されているようだ。それを辛うじて保つために上体を浮かしているようで、まるでよろけながら跳ねているように見える。それは酒の酔いで乱れている足元ではない。宙を泳ぐようなその肩つきにも、深い疲れが見えるように宗代はおもうのであった。
かつての凛とした姿に比べてひどい変り様なので、そのとき宗代は、漠然とながら芸術の世界の激しさというよう

なものを考えたのであった。
そのときの印象が、滝井の思想的な、芸術上の動揺について関心を寄せているという臆訶に対して思い合されてくる。
櫛本と滝井は再び、新しい社会認識と芸術について語っていた。

十一

酷寒の候も過ぎて行った。夜更けて帰るものに刺すような寒風は身に応えた。いつも宗代の乗り換える車坂の停留所は、上野の駅がまだ田舎びたがらんとした大きさで暗がりを奥にひろげているところに、焼木材の柵を境いにしてあったので、場末の荒々しさと佗びしさがあった。筑波颪さえ吹きとおるようであった。氷の中にいるような冴返る月の夜に、足先のしびれてゆく停留所の石畳の上で、浅草の盛り場へ飴を売りに行った朝鮮の女たちと一緒になることがある。白い上着の肩をすぼめて寄せ合い、三四人で何かぼそぼそと話している。月の光りは彼女たちの白い上着に集中してそそぐように見え、寒さがそこで凝結してしまうかとおもわれた。あるときは千住、三河島方面へ帰る夜店商人や、労働者たちが睡そうに揺られている電車の中で、ひとりいた朝鮮の少女が、ゴム毬をつき始めたこともあった。飴を入れておいた四角なボール箱を風呂敷に包んだまま短かい脚を吊るようにした膝にのせていたが、ふと何をおもったのか、風呂敷の結び目をひらいて、箱をひょいと上へはずませた。すると、ゴム毬が中から飛んで出て、電車の床板にぽんとはねた。荒くれた男たちもおもわず睡そうな目を見ひらいた。少女の気性の強い弾みが、そのゴム毬に象徴されているようであった。ゴム毬だけ先にはずませておいて、それがひとりの労働者に拾われると、いやアよオ、と鼻声でなじり、それからゆっくり立って、ゴム毬をつき始めた。朝鮮少女の背には、長く編んで下げた髪の毛の先に、赤い布が結びつけられていて、彼女の身体の動きにつれて躍った。
宗代が特に朝鮮の女や少女に注意を惹かれるのは、櫛本といっしょに読み出したその頃の読書の傾向が影響をなしているにちがいないのであった。
宗代を描いた櫛本の絵は出来上った。櫛本らしい、感情の綾が、弱い色で現われていたが、それが優しい絵であるのは自然であった。宗代は、その絵に現わされた自分を見、櫛本の愛情と期待に添おうとおもった。そのように、絵の上の彼女は、実際よりも愛らしく可憐であった。然しそれはまた彼女自身がその絵を見ておもう印象でもあったから、その意味では、ひとつの型にはめて見ていた自分への目を、宗代はこの絵で破ったのだとも言えるかも知れなかった。

櫛本はこの絵を仕上げると、そのあとではあまり描くことをしなかった。藤沢や笠木との往来はますます劇しかったが、みんなもまた、日々の感情を制作へそそぐというよりは、何か混沌とした荒々しさでむやみに歩きまわるという風であった。櫛本の下駄はいつ見てもぺたんこであった。頭を刈りに床屋へ行くときの他、髯を剃ることもなくいつも黒々と無精げにのばしていた。

宗代を迎えに行って帰る道で、すれちがった若い男などが軽い冷やかしの言葉を投げることがある。すると櫛本はなにッ、と言って立ちどまるのであった。引きとめた腕のまんま急ぎ足にゆき、いやねえ、と宗代がたしなめると、なアに、ほんとうにやりゃしないよ、と笑っている。

その時分宗代の店へ、宗代と結婚をするのだ、と言ってしばしば来ている男がいたが、やっぱり画家だということで、宗代がもう結婚しているということを他の女から聞くと、

「亭主のいる女に、惚れて悪いか！」

と、怒鳴り上げた。

この話は櫛本は知っていた。ある夜、笠木といっしょに珍らしく宗代の店へ櫛本が入ってきたが、ひとり酒を飲んでいる大柄な洋服の男を見とめると、宗代にかねて聞いている人相ですぐそれと察した。わざと向い合うテーブルについて、笠木にも諜し、うそうそとその男の顔を見つめた。宗代は、素知らぬ素振りを保とうとするのに表情はこわばってゆくのであった。対手の男も何か感じ出している。

男たちは明らかに対峙し始めた。櫛本と笠木は二人連れの気強さで、うそぶくように肩をそびやかして、じろッ、じろッと視線を投げた。対手は引き吊るような青い笑いで二人の視線を受けとめている。笠木が独特の、諜りごとでも洩らすときのような不敵な薄ら笑いをみせるのは、とうとう対手の神経を切ってしまった。いきなりコップがビールの飛沫といっしょに笠木のうしろに飛んできて床に落ち、がちゃんと壊れた。同時に、小柄な厚い笠木の身体は目にとまらぬ早さで立ち上っており、椅子やテーブルが倒れた。スタンドからバーテンダーが飛んできて対手の男の大きな背に抱きついた。何か罵り立つ櫛本と、身構えた身体でまだ挑んでゆこうとする笠木とは、マネージャの部屋へ引き分けられた。バーテンダーに抱きつかれたまま猛っている男の腕が、スタンドの上のガラス器を払いおとし、ものものしい音が店中に響いた。芝居でやる遊び人のようにも見えるであろう、と宗代はひそかに羞ずかしかったが、櫛本たちの行いをとがめるほどの気はなかった。

こういうことがあるかとおもうと、櫛本はあるときは、鶯谷の陸橋のたもとで、山雀のおみくじ引きの芸に見とれていて、五円近く入っていた蟇口を掏摸とられたこともあった。

「この本の間に入れて懐ろへ入れておけばよかったんだ。袂の中へぶらんぶらん入れとくんだものね。」

本を示しながら自分で言っていた。

十二

ある朝宗代は目が覚めるとから何となしに悲哀に浸されていた。学校もお勤めももう出払ったあとの静かな一刻である。雨戸を開けると、風もなく、おだやかな陽が当っていた。柔かい空へじっと目を放っていると、何かちかちかと、可愛い赤いものが目に入ってくる。目を据えて視線の中にとらえて見ると、それは窓の先に枝の出たプラタナスが小さな芽をふき出した、その新芽の紅色なのであった。可愛い、小さいもの。ああ、みち代に暫く逢わない、とおもう。寝起きのもの悲しいおもいはみち代に繋がっている。今朝の暖かい陽を浴びて遊んでいるであろうか。すると、みち代の白い顔が子供の潑剌さではなく、怜悧な哀れさで浮んでくる。

裏の平屋の縁の奥で、ぽっかり水に浮くような新鮮な女の子の声がした。宗代は窓に身体をよせて、下をのぞいた。彼女のうしろの部屋の中では、櫛本がまだ睡っていた。

先月の末、実家で一晩泊って帰って来たとき、櫛本は意地悪を言うように、

「いやにうきうきしているね。うちへ帰る時とか、帰ってきた直後とかは、とても機嫌がいいんだからいやだよ。」

と、わざと向うを向いた。宗代は言い当てられたきまりの悪さを隠すように身体を投げかけてゆき、

「だって当分これで気がのん気なんですもの。」

「うそつけ。みち代と遊んできたから嬉しいんだよ。二人でいるときにもたまにはそんな顔をしてみろよ。」

「だって、今、そんな顔してるでしょう。」

「それは余波だって言うんだよ。」

「意地悪ねえ。」

櫛本はもう言葉をおさめて、宗代を迎え抱こうとしたが、ふと顔を引き、表情を変えて宗代の肩を突きとばした。

「なんだ、その着物の肩は、よくもそんななりで帰ってきたもんだ。無神経にもほどがある。いったいどうしたんだ。」

宗代は黒地の銘仙の羽織を手早く脱ぎ、部屋の隅へ放ったが、羞恥で頰をひき吊らし、キラキラ光る視線で櫛本にまとわりついていった。

「ごめんなさい。ほんとうにごめんなさい。」

「そういう無神経さでこの部屋へ這入って来られては困る。たとえうちではみち代を負ぶうことがあったとしても、子供のよだれのしみついた着物のまんまで、俺に抱かれようなんて、あんまりだ。」

「だから、だから、ごめんなさい。」

言葉で吐きつけられることが苦痛におもわれ、宗代はそう言ったが、心の底では、昨日はみち代が何故かいつもの

ように可愛ゆくなかったことを思い出していた。抱っこねんね、と、抱かれて眠りたいときにそう言う言葉をみち代は宗代の母の方にばかり向って言い、宗代のあやすのにはいやアんと顔を横に振った。これでいいのだ、とおもいながら、可愛ゆくない、ということが、そのままですまず、腹立たしくなるのであった。

今朝はまた何故、こんなにみち代のことがおもわれるのであろう。妙に心細くなる気持ちで宗代は櫛本を起した。櫛本は、宗代が涙を溜めているのを見て、身体でも悪いのではないか、と額へ手を当てたりした。

「今日一日休んだらどうだね。疲れているんだよ。」

宗代はきりきりと店へ出てゆく気になれず、また床の中へ入ってしまった。すると感覚が却ってはっきりとし、夢の記憶もよみがえっていった。今朝のもの悲しいみち代への愛情は、夢の続きなのであった。みち代を抱いている夢から覚めて、何かしら空虚なのであった。夢にそそられた感情だとわかっても心に残った感情はすぐに消えてゆきはしなかった。

その夜、二人が坂本二丁目の方へ散歩に出て行くと、如何にも下町らしく大通りから入った露路の奥に建築中の、小学校の校舎の下、まだ板囲いなどのあるところに物見高く人の集まっていたのに打つかった。建築場の上で賭博がひらかれていたのが今ふみこまれたところだ、という。屋上の縁を男が二三人伝わって走っている。建物が高く大きいので、人の追われて逃げるのも遠く見えて現実感がなく、奇異な感じであった。櫛本に寄り添うていた宗代は、突然にタンタン、タララタンタン、と活動の伴奏を口にし、振りかえった櫛本を微笑させた。宗代のそんなこまやかな弾み方が櫛本は珍らしかったのであった。

二人の生活は、微妙な変化を見せて、春から夏へと移っていった。

七月へ入ったある夜、宗代は櫛本といっしょに鷹司良介の書斎に坐っていた。黒地に粗い井絣のある明石が、宗代の控え目な、ものを内へ潜めた印象をきわ立てていた。鷹司良介は櫛本の画の批評をしていたが、灰色の帷子に細紐を一本締めていて、痩せた腰のあたりが不安定に見えた。いつかの夜の鷹司の疲れた印象は、いっそう深かった。それはもう疲れなどではなく神経と肉体へ喰い込んでいる何かであった。黄色く黒っぽい歯が、ガクガクみんな動いているようにも見え、小さな洞窟のようにも見えた。

鷹司はぶるぶるこまかく慄える手で宗代の前のコップへサイダーを注いだ。それから視線を宗代の顔へ移して、

「もう死にたい、とおもうようなことはありませんか。」

宗代は微かに笑って首を振った。櫛本へ憚る気持ちで、鷹司のぶしつけさをおもいながら。

「何を飲んだのです。」

そして、ああそうとうなずいて、睡眠薬の簡単な批評をした。

「身体は丈夫ですか。」
宗代が、丈夫だと答えるのを聞くと、それは大変いいですね、とうなずいた。好意のある調子でもあったし、再び距離の感じ出される平静さでもあった。
鷹司の自殺が大きく報道されたのは、この日から四日過ぎた日の朝刊であった。コック場で男たちが新聞をひろげて感情的には何のつながりもない大きな声で噂をしていた。二階の食堂でナイフやフォークを磨いていた宗代は狭い裏梯子をどどッとコック場へ馳けおりて行った――。
眠られないある朝、櫛本は夜明けの外へ宗代を誘い出した。冷めたい空気が流れるように動いていて、こわばっている頬に心持よく触れた。玄関の外に日本画家の丹誠した植木が露に濡れていた。櫛本は一株の擬宝珠の上にふとかがみ込んで宗代を手まねいた。広い擬宝珠の一枚の葉の上で、蝉の幼虫が殻を脱けるところなのであった。透きとおるような、またこもるような柔かい緑の色ですでに上体だけ外の空気に触れている。目につかぬ進み方であるが、それはそのまま時のきざみのようにも見え、生のいとなみの瞬間にも見えた。可愛い兜のような殻はまだ真珠の色をしていて美しかった。

（一九三八年五月）

廊下

壺井栄

幾棟かの病舎を貫いて真っ直ぐに通っている廊下は足を交す度にぎいぎい鳴った。風雨にさらされたように木理の浮出したところどころが少し古びたのや、真新しいのや幾通りもの板で繕ってある。そのそばへ近づくと小さいシヅエのからだの重みでさえゆさゆさするような不安定なかんじを与えた。その度に運搬車は揺れ、乗っている貸治の眉根に立皺が深く刻まれるのを見ると反射的にシヅエの眉もひそむのであった。廊下の片側に一定の間隔を置いて備えつけてある消毒液の入った洗面器や、小さい消火器など、そういうものの並んだ所にかかると、それらのものは足音に合せて複雑な金属の響き合う大袈裟な音を立て、思わずつま先立って歩いた。両側の窓からはいくら行っても中庭が眺められ、咲き放題の小米桜や山吹が到るところで目についた。白い地に黒い立縞の制服を着た看護婦や、白いエ

プロンの附添いらしい元気な顔をしたいろいろの年配の女たちが幾人もすれちがった。此処へ来るまでにシヅエたちとしては幾多の犠牲を払い、生死をかけて入って来たのであるが、そういうことも此処ではあたり前のことのように誰一人貫治やシヅエに特別の眼を向ける者もなく、何の感じも浮ばない顔つきでさっさと通り過ぎた。

途中で新しく建て増したらしい病舎にかかると廊下はコンクリートになり、足下が急に静かになった。四辻の所へ来ると、そこの壁には病院内で催されたらしい花まつりの大きなプログラムが張り残されてあり、西側には場末のカフエーなどで見るような造花の桜が俗悪な色彩りで咲き盛っている。その花の下をくぐって貫治を乗せた運搬車は尚も真直ぐ進んだ。大きな包みを抱えたシヅエは午後に傾いた陽ざしを受けて、からだ中が汗ばんでもだもだしていた。足にそぐわぬ薄っぺらな上草履の先鼻緒に指一ぱいの力を入れ、ぺたぺた音を立てながらあえぎあえぎ足早な看護婦について歩いた。ふり返って見ると、通って来た廊下がトンネルのように長く、ずっと向うを歩く人たちは男か女かさえ分らない程小さかった。

「ずい分長い廊下ですね」

お愛想笑いをしてぎこちなく話しかけるシヅエに若い看護婦はちょっと視線を向けただけで、又もとのうつむき加減な姿勢をくずさず車を押して大またに歩いた。とうとう行き止りまで来てそこでエレベーターにのり三階に上った。左に曲り、行き当りの広い病室の入口に一ばん近いベッドに移され、ようやくそれで止まった。家を出てから三四時間に見ちがえるほどのやつれを表して貫治の上まぶたはたるみ、一そうくろずんで見えた。受持の看護婦が無表情な顔でいろいろシヅエに指図をし、貫治に向って今は安静時間ですから三時まで静かに休むようにと云った。貫治が慌てて聞えぬ耳へ手をやり、「はあ?」と聞きかえした。その緊張した声と顔つきに看護婦はふき出しそうになったのを押え、やや大きな声でもう一度くりかえした。それでも尚貫治は呑み込めない表情のままシヅエの方に救いの眼を向けた。シヅエがあたりを憚かりながら耳もとに口をよせ、ゆっくり説明すると貫治は痩せて大きくなった眼を更に見開き、アンセイ? と呟いて見て漸くその意味が判ると、

「ああん」

と何度もうなずいた。それがまるで呆けた老人のようであり、聾者特有の消えてゆくような自信のない声なので、看護婦はとうとう横を向いて口許をかくしながら廊下へ出た。病室の何処かでもくすっと笑う声がした。だがそれも聞えない貫治は看護婦だけを見送り、ゆがんだ笑顔で胸の上に両手を組み合せた。目をつぶった瞼がぶるぶるふるえている。

シヅエはひとりで顔を赤らめ、より所のない気持で一旦片づけた荷物を開いて見たり、病人の掛け布団の裾を叩き

つけて見たりした。窓と汚れた白い壁にかこまれた部屋の中には三十程のベッドが二列、足の方で向き合っていて患者は皆おとなしく天井を向いて寝ている。シヅエは貫治のベッドの横にしゃがみひそかにあたりを眺め廻した。気がつくと誰の所にも附添人はいず、部屋の中は静まりかえっている。いつもこんなのだろうかと不思議に思った。シヅエはふと、看護婦に注意された言葉を思い出し、慌てて立上った。毎日定ったこの時間には附添人はそばに居てはいけないと云われたことを他人ごとのように受けとっていた自分の迂濶さがおかしかった。入口のすぐ右側にある附添人控室の扉を押すと縁なしの畳を敷いた二十畳ほどの部屋の中には女が此方へ背を向けて寝転んでいる。ごめん下さいと声をかけて見たが二人とも眠っているらしく肩が大きな息づかいをしていた。入口の一畳分だけリノリューム張りの床の上は土間のように土っぽくしめっていて、フエルトの草履が三足並んでいた。シヅエは足音を忍ばせて窓のそばへ寄り、此処がこの療養所の一ばん入口に遠い病棟であると始めて知った。窓の外ではアカシアの大樹が幾本もの大きく枝をひろげ、そのこまかい可愛らしい葉の繁みはこちらから吐き出す病菌をそこで浄め、いつも新鮮な空気をこの窓から送りこむのが役目であるかのようにそよそよとゆらいでいる。木の間越しに何処までも展がって見える武蔵野の森や畑が家々を散在させながら遠く霞んで見える。この広い野の何処のあたりが今日までの自分たちの住居であったのか、見当もつかないけれども、とにかくその広い眺めの中の一隅に針でついた程の存在にもせよ、はっきりと置かれていた自分たちの今日までの生活が、はげしい力で押されてここまで来てしまったのであった。一週間以内に入所すべしという病院からの紙ぎれにすがりつくような思いで家をたたみ、子の英子をさえ押しのけて此処へ来てしまった。新しく始まる田舎での、まだ見ぬ祖父母の家の生活に子供らしいあこがれを抱いて、両親と別れて暮すことに何の思いも残さぬもののように喜んで出かけた英子、いつになれば又元の親子暮しにかえれるかと思うと、そこで暮したさまざまの姿が思い出された。

普通の家庭の子のように母子づれで滅多に外へ出ることもなかった英子を始めて百貨店へつれて行った時英子は昇降機の中で顎を粟立たせてシヅエの腰にしがみついて来た。七階の食堂で下りると、はあと大息をし、

「お尻が何だかおっかないね、母ちゃん」と真面目くさっていいしばらく落ちつかない眼をその扉に向けていた。

「さ、英子、もういいよ。御飯を食べようね、何食べよかな、英子何食べたい」

シヅエは英子の手をひいて料理の並べてある陳列棚の前を往ったり来たりした。五歳になってこんな場所へ始めてつれこまれた英子はきょろきょろしながら黙って歩いた。

「ね、何でも英子の好きなもの食べようね」

英子はごっくり唾をのみこんで黙ってうなずいた。シヅ

エも同じように空腹が急に咽喉もとにこみ上げて来て、からだがふるえそうであった。ふところに響かぬものを食べようと考えていたが、十銭や十五銭では温まりそうなものもなかった。高価な料理のそばを無関心らしく通り過して見たが、せめて鰻飯をもう一度食べたいと思った。田舎から始めて上京した時貫治につれられて入ったのが十銭の鰻飯屋であった。だがここのは八十銭である。シヅエは何ということなく悲しかった。今蟇口の中には先刻義弟の敏男から受取って来たばかりの十円紙幣が三枚ある。ある会社勤めをしている敏男を、月給日につづく日曜日と知って新宿裏のその下宿へ訪ねて行ったのである。まだ寝ていたらしく敏男はどてらのまま出て来た。部屋へは上げないで、一緒に外へ出た。黙って肩を並べてうつむいて歩いていると買い立てらしい敏男の新らしい駒下駄がへんに目についた。駅の近くまで来ると敏男は急に立ち止り、何か云いそうにして何も云わずにむき出しの紙幣を突出した。此方もつい黙って手を出すと、それっきり敏男は英子にさえ目もくれず、兄の容態も聞かずにさっさと今来た道を引返して行った。その新しい下駄が道路にも、はいている人の足にも、まだ馴染まないように、かくかくと音を立てて遠ざかってゆく。足早に肩をふって歩く恰好がよくもあれ程と思われるまで貫治にそっくりであった。貫治とちがって別に世の中を見究めようとするような意識のない弟から、毎月こうして給料の半分に近い額を取り上げることは、受ける分のシヅエにとってもたまらない気持であった。嫌な顔をされ何とか云われれば辛らいし、かと云って今日のように何も云われねばそれで尚胸のつまる思いが残るのであった。

その年の春、貫治はその属している団体の人たちと一緒に、妻子と別々に暮さねばならない状態になっていた。それが突発した中耳炎のために彼は片方の耳を抉り出し、その上そこで暮した月日は、今までであまり丈夫でなかった貫治をすっかり廃人のようにして、乳呑児の英子を抱えた妻のもとへかえされたのであった。やがて貫治は青い顔をして又もとの仕事に飛びついて行った。だがひびの入ったからだは過度に神経をつかったり、一方では巴焼で一日を過さねばならなかったりすることにいつまで堪え得られるものではなかった。彼は今までよりも一層ひどい状態で病床に叩きつけられた。倒れては起き上り、又倒れては起き上る努力の中で貫治の手足は眼に見えぬ速度で瘦せ細り、眼は大きくくぼんでいった。そうした生活の中へ訪れるものは、貫治のために月に零細な金を集めては持って来てくれる限られた人と、時にはそれが為替に組まれてそれを持って来る郵便屋であった。

謂わば貫治を信ずることから出発して貫治のすることを信じ、黙ってそのあとについて来たシヅエではあったが、自分の今していることは余儀ないとは云えいつも他人のふところへ手を入れることであり、たまに出す母や姉への便りさえいつでも無心の手紙である。それをこぼすと貫治

は、そういう辛い思いをしてでも健康を取戻そうというのも又意義のあることだと云い、今日も励まされ押し出されるようにして家を出た。だが眼も見合わさずにさっさと行ってしまった、敏男のことを思うと、自分たちにはどれ程筋の通った理由があってのこととは云え、やはり人のふところで暮しているひけめのようなものを背負わされる。にも拘らず、すぐその足でついふらふらとデパートの食堂などへ来て、物ほしげにうろうろしている自分がさもしく思われた。

「母ちゃん、これっ」

指した途端に英子の手がふれて陳列棚の硝子が大きな音を立てた。英子は眼を丸く見はり、ああっと喉の奥から出る語尾の下った声でシヅエを見上げた。そして青い毛糸のセーターと少し不均合の赤いベレー帽をきまり悪げに両手で引っぱった。大きめの毛糸の帽子は伸びて頬かむりをしたようにおどけた恰好になった。シヅエも一しょに笑いながら、英子の欲しいと云う料理を見た。それは色紙細工の玩具のように美しい「お子様ランチ」であった。山形に盛られた赤い御飯の上に小さい日の丸の旗が立っている。おや、とシヅエはその旗を見入った。幅一寸に丈六分ほどのクレープ・ペーパーの日の丸の旗、それはつい一月程前から始はじめた内職の豆旗と同じものである。妻揚枝の先に糊をつけ、それへくるりと旗を巻きつける簡単な仕事ではあるが、五百枚をボール箱に手際よくつめて一箱二十銭の工賃であった。もう一年も続けているという隣家のお内儀さんでも一日に千枚はらくではないという程で、病人を抱えたシヅエには二日に五百枚でも精一ぱいであった。何に使うのかと訊いたが、どうせおもちゃでしょうとそのお内儀さんもよくは知らないような返事であった。それが今こんな所で「お子様ランチ」の皿の上に立っている。シヅエはこの不思議なめぐり合いに愉快な苦笑を洩らさずにいられなかった。つとめて胸を張るようにして中へ入り、入口に一ばん近い卓子に近づいて椅子の横からそっと腰を下した。霜解け時分なので足駄をはいて家を出たシヅエは街かのコンクリートの道を歩くと頭に突きぬけるように響き土踏まずが引きつけるように痛かった。足袋のこはぜをはずし椅子の背にもたれると却って疲れが出て来てぐったり肩を落した。英子はしきりにそこらを眺め廻し、給仕が幾つもの皿を持って行き交う姿を眼まぐるしく追い廻していた。そして若い給仕女が黙って近づいて来て子供椅子に掛けさせてくれかかると英子はひどく驚いて、エプロンになっている紙のナフキンの兎の耳を頸の後ろで結んでくれるまで人形のようにぎこちなく両手をひろげていた。やがて料理が運ばれると漸く自分をとり戻し、うれしい時の癖で甘ったれのように下唇をひろげて、へえ、と肩をすぼめた。そしてどこから食べようかと云うようにシヅエの顔を見てすぐには手をつけなかった。丸く盛られた御飯の真中にはやはり旗が立っていた。箱につめられてついた癖をそ

のまま小さくうねっている。隣りの内儀さんと二人だけでも毎日千本は出来る小さな旗がもしみんな子供料理の飾りになるとしたら、毎日幾万人の子供がこんなものを食べているのだろうか。
　シヅエはぬるくなった茶を呑み、しみじみと英子の顔を眺めた。
「英子、おいしいかい」
　英子は大きくうなずき、口の中のものを力を入れるようにしてのみこむと、匙を持ったままの上半身をねじらせてシヅエに囁いた。
「母ちゃん、ね、御馳走食べたこと父ちゃんに黙ってんだね」
　シヅエは胸の中をのぞかれたような恥かしさで、
「云ったっていいさ、云ったっていいの。ほんと」とむきになって云った。
「でも、ゆわない方がいいよ母ちゃん、ゆったら父ちゃんまた下駄買った時みたい、怒るよ」
　英子は大人っぽく抑揚をつけて云った。シヅエは英子の小さい心の中に育ってゆく感情の動き方に恐ろしいものを感じずにはいられなかった。下駄のことは秋祭のことであるからもう半年の上にもなるのに英子はそれを又思い出しているのであろう。その日父親の枕許へ坐りこんでねだってねだった末、どうしても駄目と分ると英子はそのまま貫治の寝床のわきに突伏して忍んで泣き出した。その泣き方さえも永い間の病気の父親への不断の心づかいから声を立ててはならないように慣らされて、薬蒲団の縁をかさかさつかみながら肩をふるわせているのであった。白っぽい洗いざらしの綿ねるの着物を着たお尻を兎のような恰好に立てて忍び泣く姿を見ると、シヅエは何とかして慰めてやりたいと思いながら、言葉に出せば自分の感情までせきをきりそうに切なくて、わざと知らん顔をして針を動かしていた。人の助けを受けることのほか何も出来ない貫治がたとえ一銭でもという気持は分り過ぎる程分ってはいる。だがシヅエには又別にこんな暮しの中で育つ英子を可愛そうに思う気持があった。煎餅のように薄くなった英子の下駄は何度も先鼻緒が切れてはその度にシデ紐で繕ってある。それが横緒まで切れたのであった。それを貫治は鼻緒だけ買ってすげろと云うのである。
　やがてシヅエは泣き疲れてかすかな寝息を立てている英子にいざり寄り、胸の下へそうっと手を入れた。
「可哀そうに、ね英子、今にいい世の中になったら、一ばんに赤い下駄を買ったげるよ」
　貫治はいろいろと云って聞かしてくれた。だがそれはいつのことであろうか。その時英子はもう赤い下駄ではないに定っている。
「よっこらしょ」
　シヅエはわざと大声で英子を抱え上げた。ぐんなりとなった英子の頬に赤く畳のかたがつき、少し口を開けて顔中

涙と鼻汗で汚れてはいるが安らかな寝顔である。これを見なさい、とでも云うようにシヅエは膝をまげて貫治の方へその寝顔を向けた。

「俺たちの子供の時みた、新しい下駄など一ぺんもはかなんだ」

貫治が怒ったように呟く。

「あんたは姑が若い嫁に、自分も若い時には苦労したからっていびるみたい、意地悪ね」

英子への不愍さからシヅエはついそんな言葉も出るのであった。

眠っている英子に暫く添寝をして、やがて買物に出た。畑外はもう暗くなっていて深い空に星が一ぱいであった。畑に挟まれた細い道を何度も曲り急に明るい大通りへ出ると自分のエプロンが白くなったような気がした。薬局へ行くのをわざと後廻しにして四五軒先の下駄店へ真直ぐに入った。頭とすれすれのところに一足十二銭のボール紙の札と一しょに紙をはりつけたような粗末なぬりの赤い下駄が六七足ぶら下っているのが一ばんに目についた。何だ、たった十二銭なのかと思うと、人に貰ってばかりいて子供の下駄の値段も知らずに、これだけのことで夫婦が目に角を立てているのがおかしくなった。英子がどんなに喜ぶだろうと思うとシヅエは子供のように駈けて帰った。次の朝英子はそれをはいたまま上ずった声で父親の枕許へかけつけた。だが貫治はぬいで見せようとしている英子を険しい顔つきでにらんでいた。

「十二銭よ、たった、十二銭だよ」

縁側の外に立って雑巾をかけていたシヅエがそう云っても聞えない貫治は上半身を起して英子の手からそれを引ったくり、シヅエに向って投げつけた。片っ方は柱に打つかって畳にはねかえり、片方はシヅエの肩をかすめて雑布バケツに飛びこんだ。英子はおびえて泣きもせず、シヅエにしがみついて来た。

それ以来英子はだんだん父親をまともに見なくなり、ちょっとしたこともひがみ、強情をはるようになった。貫治は食後に食べる林檎を「これ父ちゃんはおくすりね」と云い、少し与えようとしても「いいの英子」と手を出さない。それなのにいつの間にか戸棚の林檎は姿消してゆく。時々貫治を見舞ってくれる人が菓子包を英子の手に渡すと、英子はそれを喉につめながらむさぼり食べる。袋に手を入れる度に額越しや眼の隅でちらっと貫治を見、何かたしなめられそうだと見ると、「英子」と聞いただけで、わっと泣き出したりした。

たまたま外へ出て、せめてのびのびとした気持ではしいものを食べさせようとしたのに、父ちゃんに黙っていようと五歳の幼児は自分の気持のままの言葉として囁いたのであった。

松林と桑畑に挟まれた家であった。開けっ放しの六畳の

病室、南向きの縁先から、殆ど部屋一ぱいに流れこむ小春日のまぶしさを避けるため、シヅエはいつものように貫治を寝床のままで北側の窓の方へ移しかかると、貫治は物も云わずに手をふってそれをやめろという表情に、またそろそろと元へ戻した。軀にひびかぬように要心深く引っぱりながら一と頃より又軽くなったように思えた。窓の外に昨日取り入れるのを忘れた洗濯ものが物干竿の端の方へかたまって夜露にしめって、重たげに垂れ下っている。その向うの松林の方から、

「お嬢さんは長袖のおべべ着てゆくのよ」

という英子の澄んだ声が聞えて来た。誰と遊んでいるのであろう。

畑向うの通りから此方への狭い小路の見える位置にまで寝床を移すと枕を斜めに部屋の端近くにまでもって来ねばならなかった。この四五日ものもろくに云えない貫治の不機嫌のもとが何であるかを知っているシヅエはただ黙って寝床を表へ向けるしかなかった。月末が来るといつも畑の向うからひょっこり誰かの姿が此方へ近づいて来はしないかと貫治はその位置で表を向いて暮した。シヅエは又シヅエでもっと複雑な気持をも持って何時現れるとも知れない人を待った。明るい朝を迎えては失望して眠り、そうした空しい幾日かの間に貫治は朝から高熱のために眠れぬ夜が続くこともあった。がさがさにかわいた唇をなめ、苦しそうな息づかいを見るとシヅエは気が気でない。死んだ方がいいかも知れないとやけっぱちを云う貫治、いらいらとシヅエや英子にあたり散らす貫治、それはまだシヅエにとっては苦でなかった。だが、話しかけても返弁もせずふさぎこまれることは何としても辛かった。シヅエは黙って寝床の裾に廻り、掛蒲団の中へ手を入れた。枯木のように骨ばった足、踝から甲にかけてさすっていると、湿った垢がぼろぼろと剝れるのが分った。

この足でもう一度歩ける日が来るであろうか——

蒲団の上へ涙が落ちた。紫と白との雲形絞りの菊と紅葉を散らした羽二重のその蒲団はある女友達の心づくしであった。

「シヅ」

貫治はさすられている手足をふりほどいて呼んだ。這い寄って行って顔を近づけると気弱そうな眼で、

「電車賃は？」と聞いた。

シヅエはだまってうなずいた。どんなに困った暮しの中でもそれだけはいつも取って置くのであった。

「行って見るか」

シヅエは笑って見せ、

「も一日待とうよ、あたい行くのつらいんだもん」

「ふん、じゃあいいよ、誰も彼ももう俺なんかどうでもいいんだろう」

特別に長いまつげの中で貫治の大きな眼はぎらぎらした。うつむいて坐ったまま膝を折りまげるようにして膝の

上で腕を組んでいたシヅエは、ふと部屋の中を静かに風の流れ去るようなものの気配に伏せていた眼をあげ、ひょいと表の方へ顔を向けた。途端に、

「あっ」

と思わず腰を浮かせた。今の今まで見渡す限り爽やかな朝の光の中にたくましい青さで生い繁っていた桑の葉が目前で落ちてゆく。さら、さら、さら、さ、さ、さ――。かすかな幾千幾万数限りない異様な音は余韻のない響きをもってひろがり、その音に誘われるように桑の葉は陽あたりの枝から落ち始め、落ちるその葉に触れてほかの葉も一しょに落ちる。無数の葉は無数の葉を道づれに重なり合ってこぼれてゆく。またたくうちに地面は桑の葉に覆われ、桑は節ぐれ立った幹や長く伸びた枝をむき出して、あたりは枯野のような景色に変った。急に空が蒼く、深くひろがって畑向うの家が思いがけない近さで現れた。その前を通る自転車が家々の間をかくれたり見えたりした。この突然の変り方に呆気にとられて言葉もなく見入っていた貫治が、漸く我に返ったようにシヅエと眼を見合せ、

「呆れたね、霜のせいなんだろうなあ、全く呆れたねえ」

と頓狂な声で云った。

急に世界は違ったように見えた。自分たちがいきなりその中に置かれた変化が余りに珍らしく、さっきまでの苦痛を忘れたような顔で貫治は久しぶりに声を立てて笑った。誘われてシヅエも一しょに笑った。が、シヅエは何かじっとしていられない、云いようのないひろく深い恐怖を感じてそわそわした。

「ね、あたい小山さんとこ行って来る」

英子を呼んで来ようと考え、外へ出かかったのを又気を取直した形で台所へ廻った。七輪を敷居の外に持出し、俵をはたいて粉炭を移した。今日は十一月も半ば近く、何もかも欠乏である。焚きつけの松葉までがしめっていて煙が大袈裟に舞い上った。長いことかかって漸く火になった時、貫治の呼鈴代りに叩くコップの冴えた音が聞えた。シヅエは水口から窓の方へ廻ると、貫治は今書き終えたらしいハガキを胸の上で読み返していたのを差出し、

「今日行くのは、止めれ」という。又もとのけわしい顔になっていた。ハガキには細かい鉛筆の字で桑の木のことが書いてあり、そのあとには、今朝まで百姓たちが毎朝大きな目籠につめこんで帰って行ったのに、一体蚕は今日からどうなるのだろうと、蚕のことをよく知らぬ私は我がことのように心配しています。さて、うちの女房がまた経済を下手糞やって私は十日も前から薬がのめず困っています。桑のない蚕よりも何っていいでしょうか、お返事を待ちます。――

女房がまた経済を下手くそやって――

シヅエも七輪の戸をしめ、勝手口の板敷に腰を落してもう一度それを読んでみた。本当に下手なのかしらと考えたが、結局女房のせいにでもしなければならない貫治の気持

なのだろうと思われた。此頃では貫治の薬代はふえるばかりである。いろいろな困難の中では誰もみな、困っていた。それでも倘自分達への援助を後れ勝ちでも絶やすまいとしている人たちの心もちが、それを飢えた小雀のようにして待っている自分たちの苦しい気持とからみ合って、野菜スープの粕さえも思いなしには喉を通らない毎日である。

シヅエは白いエプロンの裾で涙をふき、板敷の隅の米びつに手をのばした。がらがらと引きかかるような中味の察しられる音を立ててブリキの罐は、引き寄せられ、蓋を取ろうとすると全体が一緒に持ち上った。隅々まで指先でほじくるようにして漸くあった茶腕に一ぱいの糠の多い米、明日の分は取っときの電車賃の中で五合でも買わねばなるまいと思いながら、しょきしょきと指の先でとぐゆきひらの中へ又涙が落ちた。ふと玄関の戸ががたがた音を立てているのに気づいてシヅエは慌てて飛び出して行った。すり硝子に黒く映った影で、誰であるかがすぐ分った。シヅエはねじ鍵のかかったままなのを戻しながら片手で手早く涙を拭い、

「よかった、小山さん」

待ちきれぬように思わず明るい声になった。

「気をもんだでしょ」

外で答えながら、ひどく開けたての悪い戸を体押しに開け、背の高い小山ツタは横向きで入って来た。いつもは洋服のツタがここへ来る時は着物であった。黒っぽい縞セルに更紗模様の帯を小さくお太鼓にしめているのがまだしっくりしない感じを与えた。並ぶとまるで子供のように小さいシヅエの両肩に手を置いてまともに顔を見、

「あれ泣いたの」

肩をゆすぶられてシヅエは、

「何でもないの、あなたが来てくれてよかった」と笑いながら倘ころがり出るような涙をこぼした。

「小山さん」

顔は見えないが、貫治ののびあがるような声がした。

「おやおや、私なんてもてるんでしょう」

冗談を云い云いツタは勝手知った病室への板戸を押した。しばらくの間に相の変った貫治のたぐりよせるような眼に迎えられ、思わずたじろいだ。そばへ行くのが恐いようであった。それなのにシヅエは、

「あんたが来ると、この人こんなに元気になるのよ。この人の笑顔なんて滅多に見られないね此頃。毎日怒ってばかりいるんだよ」

そう云うシヅエ自身も喜びにあふれた顔つきになっていた。貫治は干からびて血の出そうな唇をなめ、急に和らいだ顔で二人の女の交す言葉を分らぬなりに笑っている。そういう貫治を、

「この人ったらね、あんたの前でこんないい顔してるでしょ。そのくせしてあたいに電気スタンド投げつけたりする

んだよ。そいであたいを追い出したりしたんだよ。気が強いね」
シヅエはおかしくてたまらぬように上体をまげてふっふっと笑った。
「あたいのような馬鹿は見るのもいやだから今すぐ出て行けって云うの、ほら、あの日、あたいがこの前あんたんちへ行った日さ」
そういってシヅエはじっとしていてもこみ上げて来るように笑った。
その日はやはり今日のように困ってシヅエは小山ツタを訪ねたのであった。偶然そこへ来合せた女子供たち七人が、今日はまるで私たちの家族会のようだからと、大はしゃぎで夕飯を一しょに食べたのであった。誰れも皆家で待つ人のない女たちの中でシヅエは一人貫治のことを案じながら久しぶりのすき焼を食べた。いつも出かける時には家から駅までが幾分、電車が幾分、話しの時間が幾分というように大体帰れる時間を計って、その日はおそくも五時までには帰る筈なのが、二時間の上もおくれて駅を下りると、シヅエは英子の手を引っぱってなりふり構わず駈けた。家の中は真暗であった。
「父ちゃん怒ってるね」
英子が内緒声で云う。話しかけると却って悪いと思い、シヅエは火を拵えにかかった。自分たちが牛肉を食べたのだからと途中の店でそれを買い、肉うどんを作って食べさせようと思ったのだった。小さい鍋のまま枕元へ運ぶと、貫治はいきなりそれを畳の上へはねかえしびっくりするような大きな声で、出て行けとどなりつけた。シヅエはむっとして外へ出た。だが畑の中をふらふらしている中に、お互の気持は分り合っていながら、ついはずみで出る言葉のやりとりだけで例え本気ではないにしろとび出して来た自分を悲しく思った。いつか貫治は、もしもお前のいない時地震や火事が起ったら自分は誰にも会えずに死なねばならないと思うとひどく心細かったと云ったことがあった。物音さえ聞えない貫治が暗い家の中でひとり自分を待っていたのだと思うと、出てゆけと云われてすぐにその言葉通り出て来られる身体の自分と引きくらべて急に貫治が可哀そうになり、シヅエはいそいで戻って来た。疲れて眠っていた英子も目をさまさなかったらしい家の中はひっそりとしていて貫治の部屋からだけ、戸の隙間からあかりが洩れていた。裏も表も開かなかった。余っ程腹立てたんだな、と思いながら、それでもシヅエは素直な気持で雨戸へ廻り、外から戸を外して入った。その時のことをあれこれと思い浮べ、又ふっふっと笑い、
「この人ったらおしっこにも立てないくせして、その時は中から鍵かけてあるんだよ。そしてさ、夜中にお腹すかして林檎齧ったりしたの、罰だね」
今となればそんなことを話すのも気の弾みのように笑って話すシヅエを、貫治は半ばたしなめながら、それの聞え

ぬ自分もまた楽しげに、
「どうせまた俺の悪口云って喜んでんだろ」
と、にこにこした。
「悪口じゃないわよ、ねえ」
貫治とツタを交互に見ながらシヅエはふっと口をつぐんだか、すぐにまたしゃべらずにいられないように口を開くのであった。
「ねえ、この人ったら始めて家を持った時、ほら、雑誌の方やったでしょ。夕方帰って来たからお帰りなさいって、あたいが玄関に坐ったらとっても面くらっちゃってね、云う事がこうなの、そんな小ブル的なことやめてくれ、俺は今途々詩のことを一生懸命に考えていたのにすっかり駄目になったって怒ったの。驚いたねあたい。それからはこの人のような仕事をする人は皆そうなんだと思って、あたいはこの人の友だちが来てもそう云われるまではお茶も出さないでそれでいいと思ってたの。だけど気がついて見たらそんなのないね。小山さんだって、永見さんだって夫婦で冗談云ったり、出かけたりしてたわね。あたいがそう云ったら生意気だって云うの」
黙ろうにも口の方がとまらないとでもいうようにシヅエは兎のような丸い目を見開いて、子供っぽい調子でしゃべりつづけた。それに一つ一つうなづいていた小山ツタは、貫治のよく聞える方の耳の側にいざり寄って行ってゆっくりと云った。
「あんた、女房を有難く思いなさいよ」
それが一度で貫治に通じたので三人は声を合わせて笑った。
だが、やがてツタが別れの言葉をのべ、枯野のような桑畑の向うへその姿を消してしまうと、前にも増した寂しさに包まれ、二人は安心とも失望ともつかぬ顔を見合せて言葉もなく寄りそっていた。
それからまた半年がすぎ貫治はいよいよ結核療養所へ入ることになった。だがそこへの入院申込をしてから一年の上も経っていた。貫治はいよいよ動けなくなり、近頃ではもうすっかりあきらめて死ぬも生きるも此家でと落ちついていたのであったが、入院許可が下りるとまた気持を動かされ、二人は終日そのことについて話し合った。
「あの時入院出来たらなあ」と、貫治は細い二の腕をまくって眺め、
「実際施療病院なんて死ぬ方の見込がつかないと入れないって誰だか云ってたけんど本当だね。入院したら俺、早く死ぬかも知れないよ」
あれ程病院々々と切望していた貫治も今となっては思い切り悪い言葉をくりかえした。
「あんたが気がすすまなきゃ止そうよ、却って今動くと悪いんだから、ね」
シヅエも不安になり、さっぱりと思い切らせようとした。

そう云われると却って貫治は又思い直し、
「ん、だけど、やっぱり行く、医者にかかれるだけでもいいに決ってる」
「そう、じゃほんとにこれで決めようね」
「よし、必ずよくなる。必ず」
これがここ四、五日の間に幾十度繰り返された言葉であったろう。そして慌しく家を解散することになった。道具らしいものはなくてもがらくたは相当に多く、売る物は売り払い、又の日のために残すものは片づけて、いよいよ其日になる、と家の中はがらんとして、ただ貫治の寝床だけが変らぬ位置にあるのが、却って二人を落ちつかせなかった。ここまで来てもまだ迷ってでもいるように貫治は悲しい表情で家の中をぐるぐる見廻した。まるで始めて此処へ来たかのようにいつまでも眺めている。何と云っても病気以来、二年近く雨露をしのぎ、貧乏と闘って来たこの家、そして人に語れぬ思い出を残して去らねばならぬ今、まして二人がこのさき家を持つのは本当にいつのことであるか、或は最後の住居であるかも知れない。語らずとも二人の思いは同じであった。
貫治に並んでシヅエはごろりと横になった。彼女自身の健康も心もとない此頃、昨日今日のあわただしさはひどく疲を出し、鼻の中が湯気かけられるように熱っぽく、立居の度に目が廻いそうであった。花曇りの空は重たく、生暖い風に運ばれて来た花びらが眼の前に落ちた。

「あ、あんた、今日は小金井堤の花が見れるよ」
貫治はやはり黙って天井を見つめ眉を寄せていた。以前いた荻窪の住居から半ば人眼をさけ半分は静養の目的でこの家へ移って来た日のことを思い出したりした。今時分を少しすぎた季節であった。自動車が甲州街道を西へ西へと走り落葉の匂うような五月の風がはげしく頬をなでた。やがて長い桜並木の下路にさしかかると運転手は、これが小金井ですよと云った。葉桜の下には人の姿は見えなかった。広い通りを右や左に曲り、その度に狭くなってゆく小道を車は桑の枝に撫でられながら止った。おぶさるようにシヅエの背によりかかった貫治の熱っぽい体温と、はげしかった心臓の鼓動をシヅエは今だに忘れられなかった。それきり貫治は起き上る日が来ないでいる。このように貫治を痩せ細らせた年月、それと同じだけの年月を夫の病気と膝を突き合せてそれと昼夜組打ちをして来た苦闘に酬いられるのはいつの日であろうか。

貫治は入院以来一カ月ずっと高熱が続き、下腹部がだんだんふくれて来ていた。用便の度に尿道がはげしく痛み、彼の表情はしかめた時の皺を額と鼻の上に深く刻みつけ、笑う時にさえもそのあとが消えなかった。苦痛は一日の中に何度も発作的に起り、その度にシヅエは看護婦控室にかけつけ、主任に泣きついて何とかしてくれるように頼んだ。

「どうせ死ぬ前は誰でも苦しいのですよ。もう前田さんは見込がないのですから、先生に診ていただいた所で快くなるものではないのですからね」

そういう言葉を平気で云える主任であった。病院では毎日水と粉の薬をあてがわれ、一週一度事務的に聴診器を手にした医員が歩いて廻るだけであった。此所の規則として医員は主任看護婦の報告によって特別の診察もすれば、手当もするようになっていた。主任看護婦の気に入らない患者はどんなに苦しかろうと滅多にその云い分は通らない。同じ病室でもある患者は主任から時々小鍋に入れたうどんを貰ったり、枕もとへ花をかざって貰ったりする。ある日貫治の所へ病院行の見知らぬ患者から手紙が来、それには出来るだけ猫をかぶって要領よく主任の気に入るようにしなければ医者もよんでくれないようなひどい目にあわされるからという注意があった。貫治はぎりぎり歯を鳴らし、次の回診の時、苦痛を直接医員に訴えた。医者はさすがに念入りに診察し、何度も尿道へカテイテルを入れたり出したりして調べた。太いのや細いのや、それらの管はまるで主任の面あてのように荒々しく血まみれになって引き出されその度に貫治は悲鳴を上げた。結果主任の言葉通り何の得るところもなく、苦痛だけが次第にはげしくなって、貫治を口惜しがらせた。貫治の一本気は又も主任を差し置いて医員との交渉をやり、とうとう手術を受けて原因を究めようということになった。

知らせを受けて其日小山ツタは早くから来ていた。持って来た紅椿をコップに挿し、貫治の眺める位置を考えて枕元の卓子に置いた。貫治は感謝をこめてそれを眺め、やがて枕の下から便箋をとり出し胸の上に立てて鉛筆を動かした。力なく手がふるえている。

今日は生きるか死ぬかの勝負です――

ツタはうなずくよりほかなかった。

医は仁術とは此世の言葉に非ず、畜生！――

貫治は声のない口を大きく開けて笑った。

病院内に僕の事をよく知っているあたたかい心の人たちがいる。時々花をくれたりする――

ツタは貫治の鉛筆をとりその余白へうれしいと書いた。貫治が又何か書こうとしていると担架を押して二人の看護婦が入って来た。

貫治は急いで便箋をちぎりとり手の中でくしゃくしゃにもみながら落ちつかない衝動をその顔に現していた。そしてツタの手を求め、固く握りしめて暫くはなさなかった。看護婦の馴れきった手で無造作に担架に移された貫治が息をつめた苦痛の表情のままで運ばれてゆくのも、シヅエはツタと手を握り合って見送った。運搬車が昇降機の中に入り何も見えなくなってからシヅエは漸く担架の行方から視線を戻し、背の高いツタを仰ぎ見た。

「あの人もうほんとに快くなれないらしいの。それなのにあの人、まだ快くなる積りなんだよ、気の強い人。――い

つだか主任さんがね、あの人の前で云ったの、もう奇蹟があってもあと半月はもたないって」

シヅエの声はふるえ、咽び泣いた。

「まあ、何てひどいんだろ、いくら聞えないたって」

ツタはそのひどい相手がシヅエででもあるように声をとがらせた。

「でもね、あの人それが判ったんだよ。この頃口の動き方でわかるの。そして無料の患者だと思って馬鹿にしてるってとても怒ったの。精神的な方からまいらせようとしたって、そうたやすく参るかって口惜しがってね」

シヅエは横に向いて両手で顔を覆った。ツタもぱちぱち眼をしばたたき、シヅエを引ったてるようにその肩を抱いた。

「ね、しっかりなさいね。ね、どんなことになっても」

シヅエはだまってうなずき、やがて顔を上げた。目のふちの赤くなったその顔を笑いにかえて、

「ね、ここへ来て一と月たつでしょ。あたい五百目ふえたんだよ。家にいる時分たら重湯とった粕ばかりだったでしょ。此処で普通の御飯食べ出したら初めおなかこわしてね。今は太ったの。ここの附添さんたち一日三十五銭もとられて病院の御飯まずいまずいって云うけど、あたいは勿体ない程おいしいと思うね」

人聞をはばかりながら、尚今の内に云わずに居られないという風にシヅエは、あたりに眼をくばり小さい声でふっと笑った。

——私の生死は今全く決定の形である。時間もそう遠くはない。私はこの期にどうしよう、こうしようという考えが浮ばない。どうせ今頃死ぬ人間がという自己卑下的気持になっている。もうだめだと知って好きなことをしたり、飛行機に乗ってみたりする人もあるが、私はこれから先今まで我慢していた新聞雑誌を遠慮なく読んで死のうという考えもあり、何になる無意味と考えてもいる。どちらをとるべきものか？ 覚悟して来たものの望まぬ方向に発展して、私は何と、世話を今日までして下すった人に申訳すべきか、何も云う事が出来ない。あまりにそれは大きな感謝であるから。その意味で、出来ることなら今一度少しでもよくなり、その感謝の僅かでも報いようと努力して来たのだった。ああ、今やそれ凡てむなし、私は敬愛する人々とも遂に別れ行かねばならない。私如き人間が今日まで生命を続けて来た分は全く与えられた幸福であった。生きて来た——ということ二年、私はよくなるつもりで文字を見ることさえもつつしみ、何もせずに過して来たがよくならず、結局何もしないで生きて来たのだった。——

三日も四日もかかって、ここまで書き、貫治は毎日それを書き続けようと鉛筆を握ってはじっとそれに眺め入り、そうしては投げ出してしまうのでした。あの大勢一緒の部

屋から一人の部屋に移されて四五日経っていた。手術の結果、腹に溜っていた驚くべき多量の膿を排泄した彼のぱんぱんに張切っていた腹部は忽ちぺこんとなって、もうすこしで腹の皮が背中にくっつきそうに思われるほどになり、腰骨がもとのようにとび出して来た。入院以来悩まされつづけて来た苦痛の正体は分り、それは取り除かれた。が、又別の苦痛がそれに代って貫治は日夜呻き、悶え、そして薬にすがりつく気持で注射を求めた。だがそれも度重なると効果は少くなり、

「人、馬鹿にして水の注射でごまかしやがる、薬の注射をしろって云って来い」と憤る。

シヅエは他の人々へ気兼し、不機嫌な看護婦の顔を見ただけで何も云えず病室を出た次の日静養室へ移されたのであった。この部屋へ来たことは病人にとって最後の宣告である。貫治の蒼ざめた顔には紅潮し、感動を静めようとするかのように閉じたまつ毛の間から涙があふれ出た。医者に命ぜられた気休め的な言葉などいう必要もなく、シヅエも貰い泣いた。此処では誰に遠慮もなく貫治の顔にわが顔をよせ、

「ね、此処の方がいいじゃないの」

手拭いをとってそっと貫治の涙をふいた。貫治は何か云いそうに唇を開き、何も云わずに強く妻の手を握りしめた。そしてそれからすっかり覚悟がついたようにだんだん落ちついて来た。広々と感じられる六畳程の部屋の片側よりに、汚れた白壁に囲まれた貫治はもう愚痴もこぼさず不平も云わなかった。二人はうなずき合う気持で刻々に迫るものを覚悟した毎日を送った。食欲を失い、痩せられるだけやせ細り、衰えられる限り衰え切った貫治、こうまでならねば一つの生命を終えることが出来ないかと思われるまでの苦しみ、それに堪えるべく、この小さくなった肉体のどこかにまだこの生命の力がひそんでいるかと怪しまれる程のものであった。発作の度にシヅエは自分の息をひそめ、しっかりと貫治の手を握ってその苦痛をじかに分ちたいと思った。あまりの苦しさに見かね、シヅエはふと思いついて家にいた時の使い残りのパピナールを取り出し医者にだまって注射をした。やがて貫治の苦痛は和らぎ、昏々と深い眠りに落ちてゆく。白い地肌のすけた薄くなった頭髪、濃い陰翳でくまどられた窪んだ眼と尖った頬骨、顔立ちの特徴となっていた大きな口もとだけが貫治らしい俤を残して力なく結ばれ、低く不規則な呼吸は時々忘れたように途絶えたりする。そのあとでは急に大きく息を吸いこみ、小鼻をひろげ、口を開けて、はあと吐き出す。シヅエはじっと見守った。目が覚めれば寸刻もそばから離したくないらしい貫治の絶望と感謝をこめた眼ざしに応えて、シヅエは家にいた時のように足を撫で、手をさすり、顔を近づけて暮した。

久しぶりに肉汁とトマトが欲しいと云う貫治の珍らしい食慾にシヅエはいそいでそれらのものを調えに出かけた。

此頃の唯一つの食料であったサイダーものめなくなり、ほんの小匙一ぱいの罐詰密柑のつゆも今日は喉にしみて通らなくなったのが、急に起ったこの食慾にシッエは切迫したものを感じて駈けるようにして部屋に飛び込んだ。貫治は痰壺を片手に持ってねばっこく糸のようにつづく痰を切ることが出来ずあえいでいた。わなわなふるえる手に持てあつかっている痰壺をシヅエはわが手に持ち、手早く口もとを拭ってやった。

「注射！　注射！　早く」

いそがわしく小鼻をぴくぴくさせて喘ぎながら左手をシヅエの前につき出した。シヅエが慌ててその支度をする間ももどかしそうに貫治は手をふり廻した。ぷつりと皮ばかりの二の腕に突きささった注射針をすっと抜きとり、絆創膏をはったあとまで眼たたきもせずに見入っている貫治のその眼つきはいつもとちがっていた。シヅエは気を外らせようと、足下の床に投げ出してある風呂敷包みから赤いトマトを取り出し貫治の顔の近くへ持って行ったがそれにも目もくれない。十分、十五分、貫治は小鼻にじっとりとあぶら汗を浮かせ、いつまでも目を離さない。その顔は次第に絶望と苦痛にゆがんでいった。

「あんた大丈夫？　ねえ、大丈夫？」

それでもだまっている。ただならずと見てシヅエは看護婦を呼ぼうと思い手を離すと貫治は恐ろしい力でシヅエの手をつかみ、離さなかった。じっと瞳を合せていた。

「ああ、つらいな、もう駄目だ」

貫治はシヅエの手がしびれるほど握りしめてもがいた。

「シヅ、顔見せろ！」

おっかぶさるように顔を近づけたシヅエに貫治は顔を歪め、妻の思いちがいに喘ぎ喘ぎ息の中で首をふり、はっきりした口調で、

「鏡！　俺の顔見せれ、早く、鏡！」

手早く卓子の上の鏡を持たせると貫治はしっかりとそれを抱くように両手で持ち、物すごい眼で鏡に見入った。

「唇の色！」

シヅエは鏡を取り上げようとした。貫治は懸命な力でそれを押え、

「大丈夫」と笑って見せた。そして舌を出して又じっと見入った。舌もやはり唇と同じ暗紫色になり、無気味にこわばっていた。

「こんな舌！　もう駄目だ、シヅ、みんなによろしく云ってくれ」

ぎゅっと胸をしめられる思いで鏡と顔を並べ、シヅエは夫の一語を聞き洩らすまいとかまえたが、貫治はもうあとにつづく言葉はなく、視力を失ってゆく瞳は上ずれて動かなくなった。シヅエは急に恐ろしくなり、力をこめて鏡を取上げた。鏡は抵抗を失ったまま手にかえった。

腸に癌のようなものが出来ているのではないかと思われ

るので研究のため解剖したいのですが。——

医者はその交渉にだけ来たような調子であった。死んだあとまで切り苛むのかと、シヅエはいやな気になり即座に返事も出来なかったが、考えればそれをすることも長い間の貫治の苦しみの隅の隅まで分るのだと思い直して解剖を承諾した。そのための注射をすませると、医者も看護婦も出て行った。やがて担任看護婦が喪章をつけて入って来てだまっておじぎをして行ったあとはもう誰も来なかった。注射のせいでもあるのか、貫治の顔は死んだとは思えない澄んだ色をしている。くぼんだ眼を大きく見開いたまま閉じない瞼をシヅエは根気よく、静かに撫で下した。柔らかく、やさしく撫でさするシヅエの手でようやく閉じた瞼、もはやそれで自分たちの生活も終ったとでもいう安らかな顔になった。まる五年の二人の生活、彼の三十二年の短い生涯は終った。酬いられることの少い、悲しい終局であった。

シヅエは両手で覆った。

そうだ、私は皆に知らさねばならない。誰にも会えずに死んで行った貫治を、せめてこのままの姿で会わせたい。

——

そう気づくとシヅエは椅子を立ち、近々と貫治に顔をよせてそっと唇を重ねた。

「あんた、あんたの会いたかった人たちに知らせてくるからね」

声を出して話しかけ、枕もとの小卓をベットの横の方へ置きかえた。その上にある花瓶の赤いカーネーションが午後の陽ざしを受け貫治の白い顔のそばで燃えるようにゆれ動いた。シヅエは白布をその顔に被せかけまるで眠りを妨げまいとでもするように足音を忍ばせ、ふり返りながら部屋を出た。螺旋型の階段を下りるとそこでシヅエは軽い目まいがし、そこの厚い壁にもたれて目をつむった。しばらくそっと目を開けて見ると、あたりは驚くほど明るく、すぐ手の届く廊下の窓べりに這い寄ってしがみついている蔦の葉が鮮やかな青さで強く目にしみた。つい此間まで両側の庭に咲き盛っていた春の花々も樹々の枝も、初夏の大空に向って新らしい芽を萌え出している。真っすぐに通っている廊下、此処へ来た時、シヅエはいつの日にか二人でこの廊下を通って帰る日の事を考えた。

今日、私はとうとうこの長い廊下を一人で帰る——

廊下の行きどまる入口のあたり、そこに小さくゆき交っている人群の方へシヅエは胸をはるようにして歩いて行った。

三月の第四日曜

宮本百合子

一

コト。コト。遠慮がちな物音だのに、それがいやに自分にも耳立って聞えるような明け方の電灯の下で羽織の紐を結んでしまうと、サイは立鏡を片よせて、中腰のままそのつもりでゆうべ買っておいて来たジャムパンの袋をあけた。

寝が足りないのと何とはなし気がせき立っているのとで、乾いたパンは口のなかの水気を吸いとるばかりでなかなか喉を通りにくい。一つをやっと食べたきりで袋を握って隅っこへ押しつけ、ハンドバッグとショールとをかかえて台処へ出た。

水口がもうあいている。ポンプと同じさししかけのところで燃えついたばかりの竈が薪のはぜる音をさせている。その煙に交ってふき出す焔の色が、あたりにまだのこっている眠りの深さを感じさせる。サイが新聞包からよそゆき下駄を出していると、遠くの闇を劃き破るような勢で始発間もない省線が通る音が風にのって来た。

外へ出てみると風は思ったよりきつくて、タバコの赤い吊看板が軋んだり、メリケン袋をはいでこしらえた幕をまだしめている駄菓子屋のガラスが鳴ったりしている。

上野駅へついたのは五時廿分前ほどであった。ガランと広い出口のところに宿屋の半被を着た男が二人、面白くもない顔つきでタバコをふかしながら、貧乏ゆすりしているばかりで、人影もろくにない。中央の大時計に合わせて紅いエナメル皮で手頸につけた時計を巻いてから、サイは又不安な気持になってハンドバッグをあけた。折り目の擦れたハガキには、五時ごろ上野駅へ着くそうです、と鉛筆で書かれている。五時ごろ着く汽車と云えば、ゆうべわざわざ王子の駅まで行って調べたときも、四時五十八分というのしかないのであった。

吹きとおす風をホームの柱によってふせぐようにして佇んでいると、やがて貨物運搬の車が入って来てサイの立っている少し手前で止った。駅員も出て来た。どの顔を見ても、夜でもないしさりとて朝になりきっているのでもない不愛想な表情で、四辺のそんな雰囲気からもサイの頼りない心持は募ってゆくようである。

地響を立てて青森発の長い列車が構内に入って来た。サ

イは体に力を入れるようにして機関車の煽りをやりすごすと、三等の窓一つ一つに気をつけて後尾へ向けて小走りに歩きはじめた。忽ち列車から溢れ出る人波に視野を遮られた。リンゴの籠だのトランクだのにつき当りながら一番尻尾の車の近くまで強引に行って見たが、それらしい姿は群衆の中になかった。それらしいところまで駆け戻った。そして猶よく見張ったが、初め黒いかたまりとなって流れて来た旅客の群は次第に疎になって、手拭をコートの衿にかけた丸髷の女連れ二人が大きい信玄袋を持ち合って歩きにくそうに行ってしまうと、それが最後で、ホームに残っているのは貨車のまわりの貨物係りだけになってしまった。

夜どおし駛って来て停った機関車の下から白い蒸気がシューシュー迸っては、ふきつける風に散らされている。それを伏目で見て唇を軽く嚙んでいるサイは、涙組んだ。これの次だとすると五時三十四分のかしら。それででも来るのだろうか。もしや自分が日を間違えたかとハッとして、もう一遍ハガキを見た。どう見てもそこには、やっぱり三月二十五日とある。

サイはそのまま待つ気で暫く柱によりかかったが、何だか気が落付かなくて、厚司前垂れをしている貨物係の方へ近づいて行った。

「あの五時三十四分につく上りもここに待っていていいんでしょうか」

「え？」

「そりゃ常磐線だ」

別の男が軍手の片手で、

「あっちのホームだ、あっち」

「ここを一旦出てね、右の方へあがるんですよ」

「あら！　すみません」

周章てて顔を赧くしながらサイは、改札にことわって教えられた段々を駈けあがった。どんなわかり難いところかと思ったが、段々をあがったらもうそこが常磐線の天井の低い待合室で、奥のベンチには将校マントの軍人だの、黒レースのショールをした女だのかなりの人が溜っている。同じホームの片側から千葉の方へゆく電車が出るので混雑がひどい。

こっちのホームは高みで一層吹きっさらしだが、いつの間にか大分白んで来て、いかにも風のある朝らしい橙々色の東空に鼠色雲が叢だっている空の見晴しや、山の手電車がしっきりなく来てそこから呑吐される無数の男女が、まだ光りの足りない払暁の空気のなかで艶のない顔色の忙しそうに靴や下駄で歩いている姿をこっちで見ているのも珍しかった。ふだんなら自分も今あっちのホームをゆく娘のように小さい風呂敷包みを胸の前にかかえて王子の通りを歩いている時刻なのである。今朝の特別さがまざまざとしてサイが思わずショールをひろげ直したとき、頭の上でラウド・スピイカアが急に鳴り出した。

「三等車はホーム中央事務室より後の方でございます」
サイばかりではなく、黒いレース・ショールの女も大きい折鞄を下げた国防色の服の男、巻ゲートルの男、一団が前後してラウド・スピイカアが同じ文句をくりかえしている下をぞろぞろとそっちへ行った。
速力をおとしてホームに辷りこんで来た列車の、ずっと後方の一つの窓から、日の丸の紙旗の出ているのが見えた。おや、サイが目を瞠るのと、
「あれです、あれです、日の丸を出すッて云ってよこしているから」
とせわしない男の大声がするのと同時であった。そう云ったのは巻ゲートルの男で、どこからか自分も日の丸の紙旗を出して、頭の上に高く振りかざしながら体の幅で人ごみをかきわけかきわけ進んでゆく。サイは胸が一杯で、頰っぺたのあたりを鳥肌たてながら、おくれないようにその男のうしろにつづいた。
巻ゲートルの男が、合図の日の丸と帽子とをいっそくにつかんで朴訥そうな若い教員に挨拶しているわきをぬけて、サイはそこに二列に整列している三十人ほどの少年たちの一つ一つの顔をのぞいて行った。
「勇ちゃん」
皆と同じように小倉服に下駄穿きで足許のホームに小型の古い支那鞄をおいて立っている勇吉は、サイの声がきこえないのかぼんやりした視線を周囲の雑踏に向けたままでいる。サイは思わず故郷の訛をすっかり出して、
「コレ、勇ちゃんテバ！」
と弟の肩をゆすぶった。
「なーにぼけんとしてんのョ」
目へ涙をうかべながら笑って自分をゆすぶっている桃色レースの派手なショールをした若い女が姉のサイだとやっと判ると、勇吉は、
「おら誰かと思った」
笑いもしないでそう云って、すこし顔を赧くした。三年会わない東京ぐらしのうちにサイは二十になり、こうして勇吉は小学校を卒業して来た。いろんな気持を云いあらわしようもなくて、サイは、
「荷物こんだけ？」
ときいた。
「うん」
「田岡のぱっぱちゃん丈夫か？」
「ああ」
「村からほかに誰と誰が来たの」
勇吉は自分の隣りに並んで立っている少年の方を顎で示した。
「まだ高等からも二人ばっか来ている」
そこへ、引率の教員が列の中ごろまで出て来て、
「では、これから二重橋へ行きますから、皆電車ののり降り、交通によく注意して下さい」

と大きい声で注意を与えた。

巻ゲートルの男が教員と並んで先頭に歩き出した。バスケット。風呂敷の包。トランク。勇吉のような時代ものの鞄。子供たちの荷物はそれぞれの形と色とで、田舎の暮しぶりを物語っているようで、サイには懐しい心持が湧いた。男の子たちは黙ってそれらの荷物をもって動き出した。後から跟いて歩く人々のなかにサイもまじった。

東京駅の前から、二重橋前の広場へさしかかった頃には、朝日が晴れやかにまだ活動の始らないビルディングの面を照し出したが風の勢はちっともおちず、サイの長い袂は羽織から長襦袢まで別々に吹きちらされた。一行は風にさからってうつむきながら砂利を踏んで行った。

仕切りの手前のところまで行って横列に止った。

「さて皆さん、これから謹んで遙拝し、銃後を守る産業戦士の誓を捧げて解散したいと思いますが、その前に今日から皆さんの先生ともなり親ともなって将来の御指導をして下さる方々に紹介したいと思います」

幾カ村かの小学校からとり集めて上京する子供たちを引率して来たその教員は、そう云い乍らポケットから手帳をとり出した。

「名を呼ばれた人は三歩前へ出て下さい」

山陰の佐藤清君、市原正君、自分の村の名と自分の名とを呼ばれた少年たちは云われたとおり列をはなれて前へ出た。すると教員は一寸体をひらくようにして、城東区境町昭和伸銅会社浅井定次さんと、横の方にかたまっている大人たちの群に向って呼んだ。なかから、鼠色の服をつけた五十がらみの男が帽子を脱いで一二歩前へ進んだ。礼!

二人の少年の礼に、

「やあ」

というような挨拶しながら瞬間にこやかな顔になって自分も礼をかえし、後しさりに人々の群へ戻った。名を呼ばれる少年たちはどの子も口元をひきしめ、瞬きもしない眼差しを凝らして、あっちの方から出る人を注目しているのであった。小倉服の肩に朝日の光を浴び、生れて初めてひろい東京の風に吹きさらされながら、一生懸命な顔をしている弟たちを見ているうちに、サイは唇が震えるようになって来て、目立たないようにショールをもって行った。これから自分の主人になるのはどんな人だろう、優しい人だろうか。こわい人ではないだろうか。遠縁にあたる王子の小父につれられて初めてお針屋へ行った途中の気持もおぼえがある。

実際、名をよばれて出て来る男のなかにはあっさりおとなしそうな様子の人もあり、余り親切そうにも見えないのもある。紹介のすんだ組は離れたところからそれ迄とは違う関心を互に通わせて、少年の方は、その一つの顔を見はぐるまいと気を張っているようだし、大人の方はもっと複雑に少年をねぶみしているように見える。勇吉の行くヤマダ合資会社という羅紗問屋はどれだろう。サイは帯揚げの

結びめでもゆるめたいような苦しい気になった。
城山の別府勇吉君！　勇吉が体操のときのように脚をひろげて一歩二歩三歩と前へ出た。日本橋区芳町二丁目ヤマダ合資会社藤井謹之助さん。小紋の粋な羽織に、黒レースのショールを軽く手にかけた女がその声に応じて歩み出したのを見て、サイは何故となく伏目になった。上野の駅からこの三十四五の痩せぎす女の疳性らしい横顔がサイにいい印象を与えていなかったのであった。

その女のひとは、教員のそばへよって小腰をかがめながら何か二言、三言云った。

「は、いや、御苦労様でありました」

改めて勇吉の方へ向き直って、

「けさは会社の支配人さんがお出でになる筈でしたが御病気だそうで、奥さんが代りにおいで下すったそうです」

勇吉はきちんと礼をして列に戻って行った。雇主にあたる人々と出迎に来た少年の身内のものも形式ばって引合わされたが、サイをまぜてそれはほんの五六人であった。

それから教員は短い訓示を与えた。東京の悪い誘惑にまけないで立派な産業戦士になるように。

「困難な場合がおこっても、諸君が今朝東京の土を踏みしめたこの第一歩の心持を忘れずに、どうか勇気を奮いおこして下さい。万歳を三唱いたします」

雇主側の人々が前列に、うしろに少年達が並んで、万歳、万歳、万歳と三度叫んだ。朝の陽かげは益々砂利の広場を広々と照し出して、一行の姿も小さく見え、叫ぶ声も風の中へとんだ。

界隈はずっと軒なみ問屋で、サイと勇吉がよりかかっているガラス窓越しに、隣りの裏手の物干が目の先に見えた。そこで女が洗濯物をひろげている。一方に板戸棚のついた十二畳のその部屋に店の若い者みんなが寝起きしているらしく、往来に向った窓際にもこっちの窓の下にも小さい机が三つ四つ置いてある。後はがらんとして、ガラス越しの日光が琉球表の上に斜めにさしこみ、何処やらに男くささが漂っている。吻っとしたような安心しきれないような眼つきでサイは机のあたりや戸棚のあたりを眺めた。兵隊に出る年までには商業も出してやるという話で、勇吉は来ているのであった。

朝飯が出来たら呼ぶからと云って迎えに来た女が降りて行ってしまうと、忙しいような静かなような四辺に折々電話のベルがきこえて来る。暫くしてサイが、がらんとしたその部屋のひろさに押されたような小声で話し始めた。

「姉ちゃん、けさ大間誤付きした。なんで時間はっきり知らさなかったのよ」

「おらもはっきり分んねかったんだもの」

「――うち変りなしか？」

「うん。母ちゃんが、姉ちゃんに負けん気だして、辛えの

無理しんなって、よ。帰りたかったらいつでもけえって来って」
サイは、
「母ちゃん、そんなこと云ってた？」
と何か、よく笑ったけれども、その言伝は心にしみた。お針屋に十月（とつき）いて肋膜になったときもサイは帰らず、この二月には、夜業をつづけて二十円も国へ送った。勇吉は親身な情愛と珍しさのこもった少年ぽい眼差しで初めておちおちと姉を見ながら、
「母ちゃん、姉ちゃんに会ったらよく云えつったよ」
「大丈夫さ。この頃は、サイさんよく続くって伍長さんが褒めるぐらいなんだもの」
田舎へかえりたくないサイの気持は、この仲よしの弟にもうまくは話せそうもない。あの村。その村のなかの家。そこでの鶏の鳴く刻限までおよそきまっている毎日の生活。思い出すと何か云えず懐しいところもあるが、あのなかに織りこまれて又暮すことを考えると、体も心も二の足ふんで、こっちに居たいと思えて来る。王子で二月（ふたつき）近く臥て、その間にサイは何度か泣いたが、到頭いてしまった。未来の生活というぼんやりした輪も、今ではこの生活とつづいたところで考えられるような塩梅である。
壁ぎわで窓をあけはじめた勇吉の日にやけた赤い頰っぺたや、胡坐のかき工合は、まだその膝の辺に藁でも散っていそうに田舎の気分をもっているが、この勇吉にしろ、やがてはその気分もわかる此処の暮しの繋りのなかに、自分ではそうとも知らずに踏みこんで来た。七つという年のちがいばかりでない心持で自分の様子が凝っと姉に見られていると気付かない勇吉は、支那鞄の中から一つ一つ新聞包みを出して畳へおきながら、
「山北んげの正ちゃんが拵えがすんでから急に帰（けえ）って来た」
と云った。
「ふーん。じゃみんな大喜びだろう」
「またいぐんだって。又冬のうちばっか内地の米くいさ帰って来たくってみんな云ってら」
「ふーん」
勇吉が姉の膝の前へ並べた新聞包は故郷の味噌づけ、蓬餅、香煎、かき餅などであった。
「王子とここさわけるんだって」
「あっちはほんのしるしでいいよ。姉ちゃん気いつけていつもいろんなもんやっているんだもの。——こ蓬、餡はいってか？」
「いたむから入れねってさ」
田舎でも砂糖は足りないだろう。サイが、あとでわければいい、とガサゴソ新聞包を片よせているところへ、梯子段の下から、
「御飯ですよ」
という声がした。自分たちに云われたのかどうか分らな

くて、姉弟がちょっと顔を見合わせてためらっていると、迎えに来た女の声で、
「さ、二人ともおりて下さい」
サイがいそいで「はい」と都会の声で返辞した。
「さ、行こう」
サイが先へ立って梯子を下り、ここですよ、と内から云われた襖を膝ついてあけると、大きい台が真中に据えてあった。そこは日のささない六畳で、女中が遠慮のない視線でサイの人絹づくめの体を見下しながら、台所から汁椀を運んで来た。
ここで自分まで朝飯をよばれようとサイは思いもかけないことであった。
「気がつまるといけないから、お源さん、お櫃は姉さんにたのみましょうよ」
腹がすいている筈だのに、勇吉は三膳しか代えなかった。もっとおあがりよ、と云いたいのをこらえて、サイは洗いものを自分で台処へ運んだ。
やがて紺色の羽二重を頸にまきつけた、でっぷりした男が懐手でその部屋へ入って来た。
「よう、来たね」
主人だろうと思って、サイと勇吉は丁寧にお辞儀をした。
「東京はどうだね、まあ辛抱が大切だ。追々勝手が分りゃあ何にも心配するがもなあないさ」
煙草を一服、二服して、
「何てったっけ、勇——吉君か、丈夫らしいじゃないか」
サイは自分の膝の上を見ている。ちゃんと対手を真面目に見ている勇吉は返辞するのによく声が出ないというような困った表情をした。
「ハハハハハ、まアいいさ。あとで旦那さんが見えるから、御挨拶しな」
じゃあ、これは支配人というんだったのかと、下を向いたままサイは何だかおかしさと馬鹿らしさがこみあげた。何て主人のように物を云うんだろう。
「ねえちゃんの居るのはどこだい？」
姉ちゃんというより姐ちゃんという風にきこえる問いをひきうけて、
「どっか王子の方ですってさ」
わきからおかみさんがバットに火をつけながら答えた。
「工場なんですって」
「こっからは——大分あるな。近すぎるよりは身のためだ。家へもよく云ってやって下さい。たしかに引受けたからってね」
「どうぞよろしくお願いします」
サイは頭を下げた。
「じゃ、[illegible]みてやって」
「そりゃ貴方、新どんに云ってくれなけりゃ」
「あ、そうか

片方は懐手のまま立ち上りながら、
「今仕着せを出してやるから、着たら店へ来な」
「さ、私もこうしちゃいられない」
従ってサイも勇吉も坐っていられなくなって廊下へ出た。
二階へ戻ると、サイは寂しい眼色をしながら黙って新聞包の土産をわけはじめた。
声を出したら涙が出そうで、弟の顔を見ず格子をしめ、さて問屋町の往来へ出て、サイの気持は全くとりつぐはがなくなった。まだやっと九時すこしまわったばっかりだった。日の暮れるまでにはうんと時間がある。きのう、是非にと今日休ませて貰うように頼んだとき、伍長は、サイさんがそんなに迄云うんならよくよくのことだろう、よし。と許してくれた。そのときは勇吉を出迎えるというだけで心がいっぱいで、こんなにあっけなく別れたあと、あまった一日のつかいみちに困ろうなどとは念頭に浮んで来なかった。
いかにも王子の家へこのまま帰る気はしない。何処か行くところはないかしら。風で揺れているような春の[illegible]真正面にうけながら、ともかく停留場へ向って歩いているサイの頭に浮ぶのは、せむしのごく意地わるなお針屋だの、三カ月ほど女中に行っていた勤人の家、さもなければ、同じ村から来ているフサヰのところぐらいのものだった。フサヰのいるのは目黒だし、女中をしているのであったから急に行ったところで立ち話が関の山である。自分ひとりが休んで出て来ているのだから今の勤めの友達のところへ行ったって居ないことは知れている。どこか行くとこはないかしら。サイにすれば、王子のうちの婆さんではない誰かの前で抱えている新聞包をあけて、堅くなった蓬餅でも焙りながら、三年会わなかった弟の勇吉が駅で自分を見それて、吃驚したように誰かと思ったと云った話もしたいのであった。故郷というものがひどく近くて又遠く思える心持もきょうの気持も何だか誰かに話したい。そんなことも話せるようなところはどこだろう。
停留場の赤い柱の下で桜模様の羽織の袂や裾を風に煽られながら、サイはぼんやり電車を一台やりすごした。

二

いく種類もの作業場が棟々に分れていて、石炭殻をしいた道がポプラの並木のある正門からそれぞれの方角に通じている。
門のところに立っている守衛が、朝入って来る娘の挨拶のしようが悪いと、生意気なと一度でも二度でも礼をやり直させる。其処はそういう気風を寧ろ誇っていた。そして、四月に入ると、女たちが羽織を着て来ることを許さなかった。帯つきに、定められている作業服を着て門を潜ら

なければならないことになっている。
広い敷地のその辺は、元何だったのか三四尺ばかり小高く土の盛り上った所があって、青々した雑草まじりにタンポポが咲いたりしている。そこへ腰をおろして、何ということなし伸して揃えた足袋の爪先が春日に白く光るのを眺めている娘。作業室の羽目にあっち向きに並んで、背中を照らされながら喋っている娘たち。ここは本を持ち込むことはやかましく禁じられていた。だから昼の休みも毎日こんな風にして過ごされる。
胸に番号のついた作業服を着たサイと弓子とは、石炭殻の道を購買の方へ歩いていた。事務室の裏手つづきで、どの作業場からも真直来られる車軸のようなところに、小さい市場ぐらいな購買がある。ボルトで締めた高い天井の梁や明りとりのガラスの埃がこの頃の陽気で目立つ。相当こんでいる三和土の通路を二人は菓子部へ行った。ここの蕎麦ボーロが王子の婆さんの好物で、サイは時々買ってかえってやっている。
呉服部のところで、ケースの上にくりひろげてある絹セル夏物柄の銘仙をちょっとさわって見たりしながら、
「これ、本当に銘仙なんかしら」
弓子が心元なそうに呟いた。
「私たち、折角働いてこしらえたって、この頃のものなんか何こさえているんだか分んないみたいで詰んないわ、ねえ」
月賦がきくのと時間がないのとで、娘たちはつい購買で拵えることになるのであった。
「ううん、もうすんだの？」
「ううん、まだ一月あるの」
ぶらぶら行くと、弓子がサイの作業服の筒袖のたるみをきゅっとひっぱった。
「どうしたの」
眼顔で弓子がさすのを見ると洋品のところでひとかたまりの娘が、この頃流行の髪につける小さい結びのリボンを選んでいる。その真中で、綾子が水色っぽい一つを手にとって、
「どれ？　いいけど、地味だねえ」
わきに立っている娘の髪の上にもって行って眺めているのであった。中高なのと頬の上のところに黒子が一つあるのとで綾子の派手な顔立ちは人目に立ったし、そんなにしてリボンを選んだりしている動作のうちにも、いつも見られる自分を意識しているポーズがあるのであった。
「こないだ三越でとっても素敵なの見たわ。繻子でね、片方は鼠っぽい銀色、裏は薄桃色で、モダンだったわ、一尺六十八銭よ」
行きすぎて暫くすると弓子が腹立しそうに、
「ふん」
と云った。
「見なさい。ピクニック話が一寸出たらもうあれだ」

綾子さん、華胥の女のようだわ、ととりまく娘もあって、サイはそうなのかしらと距離のある心持でいたが、弓子の綾子ぎらいは容赦なかった。向いあって喧嘩するというのではなく、製図板を並べながら互に決して口をきき合わないという形で継続されているのであった。
「けさだってさ、体操のとき、わざわざ直させ たりしてさ、何ていけすかないんだろ」
「そうだったかしら」
「どこに眼がついてんのよゥ」
ふっと笑えて来たら、可笑しさがとまらなくなって、サイは、ああいやだ、いやだ、と手の甲で涙をふきながら肌理(きめ)のこまかい顔を赤くして笑いこけた。
「何なのさ、何がそんなに可笑しいのよ」
「だアって」
「気持がわるいわよ、云ってよ」
「御免ね、何だか急に可笑しくって」
いつか、綾子が鉛筆を床へ落したことがあった。それがころがって隣の弓子の足許へ行った。弓子は勿論ひろってやらない。そこへ伍長の飛田がまわって来て、
「鉛筆がおちてるぞ」
と云った。弓子も綾子もだまりこくって製図板にふさっていると、飛田が、ポマードできっちりとわけている頭をかがめて、其をひろった。
「支給品を粗末に扱っ ちゃいけない、物資愛護、物資愛護」
そう云いながら鉛筆をあげて、そのあたりを見まわしたとき、今まで知らんふりだった綾子が、
「アラ！」
ルビーの指環をはめた左手をすこし反すようにして出して、
「すみません」
その鉛筆をうけとった。
弓子が人をばかにしていると後でぷりぷりおこった。サイが困ったようにうけ答えしていたら、わきで爪をこすっていたとよ子が、
「ふふふ、サイちゃんばっかりいい迷惑だわね。何故あんなに云うか知ってる？」
サイの方は見ないで猶作業服の袖で爪をこすりながら気をひくようにきいた。
「さあ」
「弓子さん、自分だって伍長がすきなのよ、だからよ、ね、わかったでしょう」
それを思い出して笑えたのだったが、笑いやんでみると、サイには、あんな風に自分を見ないで云ったとよ子の云いかたにも何か特別なものがこもっていたようで、妙な気がした。
サイたちの室は娘ばかり二十人足らずで、男の働いている大きい作業室から張り出しのように新造された一区劃で

あった。みんな二ヵ月の見習もここでやった新しい臨時の連中ばかりである。

三時頃、大きい方の部屋で飛田の何か怒っている声がした。云いわけらしい別の低い声がしたと思うといきなり平手うちが聞えた。

「飛田の手だと思うなッ」

ふくら脛が重たくなって、両肱をもたせた製図板に重心をかけて小休みしていたサイは、びくっとした顔になって、烏口を持ち直した。程なく飛田が腕章のついた作業服に、幾分顎の張った苦い顔でこっちへ廻って来たときには、娘たちは皆緊張して、いろいろな髪形を見せながら、ひっそりと図板についているのであった。

定時のサイレンが空気を広くふるわして鳴りわたった。初まりは低く次第に太く高まって暫くの間大空に音の柱が突立ったようにそのまま鳴ってから、低くなって消えるサイレンの響は、いつきいてもサイに漠然とした怖さを感じさせる。あっちこっちでサイレンが鳴っているけれど、このだけはその幾通りかの音色をぬーと凌いで、息も長く、天へ大入道が立つようだった。このサイレンが鳴り出すとその音の太さ高さから附近一帯の家並の小ささが今更感じられる。

残業の日で、一しきりサイレンにふるわされた空気も鎮り夕方のすきとおったような西日が窓から見える雑草の色を目にしますと、サイは冬の間には知らなかった気持が胸から脚へと流れるのを感じた。淡い気怠るさのような、又哀愁のようなその気持は、空気の柔かなこの頃の夕方のひとゝき、サイのぽってりした一重瞼を一層重げにするのであった。

窓際に小さい円い腰かけをもち出して、膝の上に弁当の包をのせたまま、そんな気分でいるサイのわきへ、てる子が、

「一緒にたべましょうね」

とよって来た。年の少いてる子は、快活で、弁当箱のふたについた御飯粒を箸の先で拾いながら、

「あらいやだ、母ちゃんが又これ入れている、私末広きらいなのに……千葉の親類がこんなものをくれるんだもん」

そう云い乍らサイの弁当をのぞいた。

「一寸おかずとりかえない？」

切干の煮つけをサイは昼もたべた。きのう弁当に入っていたのも同じものだ。王子の婆さんは元からそういうことを平気で下宿人の誰にでもした。この頃は、ものがあがったというわけでなおひどい。男連は、だからじき弁当を持って行かないようになってしまうのであった。

「ね、あんたどう思う？　伍長さん、ほんとにピクニックへつれてってくれると思う？」

「さあ……どうなんだろう」

と云いつつ、サイの目はてる子が弁当の下にひろげてい

る古新聞の写真にひかれた。
「ちょっと」
「なに？」
「その写真」
サイが箸を持ったままの手でこちらへ向け直して見ると、それはやっぱりそうだった。勇吉を迎えに行ったあの朝、やはり上野へ着いた山形県からの小学卒業生たちが一団で撮られていて、東北も雪の深い奥から来た少年たちは絣の筒っぽを着て、大きい行李を持っている。偶然こっちへ顔を向けている少年の円っこく光ったようにとれている鼻や、おどろいたような真黒な二つの眼は、その足許におかれた新しい行李とあわせてサイの心に迫って来るものがあった。可憐なる産業戦士、晴れの入京という見出しがついている。あの三月の第四日曜にはその前の日に卒業式をすましたような少年たちが、万を越す数で地方からこの東京へ教員に引率されて来たのだ。
よくニュース映画に思いがけなく出征している息子や兄の顔が映っていて、大よろこびした話を、サイは思い出した。この子の親がもしこの新聞を田舎で見たら、どんな気がしただろう。
「ああ、ほんとに写真とろう」
サイは思わず溜息をつくように云った。
「弟がこんど日本橋の方へ来たのよ」
ここで育って、ここで勤めているてる子にその気持は通ぜず、悪気もないとおり一遍の表情で、
「いいわね、淋しくなくって」
あとは「愛染かつら」の主題歌を鼻でうたいながら、円椅子を片づけはじめた。
三週間近くなるのに勇吉はまだ手紙をよこさない。ここでは、なかの仕事のことをひとに話すことを堅くとめられていて、親兄弟でも同じことと云いわたされている。自分の方から弟との間におかなければならない距てがあるようで、サイは何のための何なのかも一向知らず、只薄い白い紙の上に朝から晩まで引いている墨汁の線へ、訴えのこもった娘らしい視線を落した。

三

夜勤で、かえったのは朝七時半ごろだったが、夕方四時には、又出かける仕度をしなければならない。五時から夜中の十二時迄で、次の日は定時で一日という順になっている。
ピクニックのあとから急に夜勤がはじまったりして又忙しくなって来た。荒川堤へ行ったのはよかったが、昼から雨になって、みんな裾をはしょって、手拭を帯の上へかけて遽しく帰った。
キコ・キコ・キコ・キコとポンプから洗濯盥へ水を汲みながら、サイはその日の情景を断片的に思い出した。

その町筋には鋳物工場がどっさりあって、洞のように暗い仕事場の奥で唸りながら火焔があがっていた。古腹がけのどんぶりのところだけ切ったのを前に下げて、道端の炭殻の中を箸でせせっていた神さんたちの姿。黒くって、震動しているようなその町の中を出はずれたら堤はぱーっとなる程遥々とのびていた。川は本当に気持がよかった。
「川口へ来て世帯を持ちな、暮しいいぜ」
まだ独身で、ここから通っている飛田がそんなことを云った。誰かが路の両側を見まわしながら、
「だってえ。どっち向いたって真黒けな人ばかりみたいなんだもの」
「それがいいのさ。金気がしみついているから虫がつかないよ」
綾子が細かいめの素と白の矢羽根の袷で、パラソルを膝の前へつきながら河原で蹲んで流れを見ていた姿が、シャボン泡の中へ甦った。
あらかた洗濯がすみかかったとき、婆さんがひょいと裏へ首を出した。
「おや、洗濯か。サイちゃんはまめで、見てても気持がいいや。――若いもんはいいねえ」
薄赤い、むっちりした手が水の滴をたらしながら襦袢をしぼり上げるところを見ていたが、引込んだと思うと、
「ちょいと、すまないけど、これもついでにザブザブとやっといて下さいな」
焼杉の水穿きをつっかけて、自分の水色格子の、割烹着をもって来た。
「ここへおきますからね、すまないねえ」
サイがどうとも云わないうちに 素早く、シャボン水の流れている三和土へじかにおいて縁側の方へ行ってしまった。
しんから舌うちしたいところをやっと耐えて、サイは唇をかんだ。何て気にくわないやり方をする婆さんだろう。まともに物を頼むということを知らないで、姉さんと呼んでいるここのかみさんのトミヨがサイの母親の血つづきで、上京したのも、その連れ合いが高島屋の裁縫をひとてでやっているというお針屋の口を世話してくれたからであった。ところが家のなかのことや、サイのほかに四人おいている下宿人の世話は連れ合ひのおふくろであるこの婆さんが一切とりしきっていた。トミヨは子供にかまけて、合間に賃仕事をするのが精一杯のように、まとまっては物も言わなかった。
サイを今の勤めにふりむけて、女中に行っている先から暇をとらしたのは、周旋屋のようなことを商売しているトミヨの連れ合いの寸法であった。
「そりゃお目出たい。全く今どき、いいねえちゃんが、よその台所を這いずっているなんて気が利かないよ」
婆さんは、一応戻って来ながらも不安そうにしているサイにそう云った。

「そうときまれば、サイちゃんも立派なおつとめ人だもの、あんきに手足を伸すところもいるわけだね」
耳のうしろから半分吸った煙草を出して、何か思案しながら豆タンの火をつけている秀太郎に、
「あの二畳あけたらいいだろう」
と云った。
「あすこなら、家のものの目も届いてサイちゃんも安心だし、十五円で三度たべて一部屋ついて、大勉強だよ、ねえ」
「うむ。——それにしても、何とかしてもう三四人、東京で働きたいって娘はないもんかね。どうだ、サイちゃん、田舎の友達でそんなのないか」
そんなことで月十五円払う話もついたことになってしまった。
サイは　婆さんに押しつけられた洗いものまで竿にとおしてしまうと、徹夜して来た眼玉の蕊がズキズキ疼くような疲労を覚えた。
茶の間から掃き出したごみが葉蘭にくっついている手洗鉢の横からあがって、サイは自分の部屋の戸をあけた。便所と手洗いの間にはさまれているこの二畳はおかしな部屋で、どだい壁も天井板もないところであった。低い頭の上から、三方ぐるりと白地に紋がらの浮いた紙貼りで出来た部屋であった。おそらく素人細工のその紙貼りは、柔かくぶくついている上に天井にも横の方にも汚点が滲んでいて、初めてそこに坐ったとき、サイは鼠の小便のかかったボール箱に入ったような気がした。そして、この頃の陽気になると、その部屋はほんとにボール箱みたいな糊の匂いがするのであった。
片隅に積んである蒲団を斜かいに敷いてサイは横になった。
とろりとしたと思うと、部屋のすぐ外の狭苦しい空地へ、ワーッと鬨の声をあげて、うちの子供が近所の仲間と走りこんで来た。ワーッ。竹の棒でうち合う音がする。遠くなったり、近くなったりする夢と現の境でその声をきいていると、どの子か、駈けまわっている拍子にいやという程二畳の窓へこけかかって、格子なしのガラスがこわれそうな音を立てた。
サイは、夢中でその騒ぎから身を庇うように蒲団を頭まで引かぶった。
「どこの子だい！　乱暴するんなら、表の空地でやっとくれ」
婆さんが、便所の中から怒鳴りつけている。びっくりしたので動悸がうって、サイは蒲団から苦しそうに上気せた顔を出した。すっかり眼がさめてしまった。眼がさめながらまだ疲れたように睡たくて、背なかが蒲団から持ち上げられないほど懈い。こういうときがサイにいちばん辛く悲しかった。
働くことはかまわないのだけれど、せめて夜勤のあとぐ

らいたっぷり食べて、存分寝てみたい。その気持が自分でも名状出来ない思いとなって　若い体に脈うって涙がこぼれた。
冬のころ、このことからサイは今の勤めをやめようかと思ったことがあった。先にいた勤人の家庭では食物と睡る時間はたっぷりあった。給金が十五円になれば、その方がいいぐらいであった。丁度忙しくなりかかった時で、サイがそれやこれやで余り浮かない顔をしていたら、飛田が目敏く、見とがめて、
「サイさん、どうした、この頃元気がないようだぜ」
もしいやなら、このなかでほかの仕事にまわしてやってもいいと云った。サイは顔を赧らめた。
「私この仕事がいやなんじゃないんです」
ここをやめても、すぐによそへ勤めることは許されないという条件もあるのであった。
涙をこぼしたら、いくらか気分がすっとした。手紙の様子では勇吉も段々馴れて来ているらしい。でも、たった一カ月足らずのうちにゴム裏草履が三足にシャボンを二つもとられたとはどういうんだろう。田舎者だから揶揄われているのかしら。当惑しながら、黙っている勇吉の丸い顔がサイの目に浮ぶようである。
蒲団をあげて積んだ上へ便箋を置いて手紙をかきかけているところへ、
「是非サイちゃんにみせたいものがあるんだがね」

婆さんが重そうな風呂敷包を下げて入って来た。
「——ホーラ、どう？　何ていい縞だろう！」
くりひろげられたのは伊那紬で、正絹まちがいなしの本場ものが今回限り一反二十円なのだそうだ。
「小父さんの友達から荷が今ついたところさ。サイちゃんには時別五ヵ月月賦でいいにしとくよ。月四円でこんな物が出来るんだからいいねえ。娘が二十にもなりゃ帯一本だって大事な身上だ」
躊躇したあげく、サイは到頭半分云いまかされた形で、藍と黄のを一反とることにしてしまった。
「お金がすまないうちに着なさんなとは云わないから、安心おし」
昼飯の間じゅう、婆さんが余り物のあがったことを娓く喋るものだから、これも夜勤あがりで寝ていたのを二階からおりて来て一つチャブ台でたべていた旋盤工の清水が、
「うー、たまんねえナ」
と急に茶づけにして、かっこんで、
「お婆さんは智恵者だよ。喉へつかえて腹が忽ちいっぱいだ」
まがい銘仙の袷の裾を脚に絡ませるようにして大股に立って行ってしまった。
「ふん、すこし金まわりがいいと、すぐあれだ」
婆さんは、おからの煮たのをよそいながら、
「ちっとはよそも見るのがいいのさ」

と云った。
「酒屋の横の井上さんなんかじゃ、六畳一間を四人にかして十七円ずつとってるじゃないか。それだって、今時この辺で何て云う者はありゃしない」
そういうとき、婆さんはサイをいかにも家内のもののように自分の側にひきつけた物云いをするのであった。サイはつかまれたその袂を振り拗るような気分で、ぽってりした一重瞼に剣をふくませ　黙りこくっていた。

四

暫く見かけなかった千人針が　駅の附近にちらほらしはじめた。サイは謂わば千人針の東京へ出て来て暮すようになったのだったが、赤い糸を縫いつける黄色い布地も、きのうあたり頼まれて手にとったのは木綿でなく、妙なレーヨンの綾織のようなものになっていた。二重の赤い糸を二重に針にからめながら、こんな布地ではじき糸のたまだけのこるようになってしまうのじゃないかと思われた。そんなになったときの千人針を考えると滑稽のようだし可哀想でもある。それでも頼むひとの本気の顔は、やっぱり純綿のときと変らないのであった。
勤めさきの仕事に使う紙もこの頃はやかましくなって、元のように割合簡単にすてることを許さなくなった。隅へ番号を入れた紙を原図の上へピンでとめていると、便所からかえって来たてる子が目を大きくしてよって来た。
「ちょっと、赤紙よ」
息をつめた囁き声なのに、弾かれたようにまわりの顔がいくつか此方に向いた。
「隣りの室にも来た人があるらしいわよ」
忽ち室じゅうにその気分が伝わったが、その動揺を反撥するようなもう一つの気分もあって、みんなは格別それ以上喋りもしないで仕事をつづけた。
空をふるわせて鳴るサイレンの響の下にある町ぐるみ、ここへ通う者の一家で出来ているかと思わせるような土地柄であったから、サイが来てからばかりでも、臨時の若い男や世帯もちのおっさんなど、随分たくさん出た。その度にここでも女がふえて来た。
ここの土地に住んでこそいるが、国は遠く東北や山陰の地方にあるというような娘がふえて来た。故郷では一家から二人出ているという娘もいる。この頃は、女十五人に男一人の割だとさ。東京がそうなのか、日本がならしてそうなったのか。それも、赤坊からお婆さんまでの女をひっくるめてのことなのかどうかは分らなかったが、働いている娘たちの耳の底にそんな言葉は澱んでしみこんで、何かの感じとなっているのであった。
赤紙のことがみんなの気をはなれて暫くしたとき、伍長の飛田が入って来た。一つの図板をゆっくり見まわってから、窓を背にして立って、

「ちょっと、そのままの位置で手だけ止めて」
いつものような口調で命じた。顔がすっかり自分に向って揃うのを待って、飛田は軽い咳ばらいのようなことをすると、
「一つ報告しなければならないことが出来ました。実は只今――」
あらっ、というような声がしたような気がして図板のまわりを漣のような動揺が走った。それを、自分の声でおし鎮めるようにしながら飛田がつづけた。
「実は只今、召集令をいただきました。皆さんとは養成の時代からの浅からぬお馴染みであります。御承知のとおり、まだ数日余裕が与えられてありますから、愈々出発の前日まではこれまでどおり、及ばず乍ら御一緒に働きたいと思います」
飛田は、それだけ云うと軽く頭を下げる様子をして、やがて、
「作業をつづけて」
と、もう一度、自分も図板の間を歩きはじめた。
みんなうつ向いて、サイは何ということなし散っていない後れ毛をかきあげるような動作をした。烏口だの定規だのが、ばらばらにお義理のようにとりあげられた。すると、室の奥の図板のあたりで、くッ、くッと笑いをこらえているのか、泣声をこらえているのか咄嗟には分らないような女の喉声が洩れて、とよ子が髪て誰の目にも明らかな啜り泣きで作業服の肩をふるわしながら、顔をおさえて小走りに室から出て行った。
何とも云えないその場の空気になった。飛田は最後の図板まで同じ歩調でまわって、一言も云わず隣りの室へ去った。
よほどたって、とよ子が極りわるそうに、洗い直したような顔をうつむけて、そっと自分の図板へ戻って来た。そして、まだすっかり落着けないらしくどこか気落ちのしたような風で烏口をいじりはじめた。
弓子は、ちえッというような眉のあげかたをしている。綾子が案外冷静に頬の上の派手な黒子をこちらに見せて、唇のあたりに妙な薄笑いのような表情を泛べながら仕事しているのを見ると、サイはいやな気持になった。一つ一つの図板のまわりから見えない渦が流れ出して作業室のなかをめぐっているようで、サイは、仕事に身がいれられなくなった。
飛田のあとには、どんな伍長が来るだろう。サイにしろ、烏口へ墨汁のふくませかたから教えられた飛田に離れることは、何か普通の気持でないのであった。
てる子が無邪気に、
「ああア私、何だか変な気分になっちゃった」
定規を図板のむこうへ押しやるようにしながら、胸を反らしてその辺を見まわした。
「ねえ、何か御餞別あげなけやわるいでしょう？　みんな

何あげるの？」
返事をするものがなかった。
「みんなで羽二重の千人針こさったげましょうか」
「うるさいわよッ」
弓子が疳癪声を出した。
「あとで、みんなして相談すればいいじゃありませんか」
てる子のああア私と云った声も、それを叱りつけた弓子の声も、仲間うちにきこえる程度でのひそひそ声であった。作業時間のうちに話しすると、ひどくおこられた。
シセンを越えるという語呂の縁起から五銭玉を千人針につける人がある。その五銭玉のついた千人針をサイの室の娘たち一同で飛田に贈る事になった。ほかに五十銭づつ集める話がきまった。
「おっかさん一人になっちゃうのね、気の毒ねえ」
「――駄菓子屋の方が繁昌してるもの平気さ。そんなに心配なら、てるちゃん　これからちょくちょくお見舞ねがいましょう」
「なんにも　そんなに云わなくたっていいじゃあないの」
てる子が、むきになって涙をためた。
「弓子さんたら……意地わる」
弓子もてる子も、いがみ合いながら気持がしんからふっ切れてはいないのである。
何か焦々した、調子の揃わない気分が娘たちの作業室に拡った。今まで全体が平らに湛えられた水の面のようだった空気が、何とも云えず絡まるものになって、飛田が入って来るとそれを迎えて彼の動く方へ、前へも後へもよこにもたてにも、互にぶつかりながら跟いて動くような神経が群だっているのであった。若い飛田は　その感じから我知らず窮屈になって、みんなの顔を見ないようにして、図板の間を歩いて行く。それが又室の空気に反射する。肩のつまるような一日が過ぎると　サイは、いつもよりずっと草臥れて、不機嫌になって家へ帰って来た。
敷居をまたぐと、そこの土間で飯ごとしていた六つの妙子がポッンと、
「お兄ちゃんが来たヨ」
と云った。
「お兄ちゃん？」
「うん」
「勇吉さんが、つい今しがたよったけれど、あんたが帰ってないもんだから、また来るって――」
いつでも来られる人みたいに云う、トミヨの気働きのない言葉がサイの疳にふれた。
「用じゃなかったんでしょうか」
盗られた三足のゴム草履のことやシャボンのことが浮んで、心配になった。
「何とか云ってなかったでしょうか」
「なんも云っていなかったよ。自転車そこにおっかけて、ちいと話したばっかしで……」

「……でもここがよくわかったこと」
「私もそう思ってね。そしたら、何でも東京じゅうの番地の入った地図売ってるんだってね、それを見て店の使いもするんだってよ」
　こっちの方へついでがあったのかしら。日本橋からここまでと云えば、往復で何里になるのだろう。
　今時分からもっと暗くなる頃にかけて、表の十二間道路の片側は東京方面からこっちへと帰って来る自転車で、一刻まるでトンボの大群がよせたようになる。後から後からとむらのない速力で陸続通り過ぎて行く自転車の流れを見ていると、体のなかで血がそっちへ引かれてゆくような、面白くて悲しい気分がした。たまに同じ車道のあっち側を逆に向ってゆくのがあると、それはペダルを踏んでいる脚の動きまで目に見えて重そうだ。
　遠い路のどこかの辺を、勇吉も今頃そうやって帰っているのだろう。その姿を想像しようとすると、サイの心には、まだ田舎にいた時分、サドルをはずして横棒の間から片脚むこうのペダルへかけ、腰をひねって乗りまわしていた弟の様子が泛んで来るのであった。

五

「お早うございます」
サイは何心なく五、六人かたまっている方へよって行った。
「おはようございます」
なかの一人がふり向いてそう云ったきり、みんなぶすっとしている。眼をしばたたいて、サイは小声で、
「どうかしたの？」
と、訊いた。
「ふーん」
「そりゃ誰だって気持がわるいわョ、ねえ火曜日にさ、何でみんなで決めたの。誰だか知らないけれど、出しぬいて自分だけ好い子んなって不動様のお守りもってったり、防弾鏡もってったりするなんて——きらいだ」
　作業室の娘たちの代表で、とも子とみのるが、昨夜川口にある飛田の家へ千人針と餞別の金とを届けに行った。飛田は留守で、母親が前掛の端で涙を拭きながら礼をのべ、あなたがたのお仲間が成田山のお守りを持って来て下すったり、何か鉄で出来た鏡をわざわざ届けて下すったり、と有難がった。
「誰だか、名をききゃよかったのに」
「おばあさんにわかるもんですか、——間抜けくさくて、そんなことを出来やしないわよ」
　皆が揃って、体操の始る前、とも子は腹のおさまらない調子で、
「千人針とお餞別、ゆうべ確に届けましたが、私たちの知りもしないお守りだの鏡だのお札までおっかさんに云われ

て、挨拶にこまったわ」
と報告した。
「あら！　そんなら私だって黒猫のマスコット持ってたのに」
てる子が残念そうに云った。
「そうじゃあないのよ。みんなできめた通りにしないひとがあるっていうのよ」
飛田が一同に贈物の礼を云ったときも、室の気分はしこりがあって、しめっぽかった。
「ああ、愈々明日か」
図板の間をぶらぶら歩きながら、睡眠不足と酒づかれの出たような艶のない顔を平手でこすって飛田が、寧ろ早くその時になった方がいいというように云った。
「みんな、後の伍長さんが来てから、嗤われんようにしっかりやってくれ。それだけはよく頼んどくぜ。何て教育しとったと云われたんじゃ、成仏出来んよ」
窓際へ佇んで伸びをするようにしながら、暫く浮かない顔で外を見ていたが、気をとり直したようにくるりと向き直って、
「さ、みんな、朗らかに、元気を出した、出した。明るい顔を見せるんだ」
そう云われても、娘たちの眼の色は引立たなかった。
昼の休みに、とよ子が顔色を少し蒼ざめさせて、
「とも子さん、ちょっと」
とよって行った。
「あのお守りだか、鏡だかの話、私こないだ泣いたりしたから、みなさんに変に思われているかもしれないけれど、全く知らないんですから――」
切り口上で云って、一層蒼い顔をしたままむこうへ行ってしまった。
何も彼も、何てこんがらかって妙なんだろう。サイは両方のこめかみを人さし指でもんだ。
何を思ったのか飛田が、
「明日は決して誰も欠勤しないように」
と念をおした。新しい伍長が来るというのが理由であったが、そればかりでもないものを感じられるようなこの二三日の空気なのであった。
珍しく定時間が続いている。その日は午後になって降り出した驟雨が運よくひけ前にあがった。雨に濡れた低い屋根々々が西日にテラテラして、どこかで雀が陽気に囀る声がしたりしている。洗われた大通りはいつもより遠くまで見とおされて、銀杏の街路樹の色が青蠟燭の列に思える。サイは瑞っぽい空気を心持よく吸いこみながら、ゆっくり歩いて、ページヴメントが一方はロータリについて右へ曲る本通り、もう一方は真直橋をわたって先へゆく角へ来かかった。
丁度その二股になった橋よりの歩道のところに茶色に塗られた大型トラックが積荷へ被布をかけてあっち向きに停

っている。歩道のところに白バイが来ている。サイの歩いてゆく側の歩道のところに人がかたまっている。段々そばへ行ってサイは思わずセルの袂で口元をおさえた。トラックの後の車輪の間に菰のかぶせられたものがある。自転車が一台トラックからすこし離れたところにひっくりかえったままになっている。即死らしかった。広くてきれいな雨上りの車道を自動車やトラックがそこまで来かかると、一様に感情をあらわしてスーと速力をおとし、しかし角で停車出来ないところだから、見かえりがちに徐行して過ぎてゆく。どこもこわれたところのないような形でひっくりかえっている一台の自転車と菰をかぶせられている者の哀れな形とは、サイに鼻の髄が痛いような心持をおこさせた。スリップだ。両方でよけそこなったんだ。こっち側の人だかりの間でそんな低い声がきこえる。

　袂で口元をおさえたなり、サイは又歩きだしたが、涙が出ない哀れさが苦しく喉につまった。菰の盛り上っていた工合が大きい男と思われず、そう思うと腿のあたりを震えが走った。東京へ来たばかりのあの少年たち、まだアスファルトのスリップを知らない少年たち、勇吉の自転車姿もそのなかから浮き立って来て、サイは、袂のさきで切なそうに小鼻の横をふいた。

　この頃の公衆電話には電話番号帳がない。それを思い出して、サイは、ずっと廻り道をして郵便局へよった。

　勇吉を呼んでくれと頼むと、電話口で、オーイ何とか怒鳴っているのがきこえる。受話器をきっちり痛いほど耳へあてがってサイは待っていた。やがて、人の出た気配で、ぼんやりした声が自信なげに、

「――ハア」

　と云うのが伝って来た。サイは爪立って送話口へのびあがった。

「ああもし、もし、勇ちゃん？」

　間をおいて「――ハア」

「勇ちゃん！　もっとおっきい声出しなさいよ。もし、もし。きこえる？　私よ……」

　サイは、そういう間も時間がきれそうで気が気でない思いをしながら、ひろい東京のあっちの果から覚束なく響いて来る弟の声を一心にたぐりよせた。

（一九四〇年四月「日本評論」）

街あるき

中野重治

「おれは、頭がよくはないが頭が強いよ。」
そんなことをいいいいして来た安吉だったが、この頃は何としてもぼんやり摑みどころなく暮らしていると思わねばならなかった。本を読んでもあまり面白くなかった。教室へたまに出て見てもすぐ殆ど生理的に我慢がならなくなった。
第一彼は、本所へひっこして来てから夜よく眠れたことがあまりなかった。早く眠ろうとあせっている頭の上を、といっても二階に寝ているのだから頭の上ではなかった、ただ彼は、電車みちの方を枕にして寝ているのでそんな気がするのだったが、その頭の上をがんがんいって電車が絶え間なく走っていた。電車は亀沢町の車庫へ早く帰ろうとして、と安吉には思われた、やけになってがんがん走っていた。何時頃まで続くか検べたことはなかったが、そしてそれはつまり安吉にしても幾らかはとろとろと眠るということでなければならなかったが、二時すぎ頃は最後のがちゃばり方でがんがん走っていると思われて仕方がなかった。
やっと電車がすんだと思うと今度はトラックだった。トラックは一日じゅうひっきりなしに走っていたが、電車のやかましい音が聞えなくなると一しょに急にトラックとしてはっきり音を立てて来るのだった。どのトラックも一トン半積み二トン積みというような大型のものばかりで、それが建築材料か何かを山のように積みあげて、小うるさい邪魔っ気なもののない深夜の街道を、三十マイルも五十マイルもぶっ飛ばして行くように安吉には思われた。と、もうごおっという始発の電車の音だった。
それでも彼は、味も素っ気もない夢などを見てまだうつらうつらしていた。しかし明けやすい夜は明けて来た。彼は仕方なく起きて窓をあけ、一階の小屋根にのっかっているトタンの看板の背中越しに、晴れたためしのない鉛色の空をちょっと眺め、看板の背中に溜っている砂やら埃やらを指でこすって見たりしてから、青黒く瘦せた頰をぷすっとさせて下へ顔を洗いに降りて行くのだった。
ちょうどよければそこで安吉は勇造たちと朝めしを食った。しかし少しおそければ下の朝めしは済んでいた。勇造は大抵外へ御用ききに出てい、勇造のこの頃来た細君は洗い物なんかをし、勇造の弟の勝二が店を取りしきって何と

なし嫂と角つき合っていた。
　勇造兄弟は安吉には従兄弟にあたっていたが、却ってそれが安吉には具合がよくなかった。勇造は太っ肚なたちでまだしもよかったが、勝二の方は下手に頭がわるく、検査になっても鼻汁を垂らしているようなところがあり、細君は細君で、関西なまりを下手な東京弁でごま化そうとあせったり、壁一重隣りの空店の娘へ安吉を紹介したがったりして彼をいらつかせた。
　隣りの空店が何なのかは安吉は知らなかったが、とにかく復興直後の二軒長屋の一方を勇造が借り、その借りて引越しの時には安吉は東京にいず、帰って見ると、隣りは空家でどっちが上か分らぬ兄妹が留守番をしているのだった。若い二人が何をしているかも全然知らなかった。時々父親が見まわりに来るらしかったが、朝や夕方など、二人でふざけている声が安吉に聞えて来ても、兄妹だけに毒のないのが取柄なばかりで、よく聞えもしなかったがてんで下らぬ話ばかりらしかった。第一安吉は、彼等兄妹の顔もよく見たことはなかったから、そんな娘に、二階の大学生を隣りの娘に近づかして見ようかなどというような、そのくせ年齢は安吉より決して上ではないその細君の思わせぶりなどは、時にこの頃よくよくいやな気持ちで無言ではね返していた。
　実際彼は、女といえばどんな女にでも引かれてよかりそうに思われるのに、また事実引かれもするのに、どんな女にも一向興味が起こらなかった。一年前には彼もロマンチックな振舞いに出たことなどがあった。大学前の通りで出くわした小さい女学生がその対象だったが、何しろ彼は、その時その娘を非常に美しいと思ったのだった。その女学生は、安吉は女学生だろうと思ったが、安吉の反対の方から、教科書なんかを入れた袋と、テニスのラケットと、大きなT形定規とを提げた恰好ですたすたとやって来て、すれちがいざまちらっと安吉を見上げたのだった。
　うすい樺色の皮膚をして、眼の小さい娘だった。しかし娘とはいってもまだ小さく、安吉を見上げたとはいってもただそれだけのことだった。そしてそれが分かっていたけれども安吉はそのままにすませなかったのだった。
　翌る日安吉はわざわざ午後三時頃の大学前を歩いてみた。しかし娘には逢わなかった。翌る日もその翌る日も出てみたがやはり出会わさなかった。安吉は最初娘に逢ったのが火曜日だったことを考えて、次ぎの週と次ぎの次ぎの週の火曜日とに出かけてみたがやはり駄目だった。そしてそれはそれ切りになってその後一度として女の問題は起こっていなかった。
　ただその後こんなことは幾つかあった。例えばその一つは玉の井の昼見物だった。その頃からそろそろ毎日がぼんやりしかけていたが、ある日同じ大学生の松本のところへ行くと、失職してぶらぶらしている田舎新聞記者上がりの磯村が来てい、そこへ松本の知合いの医科の学生が来てぶ

つぶつ話し合っていた揚句、いつものようにしようことなしの散歩になり、どんどん歩いて行って結局玉の井へ行こうということになったのだった。

一行四人のうちで玉の井へ行ったことのあるものは誰もいなかった。昼玉の井を歩いて女達に侮辱にならぬだろうかという懸念が四人ともにあったが、しかし通るだけならかまわぬだろうというので彼等は出かけた。

ここがそこだという辺りへ折れこんで行くとさすがに彼等は落ちつかなかった。狭い露路つづきがしんとしていて、店屋がないだけに却ってさっさと通りすぎるほかない気味あいだった。

彼等は狭い四つ辻へさしかかっていた。と、そこへ女が一人出て来て、それに自転車の男があやうくつき当りそうになって片足地につけてやっとそれを喰いとめた。二人ともはっとしたらしかった。しかし男は何か一と言いうなりそのまま足を離してペダルをぐいっと踏んだ。と、女が上半身をひねりざま自転車の男の腰をつかまえた。

「何だって、この野郎。も一ぺんいってみやがれ……」

安吉たちはすぐそこまで来ていたが、事件が始まったのでいつか歩くのを止めてはらはらして見ていた。

「ふん、この……」

この何といったのか四人には聞えなかったが、よっぽどひどい言葉で男がやっつけられたらしかった。いうなり女はぐんと一と突きついて手を離した。男は二度三度ふり返って何かいおうとしたが、一度もいい出せずにそのまま走ってしまった。女はそのまま上半身を元へ戻して歩いて行った。

「えらいもんじゃなア……」

「こうだからな……」磯村は脚をふみはだけ気味に上半身うしろへ捻って真似をして感心した、「『ふん、この……』……」

それは映画の一コマを見るような見物だったが、かといってその女を訪ねて行く気には安吉にはなれなかった。

例えばまたこんなことがあった。ある日省線電車に乗ると、腰かけている安吉の前の吊革にぶら下がった若い女があったが、女は着物着で、右袖をおさえている左腕の手首がかなり長く袖からはみ出ていた。うすく光沢のある皮膚で、そこに一面に毛が生えていて、それが毛深いという感じでなく、細い鳶色のが、すべてゆるく彎曲していた。その細さ、色、彎曲、それがそこに置かれて生きている状態はかなりに感覚的だった。安吉自身慾情的なものを感じた。しかし彼は、それ以上その女の顔も、着物も、からだつきも、年齢も知ろうとは思わなかった。彼は手首からも眼をそらした。それは彼に無関係の、将来もずっと無関係の、そして今だけ彼をつらくさせるものだった。

また例えばこんなことがあった。その日彼は久しぶりで斎藤に落ちあい、やはり久しぶりで彼等に師匠株になる藤堂を訪ねて行ったのだったが、二人は上富士前から、一年

前安吉もそこらに住んでいた神明町車庫の方へだらだらと坂を下って行った。車庫のすぐそばの煙草屋で彼等は煙草を買った。前からそこでは娘が煙草を売っていたが、その娘が今もいて煙草を渡すのをひょいと見て、一年前とはちがわぬ不器量でいながら、全然別人と思われるほど顔つきが荒れてしまっているのに安吉は驚いた。

「おい、おい……」

彼は、娘が出戻りにでもなったのかどうか店を出るなり斎藤に訊いて見ずにいられなかった。

「じゃ、あれァ何だろ？」

娘はその後ずっと店に坐っていたのだった。結局彼等は、煙草を買う男どもが、煙草を買うたんびじろりと眼で娘の顔を一と撫でして来た結果あんなになってしまったと、考える外はなかった。そうだとすれば、それはそうに違いなかったが、またそんな眼つきで娘を一と撫でした覚えが彼等になかったにしろ煙草を買った男たちの中へは彼等も数え入れねばならなかったが、それはどうしようもない冷酷な成りゆきだった。

藤堂のところでもその話が出た。

「ひどいわい！」

安吉たちより一まわり年上の藤堂も、黒い鼻の上でぎろりと眼を動かして嘆息するように短くいった。

彼等はそれからそれへと女の話などをした。安吉も斎藤も藤堂に詩を見て貰っていたが、彼等の間柄は先生と弟子という関係とも違っていた。安吉たちの方はかなり傲慢だった。彼等には「先生」で相手を称ぶことがどうしても出来なかった。藤堂は藤堂で、安吉たちの試作を何かごく短い言葉でそろっと批評することもあり、かと思えば、「何じゃい、あれや！」と一と口でけなしてしまうこともあった。それだけ彼等は親しく、その親しさがどんな性質のものか考えてみることなしにその中で坐り合っていた。

「春画というものは一人で見るべきもんだよ。」

彼等の前に絵本が二つ出ていて、一方の方を安吉がしばらく熱心に見ているのに藤堂が声をかけた。

「どうだ？　大丈夫か？」

「大丈夫って何が？」

「何が『何が！』かい……」

藤堂は露骨な言葉を一ついって、「じゃ、賭けよう。」といい出した。

「一分間だ。わしゃここをおさえてるぞ。それで何ともなかったらビール一本のますわい。いいか……一分間だけでいいわい」

決定しがたいものを感じたが「いいです。」と安吉は答えた。

「わき見はならんぞ。」

安吉はあぐらをかいて、藤堂は及び腰になって安吉の腿へ手をあてた。も一方の手では時計を握った。

一分間は安吉に長かった。必要がないと知りつつやはり

彼は下肚に力を入れた。苦痛とは違う待遠しさで藤堂がちらちらと時計を見るのを眼の隅へ入れた。

「よし。」といって藤堂は手を離した、「おおい、ビール二本持って来て上げなさい。」

彼等は、気持の労れた高笑いでビールを飲んだがそれも続かなかった。

「君等は、性慾生活が荒んでるんだよ。わしらの若い時にやそんなもんじゃなかったわい……」

藤堂の言葉は何気ないものだったが安吉にはこたえた。そんなことが幾つかあったがどれもこれもそんなようなものだった。被服廠跡前の飲食店でビールを飲んで、そこの馬鹿みたいな女に角力取りと間違えられたのなぞも苦笑ものだった。

「こんな瘦せた褌かつぎがあるもんかい？」

そもそも角力取りと間違えるようでは、そんなことをいってみても始まるものではなかった。彼は慰めるもの、美しいもの、柔かいものを求めて女を求めていたが見ださなかった。斎藤にしても松本にしても磯村にしてもそんなものは持っていなかった。そんなものは、安吉にも安吉のどの友達のまわりにも存在しなかった。やはり彼は、酒を飲んだり、街を歩いたり、本を読んだりする外はなかった。そして夜おそくまで頭の上を電車が走り、真夜中トラックが走り、そうかと思えばもう始発電車が走り出すのだった。

ある日安吉は思い立って飯倉にいる中学時代の友達を訪ねて行った。別に親しくしていたわけではなかったが、同郷人であるのと、本人が直接文学などに関係のない大人しい学生であるのとが彼にそれを思い立たしたのだった。

東京に二年いて、まだろくに電車に乗れぬ安吉は、やっとの思いで本所松井町から飯倉まで辿りつくことが出来た。その男の下宿は坂の上にあって、坂の下の谷間のような所に名高いある作家の家があった。前に一度来た時それを教えられていたが、今日も上から見下すように出来るその家は陰気な屋根を見せて谷に伏さっていた。

「御免なさい。」といって友達の下宿の格子を開けたが彼は狼狽えた。友達は留守であるかも知れなかった。約束していたわけでもなく、今日あたりはいるだろうという何かの目当てがあるわけでもなかった。その上彼は帰りの電車賃を持っていないのだった。

そしてその通りその男は留守だった。結局そのまま帰るしかないと思いつつ彼は出て来た女の子にやはり訊いた。

「どこへ行ったか分かりませんか？」

「分らないわ。」

「そう……」

無邪気な娘に頓間に答えて神谷町の方へ出て行ったが今や大問題だった。彼はどっちが東か西か全然わからなかった。空はすっかり曇って、太陽の位置が分かりはするが東

西南北を考えるには具合のわるい位置だった。

「とにかく電車道を行こう。」

神田まで出ればあとは分かるからと思って彼は歩き出した。彼は鳥屋の鳥籠を覗きながらずるッずるッと進んでいた。その時けたたましい声で鸚鵡が叫んだのが聞えた。鸚鵡の舌が見えた。それは厚ぼったい肉質で黒い色をしていた。とうとう彼は見覚えのある神田へ来た。ここへ来るまで彼は何度かベンチを探していた。とうとう神田へ来たからにはベンチがあってもよかりそうに思えた。彼は、ここまでの道を探したのとは違った気持ちで探したがやはりここにも一つのベンチも見つからなかった。彼に取ってはそれは大都市の冷酷さだった。彼はぐじぐじした復讐心を感じて日暮里の斎藤のところへ行こうと思い直した。彼は神田から本郷へ出た。切通しを岩崎の前の横丁へはいって上野へ出——この岩崎前の横丁に遠州屋という細暖簾式飯屋があり、そこの酒がうまいので何度か飲んだことがあったが今日は飲みたくもなかった。——改築中の駅をぐるっと廻って日暮里へ漕ぎつけて見るとその斎藤が留守だった。

忙しい下っ端勤め人の斎藤はまだ帰っていなかった。とうとう夕方になり、もう少し待てば斎藤も帰って来るに違いなかったが、しかしそれにしてもあてになるわけでなく、今頃こっちへ向いて帰って来つつあるにしてもやはり自分は自分で帰って行かねばならぬことが安吉にもはっきりしていた。

「結局何マイル歩いたかな？　本所までまだ何マイル歩くのかな？」

彼は来た道を引っかえしながらどろんとした頭で考えつづけた。道路は暗くなっていた。上野の山の側には店屋がまだ出来上がらず、そのため、それだけ立派に出来あがったコンクリート新道が野っ原のなかの道路のように汎漠としていた。その向うにぼやあっとした光りがあり、深さがだだっ広いとでもいうような街の音響がそこから聞えていた。

彼は腹が空って来たと思った。そう思うとぐんぐん空腹感が強まった。そろそろ赤痢がはやって来て本所では鮪がやすくなっていた。それを目がけて松井町あたりではみんなが鮪を食った。

「今夜はまた鮪か……」

しかしそれを食うしかないと思って、ひょいと顔を上げた安吉の方へチラチラする光りが近づいて来るのに彼は気づいた。それは光りというよりも灯りらしく、見えたと思った途端にその数がどんどんふえて行った。それが向うの、ぼやあっとした音響と光りとの中から、しかし殆んどまっ暗になった道路の上を揺れながら近づいて来るのだった。それは後から後からと泡のような暗さのなかから出て来て、こっちへ揺れて来た。それと安吉とは近づいて行った。とうとうその先頭のものと彼はすれちがった。それは自転車だった。乗っているのは職工たちだった。ほとんど

道路一ぱいに並んでそれはやって来た。安吉はその中を游ぐようにして歩いた。上野駅の横手へ出て山下の方へ曲がるまで、何百とも何千とも知れぬ自転車の灯が安吉の腰のへんの高さのところを流れて行った。

「鮪だろう……」

自転車の群がどこへ帰るのか安吉は知らなかった。日暮里とか三河島とかいう街道の名前が彼の頭に浮かんだが、日暮里も斎藤の家の近所以外は彼は知らなかった。三河島といってはてんで名前しか知っていなかった。朝と晩との人間のある群団の自転車での移動ということがぼんやり分かるだけで彼は萬世橋から左手へ電車道を曲がって行った。彼はまだまだ歩かねばならなかった。

安吉は人声がしたと思った。つまり眼がさめたのだった。しかし全然ぼんやりしていた。どこに寝ているのか彼は知らなかった。知ろうとも思わなかった。とにかくひどく狭い部屋だった。

彼は昨日以来のことをぐるりと思い出そうとした。するとすぐそれがひっかかった。

「するとつまり、昨日じゃなく一昨日からだな?」

一昨日の朝彼は寝坊をした。そして午前中本を読んでいたが、午ちかくなって机の前へ寝ころがってしまったのだった。

生活を建てなおしたいと彼は思った。しかし生活を建てなおすという言葉はいやだった。結局は同じにしても、もっと違った言葉でいわれねば彼には当てはまらぬように思えた。

寝ころんでいる限り空は見えなかった。トタンの看板の背中は相かわらず汚なかった。彼は眼鏡をはずしてそれを机の上へ置こうとした。すると思い出したことがあって口に出して呟いた。

「何だって? 手前じゃあるまいし……」

すると行きなり腹が立って来て彼は起きあがってしまった。三四カ月も前のことだったか、久しぶりで太田篤に逢った時のことをふいに思い出したのだった。

その頃彼等は小さな同人雑誌をやっていた。それは一年半くらいも続いていた。それがその頃、何となく同人達がばらばらになり出し、定期刊行も乱れ、同人の集まりにも一人二人と顔を出さぬものがふえていた。太田がやはりその一人だった。

安吉は太田を大学前の古本屋で見つけた。彼等は通りへ出、それから近所の果物屋へはいってお茶をのんで話した。

彼等は当りさわりのないことを話した。お互いに雑誌のことに触れまいとしていることの意識が安吉を刺戟した。果物屋を出た二人はやはり通りを歩いて行った。そして触れまいとしていて結局その問題にふれた。

「実際いって、文学をやって行く熱意がなくなったんだ

よ。第一、才能があるかないか分からんしね……」
「才能のあるなしじゃないよ！」という言葉が出かかったが安吉は呑みこんでしまった。彼等は追分へ来ていて、そこで太田が結局のところを切り出したのだった。太田が大学内のある団体に加わっていることは安吉も知っていた。しかしそれについて意見がましいことを述べたことはなく、またそれはそれでいいことなんだと漠然と考えていた。
「そうかね。しかし今はおれ達青年が、文学なんかやっているべき時じゃないなんていう言い方はおれには納得できんね！」
「そんなこと言ってやしないよ。おれはおれのことを言ってるんだ。」
「ふん……」
しかし安吉には、太田の言葉が安吉たちの分まで含めているものとしてしか受け取れなかった。安吉は文学の道を信じていた。しかし太田たちの行こうとする道に対する全体的な意見は述べられなかった。
雑誌は、太田のせいではなかったがそれ切りつぶれてしまった。その時のことを思い出したのだった。
「ふん。おれは才能があるよ。文学を努力を以てやって行くことそれが才能なんだ。」
起きあがった安吉はそのまままた松本のところへ出かけて行った。彼の行くところといっては松本のところか斎藤のところかしかなかったが、何ということなし斎藤にはしばらく逢わずにいた。
電車の中で彼は街に旗が出ているのに気づいた。彼は考えたが分からなかった。とにかく国の旗日ではなかった。本郷まで来ると通りの人が空を仰いでいた。電車からのぞいて見ると飛行機の一隊が舞っているのだった。
松本はいた。磯村五郎も相かわらずごろんとしていた。
「こないだアどうしたんだい？　冗談じゃないぜ。」
安吉は非難めかしていったが相手は笑っていた。
「どうしたい、あれから？」
「どうしたじゃないよ……」
実際それは腹の立つ話だった。ちょうどその四五日前も彼等は逢っていた。彼等は、松本、安吉、磯村の三人で浅草へ出かけた。安吉は浅草を殆ど知らなかった。また浅草という土地がへんに不安だった。一つには安吉の方角感覚の鈍さにもよっていた。彼は自分で住んでいるところ以外は東西南北が分からなかった。それで浅草へ行くと、行きと帰りとで方角が正反対になるのが困るのだった。いろんな目印を持っていたが、それがそれなりにぐるりと廻ってしまっていた。そして田原町まで出て来るともう一度それが元通りぐるりと戻っているのだった。
彼等は暑いなかを公園へはいって行った。安吉は初めて観音さまの木の上の鳩を見た。
その辺で彼等はしばらくぶらぶらした。それからベンチ

に腰かけて休んだ。そして安吉は眠ってしまった。どれだけ眠ったか知らなかったがやがて彼は眼をさました。彼は見まわしたが松本も磯村もいなかった。ベンチから立って彼は彼等を探した。しかし無駄だった。

起こすのがかわいそうだというのでそのままにしたんだろうか？　しかし彼等は、安吉の滑稽なまで土地不案内なことを知っている筈だ。冗談だろうか？　しかし冗談とはいえない……安吉はそれでも探したが結局あきらめた。彼は「びっくりぜんざい」「びっくり氷」と看板の出ている家へはいって氷苺を註文した。

しかし彼の前へガラスの大丼が出て来て、それに彼の顔ほどもあるまっかな氷苺が盛りあがっているのを見た時は気が滅入ってしまった。

「だからおれア、びっくり氷を一しゃくい食っては見たんだがね！」

松本も磯村も、あの日あれからどうしたのか、なぜ安吉に置いてけぼりを食わしたのかはとうとう話さなかった。安吉もそれ以上は訊かなかった。

彼等は松本の下宿のお膳で晩めしを食った。それからたらたらとお喋りをした。

そのうち三時になり三時半になった。彼等はお喋りで疲れていたがこれから眠る気にはなれなかった。

「おい、松本。金あるかい？」と磯村がいい出した、「あったら、汽車に乗ろうや。」

松本は財布をしらべた。金はあった。いくらあったか安吉はもう思い出せない。とにかくそれで浦和へ行こうということになった。

しらしら明けに彼等は松本の下宿を出た。そして三丁目で電車に乗って上野駅へ行った。公園前から上野駅へまがる時、向うから靄の中から出て来る電車が安吉に見えた。すれちがいざまに見ると人が一ぱいにつまってそれでもまだ沢山真鍮の棒にしがみついていた。それは安吉にはやはり大都市の夜明けだった。彼等がどんな人間か彼は知らなかった。安吉たちはそのまま一番の汽車に乗った。

汽車の中も彼には珍しかった。高等学校の生徒が乗っていた。彼等は東京から浦和の高等学校へ通うらしかった。会社員のようなものや役人のようなものも乗っていた。

三人は浦和で降りて町のなかへはいって行った。町は褌街で紐のように伸びていた。三人は町の端へ出てしまった。そこは公園のようなところで、祭でもあるらしく、それを目あてらしい見世物小舎の骨組が出来ていた。三人がベンチにかけているうち、二三人の男がやって来てそれに取りかかった。人気のない公園で、それは新鮮なようなうらぶれたような光景だった。

「腹が空ったな……」

そこで彼等は引返して食べもの屋を探した。食べもの屋はなかなか見つからなかった。店があるにはあっても、まだ店をあけていないのだった。

しかしとうとう彼等は見つけた。それは馬車曳きたちの飯屋だった。彼等の横で、そういう男がやはり腹ごしらえをしていた。
「やすいな……」
煮〆、酒、めしで幾ら払ったかやはり忘れたがそれはやすかった。
腹が出来ると彼等はねむくなった。彼等はもう一度公園へ行ってベンチで昼寝をした。それから東京へ戻って来た。東京へ帰ってみるとますます眠くなった。それで彼等は、もう一度松本の下宿へ行って一眠りしようということにしてぶらぶら歩いて行った。
突然安吉は、着物の後裾が一尺ばかりほころびているのに気づいた。それは、痩せたふくら脛がちらちらする具合のほころび方だった。どこでほころびたのか、どこからそのままで歩いていたのか彼には分からなかった。彼はあわて、連れの二人はあはあはと声を立てて笑った。
彼等は松本の部屋で眠った。そして夜になって眼をさました。それからまた外へ出た。
「雑司ヵ谷へ行ってみるか？」
「うん……」
雑司ヵ谷の誰のところへ行くのか知らなかったが安吉はついて行った。二人の話からすると、それはこの前の夏、彼等二人が北海道へ「巡業」に行った時の一行のものらしかった。その時彼等は、北海道のあちこちの町で下足番をしたり襟に小旗をさして人力で町まわりをしたりしたらしかった。何のために彼等がそんな真似をしたか松本も詳しくは話していなかった。一体彼はひどい物臭だった。
雑司ヵ谷の家へ着く前に彼等はまた飲んだ。金は出がけに松本が質屋でこさえていた。三人とも酔った。殊に安吉は疲れが出てべろべろに酔った。それから飯を食った。
「何をあんなにお喋りしたんだろう？」
飯を食った時に斎藤のことを思い出したのははたしかだった。いつか安吉が日暮里の斎藤のところへ泊まって、あくる日勤めに出る斎藤と連れ立って出て途中で別れたことがあったが、その時斎藤は、そこの餅菓子屋へはいって稲荷ずしを十銭食って昼めしにしたのだった。
しかしたしか話にはそれは出なかった。むしろ彼等は例によって東京人の習慣を罵倒した。殊に磯村は、東京の人間が稗苗の鉢植えをちやほやすることをひどく悪くいった。それに対して、松本がいつものぼそぼそした口調で東京人を弁護していたようだった。稗苗は勇造の店にも置いてあった。そして勝二が、嫂に嵩にかかったような説明をしては毎日水をやっていた。
それから彼等は震災の話をした。松本と磯村とは、震災に逢っていない安吉に彼等めいめいの経験を話した。磯村の話した上野の森の生活は殊にこわいような興味を安吉に与えた。それは、あの時磯村が上野へ辿りついた時にはすっかり山が人でうずまっていたが、そのうち一人の婦人が

産気づいて来たと見ると、そこらにいた女という女が集まって来てその女を取りまいてしまった。子供の女もその人垣に加わった。そして一人の男もそこへは近づかせなかった……

「実に女というものは偉いもんじゃなァ……しかしつまり、これで一昨日、昨日、今朝か……」

して見るとここが雑司ヵ谷の家なんだろう。ここの家へ来てから又ぞろ飲んだ記憶があるが、この家の主人というものには記憶がない。昨夜は留守ででもあっただろうか？

安吉はぼんやりした眼で連れの二人を探した。それはすぐ見つかった。

磯村は壁にくっついて壁の方を向いて寝ていた。その裾の方へ松本がうつ伏せになって寝ていた。安吉自身はこっちの壁にくっついて寝ていた。彼等の蒲団はみなよごれていた。部屋は四畳の間というようなものらしかった。何にしてもそれは、訳のわからぬままひどい有様だった。ぼんやりしていたが安吉は蒲団を引きあげてまた眼をつぶった。

もう一度彼は人声で眼がさめた。むしろさめぬままにそれを耳に入れた。

「冗談じゃないよ。じゃ、何かい、たしかにここんちへ届けたっていう証拠があるんかい？」

「いいえ、そんな……でもたしかにこちらだっていうものですから……」

「じゃ、君が届けたんじゃないんだな？」

「ええ。あたしじゃないんです！」

「じゃ、何だ……そこいら上がってしらべて見たらいいだろう。こっちゃァ起きたばかしなんだから。丼でも蒸物でも、あったら探してくれ……」

「いいえ、そんな……」

それは蕎麦屋の小僧かのように安吉には思われた。ぽんぽんいっているのは嗄れた男の声だった。安吉は何のことかよく分からなかった。彼はそのまままた眠った。

そしてもう一度彼はさめた。今度ははっきり眼がさめてしまった。

「そうかね。ふうん……」

隣り部屋に人がいるらしく、そういっているのはさっきの嗄れ声の男だった。

「あたしもね、今度は何か一儲けしたいとも思っているもんですからね……」

安吉は見まわしたが、磯村も松本もそこにはいなかった。

「で、どこなんだね、その……」

「それがね、あたしの方はもっぱら建築の方なんですよ。装飾の方はやらねえんで……それや、ま、丸でやらねえこともねいんですが、どっちかといえや建築の方なんで……」

「眼がさめたか？」といってそこへ磯村がはいって来た。続いて松本がはいって来た。
「帰るか？」
「帰ろう。」
安吉はほっとした。彼は逃げ出したい気持ちだった。
「いいよ。」
隣り部屋の男へ挨拶しようとする安吉を松本が止めて反対側の襖をあけた。そこは台所だった。狭い簀の子の上にテンヤものの丼が三つばかり置いてあった。狭い簀の子の端の狭い土間に彼等の履きものがあった。
出たところは一種の原っぱだった。湿地を埋め立てたものらしく、でこぼこしたあちこちに草が生えて、そこへ小さい平屋建がばらっと建っていた。それは不思議な光景だった。平屋はみな安っぽい日本建てだったがどれもペンキが塗ってあった。その上それらの家は、お互いに直角でも平行でもない関係で建っていた。ある家とその隣りとが三十度位で交っていると、少し離れた別の家が、そしてこの間に不整形な空地の部分が入りこんでいたりしたが、今度は十五度位で相対しているのだった。
三人は黙ってそこを離れて行った。それは安吉に、夢に出て来た一廓かのような気味わるい窪地だった。実際そこは、原っぱでありながらまわりに対しては窪地をなしていた。
昨夜以来のことはやはり安吉は分からなかった。またその分からなさが、良心が咎められるといった種類のものであった。
本通りへ出てから彼は松本に訊いた。
「あれや何だね？　何だか建築の方だの装飾の方だのっていってたろう？」
「あれか？」といって松本は眠そうな眼を向けた。
「ペンキ屋だよ。」
「ペンキ屋？」
「建築ってのは家の外まわりやなんかを塗るのさ。装飾ってのは家のなかだ。湯屋の湯槽んとこに三保の松原やなんかかいてあるだろう。あれだよ。」
「ふうん！」と安吉はある情なさを感じた。あの時彼は芸術に関係あるものを頭へ浮かべていたのだった。
「じゃ、あれや何だね？」とまたしばらく行ってから安吉はまた訊いた。「蕎麦屋が金取りに来たみたいなのがあったろう？」
「蕎麦屋？」松本も磯村もそれは知らなかった。そういえば彼等は寝ていた筈だと気づいて安吉は大体を説明した。
「ふふん！」といったが松本は呟いた、「わるい奴だな！」
やはりそうだったのかと安吉も思わねばならなかった。
「それ、おれも食ったのか？」と彼は訊いた。
「お前は食わなかったよ。おれ達は食ったわい。」と磯村が答えた。

彼等はさっぱりした屋敷の並んだ街へ出た。高い欅が立って、葉群をとおして来る夏の陽が彼等の上へ落ちていた。腑ぬけのようになっている安吉にもそれは気持ちがよかった。やがてその通りから細い路がわかれて行った。その両側の垣根の一方はモッコクらしかった。他方は割りに大輪の一重の白薔薇だった。

どこまで行っても、植木や立木があり、垣根に挟まれた露路のパースペクチブは、ぼんやりした安吉が松井町や亀沢町へんの様子を思い出させた。

「ここには道や小径がある……」

それは悲しさ自身が無気力なような悲しさだった。

「じゃ帰るか？」

彼等は護国寺の前へ出ていた。安吉にはそれがひょいと出たという感じだった。例によって松本は、角の煙草屋でバットを三つ買うと一つを磯村、一つを安吉に渡して安吉を電車に乗せた。眼がさめてからずっと分からなかった時刻は今になっても安吉には分からなかった。さっき木立越しに落ちていた陽も今は曇っていた。

「何だっておれアいつまで磯村や松本にくっついているんだろう？　奴等のどこがいいんだろう？」

と安吉はぼんやりした頭で考えつづけた。

「しかし、じゃ、奴等のどこが悪いんだろう？　いい人間じゃないか？　しかし何て電車の人種が違ってるんだろう……」

実際電車客の風態が本所あたりとは違っていた。彼の考えはすぐそれに奪われてしまった。彼の前に小学生が二、三人かたまっていたが、三角になった尖きをつぶして赤い毛糸玉をつけた帽子を冠ったそんなものはあの辺にはいなかった。安吉はひろい東京をまだ知らなかったが、時々乗る線路からいえば、一方は御徒町へんから向う、一方は柳原へんから向う、その辺が境ですっかり客種がちがっていた。しかしそんな考えもそれ以上は進まなかった。

とうとう彼は両国で降りた。彼は厩橋の方から渡るのがいつもだったが、今日は両国の橋の手前で降りてしまった。彼は橋を渡って行った。川の水は相かわらず濁って、舟もボオトも橋詰の鉄工場も相かわらず鉛色にくすぶっていた。彼は向う側の橋詰めへ近づいて行った。が途端にはっとしてそこへ立ちすくんだ。

橋の面は通りよりも高かったから、袂から道路の最初の部分へかけてが街へゆるい下り勾配で下りていた。そこへ、彼の眼の前へ女が現れたのだった。女はからだの上の部分からせり上がって来た。そして全身あらわれた時、からだを一揺りしてそこにいた小娘へ呼びかけたのだった。

女は二十七、八くらいの年配だった。あらい絣の筒袖を着て同じ絣の前懸けをかけ、脚絆をして草履をはいていた。頭には笠をかぶっていた。肩には天秤棒をかついで、その両方にそれぞれ重ねになった竹籠ようのものを提げていた。籠を吊るした三、四本の縄はぴんと張っていた。女

は両手を、一方は上から、他は下から天秤棒にあてがっていた。彼女はその恰好のままでからだを一揺りしたのだった。女は笠の下が照るような顔色をしていた。

呼びとめられた娘は十一二くらいの小娘だった。綺の袖のある着物を着て、牛若丸のような髷を前へ倒してくっつけた髪を結っていた。安吉の知識では、それは芸者屋の下地っ子とか、といっても下地っ子とは何だか彼は知らなかったが、小料理屋の水ばたらきとかいうものに違いなかった。呼びとめられた娘ははにかんだ横顔を見せていた。

安吉はそこを通りすぎた。立ちどまったといっても一秒ぐらいのことに過ぎなかった。彼女たちの言葉を耳に入れてはいたがそれを聞きわけたわけではなかった。

しかしそれにしても、女は「何とかちゃんよ！」という風に呼んだのに違いなかった。

「何とかちゃんよ！」

「え？」

「まめでいたかよう？」

「ええ……」

そんなことがたしかに、多分いわれたのだった。多分彼等は、一つ在所のものか近在のものかだった。女はああして商売に来るのだった。小娘の方はここいらへ奉公に出ているのだった。それがあすこで出会したのだった。

女は三十くらいかも知れなかった。何にしても亭主持ちなのに違いなかった。あの顔の色は、重い重量を肩と腰とで支えていたからでもあったが、元来が色が白く、からだに血が沢山あり、いつも皮膚が山風とか浜風とかいうもので洗われていたせいに違いなかった。

女は厚い肩をして盛りあがった胸をしていた。それをぴっしり包んだ布はそのまま皮膚であるかのようにぴんと張っていた。あざやかな紺絣の残像はそのまま こりこりした脂肪の層を手さぐりするのと違わなかった。

一昨日、昨日、今日の間にすっかりだれ切ってしまった精神、その間に溜まるように積まれて来た感覚鈍麻を女の何がそんなに急に生きかえらせたか安吉は知らなかった。その女の顔色、その肩、小娘に呼びかけるために一旦踏みとまって、そのままの形で天秤を一揺りした時の恰好などがそれだったのに違いなかったが、しかしそれではなくて、それみなを包む根本的な何かが何だかということが安吉にはとっさに分からないのだった。

彼は傾斜を下り切ってしまっていた。彼は幾らか速足になって歩いて行った。速足で歩くことで彼は気を静めようとしていた。しかし彼は立ちどまった。

「いや、も一ぺん見ねばならぬ！」

顔が蒼くなるような意識で彼は傾斜を引き返した。気がせいていたが走ることは出来なかった。それは走ってはならぬからだった。

「そう遠くへ行ってる筈はない……」

彼は橋へ踏みこみながら行く手をすかして見た。女は見

えなかった。
「それとも右側だろうか！」
人車の往来の激しさと橋幅の広さとが彼に混乱を与えたが彼は左側を進んだ。そして絶えずきょろきょろと右側へ眼を走らせた。
とうとう彼は立ちどまった。とうとう女が見つかったのだった。女は、荷をおろして、人道と車道とのしきりになっている大きな鉄の中欄干の蔭で一やすみしているところだった。彼女は、笠をかぶったまま籠のわきへただしゃがんでいた。
彼はそれ以上近づくことも追い越すことも出来なかった。彼女の彼はすぐ後ろに来ていた。彼女の肩に、着物と同じ絣の別のきれがあててあるのが後ろから彼に見えた。
その時女が立ちあがった。彼女は腰を叩くような仕草をしてから両の前腕で天秤棒を籠の綱一ぱいだけぐっと持ちあげた。それからそのまま腰を落として右肩を棒の下へ入れ、前へ出した右手で棒を上からおさえ、左手は後ろへ伸ばして後ろ手のまま吊り綱を握った。そして首根っこを傾けたなり「ラッ！」といって一気に腰を伸ばした。
それから彼女は、橋の方向と平行になっている天秤棒を、からだはそのままの位置に置いて肩の上でゆっくりとまわした。そして最初の一歩をふみ出すと同時に、吊るした荷籠がその勢いでやはり前方へ揺れ出すように腰を一ひねりした。そしてその揺れに追い縋るように第二歩を出した。そしてそのまま歩いて行った。安吉は殆ど感動してそれを見送った。
「ふん……」
彼は橋を戻ってまた街のなかへはいって行きながらとりとめもない考えをそれからそれへ走らせた。そしてふいに、しかしごく自然に、いつかの太田篤へその森本という男に会ってみてもいいという手紙を書こうと思いついていた。
追分で別かれた時太田はその男のことを話していたが、安吉自身森本の書いたものを幾つか読んでいたのでもあった。森本は太田たちの団体のもので同時に文学をやっている男だった。また自身大学生でもあった。安吉は森本の論文にはかなり感心もしていた。第一それは安吉の知らぬ知識で一ぱいになっていた。全体の調子も、安吉にも安吉のどの友達にも見られぬ明るさをたたえていた。森本の小説というものも彼は読んでいた。それは中学生風のものにすぎなかったがそれでもやはり明るかった。
彼は、文学に関して誰かから教わるところがあろうとは微塵も思わなかった。まして大学生などから何かを受け取ろうとは一度として思ってみたことがなかった。
「しかし会ってみてもいいな。無論あんなのは文学の明るさじゃないさ。松本の絵の方がほんとうには明るいかも知れぬのだ。しかし会ってみてもいい……」
実際それは分かったものではなかった。劇場の天井か

ら、高い壁ぞいに底のオオケストラボックスを覗きこんだ、あの最初は何が何だか見わけのつかなかった松本の絵の方が本当には明るいのかも知れない。土左衛門たちの亡靈へ、橋の上から紙を切って流す光景を歌った斎藤の詩の方がほんとうには明るいのかも知れない。それにしても今朝の嗄れ声の男は絶対に明るくはあるまい。それから坂本の通りの舟の上の人々や、朝の満員電車や、それから坂本の通りの自転車の群れやなんかの運命が森本なんかのあんな軽いタッチに関係があるなどと考えることは馬鹿げたことだろう。太田が安吉を森本にひき合わせようとすることなんかは、勇造の細君が彼を隣りの空店の娘に紹介したがるのとどれだけも違っていないかも知れぬのだ。それにしてもしかし会ってみてもいいだろう！

太田に手紙を書いて森本に会うにしても、しかし彼は太田を飛びこえて、つまり彼の手引きによってというのではなしにじかに森本に会いたかった。それはそうあるべきであった。二三の短篇を読んだだけで相手を軽蔑するということは許されなかった。しかしそれは武芸者がよその道場を訪問するようなものでなければならなかった。

その思いつきはそのため格別彼を昂奮させはしなかった。彼は実際つかれ切っていた。それでも彼は、ふいに自然に出て来たこの思いつきを無理に捨てようという気にはやはり自然にならなかった。

（一九四〇年六月「新潮」）

櫸の芽立

一

橋本英吉

要助が生家に呼び戻されてからまる二ヵ月たった。その間に、両親と自分の妻子をのこして兄が死んだ。嫂のクラは二人の女の子と一緒に、亡夫の家にのこりたい一念だった。クラを重心にして一家は運営できないし、と云って、要助がいるのにクラに養子をすることは、クラを離籍するより困難であった。

いいことは二十九のクラと、二十五の要助とを組みあわせることである。これは要助さえ納得すればいいのだ。が、その一点に困難があるだろう。関係者は四十九日まで何も云おうとしなかった。

クラが前より仕事に精を出しはじめたのは、まわりの同情を自分にあつめることと、要助の嫁として資格の足りな

い分を、働くことでおぎなうつもりだった。それが要助には不愉快であった。クラが同情をあつめればあつめるほど、要助の発意は制限されるからだ。

彼はクラと夫婦になりたくなかった。年上とか子供があるとかばかりではない。また彼女の体を想像する場合に浮ぶ兄の影のせいばかりでもない。彼女の身についている古くさいものにどうしても譲歩することができないのだ。身をへりくだして、まわりに媚びることで、得をしようとするずるさが我慢できない。しようとするのではないが自然にそうなる。骨の髄から泌みだす昔ながらの婦道なのだ。要助はそれを憎んでいた。

十八日は彼岸の入りである。午後には読経があり、夜は女達のお念仏がある筈だった。いい天気で惜しいような日である。

午前中だけ野良に出ようとクラが云うので、仕方なしに要助もついて行った。

欅や榎の美しさは木の芽立の頃である。丘の上に一列にならんで、紫がかった網を空にひろげているこれらの樹樹を、要助は鍬を立てて眺めていた。働くことなど馬鹿馬鹿しかった。「オクラさんがえらいからよっちゃんまで働くようになる」人はそういっているのだ。

何故あの樹は今が美しいのか？　それはきっと、枝々に紫がかった芽がふき出るから、網の目が一層こまかくなり、枝全体が褐紫色にかわるせいだろう——などと思いふけっている。

「なまけ者の節句ばたらき——人から笑われるだよ、そんなに働くと。」

嫂を見ると、帯から上がぬれているし、腕をつたって流れる汗で、鍬の柄までしめっていた。

「休んべえ。」

誘うと返事はするが、腰をのばそうとはしない。見るからに丈夫でもある。頰は赤い。腰も大きい。腰は立派だった。肉はしまってるのに、肥って丸味を失っていなかった。

彼は嫂の体を観察している自分に気がつく時には嫌な気がした。気がつかずに頭や眼だけが、そっちに向いている時もあるだろうと思った。

彼はそこから離れたくなった。それが離れられないので腹が立って来た。

街道に埃が立って兵隊が通っていた。

「砲兵だな。」

「沢山来たじゃ。」

クラもやっと鍬を立てた。

「どこで演習するずら。」

要助が見とれているうちに、クラはもう鍬を動かしていた。働くこと以外、何にも興味がないと云った風だ。彼はむっとした。こっちが懸命になっている時、相手に大きなあくびをされたような腹だたしさだ。

「一寸見て来る。またあすこで演習するらしい。」
彼は鍬をおいて、丘の方へのぼって行った。砲車や馬が道を塞いでいた。見物人は自転車を押して、側の桑畑の中を通った。
「何故そこを通るだ。畦を通ればいいじゃないか！」
自分の畑でもないのに、理由なく怒った。要助の剣幕に驚いた見物人は、帽子をとって彼の前を通るのだった。
彼の畑には観測班が陣どっていた。電話線が桑にかけてあり、いろんな形をした測量器械が桑の間にならんでいた。桑のあいだに蒔いた春大根は踏ん散らされていた。いつもなら黙って見物しているのに、今日は神経がいらいらしていた。何かぶつぶつ云った。
「少しぐらいは仕様がないじゃ。よせよせ。」
見物に来ていた本家の俊一がなだめると、彼はよけい声を高くした。
「君の畑か？」
通りかかった少尉がたずねた。彼はぶつぶつ云った。
「よしよし、あとで。」
云いのこして少尉は通り過ぎた。要助はいつまでもそこに立って、眼を怒らしていた。些細なことだ、と自分でも分っていながら、どうしてもそうせずには居られない気性だ。
「じゃ、いくらぐらいのもんだ。」
さっきの少尉がきいた。

「銭じゃないですよ。折角つくったものを、易々と踏まれるのが残念です。」
「三十銭ならいいだろう。」
少尉は怒っていた。
「いやいいです。もうわかったらいいですよ。」
自分の労力を認めて貰えれば、本当に銭などいらないと思った。しかも出すという金は、少尉のポケットからにちがいなかった。その人の誠実さに感動した。

二

しかし三十銭受取らなかったことで、自分がお人好しのようで、いい気がしなかった。だが受取ったにしても、やはり後悔するかも知れなかった。それもクラの事で腹を立てていなかったらあんなにならないで、笑って見物したに違いなかった。
畑にかえると、もう働く気がなくなって、予定よりはやく家に帰った。
まもなく僧がきて読経をはじめた。母は三つになる孫を負ぶって酒の仕度をはじめた。乾瓢や海苔や野菜物など、夜のお念仏につかう品が、板の間一面散らかっていた。母は忙がしいのに、クラはまだ野良にのこっていた。
僧は父を相手に酒をのみだした。彼にも来いと父が呼んだが、聞えない風をして牛に秣をやりに行った。そんな席

はきらいだった。慣れないというより、空気が性にあわないのだった。
「立派な若い衆じゃ、こりゃ兄さんにまけないくらいええ後とりになりますな。さあ、一つ。」
父が要助を紹介すると、僧はそんなお世辞を臆面もなく云った。そして女のようにしなしなした小指と中高指を二本だけぴんと反らして、その上に盃をのせてさし出した。時々、ハンカチを出して、鼻の横すじを拭いた。近所の人の噂をするとき「××さんは田地がいくらで、貯金がいくらかある」とか「××の御隠居さんは、外に出るときは財布に必ず十円入れて、それをおとした時の用意に、金指輪をはめて出る。」とか、必ず「さん」付きで呼び、内容は銭のことばかりである。さすがお布施のことは云わなかったが、寺では細君とそれを一々話すような気がした。
それだけでない。数珠が盃に浸っているのに気がつかず、
「いい酒だなあ。こんなのはあまりこの辺じゃ使っとらん。」
いい酒というのを、銚子の代る度につけ加え、ああ、と舌をぺちっ、ぺちっと鳴らすのだった。何もかもほめ倒して、飲めるだけ飲もうとたくらんでいるのだろう、小便をして来てまたすわりなおした。
彼は新しい位牌の前にかざってある林檎と水と水仙を眺めるばかりだった。そうして十分間ばかり坐っていた。二度酒を注いでやった。
きめの細かい光沢のある上品な顔は、立派な衣とは逆に、さわるとべたッとひっ付く脂のような生理的嫌悪さを感じた。他人の巾着に気を配ったり、食物に眼がなかったりする卑屈な精神は、自分の周囲にみちている老人や女共の精神と、何のちがいがあろうかと考えるのであった。いやそれより一層罪悪だ。
要助は憂鬱になるばかりだった。
母が一円札と換えに行ってくれとクラに頼んでいるのを聞きつけ、
「五十銭でいい、一円なんてあんなに奴に多すぎる。本当は酒代をこっちで貰いたいくらいだ。」
とののしった。母もクラもぽかんと彼を見つめていたが、
「一円がきまりだに。」
母がおどおどしながら云った。きまりなんてあるものか、家計に応じて出せばよい。人がそうするからと云って、自分達まで無理をする必要はない。お布施の事ばかりじゃない。お念仏でもそうだ。人が集まってお茶をのんで猥談をして何で仏が喜ぶもんか。金を無駄に費すだけ損じゃないか、と母に喰ってかかった。
「だってお前、つきあいだじゃ。」
と母はそんなに怒ることはないじゃないか、何も突飛なことをするのではないからと云う風だった。

「そのつきあいが無駄だ。そんな時節じゃない。つきあいでお互いに困ってるじゃねえか。昔からやってるからやらにゃ悪いという考えが間違いだよ。人がなんと云おうと、俺はこれからそんな習慣は守らぬ主義だから、そのつもりになって貰いてえ。」

母は相手になっても仕方がないと、黙って用事にかかり、クラは土間の敷居に腰かけて、五十銭玉二つを握ったまま子供に乳をのませはじめた。いくら怒っても仕方がない、実行されはしない、俺がいなくなれば替えに行くだろう——けれど彼は意地になって、クラが出かけるのを監視するように、囲炉裡の傍から睨みつけていた。

何も知らずに、本家の時江が、陽のかんかん照っている外から、赤い襷がけで入って来た。髪をかきつけて白粉をつけているのが、煤けて薄暗い家を明るくするようだった。クラが要助と時江とを見比べていた。時江は要助がいるのでまごついた。すると要助も怒っていた表情がぐらぐらと一時に崩れて中心を失ってしまった。

「おかあちゃんの代りに来ました。何もできないけど。」

と母に挨拶した。

「よく来てくれたね。お母ちゃんはどっか悪いのかね。」

母は、やせてすらっとした時江の姿を、一応下から上まで調べた。

「大したことはないけど頭が痛いって。」

時江は土間に立って前掛をいじくっていたが、要助には挨拶もしなかった。

「じゃ早速つかって悪いが……囲炉裡でこの海苔を焼いて貰うべえか。」

時江はチラッと囲炉裡にいる要助の方を見て、顔を赧らめた。それから板の間でまごまごしていたので、要助は外に出て行った。

要助と時江とクラは、三角のような関係だった。それほど強い意味の三角ではないが——クラと要助をめおとにしようと計っている同じ人達が、五六年前には時江と要助を組ませようとしたことがあった。時江の家が本家で、要助の家が新家の間柄だ。時江の兄の俊一は中学の時、肺を患って徴兵検査までもつまいと医者に宣告された。俊一が死ねば時江に婿をとらねばならぬが、新家の要助なら小学校はずっと級長だし、負けん気の強い働き者だから立派な婿だと鑑定した。しかし、要助のような評判者は他からも婿の口がかかるかも知れないから、早く纒めた方がいいという事になって、時江が実科女学校の二年生の時に、養子として入籍さしたのである。そのときは籍だけで、要助はやはり自分の家で手助けしていたが、俊一は案外死なず、且つ要助は監獄に住むことになった。要助は籍をかえされた。出獄した晩家にねたきりで、飴屋の叔父の許にやられた。そして再び家にかえったのは、兄の死ぬ廿日ばかり前だった。それだけの関係だから、時江は要助が婿に来ることを、言葉として知っていただけである。ただし今どう思

っているかは、誰も知らない。かりに候補者のように今思ってるにしても、彼にはクラという女がついている。そして背後には、何物をもそのためには犧牲にする「新家」というものが控えているのだ。と同時に時江にも「本家」がある。要助は、新家と同一人格なのだ。要助エコール新家なのだ。それは時江エコール本家と同様だから、二人の関係は並行線みたいに対立したままでなければならない。

「家」は貧乏とか金持とかいう点で差別されない。ただの小作人にすぎない新家でも、「家」を守ろうとする強さでは、百万長者と同じだった。「家」は絶対だが若い者はそれを踏みこえようとする。家の形式的表現は戸籍謄本だが、それにはちゃんと要助の名が残っている。ただ赤線をたすきがけに引いてあるだけで、時江の次の劃に残っているのだ。同様に、新家の謄本にも要助の劃だけたすきがかかっていたし、今もかかっている。そのたすきがけは三人の心にもそれぞれの形で今日も残っていた。

三

要助は、時江と監獄に行く二カ月ばかり前話したきりだ。もう五年近くなる。その時、彼はどこからか自転車で帰るところだった。学校残りの時江を自転車の荷づけに乗せて走ってるとパンクした。車を押しながら田舎道をならんで帰って来た。その時、思想の話をしたことだけはぼんやり覚えていた。今も彼はなつかしくそれを思い浮べるのだった。

クラをいやだと云っても親戚が承知すまいと思った。それをはねつける自信がない以上、時江を窯うのはよくないと思った。けれどもクラを妻として考えると、さっきの生臭のような嫌らしさが鼻について、反対に時江こそ立派な女のように思われて来るのだった。生臭とクラの違いは、古さが単純と複雑だけの差で、内容は同じだった。彼は昔から伝わっているというだけで、今は自分達の生活を無気力にし、人々をがんじがらめにしている儀式や習慣や人情や義理に従えないのだ。クラという女は古い伝統そのものだ。彼の良心のせいではない、感情が承知しないのだ。しかしそれを否定してどうなるというのか？　念仏講をかりに廃止したって、それは女達の安直な楽しみを奪うだけではないか。またクラを蹴とばして時江と夫婦になったとする。それは「家」というものに無暗に執着する村人への抗議にはなるかも知れぬ。しかし現実に「家」を破壊してどうなるのだ？

そこが彼にはわからない。

「おい、お寺には一円あげるものか？」彼は本家の俊一をつかまえて議論をふっかけた。俊一は青い大儀そうな顔をして考えていたが、

「やらなけりゃならんことはないが、近所の手前があるだ。直ぐ知れるからなあ。」

「悪口を云われるのか。いいじゃないか。」
「いいと云えば仕方がない。すると世間が狭くなるばかりずら、孤立するだ。孤立したら一日だって百姓はできにゃだ。」
「なるほど。」
百姓って何だろう？　土地に関係した人間だ。だがそれだけでは百姓根性の説明はつかぬ。土地と人間ともう一つ人間が加わらねばならぬ。ところが人間が二人よると同時に、計算と感情がずりこむ。まだ何かずりこむ物がある。それは何だ？　それが大切だとは思いついたが、急には要助に発見できなかった。彼は不安になった。
「俺は百姓にはなれないかなあ。」
要助は嘆息した。百姓は嫌いではない。好き嫌いより与えられた百姓をするより外に、生活の道はないのだった。だからこれに喰いさがろうと考えているのだが、一方では我慢できそうもない気がしきりに起る。
「お前には向かない。俺の体が丈夫なら、うまくやって見せるがな。」
俊一はやせた指をぴらぴらさせながら、情なさそうに云った。

四

四十九日の法事は三日のちになった。クラの実家から山芋を掘りに来いと知らせがあったので、金梃と唐鍬を自転車につけて行った。
山芋は掘ってあった。礼を云って帰ろうとすると、そのつもりだったと見え、すぐ酒を出した。おいしい蟹も支度してあった。遠慮しながら二杯三杯とのんで、次第に酔ってきた。
義兄はクラより小柄で顔一面ひげが生えていた。人相の悪いのと反対に、一本気で愛嬌があったから、飲んでるうちに親しみが出た。
「クラの面倒を見てくれ。君は若いから不足だろうが、何にも云わずに一緒になってくれ、拝む。」
突然だったが、酒を見たときからそんな事を口説かれるのではないか、と予想していたので、驚きはしなかった。その兄がクラを自分の子のように可愛がっていることは知っていたし、今の言葉にも、兄妹の愛情がこもっているようで厄介な申出ではあったが、不愉快な気はしなかった。自分がもしこの兄の立場になれば、やはり酒をのまして拝むかも知れないと思った。
「まだそれどこじゃないですよ。百姓になるかどうかも決心がつかない位ですから。」
「ははは……」
問題にしないのだ。要助も苦笑した。
「わしじゃ、うちが立たんですよ。」
「外に望みがあるだね？」

「そんなものはないけど、腹がきまらん。」
「また運動じゃあるまい?」
「いやあ。」
俊一に話したように話したって分らぬ。ただ混乱するばかりだから説明はしなかった。
「望みがなけりゃ百姓するより仕方がにゃ。骨は折れるが、のんきだからなあ。」
それがのんきになれないから迷っているのだった。義兄の申出をはっきり拒みもしなかったが、承諾もしないで、暗くなった外に出た。
山に挟まれた暗い道を、やけにベルを鳴らしながらくだった。道端に菜種の花が浮いている。
いい気持になっていた。あたりが暗い、自分を見ている者がないことで、一層愉快だった。何も考えなかった。もう少し飲めば、まだまだ愉快になれそうな気がした。
勘定をもらった土方のような恰好で、酒屋に寄ってまた飲み加えた。すると、頭が沸き立つばかりだった。心を占めていた考えが消えてしまって、何でも自由に楽々とできるような気がして来た。
酒でしめった両手をついて、囲炉裡のそばまでずりあがった。
「まあ、兄さんと飲んだ?」
子供と一緒に納戸に寝ていたクラが、寝巻のままで近よった。
「皆はどうしたの?」
「蚕の講習会。」
「また動員されたのか。まあ居眠りには丁度いい陽気だなあ。」
「芋はもらって来た?」
「貰って来たつもりだが——」
クラは外に出て芋を調べてから、
「よく道に落さなかったのね。どれ、それをとって。」
重なったまま投げだした脚を一本ずつ持ちあげてゴム足袋をぬがせた。
「ああ、いいよいいよ。罰があたる。」
「兄さんは何かことづけしなかった?」
「した。わしとあんたと夫婦になれって。」
「まあ、嘘でしょう。」
「嘘じゃない。けれど、俺には考えがある。」
「何を云うのよ。早くおやすみなさい。床をとってあげるから。」
「いろいろ話がある。」
「いろいろどんな話?」
「ああ酔った。本当に酔った。」
「うそばかり云って、じゃ床をしくわ。」
クラは納戸から布団をひきだして来た。
「さあ、床を敷きましたよ。」
彼はよろめきながら、仕事着のまま床にころがった。

「だめですよ。ぬがしてあげようか？」
「……」
「わしがさわってもよけりゃ、ぬがしてあげるわ。」
だまっていた。眠ったふりをしていた。クラは後から彼を抱えて、俵の細をぬくように彼の帯をひっぱった。それから手を胸の下にさしこんで、筒袖の上着をぬがせた。
「とっても重い！」
笑いながら云った。

五

要助はおそくまで寝ていた。クラがどこかへ出た留守に飯をくって畑に行った。櫟林をぶらぶら歩き廻った。
こんなに自分は脆いのかと腹が立った。思いがけなく、クラの体にころりと参ったのである。いや思いがけない事ではなかったかな。今までだってちょいちょい盗んでいたんだ。としてもそれは本能じゃないか、誰だってああいう時には俺のしたようにする。俺はあの女に参らぬと信じていたのがいけないのだ。だが今だって夫婦になる気が起らぬところを見ると、やはり俺は参っていないのかも知れぬ。なぜだろう？　俺はクラと時江と並べれば時江の方をとる。すると、女を愛するということは、慾と別のものかな。慾は慾、愛は愛とすれば関係したからって、夫婦にならねばならんという事はないぞ。銭を出して慾をとげる制度が、ちゃんとあるのは、その証拠じゃないか。するとクラも俺と同じように、俺の妻になる気はなかったが、やはり慾のために抱かれたかも知れんじゃないか。だが待てよ、じゃ夫婦とは何でつながるもんだ。慾と愛が必要か。それとも夫婦になったから、夫婦でいるのか？　そんなことはない。犬猫より進化した法則が夫婦にある。その法則は愛なんて立派なもんじゃねえんだ。「家」ちうもんずら。「家」を中心にして、その家を保存して行くために夫婦が必要だ。亭主も女房も労働の一単位にすぎん、クラも俺もそうだし、時江だって俊一だってそうだ。クラが俊一のように病身だったらどうだ。俺と組みあわせはしないだろう。ところがクラは家畜博覧会に出場した牛みたいに丈夫と来てやがる。労働単位としては優等賞なんだ。これが本当の法則じゃないか？　これほど健康な法則は、他の社会にはない。当人同士の意志なんかを黙殺して、この法則が作用して来るところに価値があるんだ。しかし俺はそれを嫌がっている。法則を認めながら、それから逃れようとしているのだ。これは矛盾だ、とにかく、俺はあの女と一緒にねたのだ。理屈より何より、誓約書に判を押してしまったんだ。だらしがねえぞ。これでクラが嫌いだなんて云ったら、近所の奴らが腹を抱えて大笑いしやがるぞ。なんて頓馬だ。まだまだ恥をさらすかもしれねえ。自分が自分が当にならねえんだ。今夜だってまたあいつになめられるかもしれん。ほらそれがもう参ってる証拠じゃ――

櫟林から畑の中を歩き廻る。茶の木の傍には兎の寝たあとがある。足でそのあとをつきくずしていると、子供の時の思い出が、突然浮んで来た。

とりとめもない感想の連続に、かえって浮わついたようになって、林の中にいることが段々苦しくなって来た。賑かな通りや、汚ない裏町のごてごてしている処が恋しくなってきた。

家に帰ると、着物を着かえて自転車にのって町に出て行った。しかし思ってたように心を紛らすものは何もなかった。人々は皆もっともらしい顔をして歩いているし、一つことに何時までもこだわっていることは馬鹿々々しく思われる。

晩飯の座でもクラは昨日と同じような顔をしていた。

「本家の叔父さんが、今夜来てくれって。」

そう云ったきりだった。何でもないことの裏に、環境に身をまかせきった女特有のおちつきがあるようだった。それは彼女が要助の意向よりも、むしろ親戚や舅の意向を重く見ているからだ。要助などは老人連の気持さえはっきりすれば、どうにでもなると考える女だ。

慾に勝てなかったが、この女には参らぬぞ、顔をあわせる度に自分に云いきかせる、そしてその度に例の矛盾につきあたる。

「忙しくて話すひまがなかったが……」

夜、本家の裏口から入って行くと、黒光りのする大きな柱の向う側に坐っていた庄左衛門が、見くだすような調子できり出した。この老人の相手を一段下に据えて話すのはいつもの癖だが、いい気はしなかった。

「改めて話すほどのことではにゃだよ。それにお前も聞いてるだろうが、物事はきまりがあるからきっぱりとしなけやなんねえ。つまり、お前の籍は退したんだ。監獄に入ったこともあるが、俊一があの通りじゃから、それが一番の理由だよ。まあ、親の身になって腹を立てないでくれ。」

何のことかと思っていた。わざわざ呼びつけたのだから、クラとの事だろうと思っていたら、そんなことだったのか。だがとうに済んで忘れてしまった事を、どうして改めて宣告する必要があるのだろう。俺に、本家の財産や時江に未練があるとでも疑っているのか。それもあってもしそうならクラとの縁組の邪魔になると、取越苦労してるのだろうか。それは何れにしても、老人の権利をふりかざして来るのは我慢ならなかった。こっちにもこれから家を立てて行く者としての主張がある。

「もともと、おらあの関係したことじゃねえ。親達の話し合いできめたんだから。」

「そうさ。親達がきめただよ。そして親達が相談ずくで籍をぬいただよ。」

それに不服があるか、とばかり庄左衛門もつきかかって来た。

「こういうことは重大なこんだから、お互に慎重にはから

って貰いてえ。でないとあとで気持を悪くするだから。」うやむやにして置けなかった。これからもあることだ。御都合主義で自分達をおもちゃにして貰いたくない。

「じゃ離籍にお前は不服か？」

「不服も何もない。おらの云うのは、こういう大事なことには、当人の望みを一応ただした上できめて貰いたいというこんだ。」

「相談して何になる。その時の具合で仕方がにゃ。お前はそんな理屈をこねて、この年寄をあやまらせたいのだろう！」

　俊一か時江がいたらわかるかも知れないと思った。

「そりゃ叔父さんの考えちがいだよ。戸籍のことばかり指してるのじゃにゃだ。叔父さん達の時代にゃ、親から財産をもらって、親のえらんだ嫁を貰い、親のした通りに村のつきあいをして居れば暮して行けたずら。だけんど今の時代はそうは行かにゃだよ。俺が云うのはそこだよ。」

「生意気云うな！　親の世話にならんで一人前になれるか。いいか、俺は云っとく、お前はどんな人間か知らんが、自分ということを考えちゃ、誰も相手にしてくれなくなるぞ。」

　それ以上云うことは無意味だった。彼は空虚ないらだたしい気持で去った。

六

　亡兄の四十九日は、朝から手伝いのおかみさん達で混雑した。大根や人参などが土間を狭くしていたし、板の間では椎茸や麩を煤だらけの紙袋から出してひろげてあった。縁側には借りあつめた座布団がほしてあった。そしてそれらの食べ物のそばには、必ず女が二、三人宛かたまっていた。

　親戚の人や、近所の有志達はセルか何かの羽織をかけて、巻煙草をへんな風につまんで吸いながら、静かに話しふけっている。

　要助は、町まで饅頭を取りに自転車で行って来ると、もう何もすることはなくなった。

　彼は日のあたっている縁側に腰かけてみたり、牛小屋の前を歩いたりして時を潰した。

「こっちに来て、話しなさいよ。」

　クラの兄がすすめた。そこにすわっていたが、何も話すことはなかった。

「お前も何か話せばいいじゃ。何かありそうなもんだ。」

　母にそう云われると、一層そこにいるのが苦しくなって来た。座の人達に腹を立ててるように思われはしないかと考えた。殊に、庄左衛門を見ると当惑してしまった。

　彼は牛小屋の横からモチの生垣を廻って、本家をのぞいて見た。俊一がいるなら、先日庄左衛門から宣告された事柄に就いて、自分の思想をはっきりと説明しようと思っ

た。

俊一も叔母もいなかった。家では法事があるのに、村中をぶらつくのもおかしかった。彼は上り口に腹ばって新聞を読みはじめた。

すると時江と一緒に女達が二人裏口から入って来た。

「まあ、こんなところで油を売ってらあ。」

おかみさんの一人が彼を見つけて云った。

「丁度いい、よっちゃんに膳をおろして貰おう。」

時江が云った「よっちゃん」という呼び名はふさいでいた要助を浮々さした。彼はあがって、柱時計の横の棚から膳箱をおろしてやった。

「じゃ、わしは吸物の銀杏をさがすから、これをもって先に行ってて。」

女達は膳箱を抱えて行った。時江は戸棚の下の煤けた引出しから紙袋を出して調べにかかった。

「おじさんに宣告されたよ。」

俊一に云うより時江に云った方がよいと思った。若し時江までが、庄左衛門のような考えでいられたらかなわない。五年近くも二人は話す機会がなかったのだから――

「何を宣告された？」

俊一に似て神経質のところがある。

「俺の籍のことだが、こじれておじさんと喧嘩してしまった。おじさんには、俺の云うことが解らないから、お前に話すが、俺は籍を退されたことを別に恨んじゃいねえだよ。お前の家には俺んとこより財産もあるし、お前という立派なお嫁さんもいる。だけんど、俺はそれを失ったからって、未練はねえんだ。だけんど、俺はおじさん達におもちゃのように扱われるのは、あくまでもいやだから、そう云ったら、おじさんは腹を立て、じゃ未練があるか、と云わんばかりだ。そんなことはない。俺は古証文を持ちだして策動しやしないつもりだ。それは勿論、お前が嫌いだとか好きということとは全然別だよ。」

「わたしは何も知らなかったわ。」

「そうだろう。だからよけいはっきりしとかないと俺の気がすまなかっただ。今夜あたり俺の結婚の話が出る。俺がそれに従わないと、一層、叔父さん達は、昔のことを気にするに違いない。するとそれは、お前にまで当って行きはしないかと思っている。お前も強情なことでは俺と同じだから、一層面倒になるかも知れん。皆は俺の悪口を云いふらすだろう。それはいい、いくら叩かれたってかまわんが、お前にまで疑われちゃ、俺はつらいからなあ。」

彼の内心にうつっている時江の姿は、セーラー服の彼女を、自転車の荷づけに乗せたときから、五年を飛びこした現在に、直接つづいているのだった。「労働力の単位」でもなければ「慾」の対象でもないのであった。彼は自分の精神をこの娘にだけは認めて貰いたかった。

「それは、よっちゃんは立派な人だと今でも思ってるだから……わたしだって、今に丁度あんたと同じ立場になるか

も知れにゃ。兄さんのことや家のことを考えると、将来はまっくらだわ。それも自分の思うことが通る見込があればともかく、……よっちゃんなど、えらいと思うの。自分の意志は貫くたちだもの、周囲に反いても、自分の「よっちゃん」という言葉の響は互いになつかしかった。時江自身が、その言葉をつかって見て、驚いたほどだった。

「いやえらいかどうか？」

「えらいわ。」

「お前は昔からよく俺にそう云ってたが……」

時江は赤くなって笑い始めた。要助はまだ云い残した事があったが、云う必要がなくなったように思った。彼も笑いだした。

「それやなんだい？」

「へちまのたねね。」

「牛蒡のたねずら。」

「こっちのは？」

「銀杏はここにあるじゃ。」

要助は箱をかきまわして袋を見つけた。

「ああ、ぎんなんぎんなんなん。」

時江は手をさしだした。その美濃紙の軟い袋をさかさにして、時江の掌に象牙色をした銀杏をざらざらこぼした。

「買ってあったの？」

「もうずっとずっと前に、お寺の銀杏を拾ってあっただ。」

「まだあの樹にはなるのかね？」

「なるなる、とってもなる。」

「子供が拾って終うずら？」

「うん、拾って垣の下の川で皮をむいてるわ。今の子供はゴム靴で踏みつけるが、わしらの時は、草履でむいたなあ。」

「ああ草履でむいたもんだから、あとで足に汁がついてかゆくてこまった。」

「ああ、そんなことを云うものだから、手がかゆくなった！」

「お前はもとから神経やみだったから。」

「今でもそうよ。」

「今でもか！」

二人はまた笑った。

七

その晩要助が家に帰ったのは十二時前だった。それまで、密柑畑にある小屋で青年仲間と博奕を打っていた。到頭、大事な晩に家をあけてしまったのだ。

台所で二三のおかみさん達が、残り物の洋羹で茶を飲みながら雑談していたが、要助が帰ったのを見て、急に帰って行った。

今夜泊る客だけが、囲炉裡の傍に眠むそうな顔をしてす

わっていたが、それは明らかに要助の帰りを待っていたのだった。
要助は板の間からあがって、納戸にすぐ行こうとした。
「要助！」
父が呼んだ。彼はだまって人々の前にすわってうつむいた。
「この馬鹿野郎！　挨拶もできにやか！」
いくらか父は酔っていた。
「いい年をしやがって、何が気に入らんで、そんなふくれ面をしてやがる！」
「まあ、若い者は仕様がねえ、今夜はもうそんなに云わんで勘弁しておくんな。」
母の妹が、父をなだめた。要助は歯をくいしばっていた。あやまってもよかった。しかし今夜は、素直になれないのだった。これだけの親戚がねずに自分の帰りを待っている。この人達は裁判官のような権力を、「新家」の事に就いては持っていると信じている。そして、今ある事を宣告しようとしている。それを感じて、黙っていることで抗議するのだと思いきめていた。
「どこに行って、こんなにおそくまで遊んでいた？」
「博奕をうってた。」
ただひと声、鳴いた。座がしーんとなった。父は何かその辺にあるものを探す風だった。だが投げる物はなかった。客達はもう匙をなげた。
要助は黙って納戸に立った。父が立ち上がるのを、叔母がおさえた。
「まあ、わしにまかして、若いものは上手に扱わにゃ仕様がない。今夜はまあどうか勘忍しておくんなさい。」
父がすわると、叔母は納戸に入って行った。叔母は母と同じく、クラと要助の結婚を好んでいない。子供を置いて、どこかへ後妻に行って貰いたいのだ。けれども、それを正面から主張できないので、本人の意向を尊重せねばならん。先になって悶着が起ると、困るからと云うのだった。
「要助、もうお前はねるかね？　一寸でいいから皆のところに行って、すみませんでしたと云っておいでよ、ねえ。」
要助は返事をしなかった。布団をしいた。すると、叔母が、すっと彼の耳もとに寄って、
「嫂さんと一緒になるかどうか、お前はお前の考えをはっきり云いな。」
早口でささやいて、「じゃ、あやまりなさいよ。お客さんが気持が悪いからね。」と今度は大声で云った。
あやまることよりも、宣告されたらどうするか。いやだと云えば、自分は道義上クラをだましたことになる。クラはきっと兄には話したかも知れぬ。すると俺はだまってお受けするより外ない。ただ一つある。つまり抱いたことと結婚することは別だというのだ。すると老人連中の良心は自分より純感だろうから、自説が通るかもしれぬ。ある男

が人の女房と密通した。老人連はその男を非難するどころか「やい、此頃はどうだ」などとからかってるのだ。だから——要助は自己弁解のうまさにびっくりすると同時に、舌打ちをして自分の頭を叩いた。「貴様はなんだ！」と心で叫んだ。
なりゆきに委せるつもりで、宣告の座に出て行って、「皆さん、今晩はおくたびれで御座いましたろう。どうも、わがままを致して、相済みませんでした。」
と、芝居の口上のような具合に、小馬鹿にした挨拶をした。でも座はやわらいだ。
「お前の考えもあるだろう。順序として一応たださねばならん訳だが、ただしたところがどうにもならん、という仕末じゃ。おクラさんに子供二人を連れて後妻に行けとは、人情として云えん。そうかと云って、おクラさんをこの家に置いて、お前に嫁を取れば、結局おクラさんを追い出すのと同じだ。それで、まあ皆さんと相談の上、お前とおクラさんが一緒になれば、あっちもこっちも丸くおさまってこんないい事はないので、とにかくそうして貰うことになった。」
本家の庄左衛門が宣告文を読んだ。畜生！　貴様さえ黙っていれば、俺もその気になったか知れんのに——要助の腹は煮えかえる。
「おクラさんは働きもんだよ。こんな手の利く人は、一寸この辺にはいなかろうよ。商人とちがって百姓は働き者でなけりゃ仕様がない。ぴかぴかした人絹より、よっぽど為になるど。今のうちは白粉をつけて、棕梠のような髪をした女が好きだろうが、先になって見い、値打が分るから。」飴屋の叔父だ。ちゃんと自分のしゃべる文句まで考えてやがる。
「よっちゃん、頼む。眼をつぶって、なあ、あれの足らんところは、わしがどんなにでもして補って行く。」
クラの兄は一言云って、首をぐったり垂らした。涙がちらと光った。彼は見ぬふりをした。父はだまって灰をかきまわしている。
「そうするだね。それでみんなしあわせになれるだ。お前がいやというても、そりゃ我儘だぞ。」
庄左衛門はあくまで上から押しつける。
「丸山の鶴さんを見な、二十三の時、三十五のおかみさんと夫婦になったが、ちっともおかしくなかったよ。」
「そうかね、鶴さんのおかみさんはそんな年上かね。わしや、四つ位のちがいかと思ってたよ。」
「なあにあんた、十二も違うだよ。女なんてもなお化けだからね。その気になりゃ、五つや六つはすぐ若くなるだ。」
要助の返答を待っていたが、彼はうつむいたままだ。
「へえ、十二も上ずらか？」
程へて、叔母があくびをしながらたずねた。話は一寸横道にそれた。何とかいう女優は二十二、三かと思ったら、四十になるそうだと飴屋が云った。するとまた叔母が、そ

の話のすんだ頃、
「へえ、そんな年かねえ。じゃもう学校に行くような子があるずら？」
そしてまたあくびをした。
そのときクラと母が裏から入って来た。クラは眼のふちを赤くしていた。どこか外の暗いところにしゃがんでいたらしい。
「じゃ、まあ要助も考えてみるだ。今夜はお疲れでしょうから、皆休みましょう。」
と叔母がそれをしおに立ちあがった。
「いや、もう考える余体なしじゃ。いやも応もありゃせん。」
庄左衛門は断乎として云い放った。皆立ちあがった。最後まで要助は口を利かなかった。

八

俺を町の飴屋に追いやった手合いが、俺をひきもどしてちやほやして、ありがたいことには嫁まで貼り付けようとしやがる。「新家」という貧乏百姓を保存したいからだ。なぜだ。奴等だって知りやしない。新家という「や」はなんだ。そりゃおとっちゃんやおクラさんや、その娘のミイやアタチだの俺だのくらすところだ。人が土地に米をつくり、畳をのけて蚕を飼うところだ。六月には近所が寄って、水会議をひらいて「新家にゃ三日に水をやる」ときめる。三日にゃ十人ぐらいあつまってばしゃばしゃと田植をする。握飯をくって「まあ結構なおしめりで助かりやした。」とか何とか礼を云うところだ。それがつきあいの初まりだんべえ。お寺に一円あげる。法事に饅頭を配る。それをやらんと水まで呉れぬことになる。ここのところを封建的イデオロギーと文章書きが云う。だが、そうあっさり縮めて思いこんだって、新家にはどうにもなるまい。俺は封建的イデオロギー嫌と夫婦になれん。と云って、飴屋でも衛生夫でも飯がくえぬとすれば、どうすればいいだろう。本当のところは、あの女を嫌う理由がないから、あの女は封建がかっていると思い込み、封建がかったものはすべて嫌いだから、クラとも寝れぬと云うのじゃないか？
要助はその辺のところでぱったり壁につきあたって、毎日ぶらぶらくらしているのだった。
老人達は、若い男と女とを一緒にして置けば、終いにはどうにかなると思っていたので、もう干渉しなかった。
要助の両親は、「俺達は隠居しべえ」と云って、もと兄が病気の時に寝ていた土蔵の二階に越して終った。夜だけではあるが、要助はこまった。
しかしクラは「貞淑」な女だったので、自分からどうということはなかった。唇がむずむずしても、あまり話しかけなかったし、一緒に働いていても、体と体が触れあうようなことをつつしんだ。でも眼は濡れたようでよくうごくし、頬は血色がよかった。自然に滲みでる臭気のようなも

のが彼の鼻について仕方がなかった。
そこで、彼は晩飯をすますと、ぶらっと遊びに出て、青年会館に泊りこむことが多くなった。ほとんど毎晩家を明けるので、親達は小言を云った。庄左衛門もぶつぶつ云ってるそうだった。彼はきかないで、やはり泊っていた。仕事はクラと一緒にする事が多かったが、そんな時、彼は用事以外に口を利かなかった。唇をむすんで眉をよせて、怒ったような顔をしていた。そういう仕草が、もう習慣になっていた。
しかし時江と一緒のときは、むずかしい表情も次第にやわらぐのだった。そして、そのあとまでにこにこしていた。
本家で馬を使う時には、要助を頼みに来た。麦を蒔いてない田は、蚕のでる前に鋤いて置くならわしだった。そんな時、要助が鋤をとって、時江が馬の鼻どりをした。
時江は玉を買って新聞紙に包んで袂に入れてあった。一銭で三つだった。昔は一銭で五つくれたではないか、など思いだすのだが、何故そんなこと思い出す必要がある？と要助は考えるのだった。やはりあの時は、結婚の楽しさを思っていたのかなあ——いや俺はあの時にはそんなことを悪い事だと思っていたんだ。時江が赤くなったら結婚しようなどと空想し、一生懸命に説明したものだ。
昼になると二人は馬を休ませ、自分達は土筆の上に足を投げだして昼飯を喰べた。お櫃には焼いた鮭と沢庵と飯が一緒に入れてあった。時江が飯をついで出してくれる。
俺がもし時江と夫婦になれたら、易々としてあの生臭野郎をたてまつり、祖先をうやまう様になるかも知れん——いや、そうじゃない。この女となら、今の倍もあいつらに逆らってやるぞ、きっとだ！
「また今夜も会館に泊りに行く？」
「ああ行くよ。」
「そんなことをしてどうするつもりだね？」
「どうにかなるずら。俺は家のことより自分のことが大切だ。それが結局家のためになる。お前えはどうする？　お婿さんをそろそろ探してやしないかね？」
「それこそどうなるか。兄さんも可愛そうだわ。」
「だけんど、お前だけの考えはどうじゃ。好きな婿があったら、一緒になって本家をつぐつもりかね？」
「わしは……考えてるだよ。どっちにしようかと思って。」
「どっちって、そんなに沢山あるのか？」
「いやよ。お婿さんじゃないのよ。兄さんがあれで案外丈夫になるかも知れないでしょう。それで、私は産婆にでもなって、誰の世話にもならないで独立しようかと思ってるの。」
「そりゃ結構だ。本家がなんだ。俺のとこより少しましなだけじゃねえか。それがいい、お前は馬の鼻どりなんかしてたんじゃ、今に死んじまわあ。」
彼はそれを無責任な放言とは思わなかった。それより外

に時江には道がないと思った。二人はただ男女の性別からだけでなく、水のように同じ方向に流れようとする共通なものがあった。けれども最後のところで合流をさまたげる堰にぶっつかる。それはやはり、お互いの「家」だったのだ。

ところが、一方のクラはある日突然云いだした。
「わしはわしでやっぱり独身で暮そうと思います。よっちゃんはよっちゃんで嫁をもらって、この家を立てて貰いたい。」
「お前はどうして独身で暮せるだね。」
父親がびっくりしてたずねた。
「いいえね、そりゃ独身と云っても、やはりこの家に置いて位牌の守をさせて貰います。その代りわしと子供の二人の喰べる分は、わしが一生懸命働いて、なるだけ迷惑をかけないようにしたいと思います。」
彼女の云い分は老人達に批評させれば立派であった。だが実際問題となると、現状と大した変化は望めないばかりか、何も家のためになりそうもないのだった。
「そういうのも無理はにゃが――」
父は弱って直ぐ答えが出なかった。
「なんなら、ミイちゃんだけ兄さんの家にあずけて、小さいのとわしだけ、蔵の二階にでも置いて貰っていいですけど、そんなら、この子のお父さんの位牌も一緒にあっちで拝まして貰うようにしたらどうかと。」

位牌をもって土蔵の二階に越すというのだ。なんという立派な心がけだ。あくまで位牌を守ろうとする、俺だってどんな事があっても位牌だけは離したくない、俺の心がけと同じだ――そんな風に父や母は思いこんだろうと、要助はにがにがしくなるのだった。
だが、急に決定できる事柄ではない。また決定する必要もない。つまるところは要助をどう改心させるかの問題だからだ。時を待つことが、一等かしこい方法だ。

九

蚕の時季になると、人々はすべてを忘れて終う。蚕から麦刈り、つぎには田植えと重なっている。俊一みたいな人間でさえ、桑の葉を盛ったざるを抱えて、あっちこっち動かねばならない。要助を改心させるなど思いもよらない閑事なのだ。労働の単位であれば、これに越したことはない。皆の心が、まるでマラソン選手のように、同じコースを同じ方向に沿って走る。側のものは眼にはとまるが、頭には入らぬ。
要助は牛に車をひかせて桑を切りに行くと、青々とした葉の蔭から、
「おい！」
と古中折帽をかぶった俊一がでて来た。
「ああ、降りそうじゃ。」

「話があるんだ。一寸ここにすわれ。」
俊一は青い顔をしていた。筒っぽの仕事着の上から結んだ紐が、胴に深くくいこんでいるのが痛々しいくらいだった。
「なんだ?」
まだ要助はぱりぱり桑を切りながら云った。
「妹のことだよ。あいつこの忙しいのに産婆学校にやってくれなんて、云いだしやがったんだ。」
「へえ。」
要助は俊一とならんで腰をかけた。
「それも君に関係があると俺は思ったんだが……こうなんだ。昨日だかおとといだか君と時江が、ここで話したことがあるだろう。そのあとでおクラさんが時江に何か云ったらしいんだ。それで時江もあんな奴だから、意地になって、いくら忙しいたって、本家と新家の間柄で五分か十分、立話をしたっていいじゃないか、というような口喧嘩をしたって云うんだ。君の帰ったあとだそうだから知るまいが、それからそんな気になったらしい。」
「あまり忙しいもんだから、誰でも腹が立つんだ。何ね。忙しい事に腹を立ててるんだよ。」
「直接の原因はそれもあるが、根本は君が迷ってるのがいけないのだ。」
そう云われれば一言もなかった。彼は風にざわついて来た青桒の波をぼんやりみていた。

「おクラさんが妹につきあたるのは、君の態度が曖昧だからだ。君がまよっている理由も凡そ見当はつくが。いずれは結着をつけなけりゃならないじゃないか。おクラさんがいやならいやで仕方がないし、妹を欲しけりゃ連れて行くさ。妹もついて行くかも知れん。俺はどうなろうと、それはいらぬ遠慮だよ。とにかくはっきりすることだね。」
「うん、君の好意はありがたいが……時江と一緒になればこの村には先ずいられなくなるなあ。すると本家も新家もぶちこわすことになる。まだそこまで決心がつかんのだ。」
「だって君はそんなものの破壊者じゃないか。性格から云ったって、君はこんな風習のなかでは苦しむばかりで、何も得はしやしない。」
「そうじゃない。俺はなにも家を意味なく潰したくないし、それに若し俺が本当に逆らって行くなら、村を逃げ出すのは間違いなんだ。しかし俺には分らん。俺は生臭坊主のお説教や子供のままごとのようなお振舞は見ただけで腹が立つ。がそれは俺の一時の感情なんだ。考えれば、ままごとのお振舞は女達の安直な楽しみで、そいつをなくして何になる。時代がそういうものを奪って行くのが、癪だと思うくらいなんだ。」
そこまで行くと、俊一もしばらく黙るばかりだった。足元の野びるの叢を踏みつぶしては、草履につく青い汁を土にこすりつける。要助は立って、桑の実をもぎ、口に入れて吐きだす。

「俺が君の立場なら……」

俊一は羨望に似た輝やかしい眼をあげて云った。

「俺の軽蔑するものと戦って行く。村の伝統とか習慣は美しいものかも知れない。現にそれを保存するどころじゃない。日本全体をその中に封じこめようとする運動さえあるくらいじゃないか。しかし本当にそれ等の美点を、桑をきりながら、水を田にひきながら、俺達の心から泌み出させるためには、今あるものを一度ほろぼさなけりゃいかんのじゃないか。今あるものは本当の美点が泌み出て来るのを、塞いでいるんだ。一度ほろぼしたあとには、子供のままごとより十倍も大仕掛けなお振舞が復活するんだ。俺達は本当のお振舞を邪魔している。ちっぽけなままごとの振舞をなくしたいんだ。」

要助は口から紫がかった唾と一緒に桑の実を吐きだした。それから「ああ」と俊一のところにすすんで来た。

「わかった。それでわかった！」

と叫んだ。

十

冬の空に突っ立っている欅が、煙突より美しく猛々しいのはなぜか？　継ぎあわせたものではないからだ。灰色から褐紫色になる。葉が落ちてもお陀仏にはならない。からっ風のなかで、ざあざあ音をたてて揺れている。それからゆっくり芽を出して来やがる——彼は村の家々を蔽うている欅の群を見ながら鹿のように勇みたった。

俺の出発を、青っぽいと笑う奴は笑え！

晩飯がすんだのは九時だった。もうすぐ蚕棚の陰に散ろうとする皆を呼びとめた。

「なんだや、あしたでもいいずら。」

「いや早い方がいいだよ。」

「なんだや？」

首をかしげながら寄ってきた。二畳の板の間と三畳の居間だけしか人のすわる場所がないのだった。

「俺のする事に誰でも干渉しないで貰いたい——」

「なんだ馬鹿！　この忙しい時に。お前は今より自由になったら、宝蓮寺の御隠居さんみたいになるど。」

父が笑った。

「嫂さんと俺とを一緒にするのはよして貰いてえ。嫂さんは嫂さんで俺と関係なく家にいるならいて貰うし、それから本家の時江など構わないで下さい。」

がうまく云えなかったような気がして、よけいいらいらして来た。父は突然のことでびっくりして要助を見すえていた。クラは一時はっとしたらしいが、直ぐ平常のようになった。

「仕方がにやだ。一緒になれば、仏様も喜びなさろうけんどなあ。」

母は蚕棚の後にかくれている仏壇の方を見ながらつぶや

いた。父は黙って葉をやりに行きかけた。そんなどころじゃないとでもいうように。
「世間が通すもんか。」
棚の陰から父が何か唄でもうたうように、ゆっくりひきのばして云った。
「お父さんになるんだもの――」
低い声でクラがつぶやいた。
「ええ、お父さんがなに？」
母がたずねると、クラは笑いだした。
「よっちゃんがお父さんになるんですよ。」
「はあ？」
母も要助も意味はわかったが、本当にしていいかどうか顔を見あわせた。父もでて来た。
「やあ？」
あわてる三人のなかで、クラだけが落ちつき払って笑っているのだ。こうなっては要助の決意はぐたぐたになりそうだった。
彼は一寸と夫婦になった場面を想像した。初めは自分が暴君だが、子供が二人三人とできて来て、遂に父や庄左衛門みたいに化石して行く有様がうかんで来る。考えるだけでもたまらなかった。あれから幾月になる。二ヵ月は経っていないじゃないか。くそ！
「簡単に妊娠できるもんだなあ。」
「だって仕様がない。たしかにそうだから。」

いやに落ちついていやがる。なんと云ったらひっくり返るか？　こうなれば強い女だから。
「そんな子供…………。」
要助はやけに叫んで立ちあがった。
父が何か云って黒い物を投げつけた。それは桑をきる大鋏だった。母がわっと裂くような声をあげて、倒れた要助の上にのしかかった。要助は頭を両手で抱えてだまったまま倒れていた。母は頭を蔽うた要助の手を外そうともがいているうちに、板の間の七輪につきさしたままになっている燃えさしの薪雑棒を掴んだ父親が迫って来るのを見つけて、そっちにまろびながら近づいた。そして父の膝にからみつき、
「殺して終う！　要助逃げて！」
と狂ったようにさけぶのだった。
「どんなにえらい人だか知れんが、あまりだわ。」
こういうどたんばで、クラは案外抵抗力を発揮して、落ちついてそんなことを云っていた。
なんと云われても、子供を二人抱えた彼女は、その子等が結局は家をつぐ事を信じている。自分一人で新家を持ちこたえて見せる腹なのだ。要助がどうなろうと構わない。
要助の指のあいだからは、血が溢れて来た。父は母をひきずって倒れた要助にのしかかると、
「殺してくれる！　貴様のような奴を殺したって、お上じゃ許してくれるのだ！」

胴に薪がぶつんぶつんあたる。すると火の子が要助の首すじから帯の間、畳にまで散るのだった。
「お父さん、死んで終う。ああ、ああ！」
「殺してくれる。親はな、この位にするまで、どれだけ苦労したか！」
父も喘いでいた。言葉は呼吸でつまっている。
「早く！　クラ、おじさんを呼んで！　死んで終う！」
クラがやっと素足で、棚のあいだを抜けて外に出た。
「俺はな、もうすぐ六十だ！　あれが死ぬまじゃ、六十になったら、楽をしようと、それぱっかりたのしみにしていた。もうたのしみなど望まん。貴様のような奴でも、当にして、これでも、貴様まだ居るからよかった、とそれを思わぬ日は、今日までなかったぞ。」
まろびかかる母をおしのけ、ぶつんぶつんと擽で、胴、足、手、ところきらわず殴りつづける。息はもつれて、声はなみだにむせんできき取れない。
「もう俺には、望みがなくなった。貴様のような不孝者を毎日々々見ているのが苦しい。俺は六十になる。もう死んでもいい。貴様を殺して俺も死ぬ！」
「ああなさけない、なんの因果だろう。お父さん、かんにんして、要助を殺すなら、わしら生きていて、何が面白えずら。」
母も狂いなきながら、要助をかばうのだった。
庄左衛門や俊一が来なかったら、ほんとに要助は殺されていただろう。
要助は頭を両手で抱えて横倒しになっていたが、耳から垂れる血が、後頭部の髪を染め、畳の上に垂れていた。彼は歯をくいしばって堪えているので、低い呻きさえきこえなかったら、人々は死んでいるのかと思うほど、じっとしていた。
耳朶が少し切れ、それからもみあげの上まで一寸四五分ばかり皮膚が裂れ、その奥には白いものが見えた。
ぐったりなっている奴を庄左衛門がひき起し、
「しっかりせい！　大したことはない！　親からこんな目にあったんだ。よくよくじゃないど。」
耳に口をあてるようにして叫んだ。お年玉の手拭をありったけ、傷の上から眼のかくれるほど巻きつけ、動けそうにもないので、
「リアカーを持ってくる！」
と云って出ようとする俊一に、
「待て待て、あわてるな！　お前達は誰も黙っていろ！　俺が一寸いって来る。」
庄左衛門が、父を連れて出ていった。人に聞かれてはならない。親が子に傷つけたって、罪にちがいない。若し人に聞かれたら警察に知れるだろう。懲役に行かなくとも、この際、一家中が調べられたら春蚕は滅茶になる。こっそり医者に頼むが、何かうまい口実はないか？　しかし体一面の傷では、あやまって怪我をしたとも云えないから、内

密で頼むよりほかないのだった。しかし内密というのも実にあやふやで、ことわらるればそれまでである。そんなことを庄左衛門は要助の父と相談するつもりだったが、父は「あんな奴は死ぬがよい。医者なんてもっての外だ。」というのである。

仕方がないので、薬屋に行ってたずねると、

「さあ、オキシフルで洗って、ヨードホルムでも塗ったら治るでしょう。」

というので、それだけ買って来た。

帰って見るとクラは二人の子供によそ行きの着物を着せて、亡夫の位牌を抱いて泣いているのだった。

「おクラさん。お前は何するだ。わしの家に行ってな！俊一、つれて行け！」

庄左衛門は位牌をクラの手からひったくるようにして、

「お前もつらかろうが成仏しなよ。」

と位牌を拝んで蚕棚にのせた。

それから傷の手当にかかった。

「大したこたあねえ。骨にゃかかってにやだ。」

庄左衛門は、凍ったように坐りこんで動かない要助の父に、ときどき傷口を見せるようにして話しかけた。

「何でもねえ、もう済んだ。要助もこれからはこりて性根を入れかえるずら。さあ皆気をかえて蚕に桒をやりな。気を変えな。いつまでも考えこんでちゃ仕様がねえ。さあ大将のお前から立ちな。」

父はぶらっと気の抜けたように立って蚕棚の間に入って行った。母も立った。庄左衛門は棚に置きっぱなしの位牌をおろして来た。

「要助！　お前はこれが見えるか！」

要助の眼の前につきつけた。彼はぼんやり眼をあけた。彼の混乱した頭に、兄の死の姿が浮んで来た。彼の手を握った時の顔。頭を剃る時の精神を失った姿。それから棺を深い穴に下す時のせつなさ。白い木片でなく、その底にはそれだけの実感が伴っている。

要助は思うまいとして眼をつぶった。その時、庄左衛門の畳をどんどんと叩く音がした。

「わかったか！　わかったならそれでいい。俺は何も今夜は云わぬ。ようく考えて見ろ！」

しかし彼は、まだまだ俺は参りはせぬぞと固く決意するのだった。

子を護る

葉山嘉樹

木曽川の峡谷にも長い旱魃が続いた。
鳥井峠に源を発して、王滝川や幾つかの清流を集めて、流れ下る木曽川も痩せ細った。
今年の秋は暖かかった。
その為に村の山の上の鳥舎の鵜も、余り沢山は捕れないと云う話だった。
高等科の子供たちは、朝五時半に起きて、村社の庭を清めに、附近の子等と誘い合って出かけるのだった。
当時、立野の連山は上の方から、驚くような鮮やかさで、紅葉し始めた。
木曽川に沿って、坦々たる国道は、S字型に村の下部を走っていた。
今までは一日に五回位走っていた木炭バスも、三回となり二回となり、途絶える日が多かった。

村の中心地からは、岐阜県の坂下町へ出るのにも、落合村に出るのにも一里の余歩かねばならなかった。
それは好適な散歩道であった。のみならず重要な国道でもあった。
私はここ、木曽の南端、山口村の住民として割り込まして貰ってから、約半年の月日が経った。
茅屋の生活は都会の生活とは比較にならぬ不便なものだった。風呂を立てるにも、一町も離れた小川から、バケツで水を汲み込まねばならなかった。どんな生活も、ここでは労働と離れては存在しなかった。いや、生存そのものが、労働と密着しているのだった。
私はその不便を自ら忍ぶ事を自分に命じたのだった。それは東京の二十年に近い便利な消費生活が、天龍河畔の工事場の生活に変ると、他の土方たちとは別に、私には拡大鏡にかけたように、大きな苦痛でのしかかって来たからなのだった。
当時の私は、その苦痛の為に、へとへとになって、宵の一杯の酒に疲れを休めるのだった。
それは罰が当ったのだ、と、私は内心で思うのだった。
何故かならば、他の誰もが不平もなく乏しい生活に安住している時に、私だけが苦痛を感じると云うのは、都市生活から切り離された私に与えられた罰であった。
それは天龍の河畔に於ける土方生活だけでなく、ここ、骨を埋める決心をした山口村にもついて来たのだった。

山口村の性格は驚くべきものがある。村自体が殆んど手織木綿の着物と、かるさんとであった。
質素、勤倹は、木曽川や、当時山や、峻烈な自然と戦う為に、数代に亘る根深い村民の性格を形造ったのだった。
私は今まで多くの町々、村々を経て来たが、この山口村のような、純日本犬に見るような、又名利を超越し果てた、高僧の心境にも似た村を見るのは最初だった。
山口村は、はげしく私を圧迫した。
米を背に負い、炭を負い、日用品を背負い籠に入れて、村の道を通るのも、ひどく私にはこたえる労働であった。私にも老年が襲い始めたのだった。
十四になる長男と、十になる長女とが、米二斗位は、炭の二俵位は、七八丁離れている組合から運んでくれた。
その子供たちに、手織木綿の着物とかるさんを拵えてやるのに、私は非常に苦労したものだった。私の古着や女房の古着をこわして、どうにかそれを拵えてやった。
この村に生れた子等が、生れながらにして持っている、勤労学童、遊惰排撃の気風は、この村に生れない者にとっては無声の圧迫となってのしかかって来た。そこには何等の仮借もなかった。私は、余りにも峻厳端麗な自然が、そこに住む人々を冷酷にし、愛なき人々と化し終ったのではないか、と観察し始めた。
四つ位の男の子に、ちゃんと合うように作った可愛いい草鞋を履かせ、
『新体制だでのい』
と、その子のお爺さんは、坂下の町まで連れて行った。そんな姿は、この村では当り前であったが、坂下の町へ出ても、落合の村へ出ても、『山口もん』として眺められるのであった。
私は冷酷に観察を始めた。甘やかされた生活に、労働能力の落ちている私自身を、鞭ち始めた。そして、私は観察し、批判している村人の眼に、私も亦、一人前の勤労民として、待遇されることを心から望んだのだった。
『何と云う素晴らしい村だろう』
と、私は鍬の柄で、村の人に頭を殴りつけられたような圧迫感の下から、讃嘆の声を放ったのだった。
――この村人の精神には非常に高潔なものがある。名・刺・写真・などを超えた農民の純粋な魂と云うべきものがある。それを具体的な姿で捕えて見よう。それを描き、それを発表することが、たった一つ自分に残された作家の道である――
と、私は考えたのであった。
私は白状する。山口村に於ける私の消費生活は、第一日から私の良心の苦悶と、肉体の疲労とによって始まった。
何故かならば、大地主を除いては、私だけが、生活の大部分を消費生活の方に向けているのだった。私の文学生活など最初から理解されようとは思わなかった。村の人たち

は、星を頂いて出て星を頂いて帰り、味噌汁をぶっかけた麦飯か、又はうどんを食って、前後不覚の熟睡に入るのだった。その時私は、不眠に悩まされねばならぬ、考える人間であったのだった。

日本は近衛第二次内閣にあって、新体制へ邁進しているのだった。これに応える為には、私は私自身をとっちめるに限ると思った。それは精神の上でも肉体の上に於てでもある。

私はどの村の人にも頭を下げてお辞儀をした。それは私はこう云う挨拶の代りだったのである。

『狭い山里の、苦しいあなたたちの労働の生活に割り込んで、あなたたちの作った米を頒けて貰い、焼いた炭を分けて貰い、作った野菜を分けて貰って相済みません。あなたたちなしには、私一家の生活は一日も一刻も成り立たない、と云うことをつくづく感謝するのです。』

と。

私が挨拶をしても返辞を返さない村の人たちも多かった。私が頭を叩げて、私はぶん殴られたよりも苦しかった。それはただ単に私が頭を叩げて、祈るような心で思ったとて、それがすぐさま通じようとは、私も考えないところだったのだ。それがどのように苦しい道であろうとも、私はただ、村の人々への寄食を求める以外に術がなかった。朝起きて、夜寝るまで、絶えず村人の勤労を見て、それへの感謝と、寄食の許しを求め続けるのは、正直な話私にもひどくこたえた。

絶対に頭の上らない生活と云うものを考えて見るがいい。それが日常の私の精神生活なのであった。そしてよく村の人たちが、私を許してくれたとて、私が私を許さないと云う反省は、この村に住む限り続くのであろう。

事実、村の人たちは、徐々に私を許し始めた。非常に遠まわしな方法や、ひどくあけすけな方法によって。それがどのように苛烈な試みであっても、私に云い訳けの筋はないのだった。一方は生産者であって、極度の労働と勤倹とを実行している。が、私は少くとも貧農よりも、おそらく中農よりも贅沢であった。これが東京の郊外で生活しているというのならば、私は私の周囲に同じ消費者を見出して、『あいつだってそうだから、おれだっていいだろう。』と云う図々しい抜け道に逃げ込むことが出来たのだったが、ここは村の道沿いの家であった。

十区二十三軒の区民の内で、鍬を持たないのは私一人であった。そしておそらくはこの二十三軒の農家の中に挟まって、私の家が一番贅沢だった、と云うことを白状しないではいられない。

最初の間は、私も、三食とも禅宗の僧侶のように、味噌汁でおっ通した。そしてその為に家中の健康が損われると云うことはなかった。後になって、私は禁を犯して牛肉や馬肉を買って来て、子供たちに食わせると、都会生活を経て来た大きい子たちは平気だったが、幼児たちは覿面に下痢をするのだった。

つまり私の家でも、大きい子たちは都市の生活が快適なのであり、幼児たちは胃腸からして、多過ぎる脂肪分と云うものを忌避するのだった。が、私の観念の上の決心とは別に、村から町へ出て、寿司屋や、肉屋の前を通ると、喉から手が出るのだった。『一人前三十銭の寿司と云うのは、贅沢なものでもないだろう。』と、私は自分に云い訳けをしながら、寿司屋ののれんをくぐるのだった。

勿論村中の人々が禁欲者であり、聖者のようであるとは、私は誇張することをしまい。よしんば、私よりものんだくれであり、怠け者であったとしても——事実に於てそれでもなお、私よりは正当なのだ。

は、そんなことをすれば、百姓は食っていけないのだ——

こう云う考え方をしている私が、その考えの重圧に喘ぎ、日常を自虐の方向へと向けたとて、大して不自然ではなかった。

が、又考え直して村の人から私を見れば、全く、これはどうにも奥歯にものの挾ったような存在であっただろう。

『いきなり転げ込んで来て、この村の土になるなんて云い出しやがった。どんなことを書く奴か知らないが、兎に角くものを書く人間だ、うっかりした扱いは出来ないかも知れねえぞ。気をつけて交際った方がいい』

と。

だが、私は正直に告白して置こう。どのような勤労農民を、私が非難したり、教えたりすることが出来よう。

『農村はいいか、都会はいやか』

と、私に問うものがある。

『農村に農民として以外に生きる、精神上の苦悩は、農村に住んで見なければ分らない。』と答える代りに、私は単に農村はいいと答えるのだった。『都会はいやか』と問われれば、生活さえ出来れば、消費生活一方の都会生活の方が、どのように私にとって便利であり、必要でさえあるかも知れなかった。

だが、天龍の河畔や、木曽の河畔で苛烈な自然と戦って生きている農民と接触しているうちに、

『農村では農民の生活以外にありようはないのではないか。自分の生活はどうしたって不自然だ。少しでもいいから、自然の方に帰らなければいけない』

と私は思い込むようになったのだった。

つまり私は自分に苦行を命じたのである。だが、それによって、私は慰さめの言葉を誰かから拝み倒そうと云うのではない。

この私の苦行と云うのは言葉が大げさ過ぎるが、私の精神上の休息のなさは分って貰えることと思って、筆を進める。

この私の異物挿入見たいな、馴染まない状態から、都市と農村と云う問題を考えて見たいと、私は思い立った。

日常の生活そのものが労働である、と云う日が続いてい

るうちに、秋になった。
長い旱魃だったが、その日は時々パラパラと降ったり、山の風が吹き颪したり、川風が吹き上げたりして、山特有の底冷えのする日であった。
表の国道で多数の隣近所の子供たちと遊んでいた、四つになる次女が敷きっ放しの布団に独りでにもぐり込んだ。
『どうしたんだい。』
と訊くと
『眠い』
と答えた
『寝てくれ、寝てくれ』
と、女房は涼しい顔をしていた。
寝てくれれば手が省けるのだ。
だが、手が省けると云って済ましていられなくなって来た。
ゼイゼイと、呼吸が苦しそうな状態に入った。
『おい、ねんねこを出せ。医者へ伴れて行って来る。お前はお父さんと一緒に来てくれ。お父さんがへたばったら代って貰わなければならないから。』
と、長男に云いながら、足を毛布の切れ端で包ませ、ねんねこでおんぶして、私たち親子三人は茅屋を出た。
午前の十一時頃だった。
次女は背中で荒い呼吸を続けていた。県立の診療所が村にあるので、私たちはそこまで十町余り夢中で急いだ。

村役場も、組合も、商屋も、人々も、そんなものは私の眼に映らなかった。これではいけない。いつものように、ちゃんと人にも挨拶をし、ちゃんと日常の通りにしていなければいけない、と、私は自分に云い聞かせて、眼を擦ったり、拭いたりした。それ等のものはたしかに私の眼に映った。が、私の心には映らなかった。
それならば、私はどのように重大なことを考えていたのだろうか。診療所に行く、と云うこと以外には、何にも私は考えていないらしかった。
丁度、稲刈や稲籾の最中で、村中はごったかえしていた。
早い所では発動機の籾磨機が、パンパンと唸って、籾から玄米を吹き出した。
赤ん坊も、一つのも、二つのも、三つのも、四つのも、とにかく沢山いる子供たちを、打っ捨っといて、親たちは籾磨機の能率に負けまいとしていた。
そんなせっぱつまった生産の場面を、私は幼児を負んぶして医者に行く、と云うことに引け目を感じた。私たちは小さくなって通り抜けたが、籾磨機にかかっている人たちは、忙しくて人など見向いてもいられなかった。
それは一年を通じての楽しい労働であった。慾得を超越した楽しい凝縮の一日であった。おそらく私が籾磨の一日にかかっていた農民であったとすれば、子供の呼吸促迫を知ることもなく、一日の労働を終えたのであろう。

村は木曽川に沿って、S字型をして居り、杉の樹立があったり、竹籔があったりして、昼も薄暗い場所が幾個所かあった。
役場と学校と信用組合と郵便局と駐在所と、それから唯一の商店を除いては、この村の中心には農家以外につけ加える何もなかった。
そこが一寸山口村の峠と云ってもいい、高い場所であった。
左には絶壁の下に木曽川が吠えるかと思うと、やや帯のように広く耕地が見えたりした。右側は黒山に続いていた。花崗岩の腐蝕上から成っていて、方々に無気味に白い山抜けの跡があった。
私は幼児を背に負い、国道を急ぎながら、なぜか、それ等の自然の風景だけが眼に映った。と云うよりも心に沁みたと云う方が近かろうか。いつもならば、どう云う風な形の岩で、どう云う風な形の流れで、と云う風に考えるのであるが、その日に限って、私は、自然そのものを、どしんと胸へ打っつけられたような気がした。
それは今に始まった私の感懐ではなかった。今時、自然に還れなどと云えば笑殺されるに決っているが、それにしても、も少し人間は大地に即した生活をしないと、今に罰を受けるだろう。受けるのは親自身、又は子自身でなくその子孫だろうが、今のままの大都会に生活する事は、知育から云っても徳育から云っても体育から云っても、大きな問題だと私はかねがね思っていた。
しかし、それならば農村は健康の適地であるかと云えば、そうであるかも知れないが、今現に私の背中で四つの女の児は、吐く息引く息を忙し気に苦し気に呼吸しているのだった。それは私と云う幹から出た若芽が、急に来た秋の風に痛めつけられた姿であった。樹木さえも、その若芽が霜害に会うと、それを恢復してやる力がないのだった。今は頼りになるのは医者だけであった。
たった今まで秋の風になぶられて枝をふり葉を振っていた若葉が、一瞬の冷気か何か、とにかく自然の誤違によって、呼吸促迫に陥ったのだった。それがどんな病名であるかは、私には分る訳もなかったが、苦しいであろう、幼い肉体の全生命力を挙げて戦っているのであろう、と思うと私はいつの間にか駈け足見たいに急いでいた。
診療所は国道の上に南面して建てられた、村随一の文化的な建築だった。
『今日は』
と呼ぶと、医局の方でなく座敷の方から、娘さんが出て来て手をついた。
『先生はいらっしゃいませんでしょうか。』
『ああ、あの今日は田立に出張の日でございまして。』
と、医師の娘は何か悪いことでもしたような、かげりを顔に見せた。
『あそうでしたか。では』

と云うと、咄嗟の間に私は木曽の秋の風吹き抜ける国道へ出た。
長男が途中で代って負ってやろうか、と云った。
『いや、いいよ。冷えちゃうよ。それにもう直ぐだ。』
彌栄橋と云う大きな鉄橋にかかる前に、
『ここに父ちゃんと来たことがあるね。』
と、だしぬけに背中の子が云った。
『ああ、あるね、あるね。』
と、その言葉に縋りつくように、何と云うこともなく、慰さめの言葉を喋舌りまくった。
『早く病気が癒ったら、又父ちゃんが大きな魚を釣って来て上げるよ。』
『大きなのね。』
と、もう、ものうそうに答えて、背中にぴったりとくっついたのだった。
——それにしても何だって俺はこんな不便な土地に、自分を押し込んでしまったんだ。この土地に馴れてしまえば、健康もそれに順応するのだろうが、馴れるまでは気をつけなけりゃいけないぞ。——
と、私はその自分の考えに冷汗をかいて、道を急いだ。
私の体は汗でぐっしょりになった。せめて私の体温を子供に伝えてやりたいと思って、歩くのが少し骨になったが、速度は落さないで急いだ。
橋を渡るともう岐阜県の坂下町であった。

町の入口にある園池医院は、沢山の患者が待っていた。私たちは地下足袋を脱ぎ、待合室に上って病児を下して膝に抱いた。
瀬戸物の火鉢には、中位の炭が三つ埋けてあった。患者たちは順々に、火鉢の周りから立って診察室に入った。私たちもその貴重な炭火の側ににじり寄った。
診療室に入って椅子にかけて待つうち、病児は食物を嘔した。病児にどう云うものを食わせているかは、今はもう隠す必要もなかったが、余地もないのだった。
診断の結果は左肺が肺炎になりかけている、と云うことであった。
薬を貰うとそのまま、私は病児を背負い、一里の道を歩いて来た。何と云う馬鹿者で私はあったろう。たった一台で、それも故障を起しがちではあるが、タクシーが駅の前にあったのだった。それを利用することを私は忘れていた。いや忘れていたと云うのも当らないような気がする。それ程私は長い間タクシーへ乗ったことが無かったのだ。しかしこの時、私の神経が動顛しているのでさえなかったならば、私は子を抱いている間にでも、帰りの途を徒歩にするか、乗物にするか考えて置いてもよかったのである。
だが診療室を出た私は、ただ『帰る』と云うことの一念の為に、そのまま歩き出してしまったのだった。二分間も逆戻りして停車場の前まで行けば、病人用に動いてくれるタクシーにはガソリンが、まだあるのかも知れないのだっ

た。
　これ等のことを私は考えなかった、と云ったが、考えたかも知れないのだ。が、私の魂の動顚は大きかったので、生理的にか動物的にか、一歩でも自宅より反対の方へ行く、と云うことに深い嫌悪を感じたように覚えている。
　病児の呼吸促迫は、そうでなくても支離滅裂になりがちの私の想念を、益々ひどく掻き立てた。
　——罰を当てられたのだ——
と私は思った。が、それならば私自身に罰が当ればいいのだ。長男が代ってやると云って呉れるのを、辞退して負い、犬が道端の臭いを嗅ぎながら帰るように、私は身心ともにうなだれて一里の道を急いだ。途々病児はもう一度医者へ引っ返さなくてもいいだろうか、と思う程ひどく呼吸に苦しんだ。
　帰ると一升瓶を湯タンポ代りに入れ、静かに寝かせ、温湿布などしてやった。
　私の恐れるところは、この児が病気と戦う姿を正視出来るか、否か、と云うことにかかっていた。新しい時代は新しい者が負うべきである。などと云う鹿爪らしい理由からでなく、この大変革期にあって、何事も為し得ず、米を食い炭を費す、自分自身への大きな嫌悪に陥ったのだった。
その心はこの児の病気の前から、第二次近衛内閣、いやもっと遡れば日支事変、満洲事変にも及ぶ長いものだった。
その間、徐々に私は変化したらしい。国民の一人として恥しくない、と云うところまでは行けないにしても、それになるべく努力した。人の見る前の努力ではなくて、誰も見ていない家の中や、山の中の事とて、思索の方向を誤ると完全な自己否定に陥ろうとした。
　炭焼小屋を訪ねたり、出征兵を送ったりするような、あらゆる機会に、私が一体本来何であるか、と云うことを考えるのだった。どのような人間も任務を持たなければならない時なのに、私の任務は何と云う情ない任務だったろう。いやそれが成し遂げられて、人々に読まれ、人の荒み行く心を和ませ、絶望に沈もうとするものを奮い立たせるならば、大きな仕事でもあろう。だが、それが出来るであろうか。それが出来るためには私自身の身も魂も変らねばいけない事なのだった。
　その魂の重荷の上に、病児の苦呻が私の神経を掻き立て、居たたまらなくしたのだった。
　翌る日はいくらか呼吸も楽だし、然も熱も引いたように思われた。
　いろいろ手当をしたり、絵本を読んだりしているうちに、最近満洲移民を主題として小説を書いているY君が、読書村のSと云う人と一緒に訪ねてくれた。
　移民の絶対に必要なこと。それには異論が無かった。
『だがねえ、農民の土に対する執着と云うか、植物性な根深かさと云うか、じゃあ伝がって気持になれないんじゃな

ねえ。』

『いや、だから今では切り離して終わないで、血のつながったものにしようとしているんですよ。本家と分家見たいなね。そのうち分家の方がよっぽどいいなんてことになって、引き止め策を講じなくてはならなくなるかも知れないが、そこまで和やかに行きたいと思ってるんですよ。私などは幾度も往復してるから、ポケットに歯ブラシとチウブを入れただけで出かけるんですがね。それで結構間に合ってるんですからね。一度出かけて見ると存外近いところだし、別に内地と異らない土地の上なんですがねえ。それを農民の伝統として動きたがらないんですね。』

『それもあるでしょうが、家畜や田畑はペン見たいにポケットに挿し込んどいて、どこにでも連れ歩ける、と云う訳に行かないからなんでしょう。そこの点などを十分細かに気を配って、心配のないようにして送出するのが必要だと思うんですが』

『その点もあるんでしょうが、どうも何ですねえ、満洲の移民村に行っている時は張切っていて、帰ったら積極的にああもしようこうもしよう、と考えているんですがね、それが帰って来ると変なんですね。満洲で移民村に刺戟されたと同じく、内地でもその農村の空気に囚われるのですよ。一つ立派な宣伝係となろうと思って帰って来るんだが、帰って来ると向うの長所や美点を主張はしますが、移民の勧誘と云うことになると、やるにはやってもやっぱり苦手なんですねえ。自分が行きっきりになる決心がないんですからねえ。』

『向うの生活はうまく行ってるんですか。』

『建設時代ですからね、一概に云えませんが、良好ぎる程良いところだってあるんですよ。』

『私が農村に住んで見ての感想ですが、日常の生活に縛られて身軽に動けなくなったってことは事実ですよ。米だって炭だって砂糖だって、何だって配達してくれるものは一つもないでしょう。一々受けとりに行かなければならないんですよ。それも期限がさしせまっているとか、その配給を受けないと後の配給が受けられなくなる、などと云うので、相当忙しいんですよ。私見たいにただ配給を受ける側の人間でもそうですから、田を作ったり、蚕を飼ったり、馬を飼ったり、山羊を飼ったり、兎を飼ったりと云う百姓の生活では、殆ど暇と云うものはないんじゃないかと思うんですよ。と同時に私の見るところでは百姓は暇と云うものを好んではいないと思うんですがね。何故かって他の農村は知りませんが、少くともこの辺の農村では、命がけで働いてようやく、どうにか生きて行けると云う程度らしいんです。それも人口が殖えるから移民の必要が出来て

来る訳なんだが、いよいよどん底に陥ると、動く気が無くなっちまうらしいですね。その日その日に追っかけられていて、明日のことどころではない昨日の事がまだ片附いていない、と云う訳なんですよ。私もその組なんですが、家の中を綺麗にしてるうちには、周りがすっかり汚なくなっちまうし、周りを片附けちまうと今度は家中が埃だらけだ。と云うような訳なんですよ。』

『大局が見えなくなるという事は事実ですね。何故って農村には大局が無くて部分だけなんだから。』

とY君が云った。

私は農村にだって大局があると思うんだが、Y君の云う通りそれを把握んではいなかったので、意見を吐くのは見合わせた。

移民が必要であることは勿論だが、村が村民を抱擁し切れない日は、かつてもあったし、これからだってあるものだと思わなければならなかった。

今まで滅多に涸れたことのないと云う、私の家の前の井戸など、夏の終りから冬の始めまでずっと、一滴の水も出なかった。

降雨の少いせいだろう、と思ったが、同時に、山の立樹が密林でない、と云うことを指摘しないではいられなかった。山は上の方まで村有林であって、放牧にも、炭焼にも、薪炭材にも利用されていたのである。小学校から帰って来て、さて放牧の馬を牧場まで連れて行くのは、子供たちにとって面白くもあったが辛いことでもあった。丁度うまい具合に柵の辺まで来ていないと、子供たちは牧場の方へ、自分の馬を探しに上って行くのだが、もう直ぐ日が落ちる時間なのだ。気が気ではなくても、見つからねば馬を山に置きっ放しにして帰って来ることもあるのだった。うまい具合に見つかると、母仔の馬に、兄弟で飛び乗って鵯越よりも峻険な道を裸馬で乗り下って来るのだった。

Y君と話していても、下で寝ている子の事が気になった。

Y君の話は私には珍らしいと云えば云えたが、あたりまえだと云えば当り前の話だけが伝えられた。

夕方になって、Y君たちが帰ると云うので、病児を見ると安静に寝ているし、呼吸も促迫していないので、この分ならばと思い、遠来の客を坂下の町まで送って行った。

そこの寿司屋の二階で私たちは、水っぽい地酒を飲んだ。

Y君たちは汽車で帰るのだし、私はいつどうして歩きだしたのか、とにかく自分の家まで一里の山道を十一時には、よくもまあ木曽川に転げ込まないで、と云う有様で帰って来た。

そして、ドタン、バタンと、半天や乗馬ズボンを脱ぐ物音に、病児は眼を覚ましたらしかった。

その翌日から、私が飲ませる薬をいやがるようになった。

その熱にうるんだ眼は、昨日、私が酔っぱらって帰ったことを語っているようだった。
私は小さいバケツに湯を入れ、余り熱くない程度にして病児の腹を暖めてやった。外にする事もないので、ただ、詫びる気持で、病児の腹を暖めていた。長いこと、長いこと。そして、ふと見ると、病児の顔に桜色がほんの些しだが、浮んで来た。唇の色も良くなって亀裂の入っていたのが直っていた。
『きーきーどうなの。』
と訊くと、
『梨が食べたい。』
と云うのだった。
買い置きの梨があって、それを思い出したのであろう。私は台所へ去って梨を卸した。お代り、お代りで、五つも飲んだ。
この分ならいいだろう、と、私は楽観していた。
その翌日もよかった。肺炎だとは思えない位の平熱で、朝食に五目飯を小さな茶碗に二杯も食べた。昼も味の飯の残ったのと卵の半熟を食べた。
午後、女房の弟夫妻一行が、子供づれでドヤドヤと、鳥舎の帰りだと云って寄った。
病児と同い年の女の児があるので、熱もないままに、午後は機嫌よく遊んだ。
翌日どうも病児の容態が悪い。

診療所の医師に往診を乞うと、快く来てくれた。七十二歳の老翁であるが、なお自転車で患家を馳駆しているのであった。
注射をしてくれて、いろいろの話がでた。
千葉県で産れて、信州の上田で開業した。若い頃は馬ばかりだったが、馬と云う奴は生きものだから時が来ると腹を空かす。それをやる暇がなかったり、患家の人に頼み忘れたりすると馬の御機嫌が悪いですね。
と云う風な話を淡々とするのだった。
三十歳から医者になったとしても、四十二年、明けて四十三年間を、病者と共に暮して来た老医だった。
『人間の寿命と病気と云うものは、これは又別ですね。これは助からないと医者の方で思うようなのでも、癒って行く人があるし、この病気は軽いし、病人が健康だから大丈夫だと云う風な場合にも、助からぬ場合があります。金持でどんな手当をしても助からぬ人もあれば、貧乏人で打っ捨らかされといて、助かるのが不思議だと思うのが、助かる場合があるのです。つまり病気と云うものとは別に、人間は寿命と云うものを持っているのですね。』
『御尤ですね。』
と、私は老医の寿命論を聞きながら、病児の痩せた顔が目についた。
死生を達観する、と云うことはこう云うことを云うのでもあろう。老医師の場合では病児に対して、十分の同情を

現わしながら云った話だった。それで私はむしろ快くこの言葉を受けとった。のみならず、そのような言葉が口から出かかっていても、医師としてはそう云う言葉を吐くのを、苦痛に思う人もあるだろう、と考えるのだった。

七十二歳の暮を迎えて、なお病家を廻る医師。その人が医師として上手であるか下手であるか、は問うところではなかった。或は余りに年をとっているかも知れぬ。診察や投薬に古い習慣が残っているが為に、年をとってはいるが為にそれだけ多くの病人を癒して来たのに違いはないのだ。

『本当は隠居していたいのですが、息子が軍医中尉でやはり、靖国神社に祭られたのです。私一人だけのことならば、意気も無くなりますが、どの家でも、息子を国へ捧げていられるので、私も再度の御奉公に振い立ったような訳ですよ。』

私はこの老医師を何とかして慰さめたいと思った。村の人たちは殆ど云っていいくらい診療所を利用しなかった。県営の診療所を通り越して隣町の医師に、高い自動車賃を払って見て貰う始末だった。

最初は診療所が不在で、隣町の園池と云う医者に診て貰い、往診も頼んだ。これはもう最初に書いたことだが、この二人の医者の間を、病児をぶらんぶらんさせたくない、どちらか一方に信を置き度い、と云う気持が湧いた。それには、園池医師の処方箋を参考に貰って、亘理——と云う診療所長の考医の名前であった——医師に、適当に調剤して貰う、それならば距離も近いし、避村に県が診療所を立てた趣旨にも添うし、亘理老医をも信頼すると云うことによって、尊敬の念を払うことが出来る、と私は考えた。

そこで、

『どう云うものでしょうねえ、最初あなたが御不在で園池さんに診て貰い、その後又、あなたにも診て頂くことになりましたが、私としては両方の医者からお薬を貰うのは、不徳義だと思いますし、診断さえ一致すれば、処方箋は園池さんと御相談でやって頂けないでしょうか。』

と、おそるおそる申し込んで見たところ

『ようがすとも、ようがすとも。園池さんには是非指導を受けなくちゃならないと思って居りますので、もしお宅に往診にでも来られて、暇が出来たら、一寸私の処へ寄って頂くと好都合ですがね。わしが出向くのが当り前ですが、やはり職務で診療所は空けて置かれませんからねえ。』

と云う気さくな、神様見たいな気持に、私はただ『ありがとうございます。ぜひそう云う風にお願い致したいと存じます。』と云って、心の中で手を合せた。

村中にたった一本ある村役場の電話を借りて、私は園池医師に来診を求めた。

病児は楽観すべき状態にはいなかったからだった。とにかく、『癒す』ことが最初だ。医師への義理も、病児を殺してしまったのでは問題にならなかった。

園池医師は直ぐ来る、と云って返辞したが後になって、役場の退ける時に、役場の吏員に、『たった一台の自動車が傷んでいて動かないから、今から歩いて行く』と云う言伝を伝えた。

これには私は恐縮してしまった。

寒い風の吹く晩であった。病人の室には煉炭の熾ったのを二つ入れて蒸気を立てて、温度の調節を計っていたが、隣町からこの村の、私の茅屋までは一里の余もあるのだったた。非常に流行る医者だし、上手だし、薬代なども催促をしたことがない、と云う風な手口だった。

歩いて来て貰うとすると往復に二時間以上はかかるし、その上疲労が甚しいだろう。とすると、私の病児はもう肺炎と云うことに診断が決っているのだから、手当以外に慌てても追っつかない話なのだ。吸入をしたり、湿布をしたり、水枕をとりかえる以外に手当の方はないのだった。そんな手当だけで急変のない患者のところへ、往復二里の道を歩かせる、と云うことは人道に反する話なのだ。何故かならば、病気の児を抱えているのは私だけではなく、どんなに園池さんの玄関にも、殺到していたことだろう。その二時間の間に他の急患が出ないとも限らないのだ。

私は馳け出して行って、

『止めて下さい、止めて下さい。』

と云い度かった。が、私の体は私の云うことを聞かなかった。

この頃一種不思議な神経病に私は罹っていた。『自分は生きている価値があると、本当に思うか、生きて書くべき何物かが残されているか。』つまりこんな風な詰問が絶えず、自分自身に向って放たれていたのである。

この答は至極明瞭であるかも知れない。が、人間の脳髄が、人間の生死を決定しようとする時には、その脳髄自体が動揺、惑乱するものだ、と云うことを、私は経験した。最初にも一寸書いたが、病児を自動車にも乗せないで、負んぶして歩いて帰った、と云うことなどは、この神経病の特徴ではないだろうか。それだけでなく、世間的な智慧と云うものが、一切、私を見切ってしまったのだった。

たとえば医者の薬取りに行って、序に、『色々の買い物をする』と云う事が、不可能になったのだった。肉も買い、魚も買い、吸入器も買い――灌腸器なども、買って来なければいけない。と、私は家を出る時に自分に云い聞かせ、背負い籠を背負って出かけるのであったが、園池さんの薬を貰うと、『鬼の首でも取った』ような気になって、村から離れた町の方へ、どうしても買い物に行く気にならないで、どんどん村を向いて帰るのだった。

――つまりこれが偏執狂って奴さ――

と、私は自嘲して、木曽川の清流に鈍い眼を注いだ。

魂を入れかえると云うことは、作家にとっては縄で縛った棚を飛び越すように、簡単に行かないことなのだ。べちゃくちゃ喋舌ったり、うろうろしたりするよりも、『新体

制』に応ずるものを書けばいいのだ。それも、そば屋の出前持が無い事だからとて、「もり」を「かけ」にわざと間違えて持ち込んだような、やり方ではいけないのだ。芯からでないといけないのだ。

地軸がうなるような響が、底から響いて来ないことには似せものなんだ。作家が似せ者だったら一体どう云うことになるんだ。何も信頼すべきものが無くなっちまうじゃないか。『俺が俺を信頼しない。』状態で一人の作家がいられるだろうか。ところが、その俺は俺を信頼出来ないのだ。『よし、これで立派なもんだ、さあ行け、』と云って俺は俺の気持をサッパリさせ度いのだ。だが、さっぱり気持がさっぱりしないのだ。自動車に乗ることも、吸入器を買うことも、園池さんの玄関で、背中に差し込みが来たから診て貰おう、と思ったが、薬が出来たので帰ってしまったのだった。

新体制と云うものを、もっとハッキリ国民の前に現わさなければ、私見たいな病気が外にも出ないとは限らないのだ。これは精神上の苦痛などと云うものと違って、同時に肉体の疲癪を伴って来るのだ。どうにもこうにも動くのがいやになるような、生理状態が醱って来るのだ。

見当をつけて歩き出せば、一里先きの医者まで薬を貰いに行って来れるが、他の融通が利かないのだ。融通の利かないのは昔から『馬鹿』と相場が決っている。

では俺は馬鹿であったのか!

園池さんが歩いて往診してくれると云うことに対して、私はどうして謝ればいいであろう。その間に急患があったり、もしその後に園池さんが風邪を引いたりしたら、取りかえしがつかないではないか。馬鹿になった私はこの頭の混雑を緩和する為に、酒を飲んだのである。そして園池さんが到着してくれた時はぐっすり眠っていたのである。

そんなことは許されることではなかった。が、私は、忘れていたが、小供の発病以来幾日かロクロク寝ていなかったのだ。寝ても病児の泣き声や何かの為に起されたりして、熟眠がとれなかったのだった。

そこでつい一杯飲んだ酒が利いて、半天と股引のまま、炬達に入って眠りこけたらしいのだった。

園池先生が凍てた山道を一里余、ただ一人、肺炎の病児を見舞う為に、歩く心それが私には悲しい程有りがたかったた。いや何とも云えない謝辞で、私は一杯になってしまったのだ。

ところが現実の私は、ロクロク挨拶もしないで、病児の方は女房に委せて置いて、又炬達にもぐり込んだ。そして自分の不甲斐なさを嘆いた。何とか云いようもあろうものだ。真夜中の十一時に、一里余の道を五十を越した医師が疲れた体を運んで来ると云うのは、並大抵の話じゃないんだぞ。御自分だってゆっくり休養をとらねば、明日の何百人かの患者の診察に差支えるではないか。平身低頭をして

迎え、辞を厚くして労を劬ってから、患者を見て貰わねばならんではないか。ところが、園池先生は、来るといきなり病人の枕頭に坐って検温し、打診や聴診を叮嚀に済ますと、兎の膀胱程もある葡萄糖の注射と、強心剤の注射をして、

『明日から又お薬を変えますから。』

と云って出て来たのだ。

『先生お送りします。』

と、私は云った。が、寒気がして起きて歩けそうもなかった。

『いや構いません。それより、自転車を貸して下さい。下りだから楽に行けますから。』

『どうぞどうぞ。大丈夫お乗りになれますか。年をとるとなかなかハンドルが云うことを利きませんのでねえ。』

と、又しても、私は馬鹿なことを云ってしまった。

『大丈夫ですよ。昔は毎日乗り廻したものですよ。今は体が弱ってそうも行きませんがねえ。それでもまるで駄目だと云うこともないでしょう。お借りして行きますよ。』

『ええ、さあ、どうぞ、ほんとに何とも申し訳がありませんでした。』

と、私は云った。

園池先生は家の側の、桜の大木の根株まで自転車を押して行き、そこから凍てた山の暗闇の中に消えて行った。後には隣家の人たちと、私たちだけが淋しく残った。

私は恥しさと寒さとで、ガタガタ震えていた。園池先生と云い、亘理先生と云い、隣家の人々と云い、ましてや純介さんに至っては、二十三になる娘を貸してくれ、娘は家から菜っ葉や大根、焚きつけなどを持って来ると云う有様だった。これで人の世を怨むことが出来ようか。悪いのは自分だけなのだ。私を遇してくれる村人の、又は医者たちのこれ以上の愛情と云うものが考えられるだろうか。

『ハンドルを持つ手が凍えはしないだろうか、過ちでもなければいいが、何しろ、山口、坂下、吾妻、読書と、患者の多い先生だから、間違いがあったら、取りかえしがつかん。』

と、隣の人が云った。

『そう云えば先生は手袋を持って御座らっしゃったかな。』

『それや手袋は皮の上等を持っていますよ。だから、でも冷たいからなあ。』

『いやいや、そう心配させないで下さい。今日歩いてなんか来て下さらなくて、明日自動車で来て下すったら、私の気持もいくらか楽だったでしょうにね、親切な先生ですね。』

『いや、先生は云ってましたよ。どこか序があれば寄るが、ただ、あなたのところだけを目的では自動車賃が負担で、「押しかけるようで行けない」って、そう云って見え

ましたよ。』
『そんなことはないのになあ。』
と云いながら、私は先生に薬代を未だ一銭も払っていないことを思い出した。
　こいつあいけない。病児と一緒に家中が参っちまうぞ、と、経済的な問題が頭の一部に閃いた。私は早速そいつを拳骨で叩き出した。その経済的な理由程、私を不愉快にする考えは他には無いからだった。
　貧乏にはもう私は倦き倦きしちゃっていたんだ。
　だがまあ、なんと隣の人たちも、もっとひどい貧乏暮しをやっているのだ。それが、
『わしでさえ、こうやって働いとるのに、あんたがたがもうちっと働かんちう法はないですよ。』と云ってくれているように思えた。
　隣の人のことを思えば、私はへたばるわけにも行かないのだった。

（一九四一・二）

煉瓦女工

小池富美子

一

　家と家とが目茶目茶に建てられた迷路のような鶴見川沿岸の漁村である。軀を横にせねば通れぬような露路から露路に、一杯に貝殻を敷きつめた道も、建て込んでいる家々の間を辛うじて人が歩ける程度で、うっかりすれば同じ所を十度も歩いて仕舞う。
　一年中、陽の目を見ない蒸気長屋、小さい木箱に二三種の駄菓子を並べた菓子屋、子供の背丈位に屋根の垂れ落ちた草ぶき屋根、つっかい棒で辛うじて持っているあばらや、川辺に並んだ家を除けばどこも空気は腐敗して、ごみごみした家々から異様な臭気が四辺に漂う。
　喧嘩をして泣く子、怒鳴る親、此の附近の漁師以外の浅蜊売りは、大抵半分カウチと称して商売の傍ら秘密賭博で生活を保っている。又秘密賭博をやめたら、天秤棒一本で

は飢死を待つより他仕様がない程に貧しい彼等である。賭博は法律にふれる事も、時々巡査が仲間を留置場に入れ、説諭して帰される事実から知っている親達は、子供にだけは天秤棒を担がせまいと、たいていは会社に出している。中学校や女学校へ進む者は表通りの立派な商店や医者の子だけで、こんな長屋からは女学校どころか、小学校も貧困届けを出して月謝や後援会費を払わず、修業証書を握ると、すぐに女工や幼年工、或は人夫、職工などにする。

みんな腐敗した空気を吸って生きている虫に過ぎなかった。三十年ばかり前には狐がないたと言われた川向うの潮田の、広い広い野原にも、煙突が一本立ち、二本立ち、今ではもう押しも押されもしない工場地帯となって昭和十三年の夏になった。橋向うのかたえに、空いていた原っぱさえも、此の春、白い蓮華草の上に赤い鉄骨が立ち始めたと思う間に、もう八分どおり工場らしいものが出来上った。子供達が真黒になって泳ぐ川の面に機械の音が騒々しく響き渡って、雨のない青い空が続くと、蒸気長屋の隅に生きていたみさは（どうしても働きに出なければ――）と深く心に決めるのだった。他人は「まあ、こんなに良い軀をしてて病気があるのかい？」というが、それがみさには、たまらなく淋しかったのである。誰の目にも健康そうに見える彼女の張りきった皮膚の下には濁った血がかたまって、関節という関節につかえているなどと云っても、何人もおそらく本当にはせず嘘だといって笑うであろう。

小学校を卒えるとすぐ小工場に入って働いている内に、風邪がもとで三ヵ月も病床に死の苦しみを嘗めた揚句、髪は全部抜け落ちて、十七歳の齢に八貫目にまで減ってしまった。そうしたみさは次第に肥り、寒かった頭にも新しい髪が芽を出して、はじめの三四月こそピョンピョンはね上った髪も、束ねられる程度に伸び、目量も十二貫三百に増えて、十九歳の厄齢を迎えたのだった。「多発性、関節ロイマチス」これが若いみさの病名である。これまで「お前は他家の娘みたいに達者で働けるわけじゃなし、病人は病人らしく食う物さえあればオンの字だ。」という母の言葉に押しつけられて、流行の着物も下駄も、働く人のみが買うものだとあきらめ、油っけのない束髪とつぎの当った着物で不自由な手足を包みながら二年間を送って来た彼女も、漸く自分のみすぼらしさを知る年頃になっていた。それよりもたまらない事は、身動きも出来ない程に苦しんだ当時から枕元をづしづし歩きながらにくまれ口をたたいた弟の新吉が、高等小学校を卒えると同時に、自動車会社へ幼年工として働き出すようになると、働かないみさに「豚、食いつぶし」と連発するようになったことである。ミミジロ一枚、天秤棒一本を種に働く父も、商いから帰って来ると同時に、陽の目を見ない湿気た家の隅で、眤と坐っているみさを見あきたものか、新吉の言葉を聞いても黙っていた。幼ない時から父ちゃん子だった新吉は、益々働きに出ないみさを罵り、果は「こいつ一人が居なければ、俺ン所だっ

て米の一升買いをしなくっても当り前にやって行かれるんだ。」とも云った。
　よくよく考えれば、弟も家を思えばこそ、あんな事を云うのだと知りつつも、みさが余りの事にカーッとして「どうせあたいは食いつぶしだよ。それがどうしたって言うんだい。」と三度に一度は、つっかかって行けば、父は「みさ、手前が悪い。」と叱り、母は「みさは、あたしの連れっ子じゃないんだからね、病人なら何かと不憫がってかばってやるのが親じゃないか。それをなんだい。二人でグルになって——そんなに食わせるのが惜しくて仕様がないんなら、あたしがみさを背負って出て行くからいい。」と泣いて怒る。他人から、だまされると思ってためして見ろと教えられた薬は片っ端からのんで見たが、みさの軀には何の効果もなく、良い時も薄らだるく、悪い時には全身錐を刺されるように痛む、かと思うと、一瞬にして常人と変らぬ軀になったりして、みさにとっては長い長い二年間も過ぎてしまった。其の間にも、家が自分一人故にもめる事が悲しくて、尋常科卒の貧しい筆で改良半紙に金釘流の文字を——それでも懸命に書きつづけ、履歴書在中の封筒を八方に飛ばせてもみた。しかし、何所の会社や工場でも女工として採用するには、先ず厳重な体格検査がある。みさは軀の具合の良い時、町へなど使いに行っての途々、病院の前を通ると、きっと漂って来る消毒薬の匂いにさえ——多発性関節ロイマチス。駄目だ駄目だ、こんな軀で働こうなんて——と冷たく言い放した健康保険医の口髭が連想されて、たまらなく暗い気持ちになってしまう。七回が七回とも、入社の第一条件たる身体検査に、はねられていた。病床にある間も床づれのせぬようと一人で気を配り、父や弟に対しては絶対にみさを庇う母も、時々父に「他所の娘は達者で働くから、なんぼ親の手助けになるか知れない……。」と、吐き出して云うと、「此奴の病気は此の先、何年経って治るやら分ったもんじゃなし、幾つんなったって嫁に貰い手もないし、全く一生のしょい者だよ。俺達だって何時まで生きるじゃあるめえし、あいつを飼い殺しにするのもおぼつかない。何の因果だかなア……。」と父が言う。みさは何度か——死んでしまおう——と思った。しかし、シン底からの死はまだ考えてはいず、死んだら面倒な事がなくて良いだろう。とだけで、其の気持の裏で（なんとかして働きに行きたい。人並みに良い着物を着て、お化粧もし、映画や芝居見物のお銭ぐらいは始終蟇口に持って——）と世間並に生きて行こう憧れに喘いでいた。
　五月の降りそうで降らず、又、晴れもせぬ鬱陶しい日曜日のことだった。弟の「豚、食いつぶし、困ったもんだ、かたわもの。」を半日の間我慢して聞いていたみさが、昼食の膳に向った時、「ほう、食う物だけは一人前だ、目の色が変ってらあ。」にカッとして「馬鹿ッ。向う岸の工場が出来上るまでにはお前なんかの尻にしかれちゃいないよ。ヨボヨボ婆あじゃあるまいし、働くさ、働きゃあ文句

はないんだろう。」滅多に大声を出したことのないみさが大声で呶鳴ると、母は驚いて立上ったが、みさは茶碗も箸も投げ出して、鼻緒のゆるい父の駒下駄をつっかけ、川辺へ出た。川向うの赤い鉄骨が網目のようにガッシリと立ったのを見ると、（病気なんか何だ。死んだって働こう）と、しっかり思った。足元に打ち上げられた藁屑が口惜しい涙でぼーっと霞んだのも記憶に新しい。働こう働こうと思いつつ毎日のように町を歩き電柱にベタベタ貼られた「樺太行き人夫募集」と並んで「女工募集」のビラに立止ると、そこは、もう既にはねられた会社ばかり――そして七月から八月は無意味に過ぎた。

働きゃ文句はなかろうと、口惜しまぎれに大きな事を言ってからこっち、夜さえ明ければ「もう川向うの会社は出来上っちゃうぜ。まだ家で食いつぶす気かよ」という毒々しい弟の言葉に抗っては、表に出て行くみさと、不貞腐れ奴と呶鳴る父、みさを連れて死ぬと言い出した母――

みさは自分がいとおしくもあり、川辺に立って晴れ上った青空を見ても説明の出来ない涙が溢れ、涙の中から（そうだ。汐田の職業紹介所という処へ行ったら何とかなるかも知れない）と思いついたのだった。貝殻の露路を通って表通りに出れば、熱い風が、なえたように時々吹いて来るばかりで、京浜国道を通るトラックの音だけが聞える町は静かだった。潮見橋を渡って潮田の人道も車道も一緒の、狭いけれど賑やかな本通りをどこまでも真っ直に、市営職業紹介所の把手に手をかけるまで　彼女は、どうか仕事があるようにと心の中で祈っていた。

二

赤児を背負って「通いで飯たきの口はないでしょうか？」と所員にすがる血色の悪い女や「どんなに骨が折れてもかまいませんから、お金のとれる処へ」と、はげた白粉の顔を赫くして頼む三十女、「内職で一月、二十円ぐらい欲しいんですけど……。」と、出来ない相談を仕掛け、子供を泣かせては饒舌りお辞儀をくり返しては頼む女の群、その一番後でみさは給仕が渡して呉れた紙片へ、ガリガリひっかかるペンを運ばせる。「志望一」とある欄へ女工と書き入れ、本籍、現住所、生年月日、学歴そして山崎みさと署名し終ると、人いきれの熱さで汗が気味悪く背筋を流れるのを感じ乍らもホッとした。

所員の前に黙って紙片を差し出すと、頭の禿げ上った所員は僅かに残った耳の上の毛を扇風機になぶらせつつ、「山崎みさ……と言うのかね、十九か？」「はあ。」こんな年寄りにも真正面から顔を見られると洗いざらしたつぎはぎだらけの浴衣がはずかしく、目を彼の白いワイシャツの胸に向けて、古い人絹の兵児帯をいじっていた。「女工かね。」「はい。」「電気会社なんかどうだ――。」言葉使いはぞんざいだが職業的な唇が笑っていた事が、何より

も、彼女を安心させた。

電気会社は給料が良いという事を常からきいていたので去年履歴書を出して見たのだが、ただ一度の身体検査ではねられた処なので「——」黙って頭を振ると、「フーン、硝子会社は？」そこも当ってみた処だった。「じゃと、自動車は。」「——」「製菓はどうだ」「——」「じゃあ、もう口はない。」ぴしっと、切るように言うと彼は帳面の上の鉛筆を、ゆっくり取り上げて耳の間へはさむ。みさは叱られた子供のように泣き出したくなった。所員はちょっと間を置いてから「どうして、みんないけないんだ。軀でも悪いのか？」笑みのない口もとで訊かれると余計、悲しくなって来る。それを払い落すように激しく頭を振って、「いいえ。——でも、もう他に口はないんでしょうか？」とみさは必死だった。「いや、ある事はあるがね。煉瓦を造る会社なんだ、そりゃあ、ひどい労働でね、女工と言うより女土方だよ。」煉瓦を造る会社はまだ聴いたこともない処だった。「あたし、どんなに辛くても辛抱します。どうぞ、お世話して下さい。」

所員が笑いながら、紹介状へペンを走らせるのを見ると、彼女ははじめて短い袂から古手拭いを取り出し顔中の汗をぬぐい、先を争って百舌鳥の囀るような女達の声と、ついたてを一つへだてた男子部で五六人の人夫が何事か、太い声で頼んでいるのを、きくともなく聞いていた。

紹介状を手に、炎天下の舗道を教えられたとおり永い間歩き、やがて電車道を横に反れて、巾の広い埃っぽい道を行くと、大きな煙突からモクモクと太い煙を吐き出している窯業会社はすぐにわかった。白い耐火煉瓦を何台ものトラックに積み込んでいる人夫の肩や背は土埃で埋もり、堅くしばった汗だらけの鉢巻きには真黒い煤煙が降り積っている。ここで勤まるか勤まらぬかより、みさは先ず採用されるか、どうかを懸念しつつ、掌の中で汗ばんだ紹介状をしっかり握り、守衛室の窓に向って行った。

年配の主任はみさの身体を見渡しただけで「明日からでも来て下さい。」と言った。みさは、余りの嬉しさに「何時に来る」とも訊かずに帰る程有頂天になっていた。母に話すと、「それゃあよかった。けど、お前の軀で会社勤めが出来るかねえ。」と、心配するのだった。

四本の柱にトタン板をかぶせて簡単に出来た家の隣に、又二本の柱を建ててトタン二枚をかぶせ、そして棟割り長屋と称する下に住む人々は、よく講談や落語に出て来る長屋の人のような暖かい味は更になく、屋根と壁は隣と分け合ってはいるものの、口前だけは隣と兄弟のように見せて、其の実、今、隣が一文の銭がなくとも己の家だけ、どうやらやって行けたら、なんてだらしのない奴等だ、と遠くから冷笑している。

今、豚娘が働きに行くようになったときくより早く、井戸端に出た母に「一年も続きゃお金倉を建てちゃうねえ」と、いやみを並べ、馴れ切った母が「ええ。倉に這入り切

れなかったら、前の海を銀貨で埋め立てちゃおうと思って――。」と、愉快そうに笑う声をみさは二年振りに晴れた胸できいていた。弟が帰った時も、父の前で「今度から、豚なんて言うと承知しないよ。」と、見得を切った。

翌朝、糊のかたい浴衣に兵児帯で弁当の包みをかかえ、大勢の女工達と同じ足どりで橋を渡るみさはいくらおちつこうとしても胸がドキドキ鳴って、ひとりでに笑えて来て仕方がなかった。気持の良いアタマの隅に昨夜まで（どうして体格検査なしで入れたんだろう）との不審が、汚点のようについていたが、それも橋を渡り切って広い原の真ん中の小路をつっきって行く窯業会社の女工達の間にまじって、行手の林のように立った煙突を見た時、完全に忘れていた。

石灰の臭いが胸につかえて、新しい木の出勤机が守衛室近く、一番末から三番目にかかり、女工部屋の細長い脱衣箱の上にも「山崎みさ」の名札が打ちつけられ、(中)二九八番の作業服が貸与されたのは、それから五日の後である。大患い以前に彼女が働いた百合根加工所の仕事などは及びもつかない此の会社の大変さを、一日の仕事で知った彼女は、つくづく職業紹介状の親切そうな所員が「女工というより女土方だ。」と言った言葉を思い出していた。

灼けた二筋のレールに石炭を積んだトロッコを押して来る男の背中は皮がむけて、真黒になった軀中から白い塩を吹き出し、石英を機械で粉にするかかりの男は、まだ若いのに老人のような嗄れ切った声になって居り、幾つもの入口に泥を塗って煉瓦を焼く窯番の男達のむき出しの肩はすりむけて、首は亀のように前へ伸びてしまっている。そんなのから見れば比較的、楽だと言われる女工達は、土茶木綿の上衣と、ズックのような厚いスカートに滝の汗をしぼり、ズックの前掛けをかけ、左手に不格好なボロ手、右に軍手をはめ髪は土色の三角布でしっかりしばって、監督の目の届くところ息づく間もなく、原型の中に湿気のある程度の原料をつめこんで、重い木槌で表を打ち裏を返して打ち、鏝でならしては一個一個の煉瓦に精力をこめて働いている。背に近い乾燥場と、出来上った原型をのせる棚が、やけにムーンと土臭く、汗は三角布をぐしょぬれにして両眼に入り、石英の粉と石灰にかぶれた女工の腕は荒れ果てて居るのに「受け取り」になっている人々は、監督が見ていようがいまいが、飯を食う暇も惜しげに、一個でも余計に造ろうとして、それぞれの原型に盛り上げた粉を赤鬼のようになって槌を振り下す。

彼女達は銭のことよりも、先ず競争意識の前に身を犠牲にしているのであろう。水気の多い粉はすぐに、すき間なくしまるが、水気の尠いのは力を入れて何時まで打ってもしまらず「水を」と監督に頼んでも、水の多い粉は窯に入れてからもろいからとて仲々水を呉れぬ。中には苦しがって水を呑みに行くふりをして頬をふくらませては帰り、せめて口一杯の水でもと山ほどの粉にかきまぜる者もあり、

途中で監督に見附かって呑んでしまった者もいる。職工の打つ煉瓦は大きく、大きな槌で打つ腕の力こぶは仁王のように盛り上っている。それに反し女工のは並型と称する普通の角煉瓦や、煎餅という平ったいのや、羊かんと称する細長く小さいものが主で、まれには丸いのや扇型が出る時もある。槌の柄を胸の辺りにあてがって、軀中でくにゃくにゃ調子をとって巧みに打つ古参女工の格構は、もう人間を通り越して機械のように見え、朝七時から定時五時までに四百個近く打つ者が珍しくなかった。

小さい黒板に各々の名が書かれ、其の下に正の字が段々出来て行く、一枚の板に四個ずつ並べる煉瓦が十枚、四十個出来ると、又十枚の板が来る。つまり二百個、板、五十枚出来た者の名の下に正の字が出来るのである。槌と鏝の入り乱れた音が、ポッカポッカシューシューと間断なくつづき、すぐ表のグワラグワラガーッと石英を粉にする騒がしい音の中を、煉瓦の粉を積んだトロッコが、女工達の仕事台の上を通り、もう打ち上げて尠くなった者の仕事台へ、ザッザァーッとあける。乾燥場の向うで出来上った白い耐火煉瓦を六個ずつ縄でくくる婆さん女工の手は、よごれた絆創膏がすき間ない程に貼られ、作業衣を貸与されないこの人々の簡単服や浴衣の背は、泥水をかけたように砂塵が積り、背に布が吸いついてしまっている。まだ受け取りにならない新参者の間には四十分の昼食と定期時間のサイレンが待ちに待たれ、ひそかに「隣りじゃ良いわねえ、三時があるんだもの」と、柵向うのガラス会社の十分間の三時休みを羨むのだった。

一日目はおとなしく監督の言いつけを守る、二日目はどうやら他人の真似が出来るようになったみさは、五日目になると、そろそろ自分より少々早く入った新参の仲間と同じに、監督の隙を伺っては首にかけた手拭いで汗をぬぐい、便所の手洗いと名付けられた水道端まで駈けて行き口をすすぐのを覚えた。仕事が終って足場に落ちた砂を大きなスコップで仕事台の上にはね上げて監督から少々水を貰い、よくかき混ぜて明日の仕事の用意をし、それぞれの部屋にむかう時は誰でもが、サイレンの唸りの下で一日中溜息を吐き出して空を見る——これは監督や石英の質を検査する試験所の青っ白いニキビ男、それから事務員や主任を除いた、一日中太陽を見ないあせもだらけの労働者男女のすべての姿だった。仕事はまるで土方でも、女は女で、原型打ちに汗をしぼった者達は、女工部屋へ来ると貯めて置いたお饒舌をしながら風呂の流し場で作業衣の洗濯をし、石鹸の泡が襟だけを洗えば、てんでに練白粉を塗り合いをする。

トタン板一枚を隔てた男工風呂からも、話し声や流行歌などが頻りに響くは笑い声や嬌声、湯を流す音などが、高い天井にこだまして、ワーンというように聞える。湯から上ると、彼女等は先を争って羽目に掛かった、たった一つの小さい鏡の前で、パフをたたき、一本の棒紅で頬、眉の下、

唇、爪と赤く染めるべき箇所を順序よく塗り、朝から脱衣箱の釘にぶら下っていた着物を、なるべく上品に見えるよう、苦心して着て帰って行く。しかし紅で染めたその爪は毎日の激しい力仕事の為に、ボロ手の中で異様な形につぶされ、指はカリン糖よりもっと無惰な形になり、蛔たたきのような掌は荒れ果てた末に厚く皮ばって黄色に見える。まだ指の曲らないみさは、穴があいて火照る十指を湯槽に沈ませる時は、タオルに包んでは、いとおしむのだった。

みさが此所へ来てから、後から入った者の多い事は驚くべきだったが、其の大半は三日と続かず、一日五十銭の割で一円五十銭ぐらいずつ貰っては辞めて行った。暑くとも足袋を脱げば、足にも穴があくので、一日立っている足の裏は金魚の麸よりも白くふやけている。土埃と砂塵の会社から一歩門を出れば、朝鮮人がコークスを拾うガス殻の山近く、柄にもなく黄色い月見草が咲き乱れていたが、誰も摘んで行く者とて無く、軍曹上りの頭の禿げた守衛が「此の花はとるとすぐしおれちゃうんでな――。」と受付けの窓越しに角ばった顎を撫で、目を細めては楽しんでいるさまがおかしく見えた。

大勢の仲間と一緒に原っぱを突っ切って帰る時、たくさんの煙突の中から鶴見窯業株式会社とくすぶってみえる白い煙突を振り向いて眺め、其の先端からもくもくと吹き出る黒煙を見ては、（まーよかった。これで明日の朝まで自分の軀だ――）ほっとしてネコジャラシの茎をくわえて低い声で流行歌を唄い、空の弁当函をガラガラならすのだった。ネコジャラシの茎はうすら甘く、そして冷たく、湯上りの唇に快い感触を与えて呉れ、橋を渡る時、つばの広い帽子をかぶった釣客をたくさんのせた発動汽船が、沖から丸い煙を吹いて帰って来るのも仕事に打ちのめされたみさの六感をとり返させる助けとなった。

始めのうちこそ（矢っ張り無理だったかな？）と懸念をしていた病気も不思議と感じないままに過ぎて、十本の指を全部、絆創膏で貼りくるんだみさが、乾燥場の熱気にむされ乍らまた右の方ばかりが減る槌を持って働くうち、突然事務室のそばの掲示板に「七月十五日より入社せし者は今夕六時朝川医院にて身体検査を受けるべし」の貼札を見た。四十分の昼休み中、新参の男女工が何事か騒ぎ合う中を黙って弁当の箸をとるみさは（もう駄目だ、又、クレゾールの匂いの中に関節ロイマチスだと医者が言う。弟が、豚だの食いつぶしだのとガンガン罵る。自分が一と言でも弟に言い返したら、家中の喧嘩になる――）悲しいとも情けないとも形容出来ない程、混乱したアタマを（チエッ、よした方がいいや、昼休みだって四十分しかないんだし、手を洗って部屋へ行くまでに十分かかってあとの三十分で弁当飯をかっこまなくちゃ間に合わず、監督は、やれ打ち方が足りないの、スコップの使い方が悪いのと文句を言うし、こんなに骨の折れる会社は、辞めた方がどれ程良いか知れないや。）無理に会社の悪いところを拾い出して、と

もすれば泣き出したいような自分の心を慰め、（一層、捨て鉢になったら――）と思ったけれどもそれも出来ず、小さい声で「支那の夜」の流行歌を唄ったりしていたが、そうする自分がいじらしくて背筋が寒かった。

三

仕事などは、はかどらない儘に定期時間が来ると、新参の者達がまるで時計に追い立てられるように健康保険医の朝川医院へ向う途は余りにも長く、賑かな潮田本通りにジャズが鳴り、活動館の幟が夕風にはためく下を、幾組かの男女がゆっくりゆっくり歩いているのも、ねたましかった。

二十余人の者が、朝川医院についたのは六時に近く、消毒薬の臭いにむせ乍ら、古雑誌などを手に、じめじめした待合室で順番を待つ間も、みさは会社を辞めさせられた後の事をぼんやりと考え、時々無意味に反り返った頁をくっていた。皮スリッパを自棄にバタつかせて（みさにはそう思えた）廊下を通る看護婦達の顔が、何度か待合室を覗いては、みさ達よりずうっと後から来た人を呼び入れては去り、何時迄待っても窯業の人達を呼んでは呉れず、六時から七時、八時とよくみんな辛抱した。八時半近く、待合室に、身体検査を受けに来た者の他はいなくなると「窯業から検査受けに来たのはあんた達？」と、わかり切った事を訊きながら縁なしの目鏡をかけた中年の看護婦が、「さ、こちらへいらっしゃい」と、診察室へ背を向けた時、空腹と疲れで若い女工が二人、映画雑誌をかかえて人蔭に寝入っていたのも笑えない喜劇だった。

九時半過ぎ、漸やく一通りの検査が終り、年寄った看護婦から、口を封じたハトロン封筒を各一通ずつ渡されて、「これを開けてはいけませんよ。明日の朝、主任さんに渡して下さい。」の、声をきいた時は、みんな一時に睡たげな眼をしばたたいて（やっと助かった）というように微笑み交すのだった。

みさは、家へ来るが早いか、睡さも忘れて、木綿針の先を嘗め嘗め、二十分もかかって丹念に封じ目を開けてみた。身長、胸囲、体重。そして概評は甲下。彼女はホッとすると同時に何故か泣きたくなっている自分を、どうする事も出来ないのだった。翌朝、其の封筒を何食わぬ顔で主任に差し出すと、中を開けて見て忽ち「受け取り」にして呉れ「しっかり働いて、うんと金儲けをするんだな。これから余計働けば働いただけお前の給料が増えるんだから」と肩をたたいた。漸く人並みに仕事が出来るようになった喜びは大きかったけれど、女医の診断違いで甲下と書かれた事は、あてが外れた妙な淋しさが胸につかえ、自分自身の心に、――もう治ったんだ、一人前になったんだ。――と言いきかせるそばから、一時の気休めを嘲笑うかのように全身がひだるかった。始めて月給袋を貰った時、みさは（これで、みんなと同じ着物と、光ったハンドバックを買

って――）と、空想をして帰って来たのに、母が、それをお祖父様のお蔭だと仏壇に上げて歓ぶのを見ると、着物どころか、手拭い一本でも買って呉れとは言い難く、弟と同じ真黒い顔を光らせて黙っていた。父が珍らしくも、骨折り賃だと言って白木の日和下駄を一足買って呉れ「あとは手前が食う米の銭に足りないくらいだ」と笑ったのも心細かった。

彼女は、相も変らず色の褪めた着物に、しわになるくせに妙に光っている人絹の帯、新しいものといったら、カラカラと野暮くさく鳴る日和下駄だけで、会社の門を出入りの度毎に、同僚の化粧った美しい顔を「何だ女土方のくせにいけすかない。」と唾でも吐きかけたいような事を呟いては心の中に、（一度でも良い。あたいも髪をロールにして流線型の下駄を履いて……）女工部屋の隅にいてもみんなの姿が羨ましくてならなかった。

八月から九月にかけて、みさは、今まで一度も考えたことのない男性というものに何となく憧れを覚えるようになった。それは周囲の影響とばかりは言い切れず、仕事をし乍らも同じ原型打ち場に汗だくで働く若い男と、何かのひょうしふと目が合った時など、自分でもおかしい程にあわてて目をそらし、そのくせ伏せた目のやりばを、もう一度其の人に向けて見るというような――誰かが「みさ」と、一と言でも言ったらどんなに幸福だろうと想像する事が多くなった。此の会社ばかりで無く、町で見る男の全部が美しく見えて来、それに対照する自分のみすぼらしさが焦れったくてたまらなかった。いつの間にか、みさは、今迄会社から帰ると三時間の後にはすぐに眠れたのに、工業地帯で他国者の入り込んでいる、そして不良の巣だとも言われている潮田の町を、さまようようになっていた。それが悪い事だと知りつつも、どうしても行かずにはいられないほど人恋しくて焦れ死にそうな自分を（齢も行かないのに何の真似だ）の理性で、ようやく、只、わき見もせずに道を歩くという事で胡麻化すのに骨を折った。……それでも（確かに病気のある躯だのに、医者は甲下だなんて見損うし、同僚も監督も達者だと思い込んでいる。母だって病気が治ったものと決めてシンから嬉しがっている。それに、父も弟もこれからは達者で働くものと決めてしまっている。自分の躯は、仕事が終えると同時に妙にだるく、手も足もしびれてしまう時もある。誰かに、私は病気をかくして働いているんですと打ち明けて、おお可哀想に、と同情して貰いたい。だのに――）

貸ボート近くの暗い途に、一見それと分るような不良青年から「今晩は」などと話しかけられても、みさは有難うと礼を言いたい程に嬉しかった。毎晩、遅く帰って来るみさに、母は心配して寝もやらず、蚊帳の中から「どこへ行って来たんだい。」と訊く言葉に「ちょっと友達の家へ……。」などと、苦しい嘘をつく時みさは余りにも自分の行為が気狂いじみていた事に腹が立った。会社の女工部屋で

同僚の話す事は、男でも赤面するような野卑な世間噺と自慢話、出鱈目極まる恋人の話などが主で、彼女達はこんな事を平気でお早う、今晩は、の附属にし、又、聞く方も上の空で、相手の言葉が途絶えた時、この暇にとばかり口から出まかせに喋舌る。

九月から十月にかけて新参者の多くは、此の会社で働きながら、頻に他の会社へ履歴書を出し上手に駒の乗替えをやっていた。其の頃の新参者中、一番威勢の良い娘で内海しまというのが、「こんな会社によく女がいるねえ。まるで高等監獄じゃないか」などと、事務所の前を通る時、大声で独り言するのが古参者は生意気だと爪弾きにし、みさ達には面白い人だと好感がもてた。

一寸見には悧口そうに見えるしまは、非常に物覚えが悪く、其の上不器用で、折角、煉瓦をたたいても、木型の方が間違っていた為に原型がスポンと抜けなくなったりする事が多く、数多く出来たと喜んでいると、見廻りに来た監督に打ち方が足らないから角のない煉瓦だ、もう一度崩して打ち直せと叱られ、その時は黙っていても、監督が背を向けるとすぐ舌を出しつつ「会社流れて事務所が焼て、監督コレラで死ねばよい。」と田舎くさい節をつけて歌うのが、女工達のウップンを全部一人で吐き出しているかのように見えて痛快だった。

脱衣箱が隣り合っている故もあって、みさは何時となくしまに話しかけ、簡単に友達になっていた。しまは「うちは七人の家族で、働きに行く者が四人だから、毎朝はとてもやかましい。」などと話し、齢は十九だと言った。みさは同じ十九でも三つも四つも子供っぽいしまの気性を羨ましいと思うのだった。仕事が終ると一番先に女工部屋へ馳けて行き、風呂流しに積み重ねた湯桶の中から、木の新しいのを二つとって脱衣箱に入れ、みさが来る頃は、一つの湯桶に石鹸と手拭いを入れ、それを湯の中に浮かせて「山崎さんの桶は、あたいの箱の中にある」と、呶鳴るしまは、全く女工部屋でも珍らしい存在だった。

――苦労も何も知らぬげに年中唄をうたっているしまの姿

みさはまだ身体検査も受けていないしまに、日一日となついて行くと同時に、夜の潮田から遠去かって行った。そして仕事が終ると肌寒さを覚える十月の半ば、八月にみさと一緒に身体検査を受けに行った者の中には、穴のあいた指が膿んで手の甲が饅頭のようにはれ上り、爪さえも白い線が何本となくとおって反りかえり、会社が退けると健康保険医によって帰る者が五六人もあった。膿みはしないけれど、穴のあいた指に絆創膏を貼って働くみさは、古参の者に「うっちゃっといて、どんどん痛めなければ、一人前の堅い手にはなれないよ」と、何度となく教えられたが、どうしてもそんなむごい事は出来なかった。

二度目の給料は始めの二倍もあり、今度こそ――と意気込んでいたのも、家へ来て母に月給袋を渡した時、又々何も言えなくなっていた。（自分が働いても働かなくとも、

ぼろを下げて泣き事ばかりいう母も、自分が他家の娘のようになりふりに構わぬ事を一番喜んでいる）こう思うと、嬉しくもあり淋しくもあり、いらいらする気持ちをおさえようとしていらいらした。

或夜、みんなの寝静まった頃、そっと起き出で鋏で額際の髪を短く切った。すすけた小さい鏡にうつるみさの顔は切り上げた前髪の影に丸く、十六七ぐらいの若さに見え、白粉の気もない額に柔かな髪がフラフラしているのもモダンらしく、みさを満足させたが、次の瞬間切り落した毛を、手早く新聞紙に包んで誰にも見つからぬよう、鶴見川へ棄てに行く心は味気なかった。二枚の横櫛で、切ってない時のようにとめた彼女は、それからは寝るにも起きるにも前髪の事が気にかかり、父に知れたら（天秤棒をかついで米の一升買いをする家のガキがなんてザマだ）と叱り、生意気盛りの弟は「豚」と呼ぶかわりに（おしゃれっか、うぬの面は何だ）と罵るにきまっている。母だって「いけすかない」と、顔をそむけるであろうと思うと、早く髪が伸びて呉れれば良い。

けれど会社の仲間から「似合う」とか「良い」とか言われ、何時も他人の化粧するのを遠くから羨んでいた鏡の前に、前髪をうつすだけでも立つ事の出来るようになったのは嬉しかった。

四

友達のしまが、時々、暗い顔をして溜息をつくみさに、「どうしたのさ。心配事でもあるの？」と訊くと、みさはしまに縋りついて泣いてしまいたかった。（第一に病気も誰にも知らさず、こうして働いていること。第二に親が人並の服装をさせて呉れないこと）を、しまに話したかったが、第一は早く言えば自分勝手のようなものだし、第二は裏町生活に馴れた両親は、総て裏町らしい生活に安んじている。それを裏切って娘が「表通り式」の真似をすれば妙な反感から「いけすかない」で片附けるのも無理のない事だし、結局、私は悲しいと他人に訴えても、どんな理由で悲しいのか説明が出来ないみさは「ううん、なんでもない」そう言っては頭を振るのだった。

会社にいる時は前髪を下げ、家に帰る時は二つの横櫛で上手にかき上げてかくし、仕事台の上をガラガラ通る鉄のトロッコも窓から来る秋の風に、何となく冷えたもののように見え初める頃みさの軀には、また例年の病が目を覚ましていた。仕事が終ると何時もひだるかったものが、へんに、にぶく痛んで、桶に湯を汲む手首は、時折、針を突き刺されるような激痛を覚えた。痛みの中から、みさの思う事は矢張り人恋しく誰かに本当の心の奥底を知って貰い、みさだけが泣く事に一緒になって泣いて貰いたいという事

だった。女工達が「本当に仕事が楽だ」と、白いあせものの跡に塗った粉白粉が朝から晩まではげないでいる十一月、不安ながらみさに男の友達が出来て一部の人達から白い眼で見られるようになった。それは、すぐ後の乾燥場で働く職工で通称「オンナオトコ」で通っている佐久間常太郎という者で、背丈も高く、風采も職工らしくない程立派なのに何故か言葉の終りに「でしょう」「なのよ」の女語を使い、自分を「あたし」と言っていた。

みさの居る所は、腰巾着のように、しまがくっついているので、会社の昼休み中十分か五分の立話も、みんなしまが茶化して笑いの種にして仕舞うので、佐久間の本当の姿はわからなかったが、兎に角、彼は故郷の仙台を飛び出して、現在は潮田の真ン中で下宿住いをしている、とだけを知った。髪を伸ばそうとしている最中なのか、山あらしのように立つ毛を後ろ鉢巻でおさえ女のように紅い唇から「兄貴が故郷で百姓をしているからね、あたしがいなくても、うちじゃあ困るなんて事は絶対にないのよ」などの言葉が出ると、しまは口真似をしておかしがり、みさは暗い顔をして黙っていた。彼は作業開始のサイレンがなるまで「遊びにいらっしゃいね。」と何度も誘い、「誰も遊びに来る者がないから休みの日など活動へ行ったり、本を読んだりしてるの、でも此の頃の活動は三尺物といえば三尺物、堅物といえばそれらしくきまり切ってるでしょ。小説なんてものも、みんな無理にこじつけた苦しげなものばかりだし、本当くさくさしちゃってんの……」眉をひそめる彼に、みさは薄気味悪さと一緒に春風のように暖いものを感じて、或日「じゃ、今度の第三にしまちゃんと一緒に遊びに行くわ」と言ってしまった。

その時、みさは（今度こそ他人に淋しいと話せば共に泣いて貰えるのではないかしら）と思った。そして其の話も同性のしまには警戒と軽い蔑みをもって、口先だけは世間並に作っていたのに、つい最近知り合った佐久間が「異性だ」という魅力だけで、「遊びに行く」と、簡単に言った自分の心が恐しい気がした。

遊びに行く約束をしてからの佐久間は、急に馴れ馴れしくみさに話しかけ、昼食や終業時間のサイレンの時など、きっと原型打ち場近くに、みさとしまが連れ立って出て来るのを待つようになり、事務所と木工所、試験所の前を通って二筋のレールに沿った女工部屋の前まで、後になり先になりしてついて来た。すぐ隣の男工部屋の入口で、何と思ってか片手をヒラヒラさせて這入る佐久間は軽薄そのもののように見えて厭だったが、大勢の女工達の中でみさの後から、彼の真似をして「さようなら」を言うしまは可愛かった。

第三日曜の来るまで、みさはどうしても仕事が手につかず、チラチラと監督の冷たい眼鏡の前だけは人並みに働き、懸命に見えるようにスコップも使ったが、いなくなれば、唯一の人真似である前髪を気にしたり、ちょっと口をす

すぎに表へ出るにしても、首にかけた手拭いで顔中をこすり、隙があれば手早く眉に唾をつけるような真似もした。水道の近くで見る彼はたしかに美しく、紫色のランニングから出た肩から腕の白さが目に痛いようだった。みさは彼の「ね、ね」という言葉は頭痛がする程ムシが好かなかったが、後ろ鉢巻で働く彼の全体的な美しさが好きだった。つまりみさが顔や格構を気にするようになったのは、黙っている彼に女性としての好感をもって貰いたいからだった。

第三日曜日。しまは待ち合せの橋の袂に待っていた。みさは余りにも彼女が美しく着飾ったため、そうでなくともみすぼらしい自分がより以上に寒々としたものに見えやしないかと思うと、しまの金糸のぬいのした帯までねたましかった。

教えられた彼の家はすぐわかり、良い天気だというのに佐久間は窓に白いカーテンを下して待っていた。彼の部屋は四畳半に押入れがつき、片隅によせた机の上に、大衆小説全集という厚い本が二つ三つ積重なり、その傍に花のない小さい花瓶が置いてあった。群青の色も真新しい壁には、如何にも独身者らしく大きな木琴と細くたたんだ洋傘がかけられ、「さあどうぞ」と進めた坐蒲団も、とんちんかんなものだった。しまが無遠慮に「素人下宿の二階借りって危いもんだわ、階下に綺麗な娘さんがいるでしょ。」「故郷へ何故帰らないの？ あんたいくつよ？ え、二十六――まあお爺さんだ。」からかったり笑ったりするのに対して、彼は平常に似ず真面目そうな、しかも男っぽい口調で話していた。

みさは窓を開けて窓わくに頬杖をつき、ぼんやり表を眺めた。青空を横ぎる煙と、それを追う薄い煙、黒煙、黄色い煙、各会社から何台も出て来る茶色のトラック、人夫、そして自分達が休んでいる間も絶え間なく、もくもくと吐き出す窯業の煙。定時間、残業、居残り、夜業それぞれの受けもちの人々が入れ代り立ち代り、煤煙の下に真黒になって働き、年中休む暇なく大煙突から煙を吐き上げる工場会社、そして此の地帯の空は何時も疾風にのった雲が馳っているよう。「さあ、行かない？」しまにポンと肩をたたかれて、みさは何が何やらわからなかったけれど窓をしめ、珍しくも和服姿の佐久間の後から階段口へ向った。

本牧行きの電車に乗るとみさは今日、彼に同情して貰おう為に会った事を思い返した。けれど――バカらしくてもう言えない。否、そんな事を彼なんかにちっとも言わなくてよかったと思うとほっとした。病気になってからは一度も外出しなかったので、もう三年目近くなった今、珍しく乗った電車の動揺がシーソーのように楽しく、移りかわる車外の屋並を見るのも嬉しかった。トンネルを一つ越して、小港で不意に降り立つと、そこはもう工場地帯のような気がしなかった。「〇〇家ホテル」「〇王ホテル」のイルミネーションも呆けたように、強烈な牡丹色のカーテン

を半分しぼった二階から、不健康そうな黄色い顔を並べた女が何事か喋りながら時折甲高い笑声を立てた。佐久間は、しまといろいろ話をしながら、みさの方にも時々お体裁だけの話題を向ける。海岸近くに来ると、先ずみさは二人から離れて海を見に一人で歩いて行った。

すっきり晴れ渡った蒼空に冷え冷えした秋風がひょうひょうと鳴り、遠い沖、本牧岬附近に手操り船が働いているのか、数え切れぬ程の白帆が波間に鴎の羽を休めたように動かず、近くに大きな汽船が黄色い横線の入った煙突から薄煙を吐いて定泊し、其の向うに吃水線を出した船のさびついた船腹に、働くカンカン虫達の動きもはっきり見えた。長い防波堤は真昼の陽を弾いて白々と冷たく何処までも続き、海の水は真っ青、その波頭は真珠色に光り、みさが今まで感じた事もない潮風は沖の灯台辺りから太平洋の息吹きを運んで来る。「山崎さーん。」「山崎さーん。」二人の呼び声が風の間に間に聞えると、みさは漸く我に返って「なーにイ。」と、返事はしたが、ちょっと振り向いてみただけで、一歩も二人に近づかなかった。しまは手をメガホンにして「い、らっ、しゃ、い、よー。」しかしみさは頭を振った。「外人墓地へ行かない。」今度は佐久間が叫んだ。「早くいらっしゃい。」みさは二人が仲良く話し合っていたら自分というものは邪魔なんじゃないか……と、瞬間考え、(自分は此所に一日居よう)と思った。「どうしたのよ。」二人が近寄って来ても、みさは平気で海岸淵の古木の間から見えるトンガリ屋根に顔を向け「誰がお前達なんかと。——」と呟くのだった。

翌朝二人は、同時に会社の門をくぐって、笑いながら仲良く話をしていた。昼休みになると、しまはみさから離れて何処かへ行き、みさは一人でクスクス笑っていた。(昨日あれから強情を通して、一日中海岸で煤煙の混らない風を吸い、一人で雲を見ていた自分と「行かないんなら良いわ。」と立ち去った二人……そうして今朝、お早うの挨拶もせずに作業服に着替え「お早よう」と肩をたたくと漸く気付いたかのように「あら、オハヨ」と言ったしまはおかしかった。)みさは二人がどうかなってしまえば良いと思ったり、どうにもならなければ良いと思ったりし、僅か一日のうちに急によそよそしくなったしまに笑って日を送ったのだった。

ところが翌朝、事務所のそばの掲示板に「佐久間常太郎、内海しま、右の者職務怠慢の廉に依り解雇に処す」の文字がデカデカとして女工職工の眼をひきつけた。「黙って仕事をしろ。」と叱る監督が少し離れれば会社内はよるとさわると二人の噂でもち切り、みさは同僚たちの話から、「昨日の昼休みにひそひそ話をしていた。」「昨日、二人は一緒に帰って行った。」更に驚くべきことは「一昨日オデヲン座の同伴席にチャッカリしてた。」等ということを知り、「社内に彼氏と彼女がいたんじゃあ風紀が乱れるから、すぐちょん切られるのは当り前さ。」と古参女工から

きいた。みさは、何時もしまを憎んでいる古参女工が告したと感じると、いらぬ告口をした仲間が憎かったが、二人が馘首された事には（まー、よかった）というような安心しか起らず、二人に同情する気持ちは薬にしたくも出て来なかった。突然の事で、まだ二三の荷物も其のままになっているしまの脱衣箱から名札が外され、置き忘れた弁当箱が新聞紙に包んであったのを守衛が持って行ってしまい、暫くは、守衛室の棚にしまの弁当箱と、佐久間の手拭いが並んで、持ち主のとりに来るのを待っていたが、三日経っても再び二人は来ず、そのうち、二品も何所かへしまい込まれてしまった。

くだらない友達でもなんでもしまが居なくなった事は、一寸淋しく、彼女の使った脱衣箱は後から入った「田辺キヌエ」という平凡な女工の名札が打ちつけられ、みさの軀に暫く遠退いたような因果な病が、急激にやって来たのは十一月の末近く、四度目の月給袋を貰うのも間もない頃だった。

痛みは仕事をさせず、全身を駆け廻って息づく暇さえ与えない時があった。窯業へ入った時、八分どおり出来ていた川向うの工場は、もうすっかり出来上って、白い建物に、「月島機械製作所」の文字も黒々と映え、昼夜の間なく機械の響が川を渡って此の小さい漁村中に拡がり、舳を並べた漁船の向う側には油船が浮んで、薄い緑色に見えた川の面にギラギラ光る油が黒く紫色に浮び、棟割りの屋根にも向う岸の会社の煤煙が降り積って、窯業へ行く時通る原っぱも、又、工場か会社が建つのか赤土で埋め立てられた時、みさは不親切な健康保険医に通っては診断書の日数だけずつ何度も会社を休む日が続いた。保険医に「神経痛」と診断されて胸がふさがるように強い臭いのする水薬と、咽喉を通る時燃えるような散薬をのんで家に休んでいる間、みさは弟の「もう駄目なんだろう。ナグタ者、厄介者奴が――」と、又そろそろ始まり出した毒舌を黙って忍んだ。

痛くとも母に心配させまい為に、歯を喰いしばって息を止め、我慢していた。母が、「痛むんじゃないかい？顔色が悪い」と訊くと、「……なんでもない。」と、胡麻化すみさは、余程気を張っていなければ、涙が出そうで――それも母が優しければ優しい程、情なかった。みんなの居ない留守に、昔、すえた、ききもしない灸壺に墨をつけるみさは、藁一筋でも掴みたい思いで、（どうしても、もう一度人並の軀にならなくちゃあ――）と懸命だった。灸の山に線香の火がうつりそれがだんだんに下って、ついには黒い灰になり、フワフワと畳に一つ二つと散って行くのに、みさの若い足に熱いとも暖いとも感ぜず、一箇所に七度づつ灸点した跡が丸く黒く火傷になっているのが当然の事ながら不思議だった。余りよく休むので監督は「此の忙しいのに困るじゃないか。」と、病気など無視した口調で眉をよせ、主任は、「神経痛とかは、まだ治らんのか。今は耐

火煉瓦の需要が多い時期だから残業もして貰わなくちゃならん程に忙しいのに――。」とさもさも会社だけが大変で、女工の病気は片端から嘘ときめて、「あーん、わかったか」を並べてもみさは恐れ入るどころか（何イ言ってやんで）と、心中淋しくせせら笑い、口先だけは「はあ、はあ」と神妙らしく見せていた。

会社の門近く、夏から秋にかけて咲き乱れていた月見草も枯れ果てて、小山のように棄てられたガス殻をかきまわしてはコークスを拾いに来る山の神達も、一日一日に首に布を巻きつけたり頰かぶりをしたり、不格構に縫った印半纒の字が見えるモンペをつけたり、からっ風を避けるのにつとめる十二月。みさは此の会社で自分の軀が働けなくなった事に一人で見切りをつけ、誰にも相談なしで職業紹介所へ、再び新しい職を求めに行った。又、そうしなければならない程、弟の毒舌は聞き難くなっていた。同じ場所に同じついたてがあり、四ヵ月前と同じ給仕がいたけれど前に見た親切そうな頭の禿げた所員はいなかった。給仕に紙を渡されると、弟の事や自分の事を愚痴っては歎く母を考えて、「志望一」とある欄へ先ず「女工」と書いた文字も、ペンを握る手が気味悪く痙攣した為、一本の線が小さい波のようになって、立っている足が、崩折れそうに痛む。（こんな軀では何処の会社でも採用はすまい。お金は欲しいけれど、悪い軀を甲下と診た朝川医院だって神経痛と宣告する程に病勢がすすんでいるんだもの。）と、思い返し、女工を消して女中と書いた。会社にいる間だけ下げていた前髪も、家にいる時の方が多い故か上っているくせがつき、其の前髪も、下げては上瞼をつつく程のびて来ていた。

紙を差し出すと所員も「女中？　女中なのか？」と訊き返したくらい女中志願の者は尠なかったから、みさの希望する「給料はどうでも良い。ただ軀に楽な、家族のすくない家」はすぐに見付かった。しばらく仕事をしない為、穴のあいた指も綺麗になおって、窯業の女工並みに曲ってしまった小指とくすり指をのぞいた他は、普通の女らしい手になった。

紹介状を手に、教えられた花月園山の裏に、自分が希望した家の表札「白石寓」を見出した時みさは安心と不安で高鳴る胸をおさえて玄関の呼鈴を押していた。四人の家族が住むにしては広過ぎるその家の奥さんは、如何にも農大に勤める人に相応しい、五十を三つ四つ越した、品の良い襟元をキッチリ合せ、職業紹介所から来たと言うと、「まあ、昨日お頼みしたばかりですのに……。」と、喜んだ目は優しそうだった。「で、何時頃、来てくれるの？」「はあ――」とは言ったものの、みさはどぎまぎしていた。会社にはまだ辞めるともいってないし、家にも何の相談もしてない。冷汗の出る思いをして、とっさに「明後日から」と答えた。「まあ、そんなに早く？いいの？」嬉しそうな目で見つめられると辛かった。さあ、火鉢にあたりなさ

い、とまで言って呉れる奥さんに紹介状を渡すと、みさは出来るったけ丁寧に、明後日荷物を持って来ますからと長いお辞儀をして門を出た。

五

他人に接した事の尠いみさにも奥さんの和やかな微笑の中に、暖い人情と、たいして人を見下げない優しさがわかるような気がした。丈夫でありさえしたらば、あんな奥さんのいる家へ仕えた女中は幸福だろうと思うみさは、今これから女中に行く自分という者が別人のような気がした。

「漸く達者になったと思やあ、もう、ちょいちょい休むようになっちゃう。ほんの二三カ月、息がつけたと思えばもう病人だ。」壁一重の隣で、他人が嗤うのを承知しながらも、つい愚痴になる母の泣きぼくろも、白髪のふえた髪がかぶさってあくまでも哀れっぽい。「困ったもんだ。人間もああなったら屑だな」と、いまいましげに顔をそむける父のミミジロ肩は、天秤棒の重さに破れて、いくつものつぎが寒々と見え、「一そ、早く死んで呉れたら家の為になるのに」と、面と向って言う弟の服もボロボロになっていた。

　働いても働いても苦しい生活に病人――それが自分なんだ――みさは誰も恨んではならないと思った。ただ、みんなの運の悪い事を悲むばかりだった。白石の奥さんとの約束を明後日ときめたので家へ戻ると早速母に、奉公に行く事を告げ、病気のお前に女中なんか勤まるわけがないという母を、「だって働くんじゃないよ。まるで留守居番のようだし、それに、家だってたいして遠い所じゃないし――。」と、まるで嘘を言って安心させ、「新吉やお父ちゃんがあんな気だから、としも行かないお前に苦労させる。」とすぐ涙ぐむ母に、「なーに、家にいたって面白くないよ、働きに出りゃあ仲間がいるもの……。」と、朗らかに笑った底から、ジーンと熱くなって来る目を煤けた天井にそむけるみさは（本当に運の悪い自分の家）が情なくてたまらなかった。

　白石の家に行くのが明日に迫ると、新吉は会社へ行きがけに、「すぐ帰って来ないようにしろよ。会社は辞めた、奉公先からは追い出されたじゃあ世間体が悪いからな。」と、言った。つい二三日前まで持っていた弟への反抗心は不思議と出て来ず、そのかわり師走の朝、半道以上も遠い自動車会社まで、オーバーもなしで通う弟がいじらしかった。

　身のまわりの物をまとめて、母が買って呉れた、すげ出しの駒下駄も白石の家へ行ってから履こうと新聞紙に包み、辞表を出しに橋を渡ったのは、どんより曇った空に血のかたまりのような夕陽が花月園の山へ沈んで行く頃だった。月島機械製作所の火は鶴見川のゆるい流れにゆらゆらゆれて、鉄を切る青白い火がついたり消えたり水にうつっ

た。寒い風の中を窯業についたのは町に灯が灯いて間もない頃だった。守衛に「あたし、病気がひどくなって、とても仕事が出来ません。で、辞めさせて頂きたいんですが……。」オドオドして頼むと、彼は何度も頷いて、辞職届と印刷してある藁半紙を渡し、この間へ名を書いて認印を押して、と教えて呉れた。持って来た鉛筆で名前を書き、四文字の理由を書いて認印を押し、健康保険医からとり戻して来た保険証を添えて出すと、「今、事務所で積立て金を取るようにして来てやるから、こっちへ這入ってあたってな。寒いからなあ。」軍曹上りの落ちついた足どりで事務所の方へ歩いていく後姿をみると、みさは不覚にも涙を流した。

守衛室には腰掛けが二つあって、タタキの上に丸い煉炭火鉢があった。煉炭の十二の目が紫の焔を立てて、チンチン沸きかえっている大薬罐の底をなめ、大時計の針は五時半を指していた。六時十分前、守衛は貯金の通帳を持って「山崎さん。一円八十六銭だぞ。」と笑いながら戻って来た。「作業衣は？」「部屋に置いてあります。」「そうか。後で持って来といて呉れ。」「はい。」守衛室を出ると彼も後から出て、休みで赤が出ている「山崎みさ」の出勤札を外してポケットにしまった。

女工部屋へ来ると掃除番の婆さん女工がたった一人でポツネンと鏡の前に居睡りをしていた。ボーッと幅広いサイレンが隣の硝子会社から鳴り出すと、それにつづいてあちらこちらの会社から残業終りのサイレンが響き、同時にワーッという歓声を上げて昨日までの同僚がドヤドヤと女工部屋へ雪崩れ込み、大急ぎで湯に飛び込んだ。男工部屋からも残業の終った賑やかな話し声が湯気に乗って聞え、明るい電灯の下はしばらく若い声に弾んだ。

湯から上ると女工達は、作業衣と、監督に給与されたまま、まだ一度もおろさないボロ手や軍手を持って立っているみさに、先ず、「あんた辞すの？」と訊ねては、「よすんならボロ手頂戴よ。」「軍手もよう。」「此の頃、品不足で手が痛んで仕様がないの。」と口々に言う。こんなものを持って行っても、しようがないのだけど、みさは誰にもやらなかった。「いいわよ、意地悪。」「けちんぼね。」曲った指で化粧をして女工達は潮のひけるようにさっさと帰って行く。みさは又痛んで来た手足を（なんだ、こんな病気ぐらい）と吹き飛ばして歌でも唄いたかったが、それも出来ず（こんな軀で女中に行くなんて、何も知らない白石の奥さんと母ちゃんを欺くようなもんだ。けれど誰にも嘘は言わないで病気だからと家に坐っている事の出来ない自分という者――）を思い、自分の嘘が自分の良心を責める声を聞いた。気がつくと、誰もいなくなった部屋に掃除婦が湯から上って着物を着ているところだった。造船所の熔鉱炉が開いたのか、火事のようだ。見ると艶気の失せた掃除女の手袋の先がビリビリに破れている。女工部屋にたった一

人居残った者、それもなんとなく今の自分を慰めるように思えて、二つの軍手を彼女にやると、「まああ、ありがと、ございます」と何度も礼を言う。脱衣箱の名札を取り、作業衣と一緒に守衛に渡す仕事を終え、風呂場へ入って落し綱をひくと新しい軍手をはめて見ていた女が、あわてて、「あら、あたしがやりますよう、本当に済いません」と言う。

みさは明日の事を考えると、鉛のような重い心が渦をまいて、混乱したアタマの隅から、(考えたって仕方がない。なるようにしかなりゃしない)と、捨鉢な気持ちが起った。

白粉と垢に濁った湯は、落し口の所に渦巻いてコオーッと吸い込まれる音をたてて、ソーダー会社の方角から夜業開始のボーが自棄に大きく聞えて来た。

日本の活字

徳永直

一

活字の発明について私が関心をもつようになったのはいつごろからであったろう? 私は幼時から大人になるまで、永らく文選工や植字工としてはたらいていた。それをやめて小説など書くようになっても、やはり活字とは関係ある生活をしているのであるが、活字というものが誰によって発明されたのか、朝晩に活字のケッをつついていたときでさえ、殆んど考えたことがなかった。しいていうならばこれもすこし縁のとおい「舶来品」くらいに思っていた。ずッと海のむこうから、鉄砲や、蒸汽機関や、電気や、自動車と一緒に、潮のごとく流れこんできたもので、えらいことにはちがいないが、何となく借物のような気がしていた。それにもっと悪いことは、空気の偉大な効用は知っていてもかくべつ有難いとも思わぬような、恩沢に馴

れたものの漠然とした無関心さで過していたのである。

したがってドイツ人グウテンベルグや日本人本木昌造の名をおぼえたのは、ツイここ数年来のことである。それもどういう動機でグウテンベルグや昌造に関心をもちはじめたか、自分でもハッキリわからない。多少こじつけを加えて云うならば、著述をするようになってからは、人間の世界に言葉が出来、言葉を表現する文字が出来、その文字を何らかに記録して、多数の他人と意志を疏通したり、後世にまで己れの意見をつたえたりするようになったことが、どんなに大したことであるかということを、いくらかでも身に沁みるようになったせいかと思われる。

あるとき、私は上野の美術館に「日本文化史展」を観に行った。昭和十五年五月であるが、朝日新聞社の主催であった。全国から国宝級の美術品があつめられているということもまたとない機会であったし、それに新聞の宣伝によると、幕府時代にオランダからある大名に贈られたダルマ型の印刷機が陳列されてあるということも興味があったのである。ところが会場へ行ってみると、貧血症の私はたちまち疲れてしまった。混雑もしていたが、出品があまりに厖大で、まるで予備知識のない人間にはめまぐるしくて、つまり何を見たんだかサッパリわからない。

教師に引率された中学生や女学生、地方から上京してきた団体なども沢山あって、とても一つの陳列品のまえに足をとめるなどできない。幾つかの室を押しこくられ押しこくられ、やっと階下へおりて特別室との間にある休憩場までたどりついたときには、もうボーッとなっていた。しかしあとになってそのとき残った印象を纏めてみると、伴大納言絵詞とか、鳥羽僧正の絵とか、狩野派の絵とか、いろんな有名な日本絵のある室を過ぎて幾室めにか陳列されてあった浅井忠の「収獲」とか、高橋由一という人の「鮭」などいう絵のまえにたったときの何かしらホーッとなった気持と、いま一つは滝沢馬琴の「八犬伝稿本」を観たときのある感動であった。もちろん私に「収獲」や「鮭」の絵画としての佳さ加減を他と比較したりする力はないのだから、ホーッとさせたもののうちには、絵画自体のうちに何かテクニック以外のものがあるのであろうか？　「八犬伝稿本」は二頁見開きになって、刷り上りの同頁とならべて、背のひくい硝子箱のなかに拡げてあった。私はガンバッて背後からおしてくる人波を背中でささえたつもりだが、あれでも正味は一二分くらいだったろう。稿本は頁のまわりに朱色の子持枠がひいてあり、一方の頁の下部には小姓風の若侍が、一方の頁の上部にはながい袂で顔をかくした、頭をかんざしでいっぱいに飾っている姫様の絵があって、一つの情景が釣合よく描かれている。文字はその絵と絵の間をうずめているが、つまり馬琴は文章と絵を一緒に描いたばかりでなく、同時に製版の指定もやっている。出来上った本と見比べても殆んどちがっていない。昔の小説家は自分で絵を描き、文章をつづり、子持枠までつけ

て、己れのイメージをこんな具体的な形で、たのしく描いたのであろう。
　私は版木をさがしてみたが見当らなかった。稿本が出来上ると、版下屋が版下を描き、版木屋が版木を彫り、やがて雙紙などでみる、袂を手拭で結えた丁髷親爺の「すりて」が、一枚づつ丹念に「ばれん」でこすったのであろう。私は姫様と若侍の絵の配置が、今日の凸版や写真網版でする配置の趣向と同じであるのにおどろいていた。そして咄嗟の感じではあるが「伴大納言絵詞」などをロマンのはじまりとすると「八犬伝稿本」でも、まだ絵と文は確然と分離していないと思った。文字は独立しておらず、版木に彫られるときは絵も同じであったろう。「伴大納言絵詞」と「八犬伝稿本」と、千年の歳月を距てて、形からみた日本ロマンの伝統というものを考えることは、印刷工であった私には興味があった。それに「大納言」をはじめ第一室にあった幾つかの絵詞類は、一枚の紙がすべてである。著者であり、印刷者であり、出版者であった。「八犬伝」ではそれに版木が一枚加わったことで、もはやロマンの性格からしてちがってきているようであったが、しかしさらにそれを今日の複雑な印刷術の発展にまでおよぼしてみると、じつにはるかな、はるかな気がするのである。それは「八犬伝」と「大納言」を距てている千年の歳月よりももっとおい気がした。何よりも今日では、文字は絵を離れて独立しているということだった。

特別室の入口には「印刷文化の歴史」と書いた紙が貼ってあって、室のテーマを示してあった。最初の方は朝日新聞が創刊当時使用したという由緒書のある、古風な美濃判型ヘンドプレスとか、半紙型ハンドフートなどの実物が陳列してあって、次には写真で菊八頁の足踏式ロールとか、動力式四六全判のロールなどが年代順に示してある。それからは一挙にマリノン式輪転機とか、高速度朝日式輪転機とか、めくらむばかりの急速な印刷機の成長が観衆をおどろかせていた。殊に実験中の写真電送機のまわりはいっぱいの人だかりで、部屋中の人気をさらっていた。
　しかし「印刷文化の歴史」とはいっても、この室はつまり明治以後の印刷術であった。室のうちをボンヤリ見廻しながら、私の頭では「八犬伝稿本」のばれん刷り印刷術からここに至る、その中がどっかで途切れている。ハンドプレスや足踏ロールに電動機が加わったことも、たしかに一つの革命的発展であるが、しかしばれん刷りからハンドプレスに、即ち機械力に変ったということは、もっと、もっと大変なことに違いないが、その道行きが私には解せないのであった。
　そのうち私は、フト足もとに思いもかけずなつかしいものをめっけてびっくりした。そこは人気の乏しい室の片隅で、古風な、それは朝日新聞が創刊当時使用したというのよりもっと古風なハンドプレスが、誰一人観てくれるものもなく、ころがされてあった。不恰好に大きく彎曲した二

本の支柱も、ハンドの「握り」も、支えのついた一本レールも、みんな赤く錆びついている。私はわれ知らずそばへ寄っていって、彎曲した支柱にさわりながら「おお、お前はまたどうしてこんなところにいたのか」と、心のうちで呟いたほどである。

何十年になるだろう？　私はこの機械と共にはたらいていたのである。その頃十二歳だったから、もう三十年を超える。私はハンドの「握り」に手をかけてから「手を触れるべからず」という「札」に気がついてひっこめた。ハンドの根元、すなわち圧搾盤をおしさげる胴の形も今様の蛇腹の「ギヤ」ではなくて、太鼓型の、水車風に廻転がすすむにつれて釘で止める式のものだった。この一本レールに足をふんがけて、ハンドへ雙手をかけて、踏んぞり踏んぞり、一日に何百回何千回をくりかえしたことだろう。この赤錆びたハンドめは、私の幼い掌を豆だらけにし、いつも御機嫌のわるい圧搾盤めは、どんなに工夫しても右肩だけを強くおとす癖をもっていて、刷り物をムラにしては、兄弟子たちに幾度インクベラを叩きつけられたか知らない。もちろん御機嫌のいいときもあったわけで、いそがしい年末の徹夜業のときなぞは、私はなかば眠りこけて、このハンドにブラさがっていたようなものだ。

それは昔の幼友達であった。しかしまるい支柱を撫でながらフトむこうの壁の貼紙を読んだとき、またびっくりした。貼紙によれば、これが宣伝にあった、幕府時代にオランダからある大名に献上されたダルマ型ハンドプレスということだった。私は指を折って数えてみた。十二歳は明治四十三年である。すこし年代が距りすぎている気がするが、もちろんこのオランダ渡りのハンドプレスそのものが、三十年前九州の片田舎で私の使っていた機械ではあるまい。しかし電動機が九州一円にも普及したのは、もう大正になってからだから、このオランダ渡りはその見本となって、日本でも製作され、同じ型のものが九州の片田舎では何十年も使用されていたのであろうか。

私は偶然ながら昔の友達に逢えた喜びのほかに、印刷機械の歴史を四五十年遡ることが出来たのを覚えながら、その古風なダルマ型プレスのそばに、しばらくはたっていた。そして頭の中では、一方では「伴大納言絵詞」から「八犬伝稿本」までまっすぐにきて、また片方では高速度輪転機や動力式ロールやダルマ型プレスという順に、明治のむこうまで遡ることが出来ながら、たちまちにしてオランダというとんでもないところへ逸れていってしまうのだった。

眼をうつすと、片方の壁には、等身大の文撰工たちが、てんでに文撰箱や原稿を握って、活字ケースにむかいあいながら作業している、製版工場の大きな写真が貼ってあった。写真の中の文撰工たちは霜降り小倉の制服を着て、靴を穿いて、朝日のマークのはいった作業帽をかぶっている。私たちが唐桟の素袷に平ぐけの帯しめて、豆しぼりの

手拭など頸にまいて作業していたのに比べると、ずいぶんちがう。しかしケースの配置も、作業順序も、つまり中身は昔のままだった。しいていうならば、活字のポイント制がもっと厳密になり、紙型を沢山とるようになったために、地金の硬度が強化されているくらいのことであろう。

そしてここでも、木版と鉛活字との間の距りがつよくでてくるのだった。それにダルマ型ハンドプレスがオランダから渡ってきたというのはそのままのみこめるが「活字も外国からきたのだろう」では済まないものがあるように思えた。たとえば電車も自動車も蒸汽船も外国から来た。それは舶来のままで、日本の道路を走り、日本海を走ったが、しかし活字はそういうわけにはゆかぬ。字体もちがう。文字の数もちがう。外国の書物と日本の書物を比べても、製版の形式もちがうのがわかる。つまり電車は外国で作ったものでも、日本のレールを走ることが出来るが、活字はすこしちがうのだ。

誰が、日本の活字を創ったろう？　どういう風にして創ったのだろう？　私は会場を出て寛永寺の坂を広小路の方へくだりながら、そんなことを考えた。プレスやロールはオランダからでも真ッすぐにこられる。しかし活字は、外国からきたにしても、きっと日本的な道行があるにちがいない。誰が日本の活字を、どういう風にして創ったか？　それがわかれば「伴大納言絵詞」から「八犬伝稿本」から近代小説まで、つまり日本印刷術の伝統が真ッすぐにつながろうというものだ。

二

私はときおり上野の帝国図書館や、九段下の大橋図書館に通って、印刷に関する文献を読み漁った。そして印刷に関する書物では、大橋図書館にくらべると、やはり上野の図書館の方がはるかに豊富であった。

私はそこで「世界印刷年表」とか、「印刷局五十年史」とか、「南蛮広記」とか、「印刷文明史」とか、「世界印刷通史」とか、「現代印刷術」とか、「古活字版之研究」とかいった書物を読んだ。そのほか明治末期から大正へかけて、印刷文化の大衆化につれて印刷屋を開業しようとする人のための手引きといった、ごく通俗な書物にもぶっかったが、名前をおぼえているような本はたいてい立派なものだった。なかでも「古活字版之研究」や「印刷文明史」や「世界印刷通史」などは、量的に厖大なばかりでなく、世間からはあまり顧みられない特殊な研究の一テーマのために、自分の生涯を捧げつくしても尚足れりとしないようなきびしさがあって、私は圧倒される気持がした。

しかし私のような入口も出口もわからない初心者のつねで、それらの書物を忠実に読んだわけでもコナしたわけでもない。その著者に対しては申訳ないような気儘な読み方もする。目次をひろげて面白そうなのを飛び読みしたり、

それかと思うと熱心に書き抜きしたり、ある書物では、四千年前バビロア国のバビロア人が、粘土の上に文字を書いた。学校があって、学校の門は粘土の山で出来ている、生徒たちは登校すると、てんでに門の粘土をくづしとり、一日書いたりくずしたりして、おわるとその粘土で、門の山を築いて帰っていったという話を、著者の想像らしい挿画と共に面白く記憶にのこした。また別の書物でバビロアだかどこだかの女王が、自分の伝記みたいなものを粘土に書いて瓦に焼いたものが四千年後の今日発見されたという文章が、つまり私には「紙」以前に何に印刷されたかということで興味があった。やはり西洋歴史の「貝殻追放」なども、貝殻に文字を書いた歴史であり、その後は牛や羊の皮に文字を書いて、一巻の書物は今日の呉服店のように大きな丸束にして書物の値段札がブラさげてあったという。支那の畢昇が粘土で活字を作ったのは、グウテンベルグに先だつこと五百年だが、日本の陀羅尼経、天平八年法隆寺の印刷物はまたそれに先だつ二百八十年といったようなこと、その陀羅尼経の原版が木であったか銅であったかという詮議を、著者と共にボンヤリ挿画を眺めていたりすると、なかなか印刷の歴史も茫洋としていて、いつになったら日本の木版から活字にうつる過渡期の伝統が理解できるのかわからなかった。

もちろん独逸人ヨハン・グウテンベルグの名は最初におぼえた。美しい挿画があって、グウテンベルグがその協力者二人と一緒に、彼の作った活字の最初の校正刷りを眺めている感激的な場面である。そばに所謂亀の子文字の三十二行バイブルの写真があり、西暦千四百四十七年とある。西洋印刷術はまず独逸に始まって、フランスからイギリスへ、イギリスからアメリカへ、また一方ではオランダやイタリーやロシヤへ、十五世紀から十六世紀へかけて西半球を拡がっていった経路もおぼえた。そして同じ千六百年初頭、即ち天正、文禄、慶長の頃、ポルトガルの宣教師たちははるばる太平洋を越えて、肥前長崎に西洋印刷術を伝えている。所謂切支丹版のことで、これは「南蛮広記」も「印刷文明史」も「古活字版之研究」も、力をこめて書いている。

印刷機はもちろん西洋活字も「鋳造機」さえ渡来していると「南蛮広記」は書いている。「古活字版之研究」はたくさんの切支丹版を写真で紹介している。殊にローマ字綴の「太平記」の印刷は、私のような経験者からみてもおどろくほど立派であった。しかし信長、秀吉、家康に至る日本の政治的事情は、西洋印刷術を島原半島の加津佐から天草に逐い、天草から長崎に逐いついには長崎から国外に斥けて以後、徳川三百年間はその後を絶った。「印刷文明史」の著者は言葉をはげまして次の如く書いている。「若し日本において鎖国の令出でざりしならば、我国の洋式印刷術は豊臣氏の晩年より徳川氏の初期にかけて、既に隆盛をきわめしならん」

ところが読者の私には、切支丹版について三書三著者がそれほど力説してもまだ強くは感じないのであった。肥前加津佐に渡来した印刷術が滅亡してから後、三百年の間、「蘭学事始」をめぐる人々や、その他沢山の日本の学者たちが、一方の欄はアルハベットの活字印刷で、一方の欄は毛筆の愚書きでオランダの辞書を作ったような苦心を知らないし、林子平が「海国兵談」の版木を生命より大事に抱え歩いた必然さを連関して考えることが出来なかった。大鳥圭介が鉛の鉄砲玉に文字を彫刻したとか、わけても本木昌造が、刀の目釘の象嵌に鉛を流しこんで、今日の活字字母の啓示を得たというような、封建三百年の跛行的な日本文化の運命を、それこそ自分の背中にのせてウンショ、ウンショと搬んだような、じつに数多くのすぐれた人々の苦心が、文明開化の明治時代に生れあわせた私には、身に沁みてはわからぬからであったろう。

帝国図書館の特別閲覧室は、夏はまだよかったが、冬はスチームがとおらぬので寒かった。図書館にゆくときはなるべく早く家を出て、閲覧室の陽当りのよい窓ぎわに椅子をとろうと心掛けても、いつも常連に先を越されてしまう。却って陽ざしが辷ってしまった正午頃になっておちついてくるが、そんなときふッと眼をあげて窓外をみると妙な気分になることがある。風に揺いでいる裸樹の梢を越えて、鈍い灰色の雲の中から飛行機の爆音が間断なく降っていた。読んでいる書物の時代や空気から一種の錯覚をおこして、いま自分たちが支那事変や世界大戦の裡にあることを忘れていることがある。そして室の中に眼を戻すと、机の上に背中をまるくした人々が咳一つしないで、昨日も今日も同じ後ろ姿をみせているのが、何か不審に思えるようなことがあった。

また図書館の食堂は、私の知るかぎり東京の図書館食堂で一等貧弱だと思えた。貧弱はかまわぬが、場末の安食堂のような乱暴さに加えて、おかしな官僚ぶりをもっていた。時節柄コーヒーもうどんもなかったり、あるときはお菓子だけあって飯がなかったりするのは仕方のないことであるが、

「お菜だけですよ、いいですかア。」

カウンターにいる女給は拳の腹で出納器の釦を叩きながら怒った声でいうのであった。しかし私の関心はそれよりも食堂に入ってくる人々の容子が、町の食堂なぞでみるそれとずいぶん異っていることである。学生だろうと紳士だろうとに拘らず、カウンターの突慳貪な声にも、まるで叱られているみたいに静かにしていることだった。

あるとき割箸の屑で燃しているストーブの傍で、私たちは三十分すると出来るという飯を待っていたが、三十分たっても却々飯は出来ない。私はしだいに苛々してきたが、やがて仏頂面しているのは自分一人だと気がついてきた。汚れたテーブルの前に坐っている学生も、さむいたたきの隅で凍える靴の爪先をコツコツやっている紳士も、みんな

黙念としている。同じテーブルに坐っている二重廻しを着た男は特別室の顔馴染だったが、醬油のこぼれたテーブルを鼻紙で拭いて、うすい和綴の本を拡げていた。白髪の雑った口髭も頭髪もだいぶのびている。時折眼をあげて、女給たちの喋っている料理場の窓の方を見るが、またゆっくりとその虫の喰った木版本の上へ戻ってくる。気がつくとその男がストーブの方へ持ちあげている竹の皮草履をはいた足のズボンには穴があき、足袋は手拵らしく不恰好に白糸で縫ってあった。

私は少し恥かしく思った。読書人も十分に戦争の中にいるのだった。彼等は爆弾が頭上におちてきても、自若として自分の研究を遂行するために、書物から眼を離さぬだけの覚悟はもっていると思われた。

ときたまの図書館通いであったが、いつかその空気に馴染んでゆくうち、おぼろげながら日本印刷術の輪廓がわかってきた。ロンドンの大英博物館に世界最古の印刷物として保管されているという陀羅尼経以来、日本の印刷原版は木ないし銅の一枚板であった。もちろん唐や天竺の坊さんと一緒にきた印刷術であって、量的にもいかにわずかであったかは「古活字版之研究」にある附図、室町末期の日本全土における印刷物の分布図をみても明らかだ。何々の国何々郡何々寺所蔵何々経何部といったぐあいである。日本印刷術中興の祖は、秀吉の朝鮮征伐、銅活字の土産物に始まっていて、切支丹を長崎から逐った同じ家康が、その活字を模倣してほぼ同数の銅活字を鋳造彫刻している。それによる最初の開板は「古文孝経」と謂われるが、そのくだりは私にとって特に興味があった。

勅令によって六条有広、西洞院時慶の両公卿は三ヵ月に亘り、毎日禁裡の御湯殿近くの板の間で、活字を拾い、ばれんで印刷する仕事を奉仕したことが、西洞院の日記にある。写真でみると、その活字ケースは今日のそれとまるで異い、字画の似たようなものを寄せ集めたに過ぎぬのだから、長い袂を背中にくくしあげた二人の公卿さまが、どんなに苦心して一本ずつ探し拾ったか目にみえるようで、それが日本文撰工の元祖であると思い、なつかしく尊い気がするのであった。

世に謂う「一字板」の言葉のいわれもこの活字から始まったことを会得した。銅活字はやがて木活字になり、日本の印刷術はしだいに大衆化したが、徳川の中期に近づくと、こんどは木活字が再び木版の再興に圧されてきた、と同書の著者は書いている。詳しい原因は私に納得できぬが、幼少からの経験からいっても、木活字は材が黄楊にしろ桜にしろ、屈りやすく高低が狂いやすい。印刷機がプレスでなくばれんであれば尚さら汚かったにちがいない。而も再び木版に代られて、室町以前とは比較にならぬ印刷文化の隆盛をみたのは、印刷技術の進歩というよりはむしろ当時の社会的事情にあったのだろうか。

私の目的はしだいに近づいていた。徳川末期になって海

外との折衝が頻繁になり、医術にしろ鉄砲にしろ電気にしろ、それらが武士や町人の間に研究され実践されるに従って、木版や木活字は何とか改良されねばならなかったにちがいない。三百年前肥前長崎から逐われた「活字鋳造機」のことを思いだすよすがもなかった人々は、たとい蘭書によってその片貌は察し得ても、グウテンベルグと同じような最初からの辛苦をかさねたことであろう。やがて大鳥圭介による鉛の彫刻活字が工夫され、「斯氏薬城典型」など、いわゆる幕府の「開成所版」なるものが出来た。写真で見ても、従来の木活版に比べると同日の比ではない。

しかし私のような印刷工から考えると、近代活字の重要性は彫刻しないことにある。字母によって同一のものが無制限に生産されることにある。そして本木昌造はそれを作ったのである。全然の発明とは云えないまでも、日本流に完成したのである。凡ゆる日本印刷術の歴史家たちもひとしくそれを認めている。彼等は本木を近代日本印刷術の「鼻祖」といい「始祖」と書いている。

私は本木の写真を飽かず眺めた。五つ紋の羽織を着た、白髪の総髪で、鼻のたかい眼のきれいな、痩せた男である。刀をさしているかどうか上半身だけだからわからぬが、どの著書でも同一の写真であった。それに私のやや不満なのは、この近代活字術の始祖・日本のグウテンベルグとも謂わるべき人についての記述は、どの著書でも二三頁であって、どの文章でも出典が同じらしく、幾冊読んでも新しいものを加えることが出来ないことだった。

本木昌造についてもっと知りたかった。西郷隆盛や吉田松陰について知れるがごとく知りたい。私は肝腎のところへいって物足りない気がした。勿論研究などというものので、新事実を一つ加えるなどどんなに大事業であるかは察することが出来る。しかし多くの著者は本木の活字完成を印刷歴史の一齣としている傾向があった。或は初心者の独断か知れぬが、本木の完成あってこそ、日本の過去の印刷術を語ることが出来る、といった程の大きな峯ではないかと、ひとりで不満に思うのだった。

三

昭和十六年の夏になって、ある日H君という若い人が訪ねてきた。会うのは始めてだが、私がいつか書いた印刷文献に関する随筆が縁になって、「本邦活版開拓者の苦心」という書物を送ってくれ、二三度文通したことがある。H君は関西の人だが、最近上京して下谷方面の印刷工場で植字工をしながら「本木昌造伝」を小説風に書きたいために、文献をさがしているという人だった。さっぱりした白麻の詰襟服を着て、この職業特有の猫背で、痩せて、浅ぐろい顔である。

「あなたも昌造伝を書くんですか？」

せっかちと見えて、坐ると詰襟の釦をはずしながら、す

ぐ云った。
「いやア、そんなわけでも。」
私はわらいながら答えた。実際私にはまだかくべつな目的はなかった。第一本木昌造について殆んど知らないのである。
「いえ、本木伝はみな似たり寄ったりで、詳しいものはないようですよ。だからネ、ぼくはあの時代の他の文献から、外廓的というか、そんな風に探してるんですよ、え。」
また詰襟の釦を弄くりながらH君はゴンチャロフの「日本渡航記」とか「日本艦船史」とか「川路日記」とかをあげた。「日本渡航記」はロシヤ使節プーチャチンの長崎来航で、いわゆる長崎談判、この文章のうちに通詞として「昌造」という名が二度出てくるとか、同じプーチャチンの下田談判には昌造がもっと活躍しているから、日本側の立役者川路聖謨の日記をよめば、彼の事蹟が少しは出てくると思うが、この文献はまだ読む機会を得ないとか、「日本艦船史」は元来製鉄造船の先覚でもあった本木の時代を歴史的に知るに好都合とか、べつに「本木伝」を書く気はなくても、H君の話は興味があった。
「あなたは三谷幸吉という人を知っていますか?」
自分の話に一区切つけてからH君がいった。
「ああ、百科辞典の本木伝に引用されてる人ですネ。」
私はそれだけしか知らないので、そう答えた。するとH君はいくらか不満げに「ええ」とうなずいて、また云った。
「本木研究ではこの人が代表的だそうですよ、ぼくもつてがなくて会ったことはないんですがネ、そら、この本も実際の著者は三谷氏なんだそうですよ。」
H君が扇子でおさえたのは、私がいまH君に返そうと思って、膝の上においていた「本邦活版開拓者の苦心」であった。
「ヘエ、でも署名がちがうじゃないの?」
四六判の小さい書物は津田という人の著書になっている。
「そうですよ、津田という篤志なんで、いわばパトロンですね、文章を綴った人も三谷氏じゃない。三谷氏はこの中にある沢山の開拓者たちの遺蹟を足で探しあるいた人だそうですよ。」
「ホウ!」
と、私は心から云った。三谷ってどんな人か知らないが、この本を最初よんだときから大変な仕事だナと感心していた。それには本木や本木の協力者平野富二の略伝もいれてあったが、その他数十人の近代印刷術のために苦闘した人々の事蹟が、長短いろいろではあるが調べられてあった。加藤復重郎という日本最初の鉛版師、つまり紙型をとって活字面を鉛の一枚板に再製する工程であるが、紙型は雁皮紙を数枚あわせれば凹凸が鮮明になることや、スペースと活字面の高低にボール紙を千切って加減をとればいい

ということや、簡単のようなことでも、それを発見するまでのさまざまの悲喜劇を織りこんだ苦心の径路は、たとい印刷業関係者でないものでも身うちの緊きしまる思いがする。今日の活字の字形を書いた竹口芳五郎という人は、平野富二に見出されるまで、銀座街頭で名札を書いていたという話や、その他最初のルラーの研究者境賢治とか、今日の活字ケースを創った山元利吉という人の苦心談といったもの、複雑な近代日本の印刷術が完成するまでの、じつに沢山の有名無名の発明者、改良者の苦心が描かれてあったが、私がこの書物の著者に感服しているのは、多くはもはや故人となっている、それらの人々を探しあるいたこと、殊に発明者とか改良者とかいう人が、多くは産をなしたわけではないので、窮乏離散してしまった遺族をたずねあいて聴き取ったりする仕事も、並大抵ではなかったろうということであった。

「どうです、いちど三谷氏を訪ねてみようじゃありませんか。」

H君は熱心であった。

「住所はわかっています。つてはなくてもさきに手紙を出しとけば会ってくれるでしょうから、二人で行ってみませんか。」

「いいね、行きましょう。」

私もよろこんで答えた。

それから数日経つとH君から手紙がきた。それによると三谷氏は入院中で、何病気だかわからぬが面会謝絶ゆえ、いましばらく見合せようということだった。いくらか失望したが、また数日経つと、こんどは速達が来た。三谷氏は胃癌の大手術で経過が悪いそうだ、待っていても望みないから、話は出来なくとも見舞だけでもゆこうじゃないか、ということである。早速応諾の返辞をやると、折返し済生会病院だから、明日午後一時省線渋谷駅ホームで逢おうと書いてきた。

八月の中旬でひどく暑い日だった。私たちは渋谷で一緒になって、五反田駅で降り、それから市電で赤羽橋まで行った。停留場の近所で、見舞のしるしを買おうと思って花屋へ入ったとき、私とH君は顔を見合せるのだった。

「いくつくらいの人だろう?」

「さア、いずれ年輩でしょうネ。」

まっしろな、山百合よりも清楚な感じで、もっと匂いの淡い花を五六輪買った。花屋の内儀さんに訊くと、これがいいさんざしというのだった。

「質問さしてもらえるようだと有難いがなア、しかし悪いかしら?」

みちみちH君は手帖をめくってみせながらそんなことをいう。手帖には以前から準備していたものらしく「昌造入獄の真の原因は何なりや」などといったことが二、三箇条書になっている。私にも返辞はできなかった。

受付で訊くと病室はすぐわかった。待合室の広間をぬけ

ると最初の廊下を左に折れた。窓はみんな開放しになっていて、ベットが目白押しにならんだ広い病室から患者たちの苦しい呼吸づかいが聞える。風がない日で、廊下には附添の婆さんなぞの、アッパッパの裾を太股までたくしあげた、けだるい風体でしゃがんでいるのや、バケツをさげて立話しているステテコのズボンからも毛脛をむきだしたおやじさんやら、そんな附添人たちの庶民的風体からしてもこの病院の性質がわかる。「三谷幸吉」という名札は、廊下の一番はしの入口に他の名札と並んでいたが、先に立っているH君がどちらのベッドだかわからず入りそびれていると、廊下にしゃがんでいた内儀さん風の四十あまりの人が、襷をはずしながら近寄ってきた。

「どちらさんでしょうか。」

小柄で、看護やつれをした顔に、洋服を着た人間なぞの訪問に馴れない人のオドオドした表情がある。H君が名刺を出して、前に手紙をあげた者だというと、「はあ、はあ」と恐縮したように、

「三谷の家内でございます。」

とお辞儀した。

私もお辞儀して名刺を出すと、内儀さん風の人は、それをもって内部へはいっていったが、ツイ鼻さきの衝立のきわのベッドにあおのいている、もうだいぶ地が透けてみえる白髪の雑った頭が、当の三谷氏だ、とこちらでも見当がついた。

「こちらへお入んなさいと云え。」

あおのいたまま二枚の名刺を支えている痩せた手首はふるえているのに、案外大きな声であった。

「大丈夫なんですか？」

廊下へ出てきた細君にH君がたずねている。

「ええ、きょうはどうしたんですかネ、とても元気ですの。」

襷を弄りながら、

「それにもう、どっちにしたって同じだって、お医者さんも――」

と話しかけているのに、ベッドからかんしょうな大声がつつぬけてくる。

「何をグズグズしとる、早く、はいんなさいと云わんか。」

ハイハイ、と細君はそっちへ答えておきながらも、見ず知らずの人間にも頼るようなオロオロした調子であった。

「だからもう勝手にさしとくんですよ。ええ、あれで本人だって、あきらめてはいるようですけれど――」

ベッドの傍へ近づくと臭気が鼻を衝くようだった。ひろげた腹部はガーゼで蔽ってあって、便はみんなその切開口から出るのだそうである。三谷氏は痩せて萎びきっているが、大男でベッドから両足がハミでるくらい。さっきから名刺をもったままの手をふるわせながら、首をこっちへ捻じむけて、顔だけでも起そうとする容子だった。

「バカヤロ、枕をとるんだ」

口ぎたなく罵りつける言葉は激しい。そして泳ぐように手をふりながら、眼をH君の肩ごしに私の顔へまっすぐにそそいで、
「よくきてくれたなァ。」
と云った。吐き出すように言葉の尻はかすれながら、皺んだ眼尻にポタポタと涙がつたわっている。
「ほんとによくきてくれた。」
さっきからの泳ぐような手ぶりは握手を求めているのだと気がついたので、慌てて私は応じたものの、すこしびっくりしていた。重態の病人だからはじめての人間にもこんなに昻奮するのかと思ったのである。
しかし三谷氏は握った手をなかなかはなさないで、しげしげと私の顔を見入るのである。三谷氏はふと鼻柱と、くせのある幅広な唇許をもっていて、神経質でいっこくな風貌があった。
「しばらくだったなァ。」
呼吸をつぎつぎなつかしそうに云う。
「君も、年をとったじゃないか、だいぶ白髪がある――」
ボンヤリな私も不審になってきたが、この三谷氏と、どこで逢ったことがあるだろう？　困ってそれをただそうとすると、とたんに相手は手を離してしまった。
「なんだ、君ァ知らずにきたのか。」
まだ涙のつたわっている顔に、無遠慮に不機嫌な表情がうかんだ。
「ホラ、あすこで、共同印刷で――」
私は思わず「ああ」と声をあげた。これはまた何ということだ。私は本木研究家としての三谷氏だけを考えていたのだ。私はも一度声をあげた。
「ああ、三谷君でしたか――」

四

三谷氏と私はしばらく顔を見合せていた。病人は細君に涙を拭いて貰いながら、くるしい呼吸づかいだが、満足気であった。
大震災当時のことだから二十年ちかくもなろうか。共同印刷会社の第一製版工場で、私も三谷氏も同じ植字工だったのである。その当座、私は自分の属していたポイント科の工場がつぶれてしまって、他の植字工と一緒に第一工場へ廻されてきたので、三谷氏がその工場ではすでに、古参だったかどうかは知らない。それに三谷氏は一緒になると半年くらいでやめて他の会社へいったので、とくに親しかったというわけでもないが、仕事台がちょうどむかいあいになっていた。普通だと雙方のケース架の背でさえぎられてしまうのだが、大男の三谷氏はケース架の上に首だけでていた。いつも私は「オイ」と誰かが自分をよぶので、何気なくあたりを見廻していると、とんでもない頭の上から彼のながい顔がのぞいていて、びっくりさせられたりして

いたことを憶いだす。
　三谷氏がその頃から本木昌造の事蹟について研究していたかどうかは知らなかった。私たちより一時代先輩の職工だったが、職人気質なところはあまりなくて、いつも肩を聳やかしているような、何事にも一異説をたてねばおさまらぬというような、いっこくなところがあって、職長も彼にだけは「三谷さん」と称んでいたのをおぼえている。
　しかし二十年ぶりの邂逅はあわただしいものであった。細君はどうせ助からぬ病人だからといっても、私は手首の時計が気にかかってならなかった。H君はそばで偶然な出来事にボンヤリしているようだったが、三谷氏は「きみ」と至極晴やかにH君へ云った。
「手紙ありがとう。ぼくもどうせ永くない命だから、生きてるうち、何でも質問したまえ。」
「は」とH君が固くなるのに、三谷氏はカラカラとわらいかける。
「遠慮要らんよ、歴史とか、研究とかいうもんわネ、すべてそんなもんさ、ああ、やっと探しあてたら相手は死にかかっているなんて、ぼくもそんなことを何度も経験したよ、こんどは俺の番というわけだ、なァにたいしたこっちゃないさ。」
　三谷氏は胸の上にかざしている右掌の指をふだんに動かしている。神経質になにか探しているような、その火箸のように長ッぽそい指の、殆どまむしの頭みたいに平べったくなっている人差指は、活字のケツを永年ついてきた植字工の指であった。最初はさすがに遠慮していたH君も、却って病人に促されてベッドのそばに椅子を寄せて、緊張しながら自分の質問を訊いていた。
「本木の入獄か？　いろいろ説があるが、つまり洋書の購入にからんで、他人のために罪におちたというのが、一ばん妥当だネ。」
「他人というのは、品川梅次郎のことですか？」
「そうそう――だがね、入獄といってももっと研究してみる必要があるよ、年代的に繰っても入獄の期間中、本木はいろんな仕事をしていることが、事蹟で明らかになっている。それは、おれの本木伝を読んでくれればわかる――」
　昂奮のせいか三谷氏は元気そうだったが、だんだん呼吸ぎれがはげしくなった。狭いベッドの衝立の間に棒立ちになりながら、私はそんな会話もよく耳にはいらなかった。他に訪ねてくる人もないので邪魔はなかったが、三十分くらいのつもりが疾っくに過ぎたので、私はH君を促した。すると三谷氏はまだ残り惜しげに、例のほそながい指を振ってみせるのだった。
「じゃ、あしたまたきてくれたまえ、ネ、君たちにやりたいものがあるから、あしたとり寄せとくから――」
　細君も廊下まで出てきて、病人と同じように、あしたきてくれと繰り返すのであった。襷を弄くりながらオドオドした調子で、もう見込みのない夫のために、最後の願いが

たといどんなことであっても、無条件に尊重したい細君のひたすらな気持があらわれていた。そしてしまいの方は涙でかすれる声で云うのだった。

「ちかごろ、うちがあんなに喜んだ顔をみるのは始めてでございます。――あたしにはよくわかりませんけれど、うちは若い頃からもう本木先生の研究ばかりだったので、よっぽどうれしかったんでございましょう――」

もちろんH君も私も明日訪ねる約束をして病院を出たが、再び渋谷駅でわかれるまでH君はあまり口をきかなかった。三谷氏への想像があまりにちがっていたこともあるが、研究家などというものの生涯が、どんなに華々しくはないものか、眼の辺りに見たからで、私も同じ気持であった。

しかしその翌日、同じ時刻に病院へ二人でゆくと、三谷氏の容態は昨日とまるでちがっていた。ベッドの上にかがまっている医師や看護婦のただならぬ後ろ姿が見え、細君も幾度か二人の姿を眼に入れながら、よくは視覚にうつらぬといった風の容子であった。

しばらく廊下にたちつくしている間にも、看護婦などの出入りがあわただしい。二人できょうは帰った方がいいかも知れぬなどと話しあったが、そのうち細君の顔がフイに入口からのぞいて手招きするのだった。それはすこし怒ったような顔色で、私がそばへ寄ると、手に持っている新聞包みをおしつけてから、短い声で、

「ちょッと顔をみせてやってください、ちょッと――」

と叫ぶように云って、くるッとむこうむきになって、袂で顔をかくしてしまった。

医者はまだそこにいた。衝立のそばまでゆくと、肉親の人らしい女の背中が少しどいて、そこから白いガーゼで胸から蔽った三谷氏が見え、顔だけがあおのきにこっちを迎えていた。一と晩のうちにすっかり形相がかわっていたが、くせのある唇許には、わりあい元気な微笑がただよっている。

「や、ありがとう――」

例の右掌がガーゼの間からうごいた。まだ唇がうごいているが、よくききとれない。私がわからぬままにうなずいてみせると、ニッコリして、さも疲れたという風にむこうむきになってしまった。

夕方になって私達は、新聞包みを抱えて病院を出たが、五反田駅まできてもすぐには電車に乗れない気がして、駅前の喫茶店に入ると、その新聞包みをあけてみた。みんな粗末な装幀で、一冊は「本木昌造、平野富二略伝」他の二冊は「活字高低の研究」「植字能率増進法」であったが「本木昌造、平野富二略伝」の方は、表紙に「再版原稿」と墨書してあって、いろんな書込みや、貼込みがしてある。三谷氏は初版後さらに研究をかさねて、訂正増版を出す心算であったろう。

「偶然だナ、まるで遺言をききに行ったようなもんだ。」

若いH君はしきりと昂奮して、コーヒーに口もつけず繰り返していた。私はめくりながら序文など読んでいたが、本木伝は福地源一郎の原文を主にして、その傍に「編者曰く」とか「補」とか「註」とかいう形で三谷氏の文章がならんでいる。福地の原文は私が他の著書で読んだ本木伝と大同小異であって、その「編者曰く」や「補」や「註」が新らしいものだった。それは氏が長崎や福岡へんまで行脚して、本木の遺族や平野の未亡人などから聴き得たこと、或は寺社や旧幕時代から、土地に残っている文章などから探しだした貴重なものだった。

「偶然だナ、まったく偶然だ。」

H君はまだ云っていた。なるほど私と三谷氏との邂逅も偶然だったが、本木伝に関心をもって寄り集ったのが、三人とも印刷工だったということも偶然だった。

「あんたも本木昌造について何か書きなさいよ、ぼくも書く、宣伝するだけでも何かためになる。」

「そうだネ。」

私もボンヤリと天井をみあげながらこたえた。本木昌造を書くことは日本の印刷術を、日本の活字を書くことだ。そしていま死の迫っている三谷氏のことを思い合せると、それを書く自分らの仕事が、次第に偶然ではない気がしてくるのであった。

(一九四二年三月改造)

坂

小沢清

冬吉は十四でも労働者で、スシヅメのTYの電車の中で身動きもとれなくなる。凍傷にただれた耳たぼを、イヤというほど肘で突き飛ばされたり、腋の下に抱えた弁当箱が、ちょうど冬吉の鼻づらへきて、沢庵の臭いをぷんぷん嗅がされたり、中学生のふくらんだ鞄が、胸のあたりをぎゅうぎゅう押しつけて、息の根が止まりそうなこともある。

駅を降りると、冬吉はやれやれと思う。それから工場まで、歩いて三十分は楽にかかる。冬吉の工場附近一帯は、住宅地に取り囲まれた窪地になっていて、三棟も四棟もある屋根のN字型になった工場が幾つもあった。まだ青ペンキの光っている洋式の工場もあるし、工場の五、六倍も空地をとった塀だけの工場もあった。

工場地へ降りる坂あたりまでくると、空気もずっと新鮮

になり、工場の屋根に霜が降りて、アスベスト色に輝いている。坂の両側にも工場があった。クロームメッキをかけたような新しい旋盤が何十台も並んでいる工場や、冬吉がまだ見たこともない、大きな機械のある工場もあった。
そんな工場に比較すると、冬吉の工場は、古ぼけた倉庫を改築したというだけで、工場らしい感じがなく、坂を降りきった橋の袂にあった。高さのわりに横はばがなく、腐ったところへ新しい材木を張りかえてあるから、積木細工のように、工場の周囲が縞になっていた。坂の上から見ると、マッチ箱そっくりの冬吉の工場は、そのあたりだけ、どういう理由か畑になっていて、冬吉の工場だけが、畑と川とを境いにしたところに、ポッンとあった。
工場の入口は左右に開く扉で、錆ついた車が上についていた。なかなか重く、冬吉の力では骨が折れる。朝はその止金に南京錠がぶら下っており、横に筆ぶとで、『沼製作所』と書いた、削りたての大きな表札がある。冬吉は工場主の沼さんから「お前の責任は重大だ」と云って渡された鍵で錠前を外し、誰よりも先に工場へ入る。ガランとした工場には、針金あみのガラス窓が天井に二つあるだけで、もの音一つ聞えない。
冬吉は先ず、煉炭火鉢に火を起すのに一苦労する。火鉢の風口に灰が詰っていたり、炭の起り方が足りないと灰をまわりへ詰めてしまったあとで、消えたりすることがある。始めのうちは職人たちに「寒いぞ!寒いぞ!」云って怒鳴られた。しかし、最近では煉炭の穴を覗いただけで解る。灰を詰めた火鉢は川の端へ持ってゆき、風通しのいい場所へ一列に並べる。
今度は機械の油さしにかかる。自分の背の五、六倍もある梯子を、ふらふらしながら、突きあたりの旋盤まで持ってゆくと、体ばかりぽかぽかして、凍傷にふくれた指先が感じがなくなり、骨まで痛くなる。かじかんだ掌をクマデのようにまげ、ハアハア白い息を吐いて、天井のシャフトに油をさしていると、ぽつぽつ職人がやって来る。
冬吉の次には、カーキ色の国民服に、ドテラのような袂のあるオーバーを着て、すりへった下駄の踵を、ペッタンペッタン音をたててやって来る。雨川さんである。
「毎日たいへんなことだ。」
雨川さんは、ふちの垂れた中折帽子をとり、ゴマシオ頭のまん中の禿たところを掻きながら、天井にいる冬吉を見あげる。
「うん。」
無口な冬吉は、家にいるときでも喋らない。だから工場へ来ると、用の口以外は黙っている。しかし、雨川さんはおかまいなしに、世帯持ちの落ついた、優しい言葉で話しかけて来る。
「なあ冬吉、どんな仕事だって勉強に変りはない。一生懸命やるんだよ。ハイハイって、職人の云うことをよく聞いてな。」

冬吉は職人に一つぐらい殴られても、泣きはしない。しかし、雨川さんに何か云われると、胸のあたりがぐっぐっと込みあげて来て、涙が出てくる。
雨川さんは格子になったボックス型の脱衣箱へ、通勤服から作業服に着がえをすまし、川の端へ行って、一ばん起りのいい、火鉢を抱えこみ、仕上台の自分の股下に持ってきた。
七時三十分の始業サイレンが、あっちでも、こっちでも鳴り始める。今まで坂をひっきりなしに降りて来た労働者が、ぴったり止って、赤土の一本道がくっきり浮んでくる。ときどき、坂の上から遅刻した人が、転ぶように駈けて行った。
鉄ちゃんと幸さんは、八時の『ポー』が鳴り終った頃、ゆうゆうと坂の上に姿を現わす。背のずんぐりしたイガ栗頭の幸さんに比べると、鉄ちゃんは、痩せている上にオーバーの襟をたて、肩をつぼめて歩くので、一町さきの冬吉の工場からでも解った。
「おお寒い！　嫌だなあ工場は—。」
工場へ入ると、いきなり鉄ちゃんは悲しい声をあげる。
「ぜいたく云うない。〝請取〟じゃないか、少しぐらい寒くっても辛抱しろよ。」
幸さんが云った。同じ下宿で寝起している二人は、相手の気持に障りそうなことでも、ずけずけ云えるあいだ柄だった。
請取制になっている工場では、製品一個の単価が確立されていて、その出来高で一日の労賃が支払われる。従って、労働することによって、固定給の数倍にもなる。過激に工場設備や、『盆』『暮』の賞与金について文句が云えないと二人は思っている。
鉄ちゃんは、川から持って来た煉炭火鉢に馬乗りになり、お尻を焙っているが、起りの悪い煉炭は炭酸ガスの臭いがして、温かくなかった。
「おい冬吉、薪を探してこいよ。」
鉄ちゃんは冬吉に平気で用を云いつける。しかし、冬吉は鉄ちゃんが好きだった。坂上の汁粉屋に連れて行ってくれたこともある。映画の帰りに支那ソバを奢ってくれたこともある。鉄ちゃんの云うことなら、少しぐらい無理でも嫌とは云えなかった。
冬吉は橋を渡った川沿いにある普請場へ、薪を貰いに行った。むこう鉢巻の若い大工さんが、焚火を囲んで笑談している。その向うで、コッンコッンと、鑿を叩いているお爺さんもいた。
「焚火にするきれっぱし、ありませんか。」
冬吉は焚火のそばへ行って、頁を振りまわしている、大工さんに聞いた。
「お前はどこの工場だい。」
むこう鉢巻の大工さんは、油で黒びかりしている冬吉の体を、じろじろ見まわしながら云った。冬吉は橋むこうの

一軒家を指さした。
「いま工場は景気がいいんじゃあないか。薪ぐらいオヤジに云って買って貰え。」
「だって職人が薪を探してこいと云ったんだ。オヤジさんは十時にならなければ工場に来ないんだよ。」
冬吉は頬をふくらまして、不平を云った。
「ほう、そうかい。そこらにあるのを持って行きな。」
大工さんたちは笑った。冬吉は作業服の上衣をぬいで、四つんばいになり、小さな木ぎれを集めにかかった。木ぎれは鉋くずの中から、面白いように出て来て、またたくうち、作業服一ぱいになった。
「寒いだろう。こっちへ来い。」
大工さんたちは囲みを解いて、冬吉を焚火の仲間に入れた。
「お前なんて名だ。」
「冬吉って云うんだ。」
「冬吉か。工場へ帰ったらな、オヤジに云うんだぞ、—今度くるときは餅菓子を買ってこい—って。」
大工さんは冗談半分に云って、そのゴワゴワした手で、冬吉の頭を撫でまわした。
「うん。」
焚火は威勢よく燃えあがっていた。温たかで眠むたくなる。しかし工場では鉄ちゃんが震えているだろうと冬吉は思った。

「どうも有難う。」
冬吉はペコンと頭を下げ、薪の一ぱい入った作業服を持ち、大きく股をひらいた恰好で、工場へ帰って行った。
工場の入口へんまでくると、扉が開いた。細い眉に皺をよせた鉄ちゃんの恐しい顔が、扉の上の方からぬっと出た。しかし冬吉が作業服に山盛りにして、腹でヨイショヨイショと押してくるのを見ると、味噌っ歯を見せて笑顔になった。
「おほッ、うんと持ってきたなあ。」
今まで作業服一枚で、煉炭の上に縮こまっていた鉄ちゃんは、寒さを忘れたかのように嬉しがり、自分で焚火用の石油カンを持ってきた。石油カンはカンヅメのように頭を切り開き、風通りのいいように下の方にヤスリの尻で穴があけてある。
鉄ちゃんは油ボロに火をつけて、カンの中へ木ぎれを投げこんだ。朝露にしめった薪がパチパチ音をたて、白い煙がもくもくとでた。幸さんは石油カンの前に、どっかり腰をおろし、親指の穴のあいた足袋へ両手を入れていた。体が温たまってくると、ひとりでに一行覚えの流行歌が鼻からでてくる。皆に背中をむけ、仕上台の前で、キセルのやに掃除をやっていた雨川さんまでが、くるりとこっちに向きなおり、一服やり始めた。
「いよう、やってるな。」
表の扉ががらっとあいて、寒い風と共に、旋盤工の星山

君が、右手をひょいと耳のあたりまで上げ、挨拶をした。流行のソフト帽を横っちょにかぶり、ねずみ色オーバーの胸のポケットに、模様のあるハンカチーフが首を出している。一人者で、用のない牛皮製の手提げ鞄をぶらさげていた。

「ゼントルマンの御出勤でござーい。」

鉄ちゃんがアクセントをつけ、上目をつかって冷かした。

「朝っぱらから何だい、よしてくれよ。」

面長で青白い星山君の顔が、一しゅん緊張する。星山君はゼントルマンと云われたかった。しかし、それは電車の中や、街の舗道を歩くときに限られていた。油と埃の中は別だった。星山君は洗濯用のゴム手袋の上に軍手まではめ、紙の吸口を二十もつけて莨を吸ったり、機械の前に大きな鏡を立てかけて仕事をしたりする。鉄ちゃんは反対に、そういうことが大嫌いだった。「キザな奴だ」と思うけれど、五分と五分の職人同士で何も云えなかった。

星山君は旋盤の熟練工だった。手袋をはめて仕事をしても、$\frac{5}{100}$以上の誤差は絶対にださなかった。鉄ちゃんは仕上工だったので、星山君と仕事の競争をしたり、製品の比較をすることはできなかった。しかし、十五日と月末の給料は、鉄ちゃんより星山君の方が多かった。給料が少いからといって鉄ちゃんの『腕』が悪いわけではなかった。この工場には仕上工に必要な、セーパーもミーリングもなく、ボール盤と手鋸とヤスリの使いわけによって、製品を仕上げなければならなかった。鉄ちゃんの不満は、そういうところにもあった。星山君には機械にとっ組んでいる優位な点があり、相手を軽蔑する悪い癖があった。鉄ちゃんには星山君が工場の一員である、滑稽な点を握っていて、皮肉を飛ばす権利があった。

焚火を前にして二人は向きあいになっていた。鉄ちゃんは股の下に両手を突こみ、片足を軽くあげ、下品な恰好で貧乏ゆすりをしていた。星山君はいっこう気にしないという様子で、新聞の中に顔を入れ、むっつりしていた。

「煙いなあー。」

トラホームの幸さんが悲鳴をあげた。しめっぽい木を燃し続けているので、煙が天井へはってゆき、狭い工場の中をたちまち煙にしてしまったのである。そこへ冬吉がモーターのスイッチを入れたので、シャフトが勢よく廻転しはじめ、天井の煙が下へ降りてきたのである。

「このぐらいの煙はなんでもない。わしが田舎にいたじぶんは、毎晩イロリでいぶしたもんだ。田舎の横柱には一寸も二寸も、煤がたまってるよ。これもやっぱり習慣だな。」

雨川さんは莨をふかしながら平気だった。

「こりゃあたまらん。」

幸さんは入口へ行って首だけ外へ突き出した。

「オヤジだぞ!」

幸さんが工場の中へ大きな声で伝令した。坂の上から、茶色のたっぷりしたオーバーにステッキを持った、工場主の沼さんがやって来たのである。

「今日ははばかに早いなあ。」

鉄ちゃんはそう云って、石油カンに唾を吐きかけた。雨川さんは急いでバイスに品物を挾んだ。星山君は手袋をはめながらタップダンスをやっていた。冬吉は石油カンを裏の井戸へ持って行った。

工場主の沼さんが入口を開けたとき、皆んなはそれぞれの仕事場に、蝉のようにくっついていた。

「ご苦労さまです。」

沼さんは、度の強いロイド眼鏡の上から、じろっと工場の中を見まわしながら云った。美しく光っている茶色の中折帽子をとり、仕上台と向きあっている安物のテーブルの椅子に、どっかり腰をおろした。煙がまだ工場の中に立ちこめていた。沼さんはオッホンオッホンと、三つばかり続けて咳をした。

工場主の沼さんは、東京×大学を卒業し、丸の内商事会社に勤務していたが、支那との戦争によって利潤のいい軍需産業に転向し、もう二年になっていた。『待合』や『シャンパン』や『葉巻』の味を知っていて、そういうものを含む商業取引の経験をもっていた。

仕上台では雨川さんが、戦車用の大型スパナの外型を仕上げていた。しじゅうバイスを中心にして、せかせかと体を動かしながら、八吋ヤスリを使っている。それと同じ仕事に精出している幸さんも、負けずにリキみかえって働くので、狭いバイスとバイスの間でお尻の衝突が起った。隣りでは鉄ちゃんが椅子に腰かけ、スパナの重要な内型を仕上げていた。ゆっくりと組ヤスリを使い、ときどきゲージを差込んで寸法をはかり、顔をしかめていた。

突あたりの旋盤では、星山君が口笛を吹きながら仕事をしていた。星山君は気ままな男だった。沼さんが工場にいると余り仕事に精を出さない。かえって、外交にでも出かけた留守の方が熱心だった。もう一台の旋盤は冬吉が使っていた。それはごく最近からであった。星山君の旋盤も冬吉のも、イギリス式の五尺旋盤で、背の高い星山君には小さすぎ、使いにくかった。疲れてくると胸を張って、ときどき拳固で腰のあたりを叩いていた。背の低い冬吉は反対だった。ミカン箱の上に乗らなければ、旋盤のハンドルが握れなかった。二、三日前から冬吉は、航空機用円筒の荒削りをやっていた。その仕事は星山君の請取の仕事だった。最初の工程から完成までの見積りで、沼さんから請合った仕事だった。そういう訳だったから冬吉は、仕事をやってもやらなくてもよかった。しかし、冬吉は自分の力で始めて旋盤を使う喜びを持っていた。シュウシュウと鉋くずのように削れてゆくニュームの切くずと、バイトの先を見つめていると、いつまでたっても嫌にならなかった。

冬吉の旋盤はそれまで、いつも下顎のあたりに不精ヒゲ

を生やし、角刈の額に三日月型の疵あとのある、がっちりした体の谷さんが使っていた旋盤だった。ある日、谷さんはベルトを早廻転にするため手を使ったのでつなぎめのレーシングで、左手の人差指から掌にかけて一文字に深く切りこみ、大怪我をしたのだった。それから今日まで二週間にもなっていた。そこを星山君は抜目なく、冬吉に請取り仕事の手つだいをやらせているのであった。冬吉はそのことについて少しも苦にはならなかった。かえって感謝しているくらいだった。谷さんが、いつまでも休んでくれるようにとも願っていた。

どこの工場でも、他人の機械はむやみに使用できないことになっていた。一たん自分が使い慣れ、その欠点、不欠点を見きわめ、自由に仕事ができるまでにしておいた機械を、他人に使用されるのは良い顔ができないのが普通であった。工場移りをした労働者が、最初に機械を使用するのを嫌うのは、主にそういうところからきている。それは、ちょうど小銃で射撃するとき、その銃の癖がわかるまでは、容易に的中しないのと似ている。星山君はそのことを知らない筈がなかった。むしろ知りすぎるほど知っていた。それには次のような理由があった。

——谷さんは『今日は東。明日は西』と云う歌にあるような渡り職人だった。ほとんどの渡り職人がそうであるように、谷さんも優秀な熟練工だった。「オイ」とか「オメエ」とか云う言葉を誰にでも使った。そして、その「オイ」と云う言葉の中に、相手を圧倒するだけの力があった。星山君にしても鉄ちゃんにしても、二十六の谷さんの目尻のつり上った凄い眼で睨まれると、話しをしていてもオドオドしてしまう。また、黙っていても、三日月型の疵がものを云っていた。機嫌のいいときにはよく『義理』や『仁義』や『喧嘩』の話しを面白く語った。その話しは大げさなことが多かったが、度胸のある我慢強さは嘘ではなかった。魚をさくように手を切ったときでも、眉一つ動かさなかった。隣りの星山君に「医者はどこだ」と聞いただけだった。そのとき谷さんの左手は、真っ赤な手袋をはめたようにどこが疵口なのかわからぬほど、血がべっとり吹き出していた。騒ぎだしたのは谷さんより、星山君だった。医者は坂の上にあったが、健康保険証がなかった。小規模の工場では機械工の出入が烈しく、確実な工員でなければ出願届が面倒なので工場主は申告しないのであった。ではあったが疵は急を要する場合であった。年ぱいの雨川さんは腰の手拭いをさき、谷さんの手首を締めつけ、掌へかけて幾つも巻いていった。それでも医者へ行くまで、血が手拭の上に滲みでて、中指から雫になって落ちた。雨川さんが谷さんに附添って医者へ行ったすぐあと、沼さんがやってきた。興奮した星山君は事件の報告をしたが、最後に「二日酔で酒くさかった」ことまで喋ってしまった。谷さんが怪我をしたのは朝だった。起抜けで眠いところへもってきて体がふらふらしていた。沼さんはその最後の言葉

をきくと顔をしかめた。それでもオーバーの内ポケットの鰐革財布から、十円紙幣を抜きとって冬吉に渡した。冬吉はパックリ口の開いた白い肉のはみだしている疵口を見て飛びあがるほど驚いたが、沼さんから金を受けとると坂の上へ、まっしぐらに駈けて行った。その日から沼さんは治療代として、十円ずつ三回に渡り、雨川さんを通して出していた。谷さんは沼さんに治療代を出せと云わなかった。いつも雨川さんが中に入り、沼さんに交渉するのであった。谷さんは医者が嫌いだった。いままで何度も怪我をしたこともあったが、ほとんど医者の世話にならなかった。怪我をした日は中間支払日の翌日だった。金が入ると谷さんは酒を呑んだ。それは怪我をしても病気のときでも同じだった。沼さんが十円ずつ、しみったれて出すのが気に入らなかった。疵がなおったらすぐ働こうと思う気持が変化して、相手がそういう出方なら、俺の方だってと云う反抗心が強く働いた。谷さんはあとから貰った治療代も、纒めて呑んでしまった。酒呑みの金はながく続く筈がなかった。谷さんは工場を退めようと思い、ついでに金を借りて逃走しようと思った。優秀な熟練工は大工場に多く、民間工場には少なかった。工場主はそれらの機械工を引き止めるため、酒を呑ましたり女を買わしたりした。金を借すことはむしろ普通だった。それでも谷さんは用心のためハイスピード鋼バイトを十本ほど盗んだ。工場わきの橋の下に目標の棒材を立て、金を借さないときには持ち逃げをやろうと思った。工場ではバイトが紛失したのが問題になっていた。

谷さんが工場を退めるとも判断された。しかし、谷さんは風来坊で、工場を退める特別の理由は持っていなかった。

星山君は好都合だった。冬吉は夢中で仕事をするし、能率は上げるので、沼さんも悪く思ってはいなかった。

谷さんが働いていた頃、冬吉は仕上の方を手伝っていた。それが旋盤を使うようになったので、鉄ちゃんは面白くなかった。冬吉は旋盤を使っていても気がきではなかった。莨を買いに行ったり、工具屋に行くときには、「このヤスリは切れない」とか「ドリルの寸法がちがう」とか云って二度も三度も坂上まで行かなければならなかった。莨は冬吉の小使いで買いだめすることができたが、工具屋の場合には、どうしても行かなければならなかった。

工場には買入れてまもない、ピカピカ光る自転車が一台あったが、冬吉はサドルに腰かけることがなかった。冬吉の足はまだ短かかった。いつも前の方に乗りだして、体を右左に傾けながら漕ぐ。だいいち難物なのは坂だった。坂は赤土の上に砂利が、敷いてあった。坂の下から坂上まで、一息に乗りきることは誰もできない。体のしっかりした大人でさえ、2/3で降りるのが普通だった。まだ骨のやわらかい冬坊には、その1/3が精一ぱいで、それ以上に漕ぐと自転車もろともひっくり返ってしまう。——

給料日だった。沼さんは十一時前に銀行へ出かけて行った。冬吉は瀬戸物のヤカンを煉炭火鉢にかけ、定食屋へ弁当を取りに行った。
定食屋は駅の近くにあった。色のさめた紺のれんに『えちごや』と白く浮きだしに書いてある。店に入ると右側が一だん高くなっていて、以前は上客用になっていたのか、畳が敷いてあった。それと並んでテーブルが二つ突き合わせてある。テーブルにはご飯粒だとか味噌汁がついて、弓なりにそり茶碗の円い輪がしみついていた。店のまん中には、小さな玩具の黒板がぶら下っている。それには今日の昼の献立表がのっていた。(おでん)(さば)(おひたし)(やきのり)黒板にのっているのは、よりどり二十銭均一で、そのわきにある短冊板の(天ぷら)は、主人の自筆で二十五銭としてあった。
主人というのは、のれん通り新潟県人で、(酒)の前かけを締めている四十恰好の男だった。白髪交りの、眉毛の先がちょっぴり宙に浮いている大きな目玉や、前歯を金で総入歯しているところなど、冬吉は正月や祭りにやってくるしし舞のししに似ていると思った。
冬吉はもうこの定食屋では、いい『顔』になっていた。冬吉が店へ入るか入らないうちに、
「よう、冬吉、今日はなんにする。」
台所まで突っ抜けて見える、うす暗い奥の方で、主人の通りのいい声がした。冬吉は一段高くなったところへ腰かけ、浮いた足首を左右に振りながら、昼の献立表を見あげた。こうして鉄ちゃんや、幸さんや、星山君のお菜はなんにした方がいいか、自分で判断するのが楽しみだった。
「おじさん、天ぷらがいいや。」
「そうかい、いま揚げるからな。少し待ってくれよ。」
定食屋の主人は長い箸でうどん粉をかきまわし、さばの骨の抜いてある平たい切身を、箸の先で挟んだかと思うと、もううどん粉がべっとりついていて、かた一方のフライパンの油の中へ泳がせるように流しこんだ。さばはじゅうと音をたてて、おいしそうな匂いが店の方まで流れてきた。
店はまだ昼まえだったので、お客は二、三人しかいなかった。みんな温いご飯を握り飯になるくらい頬張っている。
「おやじ! おつけ一杯。」
手拭を頭から頬かぶりしている髭男が、大きな声で怒鳴った。
「へい!」
主人が大きな声を出すと、はち切れるばかり大きな体をしたおかみさんが、人のいい愛嬌を顔に浮べ、味噌汁を持ってきた。
「お待ちどうさま。はい。」
頬かぶりの男はそれを受とると、おソバを食べるときのように、わかめだけ、チュウチュウ云わせながら先に食べ

てしまった。隣りにいる印半纏に細を巻きつけた男は、そんなことは一こう気にしない顔つきで、あつ切りの沢庵を、丈夫な真珠色の歯を見せ、カリカリ噛っていた。その男を待っているらしい、はすの葉に似たぼろ帽子をかぶった相棒は、食べ終ったドンブリを前につみ重ね、莨を天井へむけてふかしていた。

冬吉がそういう人たちを面白そうに眺めていると、定食屋の主人がにこにこしながら、さといものおでんを持ってきた。

「冬吉、これやろう。」

串にさしてあるさといもおでんは、煮たてで湯気が上っていた。

「でも、おじさん、これ売物じゃあないか。」

「いいんだよ、冬吉にはいつも世話になっているから。」

そう云って定食屋の主人は、冬吉におでんを渡した。冬吉はよく、旋盤で使った油ボロを持ってきてやった。それはご飯を焚きつけるのに、たいへん便利なものである。マッチを擦っただけで油にしみたボロが燃えあがり、以前のように、涙をこぼしながら、長い竹筒でラッパ吹きをやる必要がなかった。

冬吉がおでんを食べ終った頃、定食屋の主人は木製の黒ぬり弁当箱へ、三つめのご飯をつめ終ったところだった。

「冬吉できたよ。」

定食屋の主人は、ふろしき包みに弁当箱をしっかり結え、冬吉に渡した。冬吉は店のローマ字の入った柱時計を眺め、十二時十分前だと思うと、いそいで自転車のうしろにつけ、工場へ帰って行った。

冬吉が工場へ帰ると同時に、星山君がモーターを止め、皆んな裏の井戸へ手を洗いに行った。それから近所のサイレンが一せいに鳴り響いた。

昼飯を食べながら鉄ちゃんは「この天ぷらは油が悪い」とか、「飯の盛りかたが少なくなった」とか、一人で喋っていた。あとは幸さんが相槌を打つくらいで、静かだった。雨川さんと冬吉は、弁当を持ってきていた。冬吉はその弁当を膝の上にのせ、蓋をとるときほど楽しみなことはなかった。しかし、今日は冬吉の嫌いな海苔弁当だった。おまけに蓋の方へ半分くっついている。冬吉はがっかりしたが、食べてゆくと、ご飯のまん中にも海苔が一枚敷いてあった。冬吉は母親の細い心づかいが嬉しかった。

星山君は食事が終ると、工場裏の日当りのいい土管へ行って雑誌をひろげた。「下品な奴」と話しができないという腹だった。冬吉も星山君のあとからついて行った。

「なに読んでるの。」

冬吉は雑誌の中を覗きこんだ。むずかしい漢字がいっぱいあった。

「子供の読む本じゃあないよ。」

星山君は紅いリボンの栞を本のあいだに挟んだ。表紙には裸の女が描かれてあった。

「子供じゃあないよ。労働者だよ。」

「それは――そうだ。しかし、お前にはまだ髭が生えていないぞ。」

星山君はすべすべとした手で冬吉の顎をさすった。冬吉は星山君に聞きたいことが山ほどあった。だいいち星山君は大工場に勤めた経験があるからだった。冬吉も大工場へ入りたかった。しかし、冬吉は背が低いし、学校は六年を出たきりだった。その上家の貧乏もあった。大工場は冬吉にとって遠いところにある生活の光明だった。大工場の組織はどうなのか、永続すればどのくらいの賃金になるのか、『青年学校』や『養成所』のことも知りたかった。

「僕、大きな工場に入りたいんだけど、駄目だろうね。高等科も出ていないし、背も低いから。」

「そんなことはない、大きな工場なんて、あんがいインチキなもんだ。」

星山君の言葉は、どこか捨ばちなところがあり、雲の切れた青い空を眺めていた。

「でも背が低ければ旋盤は使えないね。」

「ばかだなあお前は、いつまでも子供じゃああるまいし、一年、二年と、知らないうちに伸びてゆくよ。」

冬吉は朝の通勤にカスリのつつ袖を着ていた。同じ電車の中で近代的な、工場のマーク入り通勤服を着た少年たちを見かけることがあった。冬吉もそういう服がなんとなく着てみたかった。

「僕はいつまでも小さな工場にいられない。星山さんは大工場にいたんでしょう。知ってる人があったら紹介しておくれよ。」

「それはできない、お前も俺も一つ工場にいるんだ。お前につまらぬ入知恵をすると、こっちに尻がまわってくる。お前がいくら大工場へ入りたくったって、俺の知ったことじゃあないよ。」

「……」

冬坊は首を垂れ、悲観してしまった。

「そんな小さな気持でどうするんだ。入ろうと思ったら一人でやったらいいじゃあないか。お前はまだ試験を受けたことがないんだろう。」

「うん。」

「お前はばかに悲観的だなあ。試験を受けなくて入れるか入れないか解るかい。入ったところで、いまお前が考えているような、甘いところじゃないぞ。そりゃあ賞与もあるだろうし、食堂もあるだろう。だがな、大きな工場は大きいなりに、いくらも欠点があるんだ。俺みたいに、また町工場へ逆もどりっていう寸法さ。」

「大きな工場は町工場より給料が安いっていうのほんとうなの。」

星山君の退職理由は、労働者対会社側の複雑な利害関係だった。それを冬吉は感ちがいして、給料のことかと思った。

「町工場より安いさ。しかし、うまくできているからなあ。たとえば谷君にしたって、オヤジにペンペン頭を下げなくても、医者がついてるからな……。」

星山君は、もう話をつづけるのが嫌らしく、土管の上にひっくりかえった。冬吉はまだ聞きたいことをいくらも胸に持ちながら、霜柱のとけて泥濘になった道を、工場へ帰って行った。

昼休みは四十分あった。それまでには、まだたっぷり十分はあったので、冬吉は坂の方へ歩いて行った。坂で一ばん大きいのは、SY計器工場であった。

冬吉は看板の大きい、その工場の中へ入った。百人も収容できる大きな工場が四棟もあった。どの工場にも、ガラス張りの廻転窓がついていて、明るく楽しそうに見える工場ばかりだった。工場前の広場では、円いセルロイドのバッチをつけた若い男たちが、汗をかいてキャッチボールをしていた。それに混って黒いエプロンの女工さんたちが、かん高い声でバレーボールをやっていた。それを笑顔で見物している人もいるし、ドラムカンに足を出している昼寝の人もいた。

「君はここの者じゃあないね。」

うしろから二本指で冬吉の肩をこつこつ叩いた人があった。金モール入りの帽子をかぶった、ちょび髭の門衛だった。冬吉はごくりと唾を呑みこんだ。

「困るねえ。ここは軍需工場なんだよ。」

門衛は念を押してから両手をうしろへまわし、顔をしかめ、それから説教に移った。まわりに二三人の少年工が集ってきた。

「工場なんか覗きにきやがって、なにかかっ払うつもりなんだぞ、こいつ。」

鍔の短い学帽をあみだかぶりにした少年工が、冬吉の頬をつねった。

「いかん、いかん。そんなことをしては。」

門衛が冬吉と少年工の中に入った。冬吉はうつむいたまま門まで歩いてゆき、勢いよく駈けだした。

「やあい、バカヤロウ。こんどきたら伸ばしちゃうぞオ。」

冬吉は背中に水を浴びたような思いがした。

工場では沼さんがいつのまにきたのか、テーブルに賃金表をひろげ、ソロ盤を弾いていた。いつも四十分の休憩時間を一時間ちかくまで休んでいるのであったが、工場に沼さんがいては規則通り、四十分でモーターを廻さなければならなかった。

昼すぎに、谷さんがやってきた。汚れた銘仙のドテラの襟をひろげ、左手をふところに入れ、右手を角帯のあいだに挾んでいた。

「オヤジィ、金を借してくれ。」

谷さんは単刀直入だった。ソロ盤を弾いていた沼さんは、それに答えず賃金表を見ている。

「幾ら?」
そのあいだ一分ほどかかった。沼さんの声はおだやかだった。
「三枚。」
谷さんは、こいつは調子がいいぞと思ったらしく、沼さんの鼻さきへ三本の指を突き出した。二十円借りるところ、三十円にしたわけである。
「そんなには貸せん。」
沼さんはそり身になって、テーブルの端を鉛筆でコッツ叩いた。谷さんはその態度が気に障った。
「金なし工場じゃあ仕方がねぇや、残りの勘定を出せよ。」
「そんなことは解っとる。しかし、だいたい君は間違っておるぞ。僕がやった医者の金を呑んでしまったというじゃあないか。」
沼さんは眼鏡をはずし、にくにくしく眼を細くした。谷さんはドテラの襟を右手でぐっと摑み、晒し木綿の腹巻きを見せた。二人はしばらく無言だった。テーブルの下でヤカンが、ボッボッと白い湯気を吹きあげていた。
「貸さねえんならそれでいいんだ。俺にだって考えがあるというものよ。――大方そんなことだろうと思ったんだ。」
谷さんは「フン」と云って、右手でドテラの袖をたくしあげ、腕をさすった。二の腕のあたりに入墨があった。沼さんは気にとめない風に、すばやくそれを読みとった。ローマ字でKINUKOと彫ってあった。その下にも賽ころが二つ転がっていた。
「君イ。こういうことは内輪の夫婦喧嘩みたようなもんじゃないか。働きなおしたらどうかね。また退めるんなら退めるで極りをつけなくちゃあ困るね。」
沼さんは子供に諭すように云った。
「金を貸しゃあ働くよ。」
「貸す。金はいくらでも貸す。しかし――。」
続けてあとを云おうと思ったが、谷さんの刺のある声が遮ぎった。
「貸す貸すって、――もう沢山だ。お説教を聞きにきたんじゃあねえや。しみったれめ。」
谷さんは感情の強い男で、足から頭へかけ、熱湯をそそぐような血が、かあっと燃え上った。口がへの字になり体が弓になった。
「バイトをどこへやったんだ?」
沼さんは最後の切札をだした。そして、テーブルをドカンと叩いた。テーブルにあったものが、一せいに飛びあがった。端にぶら下げてあったステッキが、振子時計のように左右に揺れた。
「そんなものは知らねえ。」
「知らないって、バカな! とにかく話しをつけよう。」
沼さんは興奮し、立ち上ってステッキをとり、谷さんの

腕をワシ掴みにして外へ引っ張った。
「どこへ行くんだ。」
「警察へ行こう。警察へ行って話しをつけよう。」
「行けって云うんならどこへだって行かあ。あんまり心やすく人の体にさわるない。」
谷さんはぶるっと一振りして腕をもぎとると、沼さんのうしろからのそのそ歩き出した。
そのあいだの出来事は一しゅんだった。雨川さんは工場の年長者で、医者の件も、バイトの件も、沼さんに報告しておいた。問題になることは知っていても、責任上で仕方がなかった。口論のとき何度も中に入ろうと思ったが、反対に恨みを買われてはならなかった。自分だけの生活ではなく、子供を五人もかかえた生活だった。
「可愛そうに、臭い飯を喰うんだな。」
入口に立った雨川さんは、溜息と一緒に云った。長いドテラを引きずるように、坂を登ってゆく谷さんと、拳固を空へむけて振りまわしている沼さんが、坂の中ほどにあった。
鉄ちゃんは工場の中でペッペッと味噌っ歯のあいだから唾をはね飛ばしながら、東京弁で喋っていた。
「だいたいオヤジの奴、やりかたが酷すぎる。なにも警察に連れてゆく必要はないじゃあないか。しかし谷さんは落ちついたもんだ。オヤジが青くなって——バイトをどこへやったんだ！——と云ったら、そんなものは知らないって云ったんだぞ。ああ出なけりゃあ男じゃあないや、渡り職人ていいもんだなあ。」
鉄ちゃんは、まるで谷さんに欠点がないかのように感心し、それから沼さんを烈しい勢いで攻撃した。
「ほほう。これは面白い。ウントやればいいんだ。」
星山君は旋盤にいたのでモーターがうるさく、事件を見のがしてしまったが、鉄ちゃんから内容を知ると顔をくずして笑った。
「そうなんだ。こりゃあどう考えたってオヤジの方が悪いだろ。」
鉄ちゃんは自分に共鳴する人間を、一人でも多く獲得するために、ヤスリを振りまわし演説調子になったが、誰も感動しなかった。星山はゼスチュアたっぷりで、踵をぴったり合せ不動の姿勢をとり、
「ワガハイは絶対中立である。」
と云った。卒業証書を受けとるときのように、うやうやしく両手をさし上げ、廻れ右して旋盤へ帰ってしまった。
「わしらは使われているんだからなあ。なんだ、かんだって、いまのところ工場主には敵やあしない。星野さんみたいに当らず障らずが利巧だよ。」
雨川さんは沈みがちに云って新聞紙で「ブルル」と鼻をかんだ。
まもなく沼さんが帰ってきた。上着をかかえ、Yシャツを腕まくりした泥だらけの手に、紐で吊したバイトの束を

ぶらさげていた。
「驚きましたね。まったくタチの悪い奴だ。」
沼さんは紐を高くさし上げ、しかめ面になり、ぽんとバイトを床に投げた。
「それでどうしました。アレは。」
雨川さんは首をよこにかしげ、しんけんな目で沼さんを覗きこんだ。
「それが、僕のところ一件じゃあなくってね、警察に手がまわっていたんですよ。なんだか酷いことをやったらしい話だったが、僕はめんどうだから、さっさと引きあげてきたんですが、あれでも三つ四つ殴られたようでしたよ。まったく困り者ですな。」
雨川さんはぽかんと口を開けてしまった。
給料日の午後は仕事に精がでる。沼さんは鞄から匂いのする紙幣をとりだし、念入りに数えあげ、給料袋の中へ入れていた。
退け時は五時三十分で、冬吉がモーターをとめたとき、星山君も鉄ちゃんも服に着かえをすましたところだった。冬吉も早く帰りたかったが、雨川さんがゆっくりしているので思うようにゆかなかった。手を洗ったバケツや工業用石鹸を片づけなければならないし、煉炭火鉢のあと始末があった。
支度のできた星山君はまっ先に、沼さんから給料袋を受けとった。
「一度調べて下さい。」
沼さんは計算上手なので、星山君はそのままポケットへ入れた。鉄ちゃんもそのあとから汚れのおちないまっ黒な掌を出し、たいへん嬉しそうだった。
「どうも有難とうございます。へい。」
と云って、つるつるした禿頭を沼さんに見せた。冬吉も労働者で給料を貰った。そのあとで沼さんが工場を点検し、左右に開く扉をガチャンとしめ、旧式の南京錠をかけた。
（一九四〇年九月）

ヒットラー

中野秀人

ヒットラー万才！　再び神々の国が地上に訪れる！
ヒットラー万才！　不信と虚偽と、傍観者との世界が顚覆する！
ヒットラー万才！　正義と名誉とを盗んだ簒奪者の文明が木端微塵になる！

役者　スイッチを切れ！　スイッチを切れ！　ここでもヒットラーか！　何処まで行ってもヒットラーの奴が追っかけてくる！　なんていう熱病だ！　世界は気が狂っている！　（小さく顫える声で）俺はもうへとへとだ。第五部隊でもなんでも宜い、俺をはやく捕まえて呉れ！

国境の街　二人の亡命客

悪霊　わたしは、死から蘇る、わたしはもはや迷信ではない。テレビジョンがわたしを呼んでいる。
わたしは、
白い蝶々の灯をつらね、
死人の家を探しにゆく、
——靴下と踵とチーズの匂いのする空家を探しにゆく。
わたしは、死を抱く夜の森に、桎梏の鉄の家を建てる。
全智全能の桎梏の壁に銃座を据えて、世界の闇に君臨する。

亡命客の一　あなたは誰です？　わたしは善良な落人です。何処に行っても、何処の国に行っても、善良な市民です。

悪霊　わたしは悪霊だ。わたしは死人の家を探してやってきた。

亡命客の一　いえ、いえ、ここには死人は一人も居りません。みんな自動車や馬車に乗って逃げてしまったのです。御覧の通り、死人の家に似てはおりますが、決して死人の家ではありません。

悪霊　わたしが来る途中で　大根の花の咲いている畑のな

かで、たくさんの人間の足跡が残っていた。きっと野鼠のように、死人をそこらじゅうに埋めているに相違ない。

亡命客の一　あっ、野鼠のように幸福であったらばねえ、なんにも考えないことが出来たらばねえ。だが、わたしは、死人には関係がないのです。わたしは、まったく無害なのです。

悪霊　だが、有益ではあるまい、わたしの前で匿しても駄目だ。何も、ビクビクすることはない。わたしは、どの国家にも属しちゃいない。

亡命客の一　それで安心した。あなたはヒットラーには関係がないんですね。

悪霊　死人にだけ関係がある。人間は死人を粗末にし出したので、死人を守るためにやってきたのだ。

亡命客の一　まったく奇特なことで、ついでに、私達も守って戴けたらばねえ。

悪霊　間もなく守ってやる！

亡命者の二（亡命客の一に）あなたの顔は真青だ。もう、ここまで来れば大丈夫ですよ。国境の監視兵だって逃亡をはじめました。

亡命客の一　何処に逃亡するのです！　何処に逃亡したって死人の家ばかりです。いたるところ悪霊がついてまわります。

亡命客の二　悪霊ですって！　迷信家になっちゃいけません！われわれ科学を信ずるものに、悪霊などがあっては堪りません。それとも、あなたの仰言るのはパラシュートのことですか？

亡命客の一　いや、いや、あなたには、この時代が、どんな時代だかお判りになっていないのだ。この時代は野蛮人の時代です。一体、わたしが、どんな悪いことをしたと云うのです。それなのに、わたしは罪人のように逃げ廻らなければならない。

亡命客の二　だが、わたくし達には、良心の呵責はありません。わたくし達は、暴力を信ずるほど単純でもなければ、排他的でもなかったのです。こんな不合理なことが永続する筈はありません。まったく反動です！まったく無智です！

亡命客の一　ええ、それはまったく無智です！　せめて、良心の呵責でもあれば、考えようもあるのですが、これではまるで夢を見ているのも同じことです。

亡命客の二　彼等が夢を見ているのです。彼等の考えている国家というものは鉄の檻です。羽の生えた鉄の檻です。彼等は人間ではなくして、奴隷なのです。

亡命客の一　わたしは、死人の家が恐ろしい。わたしには匿れるところがない。

役者　ああ、神様のお助けです。あなたは神様のように神

神しいお方です。いいえ、あなたが神様です。

ホテルの主人　部屋はいくつでもあります。ただお世話が出来ないだけのことです。

役者　ああ、尊い商売です。あなたがいくらお匿しになっても判ります。あなたには人の悲しみがお判りになるのです。

ホテルの主人　よして下さい。お起ちになって下さい。わたしは神様じゃありません。ただ、平和でさえあれば、お客様をおもてなしするのが商売です。

役者　平和でさえあれば！　ああ平和でさえあれば！　わたしだって、あなたに負けない位い、人情には忠実だったのです。ところが、いまでは、人情というものがまったく失くなってしまいました。どうか、わたしを憐れんで下さい。

ホテルの主人　まったく、どうせ、これは、人を憐むのはわたしの柄じゃありません。だが、お泊りになるのなら、どんどん勝手にお通り下さい。エレベーターが止っていますから、どうか、その階段を昇っていって下さい。なんにもおかまいしない代りに、お金はいただきません。

役者　ああ、神様のお助けです。お金ならわたしだって持っています。だがお金が何の役に立ちましょう。（階段に腹這いながら）一つ、二つ、三つ、わたしは動物のように純真なのです。わたしは四つの足で駈け上ります。

悪霊　お前には登れない。

役者　あなたは誰です？

悪霊　悪霊だ！　ここは、死人の家だ！

役者　わたしは役者です。わたしは神様の許可を得てはいってきたのです。どうか私を登らせて下さい。

悪霊　死人の家に、神様の許可もあるものか！　お前は夢を見ているのだ。その証拠には、四つ足で這っている。お前には登れない！

役者　みんな夢ですか？　あたしも、あなたも、戦争も、みんな夢ですか？

悪霊　起ってみろ！

役者　わたしは、あなたが恐ろしい。

悪霊　起ってみろ！　夢か、夢でないかが判る！

役者　わたしは、あなたが恐ろしい。

悪霊　わたしは、みんなが真実を恐れ出したので、死の国からやってきたのだ。わたしの仕事は、人類の秘密をあばくことにあるのだ。わたしは、お前達が、お前達の血と肉とを、闇のなかで解剖するための家を探してやってきたのだ。

役者　わたしは、起つことが出来ません。

悪霊　わたしは、夢でなくなる。わたしは、わたしの仕事にとりかかる。

役者　母さん！　助けて！

悪霊　お前は動くことが出来ない！
役者（間）助けて！　母さん！　起った！　わたしが起ったんです！　母さん！　みんな夢だったんです！
群集　ヒットラーが来る、ヒットラーが来る！　待たなければならない、期待しなければならない！
指揮官（高い見張台の箱に乗っている）破壊！
群集　ヒットラーが来る、ヒットラーが来る！　生産しなければならない、生み出さなければならない！
指揮官　決定！
群集　ヒットラーが来る、ヒットラーが来る！　組織しなければならない、組み立てなければならない！
指揮官　破壊！
群集　ヒットラーが来る、ヒットラーが来る！　闘争しなければならない、闘わなければならない！

作業を開始した工場の騒音。幾つものマネキン人形を満載したトロッコがはいってくる。

群集　夢想家八番！
群集　著作家一二番！
群集　デモクラット二五番！
群集　パシフィスト七番！
群集　マルキシスト一六番！
群集　インター・ナショナリスト一一番！
群集　リベラリスト、リベラリスト一五六九番！
群集　一人でよい！　一人を造らなければならない！
群集　生きている人間を造らなければならない、死人の家の工事を急がなければならない！

群集、マネキン人形をトロッコから降ろし、撰り分け、運搬しはじめる。ホイストからクラッチが下ってくる。

無名戦士（トロッコの一つから起ち上る）これは何処に来たのだ！　俺はなんだってマネキンと一緒なんだ！
群集　お前は誰だ？
無名戦士　俺は、祖国を救うために戦った無名の戦士だ。それだのに、ここは、一体何処だと言うのだ？
群集　ここは死人の家を建てる工場だ！
無名戦士　それなら、このマネキンどもは何だ？
群集　お前の戦友達だ！　戦わないで捕虜になったお前の戦友達だ！　それから、彼等の、愛することも愛されることも知らない、スイート・ハート達だ！
無名戦士　俺には判らない。死んでいたものが生きあがり、生きていたものが死んでしまう！　俺は、大根の畑のなかで、口を開けて倒れていた。一滴の水！　ああ、俺は一滴の水のために闘う！

群集　闘争しなければならない、闘わなければならない！
無名戦士（トロッコのなかに倒れながら）俺は辱められたのだ。勲章の代りに、マネキンのトロッコのなかに入れられて辱められたのだ。俺は、俺の眼球を剔り出して、死の敷居を跨ごう。
群集（無名戦士を援け降す）一滴の水！　水だ！　水だ！　闘わなければならない！　待たなければならない！
亡命客の二　ホテルの主人を呼んで下さい。
亡命客の一　ホテルの主人は逃げました。彼もまた、逃亡したのです。
亡命客の二　ああ、国境の向うの様子が聞きたかったのに、国境の向うでは、きっと暴動が起きているに相違ありません。
亡命客の一　それは、また、どうしてですか？
亡命客の二　わたしは、独乙から三つもの国境を越えて逃げて来ました。平和と、自由と、理性とを尊重する大衆が、ヨーロッパから消えてなくなったとは考えることが出来ないのです！　それは退歩です！
亡命客の一　わたしは、政治上の意見を持つことには賛成出来ません。
亡命客の二　いえ、いえ、わたしの言っているのは科学上の意見です！
役者（窓枠に倚り外を眺めながら独白）猿が猪に言いました。
聾と唖の間を行くときは、
お前も聾と唖の真似をしておいで！
猿が猿に言いました。
——でも、でも、聾を唖と間違えて、唖を聾と間違えたらどうするの？
だから人真似をおしよ！
亡命客の二　あいつは、わたし達を愚弄しているのです。
亡命客の一　ほってお置きなさい。あれは役者です。
亡命客の二　だが、わたし達は、お芝居をしているのではありません。これは深刻な現実です！
役者（窓枠から飛び降りる）喧嘩はやめた！　わたしも、あなた達も戦争も、みんな夢なのです！
亡命客の一　平和と、自由と、理性とのために、あきらめるのです！
亡命客の二　これは、まるで、死人の家だ
ヒットラー（地図の上を大股で歩いている）歴史は繰返すか？
地図の下の声　いえ、いえ、歴史は、一歩一歩階段を登ってゆくのです。
ヒットラー　ああ、そうだろう。わたしの設計に間違いはない。わたしには何もかも明白なのだ！　わたしは、人類の運命を双肩に担って立っている！

地図の下の声　閣下の偉業に比べれば、この地球も小さ過ぎる位いです！

ヒットラー　まったく、わたしは、わたしの偉大さに驚歎している。（速度を早めて歩く）ヒットラー　ヒットラー！　いや、わたしには思い出せない！　わたしは躊躇する必要がないのだ！　だが、わたしは、何処かに、敵意を感ずる！

地図の下の声　いまではありません！

ヒットラー　そうだ、いまではない。わたしの敵は弱過ぎる！　わたしの敵は無智だ！　わたしは絶対に安全な道を歩いている。安全な道が正しい道なのだ！　なにもかも、明白で単純ではないか！　真理は、いつでも単純だ！　真理は、誰でも遵奉出来るものなのだ！　わたしが、それを実証してみせたのだ！　わたしは、勝利のどんな興奮にも心を乱されはしない！

地図の下の声　閣下は、鉄のような意志を持っていられます。閣下の使命が、余りに大きいので、世界は茫然として、拍手を送ることさえ忘れてしまっているのです。だが、すぐに稲妻と雷鳴とが一緒にやってくるように、世界は感激の坩堝と変ってしまいます。まだまだ、閣下にとって歓喜の絶頂はこれからです。

ヒットラー　そうだ！　わたしは、わたしが酬いられるよりも、世界が私に酬いられるまで、歴史の階段を真直ぐに登ってゆくのだ。わたしは、自分でも自分が信ぜられないほど巨大な人間になる！　わたしに対する敵意は、わたしに近づくことが出来ない！

地図の下の声　閣下は、失望と不運とに打勝たれたのです。もはや、閣下には、未来があるばかりです。とても大きな未来です。

ヒットラー　そうだ！　その未来のなかで、未来の勝利が、わたしを待っている！

地図の下の声　わたしは、閣下が、わたしの地図を塗り代えられるのを待っています。

ヒットラー　そうだ！　世界が、わたしにそれを望むに相違ない！

地図の下の声　閣下の勝利！

ヒットラー　勝利！　勝利！　勝利！　だが、それは余りに単純だ！

地図の下の声　だが、閣下は閣下の勝利を拒まれることは出来ません！

ヒットラー　わたしは、世界が、喜びと、美と、愛情と、幸福とで満たされるのを願っているのだ！　わたしの勝利ではない！　人類の勝利だ！

地図の下の声　閣下！　御要心なさいませ！　歴史は決して繰返しはしません。

ヒットラー（急に立停る）わたしは、敵意を感ずる！　わたしは勝つ！

地図の下の声　そうです。あなたは勝たなければなりませ

ん！　あなたは破壊しなければなりません！
悪霊　お前の瞳に映るものは幻影だけだ！
無名戦士　わたしは、復讐しなければならない！
悪霊　お前には、復讐することは出来ない！
無名戦士　なぜ出来ないのだ！
悪霊　ヒットラーが、お前に代って復讐してしまったのだ！　お前の過去も、お前の不幸も、お前の絶望も、お前の子供時代の無罪も、みんな復讐してしまったのだ！　お前には復讐するものが残っていないのだ！
無名戦士　異う！　俺はヒットラーに復讐しなければならないのだ！
悪霊　なんという不幸だろう！　お前は、お前の同志を探してくるがよい！
無名戦士　教えてくれ、俺の同志を何処へ匿してしまったか教えてくれ！　俺はどんな将軍よりも激しい行軍を続けて、俺の同志を探して歩いたのだ。俺の足をみてくれ！　それは俺の足ではない、血と泥だ！　だが、誰もいない！　人がいない！　どうして人がいなくなってしまったのだ！
悪霊　世界は充分に罰せられたのだ！　お前はヒットラーに近づくことは出来ない！　お前は運命に逆うことは出来ない！　絶対の力に刃向うことは出来ない！
無名戦士　俺は、俺の祖国を愛している！　俺は俺の祖国を愛さなければならないのだ！　俺は生きられない！
悪霊　だから、わたしが、お前に会いに来たのだ。お前はヒットラーを諦めなければならない。
無名戦士　いやだ！　わたしは、たったひとりになっても復讐しなければならない！　もしも、お前が悪霊なら、わたしに、呪咀と悪魔との力を貸して呉れ！
悪霊　お前は、きっと失敗する。わたしの力は、太陽の支配するところに及ばない！
無名戦士　わたしは闇のなかを、地の底を這ってゆこう！　わたしは、わたしの剣に、征服者の驕慢な血潮を塗らなくては生きられない！
悪霊（後を追い）止めなさい！　お前は変化に打勝つことは出來ない。お前は未来を追い越すことは出來ない！
亡命客の一　もう誰も來ない、人が來なくなった。
役者　わたしは、壁に耳を当てて聞いているのですが、もう何処からも音が伝わって来ないのです。
亡命客の二　何か始まっているに相違ない。何処かで革命が起きているのだ！
亡命客の一　わたしは、街から、街のはずれまでいたるところを探して歩いたが、何処にも人がいないのです。
役者　わたしは停車場のあるところまで行って来たのです。列車も荷車も、駅長も駅夫も、動くものは何一つ見あたりません。赤信号が降りたままで、風の音すら聞え

できません。

亡命客の二　何か始まっているに相違ない！　誰かがわたし達を救い出しに来るに相違ない！　わたし達は逃げ遅れたのだ！

亡命客の一　もう蠟燭が幾本もありません！　わたし達は闇の中で待たなければならない！

役者　多分、印度か、アフリカから十字軍がやってくることになるでしょう！

亡命客の二　わたしは、奇蹟をだって信ずる。

亡命客の一　これは静かだ！　これは確に静か過ぎる！

亡命客の二　わたし達は、ここにいて危険ではないでしょうか？

役者　国境を越えるたびに危険の度が増してくる！

亡命客の二　黙んなさい！　これは真面目な現実だ！

亡命客の一　わたしは本当のことを言えば、亡命する必要がなかったのです。

亡命客の二　わたしだって、亡命する必要はなかったのです。それには、いろいろこみいった事情があったのです。

亡命客の一　わたしもそうです。わたしは裏切られたんです。

亡命客の二　わたしは、それとは反対に、裏切られたかったのです。

役者　はあ、これは面白い！　わたしは、わたしが裏切られなかったんだ！

亡命客の二　一体、君は、何のことを言っているのだ！

役者　無論女のことだろう！　でなかったら、いまごろ何だって、こんな死人の家にいるものか！

亡命客の一　わたし達の話は混線しています！

役者　そうです！　人がいないからです！　相手がいないからです！　聞く人がいないからです！　言葉の意味がなくなってしまいました！

亡命客の二　それで、わたし達はどうすれば宜いというのだ！

亡命客の一　わたし達は、何かはじめねばなりません！

役者　誰も人がいないのに、何をはじめるのです！

亡命客の二　わたし達は、進むことも、退くことも出来ない！

亡命客の一　わたしは、財産をみんな没収されてしまったのです！

役者（起ちあがって歩く）誰も、誰も、この夢の意味を説明して呉れるものがいないのだ！

亡命客の二　わたしには、信じられない！

亡命客の一　わたしには、生きられない！

ヒットラー　彼等は満足しているか！　彼等は、わたしの勝利に満足しているか？

ナチス党員　閣下が余り速く歩かれるので、大衆は跟いて

ゆくことが出来ません。

ヒットラー　わたしは空間と時間とを支配しなければならないのだ！　わたしの進む道はもっと、もっと、広くなる！　わたしは、世界の大衆が、わたしのために、道の両側を埋めるための準備をして置かなければならないのだ！

ナチス党員　閣下の計画には、いつも間違いがありません。大衆は閣下を信じております。閣下を救世主だと仰いでおります！

ヒットラー　だが、彼等は満足しているか？

ナチス党員　大衆はただ、閣下が満足の意を受取ってくださるだけの暇を持っていられないのを残念がっているばかりである。

ヒットラー　そうだ、わたしは彼等のためにたえず宣言しなければならない！

ナチス党員　閣下の言葉は、閣下の戦術と同じ位いに偉大です。ですが、閣下は、独乙の土地を離れられたときには、要心されなければなりません。わたしは、閣下に追いつくのに夢中で、護衛兵が後の方に遅れているのさえ気がつきませんでした。

ヒットラー　真直ぐな道に危険はない、わたしは、何処に敵が匿れているか、何が突発するか、いつでも知っているのだ！

護衛兵（前後して数人）閣下！　閣下は無事ですか！

ナチス党員　どうしたのだ！　何かあったのか？

護衛兵　ああ、無事で安心した！　閣下が、休まれたこの前のホテルの露台に曲者が闖入したのです！

ナチス党員　そして、どうした？

護衛兵　あまりに抵抗が激しいので、その場で射殺しました！

ナチス党員　そうか、それは、惜しいことをした。その附近をもっと捜査しろ！　その背後関係をつきとめて、一網打尽にするのだ！

ヒットラー　いや、いや、それで宜い、それで宜い！　背後に何があるものか。彼等はみな遅過ぎる、わたしの敵は、もはや、わたしに近づくことは出来ない。わたしの技術は、実力の戦術だ！

ナチス党員　閣下は天才です！　閣下の瞳は、千里のそとをも見抜くものです！　閣下に対する信仰こそ、独乙民族の誇りです。

ヒットラー去り、ハーゲン・クロイッツェルの旗を先頭に、独乙軍楽隊行進

役者　やっと人がいた、やっと人に会ったのだ！

亡命客の一
亡命客の二（殆ど同時に）何処にいたのだ！　早く教えて呉れ！

役者　世の中には、わからないものが、あるということがわからなければならない！

亡命客の二　何を言っているのだ！何処に人がいるのだ！
役者　あれは、何かでなくてはならない！
亡命客の二　何が、何かでなくてはならないのだ！
役者　工場があった、労働者が大勢いた！
亡命客の一　平和が来たのでさ！産業が復活したのです！
亡命客の二　ああ、何かが始まる、何かが始まるに相違ない！
役者　ところが、わたしは、あんな工場をいままでに見たことがない！
亡命客の二　ことによったら、革命がはじまるのかも知れない！
亡命客の一　何か秘密の軍需品をつくるのかも知れません！
役者　ちっとも工場らしくないのです。
亡命客の二　それでは工場じゃないのですか！
役者　ところが、死人の家を建設するところだと言うのです！
亡命客の二　誰がそう言ったのだ！
役者　人です。わたしは人に会ったのです。
亡命客の一　それよりも、みんなで見に行って確めましょう、わたし達は、ここを逃げ出さなければならないのです。
亡命客の二　そうだ。どうして宜いかが判らなければならない！

役者　先ず、働かなければならないのだ。
亡命客の二　何を働くのだ！
役者　人です。人がそう言ったのです。
亡命客の一　人が、人に、人の墓穴を掘らせるようなことが信ぜられるでしょうか？
役者　だから、わたしは、わからないものが、あるということがわからなければならないといっているのだ！
亡命客の二（蠟燭の燈が消える）ああ、わたしのところにも、悪霊がやってくる！
役者　生きているものは死ななければならない！　死んでいるものは蘇らなければならない！
亡命客の一　死人の家、桎梏の家！
役者　暗い！
亡命客の二　暗い！
亡命客の一　暗い！
役者　ヒットラーが来る。ヒットラーが来る！　生産しなければならない、生み出さなければならない！

闇　徐々に明るくなる。国境の街、難民の群。休みまた動き出す。手に手に、襤褸や些末な荷物を抱えている。小娘の手を引いた母親、先頭になって歩いてくる。

難民の群　まだだ、まだだ！　もっと先の方まで行かなく

てはならない！
難民の群　勇気を出さなくてはならない！　国境を越えなければならない！
難民の群　死の街、ここでも人がいなくなってしまったのだ！
難民の群　死が胸を叩いている。わたしは、もう歩くことが出来ない。
女の声　あたしの足のなかになにがあるの？
女の声　あたしの足のなかで何があたしを跛にしているの？
女の声　誰があたしの恋人をピストルで撃ったの？
母親（長い沈黙の後をうけて）もう、歩けないの？
娘　窓の下に、白い花束が置いてある。
母親　ああ、死の花束だよ。
娘　あたし帽子を捨てても宜い？
母親　どうして？
娘　だって重たいんだもの（帽子を捨てる）
難民の群　急ごうよ、急がなければならない。
難民の群　何処かで休まなければならない。
難民の群　もっと先の方だ！
難民の群　もっと、もっと先方だ！
難民の群　未来だ！
母親（長い沈黙の後を受けて）ああ、あなたの血しぶきが、あたしの胸に錨をかける。

娘　母さん！　もっと、もっと歩かなければならないの？
母親　ああ、世界がわたし達を待っているところまでね。
難民の群　急がなければならない！
難民の群　わたし達は遅れているのだ！
難民の群　わたし達は追跡されているのだ！

難民の群徐々に去り、後はハーゲン・クロイツェルの旗のみが高く翻っている。

（一九四〇年八月「文化組織」）

II 評論

散文精神について

広津和郎

突然この講演会に出演しろという迎えを受けて、私は此処につれて来られたのであります。私は前もって何を話そうかという準備はしていませんでした。それで自動車でつれて来られる間に思いついたのですが、この会の主事者である「人民文庫」の人達は近頃散文精神という事をしきりにいいます。その散文精神が何を意味するものであるかを私は詳かにしません。

併し「散文精神」という言葉には私も多少の責任を感じます。それは「散文精神」という言葉は使いませんでしたが、「散文芸術」というものについて、私は比較的早く物をいったからであります。――そこで私は今此処で「散文精神」について考えて見ようと思います。人民文庫の人達のいう事と一致しないかも知れない。併しこの言葉が、今こうしてこの時代に擡頭して来たという事について、私は私だけの解釈を此処で述べて見たい。

近頃はロマンティシズムの擡頭を主張する人達がありますす。林房雄君などがそれで、日本は今や大きな飛躍をしつつある。大陸に向って新しい飛躍をしつつある。そこに大きな希望があり、大きな夢があり、そしてそこにロマンティシズムの擡頭しなければならない理由があると、こうその一派は主張するらしいのです。林房雄君は文学者はもっと派手な服装をし、青や緑の……これは林君のいった通りの色ではないかも解らないが、兎に角そういう目立つ色の服装で、銀座街頭をねり歩いても好いのだといっています。外国のロマンティシズムの詩人達がそうして街を練り歩いたと同じように、われわれも今現在の日本でそうやるべきだと、林君はいうのであります。

併しそんな意味でのロマンティシズムが擡頭すべき理由が今果してあるでしょうか。そうではなくて、寧ろ私などはその反対だと思います。われわれの文化がロマンティシズム勃興を感ずる理由が、私には少しもないように思われます。寧ろその反対で、この国にはアンチ文化の嵐が、今吹きまくっていると思われるのであります。

それ等について詳しくいう事は許されませんが、アンチ文化の嵐といえば、多分諸君にはお解りであろうと思います。

こういう時代に人民文庫の人達が散文精神を主張されるのは、まことに理由なき事ではないと私には思われます。前にも申した通りこの散文精神という言葉に、人民文庫の若い人達がどういう意味を表そうとしているのかという事は、私は詳かにしませんが、併し私流にこの言葉がこの時

代にどういう意味をもつものであるかという事を述べて見たいと思います。

それはどんな事があってもめげずに、忍耐強く、執念深く、みだりに悲観もせず、楽観もせず、生き通して行く精神――それが散文精神だと思います。それは直ぐ得意になったりするような、そんなものであってはならない。現在のこの国の進み方を見て、ロマンティシズムの夜明けだとせっかちにそれを謳歌して、銀座通りを青い着物や緑の着物を着て有頂点になって飛び歩くような、そんな風に直ぐ思い上る精神であってはならない、と同時にこの国の薄暗さを見て、直ぐ悲観したり滅入ったりする精神であってもならない。そんなに無暗に音を上げる精神であってはならない。そうではなくて、それは何処までも忍耐して行く精神であります。アンチ文化の跳梁に対して音を上げず、何処までも忍耐して、執念深く生き通して行こうという精神であります。じっと我慢して冷静に、見なければならないものは決して見のがさずに、そして見なければならないものに慴えたり、戦慄したり、眼を蔽うたりしないで、何処までもそれを見つめながら堪え堪えて生きて行こうという精神であります。

私は散文精神をそう解釈します。人民文庫の人達の意見は知りませんが、私は今述べたもののように、それを解釈します。そしてこの言葉を人民文庫の人達が主張している事に賛成します。

林君流のロマンティシズムなど芽生える余地は現在のこ国には絶対にありません。それを何か黎明が到来したように早合点して、直ぐ思い上るような楽天主義に、その散文精神は絶対反対であると共に、又必要以上に絶望して悲鳴を上げるペシミズムにも、この精神は絶対反対なのであります。

私はこの散文精神と関連して散文芸術の時代的な意味をも述べたいのでありますが、その問題に入ると長くなりますし、又散文芸術については二三回書いたこともありますので、此処では述べません。私の話はこれで終ります。

（一九三八年四月頃「人民文庫」主催の講演会で講演したものの覚え書）

考える世代

岩上順一

「建設戦記」。それは戦争の絶対的な生死の関頭に立って、人間を内部から襲うであろうはげしい情感、ぎりぎりの刹那にむかってたかまりゆく全的意識と個的意識との燃

焼的な発炎的な熔合の過程——要するに兵隊が戦場に於いて感じるもっとも本質的な心理が、きわめて深刻にまでとはいえないけれども、すくなくともそれを超えてきたものの生活的な真実をもって表現され、そこにあるいくつかの場面は、おびただしい戦争文学のなかから後世に記憶されるであろうすぐれた描写の幾行かをふくんでいる。そればかりでなく、それらのデテイルをつなぐ全体的構成を通じて、戦争の全局面をひしひしとじかに感じさせるほどの情勢の概括力、文学的形象による時間の把握をしめている。そのなかでは、時が文学を把握すると同時に文学が時を把握するという正しい関係がここに見られる。

それは毛沢東が戦略規定でいう、第一期をすぎて所謂遊撃戦の段階に入ろうとする時期、徐州戦の側面牽制として時に北支山西にゲリラが猖獗してゆきつつあった時期、アグネス・スメドレーが第八路軍に従って黄河を渡り「北部山西省を三十地方に亘って踏破」しつつ、彼女の、文学的というよりむしろはなはだ宣伝的な且つはなはだ白人的な従軍記をかくためにタイプを打ってでもいたであろう頃、おそらくそこから山脈一つをへだてた「臨汾の古城から約一粁、大行の麓までの曠野を前面に眺める」小駅のなかで、夜、一人の兵隊が腹這いとなり、小さいローソクの焔を高くするために戦友の飯盒の上にのせ、故国の妻あててボロボロの半紙のなかに書いたのである。——集団十一コ列車を中心に、修理して推進したあとは一夜のうちに何粁

というほどの大破壊が行われているという敵中に、弾丸と血と汗とのなかで無我夢中の必死さをもって鉄路を修理建設する鉄道隊の苦闘のすがたを。再建橋梁のまだよく固まらないコンクリート橋脚の上を、最初の試運転列車がすすみ、その後部標識が完全に橋梁を通過したときの自失せんばかりの深い歓びを。

このような緊張にむかって単純にしかし力強くもりあげられる展開は、そこに生きかつ戦う兵隊のこころの、ほとんど叙事詩的悲哀にまで昂まろうとする人間的純粋さを物語る。孤立のなかに生きつらぬこうとする悲愴の美は、さながら民族の孤立的運命を象徴するかの如くだ。

やがて徐州戦が支那軍の敗走のうちに破れようとし、彼方孫圩城の近くでは「麦と兵隊」の作家の上に戦火ふりそそいでいたでもあろう時期に、山西ではゲリラの勢力がますます増加し、鉄道隊本部が敵襲にさらされる。激烈な夜襲防禦の鉄火のなかで、「決死の瞬間に於ける蘇生の甘い安らかさ」が去来し、生命と死との厳粛にして謙虚な会話がとりかわされる。「ほんぶ日記」の幾頁かは、おそらく「土と兵隊」のいくつかの激戦場面よりも、それが防禦的であるためにより深く心理的であり、「呉淞クリーク」のそれよりも行動的であるだけにより強く印象的である。

最後に「続建設戦記」では、遊撃隊の掃蕩、鉄路愛護、村の建設工作、やがて附近二十カ村の村民大会が開かれるまでの過程が描かれる。支那民衆との間に生れるであろう

新しい関係への大きな予想が読者のなかにひき起される、この大きな過程は、火野葦平が「海南島記」のなかでそれを描いたものとほとんど同じである。そこには山西の奥地と南支の洋上との間をへだてる特殊性は多分にあるけれども、しかしその本質的な進行の様相はまったく同じであるばかりでなく、それが現在の新政府運動の進行の様相をも萌芽の姿に於いてしめしているものであるというところに、戦争のこの段階を概括する文学の形象力の深さが見出されねばならないであろう。

私は上田広氏の「建設戦記」三部作を通じて、文学に於ける一つの側面、すなわち客観情勢の本質的概括、あるいは作品に於ける時の反映という文学的機能を見てきたが、そしてその限りではこれらの作品がきわめてすぐれた記録性につらぬかれていると同時に、その芸術的完成に於いても高いところに到達しているものであることを認めるものであるが、それにもかかわらず、茲に一つの疑惑をいだくことをどうすることもできない。

ということは決して記録文学を否定するものではなく、むしろその反対に私は記録文学の今後の発展に大きな希望をつなぐものであり、その文学理論が成長し深められんことを望むのだ。私の疑惑は記録文学の非芸術性などというものにあるのではない。なぜなら、芸術は元来記録的なものであるからである。そして記録とは元来記念碑的なるものの碑銘的な圧縮であり結晶であって、その形象化の過程はむしろ本質的に芸術の過程そのものであると思われるからである。また私の疑惑は記録文学の非構想性、あるいはそれの非虚構性などの点にあるのでもない。なぜならば記録文学は、もっとも高い意味で歴史過程に沿うところの構想性をもち、その構想は時代の真実に裏打ちされた詩的真実の境にせまり得るものであるからである。

私の疑惑はきわめて些細なことであるにちがいない。それは「建設戦記」三部作を通じて、自己の積極的な意欲と憤激と苦悩と焦慮とにみたされたところの、所謂積極的主人公が存在しないということ、主人公は決して積極的に自らを語ろうとしないということである。危機の最高潮には副主人公「日沢一等兵」が立ち現われて、ほとんど饒舌なまでに心理を物語る。戦争の心理を。兵隊の心理を。平凡なる一日本人の心理を。彼はおそらく幾万かの兵隊達の心理的代表者であり典型であるのであろう。

戦争に於ける人間の心理、兵隊の日常生活に於ける心理、それはたしかに記録されねばならぬし、更により強く探求されねばならぬであろうが、それにもかかわらず、文学は決して心理学ではなかったのだ。文学はきびしい非妥協的なモラルの追求であるのだ。戦争のなかに如何なるモラルが実現されるのであるか。文学は戦争の情勢と様相の報告ばかりでなく、戦争の目的、戦争の性質、戦争の歴史的な意義の把握なしには真の文学たり得ない。文学が時をつかみ、それゆえにまた時が文学をつかむという関係だけ

では足りないのだ。

たとえば岡田三郎氏の所謂伸六物のなかでは、なるほど帰還兵三田伸六は時を掴んでいる。彼が木炭不足にふれた時に、たしかに彼は時をつかんだのだ。そのことは彼がこの現実をさけて通った場合よりも遥かに立派なことではある。しかし、彼が買溜階級のために戦争にでたのではなく、他のなにものかのためにそこで戦ったのであるというところに自己を慰めるものを見出すことは多分に常識的である。問題はその他のなにものかのためというところにあり、その理解を深めてゆくならば、このテーマが全体的な逆転を蒙らないではすまないであろう程の重点がそこにかかっているのだ。彼は折角ふかい現実にふれながら、それを理解するのにきわめて通俗的な社会意識からそれをなしたのだ。

そこに導入された解決が常識的に現実的な見解からのものであるところに、この作家の現実主義の強さとともに悲哀がある。現実をつかもうとする作家的良心が、逆に現実の傀儡となってしまいがちだというところの現実的な文学の悲哀が。

しかしこの作家の伸六物はさらに前進する。「朝」のなかでの三田伸六には「日本と支那との悠遠な結合について の予想が、いつも頭のなかにこびりついて、はなれないのである」それゆえ、張という若い支那人コックとお仙という若い日本の女性とのあいだに生れた娘の身の上のことを思い、その思いは泥酔の無意識のなかに本能のごとくに生きて遂に「お土産をもって遊びに行く」こととなってくるのだ。「子供にたいする親の愛情をもって支那の民衆に接しなければほんとうの融和も提携もできるものではない。日支がほんとうに融和するためには個人主義的なエゴイズムは勿論のこと、民族主義的エゴイズムもすっかり清算されたうえでなければ絶対に不可能だ」とする伸六のこのような見解の当否はしばらく問わないとしても、すくなくともこのような見解が、すこぶる流行的に意識を支配しているという意味で現実的であることを指摘しなければならぬ。

たとえば尾崎士郎氏も同じくこの問題にふれて、「今支那へ行けば、支那の民衆とどうして結びつくかということが問題になっていますが、日本人が入って行く場合には、どうしても向うの民衆が無条件でそれを享け入れる人間でなければならない」と述べていられる。この二人の作家の言葉と、「今次の事変の特性は占領地域内に於ける支那民衆の獲得戦である」と議会に於いて説明した某軍人との間には、ほとんど見解の相違がないほどにこれらの思想は一般的現実的であるのだ。

しかし現実的であることがそのまま歴史的に真実であるということにはならないことも忘るべきではない。「こんにちはただ、生活戦線に刻苦する一兵卒的庶民の、生活環境についての経験、見聞、批判、感傷等々を文学のうえに

なまなましくたたきつけることが、文学の上の時代の『時』を刻みつける当面唯一の重要な文学実践である」という伸六物の作家の心構えは遙かにすぐれたものであるにもかかわらず、そのなかに作家の独自なモラルの探究、独自な歴史的展望を欠いているという意味で、そのような「時」のために文学が踊らされ操られるという危険を多分に感じないではいられない。そしてこの危険は記録文学に於いて、もっとも切実な危険となる。「時」の無批判的な記録はやがてその記録を「時」の文学的傀儡に化してしまうという危険となる。

私はここで再び上田広氏の記録文学的な作品にかえって行かねばならぬ。私は「建設戦記」三部作が、情勢の概括、時の把握という点に於いてきわめて高い文学的な価値をもつものであるにもかかわらず、そこに直接的に具体的に表現される筈の作家としての独自的な歴史的批判の意識が極度に抑制されていること、作家は不必要なまでに自己の見解、自己の苦悩、自己の意識をかたることに於いて、謙遜であることに一抹の疑惑をさしはさんだのであるが、この疑惑はこの作家の他の作品を見ることによって一つの解決に到達しうるように思われる。

この作家は、単に戦争の現実を記録するばかりでは決して済ますことができなかった。民族と民族との間に於ける戦争の運命、またはその戦争に於ける民族と個人との運命、これらのことについて思いをこらさずにはいられなかったし、その考えを形象によって小説のなかに纒めあげる内的な衝動をおさえるわけにもゆかなかった。私には、戦争を正面からとりあげた三部作よりも、それを側面からとりあつかった「鮑慶郷」や「帰順」のなかに、より多くこの作家の戦争的現実に対する作家的思考と解釈とが見られるように思われる。

たとえば「黄塵」のなかに表れる姑娘晉翠林の運命は、後に火野葦平が「盲妹の話」や「或る手紙」のなかで語ったよりも深く惨めな姿に於いて、戦争に於ける支那の女性の運命のすがたをものがたる。このような悲惨はいかにしても可能であるのか、それはいかにしてそのようになり得たのか。作家はこのような内心の質問を答えないままにすごせない。おそらく現実にはさらに多くの悲惨があり、彼女の背後には犇めくごとき民族の痛苦の表情がかさなり合っていたのであろう。作家はその奥にひそむものにふれずしてはすごすことができなかった。「鮑慶郷」の成り立ちはこのような作家のこころを外にしては理解できない。女主人公の運命は、後に「黄塵」のなかで、晉翠林が暗闇のなかから突然作家の前に出現してくるまでに辿らねばならなかったであろう生活の前史である。それを描くべき作家としての内的動機は、支那民衆の悲惨に対する人間的なる愛情からでたものであるにもかかわらず、彼女等の悲惨の原因が実は彼女等自身の生活環境の内部にあるものであって、戦争の外的破壊の下に生じたものではないというこの

作の解決は、組織された近代的軍隊の中にいるこの作家の自己に対する弁明の態度を反映する。

このような自己弁明の態度は、「黄塵」の中にあらわれる抑子超との会話のなかにもっとも端的にしめされる。

「私たちは支那人であってすでに支那人ではありません。生きてゆくためにはやむを得ないことなんです。うかうかしちゃいられないんです。亡びる国よりも、これからどうするかが問題ですからね」

このような思考は、現実の支那人の一部の型を代表するというよりも、むしろ作家の方でその答えのなかに自己を安心させるであろうものを求める心理が強いのである。

このような作家の態度はやがて一つの主題のなかに成長し、それ自身として纒った構図のなかに表現される。「帰順」はすなわちそれであろう。支那の兵士達が、遊撃隊として鉄路破壊や、占領地の民衆獲得のために戦わねばならないのであるのに、却って民衆からの掠奪と圧迫と暴行とにすさんでゆくその過程に於いて精神的に自己崩壊をきたし、ついに日本軍に投降帰順するというその筋書の展開には一つの無駄もない。その細部は精緻な心理と行動の追求にみたされ、その構成にはいささかの弱味もないのであるが、しかし、帰順の行為が作家の構図どおり正しくわれわれに納得されるよりさきに、作家自身の心理的弁明の態度がわれわれのこころに映ってくるのはなに故であろうか。即ち作家自身のある無上なるものへの帰順の態度とそのような帰順を外的事実のなかに具象化したものではないかという二重の錯覚に。

人はこれを読んで或る二種の錯覚におそわれる。即ち作家自身のある無上なるものへの帰順の態度とそのような帰順を外的事実のなかに具象化したものではないかという二重の錯覚に。

人はこれら帰順者達の行為と思考の発展を辿るうちに、強い意識の分裂を感じてくるであろう。最初は彼等の抗戦内状に対する深い興味が起され、やがてそれに対する否定的なモチーフが内部に発生して来て、最後には抗戦と帰順との二つの心理がたがいに相争いつつ次第に昂ってくる。掠奪の場面でこの心理葛藤は最高潮に到達する。これら帰順心理の発生過程の背後には、作家自身のある否定しがたい巨大な現実への帰順の心理がひそめられているように思われる。

帰順の心理はけっして大向うの喝采をうけるものではない。けれども弁明の心理のなかには現実にたいする人間の弱さのうめき、良心と肉体との真実のせめぎがない訳ではない。むしろそこに真の人間性があったのだ。なぜならば、人間性は真に一徹な抗戦態度のなかにモラルとして現われると同時に、時としてその抗戦を放棄せざると得ない心理的過程、いわば人間の弱さのなかにもあらわれ得るからである。この作家は単純な正義感から見れば卑しむべき帰順兵のなかに、人間がもつ人間的な弱さを見、それに深くまた広い客観的な背景をあたえた。このような人間性とそれをとりまく歴史的客観的背景との理解は、さきにのべた文学の情勢概括の機能とはまた別個の、しかしそれとは

密接にむすびつけられた他の一つの文学機能であって、この二つの機能の正しい統一のなかに文学作品の生活がいとなまれる。文学は現実を客観的に把握するばかりでなく、その客観的現実のなかにある人間性のうめきをききとらねばならぬ。

上田氏の作品のなかでは、不幸にして一つの機能はより多く一つの作品の中に、まだ他の機能はより多く他の作品のなかにという風に分割された傾きがないではない。

けれども、現実情勢のなかに於いて生きかつ苦しむ人間性の探求に一層深く傾いていると思われる「鮑慶郷」や「黄塵」や「帰順」等の作品は、日本文学に於いて正面から支那民衆のこころを心情をとりあつかったものであるという文学史的な価値は別にして、今日、如何にして中国民衆との間に正しい関係をとり結ぶべきであるかということが、単に政治的な課題の埒をこえて、一つの深い民衆的な関心事となっているときに、たしかに特殊の文学的な意味を帯びてきつつあると云えるであろう。なぜならば、尾崎士郎氏のいわれる通り、現在中国インテリゲンチャ階級を支配するものはプロレタリア文学であって、それは「支那ではますます煽りをうけているから、非常に卓越したところの信念も強いし実行力ももっている。こういう中国の作家の動き方を見た場合に、我々は支那の民衆と結びついて、支那の民衆のなかに何か日本的な感情を植えつけなければならぬ時に、日本の文学者には、それに適応する方法がない」と見られているからである。私にははたして支那民衆のなかに日本的な感情を植えつけることが、はたして必要であり、必然であるかどうか解らないけれども、すくなくとも、彼等との間に正しい関係を結びつけるためには、日本の文学者のなかに、それに適応すべき一つの態度があり、しかもすでにそれは上田氏の前述の作品のみならず、他の作家の多くの作品のなかで、それぞれに試みられつつあることを知っている。もっとも深く必然的なその態度は、結局人間と人間との間に生れる本源的な愛情によるものであって、人間性に基づかない如何なる方法も結局において無力なものとなりはてるであろうと思われる。だがこのような人間性も、ある情勢のもとでは無力となり無効なものとなることもあるだろう。戦争の現実がそこにある。

このような人間性と現実とのせめぎは、邑楽慎一氏の「軍医転戦覚書」を貫ぬくものとなっている。たとえばその中の一小短篇、「子牙河の船」のなかにあらわれる馬戉春少年が、支那兵の遺棄死体を埋葬した日本の兵隊から、「お前も今のうちにあの墓に行って来い」といわれてその墓に参って帰ってきた後、軍医から頭を撫でられると、さも安心したような顔になって私を見上げたが、急に少年らしい激情に襲われたらしく、顔を歪めると激しく嗚咽しはじめた時に、この少年の激情は、さながら現実のきびしさにしめつけられる人間性の嗚咽であったのだ。それは人間性の敗北でありまた人間性の勝利である。

少年が自国兵士の墓に参った時に、それは日本兵士の愛情に敗れたのだ。少年が激情的に嗚咽しはじめた時、少年は自国兵士への愛情において日本兵士に打勝ったのだ。また逆に、少年が墓に参ったときに、彼は自国兵士への愛情について日本兵士をまかしたのだが、彼が嗚咽しはじめた時に、彼は日本兵士の愛情に敗れたのだ。おそらくこの二つの場合が同時に彼の無垢なるこころの中に衝突し、それはほとんで特徴的なまでに高い激情となってほとばしる。

「軍医転戦覚書」はこの一篇のこの場面のなかで、人間性の無力とその無限の有力さとの間の格闘の頂点をおどろくべき渾爾明快の筆をもって再現する。われわれは支那民衆との間の正しい関係の建設にあたって、いたずらに絶望することの無益であることを、これらの作家から学ぶのである。

現在なお戦争が行われており、幾十万の若き世代が大陸に於いてきびしい現実の前に立ち、その現実について日夜考えずにはいられないであろうことを、私は知っている。また幾十万の考える世代が、既にその目で見てきた現実に対し、覆うことのない思考のなかに沈潜しつつあることを知っている。彼等はいまだ無言である。しかしその沈黙のなかで、経験と印象とは日毎に心内に成長し、語るべき言葉はますますするどい形象のなかに凝結し、それはやがて幾多の文学的作品となって現われてくるであろう。いいかえれば今日は、火野、上田、日比野氏等の戦争文学が、それぞれに歴史的役割をはたして、次に生るべきより高い戦時的文学のために、自己の内奥に向けて思いを凝らすべき時期に入ったのだと思われる。批評はまさに彼等の文学的成果を決算すべき時だ。

私は主として上田氏の作品を借りきって、そのなかから客観情勢の概括力と、その現実に於ける人間性の把握力と、この二つの文学的側面をとりいだした。前者にのみ執着すれば文学は現実の傀儡となりおわる危険に当面し、後者にのみ傾けば、人間性の内容は貧血的な空虚さになやまなければならぬであろう。

この二つのものの肉体的なる統一を、一つの文学的作品のなかで実現することが将来文学の課題であろうと思われる。しかしそれを果すためには単なる文学技法上の練磨だけをもってしては絶対に不可能であって、そこに生活的な実践的な立場と経験とをもたない文壇的作家のなかからそれを期待する心よりも、むしろ無数の現在戦線にある若き世代、または無言の帰還せる世代のなかに、それを待つ心の方がはるかに強いことを私は断言する。

（一九四〇年四月「中央公論」）

文化政策への期待

窪川鶴次郎

文化と政策

大政翼賛会の成立と同時に、同会に文化部が設けられることになり、更にその部長に岸田国士氏が就任することになって以来、今後の文化或は文化政策に対する関心が急激に昂まって来た。これは勿論、大政翼賛会の運動に対する、人々の大きな期待の現れであろうが、そこには、部長としての岸田氏が作家であるということと、その活動経歴とに対する人々の期待が織りこまれているに違いない。

ところで、ここに考えられることは、これまで私たちは、文化というものを、文化政策という見地から考えることは殆どなかった、ということである。そう云っては断定的であり過ぎるとしても、そのように思える、ということは見のがし難い事実であろう。

文化政策がなかったわけではない。が、それにも拘らず、文化政策の見地から考えてみるとか、考えてゆこうとする努力は余り見られなかったのではなかろうか。

そういう伝統がなかったのだ、と云えばそれまでであるが、このことは今日の文化の特質を語っている。と同時に、このことは従来の政治と文化との関係の仕方にも由来しているのではなかろうか。

或る映画に関する座談会で、関係当局者の口から新たな文化についての言葉として文化警察という言葉が使われているのを読んだ記憶がある。今日では経済警察という言葉が頻りに使われる。これは経済に関する警察行政の意味であろうし、それは統制経済にとって必須の重大な役目を持つものに違いない。このことから推してゆけば、勿論文化警察というのも考えられないことはないであろう。

然し経済警察という言葉とは違って、文化警察という用語は不自然な感じがないとは云えぬであろう。が、それは兎も角として、この言葉は、日本における政治と文化との関係の仕方を想像せしめる。つまり日本の文化は、取締ることと取締られることにおいて、主として政治との関係が考えられて来たということ、それがいつの間にか文化政策として考えられて来たのである。しかも人々は、特に知識階級、文化人は、この種の文化政策を文化政策としては考えなかった。或は考えたがらなかった。

このことは文化政策に対する二重の疎遠を伝統的にやしなって来たのである。

取締もまた文化政策である。然し、云うまでもなくそれは、文化政策の強力な一面ではあるが、全部ではない。

ここに更めて説くまでもなく、一般に文化政策には、文化の創造に対する政策が含まれている。そうして本来的には、つまり政治の文化に対する本来的な関係、或は政治の文化的使命から云うならば、この文化の創造に対する政策こそ、一般文化政策の基礎とならねばならぬであろう。私たちは先ず文化政策に対する偏見、執拗に私たちの心理の中に喰いこんでいる偏見を自覚して、真の文化の創造に対する文化政策という観念を把握しなければならぬ。

知識階級或は文化人の、大政翼賛会の運動に対する期待、更に岸田氏が部長に就任したことに対する期待は、この創造のための文化政策に対する期待が、暗黙のうちにも人々の心を把えているからではなかろうか。

取締は一言で云えば、文化に対する政治の必要という観念を最も端的に、直接に示したものであり、具体的な形においてそれを実現したものである。私たちはそこに、明かな文化の効用を認めることが出来るであろう。

私たちはこの意味では文化の効用、功利性を認めることに躊躇しない。

ところが他方で私たちは、文化の創造、という立場においては、文化の効用、功利性ということを考えようとしなかった。むしろそう考えることを頑強に拒否して来た。ここに世に云われる文化主義の偏見が発生した一つの根拠がある。また先に述べた今日の文化の特質の一面がここにある。

ところで文化の効用、文化の功利性を考えることなくして文化政策はあり得ない。云い換えれば、文化政策は、文化の創造という立場から真に効果、功利性が考えられてのみ存在する。この見地から私たちは従来の文化政策及びそれに対する一般の考え方を、ここに確りと突きとめてみる必要があるであろう。

政策の理想

検閲その他の取締や、映画法、興行法などにおける文化政策は最も具体的な形で、直接的に現れるが、然しその政策の根本の精神、方針から見れば、極めて消極的なものであり、その精神や方針を具体的に実現してゆくためには、極めて不明確であり、不充分であり抽象的であることをまぬがれない。

何となれば、本来の文化政策は、価値の全面的な、且つ積極的な評価を含んでいなければならない。更にすすんで、特定の価値を探求することそれ自体が、文化政策の根本の精神、方針とならねばならぬからである。

この意味から云えば、文化勲章や芸術院などの制度の設置は、従来の取締の面における文化政策からは、ずっとすすんだ、積極的な価値評価を、意志表示したものと云える

であろう。

取締その他の当面の対策、当面の処理を主眼とする文化政策は、それが、非全面的であり、消極的であり、抽象的であるだけに、本来の、文化の創造のための、一般的な文化政策の精神や方針との間に有機的な連関を密接に確保し、その精神や方針に充分に沿うことが出来れば出来るほど、文化政策は円満に遂行されることが出来るわけである。

これに反して、非全面的な、消極的な、抽象的な意味をより多く持った文化政策が、本来の文化政策から離れて、当面の実際的な処理の上で強化されてゆけばゆくほど、文化と政治との概念はいよいよ別個なものとなりゆき、そこにしばしば対立的な観念さえ生れる虞れなしとしないであろう。従来見られた如き、政治と文化との意識の上での矛盾、融けがたい対立の観念は、文化の効用、功利性を否定する、所謂文化主義のためばかりではない。上記の如き文化政策の跛行的強化にも由来していることが多い。そこに「文化の擁護」という思想も生れざるを得ないであろう。

岸田国士氏は、今日は文化の擁護というような消極的な態度を捨てて、文化の建設のために協力しなければならぬということを強調されていた。確かに「文化の擁護」という思想は、その擁護という点にのみ止まって、擁護されるべき文化に立脚するところの文化政策を樹立しようと努力しないならば、それは文化をどこまでも政治から離れたところにおいて擁護しようとするに他ならぬであろう。

政策は特定の目的を実現するための手段である。一般に政治は、目的のためには手段を選ばない、ということがしばしば云われている。或は信じられてさえいる。然し如何なる政治も、尠くとも文化に関する限り、その政策はこの通説をそのまま認容することは出来ないであろう。

科学、芸術は云うまでもなく、一切の創造物は、その創造においてそれ自体の内的発意とそれ固有の内的方法を持っている。一寸の虫にも五分の魂があるのである。文化は高度になればなるほど、より完成されたそれ自体の内的法則を強固にしてゆく。特定の時代における一国の文化の形式の純一性と完璧性は、要するにこの内的法則の完成を語るものに他ならぬ。

文化政策は、この創造の生命を無視することは出来ない。文化政策の目的は、常に創造の内的必然性の中に、その目的のための手段を見出さねばならぬ。

政策の理想は、一般には、その政策が実現されることによって自らが対象の本質の中に消え失せるということである。これは技術の問題においても同様であろう。技術は技術として止まることは出来ない。それはただ、製作或は創造の過程において、ひたすら対象の実現と完成のために役立つことのみを使命としている。そして製作或は創造の過程において技術は対象そのものの中に転化する。

然し政策は、殊に文化政策は、それがただ対象そのもの

として実現され、自らは消え失せるということだけが理想なのではない。それは更に新なる創造への欲求、情熱を潑剌と喚起するものでなければならない。

このことを逆に云えば、文化政策は、創造への欲求、情熱によって、自己の政治的目的をより一層高め、発展せしめられなければならぬことをも意味している。

ここに政治と文化との真の交互関係が結ばれる。またここに文化政策の限界と、批評に対する関係の仕方が考えられるであろう。

政策と批評

あらゆる政策の中でも、特に文化政策について考える場合には、私たちは文化政策というものの持つ限界性をも、はっきりと考える必要がある。新たな文化政策の樹立ということが既に想像も及ばないほど大変なことであろう。だがまた、文化政策は樹立されさえすれば、それでいいというわけのものではあるまい。

ところで一般の空気から察するに、文化政策に対する知識階級或は文化人の大きな期待の中には、いつか文化政策に対して、一切の期待をかけているかのような心理が感じられないではない。

勿論、文化の仕事に携わる人たちが、文化政策さえ樹立されれば、すべて問題は解決したのだ。ただその政策にそって仕事をやってゆけばいいのだ、と思っているなどとは考えられない。然し私たちは次のことは充分に承知していなければならぬであろう。

文化政策は決して文化のために何から何までしてくれるわけでないということ、文化政策は文化に対して、あらゆる規定力、規定性を持っているわけではないということ、そんなことが文化政策にとって可能なわけのものでもなかろう。

例えば文芸政策は文学論ではない。文化政策もまた文化論ではない。つまり、文化政策は、文化一般乃至は文化の各部門に対する理論には違いないが、それは国家の全生活が持っているところの要求と必要とを明かにして示そうとするものに他ならない。文学それ自体における理論は飽くまでも文学論なのであって、文芸政策とは自ら別個のものである。文学論乃至は文化論が文芸政策乃至は文化政策に置き換えられることは出来ないであろう。

云い換えれば、文化政策そのもので文化を割り切ることは出来ない。文化政策が文化に対して、あらゆる規定力、規定性を持っているわけではないというのは、要するに文化政策で文化を割り切ることは出来ないという意味なのである。

然し文化政策に対する期待の大きい今日、その期待の大きさのために、一切の文化に関する理論や論議を、文化政策の中に還元してしまうような傾きがないとは云えないで

あろう。それは政治と文化との混同である。それは根本的には政治と文化との乖離の裏返されたものに過ぎない。

重ねて云えば、文化政策は根本的には、文化の創造に対する政策である。そして、そうである限りは、文化に対する特定の価値評価を要求している。然しそれは政治的な価値評価である。かつて芸術の功利性とその政治的意義とを主張した見解に対して、それは芸術の政治的価値のみを要求するものであるとか、芸術の中に芸術的価値と政治的価値との二つの価値を許容するものであるとか、という反対論があった。これが、芸術の一切の功利性とその政治的意義を拒否する、今日の所謂純文学の過去における理論なのであった。

確かに、芸術、文化の価値は、それ自体としてはどこまでも芸術、文化の価値である。これは自明である。だがまた政治のあるところには、欲すると否とに拘らず、すべてが政治的評価を受けざるを得ないということも、拒否することは出来ない。かつて純文学が芸術の功利性とその政治的意義を否定したのはただその主義において、拒否出来ると信じただけなのである。

政治の文化、芸術に対する政策は、両者の間に一般と協力を求めようとする意識的な関係が成立するとき、それは初めて創造のための政策となることが出来得る。

然し、だからと云って、政治的評価は、芸術的に評価されたものが、一般社会生活の中では、具体的には如何なる形をとるものであるか、その形に対する想定があって初めて、政治的な評価は行われる。ただ順序として、政治的な評価が芸術的な評価の後でそれに従ってのみ必ず行われるとは限らぬだけである。

再び——文学に対する検閲、取締は、云うまでもなく一国の文化政策に他ならぬ。だが検閲、取締が一の批評であり、最も強力な実践的批評であるということは、一般にあまり重視されていないようである。若しゲッペルスが批評無用論を主張したとすれば、それはおかしなことになるであろう。

検閲、取締は、文学作品の価値を評価することなしには遂行できない。そして批評とは価値評価という行為に他ならない。

ただ検閲、取締が、批評家の批評と異るところは、前者が必ずしも、文学作品をその生きたままの全一的な形に即して、その全一性を通じて批評することを必要としないということだけなのである。それは使命の相違によるのではなく、両者の役割の相違に基いている。

ところで、本当は価値評価などそんなに簡単に出来るものではない。それは窮極においての価値評価なのだ。そうして批評家の批評は窮極における価値評価のみならず、そこに達する過程を眼ざして成立する。ところが検閲、取締は、その窮極の価値評価だけを目的としている。そしてこの目的を遂行せしめるものは、時の政治であり、ここには

文学的過程の代りに政治的過程がある。

だが、そこから、政治的価値と芸術的価値との、二つの異る範疇の価値が出てくるわけではない。芸術作品の価値は芸術的価値以外のものではあり得ない。

新文化の建設にあたって、検閲、取締に対するこのような釈然たる理解が強調されねばならぬであろう。

文化政策は、真に創造のための文化政策は、常に文化、芸術のかかる文化的、芸術的な評価との接触面に立っている。その時にのみ政治的評価は文化、芸術の独自性に即して行われ得る。またそうでなければ、政治と文化、芸術との間の、一般と協力を求めようとする意識的関係は成立し得ぬであろう。

ここに批評の一般的な使命、役割について述べることは出来ない。が、価値評価のあるところに批評のない筈はない。というよりも、文化政策の理想は、高度の、すぐれた批評を必至とするであろう。

新たな構想

新たな文化政策が樹立されるにあたって、私の思うのに、先ず第一に考慮されねばならぬことが二つある。

一つは、日本の現代文化が質的に均等でないということと、次は文化に対する抜き難い偏見が存在するということである。そしてこの偏見は、前者の、現代文化が質的に均等でないということによって主としてやしなわれて来たものである。

ここで云おうとしている第一の問題は、決して現代文化の質が社会的に均等でないというような事柄を意味しているのではない。また私が、椅子、テーブル、ベッドの生活に終始していながら、他方では着物と下駄だけの生活をしているというような、直接に個人の生活形式上の利便や好悪や趣味などに関する事柄でもない。

簡単に云えば、例えば個人の実際的な生活形式の中にさえ特定の文化についての観念の相違を見出さずにおかない、というような実情こそ、日本の現代文化の不均等を物語るものであろう。

私はまさかとは思っていたのであるが、或る日新宿駅の前で、着物でもこれ以上に安あがりのものはないと思われるような洋装の娘たちが、これから何処かへ遊びにでも行こうとして、一緒に働いている仲間を待ち合せているらしく、四五人でお喋りをしているところへ、一人の顎髯をはやした和服の男がじりじりと寄って来て、矢庭に一人の娘の髪を後ろからきゅっと引っぱって、それから何かぶつぶつ云いはじめた。彼女らの髪はその洋装と同じ程度の安あがりのものではあったが、兎に角パーマネントらしいもので、それでやられたらしい。私はかねて聞いていた噂を眼のあたり見て、その情景に悲しく身体がふるえて来た。

これに類した事柄に関して、最近は瑣末主義とか行き過

ぎとかが批判されているようでもある。然し瑣末主義や行き過ぎが問題なのではない。瑣末主義の中にさえ、様々な、文化についての全く相異る観念が根強くひそめられているということが重要なのである。古いとか新しいとか、西欧的だとか日本的だとか、ということで片づく事柄では尚更ない。

現代の文化ほど、文化についての全く相異る様々な、錯雑した観念を含んでいるものはない。日本の現代文化が質的に均等でないというのは、様々な文化がそのものとして雑然と同居しているというような外形上の事柄ではないのである。

時局に沿うか沿わぬかという見地から、今日の文化が見られる必要があることは明かであるが、上記の様々な文化観念の相異を、一々その見地に結びつけて、文化観念の相異を同時に時局に対する見地の相異であるかの如く見做そうとする傾向が若しあるならば、それは日本の文化にとって、ただその時局に対する善意の主観を尊重するということにさえ代え難い問題である。

翼賛会の文化部長岸田国士氏も出席していたが、或る新聞に過日連載された『新文化の発足』という座談会で、話題にのぼった事柄で注目されたことの一つは、私たちが共通の言葉を持っていないということの指摘であった。言葉ほど文化の本質的な観念、性格を表示しているものはない。共通した言葉がないということは、要するに文化についての統一的な観念が欠けているということである。

三木清氏が座談会の席上で、大陸の文化政策と関連して逆に内地を見た時一番必要なことはなんだろう、と云ったのに対して、豊島与志雄氏は、

「僕は一つの言葉でいえば本当の意味の通訳だね、まず通訳が必要だと思う」云々。

と云っている。このことは三木氏が「例えばナチを見てもその主義とするところはナチオナール・ゾチアリスムスなんだが、あれを、ドイツ主義といったって誰もついて来ないね、ところが日本で日本主義といっているのは、ドイツに於てドイツ主義というのと同じで、それをナチの国民社会主義というように現代的に新たに規定しなければ本当の魅力は出て来ない、日本主義ということが何か特別のように考えられているんだからおかしいんで、其処に文化の欠陥があるんだね」と云っていることからほぼ想像できるであろう。

正に豊島氏が「まあこれに共通の言葉が出て来れば大した文化運動なんだよ」と云っているとおりである。新たな文化政策の樹立は先ずこの文化観念の統一化を眼ざさねばならぬ。統一化は如何にして行われるか、これが知識階級、文化人にとっての協力の中心的な課題ではないだろうか。

（一九四〇月十一月）

ホワイト・リスト論

中島健蔵

新体制運動は、根強い決意を促し、先々の困難を予想せしめつつあるが、最初から、一つのバロメーターのようなものがあり、その針の動きによって、明るくも暗くもなるように思われたのである。新体制運動の最も明るい面は、黒表主義からの白表主義への転換によって示された。此の動きが、少くとも心理的に極めて重要な意味を持つことに就いて、改めて注意を促したいと思う。黒表とは、いうまでもなくブラック・リストであり、白表とはその反対のリストである。人間を見る時に、先ずその弱点に注意し、不都合を嗅ぎ出し、敵対関係を想定し、やがて、決定的に提携の可能性を絶ち切るものを黒表であるとすれば、全くこの逆に、先ず相手の長所を探り、適当な場所に置かれた時の活動力を想定し、協力の可能性を求め、やがて提携の実現を期するものを仮に白表と名づけたのである。前者は排撃し、後者は鞭撻する。前者は門を閉じ、後者は協力の手を握り合うのである。

新体制運動は、いうまでもなく、国民の協力一般を要望し、最も適切な再組織によって各方面の機能をいやが上に充実せしめようとする運動であった。摩擦を完全に避けようとすることは、一種の理想にとどまり、時には、却って現実を悪化せしめる怯懦に等しいかもしれぬ。しかし、対立や摩擦を考える以前に、先ず協力を考えるというのが、新体制運動初期の性格であった。黒表を作って陰性な対立を醸成する代りに、先ず同志的な白表が必要だったのである。たとえ相争うにしても、振りかざす武器は互の白表であり、互の人物地図であると思われた。此のような気構えは、極めて健全であり、且明るいものである。消極的な批判主義から、積極的な創造主義への転換も、此のような心理的基礎を欠いては行われ得ないのである。

しかし此の明るい白表主義が、果して徹底したであろうか。我々は、白表と黒表とが裏表であることを知っている。白表と黒表との間には、そのいずれにも属さぬ中間の存在が無数に存するのであるが、彼等は、白表から洩れたことによって、屡々黒表中にあるかのような不安を感じ、又黒表中に自己の名を見出さぬことによって、何等の反省もなく、直ちに安堵を感じ勝ちであるかも知れぬ。否大部分の人間は、黒表や白表の存在に無関心であろう。多くの者が此の存在に敏感となるところに、一種の不健康が発生し、明るさが暗さに変ずることも考え得るのである。のみ

ならず、多くの者は、白表と黒表とに対する神経の尖ったところでは、そのうちに含まれる人間の位置が却って曖昧であることに感づいている。党派関係の存するところには、常に白表と黒表とが備えられているが、一方に取っての白表的人物が、他に取っては黒表的人物であり、又その逆も当然考えられることを知っているからである。新体制運動は、先ず既存の党派の解消からはじめられた。そしてその目標は、白表の再構成であった。かくして多くの人々は、いずれも自己の白表性を信じ、勇躍して此の運動に赴こうとしたのである。

到るところに白表の再構成がはじまるに伴って、一種の反作用が生ぜざるを得なかった。示された白表が、自己の意に反すると感じた者も居るであろう。しかしなお白表主義は勢力を持ち続けていた。人物発掘がいたるところで企てられた。「手弁当主義」は、白表主義と同意義である。国家の大事を思い、公共の活動に身を投ずる決意に変りはないであろう。ただ注意を要するのは、相異なる場所で作られた二つの白表は屡々一致し難く、その二つを加えて更に大きな白表を成すことが困難だという事実である。新体制運動の初期に於ける努力は、やがて白表と白表との加算に移って行った。これは、行うにつれて益々困難となる大仕事である。白表を白表たらしめるためには、決然たる結合と、極めて速やかな再分科とが必要なのである。いわば、白表的認識が成立するや否や、直ちに白表を白表たらしめる根拠、即ちその白表に関する機能に人々を赴かせなければならぬ。専門的団体結合の成否でさえ、再分科の用意如何による。仕事の種類は、無数に存するのである。すべての文字者が必ずしも宣伝文に長じているわけではなく、又具体的な目標を欠く科学者は科学者の名に値しないであろう。ただ、それ等の専門的領域の風通しが悪くなっていたのを大きく打開し、共通の目標を再認識した上で、再び直ちに専門に就くというのが、職域奉公の精神であった。此の用意のある限り、人々は一応、白表的人物たることを認められ、又斯く自認し得たのである。驚くべき白表の膨脹が、新体制運動に於ける明るさの山であった。卒直にいえば此の明るさは曖昧に明るすぎたともいえよう。

ここまでは、とにかく白表主義の一本槍で進み得た。白表の構成は必ずしも黒表の存在を不可欠の前提条件とするものではない。或る定められた機能の実践に適するか否かを、出来得る限り明確に判定し、よしと認められ、将来の実績を予想し得る者を推すという手続きだけで、十分に白表は成立するのである。しかし此処には、重大な陥穽がある。それを認知すると否とによって、明るさと暗さとが分れるような岐路である。

既に云った通り、厖大な白表は、公共性を維持する為には、直ちに適切な再分科によって整理される必要がある。莫大な研究費を要しそれを分散するよりは、一ヵ所に集中する方が大きな成果を期待し得るような場合には、直ちに

そのための白表が作られなければならぬ。他の比較的地味な研究に当るべき人物が少いとすれば、その必要を明らかにし、之に当る者を萎靡させぬような手段を講ずると共に、やはり新たな白表による拡充が行われなければならぬ。そのような白表が、各々の専門領域に於いて自動的に行われることが最も望ましいのであるが、岡目八目の弊が多く、中々うまくは行かぬのである。

　しかし、白表の整理が依然として白表主義によって行われ、白表が更に白表を生むとすれば、此の困難もやがて解決し得るであろう。何となれば、以後の判定は、更新された実績主義によって明かにすることが出来るからである。

　不幸にして既に云った通り、白表は、屢々黒表の発生を不必要に促すことになる。自己の白表を維持せんが為に、他の白表を曇らせ、之を黒表化する傾向が生れるや否や、甚だ憂慮すべき不健康状態が生ずるのである。白は清純なものである。従って之に一点でも泥をぶち込めば、もう使い途が無くなり、洗濯に大苦労をしなければならぬ。洗濯に努めているうちはまだよい。互に汚し合うようになれば、もう収拾がつかぬのである。目前に国家の大事をひかえ、無数の白表を要する時に、薄よごれた白表が散らばることは、最も警戒しなければならぬ。

　新体制運動は、曖昧なる明るさの極限を過ぎて、明かに白表再分科時代に入っている。万民翼賛を実現するためには、今こそ白表主義を強固にし、何よりも先ず実績を挙げなければならぬと信ずる。我々は、正にその最々困難な峠にさしかかりつつある新体制運動が、外見上、若干の停滞を思わせることがあっても、常に前途に明るい光を望ませる大運動の途上に於ける見かけ上の足踏みであることを、固く信ずる者である。

　こういう時期には、白表主義の維持が多少の困難であると感ぜられ勝ちである。のみならず、具体的な目標の明かでない白表主義の強調は、却って隠微なる黒表の発生を醸成する危険がある。白表は常に明かであるが、黒表は、本来の性質として闇から闇に動くものである。従って、漠然たる白表主義の主張の代りに、まず白表再組織の基礎条件たるべき仕事の具体的な条件を明かにすることを考えたいと思う。日本は現に何を欲し、何を必要としているのであるか。我、或は汝が何を欲し、何を必要としているかを問う前に、目標の公共性を明かにし、白表の中に私心の混ずることを能う限り防ぎたいのである。白表を作る者は手をすすぎ、口をすすぎ、心を清くして、先ず己を棄てなければならぬ。

　新体制運動は、健康なる白表精神を失わぬ限り、どこまでも伸びて行くであろう。日本人が富士山を愛し、之を仰いで心の清まるのを覚えるのは、正に白表精神のあわれである。しかし、一歩誤れば富士山は低俗な絵看板のペンキ塗りに化けてしまう。新体制運動の本来の性格たる白表の精神を生かすか殺すかは、一に之を想い描く者の精神によ

るのである。

（一九四一年四月）

「二葉亭的と鷗外的と」

除村吉太郎

如何なる時代にも様々な種類の新しさがあるものである。明治二十年代には二葉亭も新しかったし、鷗外も新しかった。しかし二人の新しさには本質的な違いがあった。二葉亭は現実への肉薄を示し、鷗外は現実からの乖離の傾向をもった。二葉亭が所謂口語体形成の光輝ある功労者となったのは単に珍らしいものに走ったためではなく、現実再現のための最も必然的な形式を探求した結果である。彼が巷間に喜ばれていた円朝の落語のスタイルや徳川時代の町人文学の代表者式亭三馬の会話の文章に注意を向けたのは偶然ではなかった。二葉亭は「聞きたり」を「聞いた」に、「重ねたれども」を「重ねたが」に代えると共に、多くの巷間の語彙を文学に取り入れたのである。「浮雲」には難しい漢字も使ってあるが、それらに巷間の言葉としてのルビがついている。「軽躁」は「かるはずみ」であり、「擲却して」は「ほうりだして」であり、「粛然として」は「ひっそりとして」である。現前の現実をより効果的に再現するためには「高尚」な漢語の代りに巷間の卑近な言葉をそのまま用いなければならなかったのである。

鷗外の文章も一種のハイカラな新しさをもっていたことは疑いもないが、彼が会話の言葉をさえ文章体で書いたことは日本の文学語発達の道において一九や三馬等からさえも退歩であった。そしてこれは彼の現実からの乖離の傾向に取っては必然的であった。近頃若い人々のうちにも手紙に候文を用いる人が多くなったような気がするが、現実の会話語から著しく離れた気分をもつこのスタイルは書く人の本当の思想・感情を押しかくして、通り一遍の挨拶を述べるに極めて便利である。それと同じで、鷗外の「舞姫」における文章体の会話も人物の真情をおおうて、空虚を充実と見せかけるために便利であったと見てよいであろう。事実、「舞姫」の会話が口語体で書かれたとしたら、かなり歯の浮くような小説が出来上ったであろう。しかも鷗外の語彙は著しく現実から離れている。殊に彼が普通の読者にはわからない外国語を何等の説明もなしに用いていることは特徴的である。「舞姫」の中の「貴族めきたる鼻音にて物言う『レエベマン』」とか、「一種の『ニル・アドミラリイ』の気象」とかいう言葉の意味がはっきりわかる人は当時の読者の中にも、現代の読者の中にも沢山はいないで

あろう。ここに鷗外の貴族主義を、気取りを、ミスチフィケーションへの傾向を見なければならない。後には彼も大勢に引きずられて口語体を用いるようになったが、そこでも言葉の明瞭な意義が一般読者に通じないことを寧ろ喜ぶのではないかと思われるような態度がややもすれば示されている。「松源の目見えと云うのは、末造がためには一つの fête（フエエト）であった」（「雁」）、「ショオペンハウエルを読んで見れば、ハルトマン・ミヌス・進化論であった」（「妄想」）の如き表現がそれである。

　さらに所謂史伝物における難しい漢語の使用も同じ傾向を証拠立てる。「北条霞亭」述作に当っては鷗外は「簡浄」（？）を努めたそうであるが、そのことを断るのに「今わたくしの知る所のものを筆に上せて、罣漏なからしめんと欲したなら、わたくしは霞亭を叙すること猶澀江抽斎を叙するがごとくなるを便とするであろう。しかし既往はわたくしを懲毖（ちょうひ）せしめた」云々という「簡浄」ならざる表現を用いている。

※　※　※

「芸術の作品はそれ自身の中にとざされた世界である」という意味のことを昔の批評家が云った。芸術の作品は境界なき現実の再現及び説明でありながら、その現実に条件的境界をつけるものであり、その境界の中の凡ゆることは一つの纏りのある全体を成していなければならない。そうでなければ十分な意味で読者の芸術的感覚を満足させないのである。凡ゆる細部が、語彙も、文章法も、心理描写も、説明も、会話も全体のテーマに対して一定の関係に立ち、一定の役割をもつものでなければならない。細部が合目的的に組立てられて全体をなすのでなければならない。二葉亭の作品においては殆どあらゆる細部の導入が合目的的になされている。一つの細部が全体に対して水に対する油の如く遊離していたり、全体において軽い役割きりもたない細部に異常な重量が与えられたり、また一つの細部において読者の胸によび起された期待が小説のその後の発展において徒らに裏切られたりする場合はまずないと云ってよい。

　しかるに鷗外の作品は一見かなり精緻な構成をもっているかに見えて、仔細に観察すれば、各細部相互間の、また細部と全体との関連及び均衡が十分でない場合が極めて多いのである。例えば、「青年」においては先ず第一に出京した青年純一が大石という作家の下宿を訪問するさまがかなり詳しく叙述してあるから、そのことが将来の筋の発展の端緒になるのかと思って読んで行くと、結局大石は大した意味はもっていないことがわかる。青年芸術家のサークルでの拊石という作家の講話も、有楽座でのイブセンの舞台の叙述も何だか取ってつけたもののようである。尤もサークルの会合を大村との知己関係の、また有楽座を坂井夫人との知己関係のはじまりの意味で必要な場面と解するこ

とは出来ようが、それなら拊石の講話やイプセンの内容をくどくどと述べる必要はないのであり、またこの両方の知己関係ともに、そこから何か大きなことが出て来るようで結局幽霊のように消えるのであるから、それへの準備をこのように始めることは泰山鳴動して鼠一匹の感を与えるのみである。同様にしてお雪さんの導入も、おきゃらという芸者の導入も十分に理由づけられていない。長篇小説的な筋なしに文学青年の「遍歴」を描くことがこの小説の目的なのだから、イブセンの芝居も、サークルの講話も、また主人公と大村とのあまり会話らしくない会話も皆必要なのだという人があるかも知れないが、それなら始終何事かを期待させるような書き振りをしているのが取り去り難き疵になる。

多くの人々が鴎外の傑作の一つに数えている「雁」は甚しく均衡を失した作品である。この小説の重心は何処に置かれているのであろうか。若し岡田対お玉の関係に置かれているのだとすれば、お玉対末造の関係はお玉の側からこそ照明さるべきで、末造の心理を作者が自分の心理ででもあるように描き出し、その家庭のいきさつまでも詳細に語って聞かせるのは合目的でない。若し末造対お玉に重心が置かれているなら、本筋に関係のない岡田についての詳細な記述をする必要はなく、岡田はただお玉の心に映るプラトニックな愛の対象として点綴すればよいわけである。重心を両方においたのだという考え方もあろうが、それならば岡田が末造対お玉の関係の中へ有機的に入って来るように筋を改むべきである。そして何れの場合にもお玉の心理にははじめからもっと注意が向けられるべきで、副人物に過ぎない父親の描写などはずっとはしょってよいのである。こういう重大な構成上の欠陥は、蛇退治と餅の一切れの如き偶然の導入によっては補い得ないのであるから、結局この作は、取扱い方によってはかなり強い作品となるような材料を利用していながら、全体として著るしい程度において虚偽の感じを残すのである。

※　※　※

よき構成の中に入れられた個々の人物の形象は常識ある読者に取って頭から足の先まで理解し得るようなものでなければならない。その人物が置かれた条件を考慮に入れる時、彼の各々の挙動、各々の言葉は成程とうなずけるものでなければならない。二葉亭の諸作では主人公も、副人物も我々に取って全く腑に落ちる行動をし、腑に落ちる言葉を発する。「浮雲」のお勢は文三の母が彼のために茶断ちをしているという話をきいて、「旧弊なことネー」といい、課長の義妹について「学問は出来ますか」と本田に訊ねる。他の女がこれを云ったのなら、読者は狐につままれた感じを受けるであろうが、お勢の場合には全く腑に落ちるのである。異母姉に憎まれつつ義兄の世話をする「其面影」の小夜子も、小夜子が家を出てから急に哲也に対する

態度をかえる時子も全く腑に落ちるのである。（ただ二葉亭の描いた女中の形象はあまりに紋切型的であり、これは彼が女中を現実の観察によってでなく、伝統的観念によって書いたためと思われる。そしてこれは考える価値のないことではないが、鷗外との比較の際にはしばらく措いてよいと思う）。

鷗外においては、反対に、理解出来ない人物が非常に多い。妾になることは割合にたやすく承知したかの如くであり、旦那が高利貸であることが、知れると大きなショックを感じたかの如くである（そのショックが実は然るべく読者に伝わらない）前述のお玉も完全には理解出来ない。性的関係にまで達する男との知己関係において「来るものは拒まず、去るものは追わず」の態度を取っている「青年」の坂井夫人も腑に落ちない。勿論お玉や坂井夫人のような外観をもつ女が実際この世の中にいたかもしれない。現実には凡俗の眼には腑に落ちない行動をする人はいくらもいるのである。内気な小娘が室の隅で泣いているのは傍観者に取っては腑に落ちないことである。俗人である母親は「いやな子だよ、又泣いている」といって、腑に落ちない小娘の行動をそのまま放置するであろう。が、慈愛に充ちた母親なら、彼女の悲しみの原因を必ずつきとめずには置かないであろう。そして彼女は年上の友達に侮辱されたのであるか、若しくは新しい洋服が買って貰いたいのであることを知るであろう。子供のむずかるのは、従来、原因のわからないままで不可避的なことであるように考えられて来たが、世界の何処かには子供のむずかるのは幼い神経が周囲の大人達によっていら立たされるからで、その原因を除けば、むずからない子供も可能であるという考えをもっている教育家もいるようである。

小説家は現実のあらゆる人間に対してこの教育家、又はかの慈愛に充ちた母親のような態度をとることが必要である。二葉亭は彼の時代として殆ど最大限にこの態度に近づいていたが、鷗外はそれからかなり遠い地位にいたのであるる。しかも鷗外には、人物の外観だけを描いたのでは足りないと思う時、その人物の内生活を研究する代りに、自分自身の心理を彼に押しつける癖があり、このことが彼の人物を一層腑に落ちないものとすることが屢々である。子供相手の飴屋をしていたお玉の父親が、女中が汁椀に指を突込んだといって、恐しく神経質になるのなどは鷗外自身の心理の機械的移入であろう。

形象のうちには生きた形象と死んだ形象とがある。そして常識のある人々の腑に落ちることこそが生きた形象の最も重要な特質である。凡俗の眼に腑に落ちない現実の現象も、本当の芸術に取り入れられて形象化する時、全く腑に落ちるものとなるのである。その故に芸術は現実の再現であると同時に、またその説明でもあるのである。その故に芸術の中に示された現実は、昔の批評家がいったように、現実そのものよりも現実に似ているわけになるのであ

る。

現実の表面にあらわれた現象だけを取り、或は数個のそういう現象を組み合せただけでは、雛人形のような死んだ形象は出来るであろうが、血の通った生きた形象は出て来ない。作家において最も大切なのは現実の材料からこの生きた形象を創り出す能力である。先頃来鷗外の歴史小説がこの方向に高き達成を示すものであるという議論が行われ、そういう議論を読んだ一読者が私に向って、鷗外の歴史小説の高き意義を認めなければならないのではないかと言ったのに対し、私はその人に鷗外の、例えば「阿部一族」が面白いかと反問した。その人はあまり面白くないと答えた。面白くないのは生きた形象が少いからである。小説自身はあまり面白くなく、それについての批評の方が面白い場合、その小説の独立した文学としての価値が少いのは知れ切っている。勿論それの文学史的意義については別に考えなければならないのであるが。

※　※　※

「浮雲」が「舞姫」より遥かに高い文学作品であることは夙うから定説になっているから、この二つを比較するのは全く余計なことのようであるが、それにも拘らず、この文章を終るに当ってこの両者の主人公を比較して見ようと思う。「浮雲」の文三は官界での出世の道において上役の気に入らないで挫折し、それに関連して恋をも失おうとする知識人であり、「事務外の事務」に精励して、出世の道をまっしぐらに進む本田が、これに対立させられる。「舞姫」の主人公は洋行している知識人であり、同僚と同じような行動をしないために彼等の憎みを買うところは文三と少し似ているが、偶然の機会から踊り子エリスとの関係に入り、免職となり、異郷で困難な試練の時代に入るかに見えると、友人相沢の仲介によって大臣の恩恵をうけ、復職、帰朝、そして出世の道が彼を待っている。一方エリスは狂気となり、しかも腹には彼の子を宿している。この状態でこの短篇は終るのであるが、最後の一句は次のようである。

「嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我悩裡に一点の彼を憎むところ今日まで残れりけり。」

この文句から結論し得られることは、第一に、主人公が彼をこの面倒な境地から自由にしてくれた相沢に感謝していることと、第二に、主人公が無慈悲な人間となったことの責任を相沢になすりつけていることとである。所が常識のある読者に取っては、与えられた状態において自分が正しいと認めることのために出世の道をも犠牲に供する心構えをもたず、自分のしたことに対して何処までも自分で責任を取ることの出来ないような人間の形象が美しいもののように提出されていることは腑に落ちないのである。作者はこの主人公をしてエリスと共に異郷にとどまらしめるか

る)、それが出来なくても、彼をして相沢を憎む代りに自分自身を呵責せしめなければならなかったのである。若しまたその何れも出来ない場合には、はじめからこの小説の調子をかえて、主人公の姿を諷刺の対象として示すべきであったのである(その場合には物語が三人称でなされるのが最も合目的的であるのは勿論である)。第一の場合にはこの作のロマンチックな色彩が濃くなり、第二或は第三の場合にはもっとリアリズムの傾向が強くなったであろう。

しかるに鷗外の芸術方法ではロマンチシズムとリアリズムとの奇妙な妥協が示されている。元来本当のリアリズムは本当のロマンチシズムに助けられる時、本当に生きた形象を示すことが、即ち本当に現実を再現し、説明することが出来るのであるが、両者が御都合主義的に妥協的混淆を示す時は、常識のある人間を十分に満足させるような作品は生み得ないのである。この二つのものの妥協的混淆は、しかし、後の「雁」にも、「青年」にも、その他の作品にも、認められると私は思う。

現代の作家のうちには二葉亭の芸術方法に従うものは少くて、鷗外のそれに従うものが大多数のようである。意識的に鷗外に追随していないということは、鷗外的でないということを意味しない。私が望むのは二葉亭の芸術方法に従い、更にそれを越える作家が一人でも多くなることである。しかし私が言うのは二葉亭の芸術方法についてであって、彼の思想のことではない。彼の思想については別に考えなければならないであろう。

(一九四三年六月「新潮」)

「暗夜行路」雑談

中野重治

一

「暗夜行路」は大正十年一月にはじまった。(「暗夜行路」として発表されはじめた)そして昭和十二年四月に完結した。つまり「暗夜行路はながいことかかって出来あがった。ある人の調べによると(『文学草紙』第一巻第四号、平野謙「『暗夜行路』発表年譜」)こんな具合になる。

前篇

大正十年　一月(序詞、一、二、三、四、五、六、七)

同　二月(八、九、十)

同　三月(十一、十二、十三、十四)

同　四月(十五、十六、十七、十八前半)

同　　五月（十八後半、十九、廿）
同　　六月（廿一、廿二）
同　　八月（廿三、廿四、廿五、廿六）
後篇
大正十一年　一月（一、二、三、四、五）
同　　二月（六、七、八、九）
同　　三月（十、十一、十二前半）
同　　八月（十二後半、十三、十四）
同　　九月（十五、十六）
同　　十月（十七、十八）
大正十二年　一月（十九、廿）
大正十五年十一月（続篇一、二）
同　　十二月（三）
昭和二年　一月（四、五）
同　　二月（六）
同　　三月（七前半）
同　　九月（七後半、八）
同　　十月（九、十）
同　　十一月（十改訂、十一、十二）
昭和三年　十二月（十三前半）
昭和三年　一月（十三後半、十四）
昭和三年　六月（十五）
昭和十二年　四月（十六、十七、十八、十九、廿）

このうち前篇の「序詞」から「十二」までが第一、そのあと第二、後篇の「一」から「十九」へんまでが第三、そのあと第四となって、前後篇通じて四部にわかれている。「へん」というのは雑誌と全集とで変化があるため、変化そのものは大したものでない。変化そのものを問題とすることも出来るが、ここではその必要なく、また普通には改造社版全集本で「暗夜行路」は読んでいい。ただこれには制作年表が附いていない。同じ全集のその他にはすべて附いているが、どういう訳か、「暗夜行路」に限って附いていない。これにこそ必要なのに。

その後聞くと、岩波文庫版「暗夜行路」には大分手がはいっているというが、それは見ていないのでここでは取りのけて置く。いずれにしても、この作品は制作年表を附けて出すのが親切なやり方だと思う。

それは、「暗夜行路」を理解するには、これが長いことかかって出来たものだということを知っておくことが必要だからだ。小説を読むには、小説だけ読めばいい。長いことかかって書かれたか一日で書かれたかは、小説の面白さ、小説の値打ちには関係ない。読者はそんなことにかまわずに、作そのものをずんずん読めばいい。つまりある小説の面白さ、その値打ちに取って、作の仕上げに要した年月の大きさなどということは第二義の問題だ。しかし理解には、ある作の理解、殊に作の欠陥の理解には、この第二義のことが問題になる。ある作をたのしんで読むことと、その作から何かを学ぶこととは、元来一つことだが、学ぶと

いう方の態度を採るほどこの第二義のことが問題になる。
このことの学問上の理由説明はここで省く。ただ実地問題として現にこういうことがある。前に書いたが、この作は大正十年以来断続して雑誌に出た。読者は断続して読んで来た。時には、ある時まで発表された分全部を一まとめにして読んだ。しかし前後篇完結したものとしては、昭和十二年以後になってはじめて読んだわけだ。
そこで混乱が起きた。混乱といっては語弊があるが、こういうことが事実として生じた。それは、部分の印象と全体の印象との取りちがえ、つき混ぜということだ。文字通り初めての読者にはそんなこともなかったろうが、むかしから愛読して来たものには大概それが生じた。彼等は読んで、ごちゃごちゃした、ぼんやりした印象を受けた。むかし発表されたものは、その都度、やや長目の短篇、殊に短篇小説としての、時には詩的断片としての完成を持っていた。仕上ったものの方に、却って完成の感じがない。完成ということが途中で行方不明になった感じだ。しかしこの感じを、読者（長年の愛読者）の方で、適当に処理することが出来なかった。「暗夜行路」の読者範囲、彼等の読み方などいうことは皆目分からぬが、見たところ、彼等は、前々から発表の都度読んで来て、最後に、最後の部分が雑誌に出たのを読み、そこで、十五年ほどかかって組み上って来た分までの印象に、最後の部分の印象をそのままくっつけて作全体の印象を仕上げてしまった。もう一度最初から読み直した人は案外に少かった。まして、十五年ほどかかって組み立てて来た印象と、一日かけて改めて読み直した場合の印象との違を、それを感じたにしろもう一度書く（考える）面倒をいとわなかった人はなお少かった、そこで、「暗夜行路」は完璧な作品だなどいう批評家があらわれることになった。
この批評家たちは、つまり怠けものだったことになる。嘘を吐いたわけではないが——嘘を吐いたのでは話にならぬ——彼等は、この作が十五年以上かかって書かれた（発表されて来た）のをいいことにして、批評家としてのある面倒を厄介払いしてしまった。そうなる。しかし、批評（？）は怠けても出来ても、理解は怠けては出来ない。おれは怠けものでないと云うことになりそうだがそうではない。無論怠けものだという積りはない。

二

「暗夜行路」は前後十五六年かかって出来た。ある部分が別の標題で発表されたのも勘定に入れれば十九年ほどかかって出来た。作者の歳からすると三十九から（「憐れな男」からいえば三十七から）五十五まで、下手な作家ならくたばってしまう時期、人間としても作家としても、いいこと悪いことをして厚味（同時に濁り）の出来て行く時期、作家に取って危機・転機なしにはすまぬような時期を

とおして、幾度かの中断、最後には丸十年ほどの中断を経て出来あがった。
　このことには精神のある強さがある。作者の精神の強さ。ねばり強さとか、作家的神経の逞しさとかいうのとは違った、何か非常に危険率の高い冒険に飛びこむような精神。飛びこむという段階的にひびく。弾みをつけてどぶんと飛びこむように聞えるが、そうではなく、目論むだけで目まいのしそうな放れ業へ、相手または第三者と全く無関係に、弾みなしに合図なしにはいって行くような精神の強さ、ある種の探険家、発明家、運動選手などに見られるもの。第二者、第三者と全く無関係になされる一種の驀進、精神における生理的衝迫といった風のものがそこに見られる。十年前にある昂奮をして、十年間それを放って置いて、そのあとで、もう一度前から続けてそれを昂奮しようというのは、そして出来るというのは、先ず大したことだ。
　しかしこれは実地にはなかなか厄介な話になる。作者の精神の強さは、それだけでも尊敬に値いするが——そういうものが現にあると知るだけで心のはげみになる——しかし事の成敗は幾らかそれと違う。違うと思う。
　「暗夜行路」には二つのことが考えられる。その二つのことが、精神のこの強さでうまく処理されていない。却って強さのためにうまく処理されていない。
　二つという一つは、この作では、十五年後の完成の姿が最初の一歩から完成の姿で追われている事実だ。雑誌と全集とでは違いがある。しかしそれは変更、書き直しというものではない。十五年から十九年をとおして、時別の変化なしに一貫して仕事が仕上げられている。この場合、寺院建築などが百年もかかって出来あがるのとは事情が違っている。本寺なら本寺は、時代とその技術その他との関係から来る細部の変更を除けば、最初のプランが真面目に追われさえすれば事はすむ。立体図、平面図、鳥瞰図などいうもので、完成した姿がいわば完成した姿でかねて与えられている。建築そのことの経過は、そこへの近づき、図面の石による追跡ということだけでいい。（実地にはそうでないかもしれぬがそうとして置く）しかし文学上の仕事、卑近にいって長篇小説などの場合には、プランが正確・綿密でも——プランの正確云々ということの性質が違うのだが仕事の進行に連れて、殊に仕事が何年、何十年とかかる場合、仕事の肉体そのものが変化して行くということが生じる。必然に生じるとはいえぬまでも、殆ど必然には生じて来るといえる。図面の実現が、実現の進捗において図面から遠ざかるわけだ。そこで「暗夜行路」を取ってみると、「暗夜行路」にはそれがある。（そこに問題があるが後にする）「暗夜行路」では、部分をなす個々の短篇または断片はそれとして完成していた。十五年後、仕上がった「暗夜行路」にはそれがそのままの形で有機的に組みこまれた。子供がいて子供の手をしていた。十五年たってそれ

が大人になった。しかし手は、十五年前の姿のままで今は大人の手として胴から生えている。（この真似は誰にも出来ない。この頃——昭和十八年に書いている小説家たちの大部分には殊に出来ない。）

それはこういうことだ。「暗夜行路」では仕上げの姿がすでに最初の断片にあった。最後の仕上げへのおぼろな手探りが、最初の断片としての完成のなかにあった。最後のイデエとその姿とが第一歩から完成してあらわれていた。最後の仕上げへのおぼろな手探り、そのための彷徨が、この作では、コンクレートな、木彫りのような部分の完成にあった。いいかえれば、木彫りのような個々の仕上げということで手探り、思案、彷徨がなされて来た。

しかしこのことは、作のイデエとその姿とが固定していたこととして同時に考えられなくはない。最初は固定していなかったかも知れぬが——事実固定していなかった。——どこか途中で固定したこととして、少くとも、そういう固定への可能を含んでいたこととして考えられなくはない。くり返していえば、三十七八から五十五六までの間には、人は人としても小説家としても変化を見せていい。三十七八で取りかかった作が、そのイデエと姿とで根本的に違った見方をされて来るということがあっていい。その姿でのそのイデエ、そのイデエでのその姿に対する作者自身の疑惑・評価顚倒ということがあっていい。そうなければならぬということはないが、実地問題としてそうあるのが普通でもあり、作家の成長、わけて年令のこの時期における成長の特質を肚に置いてそのことが考えられる。

これは時代ということを抜きにしての話だ。作家個人の年令だけの話。どんな時代に生きたろうと、ある小説家は、三十七八で取りかかった小説を五十五六で仕上げるのに、何かの形でつまずきのようなものがあっていい。途方に暮れることがあっていい。悪い場合につまずき、いい場合に成長・発展ということがあっていい。作家個人の年齢だけの範囲でそのことが考えられる。しかし時代も問うとすれば問わねばならぬが、この作の場合一そう評価顚倒の問題が考えられていい。大体、大正十年には鷗外が生きていた。山県有朋さえ生きていた。関東大地震の前々年になる。関東大震災は一つの劃期的な事柄で、仮りに山県有朋や森鷗外が生きていたとしたら、彼等が地震とその後に来たものとにどんな反応を見せたか見ものになるといった風の大きな事件だ。死者十万とか、損失見積額百億円とかいうようなこともあるが、それはさて措き、これを境とした日本人の精神世界の変動、砕いていって、物事に対する国民の心持ちの変動ということが問題として動かぬと思う。とに角、「暗夜行路」はそういう時分に始まった。『白樺』関係でいえば、岸田劉生はまだ芝居絵を描きはじめていない。そういう時分から、いろんな事件、それから満洲事変、再びいろんな政治的事件を経て支那事変の昭和十二年に来る時期は、この時期に経過したある人の生涯を考える

場合、年齢の目安だけでは考え切れぬものの出て来ねばならぬ特別な時期だといえる。つまり、「暗夜行路」の書かれて発表されて来た十五六年間は、特殊な歴史的時期のなかで経過した、作者の特殊な年令期間だったということが出来る。作のイデエに根本的変化が生じても無理でない。生じなかった方が却っておかしいといって無理でないような特殊な期間といえると思う。

作者は、「これは今日までの私にとっては唯一の長篇だが、長篇を書き慣れない故もあって、中々完成しなかった。終り近くなって、書けなくなって、十一年放って置いたのを今度全集を出すについて、何でも彼でも書き上げることにしたが、主人公の気持に本当に自分が入れるか、書き出すまではそれが甚だ心許なかった。然し幸に本気になって、入り込むことが出来、出来栄えに就いても或る程度に満足した」と書いているが、ある程度そうに違いなく、特に「本気になって」をそのままに信じていい。しかし実地には、作者が主人公の気持ちに入りこんだというより、書き出してから十五年、作の主人公との年令の差(主人公の年令は分からぬが)二十年と概算して、十五年後、二十年後の現在の(「暗夜行路」の仕上げを書いている時の)作者自身の気持ちに主人公を引きずりこんでしまったと見る方が穏当なのではないか。

作者の主観はそのままに認めねばならぬ。作はしかし形において円満に完結していない。最後の完成が、部分の完成をとおして最初から追われていたには違いないが、それでも、むしろそのため、一篇としての円満な完成は全く抛り出されることになった。未完成ではない。仕上がったという意味では完成したが、横道へどんどん外れて行って、完成とか未完成とかいうことが意味をなさぬような袋路地のつき当りで結局仕上ったと見る以外ないと思う。

三

第一、前篇と後篇とで調子がかなりにちがう。前篇自体にも問題があるが、前篇はとに角一貫して押されている。それが後篇へ来ると、時間的にどしどしどしギャップが飛び越され、人物も事件もどしどしはじき飛ばされてしまう。作者の気随で、物語りの自然から独立にそれがやられてしまう。そして最後の最後へ来て描写の筆ががらりと変ってしまう。

それまでは、描写は徹頭徹尾謙作をとおして進んでいる。謙作の眼と作者の筆との間に隙がない。作者は初心者に教える射撃教官かのように謙作に頰をくっつけて一つの照尺をのぞいている。外界は謙作を通って来る。通って来たものの描写はそれこそ客観的だ。それが徹頭徹尾謙作次第のものという意味では或る意味で主観的だが。それが、最後の最後、後篇の「二十」、「暗夜行路」そのものの結びへ来てがらりと変る。描写は、全く普通の意味での客観描

写になる。筆は謙作からはなれる。その他のどの人物からも離れる。日本の新聞小説にあるような客観描写、「戦争と平和」にあるような、ああいう客観描写になってしまう。

それは、ここで主人公が死にかけているのだから、仕方が他になかったのだといえば、いえぬことはない。「十九」まで来た話は何とかけりがつかねばならぬ。小説の世界そのものが発展せねばならぬ。しかし主人公は譫言をいっている。死人同然だ。死人に視神経がない以上そのものの眼を通して書くことは出来ぬ相談だといえばいえぬことはない。しかしとに角、小説としての事実としては描写が変っている。その変り方は、それまでの八百五十頁に基づいて全く必然でない。前篇四百頁からしてはなお更ら必然でない。

これは作者がここで、ここまでの行き方をつっぱねて、全く新規な手法で強引に押し切ったものと見るべきか、それとも、それまでの行き方で納まりがつかなくなり、そこで最後の切り抜け策として別の筆つきで始末をつけたと見るべきか。しかし切抜け策、助け船ということは、この作者に限って考えられぬ。作者はそんなことをしない。むしろ出来ない。この作者には、その種の才覚がいわば欠けている。（欠点というのではない）しかし同時に、作者が目論んで、そこで強引に押し切ったともどうしても見られない。その場合の強さ、あざやかさがない。結局、そこまでの行き方でこれ以上作者が謙作を追えなくなった。そのことに作者が疲れたと見るか別のことではないが、そのことを作者が度忘れしたと見るか、どっちかでなければならぬと思う。謙作の話のつづきとしてではあるが、長話がここである間を持って、拍子に話がわきへ外れ、老人などにあるように、それと無関係な言葉が結びとして出てしまったのではないかと思う。

人と人との関係に或る明らかな安定感を得たいとあせる面を中心とした謙作の心の発育史はここでぶち切られる。最後の、「そして直子は、『助かるにしろ、助からぬにしろ、兎に角、自分は此人を離れず、何処までも此人に随いて行くのだ』というような事を切に思いつづけた」という結びは、謙作の心の発育史と無関係に、作者自身の感想まがいのものとしてここで書かれている。話し手の主観では結びになっている。ただし話し手にしても、ほんとに結びになっているかどうかはそれほど気にしていない。聞き手にしても話が外れたとは思うが、ここまで蹤いて来て話し手の安心し切った調子に乗っている以上それなりにも受け取れる気がする。それがこの「二十」の場合だと思う。気がついて見れば何の話だか分からぬ。結びの位置が位置のないものになっている。作そのものの印象が完全にぼやける。何が書いてあるのか。何を作者は書こうとしたのか。はじめ作者は、完成した部分と断片とを密着させて重ねて行った。やがて密着させずに重ねて行き出した。最後にそ

れ自身としては完成しているが、それまでの部分と全く異質のものを持って来て家の棟に置いた。建物は独立の建物として、しかし曖昧な建物として出来上がった。「暗夜行路」は、部分部分で見れば真実で詰っている。一篇としては拵えものになっている。作者は、最も平凡な小説の書き方入門に従わなかった。入門は、芸術における形式・形態の権威で冷静に復讐した。「暗夜行路」は出来損なった。この程度の（この程度の大きさ、この程度の人物の数の）長篇として出来損ない、同じ作者の短篇類に比べても出来損なった。短篇は、「小僧の神様」その他二三を除いてすべて殆ど完成しているといえる。「小僧の神様」にしても、最初は真実に立っていた。ただ最後へ来て、（主人公が移動してしまうが）、柄にもないことを止めれば小僧に鮨が食えなくなるということについて、自己の（正邪にかかわらぬ）断定を避けたところに隙が出来てしまった。「暗夜行路」は大きな規模でそれに類していると思う。

四

この作が、仕上げに十何年かかったということも幸福ではなかった。書いて発表して行きながら、作者自身ちょいちょい手ちがいをもしている。

たとえば後篇第九十頁にこうある。

「山陰に温泉の多い事、それから、何とかいぅ高い山が、叡山に次ぐ天台での霊場で、非常に大きなそして立派な景色の所だというような話をした。」

伊勢の宿屋で鳥取県の県会議員に逢った時の話、それの地の文での描写だ。

ところが後へ来ると——この「後」は第三百五十四頁で、小説の上でも後だが、時間の上でも後になる。無論この点が問題なのだが——主人公の会話へ山が固有名詞になって出て来てしまう。

『何処へ行く気なの？』

『伯耆の大山へ行こうと思うんです。先年古市の油屋で一緒になった鳥取県の県会議員がしきりに自慢していた山だ。天台の霊場とかで……』

つまり文字通りの破格だ。最初の地の文の描写に固有名詞「大山」が出、後の会話のくだりで「何とかいぅ高い山」が出るのなら破格でなかろうが。

後篇第百五十三頁にはこうある。

「一時間程して二人は其前を出た。二人は軽い気持を味いながら……その出た所に、前にも一度書いた場末の寄席のような小さい芝居小屋がある。」

なるほど前篇終りの辺に、栄花という女と蝮のお政という女とのことで問題の芝居小屋が出ているが、ここで「前に一度書いた」というのは謙作が書いたということではない。謙作は書いていない。謙作は栄花のことなら四十枚ばかり書きかけたことがあるが、それとこの芝居小屋とは全

く関係がない。つまり「暗夜行路」に出て来る芝居小屋と、謙作の書きかけた物語りの中の芝居小屋とは、この後の方の物語りに芝居小屋の話が出ていた（謙作のプランとして）としても別ものでなければならぬ。それが、ここでは、「暗夜行路」の作者が「暗夜行路」のなかで前に一度書いた芝居小屋のところへ、「暗夜行路」の主人公とその新妻が出て来るのだから話はおかしくなる。

後篇第三百二十二頁には「祇園のある三流芸者」のことが出て来るが、作者は前にそのことをちゃんと書いてある。それを作者は忘れてしまって、芝居の場合を逆にした勘違いで初めて書く気で二度目を書いている。

後篇第五十三頁にはこうある。

「謙作は自分の事を彼方へ打明ける一つの方法として、自伝的な小話を書いてもいいと考えた。然し此計画は結局此長篇の序詞に『主人公の追憶』として掲げられた部分だけで中止されたが、其部分も何かしら対手に感傷的な同情を強いそうな気がして彼はそれを彼方へ見せる事を止めた。」

ここで人が迷う。あるいは逆に迷わぬことになる。人は、「結局此長編の序詞に『主人公の追憶』として掲げられた部分」というのを読んで小説「暗夜行路」を思いうかべて安心するらしい。小説「暗夜行路」には「序詞（主人公の追憶）」がついている。小説「暗夜行路」にたいしてそれは「此長篇の序詞」だ。但し書き手は謙作ではない。

時任謙作は小説家ということになっているが、小説「暗夜行路」の作者は彼ではない。彼は、小説「暗夜行路」の主人公として、その小説のなかのあるところで、ある目的で「自伝的な小説」の一部を書いたことはある。それは一部分だけ書かれた。それは、「その」長篇の序詞として「掲げられた」。しかし「その」小話は、長篇小説ということになっているが、小説「暗夜行路」のなかには出ていない。無論「序詞」の部分も出ていない。どこに「掲げられた」——「此長篇」は標題さえ分っていない。「此長篇」は標題さえ分っていない。無論書いてない。も少し念入りに読めば——小説「暗夜行路」を読めば、この部分が実際書かれたかどうかさえ怪しくなる。謙作は、「自伝的な小説を書いてもいいと考えた。」考えたことは間違いない。しかし実際書いたのか、その点は——「暗夜行路」には書いてない。結局、「謙作は自分の事を彼方へ打明ける一つの方法として、自伝的な小説を書いてもいいと考えた。然し此計画は結局此長篇の序詞に『主人公の追憶』として掲げられた部分だけで中止された……」ということは、これだけではノンセンスになる。作者の独り合点になる。ただ、「此長篇」を長篇小説「暗夜行路」に見立てれば無意味でないということになる。「暗夜行路」に正しく「序詞」があり、標題は「主人公の追憶」となっている。またそれは「掲げられた」。そこである読者が、「暗夜行路」の読者であると同時に時任謙作の作品の読者になることになった。彼等は、小説「暗

夜行路」をその作中人物時任謙作の作品として同時に読むことになった。彼等は、少くとも「主人公の追憶」に関する限りそう思いこんだ。彼等は迷いこんだ。完全・純粋に信じこむという形で。

こういうことを、わざとやった作家はあった。エ・テ・ア・ホフマンなんかがやったと思う。しかし今の場合、作者のいたずらということは考えられぬ。いたずらではない。目論んでやったことではない。それは考えられぬ。第一感じられぬ。この作者は、そんなことをやる、またそんなことのやれる作者でない。事情は、いたずらの正反対、読者が信じこんだのは実は結果で、先ず作者が我と信じこんだというのが大前提だろうと思う。作者自身が、自分で書いた「主人公の追憶」を謙作の作品としても読んだ。そこではじめてここの所がつながって来る。

そこで、ここで初めて、あるいはもう一度、「本気になって、入り込む事が出来」と書いた作者の言葉を思い出していい。作者がそう書いたのは、作者が、長いこと放って置いた作の主人公の気持をもう一度追えるかどうかということに関していた。しかし事実として、「本気になって、入り込む事が出来」たと思った時には――そう思ったことが事実――その中に、謙作への作者自身の成りかわりがあった。正確に云えば、謙作の作者自身への成りかわりがあった。作者が主人公に成りかわることは普通にある。小説のあらゆる場合、それはそうだといっていい。しかし今

は、作の主人公が、つまり架空の人物が、「暗夜行路」という小説を書き、それを雑誌に出したり本にしたりする志賀直哉という人物、人物というよりも志賀直哉その人に成りかわった。「何人も自己の事件において裁判官たるを得ず」というが、ここでは、作者が自己の事件において裁判官になった。最も平凡な意味での小説の書き方入門に従わなかった云々と前に書いたが、従わなかったとか反抗したとかいうより、作者は全く無意識にそれをやっているのだから、これは蹂躙といわねばならぬ。最も純粋な、まじりっ気なしの蹂躙。それだから、むしろ同じ行き方で最後まで押せればその方がよかったろうと思う。最後になって、裁判官であり得る資格において事件を処理しようなどしたものだから判決が判決にならなくなった。結びは丸で外れた。作者が主人公に成りかわり、今度は主人公が現実の作者に成りかわり、それが交互にくり返されて来たところにある。時にモデル問題、それについての一部の批評家たちの誤解に対する作者の解明の口調にあらわれている。――その道行きは「創作余談」と「続創作余談」とに書いてある。時にモデル問題、それについての一部の批評家たちの誤解に対する作者の解明の口調にあらわれている。――この作が小説として出来損なった原因があった。作者はここでむしろ小説家でなかった。小説を小説として追うことは作者の中心関心事でなかった。中心眼目は、父の子、妻の夫、一家の家長、そんなものとしての作者自身になった。戸籍上の志賀直哉という人物が、ここで彼の心の整理のためにこれを書いて発表して来たということにな

る。謙作がどうなろうと、謙作関係の諸人物が死のうと、消えようと、志賀の都合次第のことで根本にはどうでもいい。謙作は、小説の世界でどんな出発をしたろうと、その後どんな境涯を経て来たろうと、要するに、志賀の家庭人（しかし個人）としての心持ちの整理に具合いいように志賀その人を追えばそれですむ。謙作は、またその他の人物は、小説の主人公、小説の登場人物たちとしての独立性をそもそも奪われている。前篇ではそれほどでもないが、話の進みにつれ、彼等はどしどし捨象され、フランスへ発動機の勉強に行く青年など、謙作の心に消えぬ関係で繋がっているにちがいないのにじき消えてそれなりになってしまう。これはただの一例。これが、多いだけでなく重ねられ、韮の皮を剝くように全体が進んで行く。作者の有名な言葉をひくと、作者は、「夢殿の救世観音を見ていると、その作者というようなものは全く浮んで来ない。それは作者というものからそれが完全に遊離した存在になっているからで、これは又格別な事である。文芸の上で若し私にそんな仕事でも出来ることがあったら、私は勿論それに自分の名など冠せようとは思わないだろう」といっているが、「暗夜行路」は正反対を行っている。「暗夜行路」は作者から「遊離」していない。「遊離」することが出来ない。「遊離」という以上そのものは作者から別個になければならぬ。少くとも別個に措定されていねばならぬ。椅子や茶碗は職人から離れていねばならぬ。「暗夜行路」は反対になる。

「或る人の曳く車は、その人の知らない人々にとっても要用のものでなければならぬ」この作者は、このファン・ホッホに反対の考えを、「考え」としては考えていなかったにしろ実地に実行している。ここでは、作の作者からの「遊離」、むしろ「遊離」されるべきものとして作品を見るというそのことが根本で無視されている。

しかしそれだから、一篇としては拵えものになったが、部分で見れば類稀な真実で充ちたということにもなった。誰にしろ、一旦小説を書き出せば小説の主人公に作者が蹤いて行く。時には、予想していなかった点まで主人公を追って行く。家庭の都合でなど話を変えるわけにはちゃちな小説家にしろ小説である以上行かぬ。（そういう作家も、場合もあり得るがここでは触れぬ）つまりそこではフィクションとしての真実が追われる。そこで、それが追われるということのため、下手をすると、逆に拵えものが出来て来るということがある。志賀は反対を行った。フィクションの壊れることを丸で気にしなかった。そこで逆に、作が、部分部分で却って真実で充ちることになった。作者は、謙作に成りかわると同時に謙作を作者になり変らせた。作者は意識せずにそれをした。読者は意識せずに、気づかずにそれに蹤いて来た。読者は謙作を追いつつ、作者志賀を追った。一部の批評家が、作の主人公を志賀その人に取りちがえたのも、この作者が、この作に限って一理あ

ったということが出来る。作の出来、作の仕組みが根本にそうなっているからだ。

ここで、「夢殿の救世観音」云々を言葉だけでもう一度考えて見てもいい。この作者が、ここで「遊離」という言葉を使ったが、「遊離」という言葉は曖昧だと思う。この言葉を、作家たろうものの座右の銘のようにして扱っている向きがある、が反対の性質のものなのではないか。創るものの座右の銘でなく、観るもの、鑑賞・享受する者の物指しのようなものなのではないか。人の言葉を一部だけ変えて出すのは悪趣味だが仮りにそうして見ると、もしそういう仕事が出来たら作者はそれにこそ自分の名をつけるのがいい、それにこそ自分の名をかぶせようと思うのがいいとなる。ある時代に、ある境涯を送った、ある作者個人に結びつけないではわけの分からぬような作は捨ててしまえ、そんなものに自分の名を冠せようなどとは夢思うなということになる。早い話が、「暗夜行路」が小説として出来あがり、気韻だの、墨色だの、意味ある空白だのいう末期的日本画的なものをこえて、胡粉と、群青と、朱と、臙脂とで画面が奥行きまで埋め切られ、荘厳な二十五菩薩来迎の図がそこに出来たのだったら、個人名に対する志賀の気持は気持として、伝志賀直哉作暗夜行路の図という一幅を持った方が日本としても日本文学としても幸福だったのではないか。

自家用は駄目だ。芸術はどこかでは、そして本質的に自家用という性質を持つ。しかし全的には、そしてやはり本質的に、自家用でないという性質を持つ。二つは別のことではない。だから「雁」は長いことかかって書かれ、一糸乱れていないが、本当に自家用でなくなっていない。「暗夜行路」とちがって、あれは寺院建築のように予定されたプランで仕上げられ、自家用性をとおした一般用性というところまで高まっていない。そこで深さがない。もっと本当に自家用に書かれれば、もっと「雁」はよくなったろうと思う。「夜明け前」は、やはり長いことかかって書かれ、ある意味で自家用に書かれているが、作者の気持は、整理せねばならぬようなみだれ、人間的行詰まりに来ていない。作者は、小説の世界をそれとして尊重している。つまりそこに、自家用に書くことと、文学として書くこととの間に、あの作家独特の折衷があった。これは、「暗夜行路」にはない。その点これは純粋ということになる。ただその自家用が、全くの自家用で、それに徹することで高い一般用が結果するというたちのものでは結局なかった。この自家用は、全く家庭的、言葉の非世俗的な意味において全く世俗的だった。芸術家は犠牲にされた。芸術家は一散に逃げた。むしろ、逃げて逃げ切ったのだから却ってよかったろうに。あと白浪と逃げてしまったのだったら、思い切りの悪い続篇の「二十」が書かれずにすんだろうと思う。同じ片輪でも、一層純粋な片輪に出来上がれたろうにと思う。

五

拵えものという側からいえば、主人公謙作の兄の信行というものがそもそも余りに都合よく出来ている。父と謙作のあいに立って、あまりに具合よく舞台廻し役をつとめている。相当の年配で、相当の資産があって、相当のところに勤めていて、いまだに独身で、遊びのことなどもよく知り、俗人は俗人でも、謙作の心持をほんとに尊重し、非常にこまかく、謙作をいたわる意味で行きとどいた心づかいをしている。この兄が、謙作を説明し、謙作を説明することで作者を説明するまではいい。そのことで、志賀という作家が、「暗夜行路」という小説を自家用に書くについての意図やらその理由づけやらをまで説明し兼ねぬところ、都合よすぎた存在だといえる。謙作の作者身替りのことは前に書いた。今度は、謙作で都合のわるい時の、この信行の、謙作への身替りによる作者への身替りという形になるが、謙作本人の方では、信行のある種の心持に対し、「信行にもそう云う事があるという」ことで「不思議な気がした」り、ある種の信行の断定に対し、「柄にない」ことをいうと思ったりするという態たらくなのだから、どこまでも便利、底抜けに虫のいい話ということになる。事実は、謙作の方でこの信行におんぶしている見えがある。そのことで、作者が、信行におんぶしている謙作に更に相当程度おんぶしてしまっている見えがある。肝腎のお栄に、死んだ祖父の影もささぬということなども虫のいい話でなければならぬ。

同じこと（全く同じではないが）は、謙作の物識りのこと、その教養上の発育史の疑問ということにも現れている。

謙作は実によく色んなことを知っている。禅の話が出れば禅の話を知っている。円覚寺のSN和尚などいうものがどんな人間か或る判断をもって知っている。外国人の若い衆が烟管をくわえていれば、それがどんな烟管だかということを知っている。「漢籍を売る」本屋のことなぞも知っている。「寒山詩」、「宗門葛藤集」、李白、柳下亭種員、杜甫などというものも知っている。「振出し」も、「風炉前屏風」も、「古代紫」という色も、広重の絵も知っている。それらを、知識としてでなく日用のそれの使い手として知っている。鉛筆や飯食い茶碗を知っているように、日用の生活の中で、蘆雪という絵かきが酒のみだったことまでそういうこととして知っている。彼は、「鳥毛立屏風の美人」を、それを見たものとして知っている。仮りに見ていぬとしても、それの図版を、それの記憶が彼に一つの実在である程度にくり返し見ているものとして知っている。奈良の博物館の「座頭の面」なども、それを見たものとして知っている。前者の豊麗、後者のグロテスクを、ある味として（舌の上で）知っている。地理のことも知ってい

る。草木のことも知っている。鳥や虫の名も知っている。そしてそれを、電話をかけたり、金を受け取ったりするなかで自家用に日用に供している。逆に、それらを日用のものとして使っている広さと自由で電話をかけたり銀行を使ったりしている。いつ謙作がそういうものを持ったか、それが特別のこととして描かれていないのが却って気になって来るといって云えなくはない。「丁度封印切りの忠兵衛が駈け降りて来そうな段々」とか、「舞台では『紙屋治兵衛』河庄うちの場を演じていた。謙作は何度も此狂言を見ていたし、それに此役者の演じ方が毎時……」とかいう言葉、草紙類や鏡花などを子供時分から読んでいたことを示す言葉とかを見ると、「暗夜行路」がはじまった以後での謙作の成長と、それ以前の謙作の成長との間に、(「暗夜行路」の描写の中での限り)、釣合の或る破れをさえ感じて来る。「暗夜行路」以前の謙作には面白さ、豊富が想像される。「暗夜行路」以後、殊に後篇以後には、表面の遍歴は見られるが内的成長が案外にない。出生の問題も妻のあやまちの問題も、謙作の成長には案外にモメントをなしていない。直子のあやまちなどは、読み終えてふり返ると何でもないものに縮んで見える。あまりの都合のよさ。それは作者が、特殊な時代の中で経過した特殊な年令時期に自らくぐらねばならなかった前記の根本的変化を、世にも身勝手な仕方でなし崩しにやって来たためではないだろうか。なし崩しのやり方そのものがすでに破格に身勝手だったためではないだろうか。

六

作家は作の主人公を肯定または否定することで作者自身を肯定する。これは作家当然の、また責任ある態度だと思う。この肯定否定は作そのものの中でなされる。作者の作中への顔出し、まして作の主人公のフィクション外の現世への顔出しによってなされるのではない。しかし「暗夜行路」の作者は、利害の打算なしにそれを一貫してやった。そこで作者は、小説としてはどうしてももう一歩出ねばならぬ点、しかし作者自身のことならば出なくてもすむ点で立ちどまったことがあった。例えば謙作は、あらゆる他からの「悪意」を身のまわりへ立てまわして、およそそれらしいものには事毎に神経質に反撥し、人の動きには、あらゆる忖度、先くぐりをやるが、自分に対しては、案外に呑気なところ、けろりとして粗雑なところがあり、作者の筆が、他では隅々まで行きわたり、ここでは、全く知らぬ顔で、というより全く気にかけずに通りすぎているため、そこに、対比上がらん洞の出来て来ることがあちこちにある。お栄の身のふり方で金三千円が問題になるが、三千円の潔癖・几張面な取扱いはむしろ精神的面でのものだ。三千円の金、人が営々として稼ぎ出す貨幣という面はここでは存外に薄い、大体、小説そのものには書かぬでいいこと

だが、謙作、謙作一家の生計のことは丸で説明されていない。前篇の第三百四十六頁、三百五十六頁辺に、父が鉄道に関係したこと、どこかに地所を持っていることが言葉で書かれているが、それは、飯を食いに横浜の支那料理へ行ったり、角力場に桟敷を持っていたり（これは謙作がではない）、遊蕩せぬ代りに一万円の自動車を親に買わせたり、（これも謙作がではない）いつ何時でも汽車に乗って遠方へ出かけたり、昼飯を食うのに芸者が来たり、そういう、ある意味で好き勝手なことをいつでもやれる生活の貨幣的基礎を満足な程度に描き出しているものではない。金や貨幣が蔑視されているのでなし、肩に腕があり、腕に手があり、手に具合よく指がついていて、飯食うにも鼻汁かむにも格別人がそれを意識せぬように、金はそこにあり、そこにあることに対して持ち主が純粋に意識を動かさぬのだ。伊勢の古市で音頭を見るくだり、あれを謙作は一人で見る積りでいた。しかし結局、宿の客七人ほどで見ることになったが、その時、例の鳥取県の県会議員が、「あなたは偉い、一人でこれを見ようとされたのだから」というところがある。「謙作は別にそういう事は考えずにいたが、成程そういえば此広い座敷に一人ぽつ然としていて、十何人かの女が出て来たら、一寸具合の悪い事だったかも知れないと思った」と作者は書いている。これは謙作に即してそう書いているけれども、よくは分らかぬが、議員の感心には代金支払いの問題もまじっていたのではないか。事実は割勘で払ったのだろう。描かれた限りでは、その感心もまじっていたと取る方が、穏当でもあり、その男の俗な善良さも出て来るように思う。謙作はとに角、作者も一しょになって全くそれに触れていぬのは純粋な一種の鈍感ということになる。例えば後篇最後から一つ手前のところに大山登りの条があり、そこで山の夜と夜明けとが殆ど赤人風に描かれて、自然への「陶酔感」を伴っての没入、自然から「或る感動を受け」ることの非常に美しい描写があるが、謙作本人は別として、自然への陶酔感、没入感、全く無抵抗のその受け身の溶融感が、謙作の疲労、衰弱、急性大腸カタルによる肉体の調和の問題と作者自身によっても結びつけられていぬのはどういう訳だろうか。（それは、それを、じかにどの程度に書くかという問題とは別になる。）また例えば、その辺にお由という女が出て来るが、お由とのいきさつ、お由の語る竹さんの身の上、特にお由がどんな気持である種の言動をするかに対する謙作の事細かな穿鑿に対して、お由が何で子供連れで里へ帰っているのか、その穿鑿を、作者が全く謙作に従って一行もしていぬのはどういう気の緩みからだろうか。

謙作の心の中央には人間の間の平等ということがあり、いわば謙作はそれを中心にして生きているといえる。しかし謙作は、実地には宿屋とか、女中とか、車夫とか、按摩とかいういわば目下のもの、それから見ずしらずの人間、船の乗合い客、貸家の家主とかいったものに対しては実に

横柄で大束だ。父親に対する時などと全然出方がちがう。そして謙作自身、そのことに矛盾を感じていない。彼は謙虚にしていれば却って馬鹿を見るような場合、純粋に横柄に出ることで結果として得をしている事実にはてんで無感覚でいる。そしてそれに対し、それの描写によるそれの評価が全然作者にないのはどういう訳からだろうか。

後篇第四百二十六頁に「生涯」という言葉があり、謙作が「今日までの生涯」という言葉で自分のことを考えるところがあるが、そこまで読んで来てこの言葉を読むと、勃然として腹が立って来る。何をいう、何が「生涯」か、思い上った事をいうなという気がして来て肚が立つ。謙作は小説家ということになっているが、一銭一厘小説で稼いだわけではない。しかしそれは謙作のことだ、ここで作者が、謙作に全く従って、問題をやはり「今日までの生涯」として取扱っているのでなかったら読者の対謙作感に変化があったためではなかろうか。読者は謙作に肚が立つ。作者に立つのではない。しかしそれが、作者のせいでそうだということはどこまでも動かせぬ事実と思う。

同じことは「頂きます」という言葉にも出ている。「頂きます」という言葉は「網走まで」にも出ている。しかしそれは、謙作の「頂きます」と丸で性質が違っている。「暗夜行路」ででも看護婦が「頂きます」を使い、直子が「頂きます」を使っている。そして丸でそれも、謙作の「頂きます」とは性質が違っている。謙作はただ、こうして「下さい」といわぬのだ。彼の「頂きます」は、反駁を許さない。彼は厚い殻をかたく閉じながら、その後ろへ自身退りながら一言「頂きます」という。そこには、看護婦の「頂きます」の素直も、店屋などの使う「本日休ませて頂きます」の類の空々しさもない。「頂きます」とはほかならぬ謙作がいった以上、わきから指一本さすこともはや絶対に出来ない。最も消極的で、しかし一歩身を退くことで至上権を振りあげて押して来る。指一本指したが最後、その場で有毒な毬のようなもので強たかにさされねばならぬ。「頂きます」はここで殆ど憎悪だ。最も消極的な言葉での最大の身勝手の絶対肯定。謙作の人生・処世哲学がこの一言にあり、この気随息子の甘えの骨頂がそこにある。作者は、それをそのものとして描き出していない。作者は徹頭徹尾謙作に蹤いて歩いている。

このことは「放蕩」という言葉にも現れている。

「謙作が自分から放蕩を始めたのはそれから間もなくであった。」

「……身体だけは、彼は益々放蕩の深みへ堕として行ったのである。」

「そして実際にも彼は其間に幾度か放蕩した。」

「放蕩の深み」「堕として行った」には放蕩の観念的取扱いがある。この言葉づかいには、感覚の域以上に出た倫理的判断の感覚化（声化）がある。けれども、「幾度か放蕩した」の「放蕩」はたしかに観念でない。それは具体的に

ある行為を指す。作者は、具体的な一行為を指してそれを「放蕩」といっている。そして謙作本人は、この行為には一度としてその行為として触れることがない。曲輪へ行こうとして、黒眼鏡の知人などに出逢って如何に彼が気をまわすか。しかし時間はそこで途切れ、舞台が廻ってその街から謙作が出て来てしまう。東京でも尾の道でも手順は同一だ。「放蕩」は中味において描かれない。中味においてさぐられない。「キタ・セクスアリス」に入り口だけ書いてあるような点が触れられぬだけでなく、それも含めてもいいが、これに対するそれの意味、それの位置、社会的なそれのあり方、それの自己との関係における評価が丸で触れられていない。この行為に限り、さしもの謙作に全く思案・反省が見られない。この種の行為と行為へのさまざまな条件とにつき、心から謙作は「つつしもう」と考えている。その本人が、行為そのものにおいてそれを前後の世界から切りはなしてしまう。彼は行為を「放蕩」という言葉で確然と限定する。しかし彼の倫理的敏感の一切が、この行為に限って文字通り確然と鈍磨してしまう。行為そのものに関する限り彼には不安も疑惑もない。彼は彼の財布にいつも金があったため金に関する一切で鈍磨したと同様、町があり、そこに曲輪があり、そこに異性がい、それが特定の金銭関係に立ち、そして彼の財布に銭があったという事実のためにこの行為そのものに関する一切の疑惑と動揺とから救われている。「放蕩」の一言は、事の中味吟味を全くそれ以上許さない。中味吟味を問いかけたが最後、問いかけた本人が思い切り謙作から侮蔑され切り兼ねぬ。作者は、この一言で、「放蕩」の中味吟味から完全に謙作を助け上げた。中味吟味はぴっしゃりと遮断された。中味は遮蔽され、そのまま保護された。この遮断力は、殆ど「頂きます」より以上強い。作者は、なぜこの言葉にその大力量を与えたのか。なぜ作者は、この謙作が、この行為を「放蕩」などいう言葉で自身にいい示すことを謙作に許したのか。（もしその行為がそれ自身として説明されぬとすれば、謙作は、何をなんで「つつしもう」などと思うのか。「つつしもう」という言葉は、本人の、その行為を生きた感覚で思い出していること、また思い出すことが出来ることを証拠だてている。）

　そこに羞恥が見られるともいえる。しかし同時にそれが無恥でないかどうか。謙作その人は無恥でない。なさ過ぎるくらい彼は無恥でない。しかしこの行為に限り、口を拭うということの必要さえ感じないくらい有効に「放蕩」の一言を使ったという事実は、作者がここで問題を伏せた、問題を隠蔽した、そのことで事を謙作に成就させたこととして以外別様に見得るかどうか。これは本当に解せぬ。ごく平凡な意味で全く解せぬと思う。「放蕩」は逃げの言葉と思う。謙作は全く逃げた。作者は幇助した。

　このことは、前後一切にわたって、謙作が、まわりから大事にされ、いたわられ、人生を最少抵抗線で歩いている

ことに対する本人の無自覚・無反省に現れている。前篇の内容とその展開とは、謙作に小説家を自称させる充分な内的性質を持っていた。あの種の生活はちょうど「伸子」でのように、主人公に自己の芸術的表現をせまる。芸術的表現は、そこで、自己認識とあるものからの脱出行為とを統一して成就する。これは一般にいってそうだ。しかし実際には、つまり「暗夜行路」の展開の道行きではそれが段々に薄れている。つまり後篇では、小説を書く内的必要が幾何級数的に謙作から薄れて行き、謙作に小説を書かせねばおかぬ内生活のネジが一つ一つ加速度的にぬけて行っている。側から見れば、それが、この作者のますます（この小説に関する限り）小説作家でなくなって行った道行きに応じている。つまり、自家用の問題に来る。小説を全然自家用に書くということは、その作家に小説を書くことが必要でなくなっていることの証拠でなければならぬと思う。

七

そしてそこに「暗夜行路」の魅力がある。作者が全く自家用にそれを書いているというところに。その代り、謙作のことで責任は全部ここで作者が負うように出来ている。「放蕩」の一言で謙作がことの中味吟味を避けたことは、そのまま作者の責任として作者が引き受けるように話そのものが出来ている。そこがこの作の、またこの作における作者の、「雁」の「僕」との、「海戦」の「私」との根本での違いといえる。

破格な仕方ではあるが、ここでの作者は全身をさらしている。そしてこのことを、作者も安心して信じ、読者も安心して信じて来た。これは一方で日本私小説の問題となり、その本質、それの極限の問題となり、夢殿の救世観音云々に正反対の現象を、作者、ジャーナリズム、読者が三位一体で是認して来た特殊な日本的条件の問題になるがそれにはここでは触れぬ。

とに角、前篇はさて措き、「暗夜行路」のすすむに連れ読者は、谷川徹三が「志賀さん」と呼ぶその人を絶えず見つめて来た。その人は、そのことをそのまま是認して、世間と読者とにまっ直ぐに自分の眼を見させて来た。これには、これ一つだけ切りはなしていえば、芸術家＝世間関係の究極の正しさがある。但しこれ以上この問題にはここで触れぬ。

八

この作の魅力は次ぎにスタイルにある。しかしスタイルは、この作に限らぬこの人のスタイルということになる。このスタイルは認識のあきらかさということに立つ。すべてが明らかなのではない。その認識が広く、深く、すべてを包摂しているのではない。それは狭い。ただ自身の範囲

の限り微塵曖昧がない。

「『いらっしゃい』と云って、其儘熔岩を組み合せて作った庭石の間に散り込んだ落葉を草箒で丹念に掃き出して居た。」

認識の明哲に、ものを知っている知識が生きて働いている。庭石と認めること、それが熔岩を組み合わせて出来ていると認めること、ある動作の「丹念」という限定、落葉として認めること、同時に、踊りと音楽との間のような微視的な前後・因果関係で「散り込んだ落葉」として認めていること、「散り込んだ」という動作を現す自動詞で落葉が歴史的に、(歴史的も大袈裟だが)限定されること、「散り込んだ」という見えぬ過去が、現前の「丹念に」「掃き出す」に縦に結びつけられていること、それらの組立てそのものに認識の明らかさがある。これがこの作者のどの行にもある特質だ。

作者は「名もない草」とか「名も知れぬ雑草」とか決していわぬ。「名も知らぬ花」、「未だ名も知らぬ大小の島々」という風にいう。名はある。謙作が、作の主人公がそれを知らぬまでだ。そのことをこの言い方が的確にいいあらわす。「名もない」「名も知れぬ」の概念的ひろさ（実は嘘の一種）にたいし、ある人がその名を知らぬその個物が、他から区別され、個物として、狭く、境界を持つものとして生きて突き出される。

そこで、作者は、あるもの、ある事柄、ある情景を、「名も知れぬ」という概念的ひろさに従わなかった時と同様、擬声的に表現することがない。必ず他の言葉で、いわば思惟的に説明する。

「それら美しい縄でも振るように水に映しながら進んで来る。」

「田舎田舎した色の黒い女で、鼻と口の間が異様に長く、そこが弓なりにふくらんでいるところは、類人猿を思わせるような女」(これは「暗夜行路」ではない。)

「そして彼は其人の其動作を大変よく思い、いい感じで、其人は屹度馬鹿でないという風に感じた。」

「小鳥が啼きながら、投げた石のように弧を描いてその上に飛んで、又萱の中に潜込んだ。」

「空が柔かい青味を帯びていた。それを彼は慈愛を含んだ色だと云う風に感じた。」

「それが赤鱏を伏せたように平たく」

「それは停止することなく、恰度地引網のように手繰られて来た。」

つまり原則としてオノマトペイーがない。日本語の特質上全くなくはない。しかし非常にない。ある種の、五流・七流作家などのやる「じっくり腰をおち着けて」「にんまり笑った」の類を決してこの作者は書かぬ。彼は書けない。色彩・音響・寒暖など、それから人間の心理的変化・位置などを擬声的に表現する境から出て、感覚的近似値でな

く、知的思惟的連合観念で彼はいい現す。このことで、このスタイルは、オノマトペイーによるスタイルより大体において高級ということになる。(理由説明は省く。) しかしこのことで、擬声で行く作家たちの味わうある種の喜びはこの作者に断念される。擬声で行く作家にはそのことでの生理的快感がはた目にも見られる。ある場合には下司なものが感じられる程にも見られるがそれがこの作者にはない。しかしそれは、同時にこのスタイルを受け身なものにする。オノマトペイーの作家には自身酔って進むところがあるが、この作者には酔って進むことがない。自分の与えた擬声に我とだまされるということがない。そこに消極性が生れる。行進に行進曲、突撃に空撃喇叭の伴うのが必然とすれば、この伴うということの必然をこの作者は拒否するもののように見える。いいかえればこの作家は仕方話をしない。スタイルで仕方話をせぬだけでなく、作家その人が仕方話をせぬ人なのだろうと思う。

この作家は一般にも比喩を用いない。「眼瞼の女」という語があるが、長谷川伸が使ってマブタの何々という活動広告などに使われたあれとちがい、「眼瞼のたるんだ一人の女」、「眼瞼のたるんだ女は」というその女をそれは指す。比喩でも思わせぶりでもない。比喩、時に思わせぶりは、甲を甲といきなりに出さずに、甲1、甲2、甲3、と持ちまわることで甲を出す出し方になるが、この場合甲は新しいもの、まだ名づけられていぬもの、甲1甲2その他はあり来りのもの、すでに名づけられているものという関係になる。この作者はいきなりに甲に向かう。そこで「物の傾いて行く時に、それを支えようとする力程に無益で、しかも苦しいものはありません。」という場合、「物の傾いて行く時」が力学的に力を持つことになる。しかしそれは、ある言葉を、「それが最初に云われた時の新鮮さと充実さで」云うということではない。警句の話になるが、作者は、「一体警句は誰が云っても相当に人を動かすものです。然し在り来りな句をそれが最初に云われた時の新鮮さと充実さで云える人は却々ありません。」とある所で書いている。この場合の「最初に云われた時の」云々とこの作者の言葉とは反対になる。この作者は、初めての言葉の、最初の名づけ言葉をつかわない。彼は古い言葉をつかう。よく使われた言葉、つかい込まれた言葉。「京都の博物館に一対になった万暦の結構な花瓶がある。」この「結構な」は、「美しい」でも「見事な」でも「立派な」でもない。正に「結構な」で、それは、得体の知れぬもののこの作者による初めての名づけでなく、すでにある何かを、人がガス灯やら電灯やらをさしつけてもうまく照らし出せぬ時に、手入れのとどいた石油ランプを持って来てくっきり照らし出して見せたというあの関係になる。これは、だから、豊田正子の綴方の場合ともちがい、武者小路実篤の天馬空をゆくようなスタイルの場合とも違う。武者小路のは得体の知れぬある新しいものの表現に適している。作

者自身それを志してもいる。志賀はそれを志さぬ。志賀のスタイルは古さを持つ。それは洗練されている。だから古臭さを持たない。また古臭くならない。下駄の形、壺の形が古臭くならぬ意味でそれは古臭くならぬ。彼は、全く新しいもの、全く得体の知れぬもののそれとしての表現は自然に避ける。彼は目に見えるものを示す。ある音響のようなもの、音楽のようなもののそれとしての表現は用心ぶかく避ける。彼は鑿のようなものを使ってスカリとやる。刃物はあるかたさを持ち、パレットナイフ見たように自身曲る性質を持たない。歯医者などの使う、さきにギザギザのついた針様のものでもない。連続して抉ったり、孔様のところへ差込んで、それをまわして、何かを引っかけて引き出して来るようなこともしない。ある固さの木材に当てがって、腕力で一挙動でやる操作に限る。そこで、削られた面の性質も、一回の操作で処理される面積、溝の深さ、長さなども、ある小ささで限定される。それ以外は取り扱わない。扱うにしても、これで扱える点でだけ扱って、後は拒否してしまう。そこでそれは、時に、「彼は自分の好悪感が、其儘にお栄で、働かない事を歯がゆく思った。」とか、「雑に本文を見る。」とかいう単純に行く。単純だが、単純すぎるともいえなくはない。一篇としていえば、短篇「新聞」の「夕刊」のような具合になって分かりにくいということになる。極度に単純にした結果、ある程度作者の独り合点ということにもなり兼ねぬところまで行く。一方からいえば、読者の理解力を極度に尊重しているということにもなる。つまり読者の理解力、反省ということを極度に尊重して、作者がそれらを超えて何かを読者に説明し、読者を説得し、読者に説教しようとは決してしないということである。そこで、結果としては純粋の散文が出来るが、そういう純粋の持つ物足りなさの随いて出て来るのを避けられぬ。(この作者がはじめて純粋の散文を書いたといっていい。この作者は最初からそれを書いた。二葉亭の「先ず絢爛に志せ」などはここで役立たない。まして、散文の一般的基礎の出来たあとでいった、谷崎潤一郎の同じ趣旨の言葉など問題にならぬ。そこで、志賀の散文がどうしてこんな具合に出来ることになったか、その発育史が問題になるが誰も扱っていない。ここでも扱わぬ。)

単純な語、短いポキポキした文、鑿の手での木彫り、それがこのスタイルの特徴になる。それはある厄介なものへもいきなりに行くが、しかしそれで行ける限りで行くというのに止まる。それ以外は避ける。複雑な、定かならぬ大きさはここで避けられる。「多情仏心」という題で「要するに多情仏心という事は、あの男は風邪をひきやすい性だと云うようなものだ。」と一行に書くということはこの作者にある。しかしそれの説明ということは作者はしない。全集第九巻の第二十五頁に、「人が、それをどうすべきかを知るならば、総てを云い得るし、又、云うべきである。絶対に真摯な懺悔なら、聴いて定めし興味があるであ

ろう。ところが、開闢以来まだそういう懺悔を聴かされたためしがない。誰も総てを云ったものはないのである。あの烈しいオオガスチンでさえ、自己の魂を裸にすることよりも、マニ教徒を説教すること等に気をとられたし、又、乱れた頭脳からわれと吾身を誹謗するに至ったあの偉人、憐れなるルウソオですらも同様であった。」という文があり、思わずおどろくが、頁をめくると(エピキュラスの園)とあり、うなずける次第だ。この作家は、「エピキュラスの園」の作者のようには決して書かぬ。この作家のスタイルは、上等の家具職人なんかのスタイルに非常によく似ている。昔話にあるように、椅子を叩きこわして見た上でなければ裏側の鉋目が分からない。削った面、その組合せなどには申し分がない。その点は丁寧至極だ。その代りには、前にいったメスや消息子のようなところがない。電気熔接のようなところがない。それだけそれは古い。職人の腕の場合のように腕の質が古いのだ。「患者が医者によく取扱われ而して繃帯が規約正しく施されたという証拠は次の様なことである。即ち吾人は患者にそれが良く適合するかと問い、その際患者がよく適合するが併し唯少し固いと云うくらいのものが宜しいのである。」この作家のスタイルは、いわばこんな具合に引き緊まっている。それにしてもつまり、「骨折」の範囲を出ない。電気熔接以前、黴菌学以前というわけだ。「船は一方の旋推機で水を後ろへ、もう一つのでそれを前へやり、時々はそれを止めなどしながら段々と岩壁を離れて行った。」という出船の描写と、「アンナ・カレーニナ」のなかの停車場汽車到着の描写とを比べればそれが分る。「一方の旋推機で水を後ろへ、もう一つのでそれを前へやり、時々はそれを止めなどしながら……」――全く彫塑的、しかし同時に殆ど童話的といっていえるだろう。特に「アンナ・カレーニナ」の冒頭、プーシュキンの言葉に感心したトルストイが、「山荘へと人人が集って来た。」という調子で一旦書き出し、しかしあとで、結局幸福な家庭と不幸な家庭との差別についてのあの長目の文句を入れたということ(伝説としてもいい)に思い比べれば一層それが分かる。志賀ならば、後で長目の前置き文句なんかは決して入れなかったろう。志賀はそのスタイルで、対象に対する取扱い方の結果としてトルストイの逆を行っている訳だ。

そこで、このスタイルは、自然には自然だが、何か引き去って行ってその残りが自然だといった自然さの性質をどうしても免れない。赤人風な自然描写と前に書いたが、自然描写の部分だけ切りはなして来ても、「みよしぬの象山のまの木ぬれにはここだもさわぐ鳥の声かも」というようなところは結局ない。作の最後の、例の大山の夜と夜明けとのところでも、「あかときと夜烏なけどこのおかの木ぬれの上はいまだ静けし」といったようなぶまなおおらかさは結局ない。つまり如何にも自然なその自然に一抹の不自然がある。あるいは瘦せがある。

この作が長篇のため、そのことが時に際立って来ているともいえよう。「『話』らしい話のない小説は勿論唯身辺雑事を描いただけの小説ではない。それはあらゆる小説中、最も詩に近い小説である。しかも散文詩などと呼ばれるものよりも遙かに小説に近いものである。」と書いて、芥川が、そういう作にこの作者の短篇を数え入れたことがあった。「僕は僕等日本人の為に志賀直哉氏の諸短篇を、――『焚火』以下の諸短篇を数え上たいと思っている。」そして続けて、「僕はこう言う小説は『通俗的興味はない』と言った。僕の通俗的興味と云う意味は事件そのものに対する興味である。」と書いた。この時の芥川は論理的に曖昧で、ああでもないこうでもないという風に書いているが、それはそれとして、志賀の作品の限りでいえば「通俗的興味」を問題にせねばならぬと思う。長篇小説では、つまるところ「話」が問題にならねばならぬ。「話」のない長篇は長篇でない。「話」の展開、それの構成ということを外にして長篇小説というものはあり得ぬのだから。

話を話として、長篇を長篇として、人間の世界を人間の世界として自然に見る限り、この作家のスタイルは残額の自然という属性をまぬがれぬ。人間の自然は、この作家が引き去って行ったそのものを含めてもう一段と大きい自然だと思う。この作家は説教をしない。この作家には演説も説教も出来ず、公衆を前にしての自作朗読さえ出来ぬのではないかと思えるが、人間の自然は、もともと説教やら自作自演やらをも包摂してなおその上で結局大自然なのではないか。そこへこのスタイルは行かぬ。このスタイルはどこまでも防禦的、警戒的、その点でいわば職人的だ。その意味で個人的自己中心主義的だ。自己中心主義ということは利己ということになる。しかし職人的自己中心主義はどこまで行っても打算をしない。打算ということを知らない。そこで、そこに矛盾が生じて来ることさえ自身全く気づかぬようなそういう自己中心主義だといえる。漱石は、初期には鼻持ちならぬスタイルで書いていたが、段々に変って行き、しまいには学習院生徒などに演説までして聞かせられるところまでどしどし進んで行った。相手に即して、しかし問題取扱いの性質は少しも下げずに、相手方へこちらから出かけて行って話す話し方で話をすすめるところまでどしどしと進んで行った。そういう親切、そういうあたたかい心づかいがこの作家のスタイルにはない。謙作という身勝手男、まわりからいたわられ切った虫のいい男、河豚みたいにふくれたり朧見たいに怒ったりばかりしている男を、そのものとして、その男の精神発達史において客観的に描き出して納得させるという作家当然の親切気がこの作家には欠けている。この作におけるこの作家には、当人を馬鹿げてさえ見せかねぬ作家持ち前の、持ち前であるべき、あっていい愛のあの光り、あのぬくみがない。前篇の最後のところで、私娼の部屋で謙作が手習いするところがあり、そこで謙作が「慈眼視衆生福聚海無量」

という文句を書くが、この作は、作そのものとしてその反対を行っている。この作での作者は慈眼視衆生でない。それからその結果、作が福聚海無量でない。「ジャン・クリストフ」はからだ具合の悪い時なんかには読めたものでない類の退屈を持つ。しかし本当には、春が来て四方の草木が芽ぶくような、交響楽的にあたたかい蒸発を内部に持つ。それがこの作にはない。

人生はもっと違った刃物で、もっと幾つもの刃物を統一して使って、新規なもの、得体の知れぬものをそっくり取り出して来る行き方で取り扱われていいいと思う。馬鹿にされるかも知れぬと思いながら息子に説教して聞かせる父親のような態度の方が人生に愛を持つ行き方なのではないか。自身酔いを取るためでない限り、この作家にもオノマトペイーがあっていいと思う。この作家が純粋な作家でありながら、いまだに大作家になっていない訳がそこにあると思う。

九

この作家は一貫してモラーリッシュなものを取り扱って来た。この作でもそれは変らない。この作では、モラーリッシュなものの追究そのことが中心眼目だったとしてもいい。しかし逆に、モラーリッシュなものは作家から全く遠かったとも同時にいえると思う。ケーベルが、訳はまずいが、「いつもいつも道義と徳とのことを考え且つそのことを語ることが出来るには、人はどれほど恐しく道義的に堕落していねばならぬだろう！」という意味のことが書いてある。そこで、この作家はそれの逆の場合ということになり、道義の問題をこれだけ扱って来て、微塵厭味のないのを、いいこと、稀しいことと認めぬものは一人もなかろうということになるが、しかし結局は、モラーリッシュなものからこの作家は全然遠かったのではないか。この作家は、人がモラーリッシュなものとして扱うものを感覚的なものとして扱っている。ここでは、この作家は、描写のスタイルでオノマトトポエーティシュに扱っているといえる。場面場面でだけでなく、長編の全体として、その布置、問題の重量の配分上そうやって来ているといえる。すべてが謙作の感覚・反応に戻され、同時に作者のそれに戻され、作自体としてのモラルの世界はついに追求されずじまいになったと思う。無理にだが、「多情多根」での作者の努力の方がそれだけ逆に同情に価する。「暗夜行路」でのこの作者は、モラーリッシュなものを追求して厭味がなかったのでなく、モラーリッシュなものを考え語りもしなかったために厭味がないことになったと見るのがむしろ穏当なのではないか。

モラーリッシュなものもそのものとして現れるには生的構造を持つ。構造あるものにはこの作家は向かなかった。

結節に出逢う毎に、作家は、謙作をどこまでもまたどこへでも逃げさせた。どこまでも、また何処へでも——しかしその最後の隠れ家は案外に財産と家庭とだったように見えるのをまぬがれぬ。謙作自身それを意識していないが、問題となる問題は小口から捨象して行き、前篇の世界から勝手に脱けて出、最後に行きついたのが、また行きつくべく予定されているのが、世俗から断絶した男女一対の保護された世界だったらしいという見えから作全体の色調がまぬがれぬ。保護された家庭へ——渡しの鉄索のように、結局のところそれが張ってある。結節に出逢う都度、否定なしにそこから飛び出して行かねばならぬある人々の場合とのつまり反対ということになる。そして鑿での木彫りということに結局それが結びつく。「暗夜行路」における「話」は実は、鑿ででなく、尖きのぶるぶる曲がる、もっと刃の薄い刃物で処理して行ったら本当のものに仕上がったのではないだろうか。

しかしこの作の失敗はこの作の失敗というのに止まる。結局この作家が、鑿ようの刃物を捨てて別の刃物を取り上げることが切に望まれるということになり、この作家が、モラーリッシュなものにそれの構造において向いて行くのが望まれるということになり、ある種の愚鈍を厭わぬ愛の息吹きがこの作家に望まれるということになるが望まれてよかろうと思う。雪村で「若き日」といえば四十歳まで位をいうという話があるが、「暗夜行路」の作者が、そういう雪村のように、満六十歳になった昭和十八年以後でそこへ出て行こうことは本当に期待していいことのように思う。もしこの人が、そういう刃物やら針やらそういうものの綜合やらを使う段になったり、それこそ柳田国男のいうアミュージングな人生図、腑わけの道行きにおいてすでにアミュージングな人生図がそこに織り出されるものと期待して間違いないのではないか。それ位のことは、満目荒涼とした現日本文壇について夢想することが許されると思う。多分許される。つまりそこで、一人の大作家をも運よく見られるのではないだろうか。

一〇

右に書いたことはバランスがとれていない。十あるうち三つだけ書けば、三つ自体は妥当でも全体としては偏頗になろう。そういう結果になったが今はこのままに措く。人のいったことと同じことをいったところが沢山ある気がするがそれも我慢することとする。

（一九四四年六月「志賀直哉研究」河出書房版より）

コッペルニクス的転向

花田清輝

転向ということが問題になるたびごとに、いつも私はコッペルニクスの名を思いだす。これはおそらく、昔、学校でおそわったカント哲学の記憶のためにちがいない。コッペルニクス的転向――コッペルニカニッシエ・ウェンドゥングとは、周知のように、カントが「純粋理性批判」のなかで、かれの業蹟をコッペルニクスのそれに匹敵するものとして、その劃期的である所以を強調するためにつかった言葉だが、――この言葉のもつ颯爽としたひびきは、およそ今日、我々の周囲で絶えず発音されている、耳馴れた同じ言葉からはきくべくもない。そうして、何故か私には転向といえば、つねに堂々たるコッペルニクス的転向のことを指すべきであり、誰でもがする現在の転向は、断じて転向という言葉によって呼ばるべきではないような気がするのだ。

もちろん、かくいえばとて、私には、二十世紀の転向者のむれを侮蔑するつもりなど毛頭なく、ただ転向の語原学を問題にしているにすぎないのだ。我々の転向が凄惨な闘争のはてにうまれた、いわば紆余曲折をへた結果の改宗であり、したがって、多かれすくなかれ、悲劇的な色彩を帯びているのに反し、十六世紀の孤独な転向者、――最初の転向者コッペルニクスの転向は、あくまで朗然たる転向であり、しかもそれは不思議なことに、闘争の拒否の上に立って、人目につかず行われたのだ。ここにコッペルニクス的転向の特徴が、――いやすべての転向らしい転向の特徴が、最も明瞭なかたちであらわれているように思われる。これは、すなわち、コッペルニクス的転向は颯爽としているかもしれないが、コッペルニクス自身はいささかも颯爽としていなかったことを意味し、さらにまた、こういう転向にくらべると、なるほど今日の転向は、はなはだ颯爽としないこと夥しいが、転向の前夜を通じ、闘争をもって唯一無二の信条とすることに変りなく、ただ闘争の立場をかえるにとどまる我々の転向者のほうが、コッペルニクスよりも、はるかに颯爽としていることを意味する。

といったところで、もう一度断る必要があるであろうが、颯爽としていないからといって、コッペルニクスを非難する意志など、私はすこしももっていない。どうして颯爽とすることが立派なことなのであろう。むしろ私は、闘争が、しばしば逃避の一手段として臆面もなく採用される

ばあいのあることを指摘したいくらいだ。吠える犬は嚙みつかない。

ドラマを好む伝記作者にとって不幸なことに、コッペルニクスは冷静であり、慎重であり、時として曖昧ですらあった。そうして、異端開祖流の不敵さをしめすでもなく、したがって、一度も火刑台の焰のおびやかされることもなく、悠々自適、平穏無事な七十年の生涯をおくったのだ。にもかかわらず、かれは文字どおり回天の事業をなしとげ、同時代人の夢想だにしなかった転向を実現した。闘争をしているともみえなかった人間が、実は最も大きな闘争をしていたのだ。

こういう波瀾のない平凡な生涯と、劃期的な転向との結びつきが、ともすると我々の眼にあり得べからざることのようにうつるというのも、元はといえば我々が、先駆者というものは花々しく戦い、不幸な死に方をするという、あのプルタルコス風の感傷に憑かれているためかもしれない。先駆者が大して迫害もうけず、幸福な一生をおくったからといって、おかしいことはないではないか。いったい、知識人の闘争は、主として書斎の片隅で行われる。ずいぶんみばえのしない闘争だが、その代り、案外、迫害をうけずにすむ。殊にコッペルニクスのばあいは天文学であり比較的人間と対立する機会に乏しく、塔のなかで星ばかりながめていればいいのだから、天命を全うしたといっても、かくべつあやしむべきことではないかもしれない。しかし、かれの直接の後継者である焼き殺されたブルウノや、拷問にあわされたガリレイの運命を思うとき、当時にあっては、天文学はなんら安全な学問でなかったばかりでなく、いくら片隅にひき込んでいようと望んでも、たちまち人間を悲劇の真唯中にひきずり込む、最も危険な学問のひとつであったことはあきらかだ。のみならず、——

のみならず、コッペルニクスは、かならずしも星ばかりながめていたわけではなかった。かれは数学者であり、医者であり、政治家であり、経済学者であり、詩人であった。かれはハイルスベルグで貧しい人々のために無料診療を試みた。古代ギリシアの作家テオクリトスの詩を翻訳したこともある。フラウエンブルグの僧会では代表者を勤め、数多くの外交的使命をはたした。ジギスムントの懇請によって、うちつづく戦禍のため、長い間放棄されていたプロシアの通貨改良に関する論文を書いたこともある。また約五六年の間、かれはアレンシュタイン市の行政官に選ばれ、掠奪をほしいままにする盗賊団の跳梁を全力をあげて防ぎさえした。

要するに、かれは、ルネッサンス期に輩出した、あの「普遍人」のひとりであったのだ。人間を避けるどころか、人間臭にまみれながら、かれは生活した。にもかかわらず、かれの生活は、最後まで、いささかの破綻をも示さなかった。星の観測にしたがうときと同様に、なにをするばあいにも、冷静であり、慎重であった。そうして、つね

に実りゆたかな収穫をもたらした。

ルネッサンス期特有の「普遍人」たちが、次の時代の担い手として、ほろびゆく時代にむかって終止符をうつものである以上、必然にかれらは、至る処に打倒すべき敵をみいださないわけにはゆかず、この敵にたいする執拗な闘争から、次第にかれらは「普遍的」にまで鍛えあげられていったにちがいないのだが、——しかしたとえばレオナルドにしろ、エラスムスにしろ、或いはまた、このコッペルニクスにしろ、闘争を回避するもののような奇怪な印象を我々にあたえるのは、いったい、いかなる理由によるのであろうか。

一五一四年、コッペルニクスは、ラテラーヌス評議員会から、他の天文学者たちに伍し、多年宿望されていた暦の改正を論議するための招待をうけた。すでにその頃、かれはかれの「天体の回転について」を完成していたのだ。したがって、それはかれの学説を発表し、闘争の火蓋をきる絶好の機会であった。しかし、かれは行かなかった。太陽と月の軌道に関する知識が、なおあまりにも不完全だから、暦の改正にいかに努力してみても無駄だといい、評議員会の招待を拒絶したのだ。

こういう用心深い態度は、浮世の辛酸がかれに教え込んだ「賢明な」処世術にもとづくものであろうか。それとも知識人の「本来的」な性格が、平和を愛し、摩擦を避け、ひたすら研究に精進するようにかれを慫慂する結果であろうか。または、かれが、かれの敵たちとは、くらべものにならないほど高い水準に立っているのでとうてい喧嘩にならないと諦めているせいであろうか。しかし、それだけでは割りきれない、何かいっそう根本的なものがそこにはある。

人間である以上、かれにもまた、全然打算的な気持がなかったとはいえない。好学の志や諦念が、かれをひき止めたということも、大いにあり得ることかもしれない。とはいえ、コッペルニクス的転向を敢えてしたかれは、人間的であると同時に、非人間的でもあった筈だ。そうして、絶えず我々の念頭にうかべていなければならないのは、闘争を拒否するかにみえるかれが、すこしも闘争を放棄してはいなかったという事実だ。

率直にいえば、私はコッペルニクスの抑制を、かれの満々たる闘志のあらわれだと思うのだ。かれのおとなしさは、いわば筋金いりのおとなしさであり、そのおだやかな外貌は、氷のようにつめたい激情を、うちに潜めていたと思うのだ。そうして、闘争の仕方にはいろいろあり、四面楚歌のなかに立つばあい、敵の陣営内における対立と矛盾の激化をしずかに待ち、さまざまな敵をお互いに闘争させ、その間を利用し、悠々とみずからの力をたくわえることのほうが、——つまり、闘争しないことのほうが、時あって、最も効果的な闘争にまさるものであることを、はっきり知っていたと思うのだ。のみならず、——

のみならず、数多の敵を相互に闘争させる際、各々の敵の力関係を正確に計算し、できるだけそれらを釣合の状態に置き、その闘争を永びかせ、やがてすべての敵の力が衰えるとき、これを一挙に自己の傘下に集めようと企てていたと思うのだ。正しくかれは調和や均衡を求め、闘争をさし控えているようにみえるが、それはこういう意味においてであった、そうして、このことは、単にコッペルニクスだけではなく、程度の差こそあれ、レオナルドや、エラスムスや、その他ルネッサンス期の「普遍人」の大部分についていえよう。何故というのに、対立の激化を促しながら対立物相互の均衡を維持し、次第にこれを克服するという闘争の仕方は、行動の領域においてと同様に、精神の領域においても試みられていたのであり、「普遍人」が「普遍人」になり得たのは、かかる闘争方法を心得ていたためだと考えるからだ。克服の対象としてながめるとき、諸々の学問や芸術もまた敵だ。

たとえば、かれが詩人であり、数学者であったとする。かれは、詩と数学の対立と矛盾とを、かれの精神の世界のなかで、直ちに「止揚」することによって、調和させようとはせず、一ぽうが他ほうに負けないように、両者の対立を深めてゆき、この対立を対立のまま調和させるのだ。かれをみちびくのは、一種の平衡感覚のごときものであり、これによって、かれは巧みに両者の均衡を維持し、その各々が、次第にかれにたいする抵抗力をうしなうのを待つのだ。詩が数学に征服されそうになれば、詩を強化し、数学が詩に敗北しそうになれば、数学に力をかす。そうすることによって、かれの精神の世界が収拾のつかないものになりそうにみえるかもしれないが、決してそんなことはなく、むしろ反対だ。何故というのに当り前の言葉でいえば、これは、詩に厭きたら数学をやり、数学が嫌になったら詩を書く、ということにすぎないからだ。しかし、やはり、そんな風にいうと誤解されそうだから、次に這般の消息を語るソーニャ・コヴァレフスカヤの手紙を掲げて置く。

「わたしはまた仕事をはじめる気になって、暇のある度に、数学の問題を考えたり、ポアンカレ氏の論文に思を潜めたりしています。文学的な仕事をするような気持にはなれないのです。——何もかも陰気で没趣味です。こんなばあいには、むしろわたしは数学的なものを好みます。自分とまったくかけはなれた世界にはいって、非人間的な問題を語るのが面白いから。」

これはかの女が姉の病気に心を痛めていたときに書いた手紙だ。すなわち、人間的な問題のために精神の世界が支離滅裂になりそうなときに、かの女は数学に、——非人間的な問題にとりつき、逆のばあいには、また文学に帰ってくる。数学と文学の対立を強化し、両者の釣合を保たせることによって、かえって精神は調和あるものとなり、いよいよ鍛えあげられてゆき、かの女は数学者としてまた文学

者として、立派な業蹟をのこすのだ。ワイエルシュトラスの詩を解し得ないものは真の数学者ではない、という言葉も、こういう意味にとってこそ、はじめて生きてくるのであり、詩にも数学にも直観が大切だからそういったのだ、と、とるのでは、まことにつまらない。いかにも両ほうながら、直観が根本的なものではあろうが、パスカル風にいうならば、数学における直観は「自然的なる光」であり、詩における直観は「繊細の心」であり、前者が知的であるのに反し、後者は情意的なものだ。この両者の相異こそ問題なのであり、二つの異質の直観が火花を散らしながら、均衡状態において共存しているところに、真の数学者の偉大さがある。詩人であり、数学者でもある人間の、精神の世界における詩と数学とのむすびつきを、俗流的な弁証法論者なら、かならず直観による弁証法的統一に求め、一色の直観によって塗りつぶしてしまう筈だ。

さて、コッペルニクス的転向が、かれの闘争方法の知的な領域への適用からうまれたものであり、すなわち、数学と天文学とを対立させることに端を発し、さらにかかる非人間的活動に対立させるのに、ヒューマニストとしての多彩な人間的活動をもってし、すべて対立を対立のまま巧みに按排し、調和することによって、はじめて実現されたものであることは、もはや断るまでもあるまい。プトレマイオスの星学書に、無数の円、──同心円や離心円や周転円の大群として描かれ、カスチリヤの王アルフォンソに、天地開闢のときにいあわせたなら、星の位置を、もっとわかりやすく変えるように忠告したであろうに、とさけばせた、複雑きわまりない天体の運動は、かれの研究によって、漸次単純化され、かれは、かれが「普遍人」として、かれの小宇宙(ミクロコスモス)を組織するばあいにしめした見事な手腕を、ここでも存分に発揮した。そうして、それまで静止していた地球がぐるぐる廻りはじめることになり、ぐるぐる廻っていた太陽が不動の位置におさまり、この太陽をめぐって、星々の一族は、それぞれ均衡の状態に置かれ、整然と自己の軌道をたどることになったのは周知のとおりだ。以来、かれの立場はきまり、終生、かれはかれの立場を一度も変更しようとはしなかった。それにしても、まもりとおすのにあまりにも困難な、なんという奇想天外な立場に、かれはたつことになったものであろう。

ラテラーヌス評議員会のごときは、事実、問題ではなかった。もはや進歩派も保守派も、ことごとくかれの敵であった。進歩的だなどといっても知れたものだ。当時、進歩派の代表をもって自他ともに許していたルッテルは、コッペルニクスを次のように批評した。

「馬鹿者が天文学全体をひっくり返そうとしている。しかし、聖書が我々に教えるとおり、ヨシュアが止まれと命じたのは、太陽にであって地球にではない。」

まことにおめでたいことに、コッペルニクス的転向が、単に天文学全体をひっくり返すのみでなく、ルッテルの礎

固不動のものと信じていたキリスト教全体を、根柢からひっくり返すものであることに、ルッテル自身すこしも気づいてはいなかったのだ。さらにおめでたいのは、保守派の代表レオ十世の態度であった。かれは斬新なものなら、なんにでも興味をもっ底の人物で、コッペルニクスに好意を寄せ、法王庁の内閣員に命じてプロシアに書面をおくり、太陽中心説の数学的証明を要求した。かれはこの理論を全くの仮説だと考えていたのだ。

進歩派の慢罵も、保守派の讃辞も、コッペルニクスにとっては、無意味であった。ほんとうのことがわかれば、かれらのすべてが、たちまち共同戦線をはり、顔いろをかえ、猛然と歯をむきだしてかれに飛びかかってくることはあきらかだ。しかし、そんなことは大して気にする必要はない。何故というのに、かれにはかれ一流の闘争の仕方があるからだ。すなわち、両派の対立を対立のまま釣合せ、闘争の激化をはかり、自滅をまつこと。その間にかれの理論が正しいものであるかぎり、それは、どんどん各方面にひろがってゆくにちがいない。

かれは、ルッテル派のひとり、ヨアキム・レテックスに、約三カ年にわたり、かれの蘊蓄をかたむけて天文学を教えた。劃期的なかれの著書の最初の版に、ローマ法王への讃辞を掲げた。そうして、かれの理論は、両派の陣営内部に、白蟻のように喰い込んでいったのだ。

おそらくヒュームのいうように、コッペルニクスとともに、人間中心の時代がはじまったのであり、いっぱんに考えられているように、かれとともに、そういう時代がおわったのではないかもしれない。たしかにこのプロシアの天文学者は、人間を宇宙の時等席から追放し、その傲慢の鼻さきをくじきはしたが、しかしまた、それと同時に、大胆にも、かれは一緒に神を追放してしまったからだ。いかにもかれはヒューマニストであった。しかし、なんというヒューマニストであったろう。かれはすべての人間に対立し、一歩も後へ退こうとはしなかった。かれは人間的であったが、また極端に非人間的でもあった。

ヒューマニズムのもつエモーショナリズムの一面が誇張され、人間的であることと人情的であることとが混同されているこの頃、ヒューマニズムの排撃は、たしかに必要なことにはちがいないが、——しかし、最初のヒューマニストたちにあった、こういう頑固な、非人間的な一面を、決して我々は見落すべきではないのだ。

今日、ヒューマニストは弱々しいものとされる。そこで、一見、闘争を拒絶しているかにみえるレオナルドやコッペルニクスよりも、花々しく活躍するミケルアンジェロやブルウノのほうが、はるかに我々の周囲では人気があるようだ。そうして、レオナルドやコッペルニクスこそ、いかにも典型的なヒューマニストらしいヒューマニストと考えられ、かれらの業績はみとめないわけにはいかないが、かれらの生活態度は、むしろ逃避的であり、因循姑息であ

るとされる飛んでもない間違いだ。逞しい外観をそなえてさえいれば勇敢だと考える、こういう単純な連中が、その実、かれらの反対しているエモーショナリズムの信者以外のなにものでもないことは断るまでもあるまい。自分自身、本気になって闘争するつもりのない人間にかぎって、派手な闘争に喝采するものであり、そうして、喝采することによって、わずかに自分を慰め観念的に昂奮するものなのだ。

しかし、人はコッペルニクスを、権謀術数にとんだ、陰険な男だと想像すべきではない。ここで私は、トルストイの「イヴンの馬鹿」を思いだす。ルッテルに馬鹿といわれたコッペルニクスと、トルストイの描いた馬鹿のイヴンとは、一ぽうが知識人であり、他ほうが無知な百姓であるところがちがうが、両者とも、そのいささかも馬鹿でないところが、その平和を愛するところが、さらにまた、その不動の信念をもちつづけているところが、大へん似ているかのようだ。ただ私は、イヴンはあくまで絵空事であり、もしも我々がイヴンに似ようと欲するならば、コッペルニクスにならって、かれ一流の闘争を敢行すべきだと思うのだ。百姓が無智であっていい筈はない。無智から素朴さはうまれはしない。ほんとうの素朴さは、――そうしてまた、ほんとうの謙虚さは、知識の限界をきわめることによってうまれてくる。それは、ほんとうの闘争が、一見平和にみえるようなものだ。

フォントネルの侯爵夫人は呟く。

「地球が太陽の周囲を廻転することを説明してくだすって、あたしを侮蔑したつもりでいらっしゃるの。それでもあたしは、やっぱり地球を尊敬しておりますよ。」

文学と時代

佐々木基一

今日の小説がつまらぬということは既に周知の事実だ。如何なる弁解の余地もない。いまは戦争の最中だ、時代の転換が眼まぐるしく行われ、歴史の巨大な歩みが個人の意志を踏み躙って進んでいる。こういう激しい時代に文学の力が弱まり、つまらなくなるのは当然だと人はいうのかも知れない。なるほどそうかも知れない。だがやはりつまらぬ事がつまらない事実であることに変りはない。感傷的な泣事だけでは済まされぬ。僕たちは過去の動乱の時代を想い起す。そうしてそこに幾多の文学上の傑作が生れているのを見る。また故国を追われて不安定な生活を余儀なくさせられた詩人が不朽の文学を遺していることも考える。今日

の文学がつまらぬのは当然だとばかり云っていられない。それに今日の時代に取残された文学ばかりではなく、今日この時代に即応して、歴史的事件と足並を揃えようとする文学も生れているが同様につまらぬのである。誤解のないように断っておくが、私は何も個々の作家、個々の作品を貶すために云っているのではない。今日の文学のつまらなさは、技法の未熟とか題材の新しさに対する不馴れとか、そういったところにあるのではない。もっと一般的な傾向として、文学精神のあり方そのものの中にその理由を求めるべきものとしてあるのである。うまい作や、読むに堪える作品が存在するということは大したことではない。肝腎なのは、読者の魂を揺り動かすもの、否応なしに人をその世界に引ずり込んで、そこにあるものこそ真実であると信じざるを得なくさせるもの、そういうものを作品が持っているかどうかだ。もし僕たちの心が芸術的感動で満たされるなら、文学は当然つまらぬものどころではなくなるだろう。

――「憎めない」という人物は非常に多い。然し「愛すべき」人物はそう沢山はいない。

「憎めない」人物ばかりで、「愛すべき」人物の一人も出て来ない小説は読んでつまらない。――志賀直哉の言葉だが、文学的感動の一つの源泉を衝いた深い言葉である。小説が典型を描くとは、云ってみれば第一流の人物を主人公に選ぶということに外ならぬ。善人なら善人の、悪人なら悪人の、強者なら強者の、弱者なら弱者の第一流人物を徹底的に描き尽すべきであって、「憎めない」というような中途半端な人物の創造だけでは、決して僕たちの心を真底から動かすことは出来ない。このことは、小説鑑賞に際しての最も単純な事実である。近頃僕は小説を読む場合、一切の問題や文学理論を抜きにして、直接に、全くの素手で取りかかることにしているが、そうすると最近の文学には持続性のある強靱な性格とか行為とかがまったく喪われていること、或は多少そういうものが見えても徹底を欠いているか、または偽りの徹底さしかもっていないこと、そうしてまたそういう人物しか描けない作者の現実探求や人間把握の中途半端さと甘さなどが、文学の味気なさの最大の原因であることがよく分る。また色々取り交わされる文学上の議論も一種の詭弁に過ぎぬのではないかと思われて仕方がない。文学が文学としてもつ根本の機能は棚に上げての議論、乃至はいまの文学はつまらぬということを前提として成り立つ議論などは文学の常識的な、だが常に実際的な、論理に較べるといかにも詭弁めいている。詭弁の論理がいくら精緻になったところで、それが詭弁であることには変りないから、文字そのものはかかる議論によって善くも悪くもなりはしない。つまらぬものに較べてはいい、といわれてみたところで、それで読後の印象を偽るわけには行かない。

例えば時として文学の新しい傾向というものが取出され

る。そういう作品を読んでみるとなるほど新しい、従来になかった傾向が出て来てはいる。だがよく眼を凝らして視るまでもなく、そこには仰々しいひろめ屋しか描かれてはいなかったり、或は自身、現実処理の力も可能性も喪っていながら、却ってそのために孤立し閉鎖した生活に情熱的に没頭する人物、その人物の生活を作者まで一緒になって主観的に絶対化する傾向が現れているに過ぎなかったり、或は自己の自由に使用出来る手段が欠如していればいるほど、そういう状況の中で却って強く自由を感じているといった妙な人物が登場したりするだけだ。僕たちの人間としての自然の気持は裏切られる。時には侮辱さえ感ずる。また文学的感動の喪失を救うものだといわれるような作品がある。なるほど通俗小説にはない愛情の純粋さがある。俗物への嫌悪がある。美への憧れがある。情熱の自然な昂まりや、人間と人間との純粋な結合がある。だが何となく怪しい何だか盲人の世界のようで、理性には全く目隠しが施されている。何となく平板で、片目しか見開いていないのである立体像が結ばれないかのようだ。僕たちには明瞭に分っていることを作中人物は知っていない。そして作者自身そのことに気づいていないか、或は気づいていても知らぬ振りをしている。明らかに牧歌をうたっていながら、これは決して牧歌どころじゃあない、人間ぎりぎりの生き方だ、などと嘯いている。藁を摑みながらこれこそ自分を救い人を救うことの出来る唯一のものだと思っている。僕たちの現実感にはどうしても納得致し兼ねることだ。もはやそうなれば感動なぞしているわけにも行くまいではないか。

また或る種の人物が描かれていて、それは現実の或る種の傾向を反映し表現しているといわれるような作品がある。併し、僕たちは文学の権威のためにも小説を世間咄の掃溜だとは考えたくない。

こう見てくると、現在批評家の当面している困難な立場も少しは明らかになるだろう。実際、批評家は単なるテルジーテス、傲慢不遜な悪口家に止るわけには行かないから、批評のジレムマ、あらゆる混乱がここから生れて来るのである。そうして今日の文学を相手にしては何かましなことを云う材料も見当らないとなると、明治大正文学に援助をもとめるという次第だが、つまり明治大正文学の古典決定が未だ行われていないという点こそ批評家のつけ目なのである。これら過去の文学は、現在の文学のつまらなさを指摘する場合、批評家がテルジーテス根生という汚名を免れるには此上なく好都合な武器となる、と同時に新傾向の提唱でもしなければならぬ場合には、逆に攻撃の的ともなってくれる。まことに便利な代物なのだ。だがこのことはいま本筋に関係がない。

何らかの意味で僕たちに深い感銘を与えてくれる作品、多少の文句や不満があってもなおかつ面白い、いいものだと思わずにいられない作品には、必ず備っている一つの特質がある。主題の真実性と一貫性がこれである。更に附け

加えて云えば、そういう主題を支えて他のものに換え難いものとしている所の、作者の動機の強さと深さである。一体作者が何を云おうとしているのか、それを描かねばならぬという絶対の理由がどこにあるのか。作中人物を愛しているのかいないのか、そういうことがさっぱり汲み取れない作品が読者に感銘を与える筈がない。また作中人物の性格が中途で何の必然性もなくがらりと変り、その変化がいかにもその人物らしいとはどうしても受けとれぬ作品は真実の読者を戸まどいさせるだけだ。大抵そういう作品には小説を作るために人間を犠牲にしているといった嘘があるか、或は初めからぐらぐらした人間理解しかないものである。徹底した行為、徹底した情熱などは独りでに在るものではない。現実のあらゆる事態に直面し、きびしい試練を経てはじめて出来上ってくる、いわば磨かれた珠である。

現代のように激しい時代、世の中が根底から大きく揺れ動いている時代、思いも設けぬような事件が次から次と発生し、種々様々な情報と議論が飛び交う、こういう時代はいわば人間の理性や感情や性格の最大の試練の時期である。こういう時代に確実に自己を護って、自らの信ずる所に従ってのみ行動するということは生やさしいことではない。こういうときにこそ本物と物の区別がはっきりして来るものだ。そうした僕は今日の文学の呑気さにほとほと呆れるばかりである。

勝ち戦のときだけ勇敢で自己の力を発揮するが、一旦形勢が芳しくなくなるとすっかり自信を無くし意気沮喪してしまう将軍を名将と呼ぶことは出来ない。また戦場で発生する夥しい新事態に面して一々自己の信念を動揺させ、そのときどきの状勢に押し流される将軍も名将とはいい兼ねる。名将をして名将たらしめる最大の要素は、如何に困難な事態に打突かろうと決して挫けることのない必勝の信念であり、更にその信念を裏付けるところの状勢と自他の力に対する徹底的な分析である。『戦争論』の著者は軍事上の天才について次のように述べている。「凡そ事に処する者は、嘗て十分に検討吟味された所の諸原則の動かすべからざる事を確信し、たとえ一時におしよせてくる現象が如何に猛烈であろうとも、その真実性の程度の劣れるものなる事を忘れてはならぬ。かくの如く疑わしき場合に面して過去の確信に優先権を与え、之を牢守する事によってこそ、行為には、所謂性格と称せられる所の堅実性と持続性とが付与されるのである。」と。

形勢非にしていまやまともに敵に対抗することが出来ない事態に立至っても、かかる確信の人は、恐らく常に敵を打破るべき方策を練ることを忘れてはいまい。だから彼等がたとえ力屈して倒れるとしても、僕らはそこに崇高な悲劇を感ずるのではないか。今日の文学にはこういう名将は見出し難い。性格的行為、一貫し持続する行為がないだけではない。土台、行為を貫くところの信ずべき原則をもっていないのだ。そして昭和十年以来、文学に於ける強烈な

現実意欲の喪失や自意識の徒らなる彷徨は、いまこの試練の時代に文学の解体という高価な代償を払わされているわけだ。今更神がかりになれと叫んだとて間に合わない。ただ中心のない精神がふわふわ浮動している。そして歴史の饗宴に食客としてあやかることばかりを考えている。或はまた、大きな流れが自分独りでなく、すべての人間を一様に巻き込んだと考えて安心し満足して、現在もったいないものと思い、人の邪魔をせず、不平を云わず、ただ善意だけをもって人に対し、異性を愛し子供を生み、すべてをただ肯定するだけでいいという生々発展主義を奉じている。橋本英吉の『柿の木と毛虫』(文学界)などはそういう一種のメルヘンであり、森山啓の近年の文学は非常に親近性を感じさせる作品である。『系図』の作者のこういう一方の傾向はかいたくない。呑気さは満洲開拓村の生活を扱った真船豊の『北斗星』(中央公論)にも顕著だ。ここには、本来困難な環境に打克って行く激しい情熱などの片鱗もない。あるものはただ自己満足ばかりだ。すべてが円満な環境であり、すべてが円満におさまって行く。本来劇的葛藤に類する何ものもない。この点では岡田禎子『病院船』(改造)なども同様だ。これらの戯曲に於ては、既に劇的形式そのものが解体している、ということはまだ大した問題ではない。各個人がそれぞれ現状に満足し切って、幸福を感じている時代は歴史の中の白紙だそうだが、だとすると、現在のような自己満足と甘い幸福感とに充たされた文学の流行時代は、文学史の中の白紙にならぬとも限らないのだ。歴史の大きな波頭が頭上に襲いかかっているのに、文学のこのみみっちい自己満足は何に由来するか。ヴォルテールが生きていたら、定めしパングロス先生の余りの氾濫に却って胆を潰すだろう。

勿論反省がないことはない。併し多くは気分的か心理的なものに止っているようだ。例えば荒木巍の『大きな出来事・小さい出来事』(日本評論)では、大東亜戦争勃発の日に感じた一時的昂奮への静かな反省の契機が描かれているが、作中に出て来る老市井人の落着きも、ただ主人公の一時的気分として感じられるに過ぎない。歴史の食客のようよしている中で、細々ながらでも一家を構えている人物に懐しさを覚えるが、併しいまは、動けなくて動かない人間と、動けるが動かない人間とを見分けるには余程の強い精神を必要とする時だ。もしいま真に動ける能力をもちながら動かない人物が、中途半端な妥協なく描き尽されるなら、或は深い感動を喚びおこすかもしれない。こういうと直ぐ、それは歴史に逆行するものだといきまく、うるさいことだ。では古来没落する悲劇の主人公たちのために流した僕達の涙は一体何であったのか。まして新しい時代の真にいわれのある情熱も、いまは明瞭な姿で文学に現われていないではないか。動かない人物の探求は、作家の主体の恢復のためにも、生き生きした現実的主題の確立のためにも現代文学のぜひ果さねばならない課題である。

自由と必然という問題が、転換の時代に常に新しく人の心を捉えるのは、そういう時代が人に、人間は果して歴史の主人公になり得るものだろうかという切ない反省を強いるからだ。従ってこの問題は歴史に人間、戦争と個人などという一連の問題とつながり合っている。だからこそもう一世紀以上も前に思弁的には一応解決済みの問題が、いまもなお繰り返えされているわけだ。今月もまた林健太郎が『歴史家の立場』という論文で、甚だ穏当な意見を述べているが、併し過去の理論的な成果による論証だけではどうにも動かしようのない切実さがこの設題に籠められている。この問題は既に世界史的個人を通過し、「自由とは認識せられたる必然である」という命題の中に思弁哲学的に充分解決されている。それはあのナポレオン時代の直縁であった。所がそれから約半世紀の後、やはりあのナポレオン時代を扱った小説の中で、北方の文豪がこれらをもう一度持ち出した。そうして、英雄は時代のレッテルに過ぎないといい、また「『智慧の樹の実を味わうなかれ』」という禁断は、歴史上の諸事件に於て最も瞭然たるものがある。結果を齎らすものはただただ無意識な行動のみであって、史的事件のうちに何らかの役割を演じるものは、決してその意義など理解することがない」或は「人間は自己のためには意識的に生活している。けれども歴史的な全人類的目的を達するには、無意識な道具となって働いている」などと歴史に対する人間の自由を否定しながら、同時に「当時の大多数の人口は、事件の一般的な進行などには注意を向けずにただひたすら目前の個人的利害によって行動していた。しかしこういう人々こそ当時に於ける最も有用な活動家だったのである」といい、また「歴史の法則を研究しようと思ったら、吾々は観察の対象を全然変えねばならない。つまり皇帝とか大臣とか将軍とかいう面々を度外視して、「大衆を指導する無限に少なる同種的要素を研究しなければならない」というような一種の民衆的歴史観に達したが、一方ではなお事件は起るべくして起ったというより外はない、という宿命説以上に出ることが出来なかった。

そしていまこの戦いのときに、又しても自由と必然の問題が人々の大きな関心事となっていることは、まことに意味深長である。更にその関心が、例えば「僕等の望む自由や偶然が、打ち砕れる処に、そこの処だけに、僕等は歴史の必然を経験する」（小林秀雄）という言葉に要約されているような一種の無力感によって裏付けられていること、もはや人間が果して歴史の主人公たり得るかという反省への道が断ち切られていることも現代精神の一つの特徴をなしている。こういう無力感は理屈ではどう動かしようもない現実感が籠っているのだが、同時にまたこういう疑問を挿めないこともない。僕たちの自由とは何であるか、何が僕達を衝き動かして自由を渇望させるのか。――世の中には何もしたくないために懐疑主義者になっている人物さえある。歴史がちょっと居睡りしている間にだけ自由を感じ

る人間もある。鬼の居ない間の自由というやつである。
「世界の中では如何なる偉大なものも（個性の）熱情なしには成就せられなかった」という命題が真理であるなら、人間の意志や意慾も鬼が起きて来ればすべてお終いだと思いつつ意慾し志向されるわけではあるまい。なるほど鬼が眼の前に立ち塞っている限り、僕たちの意志も慾望も真直ぐには押し通されない。歴史的現実とは外ならぬこの鬼である。然も非情無惨な形相をして、まことにもの分りの悪い鬼である。人間が意慾することとは、取りも直さずこの鬼との格闘に外ならぬ。元々もの分りの悪い鬼にこちらの考えを押しつけようと思うことが既に無理なのだ。益々頑固にさせるくらいが落ちであろう。また貴様のもの分りの悪さは怪しからぬ、そういう頑固さというものは道徳的にも悪だとヒステリックに罵って見ても相手はビクともしない。仕方なく貴様は貴様、俺は俺だと無関心になった積りでいても、時々背中に吹きかけられる冷たい息に脅かされて何となく釈然としない。もはやこうなれば僕たちの救われる途が外にあろうとは思えない。ものの分らぬ奴はまさにその分らぬという所にこそ唯一の真実があると観念することだ。都合のいい希望ばかり抱かぬことである。云うまでもなくそれはまさしくそうであって、詮ないことだという諦めとは別物である。むしろ、これから愈々本腰になって格闘を始めるための覚悟をまず極めてかかることに外ならない。そうして僕たちは、たとえ巨大な鬼が相手であろうと、なおかつ自らの意慾を枉げることも出来ねば放棄することも出来ないという所に、本来自由の名に価するものを見出すのである。闘う限りは必勝を期す外ない。強力な相手に向うには、執拗かつ狡猾にアキレスの腱を狙うべきであろう。鬼の目を偸んで陰でこそこそ自由を楽しもうという弱々しい意慾が砕かれたからといって、今更仰々しく騒ぎ立てるほどのことではない。世界史は一面から見れば鬼を殺し続けて来た人間の歴史である。いまの自由・必然論はおおむね鬼に殺された自由ばかりに目を向けているようだ。従ってそこから出て来るのは、嘗てある哲学者が「否定的成果の空虚は優越性に、憂欝な得意を感ずる」ことだといったあの感傷的な反省である。そしてそういう反省しか起らぬところに、今日の個性の薄弱さ、人間を貫く強力な理想の欠如という、現代文学の一つの傾向が明瞭に窺われるではないか。

　小説に芯があるかないかという批評は、もう古くさいと人はいうだろう。併しこの古くさい形容には依然として新しい響きがある。いまの文学に一番欠けているのは、この芯だ。いくら芯を軽蔑して見ても、芯のない文学が人を動かしたことは古来絶無といっていい。今月の文章では坂口安吾の『青春論』（文学界）にわずかに芯が認められるくらいだが、その坂口安吾は自ら思っている程散文家ではなくて、むしろ詩人だ。宮本武蔵に即興性を見るのが氏の機智であるが、同時にそのことは武蔵から武蔵らしい芯を抜

いているわけだ。真に根深い散文小説家は今日の厳しい時勢の中では容易に求められぬものであろうか。

（一九四三年一月「日本評論」）

間隙の克服

――時代と個人のずれの文学的処理について――

小田切秀雄

一

歴史の進展は急速に高まって来た。（昭和十六年十二月）。日々に生起する大きな変動について、いちいちその変動の意味に想いをひそめ、たずね考えなどしていたら追付かなくなってしまうくらい、或いはおのずとそれらの変動に慣れてもはや驚きのみずみずしい感情をもすりへらしてしまうくらい、それくらいにまで国民の日常の生活は激動のさ中に置かれている。この慌しい生活の或る瞬間に、ふとふりかえって昨年のまたは一昨年のきょうこのごろに想いを走らせるなら、知らず識らずのうちに私達の生活がそこからどれだけ遠いところまで押出されて来ているかという事実に、何程かの感慨を余儀なくされぬ者はあるまい。

しかし、生活が変化してしまったという実感と感慨とはあっても、その変化のもつ意味について、ここから納得のゆくところまで分り切るには至っていないという人も本当は少くないのではあるまいか。そのような人は少なからずいるに相違ない。が、もとよりこれはおのずからなりゆきであったろう。威勢のよい言葉で事実をもみ消すことを欲しないとすれば、私達は、広汎な国民の全体が時代の激流と同じ速さで人間的内面的生活的にもすべて変化し得ているなどとたやすく信ずるわけには行かぬのである。個々のそれぞれに複雑を極めた歴史的社会的環境のうちにあって長い時間の経過のなかに徐々に形成された人間の個別的な具体性というものは、そう容易に他のものと取換えられるということはあり得ないであろう。しかも時代のこんにちの歩みの速さというものには一通り以上のものがある。たしかに国民は人間的にも変化しつつあるが、そしてそれは

やがて時代との距離をなくして行くに相違ないが、とにかく現在のところでは国民各個人と時代との間にある何ほどかの間隙、ずれは打消し難いのである。このずれを各個人が意識しているかいないかは別として、事実上においてそのようなずれのあること、ずれをもちながらもなお、この時代の激流のなか以外に各人の生きる場所はないということ、このことは私達に閑却し得ぬ問題として実感される。

時代と個人との間にあるずれは、可能な限りそのずれの距離を縮め且つ克服しなければならぬ、――文学の終局的な使命が国家社会にかかっていることは疑い得ぬとしても、政治その他に対して文学が何らか独自な存在の意義をもつとすれば、それは、文学が直接に人間各個人の現実の生き方とそのありようにかかっているという点である。従って、時代と個人とのずれをちぢめ克服するという課題こそ、こんにちの文学にとって最大の文学的な課題の一つとなるに相応しいものではあるまいか。広汎な国民の生活的現実におけるこのような問題におそるることなく立向ってこそ、こんにちにおける文学の存在の意味をも強く証しだてることが出来るのではあるまいか。

けれどもこの課題が文学にとってどれほど困難な問題であるかは、作家自身の時代に対するありよう、その慌しい動きなどのなかに露わな形で物語られている。それは、創作に当っての実際上の文学的な困難さなどであるよりも先ず、作家自身が自己と時代との大きなずれに自覚的な意識なしには浮動しているということに現われている。時代からずれていたのは、他の誰かであるよりもまず、作家みずからであったのだ。ひとはさき頃の国民文学論議を思い出さぬであろうか。――時代の急激な変動は、従来の文壇的な文学に代るに国民的な、広汎な国民万人の生活の奥深いところと緊密に結び合った、新しい文学を要求するようになった。文壇の多くの作家・評論家が国民文学要望を唱え、その要望のおのずからな前提として従来の自身たちの文壇的な文学を否定した。ところが彼等のその呼び声のなかには、或る沈痛なひびき――それなくしてはいられぬ筈の或る沈痛なひびきというものが殆んどまるでひびいていなかった。沈痛なひびきとは何か。否定せねばならぬとした文壇的文学とは、実は、国民的文学を要望するひとびとが昨日まで、いや本当のところは今日すらも、よって立っていたところの自己の地盤だったのだ。文壇とは嘗て自己がそこから養分を取って来、そこに育てられ、今なおそこに生きているところの、言わば自己そのものではなかったか。文壇的文学を否定するということは、即ち今日までの自己そのものを否定することにほかならぬ。そして新しい国民文学の創造に与え得るためには、まず古い自己の否定全く新しい国民的なものへの自己の革新、これにこそ深く思いをひそめねばならぬ。だが、自己革新くらい、言うに易くして為すに難いものはすくないのである。そこには、痛苦に満ちた後悔と懺悔、自身との絶えざるたたかい、模

索と彷徨と蹉跌、そして言語に絶するまでの自己発展のための努力、これらがなければならぬ。勿論これらの痛苦と努力とを言葉の上で物語る必要なぞありはしない。ただ、もしそれらの痛苦と努力とが本当にあるなら、それはおのずと国民文学要望のその呼び声のなかに何らかの気分か調子かとなって沈痛のひびきをひびいていたに違いない。しかしそのような沈痛なひびきはどこにも聞えなかった。その代りに、一見もっともらしい政治の言葉が文学論のなかに氾濫していた。——もう大分前になるが、文学大衆化が熾烈に要望されたことがあった。そのときも、文壇的文学は否定を叫ばれねばならなかった。がその折には、否定さるべき文壇的文学と自己との断つにすべない血肉的関係の重さの自覚から、ついに自らを死にまで駆り立てねばやまなかった芥川龍之介のような悲痛な人物がいた。それかれ、有島武郎のような人物もいた。これらに比してさき頃の国民文学要望者たちの表情には、芥川の亡霊などまるで取付くしまもなかったであろうようなしらじらしさがひろがっていたのであった。

むしろ彼等の多くは時代の激しい動きに狼狽していたのだ。狼狽のあげくに、時代に取残されまいとしていっぱしもっともらしいことを述べてみたに過ぎないのだ。——その証拠には、国民文学作品など未だどこにも生れていはしないではないか。私達もまた国民文学を待望する。しかし真実の国民文学を待望するが故に或る種のそれにまぎらわしい作品、例えば『西郷隆盛』や『高杉晋作』のような作品に注意しないではいられない。ここには、江戸末期の読本的な創作方法が埃を払ってひっぱり出してありはしないか。勧善懲悪の大義名分をまっこうにふりかざして、以て作品の本来の内容としての伝奇的な興味を合理化するあの通俗物語としての読本が私にはしきりに思い合わせられるのである。

が、それはともかく、国民文学論議のいきさつのなかには、作家と時代との大きなずれが顚倒した形ではっきりと示されていた。急速に進行する時代にたいして、言葉の上ではうまく適合しながら、古いままの自己はいささかも革新されることなくそのままに放置されているのだ。ここに最近ひとびとの注意を集めている『得能五郎の生活と意見』を持出してもそれは理由のないことではない。何故なら、それは作家が自己の、時代の動きによって変化した日常生活と日常の心理とを、こまごまと描いて或る種の自己省察を示しているからにほかならぬ。古い自己が時代のどんな新しい動きによって取巻かれるようになったか、自分の日常生活がどんな風に変わらせられて来ているか、それについて自分はどんな風に思いどんな風に行動するようになったか——これらのことが瑣末な点にまでわたって書きためられている。そこには、時代と自己との新しい関係のありようがとにもかくにも関心されているわけなのだ。すくなからざるひとがこの作品に他人ごとではない感与をも

った。若し自己革新がなされねばならぬとすれば自己省察とはそのためののっぴきならぬ前提条件である筈だから。だが、ここにも痛苦に満ちた表情などというものは殆んどありはしないのである。むしろ或る平静さがある。自己の生活上の新しい諸現象のその真の由来と意味とを、奥底まで掘り下げて追求するというのでもなく、また諸現象と自己との新しい関係がもたらすのであろう自己内心の諸問題をつきつめようとするのでもなしに、主として現象的な記述が行われる。現象的な記述に甘んじているという意味でこんにちの時代に対しては作者は甚だ謙遜であると言わねばならぬ。もとより謙遜は美徳の一つである。しかし、時代に対して謙遜であるということと、作家としての本領の自覚とは、この作者の内部にどのような風に相結んでいるのであろうか。同書の続篇をなす最近作『温泉療養所』など、この疑いを一層深めさせるものとなっていた。従ってもはや私達は、『得能五郎』の作者が以前に『幽鬼の街』を書いて芥川龍之介と小林多喜二に触れて行った作家であることなど、ネガティヴな関係においてしか想い合わせることが出来ない。

——時代に対して、或る人々は安易に即応の言をなし、或る者は謙遜なるにとどまっている。そしてこれらの事情の背後には、時代と作家の容易に跳び越しがたいずれが口を開けているのだ。しかし私にとっては、何も作家だけが問題なのではなかった。作家のたたずまいを取上げたのは、一つの例としてのことに過ぎぬ。作家にしてすでにこのようなずれをもっていたのだから、諸方面の広汎な国民各人について見るなら一層そこには、それぞれの具体的な形においてのさまざまなずれがあるに違いないことを語りたかったまでである。作家をも含めてなお一般に広く存在しているこのような人間的問題こそ、こんにちそれに立向うべき最も重大な問題の一つである。しかも、問題の人間的な性格からいって、文学にとってはその死活に関していると思われる文学としてはこのずれを如何にして縮め、克服すべきであるか。

二

作家についてみても安易な時代即応の言や単なる謙遜さを以て時代の表面に浮び上っている人物が少なからず存在していたのと同様に、国民のうちにもまた、時代に容易に即応し得るが故を以て時の表面に浮び上っているという風の人物が少くない。それはやがて時代の波のうねりの高さのためにおのずと影を没するような存在に過ぎぬとしても、その故に現在それが問題となり得ぬということはない。しかしそれよりも更に、容易に時代に即応し得ぬが故に時代の流れの川底深く沈んで、時代との自己のずれの大きさに、ひそかに深刻に懊悩しているひとびとがあるのではないか。時代の激動に謙遜たるには古いままの自己がす

こし強過ぎるというひとびとや、容易に即応の言をなすにはいくらか無器用に過ぎるというひとびとや、時代進展の速さの故に瞠目したままとどまっているようなひとびと、——これらのひとびとの必ずしも少くない存在は、昨今の文学作品のなかには殆んど全く姿を見せていない。けれども、昨今の文学作品中に存在していない人間のタイプは、また現実においても典型的には存在していないなどと誰が信じられよう。

尤もここに太宰治という作家があって、「私は愚鈍だ。私は愚昧だ。私はめくらだ、笑え、笑え、私は没落だ。なにも、わからない。渾沌のかたまりだ。ぬるま湯だ。負けた。負けた。誰にも劣る。苦悩さえ、苦悩さえ、私のはわけがわからない」(『八十七夜』)としばらく前に書いた「私は」「私に」「私の」というように苦悩は専ら自己に向けられてあるが、この「私」が読者の共感の中に置かれて多数の「私」となって訴えて来るとき、そこに昨今の文学とはすこしく異質的なものが現われていること、何人の目にも映らずにはいないであろう。彼の多くの作品について触れる余裕はないが、ここには、うまく立ち廻るということの出来ない、狭いながらにひとすじに純粋な傷つき易い人間の、ひどく押しつけられたときに発する呻吟がある。もとよりこれは直接にはすさまじい自己呵責であり、それ故に凡ての苦悩の原因を自己に帰するものであるが、私達はたとえその自己の呵責に深い共感をもったとしてもなお、必ずしも作者と同様に苦悩の原因をすべて自己にのみ帰する必要はない。もとより責任はすべて自己がとらねばならぬ。だが、自己の形成がすべて自己によるものだなどとはもはや考えることが出来ぬからである。とすれば、太宰治の作品における苦悩のうちには、作者の主観から一応離れて言えば、時代の流れの底に沈むことを余儀なくされた人間のうめき声がひびいていると言っても誤りではないであろう。そしてそのようなところでこそ、太宰の作品の芸術性は保証されているのだ。ところで、極く最近の彼の『風の便り』や『旅信』それから『誰』等が、嘗ての訴えるような烈しさを喪って著しく凡膚化して来たさまは、時代の圧力加重による文学的な独自の個性の解体への傾向を示すものとして私達の特別の関心を惹くのであるが、ここでは彼にのみこだわっていることは出来ない。私達にとっては太宰のしばらく前の作品のなかに僅かにその一端をのぞかせていたところの、時代の流れの底深く沈んで懊悩している多くのひとびとのことが問題だったのである。

これらのひとびとにあっては、時代と個人とのずれは、時代にうまく即応しているひとびとにおけるよりも一層テイピッシュな深刻な形で現われている。そして、もし時代と個人とのずれが克服さるべきであるとするなら、文学は、そのずれをテイピッシュなものにおいてとらえ、追求し、描き出すことによって克服することが出来るであろう。克服のために文学のなし得ることは、第一にこれであ

る。一般に或るものが否定さるべきであるとき、文学としてはその対象の本当のありようを深いところまで探って生き生きと描き出すくらいに有力な手段を他にもっていない——従って、いま述べたようなひとびとがこんにちにどのように生きているかの追求は、文学的な課題としても充分に遂行さるべきことがらとされねばならぬ。

　たやすく時代の流れに浮動したり即応したり従属したりすることの出来ぬこれらのひとびととは、浮動や即応や従属をたやすくなし得ぬ人間として、それぞれ自己のうちに或る鞏固なものを有するひとびとである。その鞏固なものは或いは抜き難いエゴイズムであり、或いはニヒリズムであり、或いはまた人間本来の豊饒な可能性に対するひとすじの止み難い自意識であるかも知れない。或いはもっと別のものもあるにちがいない（例えば、生活の要求そのもの。しかしこれについてはいまは語ることが出来ぬ）。彼等はとにかく時代の急激な進展と、それまでに既に一通り出来上っている自己との間に合一しにくいずれというものを感じている。そして彼等の胸裡にもつものが鞏固であればあるだけずれは大きくなり、摩擦を強めて行くであろう。こんにちは或る状態に静止を続けるということが本来不可能なのである。摩擦があれば、その摩擦は大きくなるか小さくなるかどちらかであるほかはない。且つ又、ずれの日常的に繰返される体験と意識との蓄積は、彼等の性格を何時とはなしに暗く押しゆがめて行かないでは止まぬであろう。鞏固なものほど多くゆがむ。若しゆがまぬとすれば、そこには悲劇的な破滅が人を呑みこむべく待ちかまえているのである。

　さて、それあるがために時代との大きなずれに陥ちいらねばならなかった或る鞏固な自己というもののうちにいろいろの種類のものがあり得ることはいま述べたが、それらのなかで文学が真に克服するに最も相応しいのは如何なるものであろうか。まず飽くことを知らぬ享楽主義や抜き難いエゴイズムや頑迷な規範道徳などについていえば、これらは、それ自身が既に歴史の波濤のなかに埋没し去るべき運命をもっていると言わるべきものである。このような時代が到来する以前にもはや古いものたるに過ぎなかったのだ。真船豊の『山参道』が、その結果を明るく装う時勢粧は別として、根本的にはひどく古めかしく埃っぽかったもの、女主人公のエゴイズムが右の如きものにとどまっていたからである。しかし、古いままの享楽主義やエゴイズムや規範道徳が時代によって簡単に克服し難いものであることは言うをまたぬ。むしろ、古いものがこんにち取るに至っている新しい形こそ真に問題なのだ。歴史の急流に押しつけられ激発されて新しい時代の底深くそれが時別に奇怪な相貌を以て潜行的に荒れ狂うとき、これの文学的追求は古きものの従来は見ることとの出来なかった恐るべき真の姿とともに、新しい時代の本質的な力と構造との解明をもおのずともたらさずにはいないであろう。矛盾点を追求する

ことによって矛盾し合う両者の本質をふたつながら深刻につかみ出すことが出来るのである。けれども、このような追求の可能性については、強靱な現実探究精神としての客観的なリアリズムが前提される。この前提条件はわが近代文学においては豊饒な開花成熟となって存在したことがない。私達はそれを新に創り出さねばならぬのであるが、それは如何にして創り出されるのであるか。——もとよりそれがためには、さまざまの努力と試みと失敗とが積み重ねられねばならぬであろう。しかし作家達が、時代と自己との間にこんにち事実上において存在するずれを、自己及び自己の属する小市民的環境のなかに誠実に探究することによってのみ、或る可能が展けて来るのであるまいか。

何処にか走らざるべからず
走るべき処なし
何事か為さざるべからず
為すべきことなし

——高村光太郎——

これはもう二十年も前に書かれた詩であるが、窮地に追いつめられた烈しく強い精神がじりじりと苛立っているこの鬱屈したさまに、こんにち深い共感をもって接する者がないとどうして言い切れよう。そしてまた、「彼は疑いもなく優れた男である。しかし彼は結局狂人めいた冒険などをするよりほかには、その優れた才能を善用することを知らぬ」と後に『ロシア文学の理想と現実』の著者によって言われたペチョーリン（レールモントフの『現代のヒーロー』の主人公）に、こんにち自分でも何故かわからぬ抑えがたい魅力を感ずる者がいないとどうして断言出来よう。

なお私は桜田常久の『平賀源内』が注目されたときのことを想い起さないではいられない。小説としての『平賀源内』が、歴史の衣裳をまとった一箇の寓意小説に過ぎぬことはすでに批判されている通りである。そのことよりも、芥川賞詮衡委員の言葉などのうちにも窺われたように平賀源内なる歴史上の実在人物に対する特殊な関心がひとびとのなかに意外に強くあったという点が、私としては忘れられぬのである。桜田の小説に描かれた源内でなく、真実の姿における源内は、その豊富な人間的可能を幕藩制の世の重さに押しゆがめられて、しかもそれに屈し得ないはげしさの故に狂躁を続け、やがて自己を死にまで追いやった人物である。このような人物に対して特殊な関心を抱かずにはおられぬひとは、たとえ暉峻康隆がその『封建インテリの悲劇性』という文章で「人間共同体と相容れない自我意識を氾濫せしめた」源内の誤謬を得々と「批判」したのにぶつかっても、「批判」者の時代即応の巧みさについて何ほどかを感じる以外にどれだけの効果があり得るだろう。

——右の高村光太郎の詩やペチョーリンや平賀源内などに、まるで自己と無縁のものばかりを感じていられる人はそれでよい。そこまでに自己と時代とのずれを克服し得た

ひとびと、或いはそれまでに自己と時代との間のずれに無感覚でいられるひとびとについては私はいまは何も言うことがない。しかし若し自己と時代との間にどれほどかずれのあることを意識するなら、そして光太郎の詩やペチョーリンや源内などに打消しがたく心惹かれるものがあるなら、そのときは自己及び自己の項に属している小市民的な環境をおそるることなく追求して、自分自身の問題がそこに最もティピッシュな形をとって現われているところの、時代の川底に沈んでいる優れた人物というものをつかみ出し、彼をその時代とのずれの極限にまでつき進めてこれを描き出さねばならぬ。そしてこのことならば、わが近代文学に可能なこととなりはしないであろうか。——ところで、極限にまでつき進めたとき、そこには一通りならずねじけゆがんだ性格かまたは悲劇的な破滅というものが出て来るであろう。しかしこのようにしてこそ、こんにちのこの時代と時代にずれをもっている個人とが、ふたつながらその深刻な本質と力とにおいて私達の前に現われることが出来るのである。

三

繰り返して言うが、時代と個人とのずれをちぢめ、克服せんがためには、文学としてはそのずれを根底から探って描き尽す以外に方法はないのである。

ところで時代と個人とのずれの存在がこんにちにとってネガティヴな現実であることは言うをまたぬ。このずれを克服せんがために、文学としてはこのネガティヴな現実をその根底から追求し描き尽さねばならぬとすれば、かくて生れ来る作品のどれもが一応は暗い相貌を帯びた文学であることは、これはおのずからなり行きであるだろう。だがかかる場合の、文学の暗さとは何だろう。——暗い文学をひたすらに嫌悪するひとびとがある。文学の求むべきは明るいもの、肯定的なものであるべきで、その逆であってはならぬとするのである。主として浪漫的傾向による主張であるが、このような主張の一応の正しさを誰が疑い得よう。しかしそれは一応の正しさというに過ぎぬであろう。何故ならそれは人間の一般的心情を述べているだけにとどまるのだから。誰が明るさを欲せぬであろうか。誰が暗さをにくまぬであろうか。明るさを欲し暗さをにくむやみがたい希求の心の故にこそ、文学は暗さをその根底から描き尽し、以て暗さの克服に至らんと願望する。暗さが、人間の現実の生活と心とのなかに全く存在しないならばよい。文学こそそのような状態を熱望するものだ。しかし若し暗さがあるとするなら——人間にとって決してあるべきでないそのような暗さがもしあるとすれば、文学は衷心からこれを憂え、これを除去しようとするものだ。除去せんがためには、暗さのその原の由来をたじろぐことなく根底から探るのでなければならぬ。探究されたところの暗いものと、

その由来とを文学はひとびとの前に示す。かくして文学は、それが文学であることによって実は暗さの克服者となり得るのであり、言うならば文学の存在ということとそれ自体が明るさであり、肯定的なことなのである。従って、現実から目をそらしてひたすらに明るいものを見ようとするのは、現実探究と探究の伴う困難さとからの体裁のいい逃避であると言わねばならぬ。浪漫的な傾向におけるさきの一応の正しさというものは、実は正しさという以外の何かであったのだ。

ところがこのような浪漫的な傾向はこんにち徐々に力を得つつあるように思われる。「美」ということがちかごろしきりに言われるようになったのもこの傾向の一翼をなすにほかならない。「美の探究ということは、今日の一つの流行のように思われる。昨年の秋私は『美の伝統』という一書を刊行したので、自然それに似た書名に注意するのであるが、『美の司祭』『美のかち』『美について』『美の本体』『美の擁護』『茶と美』『美と田園』などと続々目につくのである。『美しき地図』『美しき暦』『美しき心』『美しき首途』『美しき秩序』『美しき行為』などという小説や評論集もあらわれ、映画でも『美の祭典』『美しき犠牲』『美しき争い』など、美の字のついたものが出ている」（昭和十六年十一月末、都新聞）と岡崎義恵が書いているが、ここに挙げられたもののすべてが美の探究をこころざしているのではないこと言うを俟たぬとしても、美の字のついた題名がかくも多くなって来ていることは、まことに「美の探究ということは今日一つの流行」となっている実状を遺憾なく示していると思われる。右の文章の筆者はまた「一体このように『美』が流行するのは、自然主義以来『醜』が横行したのに対する反動ではないかと思われる」とも書く――書くばかりでなく、自身「醜」の横行に対して「美の探究」を対立せしめるのである。だが、「自然主義以来」の「醜」とは何であろう。同じ文章は答える――自然主義は「現実を暴露し、人生の真相は醜であると主張した」そこに「人間は裸になれば同じように醜いものだという信条が樹立された」と。かくて私達は理解する、「醜」と言われるものは自然主義的な現実探究の結果をさすものであることを。もとより自然主義に制限と誤謬とのあることは誰しもが知っている。しかし自然主義が現在の私達にとってかけがえのない遺産の一つであるのは、制限や誤謬はもちつつもなおそれが現実探究のはげしい精神とその探究の実際とであるからで、ここにはまだ学び取られていない多くのものがある。必要なことはその歴史的な制約を克服しつつ現実探究の精神をこんにちに新しく生かすということである。現実の探究と美の探究とは同一のものではないのであって、美の探究などを対立せしむべきではないのである。現実の探究と美の探究とは同一のものではない。現実は美と同一ではないからである。――かくて私達は知る、美の探究という傾向がやはり現実探究からの回避の風潮に立つものであることを。トルストイは、美とは主観的な快

楽に過ぎないことを主張して「我々の仲間、我々の時代の人々が、ただ美に資するところがありさえすれば、即ち人間に満足を与えさえすれば、どんな芸術でも許容する」という大きな間違いについて書いている（『芸術とはどういうものか』）。

私達は、現実における否定さるべきものをその根源まで探って描き尽し以て真にその克服に資する文学にこそ、美を感じる。そして単純に明るさを求めたり美を求めたりすることによってこんにちの時代的現実の探究からそれて行くひとびとこそ、時代とのずれを無意識のうちにみずから大きくしてゆくひとびとの一部をなすのである。時代と個人とのずれは至るところにある。これを克服すべく自身とその周囲に追求を加え、追求に全身を賭すことで文学者は新しい生命を得ることができるであろう。

（一九四二年二月「中央公論」）

荒木寅三郎の頭

河上肇

失意の者が得意の人を悪く言うのは聞いていて快いものではない。私はそのことを心得ぬではないが、以下誌すところは、私の一生の中でただ一度だけ出会ったことのある人間の一つの型についての、忘れがたき思い出話である。

先ず、私の手許にある『日本文化大年表』（今から四年前の昭和十二年に『中央公論』の新年号附録とされたもの）から、話を始めるに必要な事項を、少しばかり書き出して見よう。

大正十三年（一九二四年）

雑誌『マルクス主義』創刊さる、これは後に日本共産党の理論雑誌となれり。（五月）——学生運動の全国組織たる『社会科学連合会』、マルクス百年祭を期し組織さる。（五月）

大正十四年（一九二五年）

福本和夫、雑誌『マルクス主義』に、唯物史観について河上肇を論難する一文を発表、これよりやがて福本イズム、わが国の無産運動を風靡す。（二月）——『学生社会科学連合会』の全国大会、京大に開かる。（七月）

大正十五年（一九二六年）

いわゆる京大事件の検挙始まり、多数の学生収監さる。（一月）

右の年表に『社会科学連合会』としてあるのは、東西両京の帝国大学を始めその他の学校で学生の組織していた社会科学研究会なるものの全国的連合であり、また『京大事

件』としてあるのは、一に学連事件とも称せられ、右の社会科学連合会が強権的弾圧を受けた事件である。それは治安維持法の最初の大規模な適用であったが、被告の大多数を占めて居るものが、京都帝国大学の学生であったため、普通には京大事件と称されたのである。

さて、かくの如く、社会科学連合会の全国大会が、東大でなく京大で開かれ、また学生運動に対する最初の大弾圧が、やはり東大でなく京大を中心として行われたと云うことは、その後間もなく行われた昭和三年一月の総選挙に当り、全国に三十余名の候補者を立てた労働農民党が、（この党は当時日本共産党の指導下にあった。）ただ京都においてのみ轡を並べて二名の当選者を出すことに成功したという事実と共に、当時の京都が如何に欝然として左翼運動の一大中心を成して居たかを物語るものであるが、かかる情勢に対して、当時京大に居た私は、貢献するところが有ったような、また無かったようなものである。

と云うのは、当時優秀な左翼の学生が多勢京都に集まって来たのは、私が京大に在職したためであるが、（そしてそれらの学生こそ、ただに学内においてのみならず、学外に対しても少からぬ影響を及ぼし、おのずから京阪地方における左翼運動の一原動力となって居たのであるが。）しかしそれらの学生に対して、私は、少くとも福本イズム全盛の期間を通じ、思想的には全く無力なものであった。そのことは、先きに掲げた年表の『福本和夫、雑誌マルクス主義に、唯物史観について河上肇を論難する一文を発表、これよりやがて福本イズム、わが国の無産運動を風靡す』という一節が、すでに示唆している所である。

大正の末年に当り、私は二人の新帰朝者によって、次ぎ次ぎに手厳しい攻撃の的とされた。

最初に私を批判の目的物としたのは、私にとって多年の友人であった櫛田民蔵である。大正十三年六月、病を得て和歌山に転地していた私は、その頃『旅ごろもはらいもあえぬ我ながらまた新たなる旅に立つかな』という歌を作っているが、これは私の新著に加えられた櫛田の批判に対する私の発奮を現わしたものである。当時の私は、すでに世間から、マルクス主義の権威の如く称されて居たが、私自身は、櫛田の批判に遇ってから、自分がまだ全くマルクス学の門外に在ることを感じて来た。で、もう五十に近い年輩ではあり、元来健康に恵まれても居ない自分ではあるが、これからもう一度奮発して懸命の努力を続け、何とかしてマルクス学の真の理解に到達したいものだ、と固く決心した。この一首の歌は、そんな気持のもとに、転地先きの旅館でよんだものであるが、そこには明かに私の立ち後れが認められる。

櫛田と私との交渉は深い。それについて書きたいことはいくらもあるが、今は話を急がねばならぬ。

櫛田に続いて現われたのが福本和夫である。彼の論文には、ロシヤ・マルクス主義、レーニン主義の匂いが漂うて

いた。殊に彼は唯物弁証法なる言葉を盛んに振り廻わした。それが、スローガンを並べたような、独断的な、歯切れのよい、彼独特の文体と相俟って、当時すでにロシヤ革命の精神的影響を多分に受けていたインテリゲンツィヤ層、労働者農民層の、宗教的信仰に近い感銘を贏ち得て、忽ち福本イズムの全国的風靡を齎らした。

当時櫛田や福本が此の如く相次いで私を攻撃の主要目標としたのは、大に理由のあることである。

元来私は、如何なる場合にも先駆者としての資格に最も乏しい人間であるので、ロシヤ革命の精神的影響を受けることにおいても、敏感な人々に比ぶれば遥に後れていた。で、当時はすでに、ロシヤ国内で久しく培われて来たマルクス主義――殊にその哲学的基礎――に対する深い理解が、ロシヤ革命の成功によって、漸く世界の注意を惹くに至っていたにも拘らず、私はまだそれに対して全く風馬牛であった。

ところで、唯物弁証法という哲学的基礎を欠いたマルクス主義というものは元来在り得ないのだから、これまで私の書いて来たマルクス主義に関する雑多の論文が、凡そマルクス主義の真の理解にとって甚だ縁遠いものであったことは、言うまでもない。それらは何れもマルクス主義に関する通俗的な、膚浅な解釈を蒔き散らしたものに過ぎず、もしそれに何等かの功績があったとすれば、それは人々の関心をマルクス主義に引き寄せた点だけであり、――私は幸にも大学教授の地位に居たので、そうした影響力は頗る大きかった、――悪く言えば、私はこれまでマルクス主義のため一個のチンドン屋たる役割を演じて居たに過ぎない。しかもそんなものがいつまでも日本読書界で広く持て囃されて居るとすれば、何よりも先ずこの河上肇をやっつけ、その信用をぶちこわし、彼を学界から葬り去ることが、マルクス主義の真の理解にとっての急務とならざるを得ない。櫛田、福本の河上攻撃は、その主観的動機はどうであったであろうとも、客観的にはかかる社会的必要に迫まられて居たのである。

幸にも私は、一旦自分が間違って居たと気付けば、即刻、昨非の自己を葬り去るため、何の執着をも有たぬ人間であった。で私は、当時熱病の如くに学生たちを襲った福本イズムの旋風の渦中に身を置きながら、何とかして自分自らを深めたいと苦心しただけで、左翼の陣営に対し感情的に対立的反動の態度を取るなど云うことは、毛頭もしなかった。しかしそれかと云って、私は無暗に福本イズムに感心することは出来なかった。福本イズムの内容そのものは、その後、夢が醒めると弊履の如く棄てられたように、やはりマルクス主義とは似ても似つかぬものであった。どんなに周囲でワイワイ騒いでも自分が肚の底から納得しなければ追随することの出来ない性質を有っている私は、いくら虚心になって見たところで、若い学生たちに一緒になって斯かる福本イズムを謳歌する訳には行かなかった。自

然、この期間を通じて、私は学生たちの社会科学運動と、思想的にも実践的にも全く無駄なものとして取り残されていた。

当時多くの学生は、福本の論文の要所要所を棒暗記していて、どうかすると研究会などで、それを立て続けに弁じ立てるのであった。これに対して私が何等かの批評を加えても、まるで岩に当てた矢のように撥ね返えされた。

振り返って見ると、随分奇妙な熱病が左翼運動を風靡したものだと、不思議になる。福本イズムに感染したのは、ただに学生ばかりではなかった。大正十五年の末、山形県五色温泉で開かれた日本共産党の組織会議では、高商教授として帰朝したばかりの福本和夫が、迎えられて中央委員の一人となったほどである。

要するに、こんな訳だったから、当時の社会科学研究会に対しては、学問的にも実践的にも私は殆ど没交渉だったのである。当時の思い出は尽きないが、それはまた他の機会に書き誌すであろう。ここではただ以上のことだけを明かにして置けば可い。

さてこうした事情のもとで、大正十五年の一月に京大事件の検挙が始まり、私もその飛沫を受けて家宅捜索を受けたりなどした。私が今話しようと思うのはそれから後のことである。

＊　＊　＊

謂わゆる京大事件が起ってから、大学の当局者は、社会科学研究会なるものを持てあました。それが大正十五年でなく、昭和十五年の出来事であったなら、研究会は一議に及ばず直ちに解散されたであろうが、当時はそうは行かなかった。大学は真理の研究を使命とする最高学府であり、苟くも真理の研究は一切の権力的束縛から解放された自由の精神に立脚して居なければならぬと云う伝統が、——かかる自由は、労働者の階級闘争が威嚇的な形態を取るにつれ、言い換えれば、ブルジョア階級の安全感が脅かさるるにつれ、次第次第に権力的弾圧を蒙ることになるのだが、——当時はまだ震撼されずに維持されて居たので、苟くも研究会と名乗る以上、大学の当局者は之を解散すると云うほどの蛮勇を振い得なかった。しかし、そうかと云って、治安維持法に触れるような多勢の学生を出す社会科学研究会を、ただそのままに放任して置くことも出来なかった。

大学の当局者は処置に困った結果、新たに規定を設け、すべて学生の組織する研究会は一定の指導教授を有たねばならぬことを原則とした。そして社会科学研究会にも、この原則を適用することによって、その存続を許すことに決定した。

さてそうなると、社会科学研究会の指導教授には、私がなるより外はなかった。私以外にそんな面倒な仕事を引受ける教授のあるべき筈もなかった。しかし既に書いて置いたように、私は鼻息の荒い当時の学生たちに対して、思想

上何の権威をも有って居なかった。その上、無条件で指導教授などいう名儀を引受け、今後起るべき事件に対する一切の責任を背負い込むようでは迷惑するだろうから、よく考えてからにしろと云う一友人の忠告もあり、私は直ちに之を承諾することを一応は差控えることにした。

その時のことである。或日私は総長に呼ばれた。当時の総長は荒木寅三郎という医学博士で、今では枢密顧問官の栄職に経上がっている人である。——前置がひどく長くなったけれど、この物語は、私がこの荒木総長に招かれて、彼と総長室で対面した折の、ほんの僅かな時間の、思い出を書くことを、主眼としたものなのである。

私を呼んだ荒木総長は、私に向って、如何なる責任をも負わさぬから、この際ぜひ社会科学研究会の指導教授を引受けてくれと云う話をした後、『どうぞ君、ぜひ引受けて下さい』と云ったかと思うと、椅子を離れて、極めて鄭重なお辞儀をした。痩せて背丈が高く、頭は円くて小さい私とは正反対に、彼はふとって背丈が低く、頭は、滅多に間に合う帽子がないと噂されていたほど、人並はずれて大きく、しかもその巨頭の中央部は一本の毛も残さないほどに禿げ上がり、その跡へ赤味がかった肉の凸凹が露呈されていた。私は彼がその巨頭を殆ど地につかんばかりに下げているのを見た瞬間に、ハッとした。『俗子の俗は骨に到る、一揖已に人を溷す』と云うのは、正にかくの如きお辞儀の仕方を指すのであろう。私は生まれてからまだ一度も、洋服を着た男が西洋間で、こんなに腰を低く折ったのを見たことがなかった。それはたった一瞬間の映像であったに係らず、深く私の頭脳に刻みつけられ、その記憶が十六年後の今日も尚お私を駆って此の思い出を書かしめて居るのである。誰も傍で見ている人はなかったが、私は何だか周囲の壁に対してもで心恥しいほどの卑屈さを感じた。私は嫌な気がしたが、しかし十四五歳も年長の老総長が部下の一教授に対し斯くまでに腰を折られたのは、心中よくよく困って居られるのだろうと思うと急に気の毒になり、もはや何の文句も云わずそのまま問題の指導教授を承諾して引き下がった。その時私は聊か得意であったが、今から考えると、当時荒木は私の後姿に向って長い舌をペロリと出したに相違ない。(後で書くように、この時から二年後、私が荒木から辞職を勧告された際には、私が社会科学研究会の指導教授であると云うことが、その理由の一つとされた。)

それについて更に思い出すことがある。私は嘗て経済学部の独立を無理押しにも急速に実現するため、文部省へ陳情の用件を帯び、荒木総長について上京したことがあるが、列車が間もなく東京駅に着こうとした頃、荒木は急に思い出したように「君、明日文部省へ行ったら、無暗に理屈を言わないことですよ。役人と云うものはね。理屈で負かしたところで、こっちの思う通りに運んでくれるものではないから、何でも頼む頼むと云って、頭を下げなけりゃ

駄目です。』という意味の注意を与えた。今になって考えて見ると、相手の感情を折る前に先ず自分の腰を折ると云うのが荒木の処世術なので、当年の私はつい錯覚を起したが、どんなに腰を折ってその巨頭を地に下げたところで、彼はその実、内心では少しも弱って居るのではないのだ。

研究会の指導教授をどうするかと云う位の些細な問題で、一生のうち忘れることの出来ないほどの卑屈さを部下の私に感ぜしめた彼の平身低頭は、彼がより大きな一身上の利害にぶつかった時、権門に向って更に一層の醜を加うることにより、いつも相手方の甘心を満喫し来ったものに相違ない。かくて彼は一生のうち、世にも稀なるその巨頭を何遍となく地に着けることにより、岡山医学専門学校の病理学教授を振り出しに、七十に垂んとする頃には、遂に枢密顧問官という栄職にまで経登ったのである。枢密顧問官といえば、親任官であり終身官である。今ではもう八十に近い彼も、ここまで漕ぎつけた以上、陛下の御前の外は、もはやそうまであの巨頭を下げなくて済む身分を確保したと云える。考えて見れば、彼も一種の成功者ではある。私のような者が一生敬意を表しないからと云って、それは勿論彼の聊かも痛痒を感じ得るところではない。

昔し彭沢県の令となった陶淵明は、郡から派遣された督郵がやって来た時（支那では郡の方が県より上である。）部下の者から、応に束帯して之に見ゆべしと注意されるや、彼は慨然として、吾豈に五年米のために腰を折り、拳々として郷里の小人に事えんやと云い即日印綬を解いて県を去った、と伝えられて居るが、彼の如き人物は、千載にわたって稀である。しかし荒木寅三郎の如く腰を折るに妙を得た人物も、学者の中では恐らく一代の珍となすに足るであろう。

私が社会科学研究会の指導教授を引受けてから翌々年の三月には、日本共産党の検挙として有名な謂わゆる三・一五事件が起り、相次いで四百五十名の起訴者を出すに至ったが、果してその中には京大社会科学研究会の会員も少からず含まれていた。私自身は固よりこの事件に何等の関係も有って居なかったが、しかしかねてからマルクス学者として世間の物議を招いていた注意人物なので、当然これを機会に、私の進退がその筋で問題とされ、色々の噂が新聞紙にも出るようになった。私は早くも辞職の肚を決め、家人もそのつもりになっていた。こうした時勢にマルクス主義を信奉することを公言して憚らない者が、いつまでも大学教授の地位に止まることが出来ない位のことは、最初から分かり切った事だ。もし聊かでも大学教授の地位に未練を残して居たら、私はもっと早くから然るべき韜晦の術を講じて居たであろう。残された唯一の関心はただ、大学教授らしく其の地位を去ると云うにあった。自分で辞職するか、飽くまで頑張って首を馘られるか、いずれにしても其の筋道を正しくすること、これが私にとっての唯一の問題であった。

ていると、家内が電話で大学から呼び出しがあったと云う。愈々来たかと云って、私は宅を出た。

私は大学構内の自分の研究室で、総長の荒木と経済学部の最古参教授である神戸とに会った。二人とも最初に、今日は友人として面会するのだと云うことを強調した後、（当時経済学部の教授で東大の出身者であるのは、神戸と私と二人だけであり、自然私たちは平生頗る懇意に附き合い、観劇などにもよく夫婦づれで出掛けていた。神戸が友人を名乗ったことには、少しも不思議はなかった。）総長は文部省が私の辞職を望んで居るとて、その理由として、『マルクス主義講座』の広告用の冊子中にある私の短文に不穏当な個所があると云うこと、総選挙の際私が香川県でなした演説に不穏当な個所があったと云うこと、私が指導教授となっている社会科学研究会の会員の中から治安維持法違反の嫌疑者が出たと云うこと、の三個条を挙げた。私は、そんなことは問題にならぬから、そういう理由でなら辞職はしない、と即答した。それから暫く雑談して分かれた。――隣室で耳をそばだてていた一人の助教授が、荒木と神戸が出て行くと、入れ違いに直ぐやって来て、頻りに笑声が聞こえるから、辞職の話などは出なかったのかと思ったと云ったほど、私は平気で応待したのであった。

宅に帰って見ると、法学部の教授である佐々木、末川の二君が来て、応接間で待って居てくれた。どうしたかと訊かれるので、辞職は断ったと云うと、それも可かろうと云いながら、両君の語る所を聞くと、この日午前中、経済学部では教授会を開き、私の辞職を必要とする旨の決議を行ったのであった。法学部でもこの日午前中の講義を休んで引続き教授会を開き、経済学部教授会の議事は刻々に確めて来たが、こうした決議を行ったことは間違ない事実だから、一応そのことを考慮に入れるように、と云うのが、両君の忠告であった。私はその話を聞いて、また即座に辞職の決意をした。経済学部自体がすでにそうした決議を行った以上、大学の自治を主張し来った私としては、その理由の如何を問わず、之に従うべきであると信じたからである。

さてこそ荒木も神戸も、友人として話すと云うことを強調し、教授会の決議などおくびにも出さなかったのは、それだけのことで私が辞表を出せば、教授会の決議も表面へは出ず、誰も責任を負わずに済む、と思ったからなのであった。総ては自己の責任回避が主眼である。頼もしい友人もあったものだ。

すでに辞職の決意をした私は、念のため神戸に電話をかけて、教授会の決議のことを問い合わせて見たが、電話口に立った此の『友人』は、午前中自分もその決議に加わった一人であるにも拘らず、それは学部長に聞いてくれろという以外に口を開かなかった。それで学部長に電話すると、彼は学校にも居らず、私宅にも居らず、行先も分から

ないとのことであった。――およそ今日のことは、私は十年も前から覚悟している。こうした時勢に教授会がどんな決議をしたにしろ、それを怨むような私ではない。私はただ事態を明かにし進退の筋道を正しくしようとして居るだけなのだ。それ位のことは分かって貰えるだろうと思ったが、中々そうでなく、同僚はみな逃げ廻わって、ただ事態を曖昧ならしめることにのみ努力した。（今でも昔ながらの交際を続けている河田教授は、偶然にも不在のため、教授会には欠席していた。）

　で、私は総長室に荒木を訪ね、始めて経済学部教授会の決議を公式に確めると同時に、それならば私は辞表を出すと言明した。そして序に私は、彼に向って、『念のためお尋ねしておきますが、先刻は友人としてのお話だと云うことであったから、私は最後まで総長からは何事も承らない筈になって居ますね』と言うと、彼は大きな頭をポンと掌でたたいて、『アッ、君、あれはみんな総長としての話にして下さい。』とヘヘラ笑いをした。その態度が如何にも図々しかったので、私は怒気の逆上するを覚えたが、荒木は、突き立っている私に向って、『まあ君、ゆっくり話して行きたまえ。』などと云った。それが彼の声を聞いた最後であり、彼の禿頭を見た最後であるが、私は今に至るも尚おその時の憤怒を忘れることが出来ない。もし私が市井の無頼漢であったなら、あの時私は、彼の大きな禿頭に力一杯の鉄拳を喰らわして立ち去ったであろう。

　私は帰宅すると直ぐに辞表を認めた。辞職の理由としては教授会の決議にもとづくことを明かにして置いたが、それまで待って居てくれた佐々木、末川両君の忠告に従い、私は之を謄写版刷りにして出した。多年の慣例を破って決議を議事録に留めることすらしなかった教授会は、私の辞表の文句を改竄せぬとも限らぬという慮があったからである。それほどまでに、大学での同僚と云うものは、最後の段階に至って全く信用の置けぬものに一変して居たのである。『険詐沾沾（テンテン）天に媿じず、交情首（こうべ）を回せば薄きこと煙の如し。』これは陸放翁の詩である。

（一九四六年十月刊「思い出」所収）

III

詩・短歌・俳句

蝶

壺井繁治

あの標本室には
わたしの死骸が並んでいる
たくさんの仲間と共に
ピンで止められて
喪章の如く静かに

それなのに
あの痩せて尖った昆虫学者は
首をひねりひねり
考えこんでいる
ときどきわたしの翅が
微かに動くので
こいつ
まだ死にきれぬのか
太い野郎だ
それとも
風のせいかな

そういって
昆虫学者はぴしゃりと窓を閉めた

ああ、わたしは
最早生きものではございませぬ
単に一羽の標本の蝶にすぎません
それでも
そんなに固く窓を閉められると
息詰まってしまいます
わたしの譫言(うわごと)に驚いて
妻は起き
静かに窓を開け放った

外は
花の咲いたように
明かるい夜だった
あまりの明かるさに
泣けて来た

〔一九四〇年一二月「日本評論」〕

わが額に寄する歌

冬に生き残る一匹の蠅
皺深きわが額にとまりて
歌もうたわず
世界の大きさにくらべ
なんと小さなる生きものぞ
されどなんじの重み
わが額に加わりて
いよいよこころ晴れず
一瞬にして
百千の命ほろぶ戦いなお続く今
湖の如き静けさを求めて
しばし眼をつむらんとするは誰ぞ
わが額には
蜜の甘さなく
わが額の汗
塩となりて固まり行き
わが額より叫び起らんとす

（一九四〇年一〇月二四日作「知性」年月不詳）

黙っていても

黙っていても
考えているのだ
俺が物言わぬからといって
壁とまちがえるな

（一九四二年一二月二六日）

熊

三月なかばだというのに
今朝は珍しい大雪だ
長靴をはいて
雪の中をざくざく歩くと
これはまたわが足音のなんと大きなこと
東京のまん中で熊になった
人間はおらぬか
人間という奴はおらぬか

（一九四六年「若い人」六〜七月合併号）

夢の戦場

岡本潤

君が二つか三つのとき
僕は君を抱いて庭に立っていた
君を抱きながら
僕は遠い空のむこうの夢を追っかけていた
はっとした瞬間
君は僕の腕からすべりおちていた
君ははげしく泣き
僕の夢の世界はたちまち消えてなくなった
君は病気もせずそだち
小学校へかよった
投げっぱなしの僕は
あれから君を抱くこともせず
なにもかも母さんにまかせた
僕は家を外にし
年じゅう夢を追っかけていた
ひとりっこの君は

人形を愛し動物を愛し植物を愛した
新しい人形よりも
手足のもげた哀れなやつを可愛がり
名も知らぬ野の花々に話しかけ
犬でも猫でも鳥でも虫でも
あらゆる野性とすぐ友達になった
迷い犬のチビは君の一ばんの仲よしで
君はチビをつれて学校へゆき
チビを抱いたまんま授業を受けた

君が尋常五年のとき
僕はあることでしばらく警察に留められていた
君は母さんといっしょに
時にはひとりで面会にやってきた
「またきたよ」といって
君がのこのこ部屋へ入ってくると
いかめしいおじさん達も笑った
絵のすきな君は
そこで僕のひげづらや
おじさん達の顔を無遠慮に描き
みんなをどっと笑わせた
おじさんの一人は
その絵を壁にはりつけた
笑わせるだけ笑わせて

「またくるよ」と
君は手を振ってかえっていった

すでに君は女学校へかよい
母さんよりも背が高くなった
学校中での君は茶目っ子だそうだが
どうかすると
おそろしく意地っぱりだ
自分でこうときめたことは
是が非でもせずにはすまぬ
そういう意地っぱりの君を
僕はだまって見ている
三年さき五年さき十年さき
君がどうなるか
僕にはわからん
君は幸福であるか不幸であるか
僕はなんともいえぬ
幸福や不幸は
僕の世界にはいないから

手垢によごれ
目も鼻もくしゃくしゃになった
ぼろ人形を抱いてねむる君の夢
君をおとしてさめた僕の夢
夢と夢との衝撃や
交流や
はげしい
熱い
がむしゃらな
ごうごうと鳴り
そうして静かな
夢の戦場
うずまく砲煙のなかの
ちいさいやさしさ
萎れない花よ

（一九三九年）

夜の機関車

建てこんだ倉庫
鉄塔
シグナル
給水タンク
がらんとした貨物置場
置き忘れられたように動かない
貨物のつらなり
それらがひっそりと鳴りをしずめている

真夜中の構内で
機関車の巨きな図体がひとり
冷く光るレールの上を往ったり戻ったりしている
突如　荒々しく
ぱッぱッと火焔色の煙を噴きあげ
けだものの身もだえでレールを引きずり
やけに汽笛を鳴らしたり
ガターンと貨車に体当りを食わしたり
なかなか腹の虫がおさまらんとみえる

遺作展

生きているあいだ
君は沢山詩を書いた
饒舌の詩人
不作法な詩人
そんな批評もあまんじて受け
その通りだといわんばかり
君はがむしゃらに書きまくった
〈私の楽器は
　古い人達の楽器とは調子が合わない〉
調子が合わないままで
君は死んでいった
機関銃のように詩を書いた君は
ひっそりと絵も書いていた
小熊秀雄遺作洋画展
そこで僕は
僕の知らない君をはじめて見た
佗しい街の片隅や
ちいさいかれんな花々や
旋風のように過ぎた四十年のこころの秘密が
カンバスの上でほのかに息づいていた
──スミレがとても好きでした
君の細君がいった
──あいつもやっぱりそうだったか！
胸がふさがり涙が出た

（一九四一年）

女のすすり泣きの歌

小熊秀雄

日本の最後の女達、
最後の──、
おそらく、すべての最後の女達──、

古い道徳と、古い習慣とに、さようなら
古い夢からは何も引き出されない
新しい愛の敷物の上に
お眠りなさい
新しい夢をみるように――

日本の女よ、
料理の芸術家よ
台所のミケランゼロよ
あなたは今日も
お勝手で玉葱を切って
眼から涙を流したり
生活のことで
愛のことで、子供のことで、
男達のことで、泣いていたり
ほんとうに貴女は忙がしい、
瞳はこんこんと湧く涙の泉
いつ停めるともしれない、すすり泣き、
日本の女の底しれぬ、優しさのために
すべての男は茫然としてしまいます。
夕闇の中でいつまでも
悲しんでいるな、
お化粧と、家庭欄はもう沢山です、
一億打のハンカチを
ぬらすのをおよしなさい、
男にむかって
男の生活を煽り馳り立て
愛情を牽制し、
ただそのことだけで
一日を無駄にすごすことはつまらない、
私はあなたに新しいハンカチを贈りましょう
それで生活の苦しみと
愛の不安と、焦燥と
運命への犠牲とを拭って下さい、
最後の一打のハンカチをもって
最後のすすり泣きを奨めます、
もう新しい時代は
化粧崩れを極度に怖れることが美しくない、
生活のたたかいに加わって下さい、
優しい生活の女拳闘家になって下さい、
そして時には
男の鼻柱へグワンと
喰わしてみるものです

馬の胴体の中で考えていたい

おお、私のふるさとの馬よ

お前の傍のゆりかごの中で
私は言葉を覚えた
すべての村民と同じだけの言葉を
村をでてきて、私は詩人になった
ところで言葉が、たくさん必要となった
人民の言い現わせない
言葉をたくさん、たくさん知って
人民の意志の代弁者たらんとした
のろのろとした戦車のような言葉から
すばらしい稲妻のような言葉まで
言葉の自由は私のものだ
誰の所有でもない
突然大泥棒奴に、
——静かにしろ
声をたてるな——
と私は鼻先に短刀をつきつけられた、
かつてあのように強く語った私が
勇敢と力とを失って
しだいに沈黙勝になろうとしている
私は生れながらの唖でなかったのを
むしろ不幸に思いだした
もう人間の姿も嫌になった
ふるさとの馬よ
お前の胴体の中で
じっと考えこんでいたくなったよ
『自由』というたった二語も
満足にしゃべらして貰えない位なら
凍った夜、
馬よ、お前のように
鼻から白い呼吸を吐きに
わたしは寒い郷里にかえりたくなったよ

窓硝子

夜の寒い部屋の中で火もなく
ただ生きている心をしっかりと
支えている肉体だけが坐っている
硝子窓にじっと呪わしい眼をおしつけて
戸外の暮れも押しせまった街をみている
喧騒もなく景品つきの騒ぎもなく装飾もなく
じりじりと新しい歳にくい入ろうとしている
戦争もまだ止まない
避けがたいものは避けてはならない——と
強い声がラジオで呶鳴っている
やさしい猫が窓際にやってきて
向う側から硝子戸に体をすりよせ
内側の私に媚びたような格好をする

少しも私が嬉しがらないことを知らない
彼女が熱心に笑うそのようにも
尻尾で猫はしきりに硝子を
はたはたといつまでも叩いていたが
急にすべてをさとったように
まだ柔順な皮をするりと脱いで
野獣のような性格をちょっと見せて
閃めくように窓の下に落ちてみえなくなった
光らない昼のネオンを
裏側からみることのできる
ここの裏街の雑ぜんとした私の二階住居
罵しる詩を書く自由を自分のものにしていなければ
私は到底こうしたところに住むに堪え難いだろう
自由はいつの場合もとかく塵芥の中で眼を光らしている
幾人かの不遇なもののために
生と死との間に自由を与えているだろう
私もまたその間をさまようのだ
冷めたい凍った窓硝子に
顔を寄せ十二月の街を見おろす

墓場

大馬鹿者墓場の中に
まよい込む
一つの墓には
イエスの十字架きざまれ
一つの墓は崩れかかっている
もう一つの墓大理石鋭どく磨かれて
大馬鹿者の顔がうつる
そこには影のように
女の顔もうつっている
墓はあるものは欠け、あるものは崩れ
しだいに忘却の土の中に沈んでゆく
新しい墓の前には
しきみの葉を挿し
線香の煙立ちのぼる

大馬鹿者、墓の林の中を女と散歩す、
心はいささかも鬼とはなれず
青春の蕩児のように
新しき運命のために
枯葉を蹴飛ばしながら
手さぐりでゆく盲人の散歩のごとし
一つの墓石をはぎ起せば
そこに幸福に通ずる道もあろう、
ああ、しかし今は
幸福と不幸との境目に立って

静かに時の到るのを待つばかり
雲足は早く
風は冷めたく
墓場に添う石垣の傍で
ルンペン達が焚いてる炭俵の火の
仲間にいれてもらう
手をかざし、焔を靴をもって蹴る
——人生に暖きものは、火か、
恋愛の尽きたるところに墓あり
墓の尽きたるところに火ありか
大馬鹿者墓場を出で、
その感がふかい。

私の楽器の調子は

半生は満足するほど敗けたから
残りの半生を満腹するほど勝ちたい
ふるさとでの少年時代は
一日中、草の葉のゆれるのをみて暮した、
人間はなんにも語ってくれなかった
波が終日私にささやいた
淋しい生活をおくった
私がこんなに多弁な理由がわかるだろう

愛にも飢えていたから
いや愛するという方法を知らなかった
私は復讐戦にはいりたい
敗北者たちの泣きごとは
私の周囲に鳴る鈴のように
快感を覚えても決して苦痛ではない
智識がどんなに私にとってワナであったか
学問がどんなに私の足を挾んで
前に倒したか
私はそれを知っている
私の望んでいたもの——、
それはどんなに無内容にみえても
新しい現実の基礎となるものを求めた
他人が私の詩を無内容だとか、
単純だとかいって批難してきた、
それらの批難者も、詩人も、批評家も
いまは一人も影を見せない、
私の詩は将に詩ではない
殊にあの人達の理解の中での
詩であってはたまらない
私の陽気も、強情も、
私の快活も、多弁も、
もっとも低級な意味で
本質的であれと思うばかりだ、

私は待っている
古い人間ではない
待っているのは新しい人だ
私は確信をもって歌い
生活をつづける
私の詩は新しい人に理解されるだろう。
泣虫共はただ一瞬の流れの上の
木の葉のように過ぎ去るだろう
私の楽器は
古い人達の楽器とは調子が合わない、

夜の小川

ああ、人生の味というものは
なんて舌の上に絶えずたまるものだろう
私は幾度コクリと噉みこんだかもしれない
いくら噉みこんでも
いつもこ奴は舌の上に這いあがってくる、
自分の舌を自分で噛むほどの
愚かしい生活をつづけながら
命のあるかぎり
生きねばならないということは

どういうことだろう
桜草や三色菫はまだ咲かないのか、
冬のさくばくとした土の色からは
春の気配などはお世辞にも感じられない
ただ雲の流れは早く
人の死ぬことが度々あって
私は朝の新聞の黒枠をみると
いつも思わずニヤリと笑う
咆えるより能のない犬が
きょうも空地で咆えている
こ奴がもし咆えるかわりに
火を噴く動物であったら
千匹も飼っておいて
東に向けて放してやるのに
新聞でみるとバクチ打が屋根からとびおりて
腰の骨を折ってつかまった
政変があるとか無いとか
花屋の娘はきまって花のように
首をかしげて店番をしているし
しずかな波の打ちよせるところには
かならず小さな形の揃った
貝殻がうちあげられている
米買いに十軒あるき
炭買いに十軒あるき

よく疲労してよく眠る
靴下は穴があくし
カラーは汚れるし
書籍はろくなものが出版されない
馬は徴発されるし
大学の教師の放逐と
学生のカフェー通い
ああ、うるさきことの数々、
もし日没というものがなかったならば
これらのもの、これらの出来事も
夜の眠りという救いをもって
幾時間かを化石にすることがなかったなら
人生などという脆いものは
一日ぶつかり合うことで
粉微塵に砕けてしまうだろう
救いのない地球の上を
高い悲しげな声で走りまわるものは風だ
泣きはらした眼のような色で月が出て
夜っぴて樹が口笛をふきまくる
これらの自然の奴等だけが
人間のやることを何にもかにも認めやがるのだ、
意地の悪い女が
襦子の襟巻をかけてボンヤリ見ているように
突立っている黒い森、闇の衝立、

砂糖の水のように甘くながれている夜の小川
人間の世界を取り囲んでいる自然の奴等は
滅びることの不安をもたない冷酷さで
ただ沈黙を守っている

馬の糞茸

なつかしい馬の糞茸よ
お前は今頃どうしている
馬の寝息で心をふるわせ
馬小屋の隅で
ふしぎに馬にもふまれず
たっしゃにくらしているか、
春だものみんな心をふるわしているだろう
お前の友だちの土筆はどうした
ひょろひょろした奴であったが
気だては風にも裂けるほどの
優しい奴であったが、
蝶々は相変らず飛んでいるか、
なつかしの馬の糞茸よ
僕は都会にきて
心がなまくらになったよ
靴をみがくことと

ゴォヒイをのむことを覚えたきり
なんの取柄もない人間となった
馬小屋から馬をひきだすとき
奴は強い鼻息を
私の胸にふっかけたものだ
都会では私の、胸のあたりに鼻息を
ふっかけにやってくるものは
悪い女にきまっているよ
こ奴は私の胸にしがみついて
――あんた支那そばをおごって頂戴、だと
卑しい卑しい白粉臭い都会
私は田舎の土の匂いがなつかしい、

Impromptu

中野重治

I

高い書物を買いこんで
おれは又もや気がふさぐ
そうしておれは思い出す
おれの先祖のだれ一人
おれに書物は呉れなんだと
なるほどお経は伝わったが
あれはお経で本じゃない
けれどもおれはやるだろう
おれがじじいになっちまい
息子が　あるいは娘が大きくなった時
「これはとっつぁんが若い時
　こんなわけ合いで手に入れて
胸ときめかせて読んだもの
受けた影響かぞえれば
まずこれこれといったとこ
お前にゃ向かぬか知れないが
　まあ持ってって読んでみな」
息子の拒絶おそれつつ
いささか照れていいながら

更にもおれは慾ばって
その上こんなに考える
おれの息子も孫を生み
そいつが大きくなった時
じじいになった息子めが
ある日孫めをつかまえて
「これはとっつぁんが若い時

じさまがわしをつかまえて
こんな説教鳴らしつつ
このとっつぁんに呉れたもの
そしてやっぱりとっつぁんが
胸ときめかせて読んだもの
受けた影響かぞえれば
まずこれこれといったとこ
お前にゃ向かぬか知れないが
まあ持ってって読んでみな」
孫めの拒絶おそれつつ
いささか照れていいながら
例の本をば出すだろう

して見りゃ本はやすいもの
世間のおやじよおふくろよ
または息子よ娘らよ
高い本なぞつい買って
お前の気分がふさいだら
たとえ子持ちでなくっても
お前をとっつぁん又はかあちゃんに仕立て上げ
息子や娘を配置して
そして気分を直すがいい
それがほんとの本好きの
本を大事にする仕方

してまた子孝行孫孝行
人の人たる気慰め
社会的衛生といったもの
——なんかんとおれが手のなかの
買った本をば眺めつつ
頬っぺたあたりさすり見る

II

そんじょそこらの若い衆が
しゃれたネキタイ咽喉にさげ
鞄に弁当おしこんで
午後の天気を気にしつつ
気をひっ立てて出かけ行く
それをばおれは讃美する
つらい苦しいこの世では
とかく元気がことのもの
元気にさえなることならば
靴もみがけ歯もみがけ
胸のかくしのハンケチも
はなハンケチが別にあれや
青いのなんかもわるなかろ
ばあさまなんぞがごとごとと
いってることはみな違い

そうではないと知っている
詩人のおれが君たちの
月賦の折目の弁護人
どこどこまでも引き受ける

古今的新古的

千早町三十番地

千早町三十番地東荘はどこなりや
落合にもなし
長崎にもなし
千川にもなし
そこでまるまる逆戻りして線路を踏み切りて行く
そは新道路にそえる古くさき旧道路
新道は人まだ通らず
白きプラスターに朝の陽てり
あちこちに莚のきれ敷かれたり
その掘鑿の泥旧道に積まれ
旧道はでこぼこと昇りくだる
そこを昇り来る女あり
どこかの掃除婦ならん
鼻より白き息吐ぎ
袖にて口許かけておおう
そこに畳屋あり
軒に七輪をおき
朝のタドンを起こすところ
青きほのおの揺れるを
犬二匹前肢を伸ばして不思議そうに見いる
そこに屑塚のある畑あり
老婆三人　片手にバケツを提げてそれを漁る
そこにアサリ屋あり
ごま塩のおやじ
濡れた小刀にて一心に剝身をつくる
そこの軒にブリキの手形さがり
この奥東荘と書いて指さす
なるほどそこにあり
崖によせかけ　一つの五味箱の如くかなしく

そこに君は

そこに君は棺のなかに横わる
ローソク燃え
木切れに法名を書いて立ててあり
君の息子制服にて坐り
君の弟も坐る
君の弟は君よりも老けたり

僕は君の細君と話す
君の細君は白ききれいなる歯をせり
煙草をのまぬならん
僕は線香をさし
線香はどれもこれも脆し
僕は君の細君と話し
わが村の死人が棺桶に入れられるを思い出す
わが村の死人は棺桶に入れらる　手足を折りて
君の棺を眺め
僕は死にたる時棺桶に入られたくなり来る

君の死は何なりや
何なりや
まだ朝の道をかえりつつ
君がやはりつぼめたる口して死ねるならんと思う
東荘はきたなく狭し
されど君の死にそいて
君の細君の歯の白くきれいなりしは美し

君は歩いて行くらん

君は歩いて行くらん
おかしなステッキをもって
途中で自動車が追いこすらん

そして美しい老人が会釈すらん
西園寺公望公爵の車なり

君は歩いて行くらん
きょろりきょろりと
そしてやがて三途の川に着くらん
君は渡し銭を出さねばならぬ
君はにやりとして支払うらん
やがて婆ァが着物を脱げという
そこで君が一層にやりとして止せよと言うらん

君は歩いて行くらん
どこまでもどこまでも
そしてとうとう着くらん
大きな門の前に
そこで君は例のステッキをあげ
つぼめた口して開門開門というらん
どうれと中からいうらん
切符があるか
切符はこれだといって
君が片足で立ってくるりと一まわりすらん

そしておいおいと
香川不抱などに逢うらん

ポール・フオールにも逢うらん
今野大力にも逢うらん
今野の中耳炎は直ったか

きかん車

きかん車
きかん車
くろい
強いきかん車

きかん車
きかん車
ひっぱる
押してゆくきかん車

きかん車
きかん車
トンネルへはいる
鉄橋へかかるきかん車
人をはこぶきかん車
荷物をはこぶきかん車

郵便を持ってゆくきかん車
きかん車
きかん車
町と町をつなぐきかん車
町と町　村と村　村と町をつなぐきかん車

きかん車
きかん車
まじめな
カネで出来たきかん車

すすむきかん車
あとしさりするきかん車
気笛をならすきかん車

石炭の蒸気(じょうき)きかん車
電気の電気きかん車
いろいろとあるきかん車
山へのぼるきかん車
山をくだるきかん車
雪ぐにから来たきかん車
あつい国へ行くきかん車

きかん車
きかん車
あおい旗
あかい旗
てんしゃ台
ふみきりのきかん車

きかん車
きかん車
カタン　タン
ま夜なかもはしるきかん車
大せつなきかん車

落下傘

金子光晴

一

落下傘がひらく。
じゅつなげに、

旋花(ひるがお)のように、しおれもつれて。

青天にひとり泛びただよう
なんという この淋しさだ。
雹や
雷の
かたまる雲。
月や虹の映る天体を
ながれるパラソルの
なんというたよりなさだ。

だが、どこへゆくのだ。
どこへゆきつくのだ。

おちこんでゆくこの速さは
なにごとだ。
なんのあやまちだ。

二

この足のしたにあるのはどこだ。
……わたしの祖国!

さいわいなるかな。わたしはあそこで生れた。

戦捷の国。
父祖のむかしから
女たちの貞淑な国。

　もみ殻や、魚の骨。
ひもじいときにも微笑む。
躾
さむいなりふり
有情な風物。

　あそこには、なによりわたしの言葉がすっかり通じ、
かおいろの底の意味までわかりあう、
額の狭い、つきつめた眼光、肩骨のとがった、なつかし
い朋党達がいる。

「もののうの
たのみあるなかの
酒宴かな。」
　洪水のなかの電柱。
草ぶきの廂にも
ゆれる日の丸。

　さくらしぐれ。

石理あたらしい
忠魂碑。
義理人情の並ぶ家庇。
盆栽。
おきものの富士。

三

　ゆらりゆらりとおちてゆきながら
目をつぶり、
双つの足うらをすりあわせて、わたしは祈る。
「神さま。
どうぞ。まちがいなく、ふるさとの楽土につきますよう
に。
風のまにまに、海上にふきながされてゆきませんよう
に。
足のしたが、刹那にかききえる夢であったりしませんよ
うに。
万一、地球の引力にそっぽむかれて、落ちても、落ちて
も、着くところがないような、悲しいことになりませ
んように。」

風　一　景

おとこのこころの淋しいながめよ。
おんなのこころのなおうらぶれた眺望よ。

みるかぎり蕭索として、うす埃をかぶったそのあたり、
弱日さす千本格子、
物干のそとの鰯雲。
貧寒やすきま風。
人情の茶しぶ。
涙でじくじくな眼。

胸にたつ小骾（ぼね）のいたみ、おどおどと心いじけた女たち、
酔狂に女を殴る男たち。
あるいは身や家の外聞を怖れ、
猜疑の目で女を監視するもの。
——右も左も、そんなけしきばかり。

人の愛情は逃げ水のごとく
ゆきくれたかなしい雲、
うるみいろの曇天のしたの
いばらと萩の根にわけ入る。

二

すね毛のない岩壁は訓を垂れる。——「無一物を尊べ。」
榾火でパチパチいいながら天来の声は語る。
——「形骸をゆめゆめ信ずるな。」

月の肪。
うち歎く杪をかすめて、なお
諦観が
もののあわれがさまよう。
蘭や菊のにおう昔がたりを人は、千年くり返す。
この国でもっとも新鮮なものは、武士道である。

掃墨。
苔寂びた庭。
紬織——高節の気風。

秘事秘伝、雲烟のなかの詩人たち。

はら芸をみせる政治家たち。
おもいいれ、七笑い、咳払い、しかめっ顔。
さわり、繊細な小手先のからくり。
おに火のもえる水田と
ネオンサイン。

信淵とルッソオ。

ぜげん。奉公人、乱破(らっぱ)、神憑り。
鴉のように巷にあふれる学生どもは、酒くせと、世わたりをならいおぼえ、
嫁入り前の娘らは、床花を活け、茶の湯の作法に日々をくらし。

鬼

——鬼の養子を肩にのせて蓬萊の島へまいろう
狂言記「鬼の養子」

鬼はどこにもいる。
わきポケットにも
湯のみのなかにも

鬼なぞいないというのは、ただ
みようとしないからだ。

鬼は幻影ではない。象徴でもない。
赤外線レンズの必要もない。
呼べば、おうとこだまし
まさぐれば角にあたる。
ちぢれ毛にさわる。

酒顚童子の末裔なるわが鬼は、
湯あがりのようにてらてらして、
弁慶蟹のように泡をふき
赤裸からかげろうがゆらめく。

はら児がたべたい。
なま血がすすりたい。
鬼はそう言って泣く。
耳底にのこる
松風のように。

鬼はどこにでもいる
電球のふるえる線のなかにも、
めらめらと焰になって
鉄串のしたにもおどっている。

子供のもてあそぶ豆鉄砲で
金平糖のようにあたまじゅう
瘤だらけになった鬼。
鬼よ。
君は、僕のよい話あいてだ。

かくれ笠をとってかくれ簑をぬいで、
まあ、気楽にくつろぎなさい。
桃太郎もいなければ、鍾馗もいない
鬼ころしと名はこわいが、
君の好物の漉酒もある。

人間世界がつまらなくなったか、
君は、かけ碁をうちにもこないね。
そうだよ。いまでは誰一人
君の風流のわかるものはない。

君のいない人生は
嚢のない膾同様だ
平盤なこの地上を君の影が、
千万倍にしてみせていたに。
そもそも人の心は、君が教育したもの。

恋や、野心や、虚栄やで、
いつもぎらぎら脂ぎってる人の心は、
君をそのままのてり返しだ。
忘れっぽい人は、じぶんそっくりな君を、
「鬼ごころ」といってうとんじる。

鬼よ。人間同様な内気者よ。
せなかの破れ笠をおろして
ふせ鉦をそこへおいて、
もっとこっちへにじり寄り給え。
そして、むかし話でもきかせてくれ。
おなじみの百鬼夜行の狂気さわぎを。

だが、鬼はむかし気質の律儀者。
ゆすり場の蝙蝠安のように
膝っ小僧を出してかしこまる。
人前へ出たのが気ぶっせかしだいしだいにあとじさり。

未通女のようにはにかんで
視線をそらせ、ぶつぶつといいだした。
「僕は、その、じつは、僕は、
こわくって、こわくってならないのです。
なにがって、それ、ここにこうしてるのが

全く、気が気ではないんです。」

鬼は、真実、泣きっつら。
右と左をそっとうかがい、
ぞくりと首をちぢめていう。
「人間がおっかないんでさ。
人間が頭で考えだした、
とんでもねえ世のなかがね。

まごまごしてはいられませんや。
頭から火の雨がふってきて、
地獄なんかは甘いもんでさ。
そして、うっかりしていると、
つかまって、兵隊にさせられまさ。

ヒットラアがおっかねえ。
天王様がおっかねえ。
おん、おん、おん、
おん、おん、おん、おん、
ほれ、死霊どもも生きたがって、
死霊の眷族が生かしたがって、
泣いているわ。よんでいるわ。
あれをきいちゃあたまらない。
一刻も、一秒も、
地球なんかに住んでいられませんや。」

しゃぼん玉の唄

1

しゃぼん玉は
どこへいった。

かるがるとはかない
ふれもあえずにこわれる
にぎやかなあの夢は
どこへいった。

甘やかな踊や唄の
つれてゆかれたさきは
どこなのだ。

薔薇色の
しゃぼん玉よ。
ばらの肌のばらの汗よ。
ひらくよりもはやく
別辞をつげて

そらへあがっていったもの。
ときのまの愛着よ。

旅立つ虹よ。

荒廃のまんなかで
人が追う
しゃぼん玉。

大きな玉よ。小さな玉よ。
みんなどこへいった。

僕の心に永遠にのころうとして
亡びていったうつくしさなのか。

玉虫がらすよりも匂やかに
空にうかんだ天女たちよ。

2

支那の古い天子(註一)は馬にのって
崑崙まで追っかけていったという。
あわれ、このしゃぼん玉よ。

かえり来ぬ日々の
かちどきよ。
流行どもの昇天よ。

小さく、小さくあがってゆく
道化一座(パントミス)よ。
女学生たちの合唱歌(コーラス)よ。

とび去った頰の艶。
蒸発した詩よ。

西暦一九四〇年頃から
僕の見失ってしまったそれら。

銃火で四散し
政治から
逃げのびたもの共よ。

おまえたちはいま
どこをとんでいる。

おまえたちは
どこの空を漾う。

しゃぼん玉よ。
しゃぼん玉よ。

忘れっぽい舟乗りどもはおまえたちを
アフリカ沖でみたという。
ほらふきの探検家は、みてきたように
北洋の氷のうえで膃肭獣が
吻から吻へ、おまえたちを受取って
あそんでいたと、真顔でかたる。

註一　周穆王八駿を御して崑崙にあそび西王母に
あう伝説穆天子伝にある。

白い炎

小野十三郎

風は強く
泥濘(どぶ)川に薄氷(はくひょう)浮き
十三年春の天球は　火を噴いて
高い巻雲(シーラス)のへりに光っている。
枯れみだれた葦の穂波
ごうごうと鳴りひびく一眸の原。

セメント
鉄鋼
電気
マグネシュウム
寂寞として地平にいならび
蒼天下
終日人影なし。

住吉川

陽が翳り
風が出てきた。
ものみな黒く隈(くま)どられた早春の地平に
煙が一すじ横になびいている。
しんとして迫る夕暮の気配の中に
ひたひたとゆたかにあげ潮は運河の岸に満ち溢れてい
る。
三角州(デルタ)の葦原にぶちあげられた骸炭の山の上に
汚ない子供たちがちらばっていた。
信じることができないほど永い永い時間を
お互いに一言も口を利かないで。
山の中にまだ火になるやつがある。

十年

友あり。
父祖の業を継ぎて
鑢（やすり）工場を経営す。
軍需に応じて多忙なり。
かつて美わしき詩もつくれり。
いまは書かず。
体軀肥満し
顔貌荒廃す。
昔の面影なし。
街頭に会して手を握れり。

初夏の安治川

骸炭の濃い黄ろい煙が生い茂った雑草の頭を撫でて一すじ低く流れている。
湯でも沸かしているのだろう。
赤ん坊をおんぶしたひっつめ髪の朝鮮の女が共同干場のところにしょぼりしゃがんで物憂そうに棒っ切れか何かで釜の下をかきまぜている。

線路際の煤ぼけた長屋の天井をガタガタ震動させて西成線の気動車（ガソリンカー）が通過する。
襁褓（オシメ）など干しわたした狭い路地と路地との間に空高く距離の均衡をぶっこわすような巨（でか）い六本煙突が聳えている。
息をひそめて大煙突をじっと視ていると
その静けさに圧されるように
夕暮時の生活のさまざまな雑音が耳に入ってくる。
豆腐やの鈴の音、貨物船の汽笛。
何かを罵り喚く女たちの疳高い声。
蠟石のカケラなどをもって路上に嬉戯する餓鬼共のざわめき。叫び。
夕焼けの中に蚊柱がたち
引込線のシグナルにキラリと橙色の灯が入る。
黒いタンクのような油槽貨車が幾輛もつながり
薄暗い構内のどこかでガチャーンとはげしく貨車を連結する音がする。
だがまだ倉庫裏の川沿いの原っぱには鈍い銅色の太陽が照り
ポールを追うユニホームの白いグランド一帯にチラチラしている。
そして時々ワアッと言う歓声が風に乗ってつたわってくる。

大葦原の歌

泥溝は
川にながれ
川は海に入る
葦は穂波をうって
街の周辺に押しよせている。
雨水の浸みこんだ電柱は
乾きもやらず
葦切が啼く広いさびしい道が
地平につづいている

或る日
街の屋根から
小さな細い一本の煙出しが
海の方を見て言った。
きみのところはなんとしずかなんだ。
陽が照っているのに
洗濯物も干さない。
かまわないの？

海の方には
巨大な煙突がななめに重なって
煙を吐いていた。

七月二日

赤木健介

入獄を明日にひかえて
片づけたい仕事は多けれど
朝から夜まで
多くの友よりおくられし
友情にあふれる酒を飲みたり
これでよろし
何もかも片づけすぎては
人生があまりに四角四面となる
どこかにすきのあるのが　美しい余白というものだ
迷惑する人があるかも知れないが
出そうと思って出さなかった手紙があるのも
また面白くはないか
明日からは　厳粛な新生活がはじまる
酒も煙草ものまないストア派である
宿屋では困った身にあまる長衣を着て

修道僧のごとく沈黙することができる
唄をうたえないのはさびしいが
考えることだけは十分にできる
何を考えるか
それはこれからの楽しみであり悦びである
今夜は何も考えないでおこう

幼年

金鐘漢

ひるさがり
とある大門のそこで　ひとりの坊やが
グライダアを飛ばしていた
それが　五月の八日であり
この半島に　徴兵のきまった日であることを
知らないらしかった　ひたすら
エルロンの糸をまいていた

やがて　十ねんが流れるだろう
すると　かれは戦闘機に乗組むにちがいない
空のきざはしを　坊やは
ゆんべの夢のなかで　昇っていった
絵本で見たよりも美しかったので
あんまり高く飛びすぎたので
青空のなかで　お寝小(ねしょ)便した

ひるさがり
とある大門のそとで　ひとりの詩人が
坊やのグライダアを眺めていた
それが　五月の八日であり
この半島に　徴兵のきまった日だったので
かれは笑うことができなかった
グライダアは　かれの眼鏡をあざけって
光にぬれて　青瓦の屋根を越えていった

合唱について

きみは　半島から来たんじゃないですか
どうりで　すこし変った顔をしていると思った
でも　そんな心細い思いをすることはないですよ
ほら　松花江(すんがりい)の上流からも　はろばろ
南京の街はずれからも　来ているではないか
スマトラからも　ボルネオからも　いまには
重慶の防空壕からも　やってくるでしょう

では　みんな並んで下さい　おお
砲口のようだ　整列されている国の横隊
それは　待っている　待ちあぐんでいる
タクトの指す方向へ　未来へ
やがて　声の洪水が発砲されるでしょう
くりひろげられた　煙幕のように
余韻は渦巻いて　渦巻いて流れるでしょう

このステエジの名を　きみは知っている
このステエジの名を　ぼくも知っている

ほら　タクトが上ったではないか　指揮刀のようだ
もはや私にはいうべき言葉がない
ただ　歌うことだけが残されている　声をかぎりに
ただ　歌うことだけが残されている

ひろし・ぬやま
（西沢隆二）

ざれ歌

——ラディオの童謡(わらべうた)をきき怒りて作れる

見てたらいいかも知れねえが
聴いちゃおれねえ童謡
それ眉が寄った、小鼻がはぜた
おでこの八の字、おとがいの青筋
師走の鮭じゃあるめえし
そっぱみそっぱ、
——お美しくていらっしゃいますこと
——おかわゆくおなりですわ
——お髪(ぐし)のお見事な
——お似合いですこと、どちらでお求めになりまして
す、奥様。
——あら、奥さま、ほんのふだんの、あら奥さま、
まことに吉祥天に御迦陵頻迦なり
怒るこの身がいとしゅてならぬ。

反歌

しめてみよ小猫の細首わらべうた

編笠すがた

手錠をかけて、笠をかむって、腰縄つけて、男ケンジがゆらりとあゆむ、後からヒロシも手錠をかけて、笠をかむってぶらりとあるく、あるきゃひと屋もゆらゆら揺れる、春の日ながを、軒じゃ雀が、ひと声、ち、ふた声、ち

おしゃべりな雀に春の木草かな

手錠をかけて、笠をかむって、腰縄つけて、男ケンジがにやりと笑う、後からヒロシも手錠をかけて、笠をかむってにやりと笑う、笑やひと屋もゆらゆら揺れる、春の日ながを、軒じゃ小鳩が、ひと声、ぽ、ふた声、ぽ

ながき日を芝生で鳩の昼寝かな

芋の歌

芋のかけらが二つ三つ多いのを見つけるとたちまち幸せになる
これがめしうどのこころである。貧しきもののこころである。
飢えにちかく生きるもののこころである。
すべてのめしうどに温かな汁を
飢えたるものと、病めるものとに
芋のかけらを二つ三つ多く。

反　歌

めしうどのこころはあわれ二つ三つ芋をくらえばはれやかにして

二つ三つ芋を食いてたちまちにこころ勇めるめしうどあわれ

味　噌

河　上　肇

関常の店臨時配給の
正月の味噌もらいに行きければ
店のかみさん
帳面の名とわが顔とを見くらべて
そばのあるじに何かささやきつ
――奥さんはまだおるすどすかや
お困りどすやろ」
などとお世辞云いながら
あとにつらなる客たちに遠慮してか
まけときやすとも何んとも云わで
ただわれに定量の倍額をくれけり
人並はずれて味噌たしなむわれ
こころ喜び勇みつつ
小桶さげて店を出で
廻り道して花屋に立ち寄り

白菊一本
三十銭というを買い求め
せなをこごめて早走に
曇りがちなる寒空の
吉田大路を刻みつつ
かわたれどきのせまるころ
ひとりいのすみかをさして帰りけり
帰りて見れば机べの
火鉢にかけし里芋の
はや軟かく煮えてあり
ふるさとのわがやのせどの芋ぞとて
送り越したる赤芋の
大きなるがはや煮えてあり
持ち帰りたる白味噌に
僅かばかりの砂糖まぜ
芋にかけて煮て食らう
どろどろにとけし熟き芋
ほかほかと湯気たてて
美味これに加うるなく
うましうましとひとりごち
きょうの夕餉を終えにつつ
この清貧の身を顧みて
わが残生のかくばかり
めぐみ豊けきを喜べり
ひとりみずから喜べり

（一九四四年、元旦作）

泥濘

田辺利宏

寒い泥濘である。
泥濘は果てしない曠野を伸び
丘をのぼり林を抜け
それは俺達の暗愁のように長い。
それは俺達の靴を吸い
蛇のように疲労をからませる。
すべりころび泥まみれになり
汚れた手で鼻汁をすすり乍らも
見よ。兵たちは獣のように
野から丘、丘から丘へつづいている。

黄昏れてゆく初冬の中を
苦悩に充ちた行列が
黙々として前進する。
敵を求めて

未知の地図の上を進んでゆく。
愛と美しいものに見離されて
ただひたすらに地の果てに向い
大行軍は泥濘の中に消える
ながい悪夢のような大行列は
誰からも忘られて夜の中に消えるのだ。

夜の春雷

はげしい夜の春雷である
鉄板を打つ青白い電光の中に
俺がひとり石像のように立っている。

永い戦いを終えて
いま俺達は三月の長江を下っている。
しかし荒寥たる冬の予南平野に
十名にあまる戦友を埋めてしまったのだ。
彼等はみなよく戦い抜き
天皇陛下万歳を叫んで息絶えた。
つめたい黄塵の吹きすさぶ中に
彼等をはこぶ俺達は疲れはてていた。
新しく掘りかえされた土の上に
俺達の捧げる最後の敬礼は悲しかった。

共に氷りついた飯を食い
氷片の流れる川をわたり
吹雪の山脈を越えて頑敵と戦い
今日まで前進しつづけた友を
今敵中の土の中に埋めてしまったのだ。

はげしい夜の春雷である
ごうごうたる雷鳴の中から
今俺等の声を聞いている。

荒天の日々
俺はよくあの掘り返された土のことを考えた。
敵中にのこして来た彼等のことを思い出した。
空間の人の言葉とは思えない。
流血のこもった喘ぐ言葉を
俺はもう幾度きいたことだろう。
悲しい護国の鬼たちよ!
すさまじい夜の春雷の中に
君達はまた銃剣をとり
遠ざかる俺達を呼んでいるのだろうか。
ある者は脳髄を射ち割られ
ある者は胸部を射ち抜かれて
よろめき叫ぶ君達の声は
どろどろと俺の胸を打ち

ぴたぴたと冷たいものを額に通わせる。
黒い夜の貨物船上に
かなしい歴史は空から降る。
明るい三月の曙のまだ来ぬ中に
夜の春雷よ、遠くへかえれ。
友を拉して遠くへかえれ。

面会

浅見有一

面会に来てくれた。今になって逢いたいような。逢い度くないような。
妹に逢ってもらって子供の様になぐさめられる二十五の兵隊。
大学さえ出ているのに、むさぼり食べる時反省もしてみる。

昨夜うす暗い灯の下でゆでた栗の実、祖母の匂いがする
妹よ　母の匂いがする
妹をかえす。妹と三十歩あるく。めずらしいことだ。

ふりかえって、もう一度見たい愛情。だけど帰ってしまった。
月はまだ上らない、星だけの夜は誰か待つ情に似ている。

黒い色

悲哀につつまれた美、黒い色。
自分の位置を忘れる事がある。
「此の時なのだ。此の生活なのだ。」と私は批判する。
混沌とした群集の中にまかれながら。
——しかし、私はもっと考えるべきなのに
ルナールの言葉ではないけれど、ね、グレーテ、そう考えない方が楽しいのじゃあない？

父

今日は故里の氏神のまつり日、父が云って来た、お前の記憶にも遠い昔になったろうと。
涙がわいてくる。

私の少年時代を
殺ばっとした現在の私の生活の中によみがえらせようとして居られる。

私は便所の中でこれを書いている

武井修
（旧姓・花岡）

生への執着は、生への力強き肯定にまで高められませんが、しかもなお肯定はそのまま刑場に通ずる〃今〃の道でありました。
――入営前の覚書より――

×

汽車が通ってゆく。闇のなかにひとつらなりの記憶のような灯をともして。
私の切られた髪が流れてゆくよ。
髪よ、ふるさとよ、異郷の匂いよ――

私は髪が生やしたい。夢にさえも。

×

服も空も真青だ。
いろいろな風が吹き過ぎてゆく
まるで鬼達のような声が。

×

中尾はトーチカの中だ。西田哲学はもう読んで居まい。
そして俺は、俺は口をあけて馬体検査を見ている。
見事な馬脚だ。

馬糧はやりたいが、馬糧をやれば馬が元気になって迷惑する。

赤いひずめで踊る馬よ。
馬に牽かれる人間よ。
ああ　御することさえ出来ぬ。意識の無能と、きらめく本能と。而も事実とは真実のことではない。
価値としての真実は、やはり人間が馬を御するということである。

×

ああ群集よ。喧嘩する樽よ。
樽の中の汚れよ。作られる虚構よ。（作るものは何一つない）
起伏はあるであろう。作られるために。すべて。

×

まだ生きているのだ。
こんなにも馬鹿にされつつ。
馬鹿にする者を軽蔑するさえも、みずからを馬鹿にしつつ。しかし、どのようにして自分たちは馬鹿になったらいいのだろう。馬鹿になることが出来るだろう。
君よ　あのクリミヤの出口に酔いたる脚らとともに、器より落される介殻のような顔をして、それ右だ！　あれ左だ！　唇を噛んで、豹のように。
殺到するんだ！　やっつけるんだ！
牽くよりも牽かれるところに、強いるよりも強いられるところに、見るよりも見られるところに、政治の本質がある。
――これは精神の政治学であると共に、また機構の政治学でもある。決定者は決定者たり得なく、規定は被規定の精神より出発する。

すべてのものはバーバリズムであり、デモクラシーであるが、在り得たものは単なる絶対主義であり、貴族主義であり、絡む機構である。
君主主義のことは言うまい。
この言い得ないもの――政治の神。
――私は便所の中でこれを書いている。

×

ああ、されど吾もまた南の旅を待ちつつあり。貨物船は、丈低く坐してなお頭を打つという。夜灯はなく、暑さのみあるという。われかかる極楽の境にありて全力の詩をかかん。奮う力、刺す釘。それも短かき詩は止めん。長き長き詩を書かん。風なき所に風を呼び、みずから翻る闇の頁に赤き歌書かん。火のくにの歌、大陸の骸、衰え果てたる自然か。ああすべての蛇、すべての蠟、すべての襞、すべての果実も熟れん。

自からの手で建設し、みずからの血で守りみずからの手で破壊する。民族よ。名よ。

馬

大関松三郎

えいっ　こいつ　えいっ　こら
ぴしり　ぴしり
ぴしり　ぴしり
親方は太いつなをふりあげて
いやがる馬の首っ玉をなぐりつける
馬はあごをふりあげ
たてがみを　ばさばさにして
ぐいっぐいっと　首ったまをふりたてている
太い木の根っこのような血のすじがふくれあがっている
そのところを親方は　とびつくようにしてぶんなぐる
ぴしり　ぴしり
ぴしり　ぴしり

炭の俵を　くずれるほどつみあげた荷車をひっぱる馬を
あともどりさせて倉庫へいれようとしているのだ
馬は　あとあしをがんばり
前あしを　けりたてて

いくらたたかれても
いくらどなられても　後もどりはしない
こいつめ　こらあ
ぴしり　ぴしり
ぴしり　ぴしり
空気がさけるような音が
ふりあげた首ねっこから出てくる

どうして後へなんかいくもんか
前なら進んでやる
いくら重い荷物をひいてでも進んでやる
だが　後へなんか
どんなになぐられたって
どんなに叱られたって
一足でもさがるもんか
そうだ　そうだ　さがりはしないぞ
むりじゃないか　むりなことだ

おれは心の中で叫んでいた

ぴしり　ぴしり
馬はたたかれるたびに首をふりあげ
赤い歯ぐきまでむきだしておこっている
きゅっと後あしを土にくったてて

大きな胸の筋肉をこぶこぶさせながら
だまって　だまって　たたかっている

勝て　勝て　馬　馬
おれは心の中で叫んでいた

ぴしり　ぴしり

だが　親方はとうとうまけた
たたくのをやめて前へひっぱった
らくらくと車は進んだ
そうして　ぐるっとまわって倉庫の中へ入っていった
おれは　びっくりした
ばんざいと　さけびたかった
北風がびゅうびゅうと吹いてきて
倉庫の戸にかけられた大根のほし葉を
ふりもぎそうになるほどゆすらかしていった。

道祖神祭

末海宏

ははと着る赤き毛布（ケット）
こんこんと湧けるが如く
ぼんぼりに光れる雪の
目をかすむ花の散れると
ただすがるははのたもとに

道の辺のほこらを祭る
道祖神われは来つるも
米の粉のだんごを焼きて
藁の馬の積める俵に
その旅のつつがなきをと
黒き糧いのりてつめる

この道の来れるところ
遠くして知るすべもなし
この道のゆきゆく所
はるけくもはつる時なし
さはあれど旅を行くなり
はつるなき道にはあれど
ゆくべきは人の旅なり
楽しさも旅にあるべし
汝が旅の楽しかれよと
やさしくもははの語れる

藁の馬抱きて寝つる
いろり辺の温き床
ほのぼのと夢にみつる
馬の背に俵を積みて
とことこと旅ゆく人の
そのさまの楽しげなるを

愛情

稲垣光夫

夕方とうとう私は寂しさに堪えずなつかしい河へ行った。
クローバの花蓆に寝てる子供から花の頸飾りをもらってくる。
水に活けておいて広瀬君にあげようかなどと思う。
帰ってくると
机の上に赤い美しい大きなイチゴが置いてあった。誰れがくれたのかしら。
この美しいイチゴはずい分私を慰めてくれる
私も充分弱い心になっているのだ
なつかしい、愛する人の心に、
私の心もほどけて淋しがる。
私のほしいもの
それは美しい人でもない
ありあまる程の財貨でもない
人に捧げられる健康な体と私の愛情と
そして何時までも　どんな時でも変らない
人の愛情。

さようなら

杉村裕

さようなら　母上、多恵子さようなら
日本海よ　さようなら
あなたの息子、兄、友は　今よろこんで行きまする

国の彌栄いのりつつ
また会う世をば思いつつ
さよなら　さよなら　お元気で
別れ来て
独り窓辺の

汽車の旅
海や林や松の森
月見草咲く丘越えて
ふりむきふりむき進みゆく
かなしかりけり汽車の旅
かなしかりけり独り旅

初雪

樋詰辰夫

はらはらと
ひらひらと
無慈悲の夜を絶間なく乱舞するもの
はろばろ北の国から冬を啄んでは舞い訪れた真白い踊り子たちよ
〈逆巻く怒濤が鮮血に彩られ〉
〈ジャングルに泥まみれの軍隊が飢え且つ病む〉
お前の知らない南の空は血醒い肉の花びらに覆われているのだ。
深夜——

飛び交う電波が一億の耳朶に死への進軍ラッパを吹きならすとき
呼吸(いき)を殺して　お前は
ひたすらに舞い狂うのだった
啞に生れた苦しさを
ただひとりなる悲しさを

そして栄光の朝
踊に疲れてくず折れたお前の骸は
地の果にまで安らけき憩を求め
ジュラルミンの光彩に燦然と輝くのだ

〈冬至りなば春遠からじ〉
無言の骸のお前の表情がこう呟き乍ら

(一九四二、一二月作)

巖

中村喜代司

巖は
屹屹として立っている

そのするどい肩は
去来する雲を裂いて
いささかも鈍りはしない

巌は
峻厳に黙りこくって
その黝々とした肌は
何物の容喙をもゆるさない
しかも　その肌のところどころ
しのびやかに
苔むすみどりは
いかつい巌の
いみじい感情でもあろうか
ある日には雨がきて
その感情をぬらし
ある日には吹雪が襲って
その思想を砕こうとし
ある日は風が
その信念を揺ぶろうと
するであろう

しかし巌はすでに
自らの力を知っている
不動の位置は
それから生じるものなのだ
――巌の動き出すとき
誰がその恐ろしさを予め危惧しただろうか
脚下があまり偸安をむさぼり
周囲が倦怠にみちみちたとき
巌は轟然とくずれ来て
すべてを蹂躙し去るであろう
しかも巌は
いま
その本来のものを内にひそめつつ
屹屹として立っている。

暁の光を待つ

保立靖子

何度　めをこすっても　事実は事実、
あの時　逃げおくれて　ドブの中に
一日　一緒にころがっていた父さんは
とうとう　私の隣りのベッドで
息を引き取った、

電気のつかない
　暗い　細い　ロウソクの火の下で、
あんなにふとって元気な、大きな声で
毎日毎日を送っていた父さんが
ヤケドと疲労で、みるみるやせて、
私の手を握りながら　死んでいった。

ポソポソとそれでいて　何か憤った様な
シンのある声で　死に際に　つぶやいた言葉が　えらく
　はっきりと忘れられない。
「死にたくない、死ぬ訳はない
何の悪い事をしたというのだ」

私達はどんな悪い事をしたというのだ
私達が何でこんな　みじめな闘いを欲したというのだ
五十八年間の父さんの　ささやかながら　平和と自由の
　家庭を破いていった　その生涯のどこに
邪悪な因縁をもっていたといえるのだろう

馬鹿にしている　余りにひどい

私の躰も　ながくはあるまい　父さんと同じ様に昨日か
ら足がむくんで来たんだもの、
何もかも目茶苦茶。
たった一度の　美しかるべき貴重な生涯なのに、虫ケラ
　とは　私達の　今の姿　そのものだ、
何を呪い、うらんでよいのか　はっきりしない、だけれ
ども、やかれ、殺され、逃げまどう　私達多くの大衆
の　何こにも　悪いところはないという事丈は確か
だ。

黄なる土

川崎　誠

私の親愛なる
　中国の小孩子たちよ
私は私の魂の
　そこから
君たちのもつ
　風土に愛情をいだく
戦のさなかに
　嗅いだあの土のかおり

小はるの日溜りに
　君たちと歌った
あの青空
駈けてもかけても
はてしない
　黄なるあのはらっぱ
私は君たちと
　共にくらした思い出を
黄なる土の上に
　偲ぼうとはする

（一九四一、五一、八）

肌近い死

小倉龍男

——お互いに征くにあたり、遺す。
重政順平に——

敵港湾ちかく
海を潜り
肌近く死があった。

そんな日が　幾十日もつづいた。

しかし
それゆえにこそ
たえず美しき思惟のなかにいたかった。

考えれば
それは人間のおそろしい努力と思われる。

しかしそれは誰ももつ
平凡な思想の一面にすぎないのだ。

高井邦夫

上海

闇夜をこがし
炎々と燃えるもの――
上海は死の沈黙の只中にある。

爆破のあと――
支那兵営の石垣に
朝顔の花を珍らしく見る。

銃声――
はたとやんだ静けさに
夜の寒さの身にせまりくる。

夕映えの高原をぬい
長城は、姿をかくす
　遠くの空に。

銃声にはっと我にかえる、
夕暮の望楼に
人のちらつくけはい。

長谷川誠一

砲煙のなかに

砲煙のなかに
銃火のなかに
芽ぐみつつあるもの、
なんだと君はおもう。

プーシキンが
小鳥に与えてやったもの、
そんな小さな贈りものさえ
見うしなわれている。

ふかぶかと見あげろ
あのおおぞら、
戦塵にまみれた
あのおおぞら。

おさない日の僕は
大地のゆりかごに育ち、

いまのよの僕は
遠い平和と理想のるつぼにいる。

冬草

赤木健介

冬草はまだ青々と残っているが
枯れねばならぬ
春来るまでに

冬草の
そのまま春に生きついで
清烈の風に顫えている斜面

陸橋の混凝脚（コンクリきゃく）を匍いめぐる
冬蔦に
日は暖く射す

東京駅
今朝も盲目の兵士いて
スチーム群に背を向けて立つ

幾つかの心が
一人を憎みつつ
机並べて働いている午後

（以上「短歌時代」一九三八年五月号）

新らしき糧

一条徹

鉄滓（のろ）溜めの
隅にも青く伸びている
一むれの草
花つけている。

ひとときを
鉄屑の山に胸張れば
ゆったりと
秋空の涯に海がある。

鉄滓（のろ）溜めに
鳴くこおろぎよ！
耳すませば
汗ばんだシャツつめたく

秋風が吹く。
労働者のあぶら浮いている
風呂に
われも、夜業の疲れ
しばし忘れる。

風呂を出て真裸さらす
夕風は
溶鉄のあおり
吹きあげてゆく。

（「短歌時代」一九三八年十一月号）

青江龍樹

ナチ奉仕の
ナチ芸術の創造だ——
一切批評無用と
ゲッペルス君はいう。

義によってエチオピヤ救え。
ちょっとそんなことも言ってみる。
そのやり口が

笑いたくなる。

あ、足が重い——
晉迅がそう言って死んだ。
胸につかえるような
味気ない憤り。

高橋政治

紙幣刷り、債券を刷り
貧しい友らよ。
薬局のビラ刷る俺は
——胃弱だ。

棒立ちで紙差しつづける
足うらに
ひびきくすぐる
モーターのうなり。

機械の震動に
傾き狂った柱時計を
何度も仰ぎ、いらだつ
終業間ぎわ。

たっぷり十分はおくれて鳴る
ベルを待たず
俺ら、むっつり作業衣を脱ぐ。

窓ひらけば
港の朝空　くっきりと
鶴見川崎軍需工場地帯
　波のかなたに。

煙突、
タンク、
波の上はるか——
　煤煙地帯へ転職して行った
　歳わかい友よ。

いつまでも
ビラ刷り暮す俺なのか。
よい本が刷りたい
立派な仕事がしたい。

（以上一九三九年）

山埜草平

あみがさを
あみだにかぶり、ふてぶてと
顔をさらして廊下を歩む。

軍閥の奴隷とならず
獄にあり
頭をあげて、わが生きており。

窓をとぶ
蜂のかすかな羽音にも
汗にじみでる
まひるの檻房。

やみがたき
こころを吐きし顔ゆえに
獄につながる、
　妻子をおきて。

再び生きて帰る日の

（以上一九四二年）

あるとも思えず、
戦争のさなかを獄に送らる。

雪にうもれ
寒さにまけず育つという、
雪菜のごとく強かれよ
子よ。

このままに
獄にいのちは終るとも
こころの知己は
後の世にまつ？

大きな四角な判を押した紙に
処分取消しと
書きこんである。

大あわてにあわてて
理由も何も書いてない、
やつらのざまが
目に見えるようだ。

（以上一九四五年）

渡辺順三

今年の冬はきびしい

ひょうひょうと
電線にうなる風の音、
身に沁む音だ、
　一人きいている。

がらんとした広い街巾を
冬の風が
吹きぬけてゆく、
砂塵をあげて。

遠い遠い
春を待つ心の切なさだ。
　荒涼とした
　野道の日ぐれ。

（以上一九三七年）

僕は歩いている！

吹きまくる烈風の中を
遮二無二
僕は歩いている。
　何かいらだちながら。

口の中がじゃりじゃりする不快さ——
　砂塵の街を
せかせか歩いて、僕は
どこへゆこうとする。

ポケットの中で
握りしめている手が汗ばんでいる。
烈風をつきぬけ、つきぬけ
僕は歩いている。

凍るような空っ風だ、
烈風だ、
そのなかを
僕は歩いている、
　ただ歩いている。

（以上一九三九年）

鉄窓

青空の僅かに見ゆる窓の戸の
すき間(ま)にこころ
吸わるるごとし。

檻房の外(そと)は明るき陽が照りて
人等あゆめりものを言いつつ。

囚われてこの檻房の高窓に
秋空あおぐ、
雲迅(はや)き夜の。

けだものの檻(おり)にも似たる
　独房に
日も夜も黙(もだ)しわれは坐れり。

くちびるを噛みて
伏しいるわが前を
朝の点検の看守過ぎゆく。

不覚(ふかく)にも涙こぼるる。
点検に
こうべを垂れし畳の上に。

ひとときを

心呆けていくわれが、
手を動かせば手に手錠あり。

編笠に見えぬ顔ながら
たしかなる、歩みは
治維法違反の被告か。

裁判所より帰りて
おそく食う飯の
つめたく堅く歯に沁みるなり。

（以上一九四一―四三年）

戦時下折々の歌

雪晴れて
すがしき朝のいまの間も
戦う人は死にてあるべし。

人と人と
殺戮しあう悲惨さを
ラジオは誇る如く告げおり。

わが心暗くなりゆくばかりなり

日かげの道を
うなだれゆくも。

乱れ降る
雪にまじりて落つる灰、
いずこの街が焼けてあるらん。

空襲の焼跡にたちて
茫然と
空につらなる地の果を見つ。

焼あとの
あらわに遠き街の空、
焦（こ）げて残れる木々あわれなり。

誰にむくる憤りならん
焼あとに
立てば胸内にわきあがりくる。

荒涼と雨にぬれいる
焼あとに
幾人（いくたり）ひとの命絶えにけん。

（以上一九四五年）

むしろの上

小名木綱夫

たましいはあした夕べに長息(なげき)たり獄舎(ひとや)に無辜のおのれを信じ

まずしさにありて詠えるあらぎものこの精根を枉げよというか

来しかたのまずしきすがた歌に詠み牢にも入りぬわれのおろかし

歌よみて牢にも入りぬわが余生あるべくあらばよきうたを詠め

炎天の屋根並つづく屋根瓦ぎらりとひかる囚われの眼に

啄木も石川なれど石川がちがうというスパイの顔を見てやる

知りもせぬ事実を枉げて書けという示唆詐謀の鉤をうちこみ来る

頬骨の尖りけわしく訊問にもやす忿りはその眼にていう

囚われのわれの胸裡にひとすじの明日のひかりを恃みて寝ぬる

（以上一九四二年）

焔中にありて歌える

ひしひしと迫る劫火は面焦す火中にありて妻の名よぶも

かなしきは子を両脇になお背負い火に追われゆくちちははのこえ

追われ来ていまは劫火につつまれぬ死なば諸共と名をよび交す

火のなかにわれの瞼を据えにつつ敵愾のなみこころにわきぬ

たもちえしいのちつきんと焼あとに鍋釜を掘る吐息かな

しく

（以上一九四五年）

調べ

内田穰吉

七人がぐるりと我をとりまきて言えと迫る小さき室に

窓の外は阪急広場窓の内は我をとりまく刑事と我と

四五人のわが若き友の名を示し皆はいえりと烈しくせめぬ

次々とわなを設けて追いゆけり次々とわなは外れてゆきぬ

戦いの今日の日にして我が友ら捕われたるか思えば苦し

夕暮れて電灯暗き調べ室刑事らは物を言わずなりたり

怒りつつ刑事らは皆帰りゆけり明日の調べは烈しくならん

そむける者

あさましく我を裏切りわが友を陥れたりわが友汝（なれ）は

我を売りわが友を売り己のみ助からんとするかそむける汝は

ふし穴の如き眼（まなこ）とみずからを半ばあざけり半ばは怒る

我を売り刑事にシッポ振りていん汝が姿は思うに堪えず

ラジカルによそおいければわが友ら悉く汝を信じたるなり

かえりみて罪はなけれど汝故におとされんとすいきどおろしも

汝が故にあまたの友は捕われき汝が故なるを皆知らざらん

（以上一九四三年）

橋本夢道

妻が買い置くヒマシ油の小さき瓶と夏がくる
薄給のくらしになどでか弱き児を生みし
いくさなお熄まず再び夏が街を蔽う
笑えず、生死のほどよりも戦さ暑き
かぶと虫を手にこの少年の父いくさして還らず
上り框(かまち)を叩き伏せ傲然と貧乏している父
指輪もねじ曲って政府に金(きん)を売る日が来た
われら誓(いまし)められることが多くなってゆく雑草猛ける
たじろぐまいと思えども冬木のとがり
聖碣に伏す遺族三〇春の土上

俳句弾圧事件で検挙投獄さる

九月四日わが裸のうらおもて獄吏のまえ
獄衣、手に脛に短きゆえにあどけなや
泣いても獄房涙を瞶めばつめたきかな
わが膝の手錠両手に喚く秋蟬
獄しずか仁丹の赤き小粒に吹く秋風
面会の妻帰るわたしは網笠をかむる
大戦起るこの日のために獄をたまわる
面会やわが声涸れて妻眼(まな)ざしを美しくす
春雷遠くへ落ち錠をおろされて眠る
春燈くらし獄なりミチオヤム
電報が来ても便りが来ても獄の中

空襲ありその時囚人母を憶うている

足かけ九年宮本顕治はここにいる私の房の前

爪のほかはどこからでも汗が出てくる

編笠をかけて今年も壁の中のこおろぎが鳴く

妻の手紙は悲劇めかずに来てあたたかし

編笠を脱ぐ時にふと幸福に遇うと思う

出　獄

二十四房を出るわが編笠にふり向かず

保釈後判決二年、三年の執行猶余

お濠の水が目に深く目にいっぱいの冬

肩の雪払い合うて空襲解除の吹雪の中

栗林一石路

疎開でおらぬ子の桃の節句に出しておく晴着模様の鶴

鉄骨を下りつけば内閣がつぶれていた

ある労働者の死

もう吸う血がない死顔をはなれてゆく蚊

葬いの家出征の家路地のくらい蝙蝠

はげしい感情を戦争へゆく君に笑っている

汽車にひっぱられてゆく君のわらって歪んだ顔

防空演習

支那大陸もこの月に東京を暗くして住む

気ちがいとなって不作のおのが田を嗤っている

蝗の痩せに不作の秋陽つよすぎる

すべて払れたり水ふかく冬を棲む魚

日参の旗のうすよごれたるをいくさするこの国のこの女

椿咲く島もいくさに送りだす人声か

すでに応召兵として酔い椿も咲いたな

あれも戦争にいきやして顔が笑っている

戦死したかも知れやしね、笑ってたよりもごわしねで

輪送船にて

故国の最後ともなんともただもう暗いタラップを踏む

いまぞタラップを踏む兵の何の風呂敷包ぞ

くらい舷側に声もなき兵が見ればあまた

海は暗い潮の香に兵とおしだまっている

沢庵の二タ切三切くばられて食器に生きの身とおもう

蚤が痒い村長にまた一人召集が来た

煙草も砂糖もない店のガラス壷の埃(ほこり)

かかる世に君たち酔えばののしる性(さが)をすてず

赤い布地見せあうて夜は防空演習がくる女たち

内閣がつぶれそうなままで年が暮れてゆく机

神代藤平

民ぐさのねぎごとは何ぞこの国のいくさ未だ熄まず

泡だつ水尾をひん曲げれば架橋工事の灯もひん曲る

小河内村

土に種蒔きほろびゆく村の人々しずか

木の根に祖の墓を並べとろりと春の陽ざし

やがては負い去る墓のまわり蕗の薹まろき

曇れば地べたも冷えまさり炭俵編みつぐ

医局の菊白し公傷の手は吊らる

菊燦と臨工の妻美事孕めり

自在にとどく炎に麦炊きぐるっと家中の顔がある

炉火明りにめし食うざりりと漬菜の氷れるを噛み

粗朶かかえ来れば粗朶も髪も雪をかむりて母は

無ければ炭も焚かぬまでのどじょうの骨噛む

三浦成一郎

誰に食われるリンゴ箱に釘うち釘うつ生活

屑リンゴ食って育って反逆児と呼ばれて生き

為替も入れて臨時工とは書かない手紙

誰も彼も村の人で集ってきてみんなで万歳という

勝ってきますという顔がみんなをみつめている

己が畑のけさは霜の道を日の丸で送られてゆく

召集令状つかむと誰彼の顔が浮ぶ中の父の顔

軍需景気も冷めたい風で火がない部屋の鼠を叱る

横山林二

蠅へばりつき猛然と雑薬が町にある

秋の夜であり仕事部屋であり天井の襁褓乾く

友あり、聾者となりて還る。ミルトンは彼の「失楽園」を生めども、わが友ひねもす黙せり。

耳底戦車がきしみめりこみつぶれている

日暮の蟬の耳が弾道をきいているような
物価騰貴下のおはち干し夏草の花かよ
豚なく納税督促状朝の畳に在り
海べの枯葉を嚙み嚙み軍馬いなくなる
軍馬くそをのこし日本の枯草みだれ、

すずき・ゆきひと

蚕糞こぼれる帯も解かないで母は寝ている
秋の乾からびた田螺のごとく生き堪えていたか
鶏頭のきつい紅さも出征の家の秋すがれ

百姓渡満

まんしゅうでかねためてゆめのひるねからさめる
海(うみ)わたることのたぬしさを児と食える国のはなし
食える国へゆくに軍刀を買い農馬売りぬ

兵の妻

女手で編まれた藁靴でいくつも乾されてある冬晴
妻の顔も煤けて火箸にぎり夫(つま)を語らず

林冬二

汗だくで積み込む石炭は巨きな米国船の腹
これぱかしの金で故郷へ帰れと怒鳴られている
議会が空騒ぎばかりしている新聞をほうりこんでゆく朝
役人ばかり多い国のちっぽけな田ン圃へ糞ぶちこんでいる
今日も出征の旗が出てゆく村の菜畑
水のない田を置いて戦争へゆく神酒をいただく

あっちに行けこっちに行け慰藉料を探し廻る

雪に埋る小作田のどうしようもなく榾掘る

斎藤　　則

兵隊は戦っているだろうか麦を蒔く

子よ旗をふりもせで戦争へゆく父を見ている

雨の声なきがいせんの故郷の堤の草ぞ

遺骨を先頭にぞろぞろついてゆくこの雨のふりよう

雀鳴けり倉の前年貢米曳いてきてわれ等

令状が来た家の蚕をひきうけている

レールはまっすぐな老いた母を置いていくさに

君は大別山の骨となって雪のふるさとぞ

これが見おさめかも知れない弟へ旗ふる

暮には兵隊となるくもり空の妹と稲積む

山口羊仙

女工のためいきのような蒸気がパイプから吐きだされてくる

向う鉢巻でやけに跳っているようで召集が来ている

出征中に生れた子を負うてリヤカー曳いて行く

東亜の建設といえども妻は台所にいる

人がよればマッチまでなくなった話の木の葉が降る

藤田港（秋泉）

百万両型レジスターの古いやつと夜が更ける

子を寝かせておいてタドン火に背をまるくしている妻

闇に地響さしてゆくトラクターを妻と聴いている

風もなく冷えてあの事件が新聞にはない

清内路二

かりそめの安全地帯のこの椅子であったか
解職の朝の篠懸の落葉に靴のよごれ
こぼれるように水仙が咲いて戦死者の墓
蜜柑黄に潮風に揺れ墓標ただ白し
月乾いて墓標を照すのみ潮騒の外なし

三池桑拓木

議会がまたどうやらして夜業の歯車といる
麦蒔く部落にまた遺骨迎え粛々とゆく
灼熱の鉄をぶったたきぶったたく顔が少年工
痩せて笑って貧農の子達大根かじる歯が寒い

市木千尋

戦地からの便りが神棚に供えられてあるのだ
炉の火めろめろと冬がくる兵の家族たち
骨で戻ったあるじいつも炉のあそこにいたが
兵の妻で父で雪の日の無言の凱旋

嶺達二

こんなよい秋日和の月給延期と書いてある黒板
炭坑(やま)の馬も徴(と)られた話のふるさとへもどっている
稲もなにもど腐る雨のきょうもすべなき

井形春一

子供たち屑鉄拾ってくるいくさする国の子供たち

麦を腐らす雨ふりつづく日の炉ばたによる
大根漬がりがり音さして学校も雨の貧農の子だ

多胡比左志

出船の人ごみにもまれ年寄よ倒れじと兵の母よ
夏暁の宮居ほの幽(くら)きにおろがむは母なり

住吉珍什郎

満州にゆくという親に子に雪が降りまつわる
なんだか世の中が腑におちない月がかくれたり出たり

北原良子

煤煙空にからませて暮れて君が生きている街
死ぬ前の一家のこんな笑顔が活字と組まれている

柳京次

不漁つづきの海が飢餓線となって傾く煙突
網棚のちっぽけな行李が働きに出る少年と暮れている

斎藤継子

このやぶれ窓から日の丸の旗たててしずかに飢えている村

奥田平

百姓昂然と友邦を罵倒す火が燃えれば

石橋辰之助

鉄工と十月の風胸にうたせ
鉄工と踏む地の秋日地の汚物

冬ひそと家庭工場に子が生る
招魂祭市民かなしく飽食せり
戦争の大地ただただ掘られし
墓標立ち戦場つかのまに移る
職工の寝るほかなき顔が帰る
英霊を雪山(ゆき)ふかく秘めし家
英霊の母がきざめる菜の凍れる
雪山に還り英霊しずかなるや
ことごとく冬日に顔をつきだし征(ゆ)く

東京三
(秋元不死男)

寒や母地のアセチレン風に欷(な)き
夜店寒く艀の時計河に鳴(な)る

乳棄つる母に寒夜の河黝く

近史六歳となる

戦争にゆくかも知れぬ落葉焚く
少年工学帽かむりクリスマス
クリスマス徒弟を求むラジオ鳴り
戦死者の子と街にあり軍歌湧く
戦死者の子と見るシネマ人斬らる
おさな子の教師英霊となり還る

藤田初己

戦利品展覧会へ町枯れたり
河くろし今日メーデーを忘れいたり
三等待合室鋭き眼きらりと覗き去る

十四時労働の友が手の酒盃
旋盤のめぐる辺に生れ、征き、死ぬる
夜務より鉄工のわらいわが肩に
八階の富士真向に武器商人
退職の冬帽とわかれてよりの駄（むだ）
人の背に風邪の眼つむりつつ出勤
汗の校正ああ国民総動員法長し

磯部幹（もと）介（すけ）

赤んぼが泣きだす農夫惨と酔う
野天にて乳房に黄いろなるあかんぼ
鉄をおろしおもしといえりわがまぢかに
この息づく汗馬の腹を誰か見る

少年も農民のおもざしなせるあわれ
麦を刈る月夜の汗は手でぬぐう
鉄でよごれた顔を赤んぼにさわらせる
火夫がのむ深夜の水は床にこぼれ

加藤楸邨

知友戦死

軍用車雷青き野に見たり忘れず
兵の顔あわれ稚し汗拭くなど
鰯雲人に告ぐべきことならず
ついに戦死一匹の蟻ゆけどゆけど
兜虫（かぶと）視野を横ぎる戦死報
軍隊のみな踏み過ぐる寒夜の鋲

幾人をこの火鉢より送りけん
生きてあれ冬の北斗の柄の下に
雪の木に身をすりつけて軍馬あり

沢木欣一応召

鰯雲流るるよりも静かにゆく

女子勤労動員中の長女道子、深夜に至り帰る

帰り来し吾子に灯を向け時雨れおり

女子勤労隊員と工場にあり

顔いたきまで忰(かじか)みつ鉄を打つ

一月十二日、空襲下、ルソン島上陸をきく

子へ遺す一寒生の霜の文字

買い溜めて信濃の子等へ胼薬
かぞえゆくひとの生死や春の雷

五月二十三日深夜、大編隊空襲、臥中の弟を負い、妻と共に一夜道子と明雄を求めて彷徨

火の奥に牡丹崩るるさまを見つ

五月二十四日、わが家も焼失す

明け易き欅(けやき)にしるす生死かな

中村草田男

軍国の冬狂院は唄に満つ
世界病むを語りつ林檎裸になる
壮行や深雪に犬のみ腰おとし
横顔を炬燵にのせて日本の母

汝等老いたり虹に頭上げぬ山羊なるか

勇気こそ地の塩なれや梅真白

教え子はだが黄色人種の黄を現前

家族を疎開せしめて約半歳、空襲下の京都に
自炊生活を送れり

黴(かび)を拭き日に当て一と日一と日くらす

勤労地にて

螢火や白き夜道も行路難

古家榧(かや)夫

解版女工(二句)

鉛の香むしばむ肺に青かりき

からからと活字の音が胎児(こ)にひびく

煙草のすくらし苦しきことを云い

製鉄所(三句)

人の群地に這い重工業咆哮す

鎔(ゆ)鉄たぎり人蒼白の面をつらね

おことさびし鉄のにおいに沁みて生く

道を拓く者

海霧(がす)蒼し囚徒開鑿の唄ものうく

警視庁見学(三句)

参考室左翼の書淫書と隣せる

扉(と)黙し大内兵衛あるところ

新撰組武装待機して意気軒昂

農村

汽車が投ぐパン屑に群れ童児(わらし)走す

都会

あぶれ帰る父よ朝より疲れたり

漁村

漁場を売りそくばくの金にばくち打つ

鉱山

父と兄を奪いし坑(しき)に今朝も入る

校正に朝が来夜が来朝が来る

露の木靴兄検挙(あげ)られて月を経ぬ

玩具を立売する少女

棒になる脚を脳天に感じている

陽あたりの渦の中真実はつねに暗い

働くほかなし世をうべなわれ働く外なし

中台春嶺

射手の眼につきてはなれぬ黄なる蝶

梅雨を来て朝から太い鉄を切る

打てといい真赤な鉄を徒弟に据える

風暑し憤ることありて鉄を打つ

鉄飢饉痩せて真紅な炉を開く

鉄饉飢工区に黒く河干たり

重しと思う鉄を老工にかつがせる

機械は鉄すべて徹夜の眼には目脂

工場弁眼玉貫かれし魚なり食う

泣きたくて出征列車送らざりき

戦死をきく辻を越え辻を越えゆくに
輸送貨車とどろき職工等食堂に
銃後の街に海あり寒き手を見つむ
脚寒く立ち拾銭のニュース観る

石田波郷

汗しつつ大いに笑い汗たれたり
はたと寒く傷兵を見し行人裡
河豚似るやひとり呟く愛憎言
ストーブに睡し傷兵は眠りたり
ぼうぼうと梅雨ふかむ夜の機銃音

米食時間制限さる

汗しつつひたすら待てり十一時

帰還兵列の短さよ百日紅
英霊車去りたる町に懐手

江原恒雄

兵送り炭火乏しき家に戻る
小吏なれば今宵まずしき飯を食う
かの兵の妻微笑まずと妻に言う

小柳昌

菜ッ葉服着るべく試験パスしたり
兵器殖ゆ轟音耳朶は打ち挫がれ

杉村聖林子

作業衣につつまれた首以下動き

作業衣の五百人の中に父となり

岩崎健二郎

少年工にまじり火を焚き始業待つ

戸田茂

わが生きて物資乏しき冬きたる

解説

竹内好

一

一九三七年七月から一九四五年八月まで、この期間は全面戦争の期間であって、ファシズムの猛威が頂点に達し、それにともなって次第に内部崩壊があからさまにされてくる時期である。前には一九三一年の満州事変から一九三六年の二・二六事件にかけての、ファシズム体制の完成の過程につながり、後には解放と占領の二重性をもった戦後の時期に直接につながっている。いわゆる「暗い谷間」の時期である。

この時期の文学の特徴を一口にいうと、強権による自由の精神の完全な抹消、およびそれと表裏の関係にある時局便乗型のエセ文学の横行、ということになる。一歩一歩の後退が全面退却になり、ついにまったく息の根をとめられるところまで行きついた。人間の生存のためのことごとくの条件が奪い去られ、そのために、文学は創造のエネルギーを失ってしまった。砂漠のような荒廃が、残されることになった。見かけは文運隆盛に似た現象をつづけていたけれども、その実体は砂漠であった。今日からこの時期をふりかえって眺めると、そのことがよくわかる。わずかに砂漠の中に、涸れ残っている少数の泉を発見することで、辛くも人間の不滅をあかすに過ぎない。

人民的、革命的文学の中心勢力であったプロレタリア文学も、当然、この激動を免れることはできなかった。プロレタリア文学は、すでにこの時期より前に、一切の組織的活動を中止させられ、運動としては解体していた。その解体の中から、もう一度スフィンクスのように立ち上ることが望まれたけれども実際には立ち上れなかった。これは事実問題としてそう考えていいと私は思う。そしてそれがなぜだかということは今日の問題として考えるに価することである。

この問題に立ち入ることはしばらくおく。ここでは、プロレタリア文学の流れを継承した文学が、戦争の全期間を通じて、どのように歴史に働きかけ、また働きかけられたかということを、外側からと、内側からと眺めることにする。戦争は八年にわたる。この期間を一括することは容易でなく、私の能力にあまる大事業だが、さし当ってひと通りの見取り図だけでも書けたらと思う。読者の参考になれば幸である。

二

一九三七年七月七日に蘆溝橋事件がおこり、これが全面戦争の発端になった。これより前、一九三一年の満州事変から引きつづいて、日本帝国主義の大陸侵略は、熱河、内蒙、華北へと、次第に南へ向って拡大する趨勢にあり、それに伴って中国の民族主義との衝突の度合いを強めていった。このまま進めば、いつか破局がくるにちがいないという不安の気持ちは、多くの日本人の胸にわだかまっていた。この破局をふせぐために、軍部の野心をおさえうる唯一の実力者という伝説的ふれこみで、近衛文麿の登場（三六年）が期待されたが、その近衛（第一次）内閣の手で戦争に火がつけられたのである。

政府はしばしば、局地解決の方針について声明したが、戦局はこの声明とまったく逆に進行した。華

北から華中へ、さらに華南へ、中国の主要交通路にそってはてしなくひろがっていった。北では張鼓峰事件（三八年）ノモンハン事件（三九年）などでソヴェトとの衝突をおこした。

国際的には、日独伊防共協定（三七年）以後、日本はファシズム国家群の一員となった。第二次世界大戦の開幕は時期の問題とされた。ついに三九年に英仏がドイツに宣戦し、四〇年にはイタリヤが参戦し、四一年には独ソが開戦した。そして四一年十二月八日、東条内閣の手で太平洋戦争に火がつけられた。

戦線がひろがるにつれて、動員下令ははげしくなった。日の丸の旗をタスキにした青年たちが、小学生の「愛国行進曲」のブラスバンドに送られて、軍用列車につめこまれた。その出征兵士たちは、駅々で、白タスキの国防婦人会から湯茶の接待をうけて「勝ってくるぞ」を合唱した。（この牧歌的風景は後になると、防諜という理由で禁止されたが、さらに後になると、士気にさしさわるという理由でまた一部解除されたりした。）

「銃後の守り」という言葉が使われ、慰問文、慰問袋がはやった。新聞は戦争記事でうまった。戦争は次第に日常化し、国民生活を外からも内からも変えていった。宮城や明治神宮の前では、電車の中にいる乗客が脱帽を強制と感じる社会的圧迫がおこるようになった。ハデな服装をしていると、非国民といって非難された。それればかりでなく実際に、袖を短くつめることからはじめて、後になると国民服やモンペの強制にまで及んだ。

このような風俗は、些細なことのようであるが、私は国民生活の移りゆきのシンボルとして述べたのであって、この些細なことが実感としてわかっていないと、戦争中の文学は理解しにくいのである。たとえば、市民的自由は幻想だとする小林秀雄の主張や、天皇に一切をささげるのが自由だとする保田与

重郎の言説などは、市民的自由が日ごとに奪われていく環境に身をおいてみないと、当時それらが一種の救いとして読者に対してもっていた重みの何分の一もわからないだろうし、まして、それらの言説のマヤカシ性を鋭くついた少数の抵抗派の、自由の意味を追求し通すことにおける堪えられぬほどの困難さを、表現のまわりくどさをかき分けて身近かに感じとることが、いっそうむつかしいからである。

じつは、以上に述べたような風俗の移りゆきは、まだまだ序の口である。戦局が進むにつれて、国民生活の劃一化、非人間化は、内臓を泥足でかき廻すほどの狂暴なものになっていったのである。そして文学は、人間に対する信頼が失われる度合いに応じて、やはり全体としては衰微していった。

このことは、権力が、法律や制度や宣伝を通して、国民生活に干渉し、戦争遂行のためにあの手この手と着々布陣していった事実と対応している。戦争開始と同時に、国民精神総動員運動がはじまっている。最初は啓蒙、宣伝活動に止っていたが、後に国家総動員法に法制化（三八年）された。国民は生命財産をあげて権力者の意のままにされることになった。赤紙がくれば戦場へやらされるし、白紙がくれば工場へやらされる。軍事上の必要があれば通達一本で家をこわされ、財産を奪われる。勤労奉仕や神社参拝の強制、防空演習の強制、隣組常会への出席強制、公債割当ての強制、そしてさらに食糧はじめ必需物資の統制に及んで、これは戦後になっても残っていた。

この戦争の全期間を通じて、権力者は国民組織に着目し、国民活動の一切を戦争遂行の目標へ向ってすくい上げようと意図した。戦争前までは放任していた多くの部分を、網の目からのがすまいとした。このために二つの手段をとった。一つは、人民の自主的な活動をたたきつぶすこと、一つは、上からの組織を与えることである。

共産党は早くに非合法化されていたが、この時期には社会民主主義の政党も禁止された。そして政党

の代りに大政翼賛会という上意下達機関が作られた。労働組合は禁止され、その代りに大日本産業報国会という一元化した御用組合が上から与えられた。（ともに四〇年）「新体制」とか「国防国家」とかいう言葉がこのころはやった。国会（帝国議会）は翼賛選挙によって翼賛議員をえらび、東条首相兼参謀総長の演説に拍手をおくるだけの機関になった。この末端の下部組織が隣組や部落常会で、そこには全国民がもれなく登録されていた。

政治統制とならんで、言論統制が進行した。戦争開始と同時にできた内閣情報部（のちに情報局に発展）がこの役目をになっていた。情報局は、特高警察や憲兵と表裏一体となって、一方では露骨な弾圧を、一方では金や力で懐柔と有形無形の圧迫を行った。

この期の特徴として、圧迫のやり方が陰性になったことがあげられる。プロレタリア文学系統の最後の雑誌である「人民文庫」（武田麟太郎が主宰、一九三六年三月創刊）は、相継ぐ発売禁止の行政処分にあって、三八年一月号かぎりで停刊したが、この種の野蛮な方式は、それ以後は見られなくなった。好ましくない作家や評論家のリストを各雑誌社に通告することによって、事前に言論統制を行うことができたからである。たとえば宮本百合子は、三八年一月から三九年五月までと、四一年一月から四五年八月までは、この方式によって事実上執筆を禁止されていた。山本有三の「新篇路傍の石」は四〇年、徳田秋声の「縮図」は四一年、谷崎潤一郎の「細雪」は四三年、いずれも新聞や雑誌に連載の途中で、時局にふさわしくないという理由から事実上の発表禁止にあったものである。

この期に公表された文章は、前の時期と異って伏字が少くなっている。伏字が禁止されたからである。いきおい、まわりくどい真意をつかみにくい、表現が多くなっている。後になると、事前検閲さえ行われるようになった。そして一方では、軍なり情報局なりから、掲載をすすめる天降り原稿が各雑誌社に押しつけられた。圧迫の結果が表面に出てこない形で実質的統制が行われたのである。これらの事情は、

戦後の占領時代とまったくよく似ている。

しかし、露骨な暴力による言論弾圧がなくなったわけではない。かつての美濃部達吉の天皇機関説事件に似たものは、この期間にもしばしばおこっている。その主なものは人民戦線事件（三七年十二月と三八年二月）矢内原忠雄事件（三七年十二月）河合栄次郎事件（三八年十月）津田左右吉事件（四〇年三月）などである。時局便乗でないものは、自由主義者までがヤリ玉にあげられた。そしてこれには当時、マッカーシーのような人間が日本にもいたわけである。

弾圧は学界ばかりでなく、教育界、言論界、文学界にも行われた。最後はファシスト同士の間で、血で血を洗う争いにまでなった。四〇年から四一年にかけて、俳壇におこった一斉検挙について、栗林農夫は回想している。

「この俳句作家協会ができて僅か二ヵ月後、昭和十六年二月のはじめに、全国一斉に俳句弾圧があって、われわれは検挙されたわけです。つまりそういう俳句団体の統制をやるときに、一方ではわれわれの検挙の用意がちゃんとできていたわけです。」

「弾圧のかげには俳壇の中にスパイがいたということなんです。これが重要なことだと思うんですよ。俳壇には結社がいろいろあって、その対立から排他的感情が強い。そこへもってきて古い伝統俳句に対する批判的な反逆者があらわれてそれが大きな脅威になってきたということから、こいつをおしつぶし、あわよくば、自分が俳壇の勢力をにぎろうという権力慾もあって、ファッショ的な当局と結んで一と仕事しようというのが出て来たんですね。」

「草田男氏の場合は小野蕪子（賢一郎）がまるで自分が特高警察のようにふるまって脅迫してその作家活動に圧迫を加えているのですね。……いまのような俳句を作っているとお前も検挙される。もう逮捕状が発動されておれが預っていると蕪子におどかされるんですが、小野蕪子を通じて逮捕状が

発動されるというのはおかしい。どういうわけだというと、（笑）『僕のところへしょっちゅう特高の連中も来るし、重要な人が御苦労だけれども頼むといってきている』というわけで……」

「詩人がほんとうにじぶんのうたいたいことをそのままうたえないということは、非常な苦痛ですね。しかもその同じ俳句を作る人間同士の中に、相手を傷つけるスパイがいるということは、なんともいえない陰惨なことですね。」（『近代文学』五四年八月号の座談会）

こういう事情は、俳壇ばかりでなく、ほぼ全体を通じてあった。中島健蔵の「ホワイト・リスト論*」はこの種の権力へ仲間を売る腹黒い人間への抗議であって、当時としてはかなり思い切った、発言であった。

註　この稿を書いたあとで中島健蔵氏から次のような証言を得たので加えておく。

「〈ホワイト・リスト論〉は確か雑誌『改造』の時局版にのせたものと記憶するが、当時は左翼作家に対する執筆禁止の動きが、法律ではなしに、アイマイなかたちで、情報局の手などによって編集者を圧迫することによって進みつつあった。

それから後は、事実上宮本百合子、中野重治等は執筆禁止を受けた。

そのような時、情報局に対して作家のブラック・リストをつくって提出した者があるということが伝えられ、私もその写しをひそかに見ることが出来た。それは全く無茶苦茶なもので、それによればずらりと並んだ文化人の名の上には黒丸、半黒丸、白丸がつけられていた。

この『ブラック・リスト』の提出者は真偽のほどはわからぬが中河与一であると伝えられた。当時情報局にいた平野謙君に昨日会ってそのことについて話したが、平野君もそのように記憶するということであった。

かかる気運のなかで、これではどうにもならぬと悩んでいた編集者とも話しあって『よし、それ

じゃ書こう』といって即座に書いたのが〈ホワイト・リスト論〉である。

国策便乗型の文学団体は、戦争開始後、数多く作られた。農民文学懇話会、大陸開拓文芸懇話会、経国文芸の会、国防文芸連盟、文芸興亜会などである。これらはみな天降りか自主性をよそおう事実上の天降りの組織であった。自由な結社が禁止同様なので、文学者は保身のためにもこれらの結社に身売りを余儀なくされるものが多かった。たとえば、三八年十一月に時の農林大臣有馬頼寧のキモ入りで発足した農民文学懇話会には、和田伝、島木健作、伊藤永之介、橋本英吉、葉山嘉樹、徳永直、間宮茂輔、本庄陸男、森山啓ら多数のプロレタリア文学系統の作家が参加している。拓務省のキモ入りで三九年一月発足した大陸開拓文芸懇話会にも、「大陸開拓に関心を有する文学者が会合して関係当局と緊密なる連絡提携の下に、国家的事業達成の一切に参与し、文章報国の実を挙げる」趣旨で、岸田国士、丹羽文雄らとならんで湯浅克衛、島木健作、高見順、山田清三郎、大江賢次らが参加している。今日から見れば異様だが、当時としてはこれが実情であった。たとい主観的には善意からの参加であろうとも、その前のめりの姿勢には争えないものがある。プロレタリア文学は、少数の例外を除いて、全体としては転向というより屈伏の状態にあったことを、この時期の文学を考える場合に銘記しておく必要がある。

こうしたわけだから、日本文学者会、日本俳句作家協会、大日本詩人協会、日本小国民文化協会など一九四〇年前後に相ついで結成されたジャンル別の単一組織が発展解消して、四二年に日本文学報国会ができるのはちっとも無理のないことだった。この会は徳富蘇峰を会長とし、会員二千余、ほとんど全体の文学者を網羅していた。この会に加わることをいさぎよしとしなかった文学者はごく少数である。中野重治でさえも、みずから参加を志願した。その発会式では、首相東条、情報局総裁谷らが祝辞をのべ、菊池寛（小説部会）茅野蕭々（外国文学部会）太田水穂（短歌部会）深川正一郎（俳句部会）武者小路実篤（劇文学部会）尾崎喜八（詩部会）河上徹太郎（評論随筆部会）橋本進吉（国文学部会）が宣

た。

誓を行った。これが文学の国家統制の仕上りである。大東亜文学者大会という茶番劇はこの会が主催した。

国家統制は出版部門にも及んで、これは日本出版文化協会の結成となり、出版は事実上の許可制となった。紙が不足してくるにつれて統制力は強化され、新聞、雑誌の統合も、内容への干渉も思うままとなった。最後には「中央公論」や「改造」のような由緒ある雑誌が廃刊を命ぜられた。

こうして文学の砂漠化は進んでいった。そして文学ばかりでなく、国土そのものが廃墟になったときに敗戦となった。

三

このような一般状況と、外から加わる圧力の中で、日本文学はどう変質していったか、文学者はどう生きたか、何がほろんで何が残ったかを、おもに人民的、革命的文学の流れに即して概観することにする。

戦争中の文学が、全体としては一路、衰弱に向っていたことは前に述べた。しかしその中にも、こまかく見れば、時間的な起伏消長もあり、作家の個性に応じた伸びちぢみもあった。この時期はすでに転向を経過していて、転向しないコミュニスト作家（それは実際上は、獄中にいるものを除いていなかった）は活動を許されなくなっていたが、その転向ぶりもまた雑多であった。たとえば、林房雄はまっ先に百八十度転向した作家だが、この時期には大ぴらにファシズムを謳歌した。転向と非転向の限界状況の心理追及から文学的に出発した島木健作は、この時期に転向小説の代表作「生活の探求」を書き、北満の開拓地に遊んで「或る作家の手記」を書き、最後に「赤蛙」の諦念へ行きついた。みずからの「太陽のない町」に絶版声明を出して転向を誓った徳永直は、もってうまれた庶民性をどうしようもなく、

この時期に「八年制」「はたらく一家」など、むしろ転向前よりもすぐれた作品を書いた。そして戦争の最後には「日本の活字」をはじめ「光をかかぐる人々」*の連作によって、唯一の光彩をはなつ作家になった。この事情は、葉山嘉樹、平林たい子ら旧「文戦」系の作家にも似たところがあって、生活的な強さが彼らの文学を、かなり後まで時局から守った。

しかしまた、中野重治や宮本百合子のように、あきらかに抵抗の姿勢をくずさぬ作家もあった。久保栄もそうである。彼らは、執筆禁止と検挙のすきを見ては、少数だがすぐれた作品や論文を書いた。

転向と抵抗の姿勢がさまざまあるように、時局便乗のタイプにもさまざまあった。便乗を肯んじないものからはじめて、便乗したくもできないものにいたるまで、その幅は個性の幅ほどに広かったし、時期によっても異っていた。うまく便乗するもの、便乗をリードするもの、便乗しない風をしていては一〇〇パーセント便乗しているもの、憎めない便乗者、陰険な便乗者、ずるい便乗者、無知からくる善意の便乗者、さまざままであった。

このような事情を理解するためには、もう一度ふり返って戦争下の文学の一般状況について、補足しなければならない。それは、この時期の文壇が、大衆文学や児童文学をふくめて、戦争文学と名づけられる戦記物によって掩われていたということである。戦争が日常生活となり、戦場やその周辺が生活の場になっていた当時、戦記物(広い意味での)の方が常態であった、戦争にふれないで書くということの方が異例であった。

じつにおびただしい戦記物があらわれた。火野葦平の「麦と兵隊」につづく一連のもの、上田広の、「黄塵」や「建設戦記」、日比野士朗の「呉淞クリーク」などをはじめとして、石川達三の「生きている兵隊」や「武漢作戦」、丹羽文雄の「還らぬ中隊」や「海戦」など。これらは召集によって従軍した作家

が書くか、志願して、あるいは徴用によって従軍した作家が書くかしたものだが、そのほかにもジャーナリストや非職業作家の手記までふくめて、無数にあった。後になると岩田豊雄（獅子文六）「海軍」、火野葦平「陸軍」のような、軍との協力製作になる新聞小説まであらわれた。これらの大部分は今では忘れられてしまったが、当時は、戦記物を書かない作家は、正宗白鳥、永井荷風のような沈黙している老作家と、堀辰雄のような病臥している少数の芸術派と、もっと少数のプロレタリア文学系の作家のほかに、ほとんど見当らなかった。一つには、戦記物を書くことが国策協力の証明でもあったし、自己喪失感からの脱却のためのスプリングボードになったせいもあって、これほど多くの戦記物があらわれたのである。石川達三は、はじめに書いた「生きている兵隊」が厭戦的だという理由で雑誌が発禁になったので、あわてて第二作を書いて非協力の印象を消したほどである。

これらの戦記物は、今日から見て、芸術的にまったく無価値であるばかりでなく、ひっくるめて文学の姿を一挙に変え、国民精神総動員に重大な協力をした文学反動だといえる。そのために作家ばかりでなく、国民の鑑賞力にも狂いが生じた。そしてその責任が、芸術派よりも比較的にはプロレタリア文学派に多くかかっているところに、悲劇の深刻さが見られる。

戦争開始の当時、すでに党派的な対立はなくなりかけていたが、わずかに「人民文庫」派と「日本浪漫派」の間に対立が残っていた。そしてこれが最後の党派であって、その後に党派らしいものは結成されなかった。

この両派は、文芸復興のかけ声の中から、雑誌「文学界」の支脈として生れ出たものである。つまり転向文学の二つの流れである。日本浪漫派は一九三五年三月に結成され、保田与重郎、亀井勝一郎、芳賀檀、太宰治らが主要メンバアであって、林房雄ともつながりがあった。人民文庫は、前に書いたよう

に武田麟太郎を中心として、高見順、本庄陸男、新田潤、田宮虎彦らが参加した。その主張において、一方はロマン主義をふりかざし、ファシズム礼讃の傾向をもち、他方はレアリズムを固執し、人民戦線的な考え方をもっていた。一方は詩精神の昂揚をうたい、他方は散文精神に徹せよと説いた。したがって、日本浪漫派の方は、時局の推移を先取りして戦争中の国策文学のトップに立ったが、人民文庫の方は時局に背を向けて市井の些事や風俗に逃れる傾向を生じた。

三八年のはじめにどちらも前後して結社を解体した。しかしその影響は、かなり後まで、尾を引いていた。そしてそこから派生的な問題がいくつか出た。たとえば、「国民文学」の提唱が当時あったが、その内容規定を保田与重郎や浅野晃のように「肇国の精神」の日本主義的方向へもっていくか、あるいは岩上順一のように封建制からの脱却の方向で考えるかに意見が分れたのは、その一例である。

もっとも日本浪漫派と人民文庫派とは、相互にかさなりあう部分もあった。たとえば太宰治と高見順の間には、異質といえるような開きは認められない。両方にまたがる人たちもいた。そしてこの中間に農民文学、生産文学、歴史文学などというレッテルでよばれる多くの作家たちがいた。

人民文庫派が、プロレタリア文学の正統な継承者であるという評価も、疑問である。宮本顕治や蔵原惟人のように沈黙している人、宮本百合子や中野重治のように、孤軍奮闘している人をふくめて考えると、人民文庫はやはり転向文学の一支脈と見るのが妥当のようである。ちょうど同じころ京都で、中井正一らの手で、あきらかに人民戦線をめざす評論雑誌「世界文化」(三五年二月から三七年十月まで)が出ていて、これは一部に着実な影響力をもっていた。かりにこの両者を綜合した形を考えれば、人民戦線運動の展開が想像されるが、これは今日からいえることであって、当時の狂乱状態の中では連絡は不可能であったろう。戦争末期にもかなり痛烈な時局批判を公言してはばからなかった広津和郎が、このころ「散文精神について」*人民文庫に共感をよせていた事実などとあわせて、この辺の事情は今日から

でもよく検討してみる必要がある。

有馬頼寧のキモ入りで農民文学懇話会が作られたことはさきに述べた。有馬は近衛につながる貴族官僚の中の進歩派の一人である。そのせいもあって、ここには旧プロレタリア文学出身の農民作家が多く集ったことも前に述べた。そんなわけで農民文学は一時さかんであった。そして相対的には、イデオロギーぬきではあるが、いい作品がたくさんうまれた。伊藤永之介の「梟」*をはじめとする多産な制作、橋本英吉の「ところはちぶ」や「欅の芽立」*そのほか和田伝、本庄陸男、半田義之、岩倉政治らが活躍した。伊藤貞助の「土」脚色もこのころの一収穫である。

農民文学は、一部で開拓文学にも重なっており、湯浅克衛の「先駆移民」や和田伝の「大日向村」や福田清人の「日輪兵舎」などを生み出したが、純粋の農民文学とちがって、ここにはイデオロギーぬきからくる便乗色がおおいえない。

そのほかに、生産文学とよばれるものが当時あった。これも転向文学の変種であって、プロレタリア文学系統の作家の多くがこの旗印の下に集った。階級性ぬきのプロレタリア文学ともいえるが、以前の労働者文学のような素樸な実感にあふれた人間味はそこにはなく、生産過程における人間をえがくと称して、じつは現場感覚を伴わぬ図式に止まるものが多かった。当時、新体制を推進していた新興官僚の生産力理論(これはマルクク主義の理論面における一種の転向現象である)に相応ずるものであった。国策協力を表看板にしてプロレタリア文学を生きながらえようとした苦肉の策であろうが、結果としては風俗小説ほどのレアリテイも生み出さず、かえってプロレタリア文学の解体を、文学そのものの解体の形で押しすすめることに終った。間宮茂輔の「あらがね」や中本たか子の「南部鉄瓶工」はその中での秀作である。

生産文学の変種に、海洋文学、航空文学といったさまざまなレッテルがあらわれたが、内容は貧弱であった。そしてこのような素材主義の悪あがきが、かえって作品の内部構造を方法的に究めようとする伊藤整、石川淳、堀辰雄、太宰治ら芸術派よりも実りのうすいものであることを立証する結果となった。
これらのレッテル文学は、戦局の激化とともに自然に衰えていった。そしてこれに代って四〇年ころから盛んになったのは、歴史文学である。歴史小説には多くの雄篇大作があらわれた。本庄陸男の「石狩川」、江馬修の「山の民」、藤森成吉の「大原幽学」、高倉テルの「大原幽学」などである。高木卓らの新人もあらわれた。
なぜこのころ歴史小説が盛んになったか。おそらく現実からの逃避と、時局への抵抗が二重の原因になったと思われる。それともう一つ、日本浪漫派系統の日本主義、古典謳歌への対抗意識もあったかと思われる。そこに最小限の合理性を発見したい気持のあらわれではないだろうか。歴史小説は、日本浪漫派系統の作家も、林房雄の「西郷隆盛」や太宰治の「右大臣実朝」が書かれており、風俗小説の系統の作家も、丹羽文雄の「勤皇届出」や「現代史」などがこの時期に書かれている。
評論でも、保田与重郎の古典解釈に対する批判が、近藤忠義、片岡良一ら実証的学風の国文学者の間からおこっている。
戦争中の文学が、時間的にも起伏があることを前に述べた。具体的にいうと、一九三七年が一つのピークであり、四〇年がもう一つのピークである。
おそらく第一のピークは、第一次近衛内閣の下における民衆の発言力の相対的増大を反映したものであろう。第二のピークは、日華事変の戦線膠着が太平洋戦争へ切りかわる前の相対的安定と反映しているのかもしれない。

一九三七年には久板栄二郎「北東の風」、徳永直「八年制」、中野重治「汽車の罐焚き」（以上は六月以前）、伊藤永之介「梟」、石川達三「日陰の村」、間宮茂輔「あらがね」、久保栄「火山灰地」第一部などが発表された。（佐多稲子の「樹々新緑」*はこの少し後）とくに最後の戯曲は、プロレタリア文学の最後をかざるにふさわしい見事な作品である。

一九四〇年には、宮本百合子「広場」と「三月の第四日曜」*、中野重治「街あるき」*、金史良「光の中に」*、壺井栄「暦」と「廊下」、三好十郎「浮標」などが発表されている。壺井栄はこの年から精力的に書き出した。生活体験をぶちまけて時局にめげないおのずからの美と人間性を打ち出した小池（旧姓野沢）富美子の最初の作品「煉瓦女工」*が発表されたのもこの年であった。

マルクス主義系統の評論では、この期間のほぼ全体を通じて、窪川鶴次郎と岩上順一がもっとも活躍した。おくれて除村吉太郎がこの陣営に参加した。高沖陽造、本間唯一、戸坂潤ら唯物論研究会の系統の評論家も、初期には働いていた。森山啓は抒情的な小説に、青野季吉は随筆や回想にのがれて、評論はあまり書かなかった。宮本百合子と中野重治とは、小説ばかりでなく評論でも重要な仕事を残した。中野は時評のほかに、「斎藤茂吉ノオト」や鷗外に関するものや「『暗夜行路』雑談」*などで、文学史の再評価に新しい針路を開拓した。

一九四〇年ころから、評論の分野でもじょじょに新人があらわれ出した。本多秋五、平野謙につづいて、佐々木基一、小田切秀雄ら、戦後に「近代文学」に結集した人々の活動がこのころからはじまっている。モダニズムとマルクス主義を融合した花田清輝の独特のスタイルもこのころに誕生している。

戦後に小説を書き出した野間宏、椎名麟三、武田泰淳らは、まだ習作のほかに業績を示さなかった。彼らは軍隊や工場で、鬱屈した青春の膝をかかえて時局の空を眺めていたのである。ただ見習工の小沢

清は「坂」や「町工場」を完成していた。

この期の特徴として、活字にならない文学形態の存在について強調しておく必要がある。完成した文学作品で、時局の圧迫のために公表できなかったものがたくさんあった。たとえば小熊秀雄の「流民詩集」や金子光晴の詩集がそれである。それらは、当代の少数者と、次代の多数者のために書かれ、稿本のままでおかれていた。老学者河上肇が「自叙伝」や「獄中記」や「思い出」を書きためていたのもそれである。

芸術派にも同様のことがあった。永井荷風が、発表のあてのない小説や日記を書きためたり、谷崎潤一郎が「細雪」の私家版を作ったのがそれである。しかし、総体において人民文学派の方が質量ともにまさっている。なぜなら、入獄者や戦歿者の手紙や手記までもそれは含みうるからである。

それらは、フランスの抵抗文学ほど組織化されて、手から手へ渡ることはなかったけれども、また内容的にも貧弱だけれどもわれわれが今日それを見うるということにおいて、良心がともしつがれたことをあかすものであって、われわれにとっては貴重な人間性の存在証明のための遺産である。

一、詩の部で「戦歿詩人集」は遠地輝武、壺井繁治両氏編「日本解放詩集」からそっくり転載させて頂きました。
二、作品の選定についてはとくに小田切秀雄氏から多くの援助をえました。

日本プロレタリア文学年表 VIII

日本近代文学研究所

一九三七年（昭和十二年）七月——一二月

作品（『』内は発表誌・紙、刊は単行本）	文学運動および関係事件	政治的および社会的事件
詩集『鮫』（金子光晴）人民社刊 8 海流（宮本百合子）『文芸春秋』8 国民文学論の根本問題（浅野晃）『新潮』8 白衣作業（中本たか子）『文芸』9 日蔭の村（石川達三）『新潮』9 文学の現代的性格とその典型（平野謙）『人民文庫』9 『文芸思想史』（高沖陽造）三笠書房刊 10 『女性線』（松田解子）竹村書房刊 10 戯曲・土（伊藤貞助）『テアトロ』10 **『生活の探求』（島木健作）河出書房刊** 10 戦争について（小林秀雄）『改造』11	新日本文化の会設立 7 『文化評論』創刊 7 日本文化中央連盟結成 8 **「土」（長塚節原作・伊藤貞助脚色）新築地劇団により上演** 10 『経済評論』終刊 10 木下尚江死す 11 **矢内原事件** 12 **左翼的作家・評論家にたいし執筆禁止さる**	**中日戦争開始** 7 内閣情報部設置 9 国民精神総動員運動始る 10 日独伊防共協定調印 11 加藤勘十ら日本無産党、労農派グループ検挙さる。いわゆる**人民戦線事件** 12 **関西を中心に共産主義者団（指導者春日庄次郎）組織さる** 12

道づれ（宮本百合子）『文芸』11

火山灰地・第一部（久保栄）『新潮』12

築地河岸（宮本百合子）『新女苑』12

『続若い人』（石坂洋次郎）改造社刊12

一九三八年（昭和十三年）

マルスの歌（石川淳）『文学界』1
生きている兵隊（石川達三）『中央公論』3
『山谿に生くる人々』（葉山嘉樹）竹村書房刊 3
こういう戯曲は書きたくない（久保栄）『月刊新協』4
『風立ちぬ』（堀辰雄）野田書房刊 4
耳語懺悔（山田清三郎）『文学界』6
火山灰地・第二部（**久保栄**）『**新潮**』7
『美術論』（武田武志）三笠書房刊 7
妻と兵隊（**火野葦平**）『改造』8
『近代芸術』（滝口修造）三笠書房刊 9
石狩川（**本庄陸男**）『**槐**』9—
『獄』（島木健作）ナウカ社刊 9
大根の葉（壺井栄）『文芸』9
木石（舟橋聖一）『文学界』10
島木健作論（窪川鶴次郎）『文芸』10・11

独立作家倶楽部解散 1
杉本良吉・岡田嘉子樺太より入露 1
『人民文庫』連続発禁にあい、ついに廃刊 2
唯物論研究会自発的に解散 2
『日本浪曼派』終刊 3
『唯物論研究』（六五冊）『学芸』と改題して続刊 4
「火山灰地」新協劇団により上演 6
文学者数十名武漢作戦に従軍 9
農民文学懇話会生る 10
旧唯物論研究会の主要メンバー検挙され、ひきつづき東大・早大・慶大などの学生数百名が検挙さる。いわゆる**唯研事件** 11—12
『学芸』終刊（八冊）12

京大に非合法グループ「京大ケルン」結成さる 1
大内・向坂・猪俣ら労農派教授グループ検挙さる 2
ドイツ、オーストリアを併合 3
張鼓峰事件起る 7
共産主義者団弾圧により壊滅 7
ミュンヘン協定 9
河合栄治郎『社会政策原理』など四著作発禁となる 10
京浜労働者グループ弾圧され古在由重ら検挙 11
日独文化協定成立 11
フランス人民戦線崩壊 11

『あらがね』（間宮茂輔）小山書店刊11
『はたらく一家』（徳永直）三和書房刊11
『千万人と雖も我行かん』（久坂栄二郎）テアトロ社刊12
『仮装人物』（徳田秋声）中央公論社刊12

一九三九年（昭和十四年）

『山の幸』（葉山嘉樹）日本文学社刊 1

歌のわかれ（中野重治）『革新』 2―4

先遣隊（徳永直）『改造』 2

『海と山と』（葉山嘉樹）河出書房刊 2

農民作家論（窪川鶴次郎）『文芸』 3

詩集『大阪』（小野十三郎）赤塚書房刊 4

5

『石狩川』（本庄陸男）大観堂書店刊

『流旅の人々』（葉山嘉樹）春陽堂刊 6

ねちねちした進み方の必要（中野重治）『革新』 7

鯨（間宮茂輔）『改造』 8

政治と文学（岩上順一）『中央公論』 8

人生の共感（宮本百合子）『文芸』 8

鱒（伊藤永之介）『日本評論』 8

如何なる星の下に（高見順）『文芸』

評論家協会成立 2

島木健作、北満の開拓地見学に出発 3

『批評』創刊（批評発行所） 8

荒正人、小田切秀雄、佐々木基一により『文芸学資料月報』発刊さる 10―12

『槐』、『現代文学』と改題して続刊 12

河合栄治郎出版法違反で起訴さる 2.

ファシストに対する三十カ月の抗戦の後、スペイン共和国遂に敗北 3

ノモンハン事件起る 5

山代吉宗、春日正一らによる共産党再建運動弾圧さる 5

国家総動員法全面的に発動さる 7

独ソ不可侵条約結ばる 8

長谷川浩らコムニスト・グループ検挙

ヒットラー、ポーランドに侵入 9

英・仏はドイツに宣戦、**第二次世界大戦始る** 9

8—40・3
空想家とシナリオ（中野重治）『文芸』8—11
生々流転（岡本かの子）『文学界』8—12
壮年（林房雄）『文学界』8—12
鏡（三好十郎）『新潮』9
長男（徳永直）『中央公論』9
鶏騒動（半田義之）『文芸春秋』9
黒い砂糖（本庄陸男）『文学界』9
光の中に（金史良）『文芸首都』10
汽車のなか（中野重治）『改造』10
昨日と今日（佐多稲子）『文芸』10
『大凶の籤』（武田麟太郎）改造社刊10
歴史小説について（青野季吉）『新潮』10
散文精神の肯定と否定（高沖陽造）『文学者』10
杉垣（宮本百合子）『中央公論』10
嵐のなか（島木健作）『日本評論』11
友情（堀田昇一）『三田文学』11
小林秀雄論（窪川鶴次郎）『文芸』11
和田伝論（窪川鶴次郎）『文学者』

11
『現代文学論』（窪川鶴次郎）中央公論社刊 11
ある患者の話（徳永直）『日本評論』12
還元記（葉山嘉樹）『文芸春秋』12
本年度文壇の概観（窪川鶴次郎）『中央公論』12
イデオロギイの問題（小林秀雄）『文芸春秋』12
中野重治（伊藤整）『文芸』12
「空想家とシナリオ」（高沖陽造）『文芸春秋』12
渦潮（宮本百合子）12

一九四〇年（昭和十五年）

或る作家の手記（島木健作）『改造』1
青服の人（島木健作）『新潮』1
おもかげ（宮本百合子）『新潮』1
墓掘り当番（葉山嘉樹）『新潮』1
朝の光（間宮茂輔）『新潮』1
背広と野良着（和田伝）『新潮』1
骴者たち（徳永直）『新潮』1
矜恃（佐多稲子）『新潮』1
留守（中野重治）『中央公論』1
壁（サルトル・堀口大学訳）『中央公論』1
広場（**宮本百合子**）**『文芸』**1
詩・夢の戦場（岡本潤）『文化組織』1
暦（**壺井栄**）**『新潮』**2
雪（伊藤永之介）『新潮』2
赤いステッキ（壺井栄）『中央公論』2
廊下（壺井栄）『文芸』2
文学における文学と人間の問題（中野重治）『日本評論』2
私の批評家的生い立ち（窪川鶴次郎）『文芸』2

『文化組織』発刊（文化再出発の会）1
新協・皇紀二千六百年記念公演（大仏開眼）2
津田左右吉『神代史の研究』『古事記及び日本書紀の研究』『上代日本の社会及び思想』『支那思想と日本』発禁・起訴さる 3
京大俳句グループ検挙さる 4
生活綴り方運動に対する弾圧はじまる 7
山本有三「新篇路傍の石」（『主婦之友』）の連載を「ペンを折る」の一文をもって中止 8
新協・新築地にたいし弾圧・解散、久保栄ら検挙 8
日本文学者会結成 10
二千六百年記念芸能祭催さる 10
日本俳句作家協会結成 12
日本出版文化協会創立 12

イタリア参戦 6
フランス、ドイツに降伏 6
東大の進歩的学生弾圧され約百二十名検挙さる 7
社会大衆党解党、労働総同盟に解散命令
日独伊三国同盟 9
大政翼賛会成立 10
大日本産業報国会成立 11

ひろい飛沫（宮本百合子）『文芸』2

立札（加賀耿二）『中央公論』3

『濁流』（葉山嘉樹）新潮社刊　3

農民文学における自然と土地の問題（窪川鶴次郎）『新潮』3

世俗と文学の世界（中野重治）『日本評論』3

作家に語りかける言葉（宮本百合子）『日本評論』3

主題性の喪失について（岩上順一）『文学者』3

紙上文学討論・伊藤整＝中野重治『都』3

錯乱の論理（花田清輝）『文化組織』3

昔の火事（宮本百合子）『改造』4

三月の第四日曜（宮本百合子）『日本評論』4

貧しければ（大江賢次）『文学界』4

考える世代（岩上順一）『中央公論』4

昭和の婦人作家（宮本百合子）『文芸』4

詩に触れて（小熊秀雄）『文学者』

4
夢の彼方（佐多稲子）『改造』5
生活と論理（岩上順一）『中央公論』
5
街あるき（**中野重治**）『**新潮**』6・7
天馬（金史良）『文芸春秋』6
嫌な奴な登場（片岡鉄兵）『新潮』
6
運命の構造（岩上順一）『中央公論』
6
浮標（三好十郎）『文学界』6
『旅愁』（横光利一）改造社刊 6
炭焼き（伊藤永之介）『改造』7
指導物語（上田広）『中央公論』7
運命の人（島木健作）『新潮』7―
中野重治論（平野謙）『文芸』7
斎藤茂吉ノオト（**中野重治**）**連載はじまる** 7
『**歌のわかれ**』（**中野重治**）**新潮社刊**
8
『日本文学入門』（近藤忠義編）日本評論社刊 8
『**明日への精神**』（**宮本百合子**）**実業之日本社刊** 9
新浪漫主義の相貌（岩上順一）『文学者』10

『文学の思考』（窪川鶴次郎）河出書房刊　11
朝の風（宮本百合子）『日本評論』　11
『三月の第四日曜』金星堂刊　12

一九四一年（昭和十六年）

神山茂夫、寺田貢らの党再建運動弾圧され約二百名検挙さる　2―5
国防保安法・治安維持法改悪　3
日ソ中立条約　4
予防拘禁所設置　5
独ソ開戦　6
尾崎秀実・ゾルゲら検挙さる、ゾルゲ事件　10
東条内閣成立　10
言論集会出版結社等臨時取締令公布　12
太平洋戦争勃発　12

東京を中心に進歩的俳句運動弾圧され約二五名検挙　2
大日本詩人協会生る　6
『中年』（丹羽文雄）発禁となる
宮本百合子ら検挙　12
久保栄保釈出所し、以後「林檎園日記」などをひそかに書きつづける　12

『文学の進路』（宮本百合子）高山書院刊　1
『文学の饗宴』（岩上順一）刊　1
『転向について』（林房雄）湘風会刊　3
菜穂子（堀辰雄）『中央公論』3
鶉の宿（**中野重治**）3
『文学の扉』（窪川鶴次郎）高山書院刊　4
『得能五郎の生活と意見』（伊藤整）河出書房刊　4
遠方の人（森山啓）『文学界』5
『私たちの生活』（宮本百合子）協力出版社刊　7
縮図（徳田秋声）『東京新聞』6―9以後圧迫のため中断
詩集『夜の機関車』（**岡本潤**）**文化再出発の会刊**　12

一九四二年（昭和十七年）

『バルザックの世界』（杉山英樹）中央公論刊　1
『文学の主体』（岩上順一）桃蹊書房刊　2
『壺井繁治詩集』（壺井繁治）**青磁社刊**　4
『歴史文学論』（**岩上順一**）**中央公論社刊**　4
『文学と教養』（窪川鶴次郎）昭森社刊　5
『斎藤茂吉ノオト』（**中野重治**）**筑摩書房刊**　7
『現代文学思潮』（窪川鶴次郎）三笠書房刊　7
柿の木と毛虫（橋本英吉）『文学界』12

日本小国民文化協会設立　2
日本文学報国会組織さる（**機関紙『文学報国』**）　6
第一回大東亜文学者会議　11
「報導班員の手記」（丹羽文雄）『改造』発禁となる　11

翼賛選挙　4
大阪商大に非合法のコムニスト・グループ組織さる　4
ミッドウェー敗戦　6
『世界史の動向と日本』（細川嘉六）改造8・9月号、共産主義を宣伝するものとして弾圧、細川検挙さる　9
米英軍、仏領北アフリカに上陸　11
スターリングラードにてドイツ軍敗退　12

一九四三年（昭和十八年）

細雪（谷崎潤一郎）『中央公論』1・2以後掲載禁止

東方の門（島崎藤村）『中央公論』1—10

富士と水銀（橋本英吉）『文芸春秋』1

『光をかかぐる人々』（徳永　直）河出書房刊　11

河上肇「自叙伝」をひそかに書きはじめる　1

大日本言論報国会成立　3

葉山嘉樹、開拓移民として渡満　3

谷崎潤一郎「細雪」の雑誌掲載を禁止された後も執筆を続ける。

岩上順一検挙さる　4

岩波書店を中心とする『教育』「教育研究会」のメンバー弾圧さる　4

大阪商大の進歩的教授・学生に対し弾圧、内田穰吉・名和統一の他百名に近い学生・教授が検挙・訊問をうける　3—5

コミンテルン解散　5

学徒戦時動員体制　6

昭和塾関係者に弾圧　9

イタリー降伏　9

兵役一年繰下げ　12

一九四四年（昭和十九年）

『再説現代文学論』（窪川鶴次郎）昭森社刊　4

暗夜行路雑談（中野重治）6

『細雪』（谷崎潤一郎）公表出来ぬため私家版二〇〇部を刷り友人に頒つ　7

『礎』（島木健作）新潮社刊　11

河上肇、この頃「味噌」などの詩を作る

この頃、中村真一郎「死の影の下に」を書きはじめる

『文学界』終刊　4

『四季』『コギト』終刊　6

雑誌『改造』『中央公論』の編集部弾圧さる　1

綜合雑誌『改造』廃刊させられる　3

英米軍北フランスに上陸　6

改造社・中央公論社解散を命ぜらる　7

サイパン陥落　7

東条内閣崩壊　7

学徒動員　8

パリ、フランス人民の蜂起により解放さる　8

尾崎秀実死刑執行さる　11

一九四五年（昭和二十年）一月―八月

永井荷風「罹災日録」を書きはじめる　3
戸坂潤獄死　8

アメリカ空軍の都市無差別大空襲はじまる　3
市川正一獄死　3
ベルリン陥落・ドイツ降伏　5
ポツダム宣言　7
ソヴェト、日本に宣戦　8
広島、長崎に原爆投下さる　8
日本無条件降伏　8

日本プロレタリア文学大系　8　定価一二〇〇円

一九五五年二月二十八日 第一版発行
一九六九年八月　十五日 第二刷発行

編者代表　野間　宏
発行者　竹村　一
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京（二九一）三一三一〜五
振替東京　八四一一六〇番
郵便番号　一〇一
印刷　文栄印刷株式会社
製本　有限会社佐伯製本所

落丁・乱丁本はおとりかえします。

Ⓒ 1955年

全9巻　第9回配本

日本プロレタリア文学大系　全九巻　各巻定価一、二〇〇円
7巻のみ一、五〇〇円

序巻　母胎と生誕　明治三十年から大正五年まで
1巻　運動擡頭の時代　社会主義文学から「種蒔く人」廃刊まで
2巻　運動成立の時代　「文芸戦線」創刊からナップ成立まで
3巻　運動開花の時代(上)　「戦旗」創刊から文化連盟結成まで
4巻　運動開花の時代(中)　「戦旗」創刊から文化連盟結成まで
5巻　運動開花の時代(下)　「戦旗」創刊から文化連盟結成まで
6巻　弾圧と解体の時代(上)　文化連盟の結成から中日戦争の開始
7巻　弾圧と解体の時代(下)　文化連盟の結成から中日戦争の開始
8巻　転向と抵抗の時代　中日戦争から敗戦まで